

ダンジョンカードバトル

ノジー・マッケンジー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日気がつけばそこは異世界。二元の世界に帰る為、管理人と呼ばれる存在の言う通りダンジョン攻略に勤しむ。魔物が出てくる？遊戯王のカードで倒せ!?最初に渡された最低ランクのデッキを駆使し、強敵に挑む。「こいつが俺のデッキの最高攻撃力を誇るモンスターだ！（攻撃力500）」「何!?攻撃力1100だとう!?1000を超えるとか化け物か!!」「え?レベル5で攻撃1800防御1500のモンスター!?なにそれ滅茶苦茶強すぎじゃねーか!!」そんなこんなでカードたちとの絆を信じ、成り上がっていくお話。

「しまった!風呂に入った方がいいが、体を拭くタオルが無え!」

第1章完結

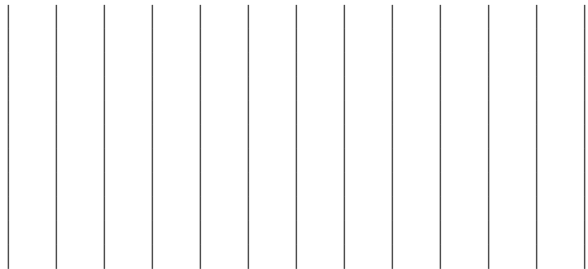
目次

1章

11話	10話	9話	8話	7話	6話	5話	4話	3話	2話	1話	
75	68	62	54	44	37	31	24	16	7	1	

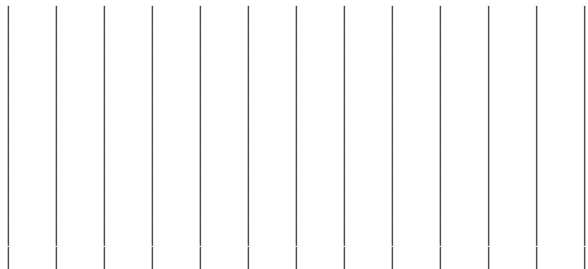
24話	23話	22話	21話	20話	19話	18話	17話	16話	15話	14話	13話	12話
205	195	187	178	167	158	150	139	132	121	110	96	86

3 3 3 3 3 3 3 3 2 2 2 2 2
7 6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話



314 307 297 289 281 272 264 256 249 242 233 224 215

5 4 4 4 4 4 4 4 4 4 4 3 3
0 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 9 8
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話



440 431 421 408 400 392 383 367 356 347 338 328 321

6 6 6 6 5 5 5 5 5 5 5 5 5
3 2 1 0 9 8 7 6 5 4 3 2 1
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話

550 542 534 526 519 510 501 493 484 475 467 459 450

7 7 7 7 7 7 7 6 6 6 6 6 6
6 5 4 3 2 1 0 9 8 7 6 5 4
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話

669 658 648 640 632 621 613 604 597 585 576 568 558

8 8 話	8 7 話	8 6 話	閑 話	8 5 話	8 4 話	8 3 話	8 2 話	8 1 話	8 0 話	7 9 話	7 8 話	7 7 話
793	785	778	760	751	743	734	726	716	707	698	689	679

1 0 1 話	1 0 0 話	9 9 話	9 8 話	9 7 話	9 6 話	9 5 話	9 4 話	9 3 話	9 2 話	9 1 話	9 0 話	8 9 話
915	905	895	886	877	868	858	848	839	830	821	812	802

1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1
1 1 1 1 1 0 0 0 0 0 0 0 0
4 3 2 1 0 9 8 7 6 5 4 3 2
話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話 話

1037102610171006 996 988 978 969 960 951 943 933 925

輝 決 決 常 再 2
く 闘 意 識 始 章
星 闘 意 識 動 1
1 1 1 1 1 1 1
1 2 2 1 1 1 1
1 1 1 1 1 1 1
話 話 話 話 話 話 話

11461136112811201110 1102109510841075106610561046



1章

1話

気がつけばそこは真つ白な空間だった。

辺りを見回すとそこが大きな部屋だということが分かる。

大凡40m²ぐらい？の、壁も床も天井も真つ白な四角い部屋で、正面の壁には両開きの大きな白い扉がついている。

左右の壁、後ろの壁には、窓どころか装飾も何も無く、まるで自分がどこかに隔離されているような気分になる。

ただ唯一、扉に向かって右後ろの隅に、異様な雰囲気を纏った白色ではない物体が鎮座していた。

その見た目はパソコンと酷似しており、色はグレー。一見何に使うのか分からない大型の機械がコードで繋がっている。

吸い寄せられるようにパソコン？に近づくと、いきなり画面に文字が映し出された。

ようこそ、私の箱庭へ

君たちにはここで、あることをしてもらおう

心配しなくても、私の目的を果たす事が出来れば、元の場所へ戻してあげよう

詳細は話すと長くなるから、別にまとめてある

この文字が消えた後に、夫々調べてくれ

ある程度なら質問も受け付けよう

では諸君、頑張ってくださいませ

読み終わると文字は自然に消え、画面は真っ白になる。その後すぐに画面真ん中あたりに「★なうろおくでいんぐ☆」の文字が。

…そこはくとなくイライラしてくる。

パソコン？を殴り飛ばしたくなる気持ちもグツと抑え、そのまましばらく待つとロードが終了し、画面にはゲームなどでよく見るメニュー画面のようなものが映し出された。

その中でも自己主張するようにチカチカト点滅する『説明書（必ず最初に読んでね♡）』の文字。

心を無にして自己主張の激しい説明書を選択。どうやらタッチパネル式のようだ。とりあえずぎつと目を通し、大まかに大事そうなところを纏めると、以下のようである。

・ここは自分が住んでいた世界とは別の世界で、先程の文字を書いた人物（生物？）が管理する世界 ※仮に管理者と呼ぶ

・諸君と書いてあつた通り、約数千人の人間がこの世界に來ているらしいが、基本的に彼らと接触することは無い

・自分たちを連れてきた管理者とは別に、同等の力を持った管理者がたくさん存在する

・各管理者は夫々自分の管理する世界を持つており、自分たちのような別世界の人間を呼びよせている

・この世界では管理者同士で能力の優劣を競う大会があり、その大会に管理者の駒として自分たちを出場させる為に自分たちは連れてこられた

・管理者の願いは大会の優勝だが、管理者同士の取り決めにより、一度こちらの世界に連れてきた人間は、それ以降の大会に参加させることができなくなっており、例え一回戦負けしようとも、大会が終れば全員元の世界に帰れる。

・元の世界に帰る時は、こちらでどれほどの時間が経っていたとしても、元の世界の元の時代の元の場所に元の状態で戻れるそうなので、行方不明・失踪・神隠し等と思わせる心配は無く、見た目も老けてしまうことは無い。

・ちなみに、元の世界に帰る際には基本的に記憶は消去されるらしいが、管理人にとって良い駒であつたならば、記憶の保持・消去を選べたり、追加で報酬があつたりすること

・自分たちを呼び寄せ駒にする理由は、大昔管理者本人同士で武を競い合つた時代があつたそうだが、年々過激さが増し、最終的には各世界に甚大なダメージを与える事と成つてしまったため、管理者本人同士の争いは禁止され、その際の取り決めにより、異世界から呼び出した駒を用いたゲームで優劣を競うという形になつたから。

・大会には各管理者1人につき2人までしか参加できない

・誰を出場させるかは各管理者次第らしいが、ここの管理者（紛らわしい為、自分たちを呼び寄せた管理者を『管理者A』とする）は、大会開始前に予選を行うらしい

・例え拠点に引きこもりサボタージュしていても、大会が終われば全員元の世界には帰れるが、真面目に取り組んだ方がメリットが大きい（上記追加報酬等）

・大会のルールは『遊戯王 カードゲーム』のルールに則り行われる（!?）

・ここに連れてこられた人間（プレイヤーと呼ぶことにする）は、最初に最低ランク

のデッキが渡され、それを用い、扉の先にあるダンジョン（!?）を攻略する

・ダンジョン内に現れる魔物を倒すことで新たなカードを入手し、デッキと自身を強化していく

・入手したカードはこの場（拠点とする）に持ち帰り、パソコン（この機械）を通す事で、DP（ダンジョンポイント）と呼ばれるポイントに変換することができる。

・ダンジョンポイントは様々な物と交換することができる（食料・家電・生活用品・ダンジョン攻略の助けとなる物 等）

長くなってしまったが、こんなところだろう。

というか、まあ…、突っ込みどころが多すぎてどうすればいいのか分からない。

何故遊戯王!?カードゲームかと思ったらダンジョン!?しかもカードで魔物と戦う!?てか何で自分が!?

と、まあ一つづつ突っ込んでたら時間がいくらあっても足りない（具体的に言うとは話丸々突っ込みに費やす程）。心の中で「おちつけー、もちつけーじゃない、おちつけー!」と唱え、ある程度落ち着いたところで、これからどうしていくかを考える。

まず、管理者Aの言う通り、真面目にダンジョンを攻略して大会に出場できるように

頑張るのか、それとも他力本願で引きこもるのかだが…、答えは当然前者だ。

人間が生活していくうえで『衣・食・住』が必要なわけだが、このまま何もしなければまず飢え死にする。だってこの部屋パソコンしかないもん。

おそらく管理者も、この状況とD P ってシステムを利用して、自分たちを意欲的に加させるように促そうとしてるんだらう。

それにこういうのって多分、序盤より後半の方が手に入るD P は多くなってくるもんだらう。ラノベ先生が言ってたぞ！あと管理人に気に入られれば、優遇されたり、チートアイテムやスキルがもらえたりする可能性もあるし！

という訳で、参加の意思をガッツリと固めたので、次は自分と運命を共にするカードの確認だな。

パソコンの説明書画面からメインメニューに戻り、説明書の代わりにチカチカしたカードの文字をタップする。

するとパソコンに接続されている機械から「ガシャン！」と音がし、数枚のカードと、デュエルディスクであろうものが飛び出して来た。

「さて…どんなカードが入ってるやら。」

2話

「おおふう……」

カードを確認して出た第一声がそれだった。

それもそうだろう。説明書にもあったが、出てきたカードは本当に最低ランクの物ばかりだったからだ。

ベビー・バード 星1 風 鳥獣属／通常モンスター

A200 D300

生まれたばかりの鳥

魔物の骨 星1 闇 アンデット族／通常モンスター

A200 D100

何かの魔物の骨

こんなカードばかり。

で、一番強いカードがこちら。

戦士の卵 星1 地 戦士族／通常モンスター

A 500 D 200

まだまだひよつこにも満たない戦士

もろ石 星1 地 岩石族／通常モンスター

A 200 D 400

もろい石

最大攻撃力500の最大防御力400で…。

ちなみに魔法カードや罠カード、エクストラデッキなんてものは一切無い。

カードの枚数は20枚あり、全て違う種族。おそらく遊戯王カード初期の種族（ドラゴン族や魔法使い族等20種）が1枚ずつのような感じがする。

まあ、見て唾然とはしたが、流石にこんなデッキで最初から強敵と戦わされることは無いだろう…と思いたい。

もし初戦闘で攻撃力1900とか出て来たたら管理者を呪ってやる。

気を取り直して、カードと一緒に出てきたデュエルディスクを左腕に装着し、デッキをセットする。

「カシャン」と小気味よい音をたててセットされたディスクを見て、デッキの内容に沈んでいたテンションが少し上がる。

「さて、じゃあとりあえず行ってみますか!」

両開きの白い大きな扉を開け、中に入るとすぐのところを下り階段がある。

それほど長くない階段を下りていくと、辿り着いた場所は洞窟のような場所だった。

所謂RPGで出てくる洞窟ダンジョンのような風貌で、火も無いの中は丁度良い明るさになっている。

「…そうだ、先ずはカードを引くんだったな。」

改めて、異世界に来たんだな…と思いつけていたが、先程の説明書に書いてあったことを思い出す。

- ・ダンジョンに入ったらまずカードを引く
- ・戦闘が始まったら、カードを1枚ドロワーできる
- ・魔物と出会ったら、モンスターカードをディスクにセットし、モンスターを召喚して戦わせる

・自分のターンになるとデッキから1枚カードをドロワーできる

・自分のターンになるとディスクが教えてくれる

色々という意味が読み取れない部分もあるが『試しにやってみればすぐに分かるよ☆』とも書いてあった為、とりあえず、なるようになる精神でやってみよう。

「カードを…ドロワー！」

カードゲーム好きなら分かるだろうが、いざ自分がアニメや漫画の主人公たちみたいな事が出来れば、テンションが上がらずにいられるだろうか？いや無い！

1人ニヤニヤしながらカードを確認すると、

ベビー・バード 星1 鳥獣属／通常モンスター

A200 D300

生まれたばかりの鳥

「お前か……。まあしようがない、とりあえず今回は頼んだぞ。」

出来れば攻撃力の高いカードに来てほしかったが、贅沢を言っても仕方ない。カードを手にし、ゆっくりとダンジョン内を進んでいく。

分かれ道の無い曲がりくねった道を歩いていると、前から妙な音が聞こえてきた。

カラン… カラン…

何が起こっても良いように警戒を続けながら音の鳴るほうへと進むと、道の向うから現れたのは1体のガイコツだった。

「っっ!!」

警戒はしてたものの、リアルなガイコツが動いているのを見て思わず後ずさる。

向こうもこちらに気付いているようだが、様子を見ているのか近づいてこようとはしない。

緊迫した空気に包まれる中、一向に向かってこないガイコツの様子を見て少し冷静さを取り戻す。

(…そうだ、戦闘に入ったらカードを引けるんだった。ということとは…?今は俺のターンって事か?なら…!)

「俺の、ターン！ドロー!!!」

思いつきデツキからカードをドローする。

引いたカードは

ミニマジシャン 光 魔法使い族／通常モンスター

A200 D200

簡単な魔法しか使えない見習い魔法使い

「っ・なら、俺は、ベビー・バードを攻撃表示で召喚っ」

そう言いながら手札のベビー・バードをディスクにセットする。

すると俺の横に、カードの絵柄と全く同じ姿をした小さな鳥が現れる。

「ピーーッっ！」

その可愛らしい見た目に反して、やる気たつぷりの鳴き声を上げるベビー・バード。

「すげえ……」

カードが実体化する様を目の当たりにした事で、驚き、感動、興奮と様々な感情が混じり合い、思わず感嘆の声漏れる。

だが今は戦闘中。視界の隅にガイコツを捉えたことで現状を思い出し、モンスターに指示を出す。

「ベビー・バードであるのガイコツにアタックだ！」

「ピーーッ!!」

俺の指示に従い、ベビーバードはガイコツへ向かって一直線に飛んでいき、そしてそのまま体当たりすることでガイコツの頭部を弾き飛ばした。

頭部を弾かれたガイコツは、その身を霧のように変えそのまま消えていった。そしてガイコツがいた場所に1枚のカードが浮かんでいた。

初めての戦闘の余韻で少しぼんやりした頭のまま、そろりそろりとカードに近づき手に取ってみる。

ガイコツ 星1 闇 アンデット族／通常モンスター

A100 D100

元は何だったかわからない…

「………よわ。」

想像以上に弱いカードだったが、説明書きによると、このカードを拠点へ持って帰ればDPが手に入るはず。無くさないように服の胸ポケットにしまっておく。

ちなみに今の服装はこの世界に連れてこられる直前の格好のまま（ユ○クロの胸ポツケ付き半袖・長ズボン）の為わりと動きやすい。

何はともあれ、戦闘については大体分かった気がする。両手で頬をたたき気合を入れなおして探索を続けていく。

再び洞窟を歩き出した俺の少し後ろに、宙に浮いたミニ・バードがついてきている。

一度召喚したモンスターは、倒されない限り約10分間は存在し続ける（カードはディスクにセットしたままの状態）らしい。そして10分経つと、カードは勝手に墓地へ送られ、実体化しているモンスターは消える。ただし戦闘中はその限りではない、とのこと。

つまり、一度モンスターを召喚したら、その戦闘後10分以内に次の戦闘に入ることができれば最初からフィールドにモンスターがいる状態から戦闘を開始できるということだ。

後ろを振り返ると、小さな羽を一生懸命動かし自分の後ろをついてくる小鳥。

「……………」

思わずなでくりまわしたくなるのを鋼の意思で抑え込み、歩を進める。

次の戦闘を有利にするために仕方ない…、仕方ないんだ!!

しかし、そんな我慢をしたにもかかわらず、10分以内に次の魔物に会うことはなかった。

3話

「はあ〜…。」

実体化したベビー・バードと戯れることができなかつた俺はため息をつきながら歩く。

「こんなことなら最初から触っておくんだつた…。」

後悔してもどうしようもない。次に召喚するまでお預けである。

若干進速度が遅くなりつつも探索を続ける。

道はくねくねと曲がりくねっているが、いまだに分かれ道は無い。

そろそろ時間が気になってきた頃、道の先から聞き覚えのある音が聞こえてきた。

カラン…。カラン…。

「っ！来たか！」

進行方向から現れたのは、やはり先ほどと同じガイコツだった。

「よし！俺のターン！ドロー!!」

一度の経験を経て、また出現した魔物が前回と同じだったこともあり、落ち着いてカードを引く。

戦士の卵 星1 地 戦士族／通常モンスター

A500 D200

まだまだひよっこにも満たない戦士

「よしっ!!」

デッキ内最強カードを引いたことでテンションが上がる。

早速ディスクにセットしようとするが、ガイコツの頭上に浮かぶ数字が目に入り手が止まる。

【A100 D100】

「あれ?相手の数値って見えるのか?」

実は先の戦闘でもガイコツの頭上に表示されていたが、初戦闘でもあり、ガイコツがいた場所の壁が丁度出っ張っていたりと、数値が見えづらい状況になっていたので気が付かなかったのだ。

「(なら戦士を出すのもつたないな。)俺はミニマジシャンを攻撃表示で召喚!そしてガイコツにアタックだ!!」

せつかくの最強カードを雑魚相手に使うのはもったいない。そう思い俺はミニマジシヤンを召喚してガイコツを倒す。

ミニマジシヤンの手から魔法の玉のようなものが打ち出され、ガイコツにぶつかった瞬間その体は霧のように消えていった。

残されたのは先ほどと同じように1枚のカード。

近づいて手に取ってみると

雑魚 星1 水 魚族／通常モンスター

A100 D100

魚の赤ちゃん

「またか…。」

手に入ったのは先ほどのガイコツと同じく、最低レベルのモンスターカード。

「しかし、同じ魔物から同じカードが手に入るわけではないのか？」

新たな疑問が生まれたが、どうせそのうち分かるだろうと、いったん思考を放棄する。

「ガイコツなら問題なさそうだし、とりあえず進めるところまで進んでみるか。」

急に出現モンスターレベルが上がることも無いだろうと踏んで、行けるところまで行くことに決めた。

その後、同じように探索を続ける事約1時間（体感で）。致命的なことに気づいてしまった。

「これ、途中でデツキ切れしたらやばいんじゃないか……？」

説明書によると、探索中にデツキが切れても手札やフィールドにモンスターがいる内は戦闘を続行できるが、手札・場のモンスターがいなくなつた時点で自分は何もすることなくターン交代、で相手ターンにやられる、ということになる。

ちなみにもしやられた場合には、特に死んでしまつたりケガをしたりすることなく、拠点へと強制転移させられるが、その際に、その探索中に手に入ったカード（今回はガイコツから手に入れたカード）を全て失つてしまう。

またデツキは拠点からダンジョンに入った時点で固定され、探索の途中でカードの入れ替えなどは行えないようになってる。

つまり調子に乗って先に進みすぎたら、帰り道で予期せぬ事態に合う可能性もあるということだ。

魔物は1度倒しても一定時間たつとまた復活（リポップ）するらしい。

急に不安になってきた俺は、デッキの残り枚数を確認し、残りが半分になった時点で帰り始めることを決めた。

そしてさらに（体感で）2時間後：

俺はデッキに余裕を残し、無事拠点へと帰ってきた。

「あゝ疲れた……。」

拠点へと続く階段を登り切り、白い扉を開き、病的なまでに真っ白な空間を目にした瞬間思わず安堵のため息が漏れた。

さすがにここまで魔物が入ってくることはないと思うが、白い大扉をしつかりと閉め、パソコンのもとへ向かう。

パソコンの画面は、ダンジョンへ出かける前と同じくずっとメニュー画面を開いたまままだ。

だつて電源ボタンとか無いし、どうやって切ればいいのかもわからないもん。

だがこのパソコン、意思を持つてるんじゃないかと疑いたくなるようなタイミングの良さで、画面上のとある文字をチカチカさせ始める。

（もしかしたら管理者が監視してるのかもな……）

そんなことを考えつつ、チカチカしているDPの文字をタップする。

おめでとうございます!!

ダンジョンに挑む意思を見せてくださったあなたにプレゼントを渡します。

これからガンガンDPを稼いで、良いダンジョン生活を送ってください

管理人

「1000DP 小部屋※暗室×1 寝具※最低ランク×1 トイレ※最低ランク×1
無限箱（パン※最低ランク）×1」

PS

このパソコンで掲示板機能が使えるようになりました
ぜひ活用してください

ふむ、どうやらやる気を見せた人間にのみ、最低限の生活ができるようにはしてくれ
るみたいだ。

1つつつ見ていくと、まず1000DP。これは説明不要だな。後で使い道を考えよ

う。

次に小部屋※暗室。画面を見てみると文字がチカチカしたのでタップしてみると【部屋を配置する場所を選んでください】というメッセージと、部屋の見取り図？のようなものが現れた。

部屋を増やす際にはこうやって配置を決めるのだろう。俺はダンジョン行きの扉の向かいの壁側を選択する。

するといきなり音もなく白い壁に年代を感じさせる古い木の扉が現れた。

おそらくあの扉の向こうに新しい部屋ができているのだろう。

部屋のこととはとりあえず置いておいて、次に寝具※最低ランク。

部屋と同じように文字がチカチカしたので、同じように選択し、先ほどの小部屋の中に設置しておく。

次にトイレ※最低ランクだが、小部屋は寝室にしようと思うので、パソコンがあるこの大部屋の隅に設置しようと思う。

ダンジョンの扉に向かって左後ろの隅を選択し配置すると、部屋の隅に古びた汚いツボが現れた。

…もしかして、あれがトイレ…？

一瞬思考が止まったが、とりあえず後でもっと良いトイレを設置することを心に決

め、次の無限箱（パン※最低ランク）をタップする。

これまた同じように設置場所を求めてきたので、トイレ（ツボ）と対角の隅に設置すると、古ぼけた木箱が部屋の隅に現れた。

とりあえず貰ったプレゼントはこんなもんか。

気になるところだらけだが、1つずつ確認していくことにしようか。

4 話

先ずは新しくできた小部屋を確認してみる。

古ぼけた木の扉を開くと、中は暗く、パソコンのある部屋の光（この部屋の明かりつてどうなってるんだろ？）に照らされて中の様子が浮かび上がる。

大きさは4畳半程で、部屋の隅には藁のようなものが敷いてある。

（まさかこの藁が布団か？）

最低ランクとあつた訳だし、実際トイレも壺のような物つばいので、おそらくそういう事なんだろう。

心のメモに、トイレと布団と記し、部屋の扉を閉める。

次は無限箱（パン※最低ランク）の確認をしよう。

箱を開けてみると、中にはいかにも固そうな黒いパンが1つ入っていた。

試しにかじってみると、見た目通り非常に硬く、噛めば噛むほど口内の水分が奪われていくようで…ハッキリ言つて不味い。

一旦パンは無限箱の蓋の上に置いておき、今度はトイレの方へ行く。

やはり予想通り、この壺がトイレらしく、中から何とも言えない臭いがする…気がす

る。

…思ったよりは臭わないな。

しかし覗いてみた所、中は底なしのように真っ暗になっており、まるでどこか異次元にでも続いているかのようだ。

もし何か落としたら…

背中がぞくぞくつと震え、一旦トイレ壺から身を離す。

ま、まあとりあえず全部確認できたことだし、よし次だ次！

気を取り直してパソコンに向かう。

確か掲示板機能が追加されたって書いてあったような…、おつ、あったあった。

メニュー画面の中に『掲示板』の文字を見つけタップすると、某2チャ○ネルのような形式の画面が現れた。

「ふむふむ、雑談に攻略、それから管理者への愚痴ねえ…。おつ、10000DPの使い道。これは見てみよう。」

すでに色んなスレッドが立っている中、気になるものを流し読みしていく。

この掲示板を利用しているのは『管理者A』に連れてこられたプレイヤー達のように、中々興味深い話も沢山あった。中でも驚いたのが、このわずかな間にすでにダンジョンの3階（このダンジョンは下に続いているようだが、掲示板利用者は分かりやすいよう

に、拠点から下りた先を1階とし、以降2階3階と呼んでいるみたいだ)まで進んでいく猛者もいた。

他にも、壺トイレの使い心地が割と良かったとか、貰った1000DPを全部寝具に突っ込んだ等のふざけた話から、どんな魔物がいてどんなカードが出た等、ダンジョンに関する真面目な情報交換など、気になりすぎる話が満載で、気がついたらかなりの時間が経っていた。

「あー、これは時計が必要かもな…。」

掲示板でも話題に上がっていたが、今の時間が分からないから寝るタイミング等が分かりずらく、その内体を壊しそうだ。

「じゃあ交換リストに時計も追加だな。」

先駆者の体験談をもとに、貰った1000DPを何に交換するか頭の中で考える。

DP全てを寝具に突っ込んで、しばらくの間堅黒パンと壺トイレ生活となった彼の二の舞になるわけにはいかないのだ!

ある程度考えがまとまったら、パソコンのメニュー画面からDP交換リストを開き、ポンポンと交換していく。

せんべい布団 2000DP

トイレ（洋式・ポットン） 200DP

小部屋2㎡ 200DP

無限箱（パン※微低ランク） 200DP

水道 100DP

小型置き時計 100DP

これでぴったり1000DP。

どうやらどの品も基本的には7段階にランク分けされているみたいで、上から『最高ランク』『高ランク』『微高ランク』『普通ランク』『微低ランク』『低ランク』『最低ランク』となっている。

掲示板では皆分かりやすいようにとアルファベット表記で呼んでおり、最高ランクがA、高ランクがBと続き、最低ランクがGとしていた。

ちなみに、いくつかのイレギュラーを除けば、Gランクは10DP、Fランクは100DP、Eランクは200DP、Dランクは500DP、Cランクは1000DP、Bランクは10000DPとなっており、Aランクは物によつて50000DPだったり、100000DPだったり結構幅があった。

ま、今の状態じゃAランクなんていつの事になるやらだけどね。

布団・トイレ・パンの無限箱は夫々Eランクの物を交換。小部屋2㎡はトイレにする

予定で、1㎡で100DPだった。

水道は、何故だかそれだけ目立つようにカラフルな文字で書いてあったが、他プレイヤーの見解によると、最初のプレゼントセットにつけ忘れたのだろうと。

流石に水が無いと人間生きていけないからね。

生きていけないと言えば、もし死んでしまったらどうなるかも載ってたよ。

あんまり見るのも話すもの楽しい話じゃないんだけどね…。

結論だけ言うと、拠点内やダンジョン内でどんな死に方をしようとも、五体満足の状態で拠点のパソコンの前に戻ってくるらしい。

こんな話が出るって事は試した人がいるって事なんだろうけど…。

まあ、人の事は気にしても仕方ない。だって自分の事で精いっぱいだもん。

びーくーるびーくーる、おちちつけ、おちちつけ。

さて、DPの交換もすんだわけだが、次にダンジョンで手に入れたカードの確認をしよう。

まず、今回の探索で手に入れたカードは全部で14枚。

微妙に10分内に間に合わない戦闘が多かったから、大体1時間に5回戦闘してる計

算かな？

デッキが半分になるまで進んで、そこから引き返し、リポップした魔物と戦った分で14枚となった。

出現した魔物はガイコツのみ。3種類のカードを落としてくれたが、掲示板によると落とすのはこの3種類だけのようだ。

デッキに加える事も考えたが、3枚とも攻撃防御共に100だった為、特にデッキ強化にはならないとして全部DPに変えることにした。

メニュー画面からカードをDPに変換するページを開き、パソコンに接続された機械のカード投入口に全てのカードを入れる。

『全部で140DPになります』という文字を確認し、OKボタンを押す。

機械がガタガタと音をたてて動き出し、ペカーッと光ったかと思うと、画面に『140DPを入手しました』と文字が現れた。

どうやら1枚10DPになるようだ。多分先に進めばもっと高いカードも出てくるのだろう。

とりあえず今日はお試しの気持ちで探索を試してみたわけだが、感触としては『思ったより行ける』だ。

勿論油断や慢心は良くないが、掲示板情報によると1階は皆ガイコツしか出ないみた

いだ。

もう少し慣れれば、マップや魔物のリポップ時間など検証して、効率的に稼げる最適ルートを考えてもいいかもしれない。

例の3階まで進んだというプレイヤーが情報を提供してくれるなら、後から安全に進んでいけばいい。

先ずは生活の質を上げることが最優先にして、ダンジョン生活頑張っていこう。

5話

「スモールキヤットを攻撃表示で召喚！ガイコツにアタック！」

スモール・キヤット 星1 風 獣族／通常モンスタ―

A200 D200

小さな猫

現れた子猫のネコパンチを受けたガイコツはその場に崩れ落ち霧となって消えていった。

「ふう、だいぶ慣れてきたかな…。」

DPを交換した後、再び掲示板を読み漁り、いい時間になった為、新たにセットした布団で就寝した。

普段椅子に座ってばっかりの俺にしては珍しく長時間歩いたためか、心地よい疲労の中割とすぐに眠ることができた。

そして二日目。次は風呂やら着替えやらが必要だな…。なんてことを考えつつパンを食べ、ディスクをセットしてダンジョンへ入る。

昨日と変わらずガイコツを相手にしつつ1階をくまなく検索していく。

時折、『先行ドロワー有りの即攻撃可能って先行有利過ぎる気がするが…、でもそうしないところが奇襲で一撃の可能性が高くなりすぎるのか。』等、気になることを考えたり、『DP交換一覧表にエロ本があったとか誰かが書いてたな…』等、昨日見た掲示板のくだらない内容を思い出したりと、昨日よりはかなり気持ちに余裕を持って進む事が出来ている。

さらに、昨日カードと交換したDPを使用して、掲示板でお勧めされてたある『スキル』を取ったことにより、探索自体も楽になつてる。

そのスキルがこちら

スキル マッピングLv1 必要DP100

ダンジョン内のみ使用可能

自分の歩いた場所がマップ上に記録される

DPで交換できるリストの中には、日用品だけではなく、こういったダンジョン探索を楽にするためのスキルや、戦闘を有利に進めるためのスキルなどもあった。

その中でお勧めされていたのがこのマッピング

よくあるゲームの隅に出てくるミニマップみたいなものが頭の中に浮かび、自分が通ったことのある場所が記録されていくもので、これがあれば帰り道に迷うこともな

い。

ちなみにこの1階、拠点から進んで2体目の骸骨ぐらいまでは1本道だったけど、そこから先は結構分かれ道が多い。無策で進めば確実に迷いそうだ。

他にも掲示板お勧めのスキルとして、『初期手札＋1枚』や『ライフアップ』、『魔物探知』等が挙げられてた。

現状、ダンジョンに入った時点での手札は1枚で、ライフは100（！）なので、それを増やすことで戦闘が格段になる事は間違いない。さらに魔物探知は自分の近くに魔物がいればなんとなく分かるようになるものらしく、マッピングのスキルを持っていれば、なんとマップ上に光点で現れるらしい。

基本的にどのスキルもレベルがあり、低いうちはそれなりの効果だが、高くなった時の効果の増加具合に皆期待している。又レベル1は基本的に1000DPでとれるので、余裕があるときに色々取っておけばよいとの事。

てなわけで、スキルを駆使しながら探索を続ける。そこそこ進んだところで引き返し、デッキ切れにならないように注意しながら拠点へと帰る。

そして休憩をはさんでまたダンジョンへ、という行動を繰り返した。

…繰り返した。と言ったが、あれは嘘だ。いや、嘘ではないんだが『繰り返した』と

言えるほど何度も往復はしていない。実際に今日一日でダンジョンに入った、いや、入れた回数は午前中に1回、午後から1回の計2回だけだ。

というのも、魔物との遭遇は大体1時間に5回程で、前の戦闘で使用したカードの実体化時間である10分にギリギリ間に合ったり間に合わなかったりといった微妙なタイミングである事が多い。となれば、デッキが切れるギリギリまでダンジョン内にいるとしても、約2〜3時間探索し、その後のマップを見ながら約1時間で拠点へ戻る事になる。リポップが間に合っていない場所もあるので、大体15〜18回程の戦闘回数になる訳だが、何よりも元々インドア派の自分がこれだけ動き回って疲れないはずがない。

午前中の探索を終え拠点に帰り、昼食（パン）を食べた後はしばらくお昼寝タイムでしたよ。

そんなこんなで、拠点へ帰宅（帰拠点?）。今日の成果は全部でカード35枚。かなり、かなり頑張ったんじゃないかなろうか。

ではではお待ちかねのDP交換タイムー!!

カードすべてをDPに変え、350DPゲット。

まずは昨日から考えてたお風呂と交換。

お風呂※Eランク（簡易シャワー） 200DP

次に昨日の余りのDPを合わせて200DPで肉の無限箱と交換

無限箱（肉※Eランク）

ん？そんなものよりダンジョン攻略の為のスキルの方がいいんじゃないかって？

そんな君にはこの言葉を贈ろう。

『3食小さなパン1つと水だけで、風呂無し生活してみ？』

以外に何とかなるもんだけど、生活改善する手段があるなら迷わずそつちを優先するよ。

特に現代社会の便利さに慣れ切った身とすればかなりキツイものがあるよ。

どれだけ今までが恵まれていたかがよくわかる。

そういえば無限箱についてだけど、無限って書いてあるにもかかわらず、箱の中身は1日に3回、朝昼晩に夫々1個づつしか出てこない。これは中身が食料（パン）だからなのかもしれないが、もう少し詳細がほしいところだ。

あと、箱から取り出さなければ次のが出てくることはないらしく、箱から飽和して出てくるって心配はないようだ。

てなわけで、若干改善された食事をとりつつパソコンの掲示板を読み漁る。

「ふんふん、2階には別の魔物が出てくるんだな…、おつ、この人もう6階まで行ったのか！」

「マツピングのレベルを2に上げると、精度がかなり上がっていい感じと。」

「体力増強スキル取ったら疲労度がまるで違う…か。ただあれ500DPなんだよな…。」

「5階層には帰還用のクリスタル？ふーん。そういや100DPで帰還の羽とかもあつたな。」

一度読みだすとあつという間に時間が溶けていくから不思議だ。

一区切りついたところで大きく伸びをして、お風呂に入ることにする。

今はシャワーだけが、そのうち大きい風呂でのんびり浸かりたいものだ。

1日ぶりのシャワーに疲れが洗い流されていくようで、すつきりとした気分が出てきた俺を待ち構えていたのは、体を拭く為のタオルがないという現実だった。

6話

結局シャワーから出た俺は、自分が着ていた下着のシャツ（若干汗臭い）で体を拭き、何とか事なきを得た。

ついでに服も一緒にシャワーで洗ったりしてなくてよかったよ…。

お世話になりっぱなしの掲示板に失敗談として今回の出来事を乗せておく。情報を買ってばかりも気が引けるからね。

まあ攻略には関係ない笑い話だけど、誰かが同じことをやらかす前に気付いてもらえればと思う。

そのままの流れで再び掲示板を流し見した後、眠くなってきたので就寝。

次の日の朝、Pan with肉を食べながらこれからの事について考える。

流石にたくさんのプレイヤーがいるだけあつてか、色々と変わったことをしてる人も少なからずいる。

オンラインゲームのスタートダッシュの如く、ひたすらダンジョン攻略最先端を爆走している彼（彼女？）や、最初に貰った1000DPを全て一つの日用品につき込んだ

人。逆にデュエル関係のスキルにつき込んで生活が苦しいと嘆いてる人。

そういった人たちの汗と涙の結晶（情報提供）のおかげで、後発組は楽をさせてもらう事が出来る。ありがたく活用させてもらおう。

とりあえず、昨日仕入れた情報の内、大事そうなことを抜き出すとこんな感じ。

・1階の魔物はガイコツのみ

・2階へ続く階段まで走れば大体30分ぐらいい。 (体力増強スキル込み、最短ルートかつ魔物との戦闘を極力回避した場合)

・2階の魔物はガイコツともう一体。プレイヤーによって種族は違うが、能力は一律A1000D200。落とすカードは3種類で全プレイヤー同じ (現時点で2階到達プレイヤーのみの情報)。

・3階はさらにもう1体別の魔物が増え、能力はA2000D100。 (現時点で3階到達者は最速の人ともう1人の2人のみ)

・4階は、3階までに出てきた魔物が2体つつ出てくるようになる。(3階までは1体つつしか戦闘にならなかつたが、2体いっぺんに相手しなければならぬ。 ※相手フィールドに最初から2体いる状態)

・5階には帰還のクリスタル在り。触れると拠点へ一瞬で戻れる (現時点4階到達者は1人のみ)

・同様の効果を持つ帰還の羽（100DP）も交換リスト内に有り

・5階到達後、新機能として拠点から5階のクリスタルに一瞬で飛べるようになる

・6階は5回までに出てきた魔物とは別の魔物が2体で出現。いずれもA200D2

00

・1階から6階まで、どの魔物を倒した時に出るカードも、DPに変換する際は全て

10DP

・魔物のリポップ時間は約1時間。ほぼ同じ場所に沸く

・魔物は戦闘開始時、『攻撃表示状態』の時と『守備表示状態』の時がある。

・見分け方としては、何となく近づいてきそうな雰囲気の時が攻撃表示で、動かず様

子を見る風の時守備表示（いまいちわからん）

・こちらの攻撃力が低く、あちらの防御力が高いとき、言わゆる千日手状態になった

場合、規定ターン後？（検証がまだ追いついてないっぽい）仲間を呼び出す。

・呼び出された仲間は、基本的にその階層内にいる魔物で、攻撃力が本来の数値より

も若干アップしている。（攻撃力がアップした状態でフィールドに特殊召喚された感

じ）

・その為、攻撃力の高いカードを引き当てるまで睨み合いが続くと言ったことは一切

ない

とりあえずこんなところだろうか。

後はあのスキルが良いとか悪いとか、お勧めの日用品・家電とか、俺がやらかしたような失敗談（風呂で服を一緒に洗ってしまい、しばらくすっぱんぽんで過ごしたという人が1人いた。）とか。

で、みんな好き勝手に検証やら推測をしてたけど、今の時点で一番効率よくDPを稼ぐには、魔物が落とすカードをデッキに追加して、1階をひたすら回る（1階全マップ把握済み・体力増強、マップ、魔物探知スキル取得 を推奨）のが良いらしい。

まあ、みんなそこまでDPに余裕が無いから、実際にそれらのスキルを全部取って回ってる人はまだいないみたいだけど。あくまで机上の推測ね。

とは言え、先に進めば進むほど敵が強くなっていくのはゲームでもお約束だし、ひとまずは昨日みたいに先へ進む階段を探しつつDPを貯める感じでもいいかな？

念のため帰還の羽を持って行って、デッキがギリギリになったら帰る感じで。で、次はマップをみながら前回の続きまで行って、進んで少しづつ進んでいくと。

最初に生活レベルを上げるためにDP貯めをするのもいいけど、多分先に進めばもつと効率よく貯めれるようになるんじゃないかと思うし、そうでなければまた魔物が倒しやすい階層で貯めればいいだけだ。

今は少しづつ前に進むことを優先していこう。

あ、生活とダンジョン攻略、優先するのは生活の方だよ。モチベーションって大事だもんね。

てなわけで、今日もダンジョン探索行ってきます！

…と出かけてあつという間に夕方。

今日もしっかり稼いできて、ついに2階へ続く階段を発見しました！

今日の稼ぎはカード58枚。

午前中はDPの余りが無かったから、昨日と同じようにある程度デツキが少なくなったら帰って来た。

この時点でカード18枚。

カードをDPに変え、100DPで帰還の羽と交換。

でちよつと早いけどお昼（肉はさんだパン）を食べ、再びダンジョンへ。

今度は帰還アイテムがあるからデツキ切れギリギリまで探索し、20枚ゲット。

この時2階への階段も発見したけど、すでにデツキ残数が1枚だった為、確認は次回に回すことにした。

一旦拠点へ帰ってきて、まだ時間があつたのもう一度帰還の羽を持ってダンジョンへ。

マップを見ながら先程見つけた階段へと進み、2階へ降りてみる。

初エリアの為慎重に進み、そこで新しい魔物と遭遇。岩石族？の魔物みたいで、掲示板情報通りA100D200だった。

何度か戦闘を行い、デッキが少なくなつたら一度1階に戻り、そこでデッキ全て使い切つて帰還の羽で拠点へと戻つた。

結果、入手カードは58枚だが、帰還の羽を2個使用してるため、純利益は38枚分の380DP。

昨日とそんなに変わらん…。

だが、ギリギリまで探索して一瞬で帰れるため、時間的な余裕はできた。

その為昨日とは違い、3回探索に行くことができた。収支はそんなに変わらないが、探索の進行速度が上がる事を考えると、毎回帰還の羽はあつた方が良くかもしれない。帰り道に不慮の事故に遭う可能性も無くなるし。

つてことで、DPの使用方法について考える。

100DPは明日の帰還の羽用にとつておいて後280。

風呂の後のタオル(Eランク 200DP)を交換して残り80。

トイレットペーパー（使い切り約2〜3回分）が10DPで残り70。
ん？タオルで200も使っているのかって？

そりゃ節約はしたいけど、『Fランク 布キレ』『Eランク 使い込んだタオル』って書いてあるの見たら（掲示板情報）そりゃEにするでしょうよ。

じゃ、いつものパン食べて、シャワー浴びて、情報漁ったら寝ます。
おやすみなさい。

7話

次の日

昨日は特にめぼしい情報も無かったので、普通にダンジョンに潜る。

あえて言うなら、最先端走ってる人が9階に着いたってことぐらいかな？

では昨日と同じく進めていこう。

今日は主に2階の探索を進めていく。

ちなみに俺は手に入れたカードは全部DPに変えている為、デッキ枚数は初期と変わらず20枚だ。

ただ初期カードは全て、最低攻撃力が200以上あるので、魔物から手に入れた攻撃力100のカードを下手に入れるよりはいいと思っっている。

ではサクサクと進んでいこう。

…という訳で今日も夕方。

今日の稼ぎは54枚。帰還の羽を3個交換（1個は明日の分）で純利益は240DP。

…昨日より少ないとか言うなし。

2階の魔物はA100D200の為、たまに守備表示で出てくると、こっちがA200だけだと倒せないのだ。

その分ドロ回数が増え(大体次のターンにはA300以上が来てくれるが)、その分倒せる回数も減ってしまっている。

(これなら確かにD.P.を稼ぐのは1階を回った方が良いな...)。

ただいつまでも1階を回っている訳にもいかない。今は我慢の時かと、ひとまず考えるのは止めて、先に他のプレイヤーの意見を参考にしようと思い、掲示板を覗いてみることにした。

が、そこはいつもと違いお祭り状態。まあ普段から割と賑やかだが、輪をかけて賑わっている。

何事かと思いき記事を書かかのぼっていくと、そこには驚愕の内容が書かれていた。

『某氏 ついに10階に到達』

『10階にボス 某氏なす術もなくやられる』

『ボス戦は対人戦!?!』

なんとついに例の人が10階にたどり着いたらしい。

俺なんかまだ2階なのに、たった数日でよくそこまで進んだもんだ。

てか、名前が分からないから『某氏』って呼ばれてるのか。なんだかそのままこの呼び方が定着しそうだな。

で、あらかたのプレイヤーが予想していたが、やはり10階にはボスがいたか。

別にボスがいることを予想していたわけでは無いけど、5階に帰還クリスタルがあったことから（5階はクリスタルのある大部屋が1つあるだけで魔物も出てこないらしい）次にキリの良い10階には何かあるんじゃないかって推測する人は多かった。

しかし、『なす術もなくやられる』…か。

いくら突っ走って進んだらうとは言え、そこまでたどり着けるほどのプレイヤーなのだから、そう簡単に負けることは無いような気はするが…、初見殺しの事でもあったのだろうか？

ま、こればかりは情報が出るまで分からないな。掲示板を見た限りでは、某氏もこれ以上の情報は出してくれそうにないし。というのも、この某氏、どうも年齢がそこまで高くない様に見受けられる。

自慢げな話し方も随所に見られたし、おそらく自分が1番でいたいんだろう。

何にしても、まだ2階をウロウロしている俺からしたら、全然先の話だし、俺がつく

頃にはそこそこの情報も出そろってるだろう。こちらはマイペースに行かせてもらおう。

さて、掲示板もしばらくはこのネタで盛り上がるだろうし、パンでも齧りながらのんびりしますかね。

はい次の日―。

やっぱりそれ以上は某氏から情報が出ず、他のプレイヤー達も諦めて自分の事に専念するみたいだ。

じゃあ俺も、いつも通り頑張りますかね。

ちなみに昨日のDPは無開箱の野菜セット（200DP）野菜の切れ端の詰め合わせ※セットなのでお得！）と交換した。

野菜も食べないと体に悪いからね。ちなみに調理具なんてないから全部生。：顎が痛い。

昨日進んだところまではマップのおかげで迷わず進めるのでサクサクと進み、そこからは階段を探しつつ地道に探索を続けていく。地味にマップが埋まっていくのが楽しい。

隠し部屋なんかあって宝箱があったり、モンスターハウスがあつて一気にカードゲットできたり：なんて期待するけど、そんなに甘くはないね。地道に地道に：。

1階は魔物と遭遇しても、先行ドロワーの即召喚攻撃で何も考えなくても問題なかったけど、2階以降は魔物の能力も上がる為少し面倒になる。それでもデッキ内の大半は攻撃力300以上なので、そこまで気にすることは無いんだけどね。

ちなみにデッキ内の攻撃力は、500が1枚、400が3枚、300が10枚、200が6枚となっている。

どうしても最後にA200のカードばかり残りがちで、全部カードを使いきれずに帰還する事も多い。

なので1回の探索（デッキが切れるまで）で手に入れられるDPはどうしても160〜180ぐらいになってしまう。

帰還の羽の100DPがかなり重く感じるが、デッキ切れに怯えながら帰り道を歩くのと、それを気にせずいれるのでは精神的負担がかなり違うし。羽を持って行かない選択肢は無い。

となれば、どうしても1回の探索の純利益は70DP前後になり、1日に3回入ったとしても200DP前後になる。

これに関してはもうしょうがないので、先に進めば楽なることを信じ進む。そう考

えれば、10階にいち早く到達した人は、無謀にも見えたがあれはあれで間違っていないのかもしれないな。

そんなこんなで探索をつづける事3日、1日目で3階への階段を見つけ、3日目には4階への階段も発見できた。

そして4日目、4階の攻略を開始する。

3日間で溜まったDPは全部で600（帰還の羽分を除いた純利益）。

無限箱でEランクキャベツとトマトを一つづつ。さらにパンを1つ追加。

調味料で塩（単品 100DP）を交換したことで、ようやく食事はまとも（毎食パンに野菜と肉を挟んだハンバーガー）になった

これでお腹いっぱい食べられるよ…（泣）

4階は掲示板情報によると魔物が2体同時に現れるらしい。

1ターンでは倒しきれない為ドロ回数が増え、デッキの消費が激しくなる。

ただでさえここにたどり着くまでに半分ぐらいは消費しているし、これはかなり厳しいんじゃないか…？

4階で最初に遭遇したのは、1階から出てくるガイコツ（A100D100）と、2階から出てくる岩石族の魔物（A100D200）。

「ドロー！」

手札は2枚。

魔物の骨 星1 闇 アンデット族／通常モンスター

A200 D100

ベビー・バード 星1 風 鳥獣族／通常モンスター

A200 D300

岩石族の魔物の動き…あれは守備表示か!?

「クッ！ベビー・バードを攻撃表示で召喚。ガイコツを攻撃！…ターンエンド。」

ガイコツは倒したが、もう一体の魔物は動かずにじつとこちらの様子を見ている。

そしてデュエルディスクのディスプレイ部分がチカチカ点滅し出した。こちらのターンという合図だ。

「…ドロー。よしっ！ レッサーワーウルフを攻撃表示で召喚！攻撃だ!!」

レッサーワーウルフ 星1 風 獣戦士族／通常モンスター

A400 D200

能力的には劣っても狼の血は強く引き継がれている

その鋭い爪を以て、頑丈そうに見えた魔物を軽々と引き裂く。

残されたカードを手に取りつつ一人ため息をつく。

(この調子じゃ本当にデッキが持たないな……。戦闘を回避しながら進むほかないか?)

2体を相手にすることの厄介さを身で感じた俺は、一旦ここで拠点に帰ることにした。

羽を使用し、一瞬で拠点の中へと転移した俺は、まずパソコンの元に行き、カードをDPに変えた後お目当ての物を探す。

魔物探知Lv1

魔物の位置がなんとなくわかるようになる。

マップスキルを所持していれば、マップ上に光点として現れる。

4階だけではなく、道中も確実に何回かは戦闘を強いられる。

可能ならば低階層はできる限り戦闘を避けて、4階の為にデッキ枚数を節約していきたい。

スキルを交換した俺は、一旦1階層を軽く回り使用感を確かめることにした。

(おいおい、これは……。なんでもっと早く取らなかつたんだろうって思えるほど使い勝

手が良いな。」

掲示板でもおすすりリストに上がっている通り、これは非常に使える。

まだレベル1なので範囲は狭いが、ある程度の距離にいる魔物がマップ上で分かる為、DP稼ぎにも、避けて通るにもとても便利。

気分が良くなったので、そのまま1階のガイコツをどんどん狩って回る。

当初は軽くスキルの使用感を確かめるだけのつもりだったのだが、気がつけばデッキ切れになりかけるまでガッツリ潜ってしまった。

で、思った以上に狩りが捗ったせいか、拠点に帰りそのままのテンションでカードをDPに変換、流れる様に交換リストをチェックし、「おっ、マツピングレベル2は200DPか。よし、取ったろ。」と、普段の慎重さ(生活に比重を置いた考え)からは考えられないくらい軽い軽さで「ポチツとな」とボタンを押す。

ルンルン気分でシャワーを浴びに行くが、シャワー後服を手に取った時に「そろそろ替えの服が欲しいと思ってたのに……」と一気に冷静になり落ち込んだ。

そのままふて寝して、次の日の朝、前日の夕飯を食べてないことを思い出しさらに落ち込む。

昨日から続けて、数時間テンションが低空飛行を続けているが、ダンジョンに行かないという選択肢はない。

DPをほぼ使い切ったこともあり（帰還の羽がない）、1階を回りDPを貯める。

が、ここで、昨日変なテンションのまま交換してしまったマツピングLv2がとてもいい仕事をしてくれて、今まで以上に効率的に狩りをする事ができた。

具体的に説明するのは難しいが、何となく範囲が広がり見やすくなったのだ。

これで調子に乗ってギリギリまでデッキを消費し（魔物探知スキルのおかげで調整が可能となった）、拠点に帰り、もう『毒を食らわば皿まで』の気分で魔物探知Lv2も取ってしまう。

やけになってやってしまった感が無きにしても非ずだが、結果的にこれがかなり良い方向に進んだ。

レベルが上がったことにより、少し先の魔物の反応までわかるようになり、よりDPを稼ぐことも戦闘を避けることもしやすくなった。何より離れた場所にいる魔物の位置が分かるようになったことで、自分のモンスターの実体化時間である10分に次の戦闘が間に合うようになってきた。

これにより、1時間当たりの戦闘回数が5回を超え、デッキを使い切るまでの時間が短縮。早めに拠点に帰ることでダンジョンに潜れる回数が増える。さらに回数を重ねることで、効率的なルートを導き出すことができ、奇しくも最初に自分が考えていた『1階でのDP稼ぎ』を实践する形となった。

8話

(これももしかしたら、生活レベルを上げるより先に、ダンジョン用のスキルを先に取ってしまったほうが効率が良かったのかも…)

そんなことを考えてしまうほど今日は効率よくDPを貯めることができた。

マッピングと魔物探知のスキルのおかげで、ガンガン魔物を狩ることができ、帰り道も帰還の羽がなくとも魔物と遭遇しない道を通って進むことができるようになったので、デッキ切れギリギリまで潜ることができる。

今日は途中で魔物探知Lv2のスキルをとったのを除き、400DPゲット。

次にDPがたまったら着替えの服を…と思っていたが、一旦その考えを保留にし、別スキルの為に貯めることにした。

夕飯(ハンバーガー+水道水)を食べながら、今までのDPの使い方が正しかったのかどうか自問自答するも、まあすでにやってしまったものは仕方がない、もしスキル優先していたら今ハンバーガー(手作り)はきつと食べれていなかった。と自分を納得させ布団に入る。

何となく今日は掲示板を見る気にならない。

實際生活レベルを上げるのが優先だ！と思いいこれまでやってきたが、今日の様子を見るとそれが間違いだったような気がしてならない。もちろん、誰かさんみたいにつまでも壺トイレや藁の布団は使いたくないし、1週間もシャワーすら浴びれない生活も嫌だから、これまでの行動に後悔はない。でももつと良い方法があつたんじやないか？効率的にできたんじやないか？と考え出すと頭の中がグルングルになる。

今掲示板を見てしまうと、何となく書いてある内容に流されてしまいそうな気がするから：

今日はもう寝る。で、明日考える！おやすみ!!

次の日の朝。

思ったよりすつきりした頭で目が覚めた俺は、朝ご飯（パン with 肉&野菜）を食べべつつ今後の予定を考える。

（うだうだ悩むのは昨日でおしまい！やってしまったものはもう戻らないだし。で、とりあえず今日は1階でひたすらDP稼いだ。それから体力増強のスキルをとつたら明日は5回を目指す！）

今日1日はDP稼ぎに費やすことに決め、パンを水道水で流し込む。

デッキを装着し、ダンジョンへと向かう。

「よし、今日も頼むぜ。」

この数日間でもいい愛着のわいてきたカードたちに一声かけ、ダンジョンへ続く扉を開けた。

そして夕方。

今日は1度目の探索を終えた時点で、予定していた『体力増強』のスキルを取った。

そしたらこれももうすごいなの。

語彙力が乏しくなるけど、本当にすごい。

今まではダンジョンの中をひたすら歩いて回っていたけど、このスキルを取ってからなんだか体力が有り余ってる感じがして、ずっと小走りぐらいで移動ができた。しかも全然疲れない。

戦闘時には足を止める為、その時休憩ができていいのか、探索中ずっと走り回っても全く平気だった。

さらに、今までは朝一に1回、昼前後に1回、夕方に1回の計3回ダンジョンに入っており、それ以上は体力の問題もあり、基本的にダンジョンに入ることはなかったが、こ

のスキルを取ってからは3回目の探索後もまだ体力が余ってる感じで、4回目(夜の部)の探索も可能となる。それほどまでだった。

実際はモンスター実体化時間の10分以内に間に合うようになったため、1体のモンスターが2回の戦闘に参加できるようになり、デッキ切れまで粘れば全部で40回の戦闘が可能となる。しかし戦闘回数が増えたとしてもかかる時間は結局変わらないため、水分補給の休憩もかねて今までと同じタイミングで一旦拠点に帰ることにしている。

これにより、今日の純利益は600DP。

ここから明日の帰還の羽用100DPを除き、500DPが自由に使える。

ここは久々に日用品である替えの服(上下セット下着込み500DP)と交換することにした。

スキルを優先してもよかったが、流石に匂いがかかなり気になってきて:(自分自身はシャワーを浴びてるから余計に服の匂いが気になる)

ま、今回のことで500DPぐらいなら1日で貯めれることも分かったし、必要なものが出てきたときにはまた貯めればいい。

超久々にきれいな服(ランクは高くないが)を着れて、気分的にもかなりさっぱりできた。

今まで来ていた服はシャワーで一緒に洗って、拠点の隅に広げて干している。

昨日見れなかった掲示板をざっと見てから寝る。

今まで一生懸命スキルのお勧めしてきてくれた人たち、ありがとう。でもみんな、おすすめてのを前面に出しすぎて、スキル内容の説明が下手だったんだよ…。かなり有用なスキルだからおすすめたのは分かるけど『ちよーすげー!』とか『世界が変わる!!』とかではなく、もっと具体的に書いておいてほしかった。

一応俺もお礼も込めて『激やべー!!』って書いていた。

次の日。

いつも通り食事を済ませ、軽く準備運動。しっかりと気合を入れてダンジョンへ挑む。

1〜3階はスキルをフル活用して、できる限り戦闘を少なくする方向で進み4階へ。4階でも基本的には戦闘は避けるようにし、階段を探すことを第一優先に探索を続けた。

そして避けきれない戦闘を数度か繰り返した後、ついに5階への階段を発見した。

(これはスキル様々だな。)

先日のマッピングスキルLv2と魔物探知Lv2、それと体力増強スキルが本当にい

い仕事をしてくれた。

このスキルがなければおそらく階段発見に数倍の時間がかかっていたことだろう。少し緊張しながら階段を下りる。

他の階と変わらぬ長さの階段を降り切った先は一つの大きな部屋だった。

拠点よりも少し大きい大き目で、部屋の中央には透明な青みがかった大きな石が浮いている。

(これはクリスタルと呼ばれるのも納得だな…)。

掲示板ではみな口をそろえて『クリスタル』と呼んでいたが、確かにこれはクリスタルとしか言いようがない。某最後の物語に出てくるクリスタルそっくりである。

ゆっくり近づき、そつとクリスタルに触れてみる。すると、

【転送装置への到達を確認しました。これより転移機能が解放されます。】

いきなり頭上からアナウンスが聞こえてきて、クリスタルが光り出した。

(掲示板によると、もう一回触ったら拠点に帰るかどうかが聞かれるんだつたな。)

先駆者たちのありがたい情報を思い出しながら、一度離れた手をもう一度触れさせる。

【拠点へと戻りますか?】

「ああ、拠点へと帰ろう。」

別に頭の中で願うだけでも良いらしいが、一応口に出していつてみる。

すると、帰還の羽を使った時と同じように、一瞬ふわっと体が浮いたような感触があり、気が付けば拠点のパソコンの前に立っていた。

そしてパソコンの画面には『転移機能開放!!』という文字と共に、転移先選択の文字が増えていた。

「これでとりあえず近い目標は達成かな。」

転移機能が解放されたことにより、わざわざ1階から入りなおさなくても一瞬で5階まで行けるようになった。これで気兼ねなく4階や6階の探索ができる。

とりあえず4階のマップをもう少し埋めてから6階に挑戦。

慣れてきたら1階と同じように効率のいい回り方を探しDP稼ぎ。

もしそれで1階のほうが効率が良いと感じたらしばらく1階でDP稼ぎ、かな？

ともかく、掲示板情報では今のところ5階以外に転移機能はないらしく、10階に行きたい時もまず5階から進んで行かないといけならしい（情報を隠していれば別だが）。

なので、効率狩りをするなら4階か6階、又は1階だと思っている。

ある程度マップが埋まるまでは慎重に、埋まってからはそこそこ大胆にDPを稼いでいきたい。

どうせ某氏も10階のボスで足止めを食らつてるところだ。

ここらでしつかりDP稼ぎをしても、多すぎて困ることは無いだろう。

そう考えをまとめ、予定を遂行するためにパソコンの転移先選択ボタンを押した。

9話

1週間後：

あれから俺は4階をある程度回り、6階にチャレンジした。

出てくる魔物は2種類でどちらもA200D200と、掲示板の情報通り。

一応7階に続く階段までは発見したが、俺のデッキ内にはA200のモンスターが6体いる。そいつらが6階では使えなくなり（攻撃表示同士なら相打ちで勝てるが、何となく嫌なのでしていない）。必然的にDP稼ぎの場からは外される。

で、4階効率ルートを考察し、試しに1日回ってみると、なんとその日の稼ぎが1120DPにもなった。

4階では魔物が2体で現れるが、種類は、ADともに100のガイコツ（1）と、A100D200の魔物（2）、A200 D100の魔物（3）の3種類のみなので、俺のデッキの攻撃力200のカードたちにも活躍の場はあり、割とスムーズに稼ぐことができた。

何となくだが、来てほしいと思った時に来てほしいカードが来ることが多い気がする

けど…ま、ただの気のせいかな？

1回の探索（約3時間）で18〜19回戦闘をこなし、その全てで2枚カードが手に入るため、DPに換算すると360〜380。（手札にA200モンスターばかり余ることもあるため）

1階ほどサクサク狩れるわけではないので、1日に3回繰り返し、全部で約1100 DP。

4階と6階の探索で3日、4階のルート考察で1日、効率稼ぎを始めて3日。

計1週間で約5000DPをゲット。

なんか知らんが一気に稼げるようになってきたな…。

手に入れたDPは、Cランクの布団とベッド（布団とベッドは別扱いだった）、お風呂とトイレに1000DPづつ使用し、残りの1000DPは諸々消耗品（トイレットペーパーや石鹸とか）と食事の改善に使用した。

そろそろ白米が恋しいけど、リストの中に白ご飯がなく、白米しかないのはいじめだろうか？（別で炊飯器が必要）

まあその辺は追々増やすにしても、これで相当生活レベルが上がった。

どうやらCランクぐらいの物が、元の世界の標準的な物っぽい（微妙に違うのもあるけど）。

今は普通のベッドで普通の布団に包まれてぐっすり眠ることができている。

この1週間、俺はDPを稼ぐ事をメインに活動してきたが、掲示板では大きな動きがあった。

なんと、某氏が10階のボスを倒したという情報が入って来たのだ。

この時点で某氏以外にも何人かは10階へたどり着いたらしいが、誰一人としてボスを倒せた人はいなかった。

というのも、彼らの情報によると、ボスのスペックは、ライフポイント（LP）が1000で、初期手札は2枚。使用カードは、攻撃力300〜500、防御力300〜500の通常モンスターカードばかり。

だが、どうにもプレイヤーに勝たせる気が無いような容赦ない戦い方をしてくるらしく、いきなりA500のモンスターを複数体並べてみたり（現時点でどのプレイヤーも自身の持つカードの内最大攻撃力は500）、プレイヤーが召喚したモンスターより必ず少しづつ攻撃力の高いモンスターを出してじわじわなぶってきたりと、かなりいやらしいとの事。

実際に戦ったプレイヤーの感想は「絶対に勝てないと思わせるような戦い方だった」

そうだ。

中には勝つための条件が足りていないんじゃないか?と推測するプレイヤーもいたが、今回某氏がクリアしたことで、その予想が正しかったことが証明された。

相変わらず情報は全然出してくれない某氏だったが、とあるプレイヤーの驚異的な誘導尋問能力により、ある程度の情報を引き出すことに成功した。

某氏は何度も何度もボスに挑み続けるも、他のプレイヤーと同じように理不尽な負け方ばかりしていた。

ある時、ボスのライフや初期手札が自分より多いことに苛立ちを感じ、「俺が負けているのはあいつの方が有利な状況だからだ!」と、自身のライフを1000以上に、初期手札も2枚以上にして挑んだところ、何か勝てたそうだ。

この事により、ボスはある一定以上のスペックが無いとまともに戦う事が出来ない。という説が上がった。

そしてこれはもうしばらく後に判明する事だが、検証班と呼ばれる検証好きたちの調べにより、『ボスとまともに戦うには、最低でもそのボスと同じ以上の数値のライフと、同じ以上の枚数の初期手札が必要』という事が分かった。

それからしばらくは、どのプレイヤーも無謀なボスアタックは控え、自分の考えうる最高効率ルートでDP稼ぎを始める。

俺も多分に漏れずDP稼ぎに精を出す。

それから数日後、ついに2人目の10階攻略者が現れた。

そして彼は、2番目の10階攻略者という話の話題だけでなく、とんでもない爆弾を持ってきてくれた。

何と、先に10階をクリアした某氏が、とんでもなく大きな情報を秘密にしていたのだ。

今回クリアしたプレイヤー（瀬戸と呼んでくれ！）って掲示板で言ってた）が言うには、ボスを倒したことで新たな機能が解放されたとの事。

で、その内容がなんとカードのレベルアップシステムだったのだ。

現在どのプレイヤーもレベル1のモンスターカードばかり使用しているが、このレベルアップシステムを使用することで、カードのレベルを上げる（言葉の通り、星1が星2になる）事が出来るという。

瀬戸氏は、詳しく説明するのは難しいとして、概要だけ教えてくれたが、どうやら2枚以上のカードを合成させることで、カードのレベルを上げることができるとの事だった。

レベルが上がることでカードの能力（攻撃力・防御力）が大幅にアップし、姿かたち

もそれにふさわしいものとなる。

この情報にプレイヤーは大いに沸き、そして、某氏がこれだけの情報を秘匿していたことに対する憤りも少なからず出ていた。

まあ自分が優位に立つために情報がある程度隠すことはオンラインゲームなんかでも割とある事らしいから、擁護する声もチラホラありはしたが、何となくモヤモヤした物が残ってしまったような気がする。

ともあれ、今回の件で得た新情報により、自分も！と言ったプレイヤー達がこぞってDP稼ぎに精を出し、そして10階ボスに挑んでいった。

そんな中、俺は何をしていたかというと：

10話

他のプレイヤーが10階に挑むためにDP稼ぎをしている中、俺も同じようにDP稼ぎをしていたわけなんだが…、俺の場合はDPの使い道が他の人とは違っていた。

「よし・2000DPでティ○アールのフライパンセットゲット!」

あれからさらに効率的な周回の仕方を考え、1日で多ければ1500DP以上、少なくとも1000DP以上稼げるようになり、約2週間で2万弱ものDPを手に入れた。

そしてその貯めたDPは皆の様にスキルには使わず、日用品、特に家電製品などにも手を出すことで、かなり満足な生活をできるようになった。

小部屋 20㎡ 2000DP

シンク 3000DP

小さなコンロ 1500DP

まな板・包丁等調理具セット 2000DP

ティ○アールフライパンセット 2000DP

炊飯器 1500DP

着替えセット×2 1000DP

洗濯機（小型 2層式） 1500DP

物干し・ハンガー 600DP

小さな机 1000DP

椅子（キヤスター付き） 1000DP

調味料類・食材・食器・消耗品類 等々 それなりDP

大体こんなところだろうか。

流石に毎食ハンバーガーも飽きてきたので、せっかく無限箱で野菜は出せるんだから何か料理が出来ないかと思ひ、台所を作ってみた。

新たに部屋を用意し、壁際にシンクをセット。何か色々種類があつたから、コンロを置けるスペースがある少し大きな物にした。で、そこにコンロを置き、まな板などの調理器具を配置。ティ〇アールのセットはフライパンにも鍋にも使えるから便利。

炊飯器も交換して、これで念願の白ご飯が食べれるようになった。後はレンジや冷蔵庫辺りが欲しいけど、それはもう少し後かな？

他に服の替えを追加して洗濯機が手に入ったことで、毎日清潔な服を着れるようになった。（嬉泣）

干すための物干しやハンガーもゲットし、これでバッチリ。

それとパソコン使用中に座れるように椅子も交換しといた。今までは立ったまま

だったからね。

で、食材系の無限箱もちよこちよこ交換し、自分の料理スキルで作れるものならある程度何でも作って食べられるようになった。

俺の料理レベル？一応簡単なものは作れるよ。カレーとかオムライスとか。

そう言えばスキル一覧の中に『料理Lv1』ってのを見かけたな。まあ全員が全員料理できるわけじゃないだろうしね。

これでかなり元の世界の生活水準に近づいたと思う。

今回寝室は特に手を加えてないけど、前回ベッドと布団を交換してるし、問題は無い。トイレやお風呂の使い勝手も悪くないし、服も3、4着で着まわせるようになった。

食事もさつき言ったように、自分にやる気さえあればある程度なんでも作れるようにはなったし。

後はやっぱり冷蔵庫や電子レンジ、それから今は着替えやタオルが床に直置きになっているので、タンスやカゴなんかも欲しい。

冷蔵庫に関しては、無限箱の中身が外に取り出すまで時間が停まっているかのように変化が無いので（一度トマトで試しに検証してみた）、そこまで急ぎではないが。

ちなみにゴミ（その時の腐ったトマト含む 勿体ない…）は、管理人に問い合わせると、トイレ壺に入れば消えてくれるとの事で、みんなゴミ箱がわりに使っているよう

だ。

他にも細々したものはまだ足りないところも多いが、とりあえずの生活改善はこれで満足。

皆からは大分遅れてしまったけど、そろそろいい加減ダンジョン攻略を再開しようかと思う。

フライパンセットを入手したことでDPが残りわずかになっていたが、ギリギリ帰還の羽を1つ交換し(とても久々)、明日からの英気を養う為、ゆつたりとお風呂につかり早めに就寝。

(そう言えば他の人たちってどんな生活の仕方してるんだろ…)

掲示板では割とあれやこれやと喋っている彼らだが、実際の所どうなのかは本人しか分からない。

無体も無いことを考えつつ、思考はまどろみに溶けていく。

翌日

朝食に白ご飯と目玉焼きにお味噌汁(インスタント)を食べて、コーヒーを飲んで一

服。

数週間前と比べると何があった!?!ってくらい差がある。

実際、もうダンジョンに潜らなくても、引きこもって生活していけるだけの基盤はできた。

とは言え、ダンジョン攻略をやめるつもりは微塵もないんだけどね。

出発の準備を済ませて5階へ飛ぶ。

久々の6階だが、一応階段までのマップはできているので、避けれる戦闘は避けつつ進む。

今日は急いでるわけでもないのに、DP稼ぎの時みたいにダッシュで移動する必要はない。

約1時間かけて7階へ到着した。

6階からは1〜4階に出てきた魔物は出てこず、新しい魔物が出現する。

6階に2種類、7階に別の2種類、8階は6階と7階に出てきた計4種類の魔物が現れ、そして9階はその4種類の魔物が3体一緒に襲ってくる。

能力は4種ともA200D200だが、いちいち全部相手にしていたらデツキ枚数が持たない。

7階も避けられない戦闘以外は全て避け、階段を探すことを優先にして探索を続け

た。

夕方

結局8階への階段は見つからなかったが、それなりにマップは埋まった。

明日の帰還の羽用の100DPは少なくとも稼げているので、明日も同じように探索を続けよう。

次の日

午前中に8階への階段発見。午後は8階を探索も階段は発見できず。

さらに次の日

1日中8階をウロウロし、帰還の直前に9階への階段を発見。

その次の日

9階を探索し、運良く正解ルートを選び10階への階段を発見。

階段発見時はまだ昼過ぎで、時間に余裕があったため一度拠点に戻り、4階でDP稼ぎを行う。

この時点でいまだLPアップや初期手札アップを取っていないかった為、ここで一旦DP稼ぎに戻り、必要DPが貯まり次第交換し、ボスに挑む準備を整える。

ダンジョン攻略再開を決めてから、約1週間。

ほかのプレイヤーがどんどん10階をクリアしていく中、ようやくボス挑戦の目途が立った。

11話

転移機能を使用して5階へと飛び、マップを確認しながら戦闘を避けつつ階段を下っていく。

サクサクと進み、危なげなく10階へと続く階段にたどり着いた。

この先のことを考え少し緊張しながら階段を下りていく。

降りきった先は4畳半ほどの小さな部屋で、壁に大きな扉がついている。この先にボスがいるのだろうか。

ここまで道中で避けられない戦闘もあったため、ある程度デッキ枚数が減っているが、先駆者たちの情報によると、扉の中に入ったら自動的に墓地のカードは全て山札に戻りシャッフルされるそうだ。

つまりデッキ消費なしの状態で戦える。

気が付けば手にじつとりと汗をかいていた。

(大丈夫だ。やれるはず！)

自分にそう言い聞かせ扉に手をかける。

大きな見た目に反して扉は簡単に開き、中の様子が目に映る。

拠点よりも少し広いぐらいの部屋で中には今のところ何も無い。ここまでのダンジョンと同じく岩壁で囲まれている。

意を決して中に入ってみると、後ろで扉が自然に閉まり開かなくなってしまった。

「ボス戦が終わるまでは出られないってことか…。」

ゆつくりと中央に向かって進む。

するとある程度進んだところで、部屋の中央に黒い靄のようなものが現れた。

それはウネウネと怪しく動き、そして徐々に人の形を模りだした。

真つ黒な人の形をした何か。そう呼ぶのがびったりな物体。その左腕には同じく

真つ黒のデュエルディスクのようなものが。

こいつが10階のボスで間違いないだろう。

様子を見てみると、不意にその黒い人型（ボスと呼ぼう）はディスクにセットされた

デッキからカードを引き始める。

（そうか、デュエルだ。）

俺も同じようにデッキからカードを2枚ドローする。

引いたカードを左手に持ち、お互いに相手を見据えて宣言する。

「デュエル!!」 【ボスLP1000 俺LP1000】

ボスは喋ることができないようなので、室内に響いたのは俺の声だけだ。

ディスクにチラツと目をやるも、先行表示は出ていない。

(相手の先行か。)

そう思っているとおもむろにボスはカードを攻撃表示で召喚した。

「……………」

黒機械Lv1 星1

A200 D300

モンスターが実体化し、相手の場に現れる。

相手はしゃべれないが、何となく言わんとすることは分かる気がする。多分今のは「モンスターを攻撃表示で召喚」という事だろう。

どうやらこのターンはそれだけらしく、俺にターンが回ってくる。

「俺のターン、ドロロー！よしつ、俺は電気子ネズミを召喚。黒機械Lv1にアタックだ！」

電気子ネズミ 光 雷族／通常モンスター

A400 D100

俺の場に黄色い体に赤いほつぺの特徴ある形のしつぽを持ったネズミ？が現れる。

…見るたびに思うが、これ著作権的にいいのか？

まあ今はそんなこと気にしている暇はない。

電気子ネズミの攻撃で相手のモンスターは倒れて消えた。

【ボスLP800】

「ターンエンドだ。」

再びボスのターン。

ボスはモンスターを一体守備表示でセットしターンエンド。

何で最初のターンは攻撃表示で召喚したんだろうか？

「俺のターン、ドロー。」

竜の赤子 光 ドラゴン族／通常モンスター

A300 D300

「俺は竜の赤子を攻撃表示で召喚。バトルフェイズ！まず電気子ネズミでその伏せモン

スターをアタック！」

黒魔法使いLv1 星1

A300 D300

セットモンスターは破壊される。

「続けて竜の赤子でダイレクトアタック！」

【ボスLP500】

「ターンエンド。(よし！手ごたえありだ。)」

今まで多くのプレイヤーたちを苦しめてきたこの10階のボスであるが、実は条件を満たせばデッキレベルが緩和され、A200などの弱めのカードも使用してくるようになる。

さらに先程の様に攻撃力が低めのモンスターを、守備表示ではなく攻撃表示で出してくることもある。

大概のプレイヤーはここぞとばかりに高攻撃力カードで押し切ってクリアしたようで、俺もここまでの流れからこのまま押ししていけば勝てると思いついていた。

しかし次のターン。カードをドロウしたボスが召喚したのは

「……………」

黒戦士Lv1 星1

A500 D300

(なっ!?!攻撃力500!?!)

「……………」

黒戦士Lv1の攻撃で電気子ネズミが倒され、その衝撃が俺を襲う。

「くうっ!!」【俺LP900】

「くっそ!俺のターン、ドロロー!!」

この局面をどうにかできるカードは俺のデッキの中には1枚しかない。祈るように

カードを引く。

「!!よっしっ!戦士の卵を召喚!」

戦士の卵 星1 地 戦士族/通常モンスター

A500 D200

「(ここは相打ちで相手のA500を倒しておくべきか…、すまん、戦士の卵!)俺は戦士の卵で戦士Lv1を攻撃!相打ちだ!そして竜の赤子でダイレクトアタック!」

【ボスLP200】

何という幸運。望んでいたカードを一発で引き当てた俺はすぐさま召喚し、心の中でカードに謝罪しつつも攻撃を仕掛ける。

ここで攻撃せずにお互いの場にA500が残った場合、次の相手のターンで運悪くA400出も出てきてしまったら目も当てられない。

相打ちにしておけば、自分の場にはモンスターが1体残り、相手の場は空になる。攻撃力が低めのカードも出しやすくなるし。

普通ならばこの流れ、確実に勝利が近づいてきていると思うだろう。

なんせ相手の高攻撃力カードは倒れ、残りLPは200。

代わりに俺の最高攻撃力カードも相打ちになってしまったが、相手が低い攻撃力のカードを攻撃表示で出してくれれば、一気に残りライフを削りきることも可能だ。

しかしこの時俺は、ある一つの可能性を見落としていた。

普通ならおそらく気付いていただろうが、事前に掲示板で情報収集をした弊害か、完全にあり得ないと思いついてしまった。

目前に迫った勝利に、つつい緩んだ顔を見せた俺の目に映ったのは

黒小竜Lv1 星1

A500 D400

「……………、は？」

絶望だった。

先ほどまでの緩んだ顔が一瞬でポカーンとした表情に変わる。

「……………」

「くっ!？」

そんな俺にお構いもなく、ボスは召喚した黒小竜Lv1で、竜の赤子を攻撃する。

【俺LP700】

おいおいおいっ！条件を満たしたら相手のデッキが弱くなるんじゃないのかよ

！

なんでA500が2体も出てきてんだよ!!

というか、俺の唯一のA500はすでに墓地。…これ、ひよつとして詰んだんじゃないか?

誰だよ条件さえ満たせばボスはある限り強くないって言ったの!?

嘆いても喚いてもこの状況は変わらない。

勝手に、相手のデッキに入っているA500モンスターは1体だけと決めつけてしまっていたのは俺なんだから。

「くそっ…ドロー!!」

もろ石 星1 地 岩石族／通常モンスター

A200 D400

いくらデッキ内最高値の守備力を持ったカードでもこの状況は覆せない。手札にある他の2枚のカードも、この状況ではどうすることもできない。

魔物の骨 星1 闇 アンデット族／通常モンスター

A200 D100

ミニマジシャン 光 魔法使い族／通常モンスター

A200 D200

「…モンスターを守備表示でセット。…ターンエンド。」

もうこうなってしまうては刻一刻と迫る敗北をただ待つことしかできない。

掲示板でも似たようなことがあった（条件を満たしているのに理不尽なデュエル展開になった）人が数人いたようが、まさか俺もそのうちの一人になるとは…。

俺の心境を知ってか知らずか、ボスは淡々とデュエルを進める。

「……………」

黒ネコLv1 星1

A300 D400

黒小竜Lv1の攻撃でもろ石が倒され、黒猫Lv1のダイレクトアタックを食らう。

「ぐううっ！」【俺LP400】

どうしようもできない。諦めの表情になった俺は最後のドロローをすべくデッキに手をかける。

（しかたないんだ。ほかのプレイヤーにも同じ状況の人はいた。たまたま俺もそうなっただけ。たまたま相手のデッキの回りが良かっただけなんだ。次やればきつと勝てる。大丈夫、別に負けてもまた挑戦すればいいだけだ。別に一回ぐらい負けても…）

頭では抗いようのない現実に諦めようとしている。デッキ内にはもうA500に対抗できるカードは入ってないんだから。それでも手はプルプルと震え、中々カードを引くことができない。

（ここ）までたまたま上手くいってただけなんだ。もうどんなカードが出てもここから逆転は無理なんだ。それは分かっている、分かっているんだけど…）

胸に熱いものがこみあげてくる。

今まで一度も負けることなく失敗することも無くここまでやってきた。

でもずっと勝ち続けるなんて無理だろう。いつかは負けることだってある。

たまたまそれが今回で、思わぬ形で突如現れたから心の整理ができてないだけで…

ここで何のカードを引いても同じこと。それは分かっている。分かっているけど…

「それでも…、それでも悔しい!!」

子供じみてるとは思う。駄々を捏ねてるだけなのは分かっている。そうしたところで未来が変わりようもないのも分かっている。でもこの時は、何故かそうしないといけない、そうする事こそが正解だという考えが頭を占めていた。

「俺は主人公なんて柄じゃない。良くてたまに出てくる脇役だ。でも、今は、今だけは言わせてくれ。今だけでいい。この瞬間だけでいいんだ！奇跡を！デッキよ、俺の思いにこたえてくれ!!ドッ、ロー!!!」

そして奇跡は起こった。

A 200
D 300
ベビー・バード 星1 風 鳥獣属／効果

12話

説明書の中にこんな内容があった。

「プレイヤーとカードにはそれぞれ相性がある。」

始め読んだときは何の事か全く分からなかったけど、その内ダンジョン攻略を進めていく中で、自棄に特定のカードがよく手札に来るように感じていた。

その時は、「ああ、もしかして相性が良いつてのはこういう事なのかな？」と漠然と思っていた。

そして今。

起るはずのない奇跡が当然のように起きなければ、このデュエル最後のドローとなるこのカード。

俺の頭の中では「多分あいつが来るだろうな…」と何となく感じていた。

そして、カードを引いた俺の手の中には、予想通りのカードが収まっていた。

…最高の奇跡と共に。

「……っ?!?!」

ドロローしたのはここまでの道のりを共に戦い抜き見慣れた1枚のカード。そこに描かれた姿はいつもと何1つ変わらない。

しかしそのカードの放つ輝きは、今までとはまるで違っていた。

「俺は！モンスターを準備表示でセットし、ターンエンド!!」

諦めの表情だった俺の目に、希望の光が再び宿る。

そんな俺の様子に、何を感じたのか。いや、何も感じてないのかもしれない。

ボスはこれまでと同じように淡々とデュエルを進める。

「……………」

相手の場にさらにモンスターが追加される。

黒魚Lv1 星1

A300 D200

「……………」

そして、黒子竜が俺の伏せモンスターに攻撃を仕掛ける。

俺の場のモンスターの防御力は300。

相手の攻撃によって墓地へと送られる。

本来ならこのまま残り2体からのダイレクトアタックを受け俺の負けになる。

だが俺は、この時点で勝ちを確信していた。

モンスターが墓地に送られた瞬間、俺は高々と宣言する。

「この瞬間、ベビーバードの効果発動!!」

ベビー・バード 星1 風 鳥獣属／効果

A 200 D 300

このカードが戦闘により破壊され墓地へと送られた時、このカードのレベル以下のモンスターを1体墓地から特殊召喚することができる。

俺の声に、ボスは初めて驚きの様子を見せた…気がする。

「このカードは、戦闘で破壊され墓地へと送られた時、このカードのレベル以下のモンスターを1体、墓地から特殊召喚することができる!俺が選ぶのは勿論こいつだ!甦れ、戦士の卵!!!」

戦士の卵 星1 地 戦士族／通常モンスター

A 500 D 200

場に再び俺のデッキの最高攻撃力を誇るモンスターが現れる。

相手はすでに黒子竜での攻撃が済んでおり、他の2体のモンスターの攻撃力は俺の場のモンスターより低い為何もすることができない。

「……………」

この時ボスが何を思ったのかは分からない。

ターンが回ってきた俺は、不敵な笑みを浮かべながら言った。

「攻撃表示で召喚したのが運の尽きだったな。」

カードをドロ―し、召喚することなく宣言する。

「戦士の卵で、黒魚を攻撃！これで終わりだーっ!!」

墓地から甦った戦士の卵の攻撃で、相手の黒魚は破壊される。

そして余剰ぶんの衝撃がボスを襲い、

「ボスLP 0」

オオオオオオオオオオ……

声にならない声を発しながら、ボスは元の黒い靄のようなものに戻り、そしてゆっくりと消えていった。

…勝った。

その事実を一人ゆつくりと噛みしめながら、ボスが消えていくのを眺めていた。

やがて黒い靄は全て消え去り、そして、その全てを包み込む闇のような暗さとは対照の、暖かくキラキラした物が上から降り注いでくる。

それは徐々に一か所に集まり、大きな透明なクリスタルとなつて部屋の中央に現れた。

その見た目は5階にあつた物とそっくりで、違うところと言えば色がついていないことぐらいだ。

クリスタルに近づき、そつと触れてみる。すると、

「10階の攻略を確認しました。10階転移装置を解放します。」

「10階の攻略により、新たに『レベルアップシステム』機能が解放されます」

「カードの成長を確認しました。管理者に問い合わせ中……………。確認終了。プレイヤーへは追つて管理者より説明がありますので、一度拠点までお戻りください。今すぐ拠点へと戻りますか？」

あれ？ 掲示板情報と違うセリフも入っているけど…？

おそらく『ベビー・バード』の事だろう。管理者から説明があるみたいだし、一旦拠点へ帰ることにしよう。

転移装置に触れたまま拠点に戻りたいと念じると、いつものように一瞬の浮遊感を感じ

じた後、拠点へと帰って来た。

「さて、と？」

拠点に着いた俺の目に一番に飛び込んできたのは、目の前のパソコンの画面に映された『メッセージが届いています』の文字。

何だと思いつりあえず開いてみると、差出人は管理人Aからで、内容はやはりベビー・バードの事についてだった。

「仕事が早いな…。」

絶対どっかで見張ってるだろこの管理者。

気分的には疲れているが、内容が内容だけに気になるので、椅子に腰かけじつくりと読んでいく。

まずは10階攻略おめでとう。

早速本題に入るけど、君のカード、ただの通常モンスターカードだったのが、効果モンスターカードに変わった件についてだ。

まず結論から言うと、どのプレイヤーも、どのカードも、君のカードと同じように変化する可能性を持っている。

これは10階攻略時に解放される『レベルアップ・ランクアップ』とは別物で、もう一つのカード強化方法と言える。

説明書にもあつたと思うけど、各カードとプレイヤーには相性があるんだ。

これは現時点ではまだ秘密のつもりだったんだけど、相性のいいカードは手札によく来たり、レベルアップやランクアップにもある程度影響してくる。

別に相性の悪いカードが弱いわけじゃないけど、どちらかと言えば相性のいいカードの方が強くなる可能性も高い。

まあこの辺はカード同士の相性（シリーズ物で、頭に共通の文字がついてるカードとあるでしょ？）もあるから一概には言えないけどね。

で、今回のカードの変化についてだけど、こちらではカードの『成長』って呼んでる。カードが成長するには夫々条件があるんだけど、基本的に相性のいいカードの方が成長はしやすい。

後、良く使うカードも成長はしやすくなる。

で、その条件なんだけど、一つにカードとの絆があるんだ。

どれだけカードを大事に扱ってるか。どれだけカードを、デッキを信用しているかだね。

そして、プレイヤーが心から望んだ時、カードがその思いにこたえてくれれば、プレ

イヤーの願う姿に成長することがある、ってわけ。

ちなみにカードがどんな成長をするかはその時の状況によって全然違うし、一度成長したカードはそのレベルではもう成長しないからね。

今までは、早くて20階のボスやそれ以降だったから、こんなに早くカードの成長が起ると思っていなくてとても驚いてる。

それだけカードとの相性が良かったのか…、カードを大事に扱ってきたかだね。

ま、ともかく、今回の件はそういったことだよ。

この事を掲示板に乗せるかどうかは君にお任せするけど…、中には残念ながらカードを大事に扱ってくれてない人もいるからね。そんな人たちはきつとカードを成長させることはできない。

だから、よく考えて決めてね。

個人的に君の事は注目してるから、これからも頑張つてね。

管理人

PS

成長の第一発現者としてポーナスDPを上げるよん。

他にも最速ボス攻略者とかにもポーナス上げてるから、よかつたらチャレンジしてみ

てね☆

DP交換スキルも増えてるから必ず確認してね

…ふむ。

つまりは俺がカードを大事に扱ってきたから、カードが思いにこたえてくれたって事か？

俺からしたら、そんなに大事に扱ってたつもりはないんだけどな。

そりや実現化した獣系モンスターをモフモフしたり、人型モンスターに話しかけてみたり（返事は帰ってこない）はたまにしてたけど…。

後にはできるだけ相打ちにはならない様にしてたぐらい？

何で条件を満たしたのかは分からんけど、まあ、自分のやってきたことが評価されたみたいで少し嬉しい。

とりあえずはこの話を掲示板に乗せるかどうかだが、まあ、上げてしまってもいいだろう。

どうせ直接会うことは無いだろうし、信じる信じないはその人次第だし。

もし、いちゃもん付けてくる人がいたら、次に新情報を得ることがあっても教えなけ

ればいい。

そう決めた俺は、パソコンの画面から掲示板を開いた。

13話

136

だよなあ…

137

✓ 131

俺も欲しい!!

138

新情報：カードの成長

条件：カードとの絆。プレイヤーが心から望んだ時、カードがそれにこたえる形で成長

実例：レベル1通常モンスターカードが効果モンスターカードに変化した。

139

✓ 135

かといって諦めるのも悔しい。

何かいい方法ないのか…

140

ん？新情報？

141

カードの成長？まじで？

142

カードの成長？ま？

143

え？これ本当ですか？

本当なら3回まわってワンって言うてください。

144

条件がカードとの絆って何だよw

145

絆???

146

ガセネタ乙

147

∨
143

ww

148

まじか!?!?すげーすげーすげー!!

149

流石にガセじゃないのか?

条件が抽象的すぎる。

150

不動遊☆「俺は、俺のデツキを信じる!ドロー!!」

151

ガセかどうかは検証班が検証してくれるだろ(丸投げ)

152

妄想乙

153

本当なら面白いですよ

ちなみに138さんはどんな状況でどんな効果に変化したんでしょう?

154

俺、今日からもう少しカードたちに優しくしてやろう。

155

ガセに決まってるだろーが!!

156

✓154

優しくってどんな風に？

157

ガセと決めつけるのも良くない。しかし完全に信じるのもどうか…

158

✓156

一緒に布団で寝る？

159

✓158

www

160

✓158

wwww

161

∨ 158

wwww

162

∨ 158

ww

とりあえず掲示板に上げてみたが、反応はまちまちだな。

ま、信じる人だけ信じてくれればいい。どうせ信じてないのは普段カードを大切にしない連中の可能性が高いし。

さて、カードの成長についてはこれくらいにして、次は10階をクリアしたことで解放された『レベルアップシステム』について詳しく見ていこう。

パソコンのメニュー画面から、『カードのレベルアップ・ランクアップ』を選択する。すると画面が変わり、俺の持っているカードの一覧が現れる。

試しに一番上にあつたベビー・バードを選択。

【いづれかを選択してください レベルアップ ・ ランクアップ】

先ずはレベルアップを選択すると、画面に4枚のカードが横並びで映し出された。

左端はベビー・バード（カラー）。+の記号を挟んで、7階辺りで手に入った鳥獣族モンスターのカード（白黒）。

さらに+記号を挟んで真つ黒なカード。最後に||の記号を挟み真つ黒なカード。その上にはレベル2の文字が。

これは、左の3枚のカードを合成することで、新しいカード（レベル2のカード）になりますよという事だ。

ベビーバードが色付なのは現在持っているカードだから。7階辺りで手に入ったカードは、DPに変えてしまい今は持っていないから白黒。所持したことはあるが現在は持っていないカードという事だ。

そして真つ黒なのは、今まで所持したこと無いカードという意味だ。

この辺は掲示板情報である程度で回っている為知っていた。

そして合成に必要なもう一枚のカードは1階層以降で出てくるという情報も入手済みだ。

今はカードが足りないから確認だけして一旦戻る。

次にランクアップを選択する。

システム名は『レベルアップシステム』とあるが、実はレベルアップだけではなくカードのランクを上げることにも出来る。

ランクとは、そのカードのレア度の事らしく、N（ノーマル）、R（レア）、SR（スーパーレア）、UR（ウルトラレア）の4ランクあるらしい。

ランクが上がることで、レベルアップと同じくカードの能力がアップするらしい。『らしい』というのも、実は誰もまだランクアップできたプレイヤーがいないのだ。

管理人への質問である程度の情報を得ただけの状態の為、どれほどのパワーアップが行われるのかは分からない。

だが、どちらかと言えば攻撃力や防御力の直接的な数値より、強力な効果を得ることの方が多いとの事。

このランクアップ、現在10階攻略者の情報では、みんな必要カードがベースのカード以外黒塗り状態で、どんなカードが必要なのか一切分からない状態なのだ。

だから掲示板では、今の時点ではランクアップは不可能なのでは？との見解もある。

まあ今回の『成長』の様に、他にも何か隠された要素がある可能性もあるし、条件を満たさないだけの可能性もあるから、決めつけは良くないだろう。

ってことで、確認を終えたら次はDP交換リストチェック。

10階をクリアすることでリスト内容が増えるってあったし、割と楽しみ。

ワクワクしながらリストを見ると、ふむ。

追加されたのは大体スキル関係が多いようだ。

他にも日用品の追加が少々あるが、この辺はプレイヤーからの要望があつたから追加したと思えるようなものが並んでいた。

その中で目についたものを一つづつ確認し、将来的に交換するものリスト（脳内）にメモしていく。

日用品・家電・嗜好品と眺めていき、スキル一覧。
ふと目についた一つのスキル。

成長促進Lv1 1000DP

基本的に交換リストには名称のみ書かれており、どんな効果なのかは実際に交換してみないと分からない。

文字からして非常に有用そうな気はするんだけど……どのみち今はDPを使い切つてから交換できない。

と思つたら、成長発現者ボーナスでDP貰つてるんだつた。

所有DPを見ると1万とちよつと。ボーナスで1万DP貰えたみたい。ラッキー。
少し悩んだけど、どうしても気になるので交換することにした。

ついでに並んで表示されていたもう一つのスキルも入手。

デュエリストアイlv1 1000DP
基本レベル1スキルは1000DPがほとんどの中で、0が一個多いんだから、かなり
有用なスキルだと推測する。

スキルを入手した時点で、このパソコンで詳細を見れるようになるので確認する。

成長促進Lv1

カードの『成長』を早める

デュエリストアイLv1

モンスターの表示形式が分かるようになる

…えー…つと。カードの、成長…？

これって、つい今しがた説明があった『成長』のことか？

え？成長を早めるってどういうこと??

詳細を見ればどんなものか分かるかと思っていたが、余計分からなくなつた。

「とりあえず、管理人に聞いてみるか。」

そう考え、『管理者への質問はこちら☆苦情は受け付けないぞ★』のボタンを押し、質

問内容を入力する。

このスキルがベビー・バードの『成長』に関わるスキルならおそらく俺以外のプレイヤーにはこのスキルが一覧に出ていない可能性もある。そう考えれば掲示板で聞くよりも直接管理人に効いた方がよい。

へ成長促進スキルについて、もう少し分かりやすい説明をお願いします。〜

ピンポン♪

こちらからメッセージを送った瞬間に、メッセージが届く。中身は管理人からスキルの件について。

…こいつ絶対見張ってやがる。

早速スキル取ってくれたんだね。

そのスキルは君の考えてる通り、成長を発現させた人にしか取れないスキルになるよ。

で、分かりやすい説明だったね。

君が初めて成長を発現させた時は、きつと本当に切羽詰まった状態だったと思うん

だ。

成長が発現する為にはそういったシチュエーションが必要だから。

で、このスキルを持っていると、その条件が緩和されるんだ。

例えば、本来は絶体絶命の大ピンチ！って時にしか発現しないけど、ちよつとピンチ！何とかならないかな？ってレベルでも他の条件を満たしていれば発現するようになるんだ。

レベルを上げればもつと条件が緩和されて、ピンチじゃないときでも君が望めば成長してくれるようになるかも?!

つと、ちよつとしゃべりすぎたかな？

ま、そう言う事だから、がんばってね♪

PS

君ならいつでも質問してきていいよん

(しつこい連中は着信拒否してるけど)

なるほど、これは良い事を聞いた。

スキルレベルを上げればより成長が起こりやすくなる、か。

これはかなりのアドバンテージになるんじゃないか？

他のプレイヤーには悪いけど、第一発現者の権利として、有効活用させてもらおう。

早速スキルのレベルアップを図る。

レベル1で1000DPだったが、レベル2は2000DP。レベル3にしようと思っただけなら5000DP必要だ。

ちなみに、マッピングなどの一般スキル入手の必要DPは、

レベル	1	2	3	4	5	6	7	8	9
DP	1000	2000	5000	10000	20000	50000	100000	200000	500000

10 100000
となつてゐる。

スキルはレベル順に取らないとダメなようで、一気にレベル1からレベル4まで飛ばしてゲット。とはできない。

なので、例えばスキル所持状態からレベル5まで上げようとするなら、DPが3800必要ということになる。

今回の成長促進はレベル1の状態が必要DPが1000と、普通のスキルの10倍になつてゐる。

ということとは、おそらくこのままいくと、レベル10の必要DPは100万ということだろうか。

余りの額に目が眩むが、どうせまだまだ先の話だろうし、今は記憶の隅にとどめておくぐらいにしよう。

余裕が出来たらマッピングとかのスキルもレベル上げたい。

さて、ボーナスで貰つたDPは1万。その内2000を使用して『成長促進』と『デュエリストアイ』を交換した。

で、残り8000DPの内、さらに4000DPを使用して、二つのスキルをそれぞれレベル2に上げる。

成長促進Lv2

カードの『成長』を早める

デュエリストアイLv2

モンスターが表示形式が分かるようになる

モンスターの増援タイミングが分かるようになる

成長促進は表示に変化ないけど、おそらく効果は上がっているんだろう。
で、デュエリストアイは……微妙？

14話

思ったより微妙そうな効果のデュエリスタイを見て気分も微妙になる。が、気を取り直して他に必要な物を交換していく。

多分レベルを上げれば良い能力になるはず!……だといいな。

あらかた必要な物を交換し終えて、忘れていた昼食のパンを食べながら（朝一で10階チャレンジしたので拠点に帰って来たのはお昼過ぎ）掲示板を覗く。

11階以降の情報に目を通しつつ、出てくる魔物や落とすカード等の情報を仕入れていく。

そしてスキル関係についての情報を眺めていた時それは現れた。

666

おい!!デュエリスタイ、1000DPだから強いと思つて取つてみたけどまじ使えねえじゃねえか!（怒）

667

あー、お前もあのスキル取ったのか

御愁傷さま(一人)

668

(一人)

669

(一人)

670

(一人)

671

おい!そんなにひどいのかよ!?

672

(一人)

673

∨666

過去ログ嫁

1000DPのくせに全然使えない地雷スキルって乗ってるぞ

674

1レベで攻守表示、2レベで増援タイミングで、3レベが効果モンスかどうか分かる

だけ、だっけ？

6 7 5

∨ 6 6 6

つてか縁起の悪い数字だな w

6 7 6

L v 1 魔物が攻撃表示か守備表示かがわかる

L v 2 千日手状態時の魔物増援のタイミングがわかる

L v 3 相対した魔物が効果モンスターか通常モンスターかが分かる（効果の内容は分からない）

L v 4 無し

6 7 7

∨ 6 7 6

おっ、センキュー

∨ 6 7 5

確かに w

6 7 7

レベル4の無しって何よ？

678

試しに取ってみた人が言うには、レベル3から変化がなかったそうだ。
ただ次にレベル5が出てきてたことから、何も効果が得られないレベルもある可能性
あり

679

レベル5、早く取ってくれないかなー(汗) チラッ

680

∨679

つLv5必要DP20000

681

www

4レベルの10000でもきついのにな

てかよく4まで上げたな

ま、まじか…。

せっかく取ったスキルがまさかそんな地雷スキルだったとは…。

『デュエリストアイ』のスキルは、10階をクリアした人に追加でリストに現れるスキルの中の一つなので、試しに取ってみた人も何人かいたみたいだ。

だがその効果は芳しくないようで、今のところ完全に外れスキル扱いされていた。

「くそっ…、いいよーだ、俺は俺のやり方で行くし！きつと高レベルになったらすごい効果になるに違いないし！」

半ば自分に言い聞かせるように言う。

なんだかやるせない気持ちになった俺は、今日はもうダンジョンに潜るのをやめ、拠点でゆっくりすることにした。

…次からはスキルを取る前に掲示板で確認しようと心に決めながら。

次の日

昨日のミスは昨日でおしまい！気持ちを切り替えて今日も探索頑張ります！

さて、今日から11階に行くわけだが、ここで掲示板情報のおさらい。

なんと11階からはプレイヤーによって色々と違うらしい。

まずフィールド。1階から10階は全プレイヤー洞窟で統一されていたが、11階からはそれぞれ違うらしい。もちろん何人かは似たフィールドの人もいるらしいが、基本的には全く同じものはないらしい。

曰く草原だった。また曰く森の中だった。またまた曰く10階までと同じく洞窟だった。と。

どういう基準で決まっているのかはわからないが、今までのように情報交換しながら進むことは難しくなっている。

次に出てくる魔物。これも人によって違う。どうもそのフィールドに合った魔物が出てくるようで、草原ではウサギやトラ、森ではイノシシやクマ、洞窟では蝙蝠や岩石系などの魔物が出てくるとのこと。

さらに各魔物が落とすカードもそれぞれ微妙に違うらしく、10階までと比べると種族や属性にある程度の偏りがあるらしい。

ただ落とすカードはある程度同じものもあるようで、全プレイヤーが全員違うカードを入手して訳ではないみたい。

また、落とすカードの中に魔法カードや罠カード、さらには効果モンスターカードも出てきたみたいで、当時掲示板は大盛り上がりだったが、カード効果がしょぼかったのと、人によっては全然出てこない人もいる等の理由から盛り上がりは一気に終息して

いった。

掲示板の内容と、管理人の言葉から推測するに、おそらくこれは『相性』によるものなんだろう。

落とすカードがそれぞれのプレイヤーにとって相性のいいカードが手に入りやすくなり、そのカードを落とす魔物が出てくるフィールドが選ばれるって感じなのかな？
ま、ここで考えても仕方ない。すべてを知るのは管理人だけなんだし。

転移機能を使って10階へ転移する。

もちろん転移の羽も交換済みだ。

透明のクリスタルの前に転移し、後ろを振り向くと、大きく『9』と書かれた扉が。反対側の壁には同じく『11』と書かれた扉。

11の方の扉はおそらくボス戦終了後に現れたんだろう。

9の扉も、ボス戦後に迷わないようにって配慮なんだろう。ありがてえ。
早速11と書かれた扉へ進む。

(さて、この先にはどんなフィールドが待ってるかな?)

期待に胸を膨らませ、思いつき扉を開けると、

(……そりやそうだな。)

11階へ続く階段があつた。

階段を下り、ついた先は見渡す限りの平原だつた。上を見上げれば青空まである。

振り返ると、辺りに何も無い場所にポツンと上へ向かう階段がある。しかも途中で途切れて見えなくなっている。

違和感バリバリだ。

ま、異世界特有の不思議パワーが働いてるんだらうと考え、意識を草原へと向ける。

…本当に何も無い。

そういえば掲示板で『11階からは1階の広さが半端なく広くなる。』って書いてあつたけど、どうやらその通りのようだ。

こんな時、普通ならやみくもに歩けばすぐ迷子になつてしまふところだけど、俺にはマツピングのスキルがあるし、何より帰還の羽がある。

とりあえず、ある程度ウロウロしてマップを埋めるのが先決かな？

そう考えた俺は、とりあえず今日は1方向にひたすら真つすぐ進んでみる事を決め歩き出す。

(マップで感知できる範囲ギリギリに魔物が一匹いるな…。じゃあ今日はこの方向に進

んでみよう。(

しばらく進むと、魔物もこちらに気づいたのか、マップ上の光点がこちらに近づいてくる。

(そろそろ遭遇するはずだが…姿が見えない?)

マップを見る限りではもうとつくにその姿が見えてもおかしくないのに、一向に見当たらない。

ついにマップ上で光点と重なるうというとき、足元から不穏な音が聞こえてきた。

シャアー…

慌てて足元を見ると、そこには一匹の蛇がいた。

「っ!!?」

蛇は舌をチロチロと出しながらこちらの様子をうかがっている。

驚きで一瞬思考が停止してしまっただが、すぐに冷静になりバックステップで一旦距離を取る。そして、

「デュエル!俺のターン、ドロー!!」

慣れたもので、すぐに体制を整えデッキからカードをドローする。

【 邪蛇 A300 D300 攻撃表示 】

ボロット 星1 機械族／通常モンスター

A 3 0 0 D 3 0 0

影トカゲ 星1 爬虫類族／通常モンスター

A 3 0 0 D 2 0 0

戦士の卵 星1 地 戦士族／通常モンスター

A 5 0 0 D 2 0 0

初期手札2枚プラス先行ドローで3枚。

相手はA3000で攻撃表示か。

「俺は戦士の卵を召喚。攻撃だ！」

「……」

戦士の卵の攻撃で邪蛇（じゃじゃ？読み方わからん）は倒れた。
手に入れたカードはこちら。

邪蛇 星2 爬虫類族／効果

A300 D300

このモンスターが攻撃を行ったターンのエンドフェイズ時、攻撃を受けたモンスターが破壊されなかった場合、そのモンスターは守備表示となり表示形式を変更できない。この効果は次の自分のスタンバイフェイズまで続く。

…うん、微妙に使いにくい？

このモンスターが攻撃を行った場合のみ発動する効果だから、使い道としては、D300以上の守備表示モンスターにわざと攻撃して、次の相手ターン守備表示固定させるか、自爆特攻で攻撃して攻撃表示から守備表示に変えさせるかのどちらかか。

どちらの場合もプレイヤー自身がダメージを受けることになる(D300以外)から、使うことは無い…か？

上手に合わせれる魔法カードや罠カードでもあれば使えるかもしれないが…。
今のところは特にないな。

ま、能力だけ見てもADともに300だからデッキに入れるのもいいね。
もう少し探索して、ほかのカードも確認しながら考えよう。

15話

邪蛇と戦闘後、もう少しだけうろついて帰還の羽で拠点へと帰った。

時間はさほど立っていなかったが仕方ない。

あれから数度邪蛇との戦闘があった。

見渡す限り何もない草原だと思っていたが、意外と足元には草が茂っており、足元から音もなく近づかれたら気づきにくい。

そのことに気が付いてからは、光点を見つけたらできるだけ足元に気を付けるように心掛けた。

そして数度の戦闘の後、新たな魔物が現れたわけだが、それがこちら。

スリープシープ 星2 獣族／通常モンスター

A400 D800

見た瞬間まず逃げることを考えたよ。

つてか戦闘に入ったら逃げられるのか？管理人にでも聞いてみよう。

で、たまたまこいつが攻撃表示だったのと、最初のドロウでベビー・バードを引けた

ことが幸いし、ボスの時と同じ戦法で戦士の卵を特殊召喚して倒すことができたけど、ほんとに焦ったわ…。

入手カードは本人（本獣？）のカード。

基本的に初めて倒したときはその魔物のカードが手に入るのかな？

とりあえず、こんなモンスターが出てくるところを今のデッキのままであらうつくのは自殺行為だと考え、一旦拠点に戻ることにした。

蛇から手に入ったカードは今のところすべて蛇のカードで、他の種類は出ていない。なので、この蛇のカードとスリープシープのカードをデッキに加え、蛇が他のカードを落とすまでしばらく狩り続けるのがベストだろう。

掲示板情報では1-1階層で落とすカードが、初期カードのいずれかのレベルアップ素材に使用できる（今のところ100%）らしいし。

1枚でもレベルが2になって能力が上がればだいぶ違うだろう。

ちなみにデッキ枚数の制限は、最低20枚、最高40枚だ。蛇と羊のカードをデッキに入れるとき、能力の低いカードを抜こうかどうか一瞬考えたが、ここまで共に戦ってきてどのカードにも大分愛着が湧いている。それに『成長』というシステムがある以上、もしかしたら化けてくれる可能性だってあるので、デッキから外すことはしないことにした。

拠点に戻り少し休憩した後、再びダンジョンへと戻る。

そういえば管理人に問い合わせたところ、一度デュエルが始まると逃げることはできないとの事。

後もう一つ、ついでにと教えてくれたのだが、一度ダンジョンに入つてすぐ拠点へ戻り、再びダンジョンに入った時、システム上ドロをし直せることになるが、引くカードは変わらない（拠点に戻る前に引いたカードと同じカードが出る）そう。

これは以前とあるプレイヤー（自分たちより前に来た人たち）が、いいカードが出るまで転移を繰り返すことでベストの手札で探索を始めようとした事があつたらしく規制されたそう。

ただ、一度ダンジョンに入ってから約1時間でリセットされるそうなので、しようと思えば『ダンジョンに入る↓ドロ↓手札が悪い↓拠点へ転移↓一時間拠点で待機↓再びダンジョンへ入りドロ↓さつきとは違うカードがドロできる』とできるが、そこまでしても欲しいカードが手札に来るかランダム（&カードとの相性など）なので、それなら多少手札が悪くても普通に探索したほうが良い。となつたらしい。

一応掲示板にも乗っているらしいが、俺がその記事を見てなさそうだった為教えてくれたとの事。

(…若干ひいき入ってる？ほかの人たちに対してはどうなんだろう？)

ま、ひいきしてもらえるならそれを有効活用するだけだ。ありがたく使わせてもらおう。

それからしばらく、蛇退治を繰り返し、蛇以外に2種類のカードを手に入れたが、いづれもカードの合成素材には使用できないカードだった。

(こうなったら、羊に手を出すしかないか…あんまり乗り気じゃないけど…)

蛇が合成用カードを落とさない以上、可能性があるのは羊又はまだ見ぬ魔物しかない。

気乗りはしないが、さつきみたいに倒せるタイミングを見極めて慎重に戦っていくしかないか。

いったん拠点に帰り、蛇から手に入れたカードをデッキに加える。

飛びうお 星2 水 魚族／通常モンスター

A400 D600

木炭人 星2 炎 炎族／通常モンスター

A300 D700

攻撃力は高くないが、防御力はかなり高い(現状)。ただどちらもスリープシープと比べると下位互換だけ。

ほんのりとパワーがアップしたデツキを使い、羊を探すべくダンジョンへ潜る。

途中何匹か蛇と戦い、そしてついにその姿を見つけた。

「スリープシープ A400 D800 守備表示」

あつ、こりや駄目だ。と思い、他の羊を探すべくその場から立ち去ろうとした時、黙々と足元の草を食べる仕草をしていた羊が突然顔を上げこちらを見つめてきた。

「……………」

「……………」

こちらが一步下がると向こうは一步進んでくる。こちらが一步進んでも向こうは一步進んでくる。

これ、完全にロックオンされちゃってるじゃん。

表示形式は変わらず守備表示。デュエル中に攻撃仕掛けてくれるのを願うか…。と諦めのため息をつきつつじわじわと近づいてくる羊に対して宣言。

「デュエル。カードをドロ。」

修行中の見習い天使 星1 光 天使族／通常モンスター

A300 D300

恐竜ベイビー 星1 恐竜族／通常モンスター

A 3 0 0 D 2 0 0

もろ石 星1 地 岩石族／通常モンスター

A 2 0 0 D 4 0 0

「俺はモンスター（もろ石）を守備表示でセット。ターンエンドだ。」

俺がターンエンドすると同時に、羊の頭上（A Dの数値が出ている横らへん）に一本のバーが現れた。

（なんだあれ？今まであんなものあつたっけ？）

俺の疑問をよそに羊は特に何も行動を起こさず、守備表示のまま動かない。

そして俺にターンが回ってくる。

（攻撃してくればまだ何とかなる可能性はあるんだが…）

問題は守備力が高いことなのだ。現在の俺のデッキのカードであるの防御力を突破することはできない。

攻撃表示にさえなってくれば、A 4 0 0以上のカードで倒せるのだが。

「ドロー。」

スモール・キャット 星1 風 獣族／通常モンスター

A 2 0 0 D 2 0 0

む…。

「モンスター（修行中の見習い天使）をセット。ターンエンド。」

ターンエンドを宣言すると、羊の頭上のバーがぎゅいーんと動き出す。

（ホントになんだあれ？このままいくと次の俺のターンの終わりににはゲージが溜まるよ
うn:!!!）

このタイミングでゲージが溜まる。今までこんなバーはなかった。

そのことから考えられる可能性は、このバーが『増援タイミング』ではないか？ということだ。

（蛇は先手必勝で倒してたし、以前10階より前の階で守備表示で魔物を出した時にはこんなバーはなかった。なら考えられる可能性は一つ。このゲージが溜まり切ったら増援がやってくる!!）

デュエリストアイLv2の効果『魔物の増援タイミングがわかる』である。

普通なら増援が来た時点でほぼなす術なく負けてしまうので、タイミングが見えたところで意味がないと、掲示板では使えないスキル扱いされていた。

（だがタイミングが分かったところでどうにもできん!）

羊は依然として動きを見せず、守備表示のままこちらにターンが回ってきてしま
う。

「（くそっ!）カードを、ドロー!」

戦士の卵 星1 地 戦士族／通常モンスター

A500 D200

引いたのは、いつでも頼りになるデッキ内最高攻撃力モンスター。

だがいかにデッキ内で攻撃力が最強だろうと、今の状況をどうにかすることはできない。

「戦士の卵を攻撃表示で召喚。…ターンエンド。」

そしてついにバーのゲージがいっぱいになる。

俺のターン終了後、それまで特に動きを見せなかった羊が急に顔を空に向け鳴き始めた。

メ〜、メ〜。

すると、どこからともなく羊が一匹現れ、先ほどまで鳴いていた羊のそばへとやってきた。

「スリープシープ A500 D800 攻撃表示」

まじかよ…。

バーが増援のタイミングという考えは当たっていたが、それが分かったところでどうしようもない。

さらに現れた羊の攻撃力は100アップしている。

状況はかなり悪化している。

だがこの増援、ルールでいうところのエンドフェイズに発動されるらしく、すぐに俺にターンが回ってきた。

(どうしたら…ん？あれ？増援バーのゲージが0に戻ってる…まさか!?)

ふと目に入った増援タイミングが分かるようになるバー。先ほどMAXまでそのゲージが溜まったばかりだが、2匹目の羊が現れてからは0へと戻っている。

これを、もう増援が出なくなると考えるのは少々浅はかだろう。

十中八九また増援が出るだろうと考えると、状況は悪化どころではない。ほぼ詰みだ。

(まじかよ…。だがボスの時だつて絶望的な状況から勝利できたんだ。それに今回は成長促進のスキルだつてある！ここはデッキを、カードを信じるしかない!!)

「俺のターン！ドロー!! (頼む!!)」

弱き力の悪霊 星1 闇 悪魔族／効果

A300 D300

このカードが戦闘で破壊されたとき、このカードを破壊したモンスターの装備カードとすることができる。

このカードを装備したカードの攻撃力・守備力は、このカードの元々の攻撃力・守備力の半分の数値分ダウンする。

俺の願いが通じたのか、引いたカードは『成長』し、通常モンスターから効果モンスターになっていった。

「(だが…、これは賭けだな。でもやるしかない!)俺はモンスターをセット。ターンエンドだ!」

増援でやってきた羊がこのカードを破壊すれば、相手の攻撃力は350まで下がり、A500の戦士の卵で倒せるようになるが、もし最初の羊に倒された場合は、増援の羊と戦士の卵が相打ちするしなくなる。そうなればデッキからA400のカードを引き当て、最初の羊と相打ちにするしかない。

どうにかうまく攻撃を仕掛けてくれることを願う俺だったが、実はこの時重大なプレイングミスをしていた。

弱き力の悪霊の効果が発動するのは『戦闘でこのカードが破壊された時』だ。つまり相手からの攻撃でなくとも、自らの攻撃で破壊された場合でも効果は発動するのだ。

もちろん攻撃力の差分自分のライフも減ってしまうが、確実にA500の羊に装備させることができる。

このことに気づかなかつたせいで、俺はさらなるピンチを迎えることとなる。

16話

俺はターンを終了した瞬間戦慄した。

それは自分のプレイングミスに気付いたからではない。

なんと、羊の頭上に見える増援タイミングが分かるバーが……MAXになっていたのだ。

(おいつー！おいつー！嘘だろ!!?)

何度見直しても見間違いなどではなく、確実にゲージは一杯になっている。

実はこの増援システム。プレイヤー側が守備表示をして動きがなければ溜まりやすくなっており、さらに先ほどのターン、カードの成長に気を取られて気づいていなかったが、なんとターン開始時点でゲージが半分まで溜まり、守備表示モンスターを出しターンエンドしたことによって、残りの半分のゲージが溜まってしまったのである。

ただ、今の時点ではプレイヤー間で情報は出ていないことだが、プレイヤー側から攻撃を仕掛けることによって、(千日手状態にならないように行動を起こすこと※こちらの攻撃と相手の防御が同数値の場合は除く)増加量が緩和される為、先ほどのプレミさえなければ、増援バーも溜まることなく、羊たちを倒しきることができていたはずな

のである。

いくら毒づいても羊は待ってくれない。

まずA400の羊が修行中の見習い天使を攻撃。

「メーツ！」

「!!」

見習い天使の防御力は300の為破壊されてしまう。

次に増援で現れたA500の羊。

どちらに攻撃するか考えているようだったが…

「メーツ！」

「オオオ…」

選ばれたのは弱き力の悪霊。こちらも防御力は300の為破壊される。

「この瞬間、弱き力の悪霊の効果発動！このカードを破壊したモンスターは装備カードとなり、その攻撃力・防御力をこのカードの攻撃力・防御力の数値の半分ダウンさせる！」

「スリープシープ A500↓350 D800↓650」

当初の目論見通り、A500の能力を下げることはできたが…。

攻撃終了後、2体の羊はまた空へ向かって鳴き始めた。

メ〜メ〜。メ〜メ〜。

…エ〜、メエ〜。

「スリープシープ A600 D800」

どこからともなく鳴き声が聞こえてきて、気が付けば2体の羊のそばにもう一体の羊が。

(攻撃力600!?また上がりやがった!)

せっかく弱き力の悪霊の効果を発動したのだが、それ以上に攻撃力の高いモンスターに出てこられては意味がない。

(このままじゃ…、いや、まだだ!まだ諦めん!!)

「俺のターン!ドロー!!」

さらに悪化したこのピンチ。だが最後まで諦めるつもりはない。

ボロット 星1 機械族/効果

A300 D300

自分の場のモンスター1体を対象に発動可能

手札のこのカードを対象カードの装備カードとして場に出すことができる

このカードが装備されたモンスターの攻撃力・防御力は200アップする

「(来たっ!!) 俺は、手札よりボロツトの効果発動!対象は戦士の卵!」

するとフィールドにボロツトが現れ、日曜朝の特撮系番組に出てくる合体ロボットのごとくその体を変形させ、まるで鎧のような姿となり戦士の卵にガシンツ!と装備された。

「戦士の卵 A500↓700 D200↓400」

「よし!戦士の卵で攻撃力600の羊を攻撃!!」

「!!」

手に持った剣を羊に振り下ろし見事撃破。

「モンスター(恐竜ベイビー)を一体セットし、ターンエンドだ。」

これで戦況が動き始めた。

攻撃を仕掛け撃破したことにより、このターンは増援ゲージはほんの少ししか増えることはなかった。

これならいける!と置いていた俺の目の前で、2体の羊は守備表示となる。

いくら戦士の卵の攻撃力が700まで上がったとしても、結局は守備力800を突破しなければ倒しきることはできないのだ。

このままでは再び千日手状態となり、増援が追加されてしまう。おそらく今度はA700まで上がるだろう。

しかしそんなピンチにも俺の心は落ち着いていた。

(状況はよくないかもしれない。でも今は流れが来ている。今ならきつと!!)

羊が表示形式を変更したので俺のターンが回ってくる。

「(これで、決める!) ドローツ!!!」

レッサーワーウルフ 星1 風 獣戦士族/効果

A400 D200

1ターンに1度、自分のバトルフェイズ時に発動可能。

自分の場のこのカード以外の表側攻撃表示モンスターを一体墓地へ送る。

このカードの攻撃力は、この効果で墓地に送られたモンスターの元々の攻撃力分、バトルフェイズ終了までアップする。

「俺は、レッサーワーウルフを攻撃表示で召喚!そして戦士の卵で、弱き力の悪霊が装備されたスリープシープを攻撃!」

攻撃力・防御力ともに150ダウンしているため、戦士の卵の攻撃でギリギリ倒せる。

「そして、レッサーワーウルフの効果発動!戦士の卵を墓地に送ること、その元々の攻撃力である500ポイント分このカードは強くなる!」

「レッサーワーウルフ A400↓900」

戦士の卵の力を受け継ぎ、レッサーワーウルフはその体を巨大化させた。

その大きさは元のサイズの約2倍。

「とどめだ！レッサーワーウルフで攻撃!!!」

「ワオーン!!」

「メエエ……」

巨大化した狼の攻撃を受け、羊は霧となって消えていった。

「……………」

3体の羊がすべて倒されたのを見届け、少し気が緩んだ俺はその場で後ろに倒れこむ。

心地よい風が頬を撫でる中、傍で静かに佇む自分の大切な仲間たちの姿を見て「勝ててよかった……」と思う。

流石に今回は危なかった。

思い返すと完全なプレイングミスもあったし、タイミングよくカードたちが成長してくれなければ決して勝てない相手だっただろう。

それだけカードたちからは信頼してもらっていると考えると嬉しく思うが、裏を返せばまだまだ自分は実力不足だということだ。

カードたちの期待を裏切らないように頑張らないとな。

しばらく寝転がったままで芝生のベッドをすっかりと堪能した俺は、羊たちが落としたりカードを回収し、一旦拠点へ帰ることにした。

入手カード

スリープシープ 星2 獣族／通常モンスター

A400 D800

2枚

くちばし鳥 星2 鳥獣族／通常モンスター

A400 D700

1枚

17話

拠点について俺は、先ほど羊たちが落としたカードを改めて眺める。

くちばし鳥 星2 鳥獣族／通常モンスター

A400 D700

掲示板の情報と管理人から聞いた相性の話。そしてこのカードの種族が鳥獣族であること。

俺の頭の中では確信めいた考えがあった。

普段より心臓の音が早いを感じつつパソコンへ向かい、『レベルアップ・ランクアップ』のボタンを押す。

前回確認した時と同じように、俺の所持カード一覧がずらりと並ぶ。

その中からベビー・バードを選択。さらにレベルアップを選択。そして「っ!!」

開いた先のページを見て体中がゾクゾクってなった。

表示された画面にはベビー・バードのカードと、つい今しがた手に入れたばかりのくちばし鳥のカードがカラーで映っている。

「いよっし!!」

これに7階あたりで手に入るカードを加えれば、ついにカードのレベルを2に上げることができ……!

椅子の背もたれに寄りかかり、これまでの事を思い出す。

…ああ、イロイロあつたなあ…。

まるでアニメや漫画の最終回直前の回想シーンみたいな雰囲気を出してしまう。

が、当然俺たちの戦いはまだまだこれからだ!

アホなことを考えるのをやめ、さっそくルンルン気分でもう1枚の合成素材となるカードをゲットする為ダンジョンへと潜っていった。

数時間後

浮かれて出ていった為、帰還の羽を忘れるという失態を犯す。

おかげでお目当てのカードを手に入れてから徒歩で帰る羽目になった。

ついでにもう夕方になるのに、お昼ご飯もまだ食べていない。

結構前からぐーぐー鳴っているお腹をさすりつつも、まずはパソコンへと向かう。

(別に楽しみは先にしてしまうタイプって訳ではないけど…さすがにこればかりは

な。

要は我慢できないのである。

パソコンのメニュー画面から先ほどと同じようにベビー・バードのレベルアップ画面を出す。

画面に映るは色のついた3枚のカード。そしてその右横にある真つ黒なカードも「OKだよ!」と言わんばかりに縁が光っている。

心を落ち着けて、画面の下のほうにある『合成開始』ボタンを押す。すると

「この3枚のカードを合成します。※一度合成したカードは戻ってきません。よろしいですか?」

と確認のメッセージが出たので、迷うことなく『はい』を押す。

【所定の3枚のカードを挿入口に入れてください】

再びメッセージが出るとともに、パソコンとつながっている機械の一部が「ガシヨン」と開き、3つの挿入口が現れた。

俺はデッキから3枚のカードを抜きだし、順番に穴へと挿していく。

最後にベビー・バードのカードを手に取り、

「…今までありがとう。これからもよろしくな!」

感謝の気持ち伝え、挿入口へと差し込む。

すると「ガシヤン、ガシヤン」と機械が動き出し、その後ペカーッと光ったかと思うと、先ほどカードを入れた挿入口の一つから一枚のカードが飛び出してきた。

セイント・ハート・バード 星2 光 鳥獣族／効果

A700 D800

このカードが戦闘により破壊され墓地へ送られた時、このカードのレベル以下のモンスターを1体墓地から特殊召喚することができる。

おおおお……。レベルが……。上がってる！

初めてのレベルアップに感動の涙が目にとまる。

(ADが500ずつも上がってるう！効果もそのままだし、お？属性が変わった？前は風だったような気がするけど。新しい名前は効果はかなり影響してそうな気がするな。なんにしても……)

「いやっほーい!!!」

両手を突き上げて体全体で喜びを表す。

ひとしきりニヤニヤしてカードをデッキに戻す。

「ふっふっふ……。これでもうあの羊も怖くな……。怖くない？」

舞い上がりテンションMAXだった俺だが、ふと冷静になってみるとあることに気づいた。

「…そういや羊の防御力800だったわ…。」

そう、レベルが2になったとはいえ、800もの防御力を誇る羊に楽に勝てるようになるには、攻撃力900以上のカードが必要なのだ。

だがそこまで落ち込むこともない。先の戦闘でデッキ内のカードの何枚かは成長し新たな力を得た。

今までと比べ取れる選択肢が大分増えているのだ。

「とりあえずは、羊が落とすカードが2枚だけなのかどうかの確認はしなとな。」

1-1階以降はプレイヤーによってそれぞれ違う。

敵が落とすカードの種類も枚数もみな違うのだ。

中には出てくる魔物すべてが3種類ずつ落とす、というプレイヤーもいれば、1種類ずつしか落とささないというプレイヤーもいる。

完全には不安は取り除けないが、それでも格段にデッキはパワーアップしている。

一応慎重に数戦した後、さっさと1-2階の階段を探して先に進もうと、頭の中で今後の予定を決める。

とりあえず今日は疲れたし、早めに休もうかな？

そう考えていたはずなのに、指は自然と『転移機能』のボタンを押し、気が付くと10階のクリスタルの前。

…だつて実体化した姿みたいじゃん!!

結局11階で蛇の相手をしつつ、セイント・ハート・バードが手札に来るまで粘った。で、実際召喚してみた感想は『美しい』。これに尽きる。

今まではその名前からもわかる通り完全に鳥の赤ちゃんだったが、ここで一気に成長した。

自分を犠牲にしても仲間を助ける（復活させる）その心が全身からあふれ出ているような感じがする。

だが中身はさほど変わっていないようで、召喚した戦闘が終了後、体を撫でてやると嬉しそうにすり寄ってきた。

かわいい。

カードたちとの触れ合い（？）を堪能した後は拠点に帰り、夕飯・風呂・掲示板といつものルーティンをこなし就寝した。

いや、俺の猫ちゃんの方が可愛い！

3 4 6

は？お前目ついてんの？俺のわんこの方が百倍可愛いに決まってんじゃねーか！

3 4 7

これだから素人は困る…。

僕のゴリラちゃんが一番だというのに。

3 4 8

いやそれはない

3 4 9

そりゃないわ

3 5 0

それだけはあり得ないw

3 5 1

w w w

3 5 2

ゴリラちゃんw w w

3 5 3

おいこら！なんでだよ！！

3 5 4

w w w

3 5 5

あのー、今来たんですが、どういことですか？

3 5 6

ゴリ w w

3 5 7

おつー

誰のカードが一番かわいいか競ってるの

お互いに見れないのになw

3 5 8

だから俺の猫ちゃんだったの！

3 5 9

いやいや、わんこだって言ってるだろ!?

3 6 0

ふ、みんなゴリちゃんの魅力がわからないとは…

3 6 9 ガタツ
3 6 8 ガタツ
3 6 7 ガタツ
3 6 6 ガタツ
3 6 5 あの一、僕のカード、バニーなんですけど。
∴ (; ω ; ;)
3 6 4 w w w
3 6 3 w w
3 6 2 w w
3 6 1 w w

ガtドンガラガツシャー

370

おいw

371

こけたw

372

ば、バニーガールだとう
!!???

373

3!!???

374

いや、バニーガールじゃなくてバニーちゃんです

375

ゆるせん!

376

許すまじ!!

377

爆発しろ!!

378

コメントは削除されました

379

バニーガールール!!!

380

だからバニーガールじゃないですってば

381

378は何言っただよ…

382

バニー祭りじゃー!!!!

プレイヤーたちの夜は長い…。

18話

次の日

今日も11階へと潜る。

昨日の戦闘でかなりデツキパワーは上がった。

(まだキツイようなら一旦上の階層でのDP貯めも視野に入れておいた方が良いか?)
敵しいようなら所持スキルのレベルを上げたり、新しいスキルを取る必要がある。

ちなみに生活の方はかなり充実しているので、今のところDPを費やす必要はあまりない。

細々した消耗品などに使用するくらいで、次にDPを貯める必要が有るのは、家電類をもう1ランク上の物に替える時だろう。

まあ、次のランクとなれば1つにつき1万DP必要になるからな。今のところ不便は感じてないし、まだ先の話になるだろう。

で、11階。

相変わらず蛇の相手をしつつ探索を続ける。

ここまでの探索した感じでは、どうも降りてきた階段を中心に半径何メートルか内に

は蛇しか出てこない模様。

その範囲より外に行くとき羊がチラホラ出てくる感じがする。

なにぶん1階層が広い為正確ではないが、おそらくこの考えが正しいなら、12階へ続く階段は蛇エリア（蛇しか出てこない範囲）にはないだろう。

意地の悪い人が作ったなら分からないが、普通はかなり遠くに階段が設置されているものだと思うし。

どのみち羊は避けて通れないので、できるだけ成長したカードたちは温存する方向で探索を続けた。

そして夕方

結局今日は階段を見つけることはできなかつた。

お昼に一度拠点へ帰り食事をとり、再び探索を行ったが、草原というフィールドも相まって中々ペースが上がらない。

せめて何か目印のようなものでもあればいいのだが…

掲示板で似たようなフィールドのプレイヤーの話を探すも、皆同じように苦労しているみたいだ。

洞窟とかなら通れる道が限られているためマップも作りやすいが、草原の場合は目に映る場所全てが移動可能範囲なので、相当しんどい。

マップのスキルも自分が歩いた場所から半径数メートルほどしか記録されないので、すべてをマップしようと思うと、一定範囲をジグザグにウロウロしないと埋めることができない。

結果『地道に頑張れ』って事で掲示板内も落ち着いたみたいだが…

まあ、一度階段さえ見つけてしまえば、以降は一直線に進めばいいだけだからそこまで苦労することは無くなるのだが。

そんなこんなで情報を仕入れた後はいつも通りお風呂に入ってお布団へIN。

そういえば未だに低ランクの布団やトイレ等を使っているプレイヤーもいるみたい。

本人曰く、ついスキルの方にポイントを使ってしまおうとか、今のままでも問題なく生活できるとか書いてあったが、まあ本人が良いのなら他人があれこれ言う必要は無いらう。

さて次の日

今日こそ階段を発見するぞ！と意気込み朝の準備。

10階の転移クリスタルから11階へ進み、まだ行ったことのない方向へと進む。

相も変わらず無音で忍び寄ってくる蛇たちを倒しつつ、羊はできるだけ回避の方向で進む。

そうして歩いていけると、向こうの方に何やら植物のようなのが見えてきた。

(植物：？なんかヤシの木みたいにも見えるけど、なんだ?)

ここまで目印らしいものは一切無かったため、初めての變化に喜びつつも警戒しながら近づく。

そうこうして約1時間ほど歩きようやく到着。

思ったより遠かったのと、道中マップに光点があったため迂回したら、迂回先にも羊がいたりして結構時間がかかった。

そうしてたどり着いた場所には、大きなヤシの木のような木と大きな湖があった。

(まるでオアシスだな。ん？オアシスって砂漠にあるものだろ？草原にあるのは何て呼ぶんだ?)

口に出すと頭の悪さが露見しそうなことを考えつつ、湖に近づく。

一応何があっても良いように警戒しながら中を覗き込むも、とても透き通った水が風で揺らいでおり、特に危険はなさそうだ。

そつと手で掬って一口飲んでみるととても冷たくて美味しかった。

まるで体の疲れがスウッと抜けていくような気がした。

特に何も起きなさそうなので、少し警戒を緩め休憩することにする。

(風も気持ちいいし、可能なら弁当とか持ってきてもいいかもな。)

大の字になって寝転がるととても気持ちいい。

思考がピクニック気分になってきて、弁当を持ってくるための方法から始まり、折り畳み用の椅子や机がDPで交換できないかな?とか、こういうファンタジー世界ならアイテムボックスとかないのかな?など、頭の中でピクニック決行のシミュレーションを行う。

しかし、いくら危険がなさそうな場所でもここはダンジョンの中。

油断している人間には容赦なく牙をむくのだ。

気づいたのは偶々マップ映った光点を目の端にとらえたからだ。

一瞬で思考を切り替え飛び起きる。

光点は自分のすぐ近く。しかしさっきまで光点は無かったはず。いったいいつの間にこんなに接近された?

「……水の中か!?!」

その答えが正解!とでもいうように、湖の中からモンスターが飛び出てきた。

【レイクフィッシュ A600 D600】

ディスクを構え宣言。

「デュエル！俺のターン、ドロー!!」

現在の手札3枚

火の玉 星1 炎 炎族／通常モンスター

A300 D200

修行中の見習い天使 星1 光 天使族／通常モンスター

A300 D300

恐竜ベイビー 星1 地 恐竜族／通常モンスター

A300 D200

「モンスター（恐竜ベイビー）を守備表示でセット。ターンエンド。」

今の手札にあいつを倒せるカードはない。

ここまでの道中で、ボロットと弱き力の悪霊はすでに使っている。

残る対抗できるカードはセイント・ハート・バードとレッサーワーウルフか。

だがレッサーワーウルフの効果を使用するには自身以外の表側攻撃表示モンスターが必要となる。

今の状況でそれを出すのは難しい。

となれば残るはセイント・ハート・バード1枚のみだが…。

レイクフィッシュの攻撃で恐竜ベビーが破壊される。くっ、すまない。

そして俺のターン。

デッキに手を置いたとき、なんだか不思議な感覚が伝わってきた気がした。

「(今のは…？前にボス戦でベビーバードを引いた時に感じたものとは違う感覚だ。…だが、引いてみればわかることか!) ドロー!!」

影トカゲ 星1 闇 爬虫類族／効果

A300 D200

自分の場のこのカードを墓地に送ることで、自分のデッキからこのカードのレベル以下の地属性モンスターカードを1枚特殊召喚できる。この効果によって特殊召喚されたモンスターは、召喚されたターンのエンドフェイズ時に破壊される。

(むっ…これは…そういうことか。)

何となく予想していたカードとは違うカードをドローしたが、効果を読んで納得した。

「俺は、影トカゲの効果を発動。このカードを墓地に送ることで(すまん、ありがと

う。) デッキより地属性モンスターを1体特殊召喚する！」

俺のデッキ内で地属性のカードは数枚あるが、今呼び出すのはこいつしかない！

「出でよ！戦士の卵!!」

「!!」

戦士の卵 星1 地 戦士族／効果

A500 D200

このカードが自分のコントロールするモンスターカードの効果の対象となった時、また効果の対象となり場に召喚・特殊召喚された時、ターン終了時までこのカードの攻撃力・防御力はそれぞれ200アップする

セイント・ハート・バードと並ぶ、俺のデッキのエースカードが出現した。

19話

何となく予感があった。

今までの探索でもっともよく手札に来てくれたカードは、ベビーバードと、この戦士の卵だった。

先にベビーバードが『成長』し、他のカードも次々と成長していく中で、未だ『成長』が発現していなかった。

しかし先ほど影トカゲのカード効果を見たとき、「今しかない！」と直感した。そしてカードはその思いに答えてくれた。

何となくだが、この『成長』はプレーヤーの願いをくみ取るとともに、それまでのカードの扱い方や、カード自身の思いも反映されるのでは？と思えてくる。

戦士の卵は今までの戦いの中でも、特に他カードの影響や効果を受けることが多かったカードだ。

だからこそ、この効果が表れたようにも思える。

「戦士の卵の効果発動！影トカゲの効果の対象となり場に召喚されたことで、攻撃力防御力は200ポイントアップする！」

「戦士の卵 A5000↓700 D2000↓400」

「戦士の卵でレイクフィッシュに攻撃！」

「!!!」

ズバアと音を立てて、戦士の卵の剣がレイクフィッシュを切り裂く。

そして戦闘が終わった後、普段なら10分間場に残り続けるカードが、影トカゲの効果ですぐに墓地へと送られていく。

心の中でカードたちにお礼を言い、レイクフィッシュが落としたカードを拾い上げる。

レイクフィッシュ 星2 水 水族／通常モンスター

A6000 D6000

湖の近くの安全ではないことが分かったので、休憩もそこそこにして再び探索を続けようと思ったが、ここまででそれなりにデッキも消耗しているし、そこそこの時間だったので昼食の為拠点に帰ることにした。

そしてお昼。

昼食、休憩後、再び11階へ。

今までの探索で、あからさまに何かあったのは先ほどの湖だけで、他には目印になりそうな物は何一つ見つけていない。

ならばその近くに階段があるのでは？と当たりを付け、最短ルートで湖まで向かつてみる事にした。

もちろん避けられそうな戦闘は避けてだが。

で、湖についた後そこから先に進むと、また遠くにヤシの木らしきものが見えてきた。たどり着くとそこは、先ほどの湖と同じような場所だったので、長居するとまた湖からモンスターが出てきそうな気がして、特に休憩をとることなく先へと進んだ。

するとまた遠めにヤシの木が見えて……と繰り返すこと数度。

最後にたどり着いた湖には、目印となっていた大きなヤシの木のそばに穴が開いており、その中に下へと続く階段があった。

ようやく見つけた階段に喜びつつも警戒は怠らない。

こういう時ほど油断しやすいついていうし、なんとなく階段のそばには湖もあるのだからいつレイクフィッシュが飛び出してきてもおかしくない。

階段の存在を確認した俺は素早く降りていく。

そしてたどり着いた先は、一瞬ループしたか？と勘違いしてしまうほど一階にそつ

くりな平原だった。

つまり周りに何もないのである。

再び始まるであろうマップ埋め&階段探しを想像するだけで気が滅入ってくる。

はあく……と大きなため息をつき、階段の一番下の段に腰掛け休憩する。

まだマップ上には光点が見えないので近くにモンスターがいるという事は無いだろう（湖のようなことがなければ）。

しばらく座ってポヤーっとしていたが、ふと気になって階段の裏側をのぞいてみる。

10階までは壁に埋まっていたが、11階や12階は草原のど真ん中にポツンと階段がある状態。

ということとは裏側が見えるようになっているはずだ。

普通、家の階段の裏（下側の部分は）物置スペース等で使われることが多いと思う。

何かないかなーっと思味本位で覗いてみたが、やはりそうそう変わったことがあるはずもなく、普通に地面と階段裏が見えるだけだった。

「ちえっ、何かあれば面白かったのに。」

結局何も見つけられず、時間もかなり経っていた為拠点へ帰ることにした。

その日の夜

何気なくいつも通り掲示板をのぞいていたら、検証班と呼ばれる人たちが驚きの新情報を発表していた。なんと1-1階以降は、降りてきた階段のすぐ近くに簡易転移石が隠されているとのことだった。

それはぱつと見では分からないくらい巧妙に隠しており、フィールドによつて隠された場所はまちまちらしいが、今のところ分かっている範囲の情報で、草原の場合は階段の裏側に隠されていることが多いとのことだった。

…俺さつき見たばっかりなのに…。

見つけることはできなかったが、おそらくその近くにあつたのかもしれない。

検証班の中にも1-1階以降が草原の人がいるらしく、その人が言うには、階段裏側の一番下の段や、地面との境目辺りによくあるとの事。

親指の爪ほどの小さな青い石が埋められており、それに触れることで登録され、DP交換リスト内にある（登録することでリストに追加される）転移の羽（使い捨て100DP）を使用することで、最後に触れた簡易転移石のもとへワープできるらしい。

そうと分かっているればもつと念入りに探したものを…！

どうやらこの情報は俺が昼に出かけてすぐぐらに発表されたようだ。

なんてタイミングの悪い。

一人ブツブツ言いながらも、他にめぼしい情報がないか探し今日は寝ることにした。

次の日

マップ頼りに昨日見つけた階段まで向かう。

途中戦闘を避けながら進んだこともあり、階段までは3時間ほどかかった。

1階が一直線にダッシュして30分程で次の階段にたどり着くことを考えると、11階の広さも分かるというもの。

もし体力増強のスキルを取っていなければまる1日かかるかもしれない。

12階へと続く階段を下り、昨日と同じく階段の裏へ回る。そして掲示板に書かれていた通り念入りに一番下付近を調べてみると、草に紛れて階段と境目の地面に青い石が埋まっているのを発見した。

触れてみると、ほのかに光を放ち

【12階 簡易転移石に登録されました】

アナウンスが聞こえてきた。

これで拠点から直接ここまで転移する事ができるようになったはずだ。

もう少し早くこの情報を知れたら、今日のここまでの移動はしなくて良かったのだが

∴。

まあ言っても仕方ない。

フウつと一息つき、せっかく12階まで来たし、少し戦闘してから拠点（お昼）に帰ることに決めた。

あまり遠くに行き過ぎると11階の羊のようなことがありそうなので、階段からあまり離れない範囲でウロウロする。

するとマップ上に光点が見えたのでそろーっと近づいてみる。

そこには1羽のウサギ？がいた。

（ウサギ…だよな？ウサギはウサギでもいつ〇くウサギ…。）

そのウサギの額には、まるでドリルのように螺旋状の溝が入った一本の角がついていた。

〔一角兎 A500 D300 攻撃表示〕

（思ったよりは強くない…？）

11階で羊のD800を見ているため、A500ではさほど強くないようにみえてしまう。

とは言え俺のデッキ内で、素の能力で対抗できるのは数枚しかないんだけど。

ハムハムと草を食べていたウサギだが、俺の接近に気づいたのか耳をぴんと立てこちらに顔を向けた。

（まあ、今回はすぐに帰るつもりだしいいだろう。）

一気に片を付けることに決め、ウサギに近づいた俺はデュエル開始を宣言する。「デュエル！俺のターン、ドロー。俺は手札からセイント・ハート・バードを召喚。そして攻撃！」

たまたまセイント・ハート・バードがすでに手札にあったので、一気に終わらせる。せつかく出てきたのに一瞬で消えていくウサギさん。

落としたカードはこちら

角兎 星2 風 獣族／通常モンスター

A500 D300

なんか11階のモンスターと比べて弱い？

D800の羊や、AD600の魚と比べるとねえ。蛇だって能力は低かったけど効果モンスターだったし…。

いや、たまたまこいつだけかもしれない。他のモンスターがすごく強い可能性もあるし、慎重に行こう。

と思ったが、11階と同じような草原なら、階段の付近はウサギしか出ないのでは？（11階の蛇と同じ）と考え、又「もう1戦くらいしたらどうせ拠点に帰るし」と思い、階段を中心に円を描くように移動（ダッシュ）してみた。すると先ほどウサギと戦闘し

た場所から階段を挟んで反対側に別のウサギを見つけたので、実体化時間ギリギリ間に合ったセイント・ハート・バードで瞬殺。

落としたカードを拾い、帰還の羽を使って拠点へと戻った（簡易転移石は、拠点への帰還機能はついていない）。

20話

拠点に帰ってきた俺は昼食を済ませた後、改めてウサギが落としたカードを眺める。

占い師 星2 魔法使い族／通常モンスター

A400 D500

「やっぱり1階より弱い…。」

12階で手に入ったカードはこの占い師と角兎（A500D300）の2枚だが、どちらも11階で手に入ったカードより弱い。

普通は階が進むごとに強いカードを落とすようなものだけ…。

まあ、まだ12階全てがそうと決まったわけではないし、考えるのは後にしよう。

で、今回手に入ったこのカード。

試しに確認してみると、なんとレベルアップの素材として使えることが分かった。

レベルアップできるのは初期デッキに入っていた魔法使い族カード『ミニマジシャン』。

A/D共に200なので使うことは少なかったが、レベルアップできれば使用頻度も高

くなりそうだ。

早速レベルアップさせようとパソコンの画面を開くが、もう1枚のカードがないことを忘れており取りに行くことに。

ちなみにレベルアップの画面を詳しく見て分かったことだが、初期デツキの20枚のカードは全て、レベルアップ（レベル1から2へ）に必要なカード枚数が3枚で、その傾向も似ている。

自身のカードと、1〜9階で手に入る自身と同種族のカード、そして11回以降で手に入るカードの3枚だ。

9階までで全種族1種類ずつ、しかも全てAD共に100のカードしか出なかったから、何かありそうだなとは思っていたけど、そういうことだったんだな。

嬉々として掲示板に書き込もうとしたが、すでにその情報は出回っており、ただ単に俺が見逃していただけだった。ガツクシ。

気を取り直して、どうせ他のカードをレベルアップさせるときに必要ななるだろうか。と、この機会に1〜9階で手に入るカード全種類を取っておくことにした。

あれからそこまで日にちは経っていないはずだが、妙に懐かしく感じる洞窟内を走り回り、目当てのカードを回収していく。

今更10階までの魔物に遅れを取ることは無いが、流石に1階から10階までとなる

とそれなりに時間がかかった。

帰ってきた時にはすでに辺りは暗くなっていた……と言いたいところだが、ダンジョン内なので暗いも明るいも無い。

早速パソコンでレベルアップの画面を開き、ミニマジシャンのレベルアップをはかる。

ベビーバード（現セイント・ハート・バード）の時と同じように、カードを挿入し、ペカーっと機械が光った後1枚のカードが飛び出してきた。

風の魔操士 星2 風 魔法使い族／通常モンスター

A800 D800

（おおーADがかなり上がってる。）

想像以上の上り幅に嬉しくなる。

これなら今まで使用頻度が低かった分、ガンガン使ってあげることができそうだ。

しかし、セイント・ハート・バードはAD共に上昇値は500だったが、この風の魔操士はそれぞれ600上がってる。

通常モンスターカードだからなのか、他に法則があるのか、それとも例の相性の問題

なのか。

掲示板を見ても各プレイヤーごとにまたそれぞれ違うので参考にならない。

ま、そういうもんか。と思考を切り替えて明日のために寝ることにした。

次の日

DPで転移の羽(100DP)を交換し使用する。

するといつものフワツとした感覚の後、12階の階段の後ろ、昨日転移石を見つけた場所へと転移していた。

「おぉー、ほんとに転移できた。」

これなら1階1階出し惜しみせず攻略ができる。

だが逆に考えると、最下層近くは1日かけても階段までたどり着けないほど広いフィールドになるんじゃないかと、一抹の不安を覚える。

ま、その時はその時だ。と未来の自分にすべて丸投げをして、今は目の前のことに集中!と、探索を開始する。

さて、昨日は階段近くのウサギと戦っただけで終わったが、今日は試しに真つすぐ突き進んでみようと思う。

11階と同じなら、どこかの方角にオアシスのような目印になるものがあるだろう

し。

あと兎以外に出現するモンスターの確認もしたいし。

というわけで、まずは階段を下りてそのまま真っすぐの方角にひたすら歩いてみる。道中ウサギが数匹出てくるが、早速レベルアップした風の魔躁士が活躍してくれて、問題なく倒して進めた。

ちなみにここまででウサギが落としたカードは、ウサギと占い師の2種類のみだ。

そしてしばらく歩き、1階ならそろそろ蛇エリアを出るころかな？ って頃に、新しいモンスターがいるのを発見した。

遠めに見えるその姿は…

「…カンガルー?」

二本足で立ち、おなかには大きな袋を持ち、顔を上げてキョロキョロと当たりを警戒しながら、時折首をかしげている生き物。

完全にカンガルーだった。

「カンガルー A500 D500」

「…ネーミングセンスえ…」

名前のインパクトに気を取られている間に向こうもこちらに気づいたようだ。

「クッ、面白い名前しやがって! デュエル!」

お互いに近づき戦闘開始を宣言。

「俺は水蛇を攻撃表示で召喚。さらに手札より、ボロツトの効果を発動。これで水蛇の攻撃力は200ポイントアップだ！」

水蛇 星1 水 海竜族／通常モンスター

A400 D100

【ボロツト装備効果によりA400↓600】

「カンガエルーに攻撃！」

「シャアア！」

水蛇はその大きな口を開け、カンガエルーに噛みついた。

途端カンガエルーは耐え切れず霧となって消える。

うーむ、あつけない。

現れたカードを手に取り内容を確認する。

カンガエルー 星2 水 獣戦士族／通常モンスター

A500 D500

獣戦士族か。レッサーワーウルフの合成素材であれば良いが…帰ってから試してみ

よう。

しかし、やはり12階の方が出てくる魔物が弱いな。

何か理由があるのか、それとも偶々なのか…。

考えても答えが出るわけではないが、何となくすつきりしない。

管理人に問い合わせようかとも思ったが、何となく納得する答えが返ってこないような気がしたから止めた。

(とりあえず、カンガルとウサギに対抗できるカードがデッキにある内は探索。無くなったら帰還って方向でいいかな。探索方法は11階と同じで、何方向かに一直線に進んでみるって事で。)

答えの出ない自己問答はやめて、今後の方針を考える。

(できれば早いこと階段を見つけたいが…、時間がかかるようなら、いつそのことDP貯めてスキルのレベルアップするか?)

一旦退却(10階より前へ)も視野に入れ、俺は階段を求め歩き続けた。

???

某所にて

「ふむ、ではみな着々と準備は進んでおるようだな。」

黒いフードを被った集団が大きな円卓を囲んでいる。

「おう、もちろんよ！俺のところなんてすでに20階をクリアしたやつまでいるぜ！」

中でも一番の大柄な者が自慢げに言葉を発する。

「なんと!?!もう20階まで?」

その言葉に周囲の者の反応は様々だった。

「へっ！今回の優勝は俺様がいただきだな。」

腕を組み、さも当然のような物言いをする。

「何をおっしゃる。まだまだゲームは序盤。これからいくらかでも巻き返しは可能です

よ。」

対角の位置に座した者が反論する。

「ふんっ！口だけなら何とでも言えるんだよ！」

「なにっ!？」

お互いに口だけでは済まなくなりそうな雰囲気となったところで待ったがかかる。

「まあ落ち着け。今はそのようなことで争う時ではない。」

「どうやらこの中では地位が高い者のようだ。」

「では、他に何も無いようならば今回は解散としよう。………特になさそうだな。では解散だ。」

その言葉に、集まっていた者たちは次々と音も立てずに消えていく。

「……………」

そんな中、最後までその場に残る者が2人。その片方は、たった今解散を宣言した者だ。

「…おう、どうだ?」

「ん?さつきも言つたら?ぼちぼちだつて、ね。」

二人のやり取りから、気心知れた間柄だということが感じられる。

「そりや建前だろ?で、本当のところはどうなんだ?」

先程とは打って変わって砕けた物言い、彼の者がついた嘘を問いただす。

「……はああ、本当はあんまり君にも言いたくはないんだけどね。」

本当に渋々といった風に喋りだす。

「いるよ、一人。とんでもないのが…ね。」

その言葉に顔一面笑みを浮かべる。

「やつぱりいるんじゃないかよ！よっし、じゃああいつの思惑は潰せそうって事でいいんだな？」

「うーん、まだ今の時点では発展途上って感じだけだね。」

「でも可能性は高いんだろ？なら全然問題ねえよ。」

「まあそうなんだけどね。ただ何となく、カードとの親和性が高すぎるのが気になってね。」

「ん？そりや良いことじゃねえか。何が気になるってんだよ？」

小首をかしげながら質問するも、その姿は全く可愛くない。

「ん…、勘？」

その答えに目を細める。

「お前の感はよく当たるからな…。ま、今は気を付けて見ておくぐらいしか出来ねえだろ。」

「まあ、ね。」

「うっし、じゃ次は来月の会議の時だな！…あんまり考えすぎると禿げるぞ。じゃまた

な。」

「うるさいよ。…って、もう行っちゃったか。」

一人残された者はその場で大きなため息をつく。

「何かいやな予感がするんだよね…。ま、今は彼に期待して待つとしましょうか。」
そしてその者もその場から消え去り、場は静寂に包まれた。

21話

それから数日

12階をウロウロし続けて、ようやく階段の目印であろうヤシの木を発見した。

この草原のフィールド、無駄に広いので時間がかかって仕方ない。

11階と同じようにヤシの木（オアシス）まで進み、そのままの方向へ少し進むと、さらに別のヤシの木が見えてくる。

数度繰り返し、やっと13階へと続く階段を発見することができた。

階段を見つけた事での安堵の気持ちも、もしかしたら13階も同じなのでは？という不安の気持ちによって一瞬で塗り替えられる。

まあ、降りてみないと分からないけど…何となく降りたくないな…。

と下がったテンションのまま階段に足を掛けようとした時ふと思いついた。

（あ、そういえばここも水の中に魔物がいるのか？）

11階ではレイクフィッシュが飛び出して来た。

もしかしたらここでも新しい魔物が出てくるかもしれない。

であれば、新しいカードをゲットのチャンスでもある。

沈んだテンションが少しだけ浮き上がり、水中の魔物を確認すべくその場で待機する。

(確か前はしばらく休憩してたら出てきたんだよな。さてさて、何が出てくるかなー?)

その場に座り込み、マップを眺めながら今か今かと待ち構える。そして

「来たー!」

マップに光点が映る。

湖から少し離れ、いつ飛び出てきても良いようにスタンバイ。

(手札は……問題なし! よーし、出てこい出てこい。)

そして水面が揺れ、中から1匹の魚が飛び出してくる。

ザバーーン

【 レイクフィッシュ A600 D600 攻撃表示 】

「……………」

13階への階段を下りた俺は無心で簡易転移石を探し始める。

12階と同じような場所に隠されていた石を見つけ登録した後、無表情のまま帰還の羽を使用し拠点へと戻った。

新しいカードが手に入るかもとワクワクしていた気持ち裏切られ、さらに階段を下りた先の13階も変わらず広い平原だった事で少し心が折れてしまった。

無表情のまま椅子に座り、パソコンの掲示板を開く。

そして雑談・愚痴の板に淡々と今起こった事を入力していく。

心のこもってない「どんまい」を沢山もらった。

だが中には同じ草原エリアのプレイヤーもおり、悲しみを共有する事が出来て少し心が落ち着いた。

その後もあちこち情報を読み漁り、最終的には現状を打破する為、新スキルの習得又は所有スキルのレベルアップをすることに決めた。

お勧めはやはりマッピング&魔物探知のレベルアップと、そして俊敏性増強だった。

俊敏性増強は体力増強と同じく身体能力アップのスキルで、これがあると自分の動き全てが格段に速くなるらしい。

しかしその分体力の減りも速くなる為、セットで体力増強を取らないとうまく使いこなせない、とあった。

ただ、検証したプレイヤー曰く、その二つのスキルをどちらもレベル1で取ったところ、まだ体力の消耗が普段より激しい気がする。との事だったので、安定して使うには体力増強のレベルの方が高いのが望ましい。と書かれていた。

消費DPが他のスキルと計算方法が違うようで、レベル1で500、レベル2にするのに2500と、それなりのポイントを必要とするが、その効果は絶大らしい。

あ、そういうえば、スキルの中にはレベルアップにロックがかかっている物もあって、例えばこの身体教化系のスキルなんかは10階を突破しないとレベル2に上げることができない様になっている。

他にもめぼしいスキルをピックアップして、必要DPを計算する。

む…、結構かかるな。

DP稼ぎをするにしても、今の11階〜13階では安定周回は無理だ。

であれば10階より前の階層になるわけか。

前回は4階でひたすら稼いだけど、今のデッキなら9階でも問題なく回れそうだ。

4階は魔物が2体ずつ現れるのに対し、9階は3体ずつ現れるからさらに効率よく稼げると思う。

ちなみに今のデッキは約30枚。

初期のデッキに11階以降で手に入ったカードを追加している。

中には複数枚手に入ったカードもあるけど、1種類につき1枚ずつしか入れてない。

本来なら攻撃力の低いカードを抜いて、11階以降で手に入るカードを複数枚入れる方が効率が良いんだろうけど…、昔からそうなんだよな。何となくそれぞれのカードに特別感が無くなる気がして。

それにここでは成長のシステムもあるから、初期デッキの能力の低いカードも使い続ける。

いつか大きく羽ばたいてくれることを信じてるぞ。

現在のデッキで攻撃力が2000以下のカードは

もろ石 星1 地 岩石族／通常モンスター

A200 D400

スモール・キャット 星1 風 獣族／通常モンスター

A200 D200

雑草魂 星1 地 植物族／通常モンスター

A200 D300

魔物の骨 星1 闇 アンデット族／通常モンスター

A200 D100

の4枚。残りはA300以上ある為、AD共に200の魔物しか出ない9階で困るところはまずないだろう。

今日はもう遅いので、明日から9階でのDP稼ぎを開始することにして、夕飯・風呂・洗濯などを済ませて寝た。

次の日

早速9階へ。

転移機能で10階に行き1つ階を登るだけ。

久々に来たのと、当時さほどガッツリ探索していなかったこともあり、どんなだったかあまり覚えていない。

とりあえず効率のいいルートを探すためにマップを埋めることにした。

で、夕方。

できるだけまだ埋まってない場所をメインに探索を続け、昼食で拠点に帰った際にマツピングを、昼からトイレに行きたくなり帰った時に魔物探知をそれぞれレベル3まで上げた（各必要DP500）。

効果は今までよりも範囲が広がった感じで、さらに遠くの魔物も探知できるようになった。

さらに次の日

通りそうなルートは粗方埋めれたと思うので、光点の位置を確認しつつルートを考える。

試しに回ってみると、午前中だけで700ちよつとのポイントになった。

午後からは本気で回ってみる。

結果午前より若干多く、約800DPとなった。

合計1500DP

夜中も無理して回れば1日で2000DPは行きそうだ。

けどそこまで無理するつもりはないので、このペースで回っていききたい。

周回2日目

昨日と同じで約1500DPゲット。

周回3日目

同じく1500DP程ゲット。3000DP貯まったので、内2500DPで体力増強をレベル2に上げ、俊敏性増強スキルを新たに取得。

周回4日目

…やばい。これはやばい。

周回5日目

昨日はハイになりすぎた。反省。

俊敏性増強スキルを取ったことにより、自身の動きが今までの倍近い速さで行えるようになった。

体力増強のスキルを取った時もそのあまりの効果に驚いたが、同系列のスキルなだけあつてかなり強いようだ。

結果、1日で2500〜3000DPゲットできるようになる。

…これって、先に色んなスキルレベルを上げてしまった方が、稼ぎが楽になるんじゃないか、あ、だからレベルにロックがかかっているのか。

? 昨日と今日で約5000DP貯めれたけど…、楽しくなってきたし、もっと稼いどく

2 2 話

結局あれからしばらくD P稼ぎにハマってしまい、数日が過ぎた。

その間に掲示板ではいくつかの大きなニュースがあったが、その中でも特筆すべきは「某氏20階突破！」と「俺のカードも成長した！」の二つだろう。

「某氏20階突破」に関しては、掲示板上でしばらく音沙汰のなかった某氏がいきなりぶっこんできた。

それもそのはず。某氏曰く、10階突破時にレベルアップシステムが解放されたのと同様に、20階突破にも報酬があつたらしく、それがなんと『レベル5モンスター』だったからだ。

前回の情報秘匿で大分色々言わたのが堪えていたようにも思えたが、流石にこれを自慢しないという考えは出なかつたのだろう。

初めての高級モンスターの出現に掲示板は大いに沸き、某氏もかなり自慢をしていた。

ちなみに能力は、A1800D1500の通常モンスターらしい。

あの某氏がこれだけ自慢げにマウント取ってくるということは、ガセネタではないだろう。という嫌な信頼のされ方により、20階をクリアすれば上級モンスターが手に入るという情報はあつという間に広がった。

あと、ボスのスペックはLP2000、初期手札3枚だったので、10階と同じように自分の手札やライフを強化して勝ったとの事。

そして「俺のカードも成長した！」については、とあるプレイヤーが俺と同じように絶体絶命のピンチでカードが成長してくれたらしい。

そのプレイヤーは、前に俺が掲示板に書いた内容を信じていたみたいで、「成長してくれ！」と心から願ったら成長してくれたとの事。

これにより、今まで半信半疑だったプレイヤーも「成長」について信じてくれる人が増えた。

まあ中にはいまだ全く信じてくれない人もいるけど、それはそれだ。
これでカードをより大切にしてくれる人が増えればいいな。

他にも細々したニュースはあつたが、それはまた今度にしよう。

俺はというと、この数日で貯まったDPを使い、色々とスキルの強化をした。

まずLP2000・手札3枚に約1万DP使用。

これはどのみちボス戦で必須となるので、早めにクリアしておこうと思ったからだ。

そして成長促進とデュエリストアイをそれぞれレベル3に。5000DPずつで合わせて1万DP。

デュエリストアイに関してはかなり悩んだけど、これだけ要求DPが多いスキルなので大器晩成型だと信じ少しずつ育てることにした。

後はマッピングと魔物探知をそれぞれ1000DPでレベル4に、2000DPでレベル5に上げた。

それと、1万DPで帰還石なるものと、転移石なるものがあつたため交換。

帰還石は帰還の羽の無制限版で、何度使用してもなくならない。

転移石は同じく転移の羽の無制限版。

どちらも100回使用すれば元が取れるわけだが、おそらく最深部まで進むなら100回ぐらい普通に使いそうだと思ったから交換しておいた。

これは簡易転移石に登録後から新たにリストに追加されていた。

というわけで、約1週間ほどかな？DP稼ぎをしてきた訳だけど、俺って割とこういう作業が好きなのかもしれない。貯まっていくDPを見て一人ニヤニヤしてたし。

頑張った分これで少しは探索が楽になれば良いのだけど。

でも何というか、思ったよりピンとくるスキルが少なかったんだよな。

精力増強とか今必要か？つてもものも結構あったし。

一番望んでいた体力増強のレベルアップはロックがかかっていてあげれないし、何より要求DPが25000と一気に高くなったし。

他にも「初期手札チェンジ」※ダンジョンに入って一番最初のドロワーを、スキルレベル回引き直せる や、「ジャンプ」※高くジャンプできる 等、使いようによつては有用そうなスキルや、「食物探知」※ダンジョン内の食べれるものが分かる とか、「暗視」※暗い場所でも目が見える（ただし基本ダンジョン内は明るい）等、剣と魔法の世界に転生でもしたなら有用そうなのに…といった少し残念スキルがあつたけど、今あるスキルの強化するのが一番ベストと感じ、新スキルは取らないことにした。

何か改めて見ると、あんまりパワーアップしたようには見えないけど…
ま、いいや。

久々に13階へとやつてきた。

久々といつても、前は簡易転移石の登録をしたただけですぐに拠点へ帰つたので、実際初めてといつても過言ではない。

出現するモンスターも分からないので、とりあえず階段の近くからうろついてみる。

【邪蛇 A300 D300 攻撃表示 効果モンスター】

【邪蛇 A300 D300 守備表示 効果モンスター】

お、蛇が2体か。

どうやら13階からは2体同時に出てくるっぽいな。

しかし、マッピングと魔物探知のレベルを上げたせいか？

今までと比べてかなり遠くからでもモンスターの表示が見えるようになった。

明らかに向こうはこちらに気づいてないよな？

デュエリストアイのレベルが上がったことで、効果モンスターか否かが分かるようになったが、それよりも魔物探知の範囲が広がったほうが嬉しい。

(これだけ離れた場所から分かるなら、大分戦闘を回避して進めそうだな。)

俺は蛇たちを大きく迂回して進む。

(とりあえずウロウロ優先で、戦闘は避けつつ進むかな。)

進む先で探知に引っかかる魔物たちを避けながら、ひたすら歩を進める。

といつても、何もなく歩き続けるだけというのはかなりしんどい。

たまに気分転換に、その時の手札で問題なく倒せそうなきのみ戦闘を行いつつ先へ進む。

ちなみに出てくる魔物は1階で出てきた蛇と羊が2体で現れるだけ。つまり、蛇&蛇・蛇&羊・羊&羊の3パターン。

蛇&蛇、又は羊が攻撃表示の時を狙って戦闘を仕掛ける。

そういうえばこの表示形式、戦闘に入って相手のターンになるまでは変わることがないみたい。

なので遠めに見えたときに攻撃表示だったなら、戦闘に入るまでどれほど時間がたっても攻撃表示のまま変わらない。

なので、守備表示の羊には決して近づかないように気を付けながら進んだ。

午前中は残念ながらマップ埋めだけで終わったが、午後の探索では運よく目印となるヤシの木を発見することができた。

これは幸先が良い。

上の階と同じようにオアシスを転々とし、最後に見つけた階段をさつさと降りる。

ついた先はやはり草原だった。

まあここまで来たら予想できていたからいいけど。

階段裏を覗き、上の階とは若干ズレた場所に隠されていた簡易転移石を登録。

時間的に夕方遅くなっていたのでこの日は探索を終了し拠点へ。

次の日、14階探索開始。

最初は階段の回りをウロウロ。出てきたのは12階に出てきた兎とカンガルー。

この階は、この2匹の組み合わせのようだ。

そういえば確認するのを忘れていたが、水辺の近くではレイクフィッシュ2体との戦闘になるのだろうか？

余裕があれば今度確かめてみよう。

羊よりは弱いとはいえ、俺のデツキのモンスターの大半より強いウサギとカンガルー。

13階と同じく、戦闘は極力回避の方針で進める。

この階は13階と打って変わって中々オアシスが見つからず、階段発見まで数日掛かってしまった。

そして15階。

5階の時と同じように、部屋が1つあるだけで中央にはクリスタル（転移の石）が宙に浮いている。

早速機能を開放し拠点へと戻る。

帰還石や転移石を入手したことと、各階に簡易転移石がある為、5階の時ほどこのクリスタルにありがたみはないが、それでも20階台も半分まで来たことに安堵する。さて、後半は何が待ち構えているのだろうか。

23話

それは唐突に訪れた。

15階に到達した後拠点に帰った俺は、その時点ですでに夕方になっていた為、16階の確認は明日にして寝ることにした。

そして次の日、パソコンの画面がチカチカ光ってるなどと思い見てみると、どうやらメッセージが届いているようだった。

何かしたっけ？とさえつつ開いてみると、そこには

皆様、おめでとうございます！

10階突破者が一定数を越えました。

それにより、皆様にボーナス(DP)を差し上げます。

今後も条件が満たされた時にボーナスを差し上げますので頑張ってください。

又、今回の様に全員へのボーナスだけでなく、個人へのボーナスも有ります。

『一番に10階のボスを倒した人』

『簡易転移石を始めて発見した人』

等が今までボーナスを差し上げた一例となります。

他にも色々ありますので、ぜひ目指してみてください。

ちなみに、今回のボーナスは、現在の到達階によってポイント数が異なります。

個人のボーナスに関しても、その内容によって差し上げるポイント数が変わります。

出来るだけ早く、難易度の高い発見をすれば、ボーナスウハウハって訳ですね。

是非とも、トップをめざして頑張ってください。

管理人

「10000DPを入手しました」

まじか。

前に『成長』の第一発見者として俺もボーナスは貰ったが、こんなボーナスもあったのか。

つてか、10階突破してない人もまだ結構いた…のか？

一定数超えたってあったから、それがどのくらいかは分からないけど。

まあ、貰えるものは有り難く貰っておきましょう。

しかし、1万DPか。大分奮発したな…。

だって、俺が1万ということは、同じくらいの進み具合のプレイヤーは皆1万DPのはずだし。

もしかしたら管理人同士の取り決めで、ボーナスを出して良い基準が決まっていたりするのかな？

と、そんなことを考えつつ掲示板を開くと、すでにその件でワイワイと賑わっていた。読んでみるとやはり俺と同じくらいの人、というか、11〜20階のプレイヤーは一律で1万DPだったっぽい。

で、1人20階を越えている某氏は2万DP。少数ながらまだ10階を突破できていない人は10000DPだった。

で、皆この降って涌いたDPを何に使うかで盛り上がっている。

俺としてはもう少し早く来てくれればDP稼ぎに費やす日数を少なくできたのだが…、いや、どのみち1週間ぐらいは続けてたかも。

しかしこのDP何に使おう？

昨日までの稼ぎでスキルのレベルは上げたばかりだし、かといって生活用品…も、何となく自分で貯めたDPで手に入れたい。

人からの施しだと、何か気になっちゃうし、後から使うたびに「あ、この家電だけは

自分で貯めたDPじゃないんだよなー」って思ってしまった。：気にしすぎ？

かといって丁度良い何か……。と探していると、ある一つのスキルに思い当たった。

（あ、そうだ。このスキルなら。）

考えれば考えるだけ、もうそれしか無いような気がしてくる。

俺はパソコンからとあるスキルを選択した。

「デュエリストアイ レベル3 ↓ レベル4 必要DP10000」

掲示板情報によれば、デュエリストアイのレベル4は特に追加効果が無いらしい。

自分が頑張って貯めたDPを使用して、追加効果のないレベルアップの為に1万DP使うのは中々勇気がいる。

だが今回の1万DPなら、自分が汗水たらして稼いだお金（DP）ではないので気兼ねなく使える。

優先順位は低いがいずればレベルを上げようと決めていたデュエリストアイなら、これ以上ない使い道だろう。必要DPもピッタリだし。

さっそくレベルアップ。ポチっとな。

デュエリストアイLv4

モンスターの表示形式が分かるようになる

モンスターの増援タイミングが分かるようになる

対象のモンスターが効果モンスターか通常モンスターか分かるようになる

カードの成長度合いが分かるようになる

：よしこれでレベルアップできたし次は必要DP2万か次こそはいい効果が追加されるといいなというかまだレベル5にしたプレイヤーはいないのかなまあレベル4は追加効果が無いって話を聞くとレベルを上げるのに躊躇しちゃうよねでもレベル5になった時にそれ以上の効果が得られるなら取る意味はあるんだろうけどでもあれ可笑しいな目の錯覚かな何か効果が追加されるように見えたけど多分疲れてるんだなぼやけて見えたみたいあーあ今日はもうゆっくり寝ようかなって今起きたばかりだったっけどうも頭がうまく回って無いゾ。

一度パソコンから視線を外して目をゴシゴシ。

改めてよく見てみると

カードの成長度合いが分かるようになる

…えーと？どゆこと？

困った時は管理人頼み。すぐに問い合わせる。

『デュエリストアイがおかしいです。ひいきですか？』

すると数秒後、すぐに返事が返ってきた。

『やほー。あげたDPはそれに使ったんだね。あ、今回の件はバグでもひいきでもないよ。元々成長を発現させた人にしか出てこない追加効果だから。詳しくは説明書に追加しとくから。じゃあねー。』

成長を発現させた人にしか出てこない…か。

どうもこの世界？管理人？わからんけど、カードとの相性や、カードを大事にしてるかとかを重要視してるように感じる。それこそひいきレベルに感じる時もあるくらいだ。

つまり逆に言うと、カードを大切にして絆を信じるのが管理人の望みで、強くなる

近道…？

いや、わかんないな。まだ推測の域を出ない。

でも今さらカードたちを雑に扱うつもりもないし、今まで通りでいいか。

で、デュエリストアイの効果についてだけど…えっと、説明書説明書…。

【デュエリストアイ レベル4効果 について】

①カードが『成長』するための一つの条件として、使用頻度（別名カード経験値）が一定以上ないといけない。

②この効果は、その度合い（経験値ゲージ）が視覚的に分かるようになるもの。

③この効果を得たことにより、パソコンに項目が追加され、そこから各カードの経験値の貯まり具合をチェックすることができるようになる。

えーっと、試しに見てみようか。

説明書に書いてあった通りメニュー画面に追加されていた『カード経験値チェック』を選択。

画面左端に縦一列でずらりとカードが並ぶ。

そして各カードの右横にはゲージのようなものが。

戦士の卵 ゲージMAX 成長済

もろ石 ゲージMAX

スリープシーフ ゲージ半分くらい

セイント・ハート・バード3分の2くらい

・
・
・

ふむ、戦士の卵はすでに成長しているから成長済みの文字が。

もろ石は最初期からずっと使い続けてきているので、ゲージはMAXになっているが成長はまだ。

これは他の条件を満たせば成長してくれるって事だろうな。

スリープシーフは他のカードと比べて使用頻度は低めだからゲージはまだ半分くらい。

そして一度成長したはずのセイントハートバードは、ゲージが3分の2くらいになっていた。

(そういえばあの時…。)

カードが成長するには夫々条件があるんだけど、基本的に相性のいいカードの方が成

長はしやすい。

後、良く使うカードも成長はしやすくなる。

で、その条件なんだけど、一つにカードとの絆があるんだ。

どれだけカードを大事に扱ってるか。どれだけカードを、デッキを信用しているかだね。

そして、プレイヤーが心から望んだ時、カードがその思いにこたえてくれれば、プレイヤーの願う姿に成長することがある、ってわけ。

ちなみにカードがどんな成長をするかはその時の状況によって全然違うし、一度成長したカードはそのレベルではもう成長しないからね。

確かに「そのレベルでは」って言ってたな。

ということは、レベルが上がればさらに成長のチャンスがあるってことか！

それなら、全てのレベルで成長させてからレベルアップを行った方がカードは強くなる……？

そう考えが至った時、ピロン♪と音が鳴り、1通のメッセージが届いた。

あ、伝え忘れてたけど、成長・レベルアップ・ランクアップはどの順番で行っても最

最終的にそんなに変わりはないよ。

どちらかと言えば、その時の状況に影響されることの方が大きいからね。

無理に成長やランクアップさせてからレベルアップさせなくても問題ないよん。

管理人

…まるで心を読まれたような気分だ。…まさか本当に読んだりしてないよな？

24話

何はともあれ、効果が無いと思っていたデュエリストアイレベル4に、思った以上の効果がついていたのは僥倖だった。

であれば、もしかしたらレベル5はもったいい効果がつく…？

掲示板上で話題に上がっていないということは、おそらく誰もまだレベル5までは上げていないだろうし、試してみる価値はあるか？

今の俺には知る由もないが、実際のところ他のスキル所持プレイヤー達は、掲示板に書かれていた「レベル4は追加効果なし」の情報を見た為レベルアップに二の足を踏み、唯一レベル4まで上げて掲示板に情報を書き込んだ人も、1万DPという少なくないポイントをつぎ込んだ結果が効果なしだった為、しばらくは手を付けない様になっていた。

レベル4から5に上げるには2万DP必要。

未知の効果の為にそこまで時間を費やすのは…。

ただ何となく、取っておいた方が良いよ。と勘が囁いているようないような…。

えーい！悩んでも仕方がない！

とりあえず今は16階へと降りて様子の確認。

で、問題無く進めそうなら進むし、無理そうならどのみちまたDP稼ぎだ。

どうしても気になるようなら、探索とDP稼ぎを1日交替するのも有りだ。

ともかく、今は16階！

色々悩んだ結果、まずは16階という事に決めて、転移機能から15階へ飛ぶ。

そして下り階段を進み16階。

階段を降り切った時に出て感想は、「草原だけど草原じゃない……」だった。

11〜14階のような、見渡す限り何もない草原とは違い、草原のあちこちに木が生えているように見える。

視覚的にはマシになったのか？

分からないけど、フィールドの傾向を探る為にまたしばらくはウロウロマップ埋めに
なりそう。

一応階段裏のチェックをしたが、どうも簡易転移石は見つからない。

おそらく15階からすぐに降りてこれるためであろう。

階段を降りた向きのまま真っ直ぐ進んで見る。

進行方向に木などの障害物があれば避けて進む。

少し行くとマップに魔物を表す光点が現れた。

ん？この場所は…木の根元かな？

良く見てみると、馬のような動物が木陰で休んでいる。

【ウマシマ A600 D500 攻撃表示 効果モンスター】

うーん、効果モンスター…か。

どんな効果を持つてるか分からないから怖いんだよな…。

ま、なるようになるか。

魔物探知のレベルを上げたことにより、魔物の探知範囲外から情報を得ることができ
る。

俺はゆったりと馬の方へ歩き出す。

しばらく進むと、向こうもこちらの存在に気が付いたようだ。

立ち上がって警戒心むき出しになっている。

「いくぞ、デュエル！俺のターン、ドロー！」

引いたカードは

雑草魂 星1 地 植物族／効果

A200 D300

このカードは1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない。

あれ？成長してる。

特にピンチってわけでもないけど……？まあいいか。せっかくだし召喚だ。

「俺はモンスター（雑草魂）をセット。ターンエンド。」

相手のターンになり、ウマシマは俺の伏せモンスターに向かって攻撃。

「俺の伏せモンスターは雑草魂。このカードは1ターンに1度だけ戦闘では破壊されないー！」

自分しか人間がいなくても、ついこういうのって言っちゃうよね。アニメの主人公のマネマネ。

ウマシマに攻撃された雑草魂は墓地に送られる事無くフィールドに残る。

じゃあこっちのターンだなど思い、カードをドローしようとするも、ディスクにこちらのターンという表示が出てない。

おや？故障かしら？と思いでディスクを見ると、ウマシマは「ヒヒーン」と甲高い声をあげ、何と再び雑草魂へ向かって攻撃を仕掛けてきた。

（うっそ?!?2回攻撃!!?）

その攻撃で雑草魂は墓地へ。そして

【ウマシマ A600↓0 D500 攻撃表示】

(攻撃力が0になつてる…。おそらく2回攻撃できる代わりにデメリットだろうな。)
何にせよこれはチャンス。

「俺のターン、ドロロー！俺はオタマジヤクシンを召喚。攻撃だ！」

オタマジヤクシン 星1 水 水族／通常モンスター

A300 D200

現れた空飛ぶオタマジヤクシ(！)の攻撃でウマシマは倒れ消えていく。

完全に油断していたが、そんな効果のモンスターも出てくるんだな…。

全然ピンチじゃないじゃんって思っていたけど、実際は大ピンチだったんだな。あり
がとう雑草魂。

てか、今回の成長の条件は何だったんだろ？特に俺から願ったわけでもないんだが…

まあ、何か理由があるんだろ。なににせよ、それで助かったのは確かなんだし。

超ファインプレーの雑草魂に感謝を告げて、ウマシマが落としたカードを拾う。

ウマシマ 星2 風 獣族／効果

A600 D500

このカードは2回攻撃できる。2回目の攻撃の後、次の自分のターンまでこのカードの攻撃力は0となり表示形式を変更できない。

思った通りのカードだったな。

だがこれは雑魚戦ならかなり使えるかもしれない。

2回攻撃しなくても、今のデッキ内容なら十分強い部類だし。

予想外に使えそうな効果のカードをゲットできたことで嬉しい反面、ここから先はこのレベルの敵が出てくると思うと不安も感じる。

とりあえずウマシカ：じゃなくてウマシマが他にカードを落とさないか確認して、他の魔物を探してみよう。

それから探索を続ける事数時間。

程よくデッキが回ってくれて、特に苦戦することもなくウマシマを狩っていった。

で、ウマシマのカードとは別に、1枚のカードが手に入ったんだけど、それがこちら。

石の壁 星2 地 岩石族／通常モンスター

A200D800

守備力は高いけど、攻撃力が低いと雑魚戦では使いにくいかな…。

ワンチャン合成素材になってくれれば。

と思っていたら、見事に合成素材でした。

お昼に拠点に帰ってきた時確認して判明。

ベースモンスターはもろ石。そしてそのままレベルアップ。

ストーンゴーレム 星2 岩石族／通常モンスター

A500D1000

ついに守備力が4桁に！

あまり目立たないけど最初期から頑張ってくれてたもんな。

やはり攻撃力の伸びはいまいちだが、その分防御力は高いため、文字通り壁となり他のモンスターのフォロワー役としてこれからも頑張ってもらいたい。

そして昼から再び16階をウロウロして出会った魔物がこちら

【草原の豹 A800 D500 攻撃表示 通常モンスター】

【ミノムシコムシ A400 D400 効果モンスター】

草原の豹（ひょう）は、草原をウロウロしているのをたまたま見つけ、そのまま無言で引き返したよ。

でミノムシコムシは、14階まででてきたレイクフィッシュと同じく、木陰で休んでいるときにいきなり上から落ちてきた。

能力が低めだったので普通に戦ってみたが、このモンスター、少々厄介な効果を持っていた。

ミノムシコムシ 星2 地 昆虫族／効果

このカードが表側守備表示の時、このカードは戦闘で破壊されない。このカードの守備力より高い攻撃力で攻撃された場合、その攻撃後このカードは攻撃表示となる

このカードの効果で守備表示から攻撃表示になった場合、次の自分のターンまで表示形式を変更できない。

最初攻撃したときに倒せなくて焦ったよ。

無事倒せた後で落としたカードの説明を見たときとても納得した。

やっぱり効果モンスターはどんな効果を持っているのかが初見で分からないのが怖いな。

そんなこんなで夕方。

16階を回ってみた感想は、少し厳しいが行けないことは無い、だ。

馬やみの虫は手札によっては問題なく倒せるが、豹だけはちよつと厳しい（倒せないわけではないが）。

今はできるだけ回避して進むのがベストだな。

運が良ければ迂回迂回で階段へ進むことができるかもしれないがどうだろう？

わざわざDPを貯めなおして行く程の難易度でもないし、かといって楽勝で進めるわけでもない。

どうするのがベストなんだろうか？

：そういうえば、他のプレイヤーってどんな風に攻略を進めてるんだろ？

最初のころは割と話題になってたけど、10階超えて手に入るカードがマチマチになつてからはあまり話題に上がらなくなつたし。

せつかくだし、一度聞いてみようかな？

25話

掲示板で「16階の攻略がづらいです」って書いたら、親切なプレイヤーたちが色々教えてくれた。

まず、今現在一番メジャーな攻略方法は、攻略中の階のモンスターが落とすカードを3積みしていく。ということだった。

つまり、初期デツキや10階までで手に入るカードはさっさと外して、11階以降で手に入る強いカードを3枚ずつ（デツキ内に入れられる同じカードは1種類につき3枚まで）入れて、より強いカードが手に入れば順次交換していく。という事らしい。で、大概は倒したモンスターのカードを一番に落とすため、各階の初めはそれを使って相打ちで倒しながら進むとの事。

ま、普通に考えればそうなるわな。

ただ俺としては、よほどのことがない限り相打ちはあまりしたくないと思っ
て、今回の話はあまり参考にならなかった。

だって相打ちはかわいそう…だよな？多分。

昔からそう思ってるはずなんだけど、いつから何故そう思い始めたのかは思い出せな

い。何でだっけ？

ま、その辺の話は今はいいや。

とりあえずはこれからどうするかって事だよな。

色々考えたけど、一応はこのまま進んでいいんじゃないかと思う。

出てくるモンスターの方が強すぎて進むのが無理ってわけじゃないし。

基本は探索・攻略メインにして、時々ストレス発散も兼ねて低階層でDP稼ぎすればいいかな。

方向性が決まれば後はその通り動くだけ。

パツと思いを切り替えて、再び16階へと潜っていった。

だが、俺がダンジョンへ潜ったのと丁度同時刻頃。

掲示板では新情報が流れだしていた。

498

おい、ヤバいの見つけたぞ

499

どうした？バニーガールでも見つけたか？

500

そのネタいつまで引きずるんだよww

501

すまん、かなり真面目な話だ

フィールドにランダムで特殊ボスが出てくるらしい

俺が遭遇したのが、レベル5でA1500・D1000だった

場所は18階

502

ふあ!?

503

まじか!?

504

え？レベル5？ウソですよ？

505

遭遇した状況は？

506

あ、俺も遭遇したことあるわ。確か17階？だったと思う。

507

管理人に問い合わせは？

508

A1500とか勝ち目ないんですけど…

509

▽506

まじか!?!こつちも詳細求む!

510

本当ならかなりやばいぞ

まだ某氏以外誰も20階クリアしてないんだろ？

511

秘匿してないならまだのはず

512

501だ

管理人にも問い合わせ済みだ

というか拠点に帰ってきてすぐに問い合わせたわ

・ダンジョンは10階ごとにフィールドが変わるらしく(草原とか洞窟とか)、管理人側は10〜19階を『エリア10』って呼んでる。

・各エリア(10〜19階とか、20階〜29階とか)にはそれぞれランダムで特殊ボスが出るようになってる(1〜10階は除く)

・その強さはそのエリアのボス(今回なら20階のボス)よりも強い。

・出現場所、タイミングはランダムだが、基本的に出会う確率の方がかなり低い

・基本的には、ひとつ前のエリアの特殊ボスといい勝負ができるくらいの強さらしいので、もし現在攻略中のエリアで出くわしたら御愁傷さま。運が良ければ倒せないことも無い…かも。

・もし倒す事が出来れば、その時点では破格の報酬(強いカードか?)が手に入るらしい。

513

管理人がそこまで詳細を教えてくださいれるって事はまじ話かいな。

501はどうやって負けたん?

514

強すぎてホント草

515

∨ 513

負けた前提かよ！

まあ、負けたけどね。

516

負けたんかー！ーい！

517

ま、そりやそうだろうな

518

で、詳細はよ

519

はりーあつぷ！

520

焦るなつて。

フィールド 森

場所 18階

その時はやけに雑魚が少ないなと思いつながら探索してたら、今まで見たことの無いクマが出てきた。

普段はADしか見えないのに、その時だけはレベル5の表記もあった。

多分特別なモンスターだからだろうな

俺が気付いた時にはもうロックオンされてたみたいで、逃げる事すらできなかつたで、A1500の前に惨敗

数ターンは守備で持ちこたえても、雑魚戦みたいに増援（AD500くらいの小熊だった）もあつて、それからは瞬殺だったわ

530

それって勝ち目あるんですか？

531

”。D。C）ポカーン

532

運が良ければ倒せないことも無い…かも

→

無理やん

実際のところ、管理人サイドは初見で特殊ボスが倒されることを想定はしていない。しかし、奇跡ともいえるカードたちの働きにより、初見で突破したプレイヤーも今まで僅かながら存在した。

彼ら（特殊ボス）に勝つには、自分の持てる力のすべてを發揮し、さらにデッキが、カードが答えてくれたプレイヤーにのみ与えられる勝機を、見事つかみ取る必要が有る。言い換えるなら、特殊ボスはプレイヤー達を試しているのだ。

自分を倒せる力があるのか。そして自分が仕えるべき器であるかどうかを。

とある一つのフィールドにて

そのモンスターは待っていた。

自らを倒す可能性を持つ者を。

自身が仕えるべき者を。

空は青く澄み渡り、風が草木を揺らす。

そんな草原のど真ん中で、自らが待ち望んだ者が来たことを感じ、ゆつくりと体を起こす。

その眼は間もなく訪れるであろう死闘を見据え、爛々と光り輝いている。

顔には威圧感を放つ鬣。牙や爪はいつでも敵を切り裂き、かみ砕けるよう鋭く尖る。

草原を統べる者、百獣の王が、今ここに一人のプレイヤーへと牙をむく。

26話

16階に降りた時、何かいつもと違う雰囲気を感じた。

何が違うかは分からないけど、なんとなく…空気が違う？そんな感じがした。

何とも言えない空気の中探索を開始するが、違和感がベツタリと背中にくつついてる感じがして何だか気持ち悪い。

それでも探索を続けるが、不思議な事に今日は一切魔物を見かけない。

普通ならマップ上に光点が見えてもおかしくなくらいの距離は移動したはずなんだが…たまたまか？

拭いきれない違和感と共に探索を続けているとようやくマップに魔物を表す光点映った。

(お、ようやく出てきたか…？あれ、光の色っていつもこんなだったっけ？)

マップに映る光点は、普段映る物よりも大きく、その色もより濃いように見える。

魔物がいるであろう方向に顔を向けると、そこには遠目からも分かる程の威圧感を放つ、1匹の動物が見えた。

(まだ能力は見えないけど…、向こうは完全にこっちに気付いている…か？)

距離はかなり離れているはずなのだが、どうもこちらにゆっくりと向かってきている気がする。

何だか様子がおかしい気もするが、向かってきている以上逃げるのは無理だろう。覚悟を決めてこちらにも相手に向かって歩き出す。

少し進むと、いつものように魔物の能力が見えた。

「草原の王 レオ レベル5 A1800 D1000 攻撃表示 効果モンス
ター」

「なっ!!?! (レベル5!? A1800だ?!)」

想像をはるかに超えたその数値に、思わず呆然と立ち尽くしてしまふ。

(…無理だ、これは流星に…。せめて1000ぐらいなら何とかかなるかもしれないが、1800…)

どう足掻いても超えることのできない数値に逃げることも忘れ、ぼんやりとその数字を見つめる事しか出来なくなる。

どのみちすでにロックオンされているので逃げることは不可能なのだが、頭の中は混乱し、何も考えられない状態となっていた。

そんな俺の様子に気付いたのか、圧倒的攻撃力を誇るそのライオンはその場で咆哮を上げ、こちらに向かって走り出した。

その声で我に返ったが、だからと言って何かできるわけでもない。

「……………そ。どうせ、逃げられないん……だろ?……なら、もうやるしか…、くそ! やつてやるよー!!!」

俺も奴に向かって走り出す。

互いに速度が上がった為、我彼の距離は一瞬で縮まる。そして

「(例え絶対に勝てないにしても、気持ちだけは負けねえ!!) 行くぞ、デュエル!!」

その距離が残り数メートルとなったところでお互いに足を止め、戦闘が開始される。

「俺のターン! ドロー! ツ!!」

手札：ボロット、スリプ・シープ、セイント・ハート・バード、弱き力の悪霊

初期手札3枚に先行ドローして計4枚。

勝ち目がほぼ無いといっても、決して負けたい訳ではない。何か勝利のための方法を見つけるため必死で脳を回転させる。

俺のカードで最大の攻撃力を誇るのは「風の魔躁士」の800。時点で「セイント・

ハート・バード」の700だ。

モンスター効果を考えるなら、「レッサーワーウルフ」の効果で風の魔躁士をリリースすれば1200まで上がるし、「戦士の卵」も700以上にはなる。

しかしそのどれも、奴の攻撃力には届かない。

「ボロット」の装備効果で200アップ、「弱き力の悪霊」の効果で相手を150ダウンさせても、それでもまだ足りない。

（悪霊でダウンさせてウルフにロボ装備でもまだ250足りない…ん？まてよ？確かあのカード…）

どう足掻いても足りない火力を何とかして捻出しようと頭を悩ませていたが、ふと一枚のカードを思い出す。

（…確か邪蛇は相手を守備表示にする効果があったんじやなかったか？）

11階で初めて手に入れたカード。当時は魔物が落とした初の効果カードだったが効果が微妙だったためか喜びとなった記憶がある。

（雑魚戦では効果を使うことがなかったから詳細まで覚えてないけど、相手を守備表示にさせる効果だったのは確かはずだ！）

最初に感じた効果の微妙さと、雑魚戦では使う必要がなかったこともあり、はつきりと内容は覚えていない。が、今の状況を何とかできるカードだということは確信した。

(ならば今は耐え時だ。幸い悪霊が手札にあるし、相手が守備表示なら突破できるカードの組み合わせは何通りかある。これはワンチャン行けるぞ！)

希望という名の細い糸を見つけ出し、目には闘志が宿る。

「俺はモンスターをセット。ターンエンドだ。」

場にセットしたのはもちろん弱き力の悪霊。

ライオンは一瞬で距離を詰めセットモンスターに飛び掛かった。

裏向きでセットされていたカードがひっくり返され、モンスターが現れる。

相手はその鋭い爪で切り裂くが、

「この瞬間、モンスター効果発動！弱き力の悪霊は戦闘で破壊された時、破壊したモンスターの装備カードとなり、その攻撃力・防御力をダウンさせる！」

破壊されたはずの悪霊が自身を葬ったライオンに纏わりつく。

「グルルウ……」

【草原の王 レオ A1800↓1650 D1000↓850】

よし、ひとまず第一段階はOKだ。

再び俺のターンが回ってくる。

「ドロー……よし、俺はモンスターをセット。ターンエンドだ。」

今ドローしたカードを場にセットする。

先ほどと同じくモンスターをセットしただけの俺に対し、奴は若干の警戒心を持って、いるようにも見えるが、セットされたモンスターを破壊すべく、再びその鋭い爪を振るう。

「セットモンスターは雑草魂！このカードは1ターンに1度、戦闘では破壊されない!!」
雑草魂 A200 D300

切り裂かれても雑草はまたそこから芽を出し成長する。

奴は倒せるはずだったモンスターが倒せなかったことに苛立ちを感じている様子で、俺の回りをウロウロしている。

そしてまた俺のターン。

「ドロー。(く、まだ蛇は引けないか…。それにこのターンは…。)」
引いたカードは風の魔躁士。

「モンスター(スリープ・シープ)をセット。ターンエンド。」

キーカードになるであろう邪蛇のカードがドローできず、守備表示モンスターを並べ、時間を稼ぐ。

しかしこのターンは守備表示モンスターを出し続けて3ターン目。

俺がターンの終了を宣言した瞬間、ライオンの頭上に見える増援バーのゲージが満タ
ンになってしまった。

(増援に出てくるモンスターの能力がどれ程かで、先の展開は大きく変わるな。)
もしこのライオンと同レベルの増援が出てきた日には、もう完全に思考放棄して諦めるしかなくなる。

そうならないことを願いつつ様子を見ていると、奴は予想外の行動に出た。

「グルウ…グルオオオオ!!!」

空に向かい大きな雄たけびを上げた。

羊の時も鳴き声で増援が来ていたので、今回もそうだろうと思って見ていたが、なんだか少し様子がおかしい。

確かに増援は現れた、ちっさな子ライオンだった。

【子獅子 A500 D500 攻撃表示 通常モンスター】

思ったより能力が低いことに安堵するのもつかの間。まだ俺にターンが回ってきてないこと、そして奴の頭上に見える増援ゲージが0に戻っていないことに気づく。

(え? どういう…)

答えが出る前に、再びライオンは雄たけびを上げる。

するとさらにもう1匹の子ライオンが場に現れる。

(まさか!?! 召喚能力を持つてるのか!?)

そう気づいたとき、ライオンの能力表示に変化が現れた。

草原の王 レオ 星5

A1650 (1800) D850 (1000)

攻撃表示 効果モンスター

①1ターンに1度、「子獅子」を場に特殊召喚できる。この効果を使用したターンこのカードは攻撃できない。この効果で特殊召喚された子獅子は、召喚されたターンは攻撃できない。

(まじか…。相手が効果を使用したから詳細が分かるようになったって事か?)

実際に人間同士のデュエルでは、知らない効果のカードは場に出た時点でお互いに説明・確認をするだろうが、アニメなどではその効果を発動するまで説明がされないことも多い。

今は人対人ではないので、こういう形になったのだろう。

でも今まで戦った効果モンスターではこんな表示は無かったような…?

まあいい、これは後で管理人に確認だ。

しかし、これで相手の場には一気にモンスターが3体になった。

予想外の効果に動揺するが、俺にできる事はデッキを信じてカードを引くことだけだ。

効果を使用したため相手のターンが終了し、こちらのターンとなる。

「俺のターン、ドロロー！ つー！」

邪蛇 星2 爬虫類族／効果

A300 D300

このモンスターが攻撃を行ったターンのエンドフェイズ時、攻撃を受けたモンスターが破壊されなかった場合、そのモンスターは守備表示となり表示形式を変更できない。この効果は次の自分のスタンバイフェイズまで続く

ついに待ち望んでいたカードを引いた！

そしてその効果をよく確認すると、ピンポイントすぎじゃね？と思えるほどのメタ効果だった。

(これなら…お、ひよつとしてこのまま勝てるんじゃないかね?)

例えばこのカードを召喚し、レオに攻撃を仕掛けた場合、邪蛇は破壊され俺自身もダメージを受けるが、その代わりに、次の自分のターンが終わるまで奴は守備表示のままとなる。

これなら、弱き力の悪霊の効果で能力ダウンしている今、ボロットの能力アップ効果を合わせれば手札のセイント・ハート・バードで倒せる!!

27話

想像以上の効果を持つていた蛇に、心の中で歓喜の声を上げながら（効果詳細を覚えていなかったことは棚に上げて）召喚を行う。

「俺は邪蛇を召喚！そして草原の王レオに攻撃だ！」

「シャアアア！」

果敢に攻撃を仕掛ける蛇。しかし攻撃力300ではまるで力が足りず、逆にカウンタで倒されてしまう。

だが、これでいいのだ。

LP2000↓650

ライフもかなり削られる。しかし

「俺はターンエンドだ。そしてこの瞬間、邪蛇の効果発動！お前は次の俺のターンまで守備表示になる！」

「グルウ!?」

一瞬驚いたような顔をした…：ような気がする。

「こちらの言うことが理解できてるのか…？」

ライオンは強制的に守備表示となりその体をしゃがませる。

なんとも恨めしげな表情でこちらを見ているが、強制的に守備表示にされたため動くことはできない。

ただ顔を動かし子獅子に何か指示を出したようで、子獅子2体は雑草魂に向かって攻撃を仕掛けてきた。

(やはり言葉を理解しているのか?)

先ほど雑草魂が攻撃対象になった時その効果を説明したが、今の攻撃はそれを理解したからこそ指示できたことではないだろうか?

又はゲームのCPUみたいに表側表示のカードはすべて理解できるのか?

蛇の効果が見事に通り心に余裕ができたからか、破壊された雑草魂を見ながらそんなことを考える。

ちなみに羊戦の時には連続で増援が出てきたが、今回は邪蛇が攻撃を仕掛け効果も発揮したことで、ゲージはさほど増えていない。

そしてやってきた自分のターン。

「俺のターン、ドロー!」

火の玉 A300 D200

勝ちを確信しているため余裕の表情だ。

こちらの場には裏側守備表示のスリープ・シープ1体、あちらの場にはレオと子獅子が2体の計3体。

「俺はセイント・ハート・バードを召喚。そして手札よりボロツトの効果発動！」

場に美しい鳥が現れ、その鳥に細かな機械が装着される。

【セイント・ハード・バード A700↓900】

「セイント・ハート・バードで攻撃！」

邪蛇の効果で守備表示になっている草原の王レオ。

案外あつけなかったな。と思いながら攻撃の指示を出す。

俺の指示に従い、ライオンに向かって羽を広げ、いざ攻撃しようと飛び上がった時、それは起こった。

「…グルウ…、グラアアアア!!!」

いきなり雄たけびを上げたライオンに気圧され、思わず腕で視界をふさぐ。

だが特に何か起きたような気配は無かったため、腕を下げ改めて攻撃指示を出そうとした時に気づいてしまった。

(なっ!?バードが守備表示に!?)

そう、今まさに攻撃を仕掛けようとしていた俺のカードが、気が付けば守備表示に

なっていたのである。

まさか奴の効果か？という考えに至った時、ライオンの能力表記に追加で文字が現れた。

草原の王 レオ 星5

A1650 (1800) D850 (1000)

守備表示 効果モンスター

①1ターンに1度、「子獅子」を場に特殊召喚できる。この効果を使用したターンこのカードは攻撃できない。この効果で特殊召喚された子獅子は、召喚されたターンは攻撃できない。

②1ターンに1度このカードが表側守備表示の時に発動可能

このカード以外の場のモンスターカード1枚を選択し、そのカードの表示形式を変更する。

この効果は相手ターンでも使用できる。

(くそっ！そんな効果が！)

そういえば先の効果が表記された時に「①」とあったことを今になって思い出す。

①とあるなら②がある可能性が高いという考えがすっかり抜けていた。

いや、今はそんなことはどうでもいい。

それよりもこのままでは…。

俺はできる事がなくなりターンエンドを宣言する。

するとライオンはゆっくりと起き上がり、一瞬で距離を詰めセイント・ハート・バードを切り裂いた。

「くっ！セイント・ハート・バードの効果…発動！」

墓地から雑草魂を復活させる。

しかし獅子2体からの攻撃ですぐさま墓地へと戻ってしまう。

…やばい。非常にやばすぎる。

これ以上ない効果だと思っていた表示形式変更になんかこんな落とし穴があるなんて。

悪霊の効果で能力ダウンはされているが、どのみち俺のデツキのカードじゃあ守備表示にさせないと、とても火力が足りない。

かといって守備表示の奴に攻撃しようもんなら、今みたいにこちらの表示形式を変更されてしまう。

いったいどうすれば……！

手札：「風の魔躁土」「火の玉」

自分フィールド：「スリープ・シープ」
 相手フィールド：「レオ」「子獅子」「子獅子」

現状を確認し、デッキ内カードの組み合わせで何とか手が無いか考える。

（火力アップ…いや、表示形式変更は1ターンに1度、2体以上効果力モンスターを出せれば…出せ…ないか…）

が、いくら考えても妙案は生まれぬ。

「（こうなったらこのドロローに、カードの成長に賭けるしか…）俺のターン、ドロロー！」

魔物の骨 星1 闇 アンデット族／効果

A200 D100

このカードが破壊された時、自分フィールドに骨トークン（レベル1闇アンデット族 A100D100）を1体特殊召喚することができる。

ぬ？何か思ってたんとちよつと違うけど…、ど、どうする？

普通に考えれば子獅子の攻撃に耐えられる風の魔躁士を召喚するべきだが、このタイミングで成長して手札に来たということは…？

ぬぬぬ……、悩む、悩ましいが…

ドローした魔物の骨と、手札の風の魔躁士を見比べ、どちらを召喚すべきか悩む。
むー……ん、、、 ええい！もう悩んでも仕方ない！お前を信じる!!

「俺はモンスターを（魔物の骨）セット。ターンエンド。」

若干自棄になりつつも、今来たこのカードに意味があると信じ場にセットする。
相手のターン。

ライオンたちはどのカードに攻撃するか慎重に見定めているようだ。

（子獅子羊に攻撃してくれれば1体残るんだが…。）

運が良ければスリープスリープ又は骨トークンが場に残る。

そう期待していたが現実残酷で、まずレオの攻撃でスリープスリープが破壊。

続いて、2体の子獅子の攻撃で魔物の骨と骨トークンが破壊された。

俺の場にはモンスターは0。

やはりさっきのターン、魔物の骨ではなくて風の魔躁士を出しておくべきだったか

…。

そうすれば今頃場にはまだモンスターが1体残っていたはずだ。

…いや、まだわからん。

今から引くカードによっては、風の魔躁士を召喚していた場合それが間違いになる可

能性もある。

魔物の骨が破壊され墓地に送られたことに意味があるカードが来るかもしれない。

：いやいや、カードが成長する前提で考えているが、もしかしたらそんなことも無く終わる可能性だって高いはずだ。

ふう…。

一息ついて心を、頭を冷静にさせる。

（元々負けて当然の能力を持つ相手だ。カードの成長頼みにしているようじゃまだまだ本当に実力不足だよ。…でも、今までも色んなピンチでカードたちは、デツキは答えてくれた。もしカードが、俺を信頼してくれているのであれば、俺はそれに応えたい。運がいいだけで自分の実力じゃない？ご都合主義？何とでもいえばいいさ。ここはそういう世界で、俺にできる事は、そんなカードたちのために、共に戦うことだけだ…！ここで引いたカードが何であれ、俺は後悔しない！）

「行くぞー俺のターン…、ドローっ！！！」

もはや自分の力だけではどうにもできない。

ならばこれまで共に過ごしてきたカードたちに全てを賭けるしかない。

運命のドロ…!!!

28話

「ドローっ!!!」

スモール・キャット 星1 風 獣族／効果

A200 D200

自分の場のこのカードをリリースすることで発動することができる。

自分の手札を全て墓地へ送り、送った枚数デッキからドローする。

これは…

(ドローカード…か。なら行くところまで行ってやる!)

「俺はスモール・キャットを召喚、そして効果を発動させる!このカードを墓地へ送り、手札のカードもすべて墓地へ送る。手札から2枚墓地へ送ったことにより、俺はデッキから2枚ドローする!」

おそらくこのドローですべてが決まる。

俺はデッキに手をかけ祈るように願った。

(もし俺を信頼してくれているのなら、俺に力を貸してくれ!!)

…そうだ、デツキを信じるんだ……

「……ドローっ!!」

その時、俺の引いた2枚のカード、そして墓地のカードが一瞬光輝いた…気がした。

修行中の見習い天使 星1 光 天使族／効果

A300 D300

このカードを手札から墓地へ送り、その後墓地にあるこのカードのレベルと同レベルのモンスターカードを全て除外することで、自分の場のモンスター1体を対象に発動可能

このカードの効果で除外されたモンスターカード（このカードを除く）1体につき対象のモンスターの攻撃力はターン終了時まで200アップする

竜の赤子 光 星1 ドラゴン族／効果

A300 D300

この効果は1デュエル中1度しか使えない

このカードを対象とする、攻撃力又は防御力を増減させる効果は、本来の増減値の倍

となる。

この効果を使用したターンのエンドフェイズ時、このカードは破壊される

(「これなら…、これならいける!」)

現在墓地のカードは、「雑草魂」「邪蛇」「セイント・ハート・バード」「ボロット」「スリープ・シープ」「魔物の骨」「スモール・キャット」「風の魔躁士」「火の玉」の9体。

そのうち修行中の見習い天使のレベルと同じ『レベル1』のモンスターは5体。

天使の効果で1体につき2000ポイント攻撃力がアップし、さらに竜の効果でそれが倍になるなら、攻撃力は20000アップとなる。

これならレオが攻撃表示でも問題なく倒せる!

だがしかし、このターン俺はすでにスモール・キャットを召喚している。

1ターンに通常召喚できるのは1体だけ。

かといって次のターンまで凌ぐことは不可能だ。

まさかのここで手詰まり!?と思ったが、先ほど墓地からも輝きを感じた気がしたこと
を思い出した。

そこには

火の玉 星1 炎 炎族／効果

A300 D200

このカードが墓地にある時、このカードを除外することで発動可能

手札よりこのカードのレベルと同レベルのモンスターカードを特殊召喚し、召喚したモンスターの攻撃力分のダメージを受ける。

この効果で特殊召喚されたモンスターは、召喚されたターンのエンドフェイズ時に破壊される。

(は、はは……。本当に答えてくれたよ。)

狙いましたかのような効果を身に着けてくれたカードたち。

ならば後は俺がそれに答えるだけ!!

「俺は、墓地の火の玉の効果を発動。このカードを除外することで、手札より同レベルのカードを特殊召喚できる。出でよ、竜の赤子!!」

俺のフィールドに、小さな竜の赤ちやんが現れる。

その見た目は幼くとも、内に秘めた闘志はまさにドラゴンのもの。

幼さを感じさせながらも雄々しく鳴き、その存在感を示す。

「…火の玉の効果でモンスターが特殊召喚された時、そのカードの攻撃力分ダメージを受ける。」

LP650↓350

思えばこんなにライフが減ったのは何時ぶりだろう。

おそらく10階のボス以来か？

ま、とは言えそのダメージのほとんどは邪蛇の自爆特攻で食らったものなんだが。

だがここまでくればもう残りライフは関係ない。

「続いて、手札から修行中の見習い天使の効果を発動。このカードを墓地へ送り、このカードと同レベル、つまりレベル1のモンスターカードを全て墓地から除外する。俺の墓地にあるレベル1モンスターは、雑草魂、ボロット、魔物の骨、そしてスモール・キャット
トの4体。」

火の玉は自身の効果で除外された為すでに墓地にはいない。

「これらのカードを除外することで、1体につき200ポイント、俺の場のモンスター1体の攻撃力をアップさせることができる。4体×200ポイント、800ポイントアップだ！」

俺の宣言を聞き、墓地のカードは除外（墓地とは違う場所へ移動）されるが、その際各カードから光の玉のようなものが浮かび、場の竜の赤子へと吸い込まれていく。

「さらに竜の赤子の効果発動。このカードの攻撃力又は防御力が増減する効果を受けたとき、その増減値を倍にする。つまり、本来の800ポイントアップは倍となり、1600ポイントのアップとなる！」

光の玉を吸収した竜の赤子は、その体をぐんぐんと巨大化させる。

間違っても『赤子』とは呼べないほどに大きくなった竜は、立場が逆転したことにより引きつったような表情をしている（気がする）ライオンを睨む。

「竜の赤子で、草原の王レオに攻撃！ドラゴンプレス!!!」

「ギユアアアア!!!」

俺の指示に従い、竜の赤子は口から高温のプレスを放つ。

グ、グルオオアアア……

その攻撃力はすさまじく、あれほど恐怖をばらまいた高攻撃力を誇るライオンをいとも簡単に消し飛ばした。

ボスがやられたことにより、増援で現れていた子獅子たちは皆一目散に逃げていく。どうやらボスを倒せば取り巻きは一緒に消えるようだ。

すっかり頭になかったけど、もしこの獅子たちが場に残るようならば、『ボスは倒したけどその後取り巻きの雑魚にやられる』っていう、RPGとかでも情けない負けランキングに入る負け方の経験をするところだった。

ま、何はともあれ…

「勝ったぞ——————」
「!!!!!!」

無謀と思われた戦いに、勝利することができた。

29話

無事強敵を倒した後、俺は草原に大の字で寝転がっていた。流石に今回は精神的にもだいぶ疲れた。少し休憩したい。激戦で火照った体に程よい風がとても気持ちいい。

しばらくして、思い出したかのように起き上がり、自分のデュエルディスクを見る。
(除外の効果は墓地とは別のところに送られるだけ…だな。)

元の世界のでは当然だったが、この世界では魔物が実体化する。除外という言葉から、もしもの事(ずっとデツキから取り除かれたまま)の可能性を考え不安に思っていたが、どうやら杞憂だったようだ。

そのまま「よいしょ」と起き上がり、ライオンがいたあたりへ足を向ける。
するとそこには1枚のカードが。

草原の王 レオ 星5 地 獣族／効果

A1800 D1000

1ターンの1度、獅子トークン（レベル1 地 獣族 A500 D500）を場に特殊召喚できる。

この効果を使用したターンこのカードは攻撃できない。

この効果で特殊召喚されたトークンは、召喚されたターンは攻撃できない。

むむ…？若干弱体化してる。

あの辛酸を舐めさせられた効果は使えないのか。

まあしかたない。ここから成長やレベルアップしていけばまた変わるかもしれないし。

つてか、レベル5か…。今のところ某氏が20階突破した時の報酬で手に入れただけって聞いているけど、他にも入手方法があったって事なんだな。

でもこれはかなり強力だな。今回成長した魔物の骨や、雑草魂とかの効果と合わせれば召喚しやすいし。

と、そんなことを考えていると、いきなりメッセージが聞こえてきた。

「おめでとうございませう。全プレイヤー中初の特殊ボス討伐者となりました。拠点にて報酬をお受け取りください。」

ん？特殊ボス…？

確かにものすごく強かったし、特殊ボスなんて名前がついていたのには納得だが…確か今までそんな情報は出てなかったはずだよな？やべつ、俺が第一発見者か!?

よし、これはぜひとも掲示板に乗せねば!

俺は帰還石を取り出し拠点へと戻った。

そして早速掲示板に今回の詳細を書こうと思ったら

「…なんだよ、もう情報出てるじゃん…。つてかこの時間つて俺がダンジョンに入った直後?あー…もうちよつとゆっくりして行けばせめて存在の情報は分かったのに…」

自分が第一発見者ではなかったことに若干へこむ。

(ただ、掲示板では現時点では絶対に勝てないって書いてあるけど、…勝っちゃったんだよね。)

そう、他の特殊ボスに遭遇したプレイヤーたちの中で、無事討伐に成功したものは誰一人としていなかったのだ。

(これはまた成長の時みたいに…いや、それ以上に信じてもらえないかもな。)

中には信じる人もいるだろうが、その他大勢に嘘つき呼ばわりされるのも面白くない。

ま、今回は書かなくてもいいかな…。

結局掲示板には特殊ボスに勝ったことは書かずに様子を見ることにした。そのうち誰かが倒した時に、俺も俺も！って便乗させてもらおう。

さて、次は…報酬だな。

前に管理人から説明のあった『個人ボーナス』ってやつに当たるんだろう。

どれくらい貰えたのかなー。

【全プレイヤー中初特殊ボス討伐ボーナス 25000DP を入手】

おお？結構もらえたぞ？

難易度的には今の時点で挑んだからこそ厳しかっただけで、本来はもつと先に進んでから戦う相手だったんだろうし、DPとしてはそこそこか？

まあいいや、貰えるものはしっかりと貰いませよ。

問題はこのDPを何に使うかだけ…。

DP交換リストを流し見しながらDPの使い道を考える。

とは言え、前回のDP稼ぎの時に粗方確認はしているから、特に目ぼしいものがこれといってあるわけでもない。

んー、となると…。

候補に挙がるのは所持スキルのレベルアップ。

マツピングや魔物探知はレベルが高ければ高いほどいいから優先度は高め。

体力増強はロツク掛かっているし、俊敏性増強は体力増強がレベルアップするまでは上げたくない。

成長促進は効果がどれだけ上がっているのかわからないけど、できるだけ高めにはしておきたいね。これも割と優先度高め。

初期手札増やライフ増は直接バトルの有利さに直結してくるため、正直これが一番候補。

ただ、自分の中で一番気になっているのはこれ。デュエリストアイ。

レベル4に上げたときは、元々追加効果がないと思いついていたところに、成長に関する追加効果があったわけだから、レベル5はもつと良い効果のはず。

デュエリストアイの名前から、またこれまでの効果から、見えるものに関する効果が現れると思うんだけど…

うーん、悩ましい…。

しばらく悩んだ末、今回のレオとの戦闘からLPの大事さを感じ、ライフポイントを増強することにした。

…が、直前になって「本当に…それでいいの…？」と脳内のもう一人の自分が囁いて

くる。

再び悩みなおし、「こっち!」「いやあつち」「やつぱりそつち!」と繰り返して、最終的には自分では決めきれなくなり、カードで決めることにした。

○○が出たらマッピング。みたいに割り振りを決めて、デッキをよくシャッフルしドロ。

結果デュエリストアイのレベルを上げることになった。

ちなみに引いたカードは『出目金』。初期デッキの内の1枚で魚属のカードだ。

何となくその大きな目が「絶対デュエリストアイ!!」と強く訴えているような気がした。

そんなこんなでスキルレベルアップ。2万DPを使用してレベルを5に上げる。

2万DP:、お、惜しくなんかないんだからね!

画面をタップする指が若干震えている気がするのは気のせいだろう。

ポチツつとな

デュエリストアイLv4↓5

- ① モンスターの表示形式が分かるようになる
 - ② モンスターの増援タイミングが分かるようになる
 - ③ 対象のモンスターが効果モンスターか通常モンスターか分かるようになる
 - ④ カードの成長度合いが分かるようになる
 - ⑤ モンスターの落とすカードの種類枚数が分かるようになる
- D P 交換リストの詳細が少しわかるようになる。

お？おおお？

30話

ボーナスで貰ったDPをつぎ込んでレベルアップしたデュエリストアイの効果を見
て思わず椅子から立ち上がる。

・モンスターの落とすカードの種類枚数が分かるようになる

・DP交換リストの詳細が少しわかるようになる。

効果が二つ追加されてる！

しかもぱつと見どころもよきそうな効果だ。

まず一つ目の効果だが、これについては正直前から気になっていた。

掲示板情報によれば、魔物によつて、又プレイヤーによつて落とすカードの種類や枚
数が違った為、かなり不公平なのでは？と思つてたんだ。

俺が倒したことのある魔物でも、カードを3種類落とすやつもいれば、2種類しか落
とさないやつもいた。

そう言うものと言われればそれまでなのかもしれないが、何か違和感を感じていた。

だが、デュエリストアイにこんな効果が追加されると言うことは、もしかしたら今ま
で倒したことのある魔物でも、まだ落とすことのないカードを持つてるやつがいるの

かもしれない。

例えば、レアなカードは落とす確率、所謂ドロップ率が低いとか、もしくは特殊な条件を満たさないと落とさないとか。

それが分かるなら、これは結構有用なのではなからうか。で、二つ目の効果。

今まではDP交換リストにはその名称のみ記載されていて、実際に交換してみないと詳細は分からなかった。

しかしこのスキルがあれば、ある程度の詳細が分かるようになるのだろう。早速DPリストを開いて確認してみると

- ・「料理」料理の知識が身につく、料理が上手になる
- ・「夜目」暗いところでも目が見える
- ・「清掃」そうじの知識が身につく、そうじが上手になる

…うーん、微妙？

確か前に掲示板で、「清掃」のスキルが異世界転生物の小説でよく出てくる「クリーン」※魔力を使つて一瞬できれいにする魔法 だと思ひ込んでいたら、ただのお掃除能力が上がるスキルだった。つて失敗談が書いてあったことがある。

そういった凡ミスをなくすことはできるけど…

まあ、効果は『詳細が少し分かるようになる』だ。

もしかしたらスキルレベルを上げればもっと詳しい内容が分かるようになるかもしれない。

ただそのころには、粗方掲示板で情報が出回ってる可能性は高いけどね。

ま、とりあえず悪くはない。むしろ一つ目の効果はデツキ強化につながる良スキルになるかもしれない。

じゃ、さっそく検証に行ってください！

念のためすべての魔物を確認したくて、1階から降りていく。

ちなみに1〜4階には3種類の魔物がいて、夫々3種類のカードを落としていた。

6〜9階では4種類の魔物が出現し、そのうち3体は3種類、残りの1体は2種類のカードを落とす。

つまり合計で20種類のカードとなり、それが初期デツキのレベルアップ素材の内の一枚となっているわけだ。

で、この最後の1体。こいつだけ2種類しかカードを落とさないから前から少し不思議

議に思っていたんだが、これはもしかしたらあるかもしれない。

1階でガイコツに遭遇。最初のころはこいつ相手に頑張ってDP稼いだなあ…。
能力値の横に小さくカードの絵が見える。

カラーの3枚のカード、これはガイコツが落とすカードだな。

他に何も見えないってことは、ガイコツはこの3種類のカードしか落とさないって事
だろう。

サクツと倒して次。

2階、3階で出てくる魔物も同じように3種類のカードのみ確認できた。

そして4階5階と進み6階。ここで新たに出てくる魔物は2種類。

どちらも3枚のカードしか見えない。

そして7階。ここで残りの2体が現れるはずだが…。

マップを見ながら魔物を探す。そして見つけた2体の魔物の内、1体は3種類のカー
ドのみ確認。

そして今まで2種類しかカードを落とさなかった魔物は

(ビンゴッ!!カラーのカードが2枚と、真つ黒なカードが1枚!)

今まで落としたことのない3枚目のカードを持っていることが判明した。

（今までDP稼ぎのためにこいつはかなりの数倒しているはずだが、それでも出てこなかったってことは、単純にドロップ率の低さと考えるよりも、条件があると考えるべきか？）

だとすれば条件は何か？という話になるが、今はとりあえずサクツと倒して考えることにする。

今更このレベルのモンスターに苦戦することは無いので問題なく倒す。

そして現れたカードを拾うと

真実を写す目 魔法カード

相手のモンスターゾーンにある裏側表示のカードを1枚だけ確認できる。

この際、リバース効果は発動しない。

「おおっ!？」

もし条件付きドロップなら、今までの戦い方などを思いだして、ドロップする条件を探る必要があるな。と考えていた矢先にいきなりゲットできてしまった。

すでに条件を満たしていた…？

前にこいつと戦った時から今までの間で変わったこと…。

一番有力なのは、デュエリストアイのレベルが上がったから…？か？

とりあえず、あと数回同モンスターと戦い、カードの出現確立を調べてみると、大体今まで落としていた2種類と、今回の魔法カードが三分の一ずつ（つまり同確立）で出てきた。

つまり、先ほどのデュエルがたまたま条件を満たしていたというわけではなく、すでに満たされた状態ということだ。

そしてあれほどの数を倒しても一切出てこなかったカードが急に他のカードと同じ割合で出てくるようになったことは、ただドロップ率が低かったってわけでもないだろう。

ならばやはりデュエリストアイが原因の可能性が非常に高いと思われる。

まあまだサンプルが少ないから、一旦かえって休憩した後は11回以降も確認してみよう。

というわけで拠点で食事休憩。

その後転移機能で10階へ。

階段を下りて11階。確か蛇は3種類落としてたんだっけ？

マップを見ながら魔物を探す。

近くに見つけた邪蛇は、やはり入手済みのカードが3枚確認できた。

(確か羊からは2枚しか手に入れてなかったような…。あ、あとレイクフィッシュは倒した回数自体が少ないから、普通にまだ何か落としてくれるかも。)

頭の中でどのカードをどの魔物が落としたか思い出しながら進む。

そしてしばらく歩いてスリープシープと遭遇。

(お、1枚黒いカードになってるな。)

攻撃表示なのを良いことにサクツと倒す。

現れたのはスリープシープのカード。

一応後2、3匹攻撃表示の羊を探して倒したが、既出の2枚のカードしか落とさない。別に条件があるのか…？

とりあえず羊は後回しにして他の魔物を確認する。

オアシスまで進み、レイクフィッシュが出るのを待つ。

出てきた瞬間強カード(風の魔躁土)でサクツ。

落としたのは初めてのカードだった。

水を得た魚 装備カード

水属性のモンスターにのみ装備可能。

このカードを装備したモンスターの攻撃力と防御力は1000アップする
装備カードか…

効果は高くないが、今のデッキなら中々使えるかも。

レイクフィッシュは今まで自身のカードしか落としたことがなかったが、黒いカードが2枚表示されていたので、今回ゲットしたカードを除き、あと1種類カードを落とすということになる。

その後数度レイクフィッシュとの戦闘を繰り返したが、結局最後の1種類をおとすことは無かった。

31話

拠点に帰り、今回の結果を頭の中でまとめる。

今のところ全て推測の域は出ないけど、おそらくこの考えが合ってる可能性はかなり高いだろう。

まず1つ目

『各魔物がドロップするカードは1体につき3種類ずつ』

これは今まで確認した魔物が皆そうだったから、おそらく間違いないだろうと思う。まあ、もしかしたら先に進めば違う可能性はあるけど。

次に2つ目

『入手するのに条件が必要なカードがある』

スリープシープやレイクフィッシュはいくら倒しても3枚目のカードは入手できなかった。

まだ低ドロップ率の可能性も捨てきれないけど、おそらくは特殊な条件が必要なのではないかと思う。

3つ目

『デュエリストアイをレベル5にしたことで入手できるようになったカードがある』

7階で手に入れた魔法カード『真実を写す目』は、十中八九デュエリストアイが条件になっていたであろうと思われる。

こんなところかな？

まだ12階以降の魔物は調べてないけど、とりあえず分かったことぐらいは掲示板に書いておいていいかな。

これに関しては、『成長』や『特殊ボスを倒す』と違って、DPさえあればだれでもすぐに確認できることだから、嘘だと思われる可能性は低い。

それに興味を持つてスキルを取ってくれる人がたくさん出てくれば、その分有益な情報も出やすくなるだろうし。

パソコンに向かい掲示板を開く。

一応すでに情報が出てないかだけチェックして、今回の件を書き込む。

「えつと、デュエリストアイをレベル5に上げて見ました。つと。：お、食いつきが早いな。」

時間帯的にそれなりに住民はいたようだ。

たくさんさんの情報クレクレ星人がクレクレコールをしている。

「効果がこれで…、…今確認してきました…。よし。」

検証内容と自分の推測を書き込む。

後は興味ある人と検証好きな人が色々調べてくれるだろう。

DPが足りない！と嘆く他プレイヤー達が、効率のいいDPの稼ぎ方の話に移行したので俺は掲示板を閉じる。

「さて、と。そういえば魔法カードってレベルアップ…はしないだろうけどランプアップはできるのかな？」

ふと疑問に思い『レベルアップ・ランクアップ』のページを開く。

「えーと、現実の…なんだっけ？…と?！」

現れたカード一覧から魔法カードを探そうとするも、なんだか載っているカードの枚数が多い。

よく見ると、今日1階〜9階で手に入れたカードたち(AD100)が、普段俺が使っているデッキのカードたちと共にずらりと並んでいた。

「そうか、こいつらだつてレベルアップできるよな。」

能力の低さからデッキに入れることなく全てDPに変換されていたカードたちだったが、ここにきてレベルアップ可能だったことに初めて気づく。

「ま、一応見てみようか。えーと、ガイコツは、と。」

ガイコツのカードを選択。画面が切り替わり3枚のカードが現れる。

1枚はガイコツ、2枚目は…あれ？カラーになつてる。つてかこのカード、6階か7階で手に入れたAD100のカードじゃね？

で、3枚目はイコールの先の黒いカード。ということとは

「この2枚だけでレベルアップできるのか？かなりお手軽だな…。」
若干拍子抜けした感じだが試しにレベルアップを実行する。

ガシヨン、ペカー

ワイト 星2 闇 アンデット族／通常モンスター

A500 D500

うん、レベルアップしたね。

…ちよつと、簡単すぎひん？

掲示板ではそんな情報出てなかつたような気がするけど…、まさかまだ誰も見つけて

ない…？

まさかな。

ま、まあ一応、他のカードも確認しておこう。

何とも言いようのない気持ちになりつつも、他のカードを確認していく。

するとどのカードも、自身と1〜9階で手に入るカードのいずれかの2枚でレベルアップする事ができた。

で、ここからさらに驚きの発見をしたのだが、1度間違えて（指が滑って）デッキ内で使用中のカードを選択してしまった時、そのカードのレベルアップに必要な素材の1枚に、たった今レベルアップさせたカードの内の1枚が含まれていたのである。

そのままの流れでデッキ内のカード全てを確認すると

（これ、初期デッキのカードがほぼレベルアップできそうなんだが…。）

まさかの初期デッキのカードたちのレベルアップ素材として、これらのカードが使用できることが判明した。

（なんか、今まで苦労してレベルアップしてきたけど、こんなに簡単でいいのか…。）

セイント・ハート・バードや風の魔躁士、ストーンゴレムのように、それなりに強い魔物との戦闘の未レベルアップしたのと比べると、驚くほど簡単にレベルアップできたことでまたもや何とも言えない気分になる。

まあ、カードが強くなることに文句はないのだが…

(というか、掲示板に乗っていないってことは、誰も試したことがないって事か?)

実際はある一部を除き、他プレイヤーの主流はほとんど現カードと強カードを入れ替えていく方法だ。

なので、彼らがレベルアップを必要とするカードのリストに、AD1000のような弱いカードは入っていないのである。入手したカードはすぐにDPに変えられているため、気づかないのも当然だ。

ただ、実はごく一部にコレクター気質の非常に強いプレイヤーもおり、彼らはデッキに入れないカードも全て、保管用として残してある。

なので、彼らがレベルアップシステムを使えるようになった時点で、AD1000モンスターもレベルアップ可能なことには気づいていたのだが、総じて彼らは口下手にして、もっぱら掲示板も見る専だったので、自ら情報を上げることも無く、結果ここまで情報が出回ることがなかったのだ。

まあ、ひよんなことから一気にデッキパワーを上げることができたが、元々はデュエリストアイの検証途中だった…よね?

何か想像と全然違うことが起こったけど、気を取り直して12階以降の確認もしてい

きたいと思います。

◆今回レベルアップしたカードたち

魔物の骨 ↓スケルトン

A 2 0 0 D 1 0 0 ↓A 6 0 0 D 6 0 0

電気子ネズミ ↓電気ネズミ

A 4 0 0 D 1 0 0 ↓A 8 0 0 D 5 0 0

竜の赤子 ↓力秘めし小竜

A 3 0 0 D 3 0 0 ↓A 8 0 0 D 8 0 0

弱き力の悪霊 ↓呪霊

A 3 0 0 D 3 0 0 ↓A 7 0 0 D 7 0 0

火の玉 ↓青白き火

A 3 0 0 D 2 0 0 ↓A 5 0 0 D 3 0 0

スモール・キャット ↓泥棒猫

A 2 0 0 D 2 0 0 ↓A 8 0 0 D 5 0 0

ボロット ↓ 自立型支援ロボBーRT02			
A300	D300	↓ A700	D800
リスクイー・モスキート ↓ 吸血虫			
A300	D100	↓ A700	D500
修行中の見習い天使 ↓ 見習い天使エリー			
A300	D300	↓ A700	D900
影トカゲ ↓ 黒トカゲ			
A300	D200	↓ A700	D700
恐竜ベイビー ↓ ダブルホーンザウルス			
A300	D200	↓ A900	D400
雑草魂 ↓ 茂る草壁			
A200	D300	↓ A400	D800
オタマジヤクシン ↓ ゲコガエル			
A300	D200	↓ A800	D700
出目金 ↓ ビックアイフィッシュ			
A300	D100	↓ A800	D600

32話

一晩経って、次の日。

昨日の続きの12階からデュエリストアイの効果の確認をしていこうと思う。

思いがけずデツキのパワーアップができたから、前と比べるとかなり楽に進めると思う。

さて、12階に出現する魔物は…、確か角兎とカンガエル、それとレイクフィッシュ。

そのうちレイクフィッシュは確認済みで、角兎は2種類入手済み。カンガエルからはまだ1種類のみだったはずだ。

昨日の時点で12階の簡易転移石には登録しなおしておいたから、転移石で一発移動。

早速魔物を探して歩く。

少し歩くと角兎、そこからもう少し進むとカンガエルを発見し倒す。戦闘シーンはカット。

で、結果角兎は入手済み2枚、未入手1枚で、最後の1枚は手に入らなかった。

カンガエルーは入手済み1枚の未入手2枚で、そのうち1枚だけ新カードが入った。

二者択一 速攻魔法カード

次の内1つを選んで発動できる

- ①ターーン終了時まで自分の場のモンスター1体の攻撃力を1000アップさせる
- ②ターーン終了時まで相手の場のモンスター1体の攻撃力を1000ダウンさせる

増減値が1000と微妙だが、ランクアップ（魔法・罠カードはレベルアップはできないがランクアップは可能だった）すれば数値が上がったりするかな？

とりあえず12階は全部確認できたので次は13階…と思ったが、確か13階は11階に出てきた魔物が、14階にはこの12階に出てきた魔物が出てきただけだったはず。

となると次はいよいよ16階。

スキルの確認もしつつ、攻略も合わせ進めていくことにしよう。

一旦拠点で昼休憩をはさみ、15階の転移石から16階へ。

階段を降りるとき「特殊ボスがりポップするってことは無いよな……？」と一抹の不安を感じたが、前に感じた違和感はなく、普通に一般のモンスターが出てきてくれた。

えっと、前に来た時に確認できた魔物は、ウマシカ：じやなくてウマシマと、ミノムシコムシ。それとまだ戦ってないけど草原の豹がいたはず。

で、ウマシマからは2種類、ミノムシコムシからは枚1種類入手済みだ。

早速ウロウロと魔物を探す。

まず出てきたウマシマは、予想通り入手カード2枚未入手カード1枚と表示されている。

問題なく倒して次。

木の下で待ち構えていると、上からミノムシコムシが登場。

1種類が入手済みで2種類が未入手。

で、きちんと能力の下に効果が表示されていた。

(そういうえば管理人に確認するの忘れてたな……)

拠点に戻ったら忘れず聞くように頭の中でメモしておく。

ミノムシコムシを倒したら新しいカードが1枚手に入った。

唐突な訪問 畏カード

自分の場にモンスターがおらず、相手の場にのみモンスターが存在する場合、自分の

メインフェイズに発動できる。

相手の場にいるモンスターカードの内、一番レベルが低いカードのレベル以下のカードを手札から特殊召喚できる。

お、これは中々いいカードだね。

条件はあるけど、これで特殊召喚したモンスターをリリースしてレベル5のレオを召喚する。とかの戦法が使える。

ここにきて魔法カードや罠カードが良く手に入るようになってるけど、掲示板情報では1階に降りてすぐに魔法カードが出てきた人もいるみたいだし、きつとたまたまだろう。

さて、じゃあ次は草原の豹だな。

初見ではA800D500の能力に思わず逃げ出したけど、今ならデツキ内のカードの攻撃力も上がっているし、そこまで恐れることは無い。

基本的に手札には、攻撃力高めのカードと低めのカードが半々ぐらいで来てくれるから、手詰まりってことはほぼ無いだろうし。

つてな訳で、豹を探してウロウロ。

念のため守備表示を探して倒す。

始めて見つけた時にはあれだけビビらせてくれたのに、かなりあっさりと倒せてし

まった。

草原の豹 星2 風 獣族／通常モンスター

A 8 0 0 D 5 0 0

攻撃力も高いし、かなり使えるカードで嬉しい。

落とすカードの表示も、最初は黒いカードが3枚だったので、もう何度か戦ってみる事に。

そして落としたカードがこれ。

コボルト 星2 闇 獣戦士族／通常モンスター

A 6 0 0 D 3 0 0

ゲームやラノベでお馴染みコボルト君。

能力はそんなに高くないのね。

で、さらに数度戦ってみたが結局3枚目のカードは落とさなかった。

ドロップカードの確認もしつつ、マップ埋めも並行して行う。
階段を探してウロウロ。

結局この日は階段を見つけれなかったので帰還石で拠点へ。
帰ってきたら恒例のカードチェック。

新しいカードが手に入った時は、毎回必ずレベルアップやランクアップの素材に使えないかチェックする。

で、今回手に入れたコボルトが、レッサーワウルフのレベルアップ素材になることが分かった。

ほとんどのカードは前回レベルアップで来てるんだけど、数枚まだのカードがあるんだよな。

何か理由があるのか？

ま、その辺はまた考えるところ、今はレベルアップ。
レッサーワウルフと必要なカードを機械に挿入。

いつも通りペカーッと光って新たなカードが出てくる。

ワウルフ 星2 風 獣戦士族／効果

A900 D500

おー強くなった！

しかも効果がレベルアップ前と同じだから、かなりのパワーアップといえる。

例えば攻撃力9000のモンスターをこのカードの効果のためにリリースすれば、このカードの攻撃力は、 $9000 + 9000$ の18000になり、レベル5の草原の王レオに並ぶ。そしてそのレオを効果に使用すれば、 $9000 + 18000$ でなんと27000まで上がる。

ここまで上がれば、漫画やアニメに出てくるキャラのエースカード級の攻撃力だ。

まあ簡単に条件を満たすことはできないと思うけど、こういうのって考えるだけでワクワクしてくるよな。

さて、ウルフに関してはまだ実践で様子を見るところとして、初期カードの中でまだレベルアップしてないカードは、『水蛇』と『戦士の卵』の2枚だけだ。

できればこの先に出てくる魔物が落とすカードでレベルアップしてほしいものだ。

つと、忘れるところだった。

管理人に、魔物の効果の件について聞かなきゃ。

えーつと、問い合わせのページ開いて、…効果の表示がおかしいです…、つと。送信。

ピロリン♪

相変わらずすぐに返事が返ってくる。

なになに…？

ご質問の件について

いつも頑張ってくれてありがとう♪

モンスターの効果の説明が出る件についてだね？

えっと、特殊ボスは普通のモンスターとは色々と違う存在なんだ。

だから他の魔物と違って、効果を使用したら、その説明が見れるようになるんだよね

で、本当にごめんなんだけど、デューリストアイの効果に、『1度使用した効果の説明

が見れるようになる』っていうのがあるんだけど、乗せるの忘れてた。テヘ♡

ただ、これは1度でも特殊ボスと戦闘して、1度使用した効果が見れるようになるって経験をした人だけ発現する効果なんだ。

レベル4の、成長発現者のみに現れる効果とおんなじ感じだね。

ってなわけで、バグでも何でもないよー（後でこっそり直しておくねー）

じゃあ、これからも頑張って！

つまり管理人のミスと…。なーんだ。

ピロリン♪

読み終わったタイミングで再びメツセージが届く。

PS

迷惑かけたお詫びだよん。

こつそりと……………

……………

つかってみて くれたまえ。

【5000DPを入手しました】

…なんでポケ○ンのマスタ○ボ○ル貰う時のセリフ風なのよ？

33話

次の日

昨日貰った5000DPだが、前にレオを倒した時に貰ったDPの余りと合わせれば1万DP。

せっかくなので、前回レベルアップ候補に入っていたマツピングと魔物探知のレベルを上げることにした。

5000ずつ使用して、どちらもレベル6に。

できればデュエリストアイや成長促進にも使いたかったけど、ここまでデツキパワーが上がったら、今は探索能力を上げた方がいいかな? と思い、そうした。

今回の件でデュエリストアイの株が一気に上がったから、できればまた早めにレベル上げたいね。

つてなわけで、今日も16階の探索。

出てくる魔物は楽勝! まではいかなくても、ほぼ苦戦することは無く倒せるようになったから、階段を探す方を優先して探索を続ける。

16階は11階から14階の何もない草原と比べて生えている木の件数がかなり多いから、見通しが利きにくい分階段が探しにくいかもしれない。

見落としがないように丁寧にマップを埋めて、一旦お昼に拠点へ帰る。

昼から探索を開始し、あつちをウロウロ、こつちをウロウロ。

夕方に差し掛かったころ、マップ上に見たことのないマークが現れた。

(ん？このマーク…見ようによつては階段に見え…る？)

気になったのでそのままマークのついている場所へ向かってみると、そこには少し大きめな1本の木。

ぐるりと反対側に回ってみると、木の幹に人が1人入れそうな程の穴が開いており、中をのぞくと下に続く階段があるように見えた。

(なるほど、木の中に階段って訳か。こりゃ普通に探してたんじゃ見落としてたかもな。)

頭をぶつけないよう慎重に穴をくぐると、どういいうわけかさつきまで暗くてぼんやりとした様子が見えなかった幹の中が光を放ち、下まで照らし出してくれた。

(中に入ってみたいと様子が分らないってことか。不思議だな…。)

木の中を移動するというファンタジーな体験に少し感動する。

階段自体はそこまで長くなく、下の階に到着した。

階段を下りた先は上の階と同じように、木の幹に開いた大きな穴から出られるようになっていた。

やってきました17階。

見た目は16階と同じように、草原のあちこちに木が乱立している。

おそらく階段も同じようにどこかの木に隠されているんだろう。

しかし、急に現れたあの階段っぽいマーク。今まではなかったはずなんだが…。

おそらくマップピングスキルのレベルが上がったことによつて階段の位置が分かるようになったんじゃないだろうか。

つてか、そうだとしたらホントナイスタイミングだったな。

他のことにDPを使わなかった自分を褒めてやりたい。

とりあえず、新しい階についたから簡易転移石探し。

おそらく今出てきた木のどこかにあるのだろうと当たりをつけて、ごそごそと探し始める。

木の根っこ、地面…無い。

幹、枝、葉っぱ…あ！枝の付け根に青い石見つけ。

早速触れて登録をしておく。

さて、もういい時間だけどどうしようか？

とりあえず1匹ぐらい確認しとく？

少し悩んだ結果、出てくる魔物の確認（1体だけ）をして拠点に戻ることにした。階段の近くをウロウロして、現れたのがこいつ。

モnk・モンキー 星2 獣戦士族／効果

A500 D500

効果が気になったけど、能力的にはそこまでの強さだったので一度戦ってみる事にした。

が、特に変わったことも無くあっさりと倒してしまう。

モnk・モンキー

このカードは、このカードの攻撃力と同じ数値の攻撃力を持つカードとの戦闘では破壊されない。

手に入れたカードを見て納得。

こちらでも攻撃力500のモンスターで戦うなら、相手は破壊されない効果だけど、こちらの方が攻撃力が上なら特に意味ない効果だね。

とりあえず確認はできたので、帰還石で拠点に。

あ、ドロップカードはやっぱり3枚だった。

これはもう全モンスターのドロップ数は3枚で決定かな？

帰ってきて恒例の素材チェックするも特に使えるカードは無し。

掲示板も特に目ぼしい情報がなかったし、いつもより少し時間に余裕があるので、少し凝った料理でも作ろうかな？

そこまで料理技術があるわけでもないけど、調子に乗って隠し味とか色々入れてみた。

結果？

『食べれないことは無いけど普通に作った方が絶対美味しい』料理が出来たよ。トホホ。

次の日

17階の探索の続き。

昨日のサルからまだカードがもらえるかもしれないので何回か戦ってみる事に。

で、結果新カードが1枚ゲット。3枚目は落とさずだった。

ウォーキングツリー 星2 闇 植物族／通常モンスター

A500 D600

それからしばらくマップ埋めにいそしむ。

一応木の下で待ってみると、上の階と同じくミノムシコムシが現れたので倒しておく。

時折出てくるサルを倒しながら探索を続けるも、この日は階段を見つけないことができず、次の日に再挑戦。

前日と同じようにサルを倒しつつ、マップの階段マークを見落とさないよう注意しながら進んでいく。

またマップだけに頼らず、目視でも確認を重ね探索を進めるも、中々階段は見つからない。

明日に持ち越しかな…。と考えていた時、マップ上に魔物を現す光点が現れた。

最後に1体倒してから拠点に帰ろうと思えば近づいてみると、そこにいたのはサルではなかった。

【草原の狩人 A700 D600 攻撃表示 通常モンスター】

最初見たとき後ろ姿だった為、人かと思つて驚いた。

しかし、振り向いた時の獰猛な顔つきと、何より能力の表示があることから、こいつはモンスターと断定し、戦闘を仕掛ける。

A700の通常モンスターなら今更何も言うことは無い。
手に入れたカードはこちら。

草原の狩人 星2 風 戦士族／通常モンスター

A700 D600

一応近くに他の魔物がいないか確認して、帰還石にて拠点へ帰る。

ドロップカードの種類はやはり3枚だったので、また明日他のカードの確認をしよう。

で、拠点についたら恒例のカードチェック。

…おつ、ついに戦士の卵をレベルアップできる！

今回手に入れた草原の狩人が素材カードに使用できた。

というわけで、ガシヤコン ペカー

協調の戦士 星2 地 戦士族／効果

A1100 D600

こ、攻撃力1100だとう!?

あ、いや、レオの方が攻撃力は高いんだけど、下級モンスターで攻撃力1000超えか…。

何か苦勞が報われる瞬間っていうのかな？

特に最初期から常に俺を助けてくれたカードだから、感動がひとしおだ。

最近是他のカードのレベルアップで使用機会が少なくなってたけど、元々は最高攻撃力のエースカードだったもんな。

これでこれからもガンガン活躍させてやれそうだ。

じゃあ気分もいいし、今日もアレンジ料理でも……つとアブナイアブナイ。

流石に今日はやめておこう。

あの頃を思い出してハンバーガーでも食べようかなー？

34話

戦士の卵が協調の戦士にレベルアップして次の日。

17階の攻略を続ける。

昨日の続きまで進み、草原の狩人を何匹か倒して回る。

で、入手カードがこちら。

たつの子 星2 水 海竜族／通常モンスター

A600 D650

古典的な挑発 罠カード

相手モンスターの攻撃宣言時、その対象を自分フィールドの別のモンスターに移し替える。

その相手モンスターの攻撃力はバトルフェイズ終了時まで200アップする。

午前中では階段が見つからず一度拠点へ。

カードチェツクの結果、たつの子が、水蛇のレベルアップに使用できることが判明。これでもうやく初期デッキのカードを全部レベル2にすることができると、いつもの。

ガシヨン ペカー

海蛇 星2 水 海竜族／通常モンスター

A900 D800

うんうん、これで大分デッキも強くなった。

カードの種類も増えたし、こらでちよつと整理しておこうかな。手に入ったカードをやたらめつたに入れても意味がないからね。

結局それから、所持カードの確認やデッキの組みなおしをして、それなりに時間を使ってしまった。

といつても大した変更があるわけではなく、攻撃力が低めの通常モンスターを何枚か抜いたぐらいだが。

1〜9階で手に入るカードをレベルアップさせたカードたちも含めると、かなりカー

ドの数も増えてきた。

今デッキに使用しないカードたちは、申し訳ないけど拠点で待っていてもらおう。
：確かDP交換リストにカードバインダーとかあったな。後で取っておこう。

そして残った時間で再び17階の探索を行い、ある程度の時間で帰還。

16階は割と早く階段が見つかったけど、17階は中々見つからない。

明日にでも見つかったくれればいいんだが…。

…夢を見た。

まだ俺が小さかったころの夢。

誰かと一緒に遊んでいる夢。

お互いの手には数枚のカード。

これは…、遊戯王？

二人とも楽しそうに遊んでいる。

勝ち負けうんぬんより、二人で遊ぶことが楽しいようにも見える。

とつても楽しい思い出のはずなのに…

相手の顔にはモヤがかかったみたいではつきりと見ることができない。

彼は立ち上がり、悲しそうな表情の僕の頭の上に手を置き…

…またな。

目が覚めた時、俺は何かを求めめるかのように手を上に伸ばしていた。夢を見た気がする。とても大事な夢。

でも決して思い出すことができない夢。

きつと時間がたつにつれ、夢を見たことすら忘れるんだろう。

でもいつかきつと、その夢の意味を理解する時がくる。

そんな気がする…。

何となく目覚めがすつきりしなかったが、顔を洗い意識をしゃつきりとさせる。

今日こそは階段を見つけねば。

朝食等、朝の準備を済ませて17階へ。

サルや狩人、時たまミノムシとも戦いつつ階段を探す。そして

(やつと見つけた…。)

もうお昼になろうかという時間に、ようやくマップ上に階段を示すマークが現れた。

そこは16階と同じように大きな木が生えており、幹には大きな穴。

一度経験しているため躊躇なく穴の中に入り込み、中にある階段を下りていく。

…穴をくぐるとき少し頭を掠ったのは内緒で、やってきた18階。

まずは恒例の簡易転移石探し。

問題なく発見し登録。

お腹も空いてきていたので、一度昼食をとる為帰還。昼から出現モンスターの確認を行う。

少し探索をして分かったのは、ここは16階に出てくる魔物が2体で出現するみたいだ。

確か13階でも11階のモンスターが2体ずつ、14階では12階のモンスターが2体ずつ出現したから、同じようなパターンなんだろう。

魔物探知のスキルで、こちらが有利に戦闘を始められる状態の魔物のみ倒しながらマップを埋めていく。

(これはまたしばらく階段探しに時間がかかるかな。)

やはり今日1日だけでは階段は見つけられず、次の日に持ち越しとなった。

その日の晩、掲示板を見ながらぼんやりと考える。

俺の考えが正しいなら、おそらく18階・19階は新規の魔物が出てこないだろう。

もしそうなら、できる限り戦闘は避けて、早いこと20階のボスに挑みたい。

というのも、20階攻略者が徐々に増えており、それに伴いある程度の情報も出回るようになってきた為、有用なスキルの情報等を見る機会が増えたからだ。

やっぱり人が自慢げに書いてるのを見ると、自分も早く欲しくなっちゃうよね。

で、その中でも『20階クリアで追加されるDP交換リストの中にアイテムボックスがあった。』って書いてあるのを見たときには思わず飛び上がった。

アイテムボックス

異世界転生などの小説ではチート級の能力となることもしばしば。

ラノベの代表格。ドラ○もんのどこ○もドア並みにメジャーな能力だ。

発見当初は掲示板で超大盛り上がりだったが、実際はスキルレベルが低いうちは容量が小さく、魔物が落としたカードを入れておくぐらいしか使い道がなかった。

レベルを上げれば容量は大きくなっていくが、かといって何を入れればよいのか。という話になってくる。

基本、拠点に設置された家具・電化製品はダンジョンに持ち込みはできず、逆にダンジョン内の物を拠点に持ち帰ることもできない(カード覗く)。カードに関しても、ダンジョンに入った時点でデッキが固定され内容の変更はできなくなるので、いくら予備の

カードを持っていこうが何も意味がない。

できる事といえば、料理や飲み物を入れておき、拠点に帰ることなく探索が続けられるようになる。ということぐらいか。

とはいえ、簡易転移石や帰還石などのおかげで、ダンジョン内に泊まり込んでまで探索を続ける意味はかなり薄いと言えるので、現状有効活用方法が見いだせないスキルとなっている。

まあ俺も、前に考えていたピクニックを実行したい。つて考えと、お昼をダンジョン内で済ますことで、往復の無駄は無くなる。ぐらいしか思いついてないけど。

まあスキルレベルが上がれば色々制限が緩和される可能性もあるし。

何よりカツコいいし！

他にも、何となく有用そうなスキルや、完全なネタスキルの情報等を見ながら、20階クリア後に思いを馳せる。

：捕らぬ狸の皮算用にならないように、まずは18・19階の攻略を頑張りますか。

35話

それから数日。

俺は18階の探索を続け、19階の階段を発見。

そして約1週間ほど19階の探索に費やし、ようやく20階にたどり着くことができた。

ちなみに19階は俺の予想通り、17階の魔物が2体一緒に出てくるだけだった為、新規の魔物は出現していない。

また、どうやら20階には簡易転移石は無いようだ。

もしボスに負けて再チャレンジする際は、19階のスタート地点からやり直しとなる。

ま、階段までのマップは出来上がっているから、そこまで苦にはならないだろうけど。

さて、階段を発見したのが午前中だったので、一旦昼休憩をはさみ体力は十分。

ボスの事前情報も掲示板で確認済みだし問題はない。

では、心の準備ができたなら、ボス戦と行きましようか！

10階と同じく、大きな扉を開き部屋の中へ入る。

入ってきた扉が自然に閉まり、開かなくなったのを確認した後部屋の中央へと向かう。

そして部屋の中心まであと数メートルというところで、黒い靄が現れ、人の形へと変形していった。

手にはデュエルディスク。こいつが20階のボスだ。

「デュエル！」

俺はディスクを構え宣言。ボス戦は雑魚戦と違って先攻後攻がランダムになるらしい。

チラッとディスプレイを見ると、先行の表示が。

「俺のターン！」

俺 LP2000 初期手札3枚

ボス LP2000 初期手札3枚

うん、いい手札だ。

「俺はモンスターをセット。ターンエンドだ。」

次いでボスのターン。

相手はモンスターを攻撃表示で召喚。

黒獣Lv2 星2

A700 D700

そして俺のセットモンスターに攻撃。

「俺のモンスターは茂る草壁。防御力800の為ダメージを受けるのはお前の方だ！」

茂る草壁 A400 D800

ボスLP1900

茂る草壁は雑草魂がレベルアップしたカード。

守備力も高めで、雑草魂の時にあった『戦闘で1度だけ破壊されない』効果もそのまま残っているから、先行でセットするにはこれ以上ないカードだ。

相手がターンを終了し、こちらのターンになる。

「ドロー……俺は電気ネズミを召喚。茂る草壁を攻撃表示にしてバトルフェイズだ。」
場に赤いほっぺの黄色いネズミ？が現れる。

電気子ネズミのレベルアップしたカードで、前はピ○チュウそっくりだったからレベルアップでラ○チュウみたいになるのかと思っていたが、なんだかその2匹の間？みたいな中途半端な姿になった。

まあ可愛いかどうかと聞かれたら可愛いんだけど。

「電気ネズミで黒獣Lv2を攻撃！」

黒獣は破壊され相手にダメージが通る。

ボスLP1800

「さらに茂る草壁でダイレクトアタック！」

ボスLP1400

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ。」

なんだかものすごくスムーズに事が進んでいるが、ここから何が起こるか分からないし、油断せずに行こう。

ボスのターン。

相手はモンスターを召喚。

黒炎Lv2 星2

A800 D700

今更だけど、ボスの使うカードって、「黒」十種族名なんだな。

10階のボスの時は全部Lv1についていて、今回はLv2になっているから、階が進むにつれレベルが上がっていくんだろう。

ボスは黒炎で電気ネズミに攻撃を仕掛けてきた。

その瞬間俺は宣言する。

「この瞬間、速攻魔法発動！二者択一。このカードは、ターン終了時まで自分の場のモンスター1体の攻撃力を1000アップさせるか、相手の場のモンスター1体の攻撃力を1000ダウンさせるかを選ぶことができる。」

現状ではどちららを選択しても結果は一緒だが。

「俺は電気ネズミの攻撃力を1000アップさせる。これによりお前のモンスターのみが破壊され、さらにおまえに1000ポイントのダメージだ！」

「…!!!」

ボスLP1300

うっわ、これだけきれいに決まると気持ちいいー！

今まではただカードスペックに頼った殴り合いだけだったけど、魔法や罠を使うことで、なんかデュエルしてる！って気分になる。

ボスはカードを1枚伏せターンを終了した。

む…、伏せカードか。

何が出てくるかわからないが、どのみちこちらには魔法・罠の除去カードなんて入ってないし、押し通すしかない！

「俺のターン、ドロー。」

手にしたカードに記された星の数は5つ。

「一気に決める！俺は茂る草壁をリリースし、アドバンス召喚！出でよレベル5モンスター、草原の王レオ!!」

グルオオオオオ!!!

雄たけびと共に、激戦を繰り広げたかつての敵が今、俺の仲魔としてフィールドに現れる。

「バトルフェイズ！まずは電気ネズミで攻撃！」

するとボスは伏せカードを反転させる。

ボスは喋れないため、カードの詳細が空中に映し出される。

最後の抵抗 罨カード

相手の攻撃宣言時発動可能。

相手の場のモンスターの数より、自分の場のモンスターの数が少ない時、相手の場のモンスターの攻撃力を、その枚数差×100ポイント下げる。

俺の場にはモンスターは2体、相手の場には0体、つまり200ポイント攻撃力がダウンする。

電気ネズミ A800↓600

草原の王レオ A1800↓1600

ま、それでも結果は変わらないけどな。

電気ネズミのダイレクトアタックが通りボスに600ダメージ。

ボスLP700

「これでトドメだ！草原の王レオで、ダイレクトアタック!!」

レオの爪がボスを切り裂き、相手のライフは0となる。

オオオオオオオオオオ……

10階のボスと同じように、黒い靄はだんだん薄くなり消えていった。

……え……つと、勝った……ん、だよな？

な、なんか、あっけない??

ボスを倒した喜びよりも、そのあっけなさの方に戸惑ってしまう。

10階では負けを覚悟しながらも、最後の最後でカードの成長によつて逆転勝利という苦戦を強いられただけに、今回が楽勝過ぎてなんだか実感がわかない。

「20階の攻略を確認しました。これにより20階への転移が可能となりました。」

メッセージが流れるも、何となく信じられない感が……。だが、よくよく考えてみると当然なのかもしれない。

何故ならば、今の俺のデッキは20階を突破した他のプレイヤーのデッキと比べて、かなり強いと予想できるからだ。

他のプレイヤーたちがメインで使用しているカードは、初期デッキのカードではなく各魔物が落としたカードたち。そのカードは拾った時点でレベル2の為、それ以上強化するには『成長』か『ランクアップ』しかない（掲示板情報によれば、カードをレベル3にレベルアップするための素材カードは21階以降にしかない、とされている）。であれば、彼らのデッキで最高攻撃力はおそらく8000〜9000程。

そう考えれば、今回ボスが使用したA700や800のカードと良い勝負が出来たんじゃないだろうか。

もしボスのレベルがそこに合わされているとなると、初期デッキのカードを全てレベル2まで上げ、効果カードや魔法・罠カードも多い俺のデッキではデッキパワーに差が出たのかもしれない。

何より、きつとこの時点では手に入るはずではなかったレベル5のカードも入っているのだ。

今回のデュエルだって、最後にレオじゃなくて別のカードを召喚していたら、その

ターンに倒し切れていなかったかもしれない。

であれば、この結果も当然なのかもしれない。

所謂、ボス戦の前にレベルアップしすぎていざ戦ったら楽勝だったみたいな感じ？

ま、なんにせよ勝ちば勝ちだ。

20階突破でDP交換リストも増えるし、21階以降で新しいカードが手に入れば、またレベルアップやデッキ強化もできるし。

つと、忘れてた。ボスを倒した報酬のカードを拾っておかないと。

部屋の中央にキラキラと輝きながら宙に浮いている1枚のカードを手取る。

魔界の商人 星5 闇 悪魔族／効果モンスター

A1500 D1600

このカードが召喚された時、カードを1枚ドロワーできる。

おおっ!?

まさかの効果カード。しかもドロワー効果のカードは何気に貴重。

本来はここで初めて上級モンスターカードが手に入るんだらうけど、俺にとっては2枚目。

もしかしてすでに上級モンスターを持っていたから、今回が効果モンスターになった
…？

一応掲示板で、他に効果モンスターが手に入った人がいないか見てみようか。

…多分いなかったような気はするけど。

何はともあれ、今日は一旦拠点に帰ることにしよう。

さてと、交換リストで何取ろうかなー。

36話

拠点に戻り、早速パソコンで色々調べたいことをチェック。

やっぱり20階突破プレイヤーの中で効果モンスターカードが出てきた人は他にいなかった。

もしかしたら騒ぎになるのが嫌で隠している人もいるかもしれないが。

ま、それはいいだろう。俺もこの情報は書かないことにしてるし。

ではお待ちかね、DP交換リストのチェックー！

現在手持ちのDPは5000ちよつと。

11階から19階で手に入るカードは一律で20DPに変換だったから、日常消耗品にチョコチョコ使つて残りこんなもん。

もし気になるスキルがあるなら、またどこかでDP稼ぎをする必要が出てくるかもしれない。

さて、リストにぎつと目を通して…。

気になったのはこのくらいかな？

・アイテムボックス

・モンスター実体化時間延長

・入手DPアップ

アイテムボックスは前も説明した通り。

効果が微妙といわれていても、DP稼ぎをするときに服のポケットがパンパンにならなくなるってだけでも価値はある。

モンスター実体化時間延長は、普段召喚後10分後に消えてしまう(墓地に送られる)モンスターの、存在できる時間が増えるというもの。

1分単位で増えていき、時間が増えるほど必要DPも多くなるようだ。

これは普段の探索はもちろん、DP稼ぎの時にもかなり役に立ちそうだ。

そして最後の入手DPアップ。

読んで字のごとく、カードをDPに変換する時に入手できるDPがアップするというスキルだ。

これだけ聞くとかなりの神スキルに聞こえるが、取った人の情報によると、レベル1では上昇量が1DPなんだそう。

レベルが上がればもつと増えるのでは?と考える人も多いためだが、現在判明しているのが、レベル1で1DP、レベル2で2DP、レベル3で4DPの上昇らしい。

まあレベル1でも10DPのカードを10枚交換すれば1枚分多くDPが貰えるこ

とになるので、早めに取っておけばその分効果は出るはず。

まるでお店のポイントカードみたいだが、一応最有力候補。

他にも所持スキルのレベルアップや、生活のためのスキルも余裕があればほしい。

例えば『料理』とか『料理』とか、後『料理』とか。

で、悩んだ結果取ったのが

・アイテムボックス Lv1 (1000 DP)

・モンスター実体化時間延長 +5分 (100+100+200+200+300

DP)

・入手DPアップ Lv2 (1000+2000 DP)

アイテムボックスはレベル1で50?程の収納スペースのようだ。そこそこ入る。

入手DPアップは上げられるだけ上げておいた。後々この小さな積み重ねが効いてくる…はず。

モンスター実体化延長は残ったDPをつぎ込んだ。

この後は、300、400、400、500、500、600……と必要DPが増えていく。

ちなみにLPの上昇も、必要DPの上り幅は同じ。
ま、こんなところかな？

とりあえずはこれで21階の様子見をして、行けそうなら進む。厳しそうならどこかでDP稼ぎ。

もしくは倒せそうな魔物を探して粘るかな？

じゃあ今日はおしまい。

次の日

朝の支度をして早速20階へと飛ぶ。

『21』と大きく書かれた扉を開き先に続く階段を下りていく。

普段の階段より若干長く感じるそれを下っていくと、たどり着いた先は『山』だった。ごつごつした岩肌の低めの山が立ち並ぶ。

これまでの階と違って緑が一切見えず、視界には赤茶けた色が広がる。

うーん、移動するだけでも大変そう…。

幸い今のところ高い山は見えないので、この低い山が連なる場所を上ったり下りたりしながら進めばいいのだろう。

これは体力増強スキルが必須案件かもな…。

探索にかなり体力を消耗しそうだと思い、大きなため息をついていると、表示されていたマップの端の方に魔物を現す光点が映し出された。

(お？近いな。とりあえず近づいてみるか。)

一応慎重に光点の方向へと進む。

どうやら魔物は付近を円を描くようにウロウロしているみたいで、こちらにはまだ近づいてない。

ある程度近づくと、それが空を飛ぶ魔物であることが分かった。どおりでそんな動きをすと思うたよ。

さらに近づいていくと、俺の目にその能力が映し出された。

【アホウドリ A500 D1000 攻撃表示 通常モンスター】

む、流石にレベル3にもなると能力が4桁になってくるか。

だが今は攻撃表示、一気に倒させてもらう。

相手が攻撃表示なことに気が付いた俺は、一気に近づき戦闘を開始する。

「デュエルだ！俺のターン、ドロー！」

いきなり現れた俺に驚いた表情…？なんかアホっぽい顔してるけど…、まあいい。

そんな表情のアホウドリの前にモンスターを召喚し一気に倒す。

アホウドリ 星3 風 鳥獣族／通常モンスター

A500 D1000

今回は偶々攻撃表示だったけど、守備表示で現れたらちよつときついかな？

：何か11階の羊を思い出すけど、あの時とは違ってデッキ内には何とかできるカードが複数枚入ってるし、問題はないだろう。多分。

拾ったカードをポケット：ではなくアイテムボックスに入れる。

ブンツ！って音がして次元の裂け目っぽいわい何かが現れる。

：カ、カツコイイ……!!

しばらく出したり入れたりして遊んでから探索に戻る。

とりあえずこのアホウドリが他に何を落とすかだな。

あ、ドロップカードの種類はやっぱり3枚でした。

ウロウロしてアホウドリを探し、攻撃表示の奴にだけ戦闘を仕掛ける。

新たに1枚のカードをゲットしたが、こいつにしても今までの奴にしても、3枚目を落とさない奴はどんな条件を満たせばカードを落としてくれるんだろうか？

カミナリサマ 星3 光 雷族／通常モンスター

A1000 D500

お、攻撃力1000だ。

やっぱりレベル2と3は違うというわけか。

これはデッキのレベルアップが急務だな。

そういえば、1〜9階で手に入るカードたちもレベル3になるんだろうし、又他のカードの素材になったりするのかな？

あと、レベルアップはかなりの回数行っているけど、ランクアップに関しては未だに必要カードが一切不明なんだよな。

こっちも何か法則があるなら見つけたいんだけど…。

うーん、カギはやっぱりデュエリストアイか??

DPが、DPが足りん…！

何か新しい発見でボーナスDP貰えないかなー。

37話

ある程度21階を見て回ったらお昼に帰る。

で、手に入った2枚のカードのチェック。

初めてのエリアだし、できるだけ早めにカードのレベルは上げたいもんね。

ポチポチとチェックを続けていると

「お、みつけ。」

アホウドリのカードが、11階で手に入った『くちばし鳥』のレベルアップに必要な素材となることが分かった。

レベルアップに必要なカードはあと1枚。

で、もう1枚のカミナリサマは、6階で手に入った雷族のカードのレベルアップに使える。

こちらでもレベルアップにはもう1枚必要。

ちなみに、アイテムボックスのスキルを取る前に、カードバインダーは入手済みだ。

今まで手に入れたことのあるカード(初期デツキ除く)で、今デツキに入っていないカードはすべて1枚ずつ魔物から取り直してバインダーに保管してある。

こうしておけば、もしレベルアップなどで必要になってもすぐに使用できる。

今回はデッキ内のカードには直接関係はしなかったけど、そのうち手に入るだろうし地道に行こう。

そして午後、再び2-1階へと進み攻略を続ける。

とりあえず歩きやすそうな道を選び1方向へと進んでいく。

そういえば、この階層では階段はどんな感じで出てくるんだろう？

草原は目印のオアシスがあつたし、1-6階以降は木に入るといふファンタジーな方法だった。

山つてことは…洞窟みたいなものとかあるのかな？

見渡す限りの山。階段がどのような形で設置されているのか想像できない。

掲示板では同じ山のフィールドの人もいたけど、階段のことまでは書いてなかったよな…。

まあ、仮に情報を持つていたとしても、おそらく足で探すことには変わりないだろう。マップを見つつ、モンスターにも気を付けつつ探索を続ける。

しばらく同じ風景と、時折聞こえる鳥の声に意識を割きながら歩いていると、遠くの方で聞きなれない音が聞こえてきた。

ゴドン…ゴドン…ゴドン…

まるで何か重たいものが転がっているような音だ。

慎重に近づいてみると、そこには大きな岩の塊がゴロゴロと山肌を転げ落ちていつては、また転がりながら斜面を登り、そしてまた下へ向かって転がっていく姿があった。

一瞬ポカーンと口を開けて見入ってしまった。

だって岩が自然に転がり上る？ んだぜ？

そこそこの斜面で他に誰もいないのに、岩だけが一人で動いて上ったり下りたりするんだ。

元の世界ではこれだけで1番組いけそうだな。『怪奇！一人で動き続ける岩!!』みたいな感じで。

そんなアホなことを考えているうちに、魔物探知の範囲に入ったのだろう、ゴロゴロと転がりまわる岩の上に能力の表示が現れた。

【転がり岩 A500 D1200 守備表示 通常モンスター】

ま、やっぱりモンスターだよな。つてか守備力高っ!?

守備力1200って、素の能力じゃレベル5のカードでしか倒せないじゃないか。

ただ攻撃力は低いから、攻撃表示の時に狙って戦えばなんとか行けるか。

流石にレベル3は強い。

手札も今の状態で倒すのは難しそうだったので、守備表示のこいつと戦うのはあきらめて他のモンスターを探すことにした。

それから少し進むと、またゴロンゴロンという音が聞こえてきたので、その方向へ進んでみると

【転がり岩 A500 D1200 守備表示 通常モンスター】

守備表示だ。

相手に気づかれないように気を付けながら（こいつらって目見えてんのかな？）別方向へ進む。

その後も何度か岩を見つけてるが、いずれも守備表示だった。

まさかこいつら、守備表示しか出ないのか…？

そう不安になった時、今進んでいる山のとっぺんぐらいに魔物の反応をとらえた。

近づいてみると、先ほどまで散々転がっている姿を見てきた『転がり岩』が、一切動かずに佇んでいる。

不思議に思い、そつと近づいてみると

【転がり岩 A500 D1200 攻撃表示 通常モンスター】

（お、攻撃表示だ。）

初めて見つけた攻撃表示。

(もしかして、動いている奴はみんな守備表示で、動いていないやつが攻撃表示なのか?)

ここまで見かけたやつはみんな動き回っており守備表示だった。

(ま、それはまたあとで考えるか)

とりあえずモンスターを倒すべく、山頂に佇む岩にそつと近寄り戦闘を開始する。

「デュエル、俺のターン、ドロロー！」

こちらに気づいているのかいないのか、なんとなく本当に攻撃していいのか? って気分になるけど、デュエルが始まっているということは、たぶん問題ないんだろう。

サクツと倒して落としたカードを拾う。

転がり岩 星3 地 岩石族／通常モンスター

A500 D1200

通常モンスターだし、ノーコメント。

守備力は高いので、対人戦だと活躍できそうだが、一般の魔物戦ではそのシステム上活躍させにくいかもしれない。

じゃあ他にも動いていない岩がないか探してみよう。

またまた山歩きを再開し、マップを埋めていく。

時折現れる岩は皆動いており守備表示だ。

やっぱり動いている奴で攻撃表示はいないのか…？

この山のフィールド、いくつかの小さな山が連なっており、高さはほぼ一緒。

先ほど攻撃表示の岩と戦った山は割と大きな山で、そこからなだらかな斜面を下つていき、そしてつながっている別の山を登る。

その山を登り切った先に奴はいた。

(お、さつきと同じで、動いていなくて攻撃表示。こりや決まりかな?)

おそらく、動いている岩は守備表示、動いていない岩は攻撃表示で間違いなさそうだ。

さらに、攻撃表示の岩を見つけたのはここで2ヶ所目。どちらも山頂だった。

(つてことは、攻撃表示の岩は各山のてっぺんにのみいるつてことか?)

なんとなくシステムが見えてきたところで攻撃表示の岩と対峙する。

まあ戦闘自体はサクツと終わるんだけど。

1ターンキル(大体いつもだけど)して、落としたカードを拾う。

挑発 魔法カード

自分のターンのスタンバイフェイズ時に発動可能。

相手の場の表側守備表示モンスターを攻撃表示に変更する。

おお？今まで守備表示にさせる効果はあったけど、守備を攻撃にさせるのは初めてだな。

これがあればこの岩やヤー階で苦戦した羊みたいな『攻撃力は低いけど守備力は高いモンスター』を倒しやすくなる。

対人戦でも、相手の守備モンスターを攻撃表示にしてダメージを与えられるし、中々いいカードだ。

あ、やっぱりこいつも落とすカードの種類は3枚だったから、もうどの魔物も3種類って考えておいていいかな？

それじゃあ今度は、攻撃表示の岩は山頂のみに存在するのかどうかを検証しましょうか。

38話

辺りを見回し、一番近そうな山頂を目指して歩を進める。

道中出てくる岩は無視、鳥は倒せる奴のみ倒して進む。

(いたーこれはもう決定でいいな。)

たどり着いた山頂に、攻撃表示で佇む岩がいた。

サクツと倒したカードを拾うと、落としたカードは『転がり岩』。

アイテムボックスに収納し一息つく。

とりあえずここまで進んできたけど、目印になりそうなものはないし、山頂から見ても景色に代わり映えはない。

せめて階段がどんな感じでどんな場所に設置されているかが分かれば探しやすいんだが…。

まあ、分かりにくい場所にあつたとしても、マップで階段のアイコンが出てくるか。

しばらくはマップ埋めだな…。と考えながら探索を続け、いい時間になったので拠点に帰る。

拠点についたらまずは恒例のカードチェック。

転がり岩は、16階に出てきたウマシマが落とした『石の壁』のレベルアップに使えるようだ。

夕飯を食べてお風呂に入り、掲示板をポチポチと眺める。

特に変わった情報はないが、料理スキルを取ったことで、今まで料理なんかしたことなかった人が、お店の料理レベルのものが作れるようになったと喜んでいた記事を見つけた。

(うーん、アイテムボックスも取ったことだし、明日は試しにお昼を持って行ってみようかな?)

お昼で一度拠点に帰り、また21階のスタートからやり直しでは無駄な時間が多い。

昼から違う方向に進むなら問題はないが、同じ方向に進んでみるのなら、昼食持参の方が効率が良い。

そうと決まれば今から料理だ。

アイテムボックス内は時間の流れが若干ゆっくりになるっぽいから、どんな料理でも持っていくのは問題ないだろう。

…入りきる量に限るけど。

そうそう、レベル1では時間の流れが少しゆっくりってくらいだけど、スキルレベル

が上がればもつとゆっくりになった気がすると掲示板に情報が載っていた。

最大レベルまで上げれば、ボックス内の時間は停止するとかになるんじゃないかともんな予測している。

さて、何を作るかなー？

次の日

夕べ今日のお昼ご飯を作るといったな？あれは嘘だ!!

いや、嘘ってわけじゃないんだけど、アイテムボックスの中が少し時間がゆっくりレベルじゃあ、夜に作ったものを入れて置いたらそれなりに時間は経過することになるよね？ってことに気が付いて、作るなら朝だなんてことになった。

で、朝にそんな凝った料理を作る気も出ず、結局ハンバーガー（パンに野菜と肉をはさんだだけ）になった。

はい、では今日も探索を始めます。

転移機能でバビュンと飛ぶ。

今日は昨日とは反対の方向へ進んでみよう。

現れる魔物は倒したり避けたりして黙々と進む。

お昼になったのでアイテムボックスからハンバーガーを取り出して食べる。

……やべ、飲み物忘れた…。

のどの渴きを野菜の水分で誤魔化しつつ食べ、探索を再開。

ウロウロと戦鬨を繰り返し、そろそろ夕方かなと思えるころ、マップの端に階段のアイコンが現れた。

アイコンが現れた。

ヨシツ！つと今までの疲れを吹き飛ばして階段へ向かい進む。

しかしパツと見た感じ、階段らしきものも目印になりそうなものも見当たらない。

おや？つと思いながらアイコンが示す場所に辿り着くと、そこは上から見たら非常に

分かりにくい形の洞窟があった。

(なるほど、洞窟の中に階段があるのね。)

洞窟の中は前の階の木と同じで、すぐに階段がありそうには見えるが奥のほうまでは

よく見えない。

しかし洞窟の中に入ってみると、途端に壁がぼんやりと光りだし、下へと続く階段を

照らし出した。

足を踏み外さないように注意しつつ階段を降り、ついた場所は洞窟の入り口と思わし

き場所だった。

(なるほど、洞窟から洞窟に進むわけだな。)

上の階も洞窟の中は階段以外なく、非常に狭い作りだった。

下りた先も階段の後ろ側はすぐ壁になっていて。

簡易転移石は壁の隅の方に埋め込まれていた。

階段のタイプが分かったのと同時に、これはマップの機能に頼らなければ探すのに非常に苦労するということが判明した。

上から目視では見つからないような場所と作りになっているので、もし自力で探すならひたすら山の裾の方を移動しなければいけない。

となれば、もしこの22階も21階の岩と同じようなモンスターが出たときに少し困ってしまう。

(ま、階段探しはマップさんに丸投げだな。さてさて、ここではどんなモンスターが出てくるかな?)

早速22階の魔物を探して回ろうとした時、お腹からグウ〜と音が聞こえた。

そういえばお昼はハンバーガー1つだけだった。

普段はもう少し多い量食べている為、お腹がすくのも早かったようだ。

ま、そろそろ夕方だし、明日にするか。

先も気になるが、簡易転移石に登録もしたので無理をする必要もない。

今日は一旦拠点に帰ることにした。

いつもより少し早めの夕食を取り、お風呂・洗濯なども済ませ、掲示板を眺める。

前の世界では暇なときは、ゲームしたり小説やマンガ読んだり、ちよつと買物に行ったりとかできたけど、ここでは暇つぶしⅡ「掲示板をみる」くらいしかない。

DP交換リストの中に、取らせる気があるのかないのか分からないくらい高いポイントで、テレビとかゲームとかあったけど、いつの事になるやら。

後、トランプや人生ゲームとかもあったけど、一人でどうやって遊べと？

もはや元の世界で「時間が空いたらとりあえずスマホを見る」くらいの感覚で掲示板を見ている。

ただそれは他のプレイヤーたちも同じようで、雑談なんかは常にそこそこ賑わっている。

「おつ、デュエリストアイのレベルが5になった人が出てきたか。よしよし、これでまた新しい情報が増えればいいな。」

他にもリスト内に多く存在する、ネタスキルとしか思えない名前のスキルを取った人

の報告レポートなんかは面白い。

今のところ「ネタスキルだと思ったらチートスキルだった」なんてものは出てきてないけど、人の失敗談から有効な使い道を思いつく人もいるようで、中々奥深い。

「ん？潜水スキルを持つてたらダンジョン内の水中に潜れた？…ふむ。これは俺も試してみる価値あるか…？」

掲示板情報によると、おそらく全体の3分の1程のプレイヤーは20階を突破しているようで、そこそこ暮らしにも余裕が出てきてるみたい。

そうなれば、ちよつと変わったことを試してみようとする人も出てくるようで、日々新たな情報やおバカな報告が増えている。

だがその行動が高じて、受け狙いで始めた行動が趣味となり、今では暇さえあればそれをしているというプレイヤーもいる。

おい、お前ら、デュエルしろよ。

とはいえ、息抜きは必要だし、その方法やタイミングは人によって違う。
俺も何か始めて見るかなー？

39 話

それは本当に偶然だった。

ただ小さな偶然の積み重なりが奇跡的に繋がり、本当にたまたまこの状況が出来上がった。

眼前に迫るは俺の背丈ほどもある大きな岩の拳。

「どうしてこうなった…。」

俺の嘆きは轟音に消し去られ、後に残ったのは、拳の形通りに穴を空けた地面と、その拳の主たる巨大なゴーレムのみだった。

時は遡り、22階にたどり着いた次の日の朝。

俺は昨日掲示板で見た内容に影響され、何か変わったことがしたい！という考えが大きき頭を占めていた。

とはいえ、すぐに思いつくようなことは誰かしらがすでに行っており、新鮮味が欠ける。

かといって、今までさんざん見てきたDPの交換リストを眺めていても、すぐに良い考えが出てくるはずもない。

諦めていつも通り探索を行えばいいのに……

もしこの場に他の誰かがいたならばそう思ったことだろう。

しばらくリストと睨めっこをしながらウンウン唸っていたが、やはり良い案？は思いつかず、苦し紛れに前から気になっていた『ジャンプ』のスキルを取った。

掲示板情報では、「ジャンプできる高さが増える」スキルらしく、某赤い帽子のおひげを生やしたキノコを食べれば大きくなる配管工の如く、自分の背丈以上のジャンプ力を身につくらしい。

今攻略中の山フィールドなら、山頂でジャンプすればもつと周りが良く見えるというメリットもあるし、このスキルは無駄にはならない！……はず。多分。おそらく。

では早速スキルの効果の確認をしましょ。

転移機能で22階へ。

掲示板情報によると、スキルレベル1で約2m程ジャンプでき、レベル2では約4m、3では約8m、4で約15m、5で約30mと距離が伸びていくらしい。

勿論、着地耐性（で言葉あつてるのかな？）もつくらしく、高い所から落ちてても平気

になるらしい。

そりやそうだよな。着地もスキル補正がないと、ジャンプするたびにスプラッターな映像をお見せすることになってしまう。

今俺のジャンプスキルは2（必要DP300）なので、約4mジャンプできるはず。4mって言ったたら、元の世界の家（平屋）の屋根までは軽々飛び上がれるくらいかな？

周りに何もいないことを確認し、思いっきりジャンプしてみる。

「おおおっ!!?」

例えて言うなら、絶叫系のアトラクションで下から上へと一気に引き上げられる感じ。

想像以上の体の動き、想像以上の景色の移り変わりに少し感動する。

頂点へと達した後は、重力に引きずられ落下。そして綺麗に両の足で着地。

「おおー。」

1人でポーズを取って遊ぶ。

ひとしきり試して満足した後で、ようやく22階の探索を開始。

ここも21階と見た目は同じで、赤茶けた山肌が続く。

ちよいちよい加減したジャンプ（2mくらいの）を挟みながら進む。

しばらくしてマップ上に現れた赤い光点の元へ行くと、そこには21階に現れたのと同じ『アホウドリ』の姿が。

(22階は21階と同じ魔物が出てくるパターンか?)

攻撃表示だった為サクツと倒して先に進む。

しばらく進み、ゴロンゴロンと最近聞いたばかりの音が聞こえてきたので向かってみると、予想通り守備表示の『転がり岩』。

(手札にはレオ…。守備表示を倒すのが3枚目ドロップの条件って可能性もあるか?)

試しに倒してみるが、手に入ったカードは『転がり岩』。

うーむ、ドロップ条件が分からん…。

そんなこんなで探索を続け、一つの山頂で一休み。

アイテムボックスから取り出した水分でのを潤しつつ眼下を眺める。

…これって、山頂からジャンプしながら進んだら、かなり早く山の裾まで行けるんじゃない???

ふと思いついたので、早速試してみることに。

多少勢いをつけて、山頂から斜め前に向けて…ジャンプ!

山頂から4 m程高いところまで体が浮いたら、後は運動エネルギーに沿って斜めに落ちていくだけ。

…：そーういや着地の事考えてなかったけど、大丈夫…：だよな？

斜めに落ちる事しばし。段々地面が近づいてきて、ついに足裏が地面に触れる。

ずざざざざあああああああ!!!

砂埃を巻き上げ、無事着地？する。

振り返れば山頂はかなり遠く。前を見れば山の裾までもう少しだ。

「…：こりやかなりのショートカットになるぞ。」

きちんとスキルが働いてくれたみたいで問題なく着地。

ただ靴底にかなりのダメージが入ったもよう…。

しかしそこに目を瞑ればかなり有効な移動方法になるぞ。

一旦今の山を降り切って、次の山へ進む。

そこから山頂方面に向かってせーのでジャンプ。

びよんつと斜めに飛び上がり、一番近い地面へ着地。

下を見ると大体4m。

ジャンプを繰り返せば4mずつ上へ上ることができるが、今の身体能力（体力増強・俊敏性増強 込み）を考えたら、普通に登るのとどっちが早いかわからないな。

何にせよ、他でも応用できそうな移動手段が出来た。

ピョンピョン飛んで、時には歩き、時には戦い山頂へ。

そこに待っているのは1つの山を登り切った達成感と、今から始まる浮遊移動の爽快感。

「さーて、もう1回行こうかなー」

一度経験したら何だか癖になる。

空を飛ぶ（跳ぶ）体験と、そのスピード感到病みつきになりそう。

先程と同じように多少の助走をつけ、空へと飛び出す。

「いいやつほー！ー！ーい！！」

2度目ともなれば慣れたもので、他に誰もいないのを良いことに、大声を上げながら空中を楽しむ。

しかしこの時俺は、ある物を見落としていた。

山頂についた時点で一度確認すればこんなことにはならなかっただろうに。

しかし俺は、先程感じた爽快感を早く味わいたくて、滑り台のてっぺんにたどり着い

た子供の如く、到着したと同時に空へと飛び出してしまった。
そして、飛び出した後に気付く。

自分の進路上に、ゴロンゴロンと転がる岩の塊がいることに。

「げげっ?!」
「!!?!」

今さら気付いてももう遅い。

飛び出した勢いのままどんと岩へ近づき…

ドゴオオオ!!!

何とか足の裏を岩の方へ向けることに成功した直後（ライオーキックのようなポーズになってしまった）足に固い感触が伝わり、岩はバットで打たれた野球ボールの如くポーンと飛んで行ってしまった。

俺はというと、足の裏で岩を踏んだことが着地とみなされたのか、その場で斜め下への運動エネルギーは消え、地面に尻餅をつく。

「あ痛ああ!!」

ぶつけたお尻をさすりつつ立ち上がり、岩が飛んで行った方向を見ると、かなり遠くまで飛んで行ったようで、向こうの方でゴロゴロと転がり落ちているのが見える。

……うーん、交通事故…。

次からは気を付けないとなーと軽く考えていると、思いもよらぬメッセージが流れてきた。

「プレイヤーがモンスターへ直接攻撃を行ったことを確認しました。規則により特殊エリアへと転送します。」

「え？特殊エリ…」

全てを言い終わる前に俺は強制的に転送され、

「…ア？」

気がつけば、そこはうす暗い空間で、目の前には巨大な石の人形、ゴーレムが立っていた。

「モンスターにプレイヤーが直接攻撃することは禁止されています。もし確認された場

合には特殊エリア『お仕置き部屋』にて罰を受けて頂きます。】

………えー…つと…？

【ちなみにこの情報は掲示板に書き込むことを禁止致します。もし見つかった場合には即刻削除、並びに再びお仕置き部屋へ強制転移となります。】

あの…状況についていけてないんですけど…？

【では、お仕置き開始です。やっちゃっててください。】

その言葉を皮切りに、目の前のゴーレムは動き出す。

俺をスツポリと握りこめそうな程大きい手を握りしめ、大きく振りかぶる。

…うーん、俺はただジャンプしてただけなのに…

そして俺目掛けて勢いよく振り下ろす。

「どうしてこうなった…。」

その嘆きを聞くものは誰もいなかった。

40話

「……………知ってる天井だ…。」

気がつけば俺は、拠点のパソコンの前で大の字になっていた。

…なんか、一瞬の出来事だった為、まだ頭が追いついていない。

えっと…、まずジャンプ中に転がり岩にぶつかった。

それが攻撃とみなされてお置き部屋に強制転移。

巨大ゴーレムのパンチでペツシャンコ…

起き上がり、体の具合を確認するが特に異常はないっぽい。

「でもあれが本当なら、死んでないってことはありえないよな…。」

目の前に迫る巨大な岩の塊。

あれをもろに受けて無事な筈がない。

最初の頃掲示板で、もしプレイヤーが死んだらどうなるのか？って内容が書かれてい

たが、ここに来て自分が経験することになるとは…。

そう言えば、掲示板に書き込むことは禁止って言ってたな。道理でそんな話見たこと無いはずだけど…、でもナンデだ？別に全プレイヤーが知っても良い情報だと思うん

だけど…。

ま、言ってもしょうがない。そういうルールなら何言っても無駄だろうし。

とりあえず自身の無事は確認したが、何となく今日はもうやる気が出ないので、ゴロゴロして過ごすことに決めた。

あ、後もう一つ決めた。『ジャンプ』はもう2度と使わない!!

…それにしても、他のプレイヤーもお仕置き部屋体験者っているのか…？

実は、彼は知らぬことだが、実際はそれなりにお仕置き部屋に連行されたプレイヤーはいる。

それが故意なのか事故なのかは色々だが、彼らの中でもあの体験はトラウマになっているため、できる限り連想されそうな話は避けるようにしている模様…。

翌日

いつものように準備をして22階へ。

昨日の事は引きずらない！

物語なんかではよくこんな時に、トラウマになってしばらく探索に復帰できないとか、リタイヤしてしまうとかのシーンがあるけど、一切そんなことは思いは無く、むしろ良くもやったな！くらいに思っている。

もし時間をかけて廻られたりでもすればまた違ったのかもしれないが、本当に一瞬の出来事で、特に痛みを感じる暇も無かったので、何となく他人事を感じているのかもしれない。

ま、あんまり考えすぎると逆に動けなくなっちゃうかもしれないから、できるだけ昨日の事は忘れて、いつも通りの探索を続けることにしましょ。

あ、とは言っても、『モンスターにプレイヤーのダイレクトアタックは禁止』って事だけは心に刻み込んでおく。

意味もなくあんな経験もう一度したいとは思わないからね。

ウロウロと階段を探し歩き回り、1日探索をつづけるも階段は見つからず。

さらに翌日、その次の日と探索を続け、ようやく23階への階段を発見した。

23階も、ここまでと同じく赤茶けた山肌が視界に広がる。

そして空には「あくほく。」と鳴くアホウドリが複数。

山の斜面にはゴロゴロ転がる岩の塊が複数。

どうやら魔物の種類は同じで、同時出現数が増える感じらしい。

これは地味にキツイ。

1体だけなら先行ワンキル楽勝なんだが、2体以上いる場合、倒さなかつたモンスターが守備表示にでもなれば、守備力を越えるモンスターを召喚するか、魔法・罠・効果を使用するしかない。

出来るだけ戦闘は回避の方向かな？

逐一マップを確認し、戦闘にならない様に気を付けながら慎重に進む。

が、戦闘を一切行わないというのもストレスが溜まるので、手札と相談し、倒せそうな時だけ戦うことにした。

フラフラと探索を続けること数日。

掲示板で新たな情報が発表された。

【某氏、30階突破!! 報酬は『融合』!!】

どうやらまたまた某氏が一番乗りだったようだ。

今回の報酬は、魔法カード『融合』1枚と、融合モンスターカード1枚。手に入ればまた戦術が広がりそうだな。

某氏曰く、融合モンスターカードもレベルアップやランクアップが可能らしく、これでまたデッキが強化できたと自慢してた。

ちなみにカードの詳細は、『レベル5 A2200 D1500』で、彼が良く使うレベル3モンスター2体が融合素材らしい。

俺の場合はどうだろうな……。何となくだが、バードと戦士で融合になりそうな気がする。

やはり、先の情報が出れば皆モチベーションは上がる。

ひとしきり掲示板で盛り上がり、その後は某氏に続く為、いつも以上に攻略に力を入れる事となる。

融合の話題が上がって数日後、俺はようやく23階を突破。

魔物に代わり映えは無かったが、できる限り戦闘を避けるように移動しては中々思うようには進まず、思った以上に時間がかかった。

さて、24階はどんな感じだろうか。

階段を降り、簡易転移石を探し登録。

フィールドの見た目は上の階と変わらないが…、お、いきなりマップに赤い光点発見。
 …3体…か？一緒にいるようだ。

まさかここも23階と同じパターンか!?と考えつつ、慎重に魔物へ近づく。するとそこには

グゲギヤギヤ!

ゲギエギエ!

グゲギユギョ!

人間の子供ほどの大きさで、肌が緑色の、お世辞にも可愛いとは言えない顔をした魔物が3体。

【ゴ布林 星2 A500 D500 守備表示 通常モンスター】

【ゴ布林 星2 A500 D500 守備表示 通常モンスター】

【ゴ布林シーフ 星3 A600 D500 守備表示 効果モンスター】

ゴ布林だ!!

ゲームでお馴染み、ラノベでも説明いらずの、あのゴ布林だ!

いやー、まさかこんなところでファンタジーの王道と出会うとは…。

謎の感動をしつつ、ゆっくりと近づき様子を見る。

ゴ布林たちはこちらに気づいた様子もなくゲギャゲギャ喋っている。

相手は3体だが、能力的には苦戦することはまず無いだろう。

シーフの効果が気になるが…、ま、戦ってみないことには分からないからな。

ある程度まで近づくと、奴らの内1体がこちらに気づいたらしく、指をさして仲間
に教えている。

3体ともがこちらを向いたところで俺は堂々と宣言する。

「さあ、デュエルだ!俺のターン、ドロロー!」

身構えるゴ布林たち。

しかし今の俺のデッキパワーなら、500や600程度の能力では相手にならない。

まず効果モンスターのゴ布林シーフを倒し、続けて残りの2体のゴ布林を倒す。

シーフは特に効果を発動しなかったので、何一つ問題なく戦闘は終了した。
落としたカードを拾い確認。

ゴブリン 星2 地 悪魔族／通常モンスター

A500 D500

ゴブリンシーフ 星3 地 悪魔族／効果

A600 D500

このカードが相手にダメージを与えたとき、あなたはカードを1枚ドロウできる

ノーマルゴブリンは特筆すべき点無し。あえて言うならなぜレベル2がここに？つてぐらい。

シーフは、対人戦なら使えるかもしれないが、通常の雑魚戦では使用用途がないな。しかしゴブリンか…。

想像以上にきま…、可愛くない。

だが24階にしては妙に弱い。何か理由があるのか…？

ま、考えていても仕方ない。
次の魔物を探して探索を続けよう。

4 1 話

ゴブリンたちとの戦闘後、少し進むとまたマップに魔物の反応が現れた。
 (また3体…、ゴブリンだ。)

この山フィールドは、前の木が生えた草原フィールドと違い身を隠すものが何もないため、高低差を利用して見つからないようにするしかない。

できるだけ体勢を低くしながら慎重に近づく。

幸い、ゴブリンたちは察知能力に乏しいみたいで、かなり近づかないとこちらに気づかない。

【ゴブリン	星2	A500	D500	攻撃表示	通常モンスター
【ゴブリン	星2	A500	D500	攻撃表示	通常モンスター
【ゴブリンの剣士	星3	A700	D500	攻撃表示	効果モンスター

今度はシーフではなく剣士か。

しかし今の手札なら何も問題ない。先ほどと同じく効果持ちの剣士から倒す。

ゴブリンの剣士 星3 地 悪魔族／効果

A700 D500

このカードは自身の攻撃力と同じ攻撃力のカードと戦闘を行う時、その相手カードが装備カードを装備していない場合、戦闘では破壊されない。

ふむ…。またゴブリンか。

もしかしたら、この24階はゴブリンエリアなのか？

予想があっているか確かめるため、さらに探索を続ける。

…お、割と近くに魔物反応。

【ゴブリン 星2 A500 D500 攻撃表示 通常モンスター】

【ゴブリン 星2 A500 D500 攻撃表示 通常モンスター】

【ゴブリンモンク 星3 A500 D500 攻撃表示 効果モンスター】

これはもうゴブリンエリアって事で決まりかな？

サクッと倒してカードをゲット。

ゴブリンモンク 星3 地 悪魔族／効果

A500 D500

このカードは1回のバトルフェイズ中に2回攻撃を行うことができる。

しかし、さつきから通常ゴブリンは一向にゴブリンのカードしか落とさない。

デュエリストアイの効果で、全部で3種類落とすことは分かっているんだけど…。

せめて条件のヒントでも欲しいよな。

ブツブツ言いながら進み、見つけたゴブリンを手当たり次第に狩っていく。

23階で結構鬱憤が貯まってたからね。

で、結局この日は階段を発見できなかったので拠点へ帰る。

しかし何となくこの階の傾向は読めた。

基本的にはノーマルゴブリン2体と、レベル3のゴブリンが1体のセットになっている。
る。

レベル3ゴブリンで、今まで出会ったのが、『シーフ』『剣士』『モンク』『マジシャン』『回復士』『弓士』『盾士』の7種類。

シーフ、戦士、モンク以外のカードがこちら。

ゴブリンマジシャン 星3 地 悪魔族／効果

A 500 D 500

1ターンの1度、相手プレイヤーに200ダメージを与える。

この効果を使用したターン、このカードは攻撃できない。

ゴブリンの回復士 星3 地 悪魔族／効果

A 500 D 600

このカードをリリースして発動可能。

あなたは自分の場の「ゴブリン」カードの数×200ライフを回復する。

ゴブリンの弓士 星3 地 悪魔族／効果

A 600 D 500

自分の場に、このカード以外の「ゴブリン」カードが存在する時、このカードはプレイヤーにダイレクトアタックすることができる。

ゴブリンの盾士 星3 地 悪魔族／効果

A 500 D 700

自分の場の「ゴブリン」カードが攻撃対象となった時に、その対象をこのカードに移

し替えることができる。

「なんだか「ゴブリンデッキ」が出来そうなラインナップだ。

もつとカードが集まれば、そういうのをサブデッキとして作るのも面白いかもしれない。

さてさて、拠点に帰ってきたらまずはカードチェック。

レベルアップ、ランクアップの確認をすると、ゴブリンズは色んなカードのレベルアップ素材で使えるようになってるが、絶妙にばらけていて、未だに1枚もレベルアップさせることができるカードは無い。

…悔しい。

それでもポチポチと調べていると

「……………ん？なんだこれ？」

目についたのは「ゴブリン」のレベルアップページ。

そこに映し出されているのは、ゴブリンのカードが1枚と、その右下に『×10』の文字。

「もしかして、ゴブリンのカードが10枚でレベルアップできるって事か？」

現在ゴブリンのカードは10枚以上持っているため、試しにレベルアップさせてみる事に。

「……………8、9、10と。」

きつちり10枚数え機械へ挿入。

ガシヤーン　ペカーー

レベル1から2に上げる時より若干光が強くなったような気がする。

ゴブリンリーダー　星3　地　悪魔族／効果

A600　D600

このカードが自分の場にいるとき、自分の場のゴブリンリーダー以外の、レベル3以下の「ゴブリン」カードの攻撃力・防御力は100アップする。

やっぱりゴブリンデッキか。

念のため、ゴブリンリーダーがレベルアップ素材として使用できないか確認したが、素材にはなるものの、現時点でのレベルアップは無理だった。

では、余ったカードはDPに変えちゃいましょ。
ポチつとな。

…ん？んー…？

思ったよりポイントが多い…？

21階以降のレベル3カードはDPに変換すると1枚40DPになる。
レベル1が10、レベル2が20なので、倍々になっている。

今回はレベル2のゴブリンのカードがある為、その分少ないと思っていたが…。
これはゴブリンも40DPに変換されてる？

変換を一旦キャンセルし、試しに1枚づつDPに変換していく。

「戦士は…40。モンクも…40。で、ゴブリンは…おっ!? やっぱり40だ!!」
どうやら他のレベル3カードと同じく40DPで変換できるようだ。
これはかなり美味しいぞ。

「つて事は…？もしかして、稼ぎどころですかねえ…。」

出現する魔物はどれもそんなに強くなく、能力もレベル2相当しかない。なのに手に入るD Pは倍…。

おれは顔が段々ニヤケていくのを止めることができなかつた。

翌日

いつも通り準備をして24階にやってきた俺は、先ずはマップを埋めるべく、まだ通つてない場所へ向かい走り出す。

本格的にD P稼ぎをするなら、できる限り効率のいいルートを通りたいからね。

昨日確認した結果、魔物との戦闘で負ける心配はほぼ無いため、安心してルート作りに集中できる。

あつちへウロウロこつちへウロウロ。

数日掛けて24階のマップをほぼ埋めることに成功した。

「よっし、じゃあ次は効率の良い回り方の研究だな。」

この階層は前の階と比べて、魔物が出現する場所の間隔が若干近い気がする。

ここなら過去最高の効率でD Pを稼ぐ事が出来そうだ。

そして何度かの検証をはさみ、自分流最適ルートを完成させた。
今ここに、第3回？DP稼ぎが始まった。

42話

あれから数日。

俺はひたすら効率を求めてDP稼ぎを繰り返した。

1体40DP×3体∥120DP。これが1回の戦闘で手に入るDP。

1時間に6〜7回戦闘を行う為、120DP×6回∥720DP。又は120DP×7回∥840DP。

1日に大体8時間ぐらいはダンジョンに潜る為、720DP×8時間∥5720DP。

多ければ840DP×8時間∥6720DP。

プラス、スキルで1体につき2DP追加。

1日で6千DP前後入手可能となった。

さらに、25000DPが貯まった時点で体力増強をレベル3に、追加で2500DP貯めて俊敏性増強をレベル2に上げた。

これにより、さらなるスピードでの移動が可能となり、さらに効率が上がったことで、1時間の戦闘回数が約10回を超え、結果1日の稼ぎが約1万DPとなった。

それでも彼のD P稼ぎは止まらない。

1日に1万D P稼げるということは、家電や生活用品を1日1つつつ良いもの（Bランク）に変えられるということだ。

そうと分かれば、先に進むことを忘れたかのように24階でD Pを稼ぎ続ける。

ウオシユレット付き水洗トイレや、高級セミダブルサイズのベッドに高級布団。

乾燥機能付き全自動洗濯機にフアミリーサイズの高性能冷蔵庫。

目についたものをどんどん交換し、さらに生活レベルを上げていく。

ちなみに、いらなくなったものは入手時に払ったD Pと同額払えば撤去することができる。

これは他プレイヤーが管理人に確認して得た情報だ。

部屋も広めに変えて、食材も良いものをどんどん交換する。

ついでに低D Pでとれるスキルは、気になったものを取りあえずレベル1だけでも取っていく。

料理・清掃・潜水 e t c

家電類に関しては、ランクCで元の世界の標準ぐらい、ランクBで高級品（裕福層が使用するレベル）

なので、かなり贅沢な感じの暮らしになってきた。

「通り生活用品をランクBに変えることができたので、「そろそろ攻略再開するかあ…。」と考える。

（あ、そういうや生活の品ばかり取ってたから、デュエルに関係するスキルのレベルとかは上げてないや。）

あれだけDPを稼いだにも拘らず、体力と俊敏性以外は一切デュエル関係のスキルレベルを上げていないことを今になって気づく。

（ま、ながらも少し稼ぎタイムだな。）

結局その後も攻略は再開されずにDPを稼ぎ続ける。

そして5日間かけて5万DPを貯め、気になっていたデュエリストアイのレベルをアップ。

（こういう時を逃したら中々レベルアップチャンス無いからね。ほかにも上げたいスキルはあるけど、必要DPが高いのが優先だな。）

ポチつとな。

いつもと同じようにスキルのレベルアップを行う。

デュエリストアイLv5↓6

- ① モンスターの表示形式が分かるようになる
- ② モンスターの増援タイミングが分かるようになる
- ③ 対象のモンスターが効果モンスターか通常モンスターか分かるようになる
- ④ カードの成長度合いが分かるようになる

効果モンスターが効果を使用した際、それ以降1度使用した効果の詳細が分かるようになる

- ⑤ モンスターの落とすカードの種類枚数が分かるようになる
- D P 交換リストの詳細が少しわかるようになる
- ⑥ 効果モンスターの効果詳細が分かるようになる

おお!!

今まではモンスターが1度効果を使用しないと詳細が分からなかったけど、これからは初見でも効果詳細が分かるようになった。

これは初見相手にかなり戦いやすくなるな。

今までは知らない効果にビクビクしながら戦ってたし。

よし、じゃあ次デュエリストアイのレベルを上げるのは…10万DPか…。

10万…10万…10万…。…10日で貯まるな…。ハッ!? いかんいかん、それではいつまでたつても先に進めなくなるでござる。

ここは他のスキルを優先して…。…でも10万か…。手が届きそうな数字だから余計に…。

うーん…。

10日後

やってしまった。

でも後悔はしていない。

反省もしない!

スキル一覧の中には、デュエリストアイ『Lv7』の表記が。

デュエリストアイLv6↓7

略

⑦モンスターの落とすカードの名称が分かるようになり、そのイラストが見れるようになる

レベルアップ・ランクアップに必要なカードの名称が分かるようになり、そのイラストが見れるようになる

DP交換リストの詳細が大体わかるようになる

10万DPも注ぎ込みレベルを上げた甲斐があった。

文章だけ見ればわかりにくいですが、実際に効果を体験すればその有能さが分かる。

まず、モンスターの落とすカードの名称・イラストが判明する効果。そしてレベルアップ・ランクアップ素材の名称とイラストが判明する効果。

この2つを得たことで、レベルアップ・ランクアップが非常にわかりやすくなった。

例えば、AのカードとBのカードでCのカードがレベルアップしてDのカードになる。

さらにDのカードと、モンスター α が落とすカードで、モンスター β が落とすカード

のレベルを上げれる。等、どのモンスターを倒せばどのカードのレベルアップにつながるのかが明確化された。

そして、今まで必要カードが一切分からなかったランクアップの素材も、今まで魔物が落としたことのない3枚目のカード等が素材になることが判明した。

そりや必要カードが分からないわけだよ。

ただし、その入手方法はまだわからないので、結局ランクアップはできないのだが、それでも必要カードが分かっただけでもかなりの前進である。

さらにもう一つの効果。

俺的にはこちらの方が非常にうれしい効果だ。

レベル5になった時に、『DP交換リストの詳細が少しわかるようになる』という効果が追加されたが、それがもつと詳しくわかるようになったのだ。

例えばこのデュエリストアイのスキル。

今までの表示はこちら。

デュエリストアイLv5

色々なものが見えるようになる。

① モンスターの表示形式が分かるようになる

② モンスターの増援タイミングが分かるようになる

③ 対象のモンスターが効果モンスターか通常モンスターか分かるようになる

④ カードの成長度合いが分かるようになる

効果モンスターが効果を使用した際、それ以降1度使用した効果の詳細が分かるようになる

⑤ モンスターの落とすカードの種類枚数が分かるようになる

DP交換リストの詳細が少しわかるようになる

で、レベル7の表記はこちら

デュエリストアイLv7

色々なものが見えるようになる

① モンスターの表示形式が分かるようになる(1000DP)

② モンスターの増援タイミングが分かるようになる(2000DP)

③ 対象のモンスターが効果モンスターか通常モンスターか分かるようになる(500

0DP)

④ カードの成長度合いが分かるようになる

効果モンスターが効果を使用した際、それ以降1度使用した効果の詳細が分かるようになる(10000DP)

⑤ モンスターの落とすカードの種類枚数が分かるようになる

DP交換リストの詳細が少しわかるようになる(20000DP)

⑥ 効果モンスターの効果詳細が分かるようになる(50000DP)

⑦ モンスターの落とすカードの名称が分かるようになり、そのイラストが見れるようになる

レベルアップ・ランクアップに必要なカードの名称が分かるようになり、そのイラストが見れるようになる

DP交換リストの詳細が大体わかるようになる(100000DP)

(8) モンスターが落とすカードに関する効果を得る(200000DP)

(9) モンスターが落とすカードに関する効果を得る
スキル確認に関する効果を得る(500000DP)

(10) 全てを見通す力を得る(???DP)

何と未習得効果もある程度わかるようになったのだ。

おそらくレベル8、9の効果で、ドロップカードの詳細がもつとわかるようになるの

だろう。

もしかしたらこのどちらかで、ドロップ条件が分かるようになるかもしれない。

レベル9のスキル確認に関する効果は、多分今見えているこの詳細表示がもつと詳しくなるのではなからうか？

最後の「全てを見通す力」ってのが何なのかはわからないが、おそらく普通の効果ではないだろう。

他なスキルも詳細が見れるようになり、より効果が分かりやすくなったと同時に、そのスキルの最大レベルまでわかるようになった。

体力増強

レベル1 1日中走り回っても疲れない(500DP)

レベル2 レベル1より疲れない(2500DP)

レベル3 レベル2より疲れない(2500DP)

レベル4 レベル3より疲れない(5000DP)

レベル5 疲れることがなくなる(5000DP)

……これは何か説明に手抜き感が漂うけど…。

ま、先が必要DPも分かるようになったので、計画も立てやすくなるし、良いとしよう。

じゃ、そろそろ他のスキルレベルを上げる為のDP稼ぎしようかな。

.....。

4 3 話

俺がDP稼ぎの鬼と化し、ようやく攻略再開の目途が付き始めたころ、掲示板にとんでもない情報が載せられた。

7 6

にして30階突破した奴増えてきたよなあ

7 7

だよな。某氏がクリアしてかなり経ってるもんな

7 8

てか某氏のことだから、そろそろ40階もクリアするんじゃないの？

7 9

うーん、どうだろ？

ペース的にはそろそろかもしれないけど、やっぱり階が進むにつれて時間かかるようになってるからね。

8 0

某氏某氏って、他に1番にボス倒してやろう！って奴はおらんのかね

8 1

だったらお前が行けよ

8 2

だったらお前が行けよ

8 3

俺はまだ20階半ばだよ

8 4

w w

8 5

w w w

8 6

ブツ w w w w

8 7

ま、毎度毎度某氏の情報町つても面白くないよな。

8 8

待ち。ミスった。

8 9

とは言え、あのペースには中々追いつけんぜよ。

9 0

メイド…

9 1

どんな攻略してるのか教えてほしいもんだがな

9 2

∨ 9 0

いきなりどうしたよ？

9 3

∨ 9 0

メイドがどうした？

9 4

∨ 9 0

いきなり性癖をばらされても…

9 5

違う！

40階クリアしたんだ。

96

w
w
w

97

何!?

98

おおー!!!

99

おめー!

100

おめー!!

101

おめでどう

・
・
・

123

で、そろそろ聞いてもいいか？

40階攻略の報酬と、さつき『メイド』とつぶやいた理由を。

まさか報酬がメイドだったというわけではあるまいな？

124

!!??

125

!?ガタツ！

126

ガタツ!!

127

詳細はよ!!!

128

くあwせd r f t g yふjこーl p

129

落ち着けよ前からww

いまは某氏の情報をお乳ついて待とうじゃないか。

1
3
0

w

お前が落ち着けよ w w w

1
3
2

ひでえ変換ミスだ w

1
3
3

w w w w

1
3
4

. . .

1
7
8

何かすげえ寄り道した感が半端ないけど、そろそろ情報上げてくんねえかな？

1
7
9

まさかこれほど誤変換で盛り上がるとは…。 129、恐ろしい子!!

180

40階報酬

レベル7モンスターカード【A2600 D1800 通常】

不愛想メイド

飯作ったり掃除したりしてくれるらしい

181

まじか!!?

182

くっ！俺も急いで40階まで行かねば!!

183

メイドメイドメイドー!!!!

184

あの…レベル7については…?

185

めいどー!!

186

レベル7？そんなことよりもメイドじゃー!!!

187

おいおいお前ら落ち着けて、つて言っても無理そうだな。

188

われらの邪魔をするものは何人たりとも容赦はせん!!!

189

そうだそうだー！

190

メイドー!!!!!!

191

…だめだこりや。後で管理人に問い合わせてみるかな…。

【管理人より、皆様へお知らせ】

日頃よりダンジョン攻略に精を出してくれてありがとう。

今日は問い合わせの多かった40階突破報酬について説明するね。

本当はこちらから情報を提供するのには良くないんだけど、みんなのモチベーションにつながるって事で特別に許可が出たから説明するよー。

まず、みんなが気になっている『メイド』。正確には『ヒューマノイド』にあたるよ。みんなの日々の生活をサポートするために生み出された存在で、主に料理や掃除などの所謂家事を行ってくれるよ。

ただ、この世界、みんな知ってる通りカードの世界だよな？

この『メイド』も入手時はカードになっていて、一番最初にDPを使うことでオプションをつけれるようになってるんだ。

オプションの種類は色々あるから、これは実際に自分の目で確かめてね。

簡単に言えば、自分好みのメイドさんをゲットできるって訳♪

ただし、オプションの追加は最初の1回限りだからよく考えてね。

後、メイドさんの表情や性格に関しては、所謂リセットされた状態から始まるから、最初は無表情で感情表現することは少ないんだ。

プレイヤーがどんな接し方をするかによってその性格も変わってくるよん。

あ、後、みんなの中には男の人だけじゃなくて女の人もいるから、オプシオンで『メイド』と『執事』を選べるようにしてあるよん。

好きな方を選んでね♡

簡単にまとめるとこんなところかな？

じゃ、みんなこれからもダンジョン攻略頑張つてねー☆

某氏が40階をクリアしたと情報が出てから、掲示板は毎日大盛り上がりになって
いる。

誰か（おそらく複数人）が管理人に問い合わせをしてくれたおかげで、ある程度の詳細も分かった。

今ではみんな必死で40階目指して攻略を進めている。

俺もそろそろDP稼ぎは切り上げて、攻略を再開しようかな。

ちなみにここまでで上げたスキルはこちら。

LP2000↓3000

初期手札3枚↓4枚

マツピング レベル6↓7

魔物探知 レベル6↓7

体力増強 レベル2↓3

成長促進 レベル3↓4

デュエリストアイ レベル5↓7

俊敏性増強 レベル1↓2

アイテムボックス レベル1↓3

モンスター実体化時間延長 +5分↓+20分

入手DPアップ レベル2↓4

料理レベル1↓6

かなり上げれたから満足。

ジャンプ?そんなスキルは知らない。

ではでは、久々に攻略を進めていきましようか!

転移機能を使って25階へ飛ぶ。

D P稼ぎの時マップはほぼ埋めたので、当然階段は発見していた。なので25階の転移石は使えるようにしておいたのである。

さて、やってきました26階。

どんな魔物が出るんだろ？

見た目はこれまでと同じ山フィールドで、赤茶けた山肌が広がる。

しかし、各山頂の上空に何か飛行系のモンスターらしきものが飛んでいるように見える。

とりあえず今いる山の山頂を目指して進んでみる事にした。

体力と俊敏性があがったので、労することなくサクサクと進める。

しかし全然魔物を見かけないな……はっ!?!まさか16階と同じで特殊ボス!?

……いや、あの時の妙な違和感はないし、何より空をモンスターらしき生き物が飛んでいる。

どういうコンセプトなんだろ？

山頂にたどり着いたとき、なぜここまで魔物に遭遇しなかったか、何となく分かった気がした。

26階は24階までと比べると、山のとっぺんがキュツと伸びており、その上になんだかフサフサした藁の塊？みたいなものが乗っていた。

中をのぞくと小さな生き物が数匹。

【ドラゴンベビー 星1 A300 D300 守備表示 通常モンスター】

えつと？ここは…竜の巣？

つてことはもしかして…！！

キュエエエエエエエエ

大きな鳴き声を発しながら、上空（かなり高い位置）を飛んでいた魔物が一直線に降りてくる。

【飛竜 星3 A1200 D800 攻撃表示 通常モンスター】

もしかしなくても…親？

降りてきた竜はものすごい剣幕で俺を睨む。

…別に子供に何かしようとしたわけじゃないのに…

しかしこの状況ではそれも言ってもらえない。

ディスクを構え宣言。

「デュエル！」

手札には…よし。

「俺はモンスターをセット。ターンエンド。」

俺がターンエンドを宣言すると、奴は一度飛び上がり、セットモンスターめがけて一直線に向かってきた。

「俺のセットモンスターは茂る草壁！このモンスターは1ターンに1度戦闘では破壊されない！」

飛竜が攻撃を終えた後、俺のターンが回ってくる。

「俺のターン、ドロー。俺は茂る草壁を攻撃表示に。そして手札よりワーウルフを召喚！」

場に逞しい体つきの狼男が現れる。

「バトルフェイズ。ワーウルフの効果発動！茂る草壁をリリースし、ワーウルフの攻撃力を草壁の攻撃力分アップさせる！そして飛竜に攻撃だ！！」

筋肉が膨れ上がったその両の腕で、飛竜を殴り飛ばすと、金色の光となり消えていっ

た。

……ん？まだデュエルが終わらない……？まさか!?

巢の方に目をやると、ドラゴンベビーが3体。

巢に隠れてて、自分たちの親がやられたところは見えていなかったようだ。

つぶらな瞳を向けてくる小さな竜。

え、この子等も倒すの？何か虐待風景みたいになるんだけど…。

散々ゴブリンたちを虐殺しておいてそんなことを考える。

しかし倒さないことにはデュエルは終わらない。

俺は心を鬼にしてその竜の子供たちを倒す。

飛竜 星3 風 ドラゴン族／通常モンスター

A1200 D800

ドラゴンベビー 星1 風 ドラゴン族／通常モンスター

A300 D300

今まで出てきた魔物と違い、こちらに敵対心を持っていない感じの顔だった為、余計に良心が……。

くつ、魔物は魔物だ。切り替えろ切り替えろ。

しかし、この巣を見つけた時、24階はゴブリンエリアだったからこの階はドラゴンエリアかな？って思ったんだけど…。

…え？もしそうなら、毎回こうなの？えー……。

4 4 話

若干気乗りしないまま探索を再開する。

が、少し進んだところで気が付いた。

「…そういや、さつきみたいに山頂にしか魔物がいないんなら、山の上の方を避けて進めばいいんじゃないかね？」

一応、山裾の方にも魔物がいないとも限らないので、慎重にマップと目視で確認しながら進む。

そして一日が経過。

予想通り、この階では魔物は山頂にのみ出現するようで、山裾を移動することで一切の戦闘を行う事無く進むことができた。

しかし逆に戦闘が無かったことにより、カードも最初の戦闘以外で入手できていない。

帰る前にもう一回戦つとくか？と思ったが、今の手札では若干厳しい。ドローカードが強カードならいいが、そこまで無理する必要もないだろうと考え、今日は拠点へ帰る

ことにした。

次の日

昨日と同じように山の下半分を通ってマップを埋めていく。

各山の上には飛龍らしき影が見える。

…今の手札ならいけるが…、ま、絶対に戦わないといけないって事もないし、今はやめとくか。

マップピングスキルのレベルが高い為、ある程度の高さを通れば山頂までカバーしてくれる。

戦闘が無い事を良いことに、ひたすらウロウロしてマップを埋めていく。

そして、

「お、階段発見！」

マップ上に階段のアイコンが現れた。

しかしこの場所は…

「これって…、竜の巣とかぶってるじゃん…。」

そう、階段のアイコンが映った場所に重なって、魔物を示す赤いアイコンが表示されているのである。

「多分巢の中に階段がある。パターンだよなあ……。」

覚悟を決めて巢に向かう。

ある程度近づいたところで、上空を飛んでいた竜がこちらに気付き降りてきた。

「(カードを温存しておいて正解だったな…) デュエル！」

今日は一度も戦闘をせず強カードを温存してあるので、問題なく倒せるだろう。

「俺は協調の戦士を召喚。さらに手札より自立型支援ロボB—RT02の効果発動。協調の戦士の装備カードとなる。」

妙に名前が長くなってしまうが、元々ボロット時代に身に着けた『装備カードとなり装備者の攻撃力・防御力を200アップさせる』効果は、レベルアップしたことでその上昇量を300へアップさせた。

「これで協調の戦士の攻撃力は1400。飛龍に攻撃だ！」

戦士の攻撃でその身を光に変える飛龍。

残ったのは巢の中でちょこちょこ動いている小さな竜。

……くっ!!

心を鬼にして子竜を倒す。

落としたカードを拾いながら巢の中を覗くと、真ん中らへんにぽっかりと人一人入れそうな穴が開いていた。

中には階段があるだろうことは分かっているので、躊躇せずに穴へ飛び込む。

予想通り中は階段が続いており、上の階と同じように人が中に入ることので光がつく仕組みになっていた。

階段を降り、着いた先は24階等と同じ洞窟だった。

…ま、出た先も竜の巣だったら嫌だもんな。

早速簡易転移石を探し登録。

洞窟の外に出て周りの様子を確かめる。

……うん。空に飛龍らしき影は無し。

よし！この階は罪悪感にかられることは無い！

ホッと一息つき、魔物を求めて探索を始める。

とりあえず山頂を目指すって事でいいかな？

マップ上も目視でも魔物がないことに嫌な予感がしつつも、特に何も起こることなく山頂へたどり着いた。

「…何も無いな。」

26階の様に、山頂に何かあるわけでもなく、21〜24階の様に、登山中に魔物に

あう事も無い。

おや?っと思いながら、ある一つの可能性に思い至る。

「もしかして、この階は山の下の方にしか魔物が出ない…とか?」

目を凝らしても良く見えない。

うーん、行ってみるしかないか。

一度上った山を今度は下へと下っていく。

登りより下りの方が楽なイメージもあるが、実際は勢い余って転げ落ちたりしない様に踏ん張る必要があるので、意外と体力を使う。

ジャンプ?いくら魔物の姿が見えないからと言っても使いません!

赤茶けた山肌を下る事しばし。

マップの端に赤い光点を捉えた。

(やっぱりこの階は下側に魔物がいたんだな。…でも山の下の方にいる魔物ってどんなんだろ?)

目視ではまだその姿は見えないので、マップを頼りに近づいていく。

そして、辿り着いた場所には複数の穴が開いていた。

穴と言っても、俺が階の移動に使っている洞窟のような大きさではなく、まるで何か地面に住む動物が掘ったような穴だ。

警戒しつつ近づき、中を覗いてみると、

【ドラゴンベビー A300 D300 守備表示 通常モンスター】×3

ま、またこのパターンか——!!

そう頭を抱えた俺の前に、別の穴から何かが飛び出してきた。

【潜竜 A800 D1200 守備表示 通常モンスター】

も、もぐ…？何て読むんだ？

それは竜という名前がついている割には、どちらかと言えばモグラに近い様相で、体はまるで岩のように固そうだ。

まるで子供を守るかのように俺の目の前で構える。

「くっ！デュエル！（やりにくいなー…）」

客観的に見ればこちらが加害者にしか見えない。

「俺のターン、ドロー！」

と、ここで先程の飛龍との戦闘で戦士とロボを使ったことを思い出す。

（まだデッキには何とかできるカードはある。今は耐えるか…。）

「俺はモンスターをセット。ターンエンドだ。」

俺の宣言後、潜竜はこちらを睨んだまま特に動きはない。

再び俺にターンが回ってくる。

「ドロー……俺は力秘めし小竜（A800D800）を召喚。そのままドラゴンベビーに攻撃！」

子竜の爪が敵の小さな竜を引き裂き光に変える。

キュウウウウウウ!!??

グルウウウウウウ!!

他の子竜と潜竜が同時に泣き叫ぶ。

……もう完全こつちが悪者だよな。

「ターンエンドだ。」

俺の宣言により相手のターンのターンになるが、攻撃力が足りない為こちらを睨み続ける潜竜。

増援ゲージも貯まってないし……ん？

気のせいかな普段より増援ゲージが多く溜まって……？

いつもならこちらが攻撃を仕掛けた時にはほとんど貯まらない筈なんだけど……。

マスクデータで、何かしらの行動がきつかけで溜まりやすくなったりするのか？

そんなことを考えているとこちらにターンが回って来た。

「ドロー。…俺は海蛇（A900D800）を召喚。海蛇と力を秘めし小竜で、ベビードラゴンを攻撃！」

残っていた2体の竜もその姿を光に変える。

残ったのは鬼のような形相でこちらを睨む潜竜のみ。

「た、ターンエンド。」

その顔に若干たじろぎつつもターンエンドを宣言する。

しかし、攻撃力800で効果のない潜竜にできることは無い。

悔しそうに空へ向かって声を上げる。

しかしここで、思いもよらぬ出来事が起こる。

俺のターンが回ってきた瞬間、増援ゲージが一気に上昇し満タンになってしまったのだ。

（子どもを先にすべて倒すのがトリガーか？）

おそらくそうなのだろう。

この様子からして、弱いモンスターが増援で出てくるとは考えにくい。

出来ればこのターンで決めてしまいたいが…

「俺のターン、ドロー。よしっ、魔法カード『挑発』を発動！これでお前は守備表示から攻撃表示になる。そして海蛇で攻撃！」

グオオオオオオオ：

海蛇に噛みつかれ、潜竜は光となり消えていった。

ふうつと一息ついて、落としたカードを拾う。

潜竜の巣穴 罾カード

相手の攻撃宣言時に発動可能

手札よりレベル3以下の地属性モンスター1体を特殊召喚する。

……んんん???

45話

今まで初見のモンスターを倒した時は、まず倒したモンスターのカードが手に入っていた。

普通に考えれば、今回手に入るのは潜竜のカードだと思っていたんだが…。

モンスターと対峙した時に確認できるドロップカードリストも、3枚表示されるうち一番左に本人？のカード、真ん中に大体次の戦闘で落とすカード、一番右に3回目ですとす、もしくは今まで落としたことのないカードの順で並ぶ。

潜竜のリストを見た時も、確か一番左は潜竜のカードで、今手に持つこのカードは一番右のカードだったような気がするんだけど…？

頭にハテナマークを浮かべつつも、一旦拠点へ帰ることにして帰還石を使う。

早速パソコンでレベルアップ素材になるか確認したが、『飛竜』と『ドラゴンベビー』は素材になったけど『潜竜の巣穴』は素材にならなかった。

もしかしてと思いランクアップも確認するが、そちらにも見当たらない。

むしろ潜竜のカードがレベルアップの素材で見つかった。

頭からハテナマークが離れず、どうにもすすきりしないままお昼を食べるが、もう一

度確認してみればよいかと思い直し、再び27階へ向かう。

マップを頼りに潜竜を探し、しばらく歩いたところで遭遇。

【潜竜 A800 D1200 守備表示 通常モンスター】

うーん、変わったところはないけど……ん？

よく見ると、ドロップカードの表示がされている場所に何やら文字が見えた。

潜竜の巢穴

条件：自分の場に地属性モンスター並びにドラゴン族モンスターがおり、増援ゲージが満タンの時に倒す。

を？おおお???

条件が表示されている……？

……もしかして、これもデュエリストアイの効果か？

前に効果モンスターが1度使用した効果が分かるようになるって効果が追加されたことがあったけど、今回特殊条件を満たしたことで、同じように表示されるようになったとか……？

確かに前の戦闘の時、増援ゲージが満タンだったし、場にはドラゴン族の小竜がいた。

あと表側表示にはなっていないけど、最初にセットしたモンスターは地属性のストーンゴレムだった。

たまたま条件を満たしていたって事か？

しかし今ここで考えていても仕方ない。

条件を満たさないように倒して、普通に潜竜のカードを落とせば、予想通りだったってことでいいだろう。

手札にはレオ（星5）と風の魔躁士（A800D800）がいるのでサクッと倒す。

で、落としたカードが

潜竜 星3 地 ドラゴン族／通常モンスター

A800 D1200

うん、やっぱりたまたま条件を満たしていたんだな。

つてことは、今まで出てきた魔物でまだ落としたことないカードを持っている奴も、似たような条件で落とす可能性があるか？

うーん、ちよつと気になってきたぞ。

今回は潜竜が地属性のドラゴン族だったからその2種類のカード+ α が条件になっていたっばい？

じゃあ飛竜は風属性モンスターとドラゴン族を出して、同じように増援ゲージを貯めて倒せばいいのか？

でもほかのモンスター、例えばゴブリンたちは3枚中1枚しか落としてないが、同じ条件なら地属性と悪魔族？

わからん。けど気になる。

そういえばデュエリストアイのレベルを上げてドロップカードの確認ができるようになってから、低階層のモンスターとは戦ってないし、確認がてら戻ってみるか？

今まではいまだに『手に入らないカード』で済んでたけど、1枚でも条件が判明したら色々試してみたくなるよね。

一旦拠点へ帰り、11階：の前に9階へ行ってみた。

理由は、デュエリストアイのレベルが5になった時に『真実を写す目』が手に入ったが、その条件を確かめたかったからだ。

9階で件のモンスターを探し、そのドロップリストを確認する。

真実を写す目

条件：デュエリストアイLv5以上

やはりそうか。

まあ、レベル5になった時点で落としたのでほぼそうだろうと思っていたが。

じゃあ1階のモンスターも確認しよう。

そして数日、俺はいまだ手に入れてないカードを入手するため、思いつく限りの事を試してみた。

潜竜と同じように属性・種族が同じモンスターを用意してみたり、魔法カードや罠カードを使ってみたり、わざと増援を呼ばせてみたり。

その結果、ある程度の未入手カードをゲットすることができた。

そのほとんどがゴブリンズから手に入ったカードだったが、その理由が『装備カードを装備したモンスターで倒す』ことが条件だったからで、各ゴブリンの持ついた武器、例えばゴブリンの剣士を倒すと『ゴ布林ソード』の装備カードが、ゴ布林マジシャンなら『ゴブリンの杖』が手に入った。

他には飛竜から、罠カード『飛竜の巣穴』が手に入り、転がり岩から、装備カード『大岩転がし』が手に入った。

飛竜は潜竜と同じ条件で手に入り、転がり岩は『自分の場に岩石族モンスターがおり、相手の表示形式を守備表示から攻撃表示に変更させ、さらに場の岩石族モンスターで倒すこと』でゲットできた。

たまたまロボが手札に有ったので条件を満たせたが、いなければ手に入ってなかっただろう。

飛竜の巣穴の効果は、潜竜の巣穴の風バージョンで、大岩転がしは、装備モンスターが貫通能力を得るものだった。

飛竜の巣穴 罨カード

相手の攻撃宣言時に発動可能

手札よりレベル3以下の風属性モンスター1体を特殊召喚する。

大岩転がし 装備魔法カード

このカードを装備したモンスターが守備表示モンスターを破壊した時、このカードの攻撃力が相手の守備力を超えた分プレイヤーにダメージを与える。

ゴブリンソード 装備魔法カード

『ゴブリン』カードにのみ装備可能

装備モンスターの攻撃力を200アップさせる

ゴブリンのカードに関しては、もうゴブリンデッキ用にしなければならないが、大岩転がし

とかは普通に使える。

さらにもう一枚。

魚の群れ 魔法カード

自分の場の水属性モンスターを一体選択し、そのカードのレベル以下の水属性モンスターを手札から特殊召喚する。

これはレイクフィッシュを倒して手に入れた。

条件は『水中で水属性モンスターのみを使用して勝利』だった。

前にDP稼ぎをした時に、一応レベル1だけだが潜水スキルを取っていた。

なので試しに1階のオアシスで水中にもぐってみたら、なんと水中でレイクフィッシュが襲ってきたため、モゴモゴ言いながらデュエルを行い勝利したら手に入った。

たまたま手札に水属性の海蛇があつたし、他のモンスターを水中で召喚して大丈夫か心配だったので、海蛇だけで倒したのが正解だったようだ。

で、手に入ったこれらのカード。『飛龍の巣穴』と『潜竜の巣穴』を除き、全てランクアップに使用できることが判明。

つてか、むしろきちん確認していれば、魔物のドロップカードリスト見た時に気付く筈なんだけどね。

この11階と24階で手に入ったカードを使用することで、ついにカードのランクを
N（ノーマル）からR（レア）に上げることができる!!

46話

拠点のパソコンを操作し、ランクアップ画面を出す。

魔物のドロップカードリストに映っていたカードを思い出しながらよく確認すると、どうも1階から24階の魔物が落とすカードで、自分の現在所持するカードは全てランクアップ（N↓R）できるようだ。

必要素材が被っているカードの中にはあるようだが、基本的には自身のカードと、プラス2枚の素材カードでランクアップできる。

ちなみにレベルアップに関しては、レベル1から2に上げるには11〜19階のモンスターが落とすカード、2から3に上げるには21階〜29階のカードが必要になるっぽい。

おそらくレベル3から4に上げるには、30階から39階で手に入るカードが必要になるんじゃないだろうかと思っている。

前にも言ったかもしれないが、レベルアップに関しては、まるでドラク○モン○ターズの配合の様な複雑さで、必要カードが設定されている場合もある。

例えばAのレベルを上げる為、BとCが必要だが、BはD・E・Fが必要で、CはG・

D・Bが必要。とか。

この場合、最終的にAのレベルを上げるためには、Dが3枚、Eが2枚、Fが2枚、Gが1枚必要となる。

その為、27階に到った今でも、デッキのカードのレベルアップが出来ていない。おそらく28階と29階で手に入るカードが必要なんだろう。

ランクアップに関しても、N↓Rはそう複雑なことは無いが、今後はレベルアップと同じように複雑化しそうな気配はある。

何にせよランクアップは、ドロップ条件が判明しないことにはそれを行うこと自体が難しいんだけど。

とまあ、説明はこれくらいにしておいて、今あるカードの中でランクアップできるカードを確認。

- ・ビツクアイフィッシュ
- ・ストーンゴーレム

ビツクアイフィッシュは初期デッキの出目金がレベルアップしたカード。ストーン

ゴーレムは同じく初期デッキのまろ石がレベルアップしたカードだ。

どちらも通常モンスターで効果はない。

さてどうなるだろうか。

レベルアップと同じように、必要カードを機械に挿入する。

レベルアップの時とは違い、少し青っぽい光を発した機械からカードが飛び出してくる。

ビツクアイフィッシュ 星2 魚族／効果 N↓R

A 800 D 600

1ターンに1度、自分のスタンバイフェイズに発動可能。

自分のデッキの1番上のカードを確認できる。

ストーンゴーレム 星2 岩石族／効果 N↓R

A 500 D 1000

このカードは表側守備表示のまままで攻撃を行う事が出来る。

おお！効果がついた！

内容的には『成長』と同じ感じか？そのカードに合った能力を得るって感じなのだろうか？

しかしこれなら、最大までランクを上げて、成長もして、レベルも上がればどれほどまで強くなるのだろう。

やべえ、めっちゃワクワクしてきた！

1枚だけ見ればそう大した変化ではないかもしれないが、デッキのカード全てをランクアップ出来ればかなりのパワーアップになるだろう。

その為には、未だ条件が判明していないドロップカードをゲットする必要が有るし、何よりレベルアップすらもまだできていない状態なのだ。

やることは一杯あるが、まずは30階到達。そしてそこまでのカードをゲットしてレベルアップ。可能ならランクアップってところか。

何か燃えてきた!!

新しいカードやレアカードが1枚手に入るだけでもテンションって上がるよね？

よしっ！明日からも頑張るぞ!!!

【おめでとうございませす。全プレイヤー中初めてランクアップが行われました。パソコ

ンより報酬をお受け取りください。」

おー、…おお？

ボーナスゲットか?!

パソコンを確認すると、『初ランクアップ』としてが5000DPが入っていた。

…思ったより少ない…

確かに前の特殊ボス討伐と比べると難易度は低いのかもかもしれないけど…もう少し高くてもいいのでは?と思わないでもない。

ま、タダでもらえるものだし、これ以上文句は言うまい。有り難く使わせてもらいましよ。

ってか、他のプレイヤー、まだランクアップ出来ていないのか…。

※現在全プレイヤー中、デュエリストアイのレベルが一番高いのは主人公の為、単発で条件カードは手に入ってもランクアップまでには至ってないのである。

つてな訳で次の日。

今日は27階攻略、28階到達を目指す。

おそらく26階と同じく、潜竜の巣穴のどこかに階段があるであろうと予想はついているので、完全に戦闘は避けて階段を探すことに集中する。

マップを見ながらまだ行つたことのない場所をしらみつぶしに探して回る。そして（あつた！）

予想通り、マップ上に階段のアイコンが表示された場所には赤い光点が重なつており、目視で確認しても、そこには地面に複数の穴が開いていた。

手札を確認して巣穴に向かう。今の手札なら問題なく倒せるが決して油断はしない。

ある程度近づくと地面から潜る竜が登場。

バシツと倒して、複数ある穴を一つづつ覗いて回る。

（おっ……これかな？）

その中の一つに、ぼんやりと階段らしきものが見える穴があつたので飛び込む。予想通り階段があり、そのまま28階へ。

階段の作りは他の階と同じの為、下まで降りたら簡易転移石を探して登録。

外に出て周りを確認すると、やはりここまでの階とさほど変わらない山肌の姿。しかし空を見上げれば遠くに飛龍らしき姿が。

そして下を見下ろせば、地面に複数の穴が開いている場所があるように見える。

おそらくこの階は、飛龍と潜竜がどちらも出てくるのだろう。

それならば話は早い。できる限り2種の竜の索敵に引っかからない場所（大体山の中心）を通り、マップ頼りで階段を探す。

山裾を通らないといけない場合には、できる限り魔物がいない道を通る。

これが一番時間を掛けずに次の階に行ける方法だと思う。

まあ試しに1度つつ戦ってみてもいいけど。

今後の方針を決め、28階の探索を開始する。

予定通り戦闘は行わずにひたすら歩き、拠点へ帰る間際に1度だけ飛龍と戦ってみた。

結果は26階と全く一緒、だった。

次の日も28階をウロウロ。

この日も階段を見つけられなかったなので、帰り際に潜竜と戦闘。

こちらも27階と全く同じだった。

そして次の日、夕方まで探索を続けようやく階段を発見。

場所は飛竜の巣穴でも潜竜の巣穴でもない、山の中腹ぐらゐに合った洞窟の中だ。

巣の中に階段があるっていう先入観もあったし、おそらくマップピングスキルが無いと

見落としてたね。

階段を降り29階へ。簡易転移石を登録したら29階のフィールドだけ確認。

……えーと、…なんか、曇ってる…？

47話

これまでと違うフィールドの様子に少し戸惑う。

そう言えば24階の時も、それまでのモンスターは出てこずにゴブリンのみ出てくるエリアだった。

ここも同じような感じなんだろうか？

どんなモンスターが出てくるのかなかなり気になるが、時間的にお腹もすいてきたので今日は拠点に帰り、明日から探索することにする。

で、次の日。

転移機能でやって来た29階は、昨日と変わらず曇り模様。

とはいえ、フィールド自体は変わらず山なので、これまでと同じようにマップを埋めていく。

ウロウロする事1時間。

…何かがおかしい。

ここまでで、一度も魔物が出てきていないのだ。

普通ならすでに何度か赤い光点がマップに映っていてもおかしくないのだが、未だそんな様子はない。

山頂も山裾も確かめてみたが、マップは勿論の事、目視でも何も発見することはできなかった。

それから数時間。

お昼になるまでひたすらウロウロしたが、結局魔物と出会うことは無かった。

何か特殊な階であることは予想できるが、いったいどういう事だろう。

頭に疑問符を浮かべながら拠点で昼食を済ませ、昼からは反対方向に進んで見る。

しかし午後からの探索でも魔物を見つけることはできなかつた。

「さすがに魔物が出てこない階とは考えにくいよな……。となると、1か所に大量に纏まっているパターンか？」

色々考えつつ就寝。

次の日も同じように探索をつづけるが魔物は見つからず、怪しいところは念入りに探してみるも、『レイクフィッシュ』や『ミノムシコムシ』の様に時間経過で出現することも無かつた。

さらに次の日

ここまで来たら本当に魔物が出現しない階層なのは？と思えてくる。もしくは階段の周りに超大量にいるか。

色々な考えは頭に浮かぶが、結局どれが正解なのかは分からない。

結局階段を見つけたのはそれから2日後だったが、予想していた『階段周りに大量の魔物』という事も無く、ついにこの29階で魔物と出会うことは無かった。

「あつれー……おかしいなー……。」

階段を降りながら呟くも答えは分からない。

ついに30階ボス部屋の扉の前まで来てしまった。

「ま、今日今から挑むつもりはないが……、しかしどうしたもんかなあ……。」

可能ならデッキのカードを全てレベル3に上げて挑みたい。

しかし今所持しているカードだけではレベルアップさせることができない。

(レベル3にするには31階以降のカードがいるのか？いや、何となくだがそれは無い気がする。だとすると、ここまでの階で何か見落としてるものがあるのか……)

30階の扉の前で一人悩むも、ここで考えていても仕方がないと、一度拠点へ帰るとに。

で、こんな時に役立つのが我らが掲示板。

早速質問を書き込む。

333

ある階層で1匹も魔物が出現しなかったのですが、皆さんはそんなことありますか？

334

(一人)

335

ん？魔物が出現しない階？そんなのあるのか？

336

そんなん聞いたことねえぞ

337

うーん、見落としているだけでは？マップは全部埋めたんですか？

338

まだ穴あき部分はあるけど大方埋めたつもりです。

339

なら特殊な条件で出てくるとか？何かそれまでと違うところ無かった？

340

お、それなら俺も一度あつたぞ

3 4 1

そこまでの階は晴れてましたが、その階だけは曇ってました

3 4 2

まじですか!?!詳細教えて頂いても?

3 4 3

お、ガチ情報か?

3 4 4

今まで出てないよな?

3 4 5

3 4 2 ✓ もちろんだ。

管理人に問い合わせたら、プレイヤーによって色んなギミック付きフィールドが現れるらしく、俺の場合はその階とは別の階で何かしらの行動を起こすことによって、その階の様子が変わるってものだった。

3 4 6

お前の場合は曇りつてのも関係するのかもな?

俺は前の階で水を塞ぎ止めていた岩を動かしたら、次の階に水が流れるようになった

た。

347

おおお！

情報ありがとうございます!!

早速色々試してみます！

なんということでしょう。

タイミングよく情報を持っている人が現れてくれたおかげで、あのエリアの謎が解け
そうな気がしてきた。

ならば俺の場合は、29階では無く28階とかにヒントがあるのかもしれない。

明日からはもう1度28階を調べ直してみよう！

次の日

朝の準備をして29階へ。

簡易転移石は30階等ボス部屋には無いから29階へ転移。今回はその方が都合が
良いしね。

階段を上り28階へ。

予想ではこの階で何かしらの謎解きがあるのだろう。

確か前にこの階を攻略した時はできる限り戦闘を避けてマップ埋めしたと思うから、今回は戦闘込みで色々探ってみよう。

情報提供してくれたプレイヤーの言葉を信じ、曇も関係があるとすればおそらく山に近い方、飛龍だな。と当たりを付け、山頂付近を念入りに調べてみる。

そして数度の戦闘を含み調査する事数時間。

まだ何もそれらしきものは見つからない。

むむむ…実は曇りは関係ない…?なら潜竜か?

など考えながら、山頂、また空を見上げて雲の方も確認していく。

大分お腹が空いてきたので、次の山頂をチェックしたら一度拠点に帰ろうと決めて、飛龍の巣を目指す。

(…:そういうえば、飛龍も潜竜も子どもを先に全部倒せば増援ゲージが一気にMAXになったよな?)で、いつも増援呼ばれる前に倒してるけど…増援呼んだら何が来るんだろ?)

歩きながらそんなことを思いついた。最後に1回試してみようか。

山頂にたどり着き巢に近づく。すると空高くから鳴き声が聞こえ、一直線に奴が降りてくる。

【飛龍 星3 A1200 D800 攻撃表示 通常モンスター】

「(じゃあ試しに増援を呼ばせてみようか) デュエル! 俺のターン、ドロー!」

倒そうと思えばすぐに倒せる手札だ。

そういや今まで大概初期手札に強カードが来てるんだよな。そのせい(おかげ)で増援を呼ばせたことが無いんだが。

「俺はモンスターをセット。ターンエンドだ。」

グルオオオオ!!

相手のターン、飛龍の攻撃でセットモンスターは破壊される。

「俺のセットモンスターはスケルトン(A600D600)。このカードが戦闘で破壊された時、場に骨トークンを特殊召喚する!」

元『魔物の骨』であったこのカードの効果、レベル1の時はA100D100の骨トークンだったが、レベルが2に上がったことで、A300D300のトークンとなった。

守備表示で召喚した為、ベビードラゴンたちは何もできない。

「俺のターン、ドロー! 俺は骨トークンをリリースし、魔界の商人を召喚する。」

魔界の商人 星5 闇 悪魔族／効果モンスター

A1500 D1600

このカードが召喚された時、カードを1枚ドロワーできる。

20階攻略時に手に入ったレベル5のカードだ。

「このカードが召喚された際、俺はカードを1枚ドロワー。そしてベビードラゴンに攻撃だ！」

3体のベビードラゴンの内1体を破壊。

親子とも悲鳴のような鳴き声をあげるが、やつらは現状もう何もできない。

こちらにターンが回ってきたので、モンスターは召喚せずベビードラゴンを破壊。

現在の手札には飛龍の攻撃力に耐えられるモンスターがいらない為しようがない。

そして次のターンも相手は何もできず、俺は3体目のベビードラゴンを破壊しターン

エンド。

空に向かって鳴き声を上げる飛龍。

そう言えば、ベビードラゴンが全て倒された時毎回このモーションだよな。何か意味があるのか？

その後向こうのターンは終了し、俺にターンが回ってくる。

その瞬間、増援ゲージはギユンギユンと増えていき、MAXとなった。

(さあ、何が来る?)

俺は念のため今引いた茂る草壁を準備表示で召喚しターンエンド。

現在俺の場には『魔界の商人』と『茂る草壁』。相手は飛龍が1体のみ。

何が起こるか少し緊張しながら待つと、空の方から飛龍に似た鳴き声が聞こえてきた。

……エエエー、キュエエエエエ!!

それは先程の飛龍と同じように、一直線に飛び降りてきて、俺と対峙している飛龍の横へと並んだ。

【飛龍のつがい A1100↓1700 D900 攻撃表示 効果モンスター】

【効果 ①このカードの攻撃力は自分の墓地の『ベビードラゴン』の枚数×200ポイントアップする。②自分の場の飛龍は①の効果を得る。】

や、やべーーーー!!!

墓地にいるベビードラゴンは3体。つまりこの2体の竜はそれぞれ攻撃力が600

アップする。

つて事は…

飛龍がこちらに向かって突っ込んでくる。狙いは…魔界の商人！

「ぐううう!!」

飛龍の元々の攻撃力は1200。つがいの効果で600ポイントアップし1800。魔界の商人の攻撃力を超えた分俺はダメージを受ける。

LP3000↓2700

…そういやボス以外でダメージ受けたの初めてか？

と、そんなこと考えている余裕はない。

続いて飛龍のつがいがセットモンスターに攻撃。

草壁でよかつたー。

効果によりセットモンスター、茂る草壁は破壊されず俺のターンになる。

(レオが来れば何とかなる！レオ来いレオ来いレオ来い……い！)

デッキに手を添え祈るようにカードを引く。

「ドロー!! つ！来たー!!」

しめし合わせたかのように手札にやって来たレベル5モンスター。

「茂る草壁をリリースし、草原の王レオを召喚！まずは飛龍のつがいへ攻撃だ!!」

陸の王の爪が天駆ける竜を切り裂く。

つがいが倒れた事で飛龍の攻撃力上昇も無くなる。

後は問題なく次のターンのレオの攻撃で戦闘終了だ。

ふう、しかし危ない所だった。

まさか増援が奥さんだったとは……。効果も親の怒りつて事なんだろう。

落としたカードを拾う。

飛龍のつがい 星3 風 ドラゴン族／効果

A1100 D900

①このカードの攻撃力は自分の墓地の『ベビードラゴン』の枚数×200ポイントアップする。

②自分の場の飛龍は①の効果を得る。

うん、敵対した時と全く同じだな。

デュエリストアイのレベルを上げておいてよかった。

だけど、飛龍のつがいのドロップリストに表示されていた3枚のカード。見間違い

じゃなければ、あれ全部レベルアップに必要なカードつぼかったんだけど…
え？また戦わないといけない？まじで？

48話

飛龍一家を倒した後、一旦拠点へ戻りお昼休憩。

先程確認した飛龍のつがいのドロップリストを思い出しながらパソコンを確認すると、やはり思った通りつがいの落とす3枚のカードは全てデッキのカードのレベルアップ素材となることが分かった。

「はあく、やつぱりかあ……!!!……まてよ?…つてことは…」

とここでとあることに気付いてしまう。

それは飛竜と対で出現する潜竜だ。

能力もドロップカードも、階段を隠しているところも、共通点の多いこの2体の事だ。

もしかしたら潜竜も同じように増援が『潜竜のつがい』で、そのドロップカードが3枚ともレベルアップ素材になる可能性がある。

だとすれば俺が所持しているカードを全てレベルアップさせようと思ったら、あれだけの能力を持つ相手と何度も戦う必要が出てくる。

ちよつと気が重いな…。

ま、だが戦えば戦うだけこちらの戦力は(レベルアップで)上がるはず。

いっぺんには難しいだろうし、少しずつでも倒していこう。

そして数日後。

あれから俺は、28階で飛竜と潜竜を狩り続けた。

予想通り潜竜のつがいは飛竜のつがいと同じで、ドロップカードが3枚ともレベルアップ素材だったよ。

危ない場面も多々あったが、何とかカードを集め、初期デッキのカードは全てレベルアップさせることに成功した。

※【内はレベル1の時の名称

セイント・ハート・バード ↓ フェニックス

炎 鳥獣属／効果

A700 D800 ↓ A1200 D1300

【ベビー・バード】

風の魔躁士 ↓ 風使いフウカ

風 魔法使い族／通常モンスター

A800 D800 ↓ A1300 D1300

【ミニマジシャン】

ストーンゴーレム ↓ 岩石の守護兵

地 岩石族／効果

A 500 D 1000 ↓ A 900 D 1500

【もろ石】

スケルトン ↓ スケルトンズ

闇 アンデット族／効果

A 600 D 600 ↓ A 900 D 900

【魔物の骨】

電気ネズミ ↓ 雷ネズミ

光 雷族／通常モンスター

A 800 D 500 ↓ A 1300 D 1000

【電子ネズミ】

力秘めし小竜 ↓ ハイパワードラゴン

光 ドラゴン族／効果

A 800 D 800 ↓ A 1300 D 1300

【竜の赤子】

呪霊 ↓ 生を求めし亡霊

闇 悪魔族／効果

A 7 0 0 D 7 0 0 ↓ A 1 0 0 0 D 1 0 0 0

【弱き力の悪霊】

青白き火 ↓ 鬼火

火 炎族／効果

A 5 0 0 D 3 0 0 ↓ A 1 2 0 0 D 4 0 0

【火の玉】

泥棒猫 ↓ 泥棒猫キヤットアイ

風 獣族／効果

A 8 0 0 D 5 0 0 ↓ A 1 3 0 0 D 9 0 0

【スモール・キヤット】

自立型支援ロボB | RT02 ↓ 支援ロボB | RT03

地 機械族／効果

A 7 0 0 D 8 0 0 ↓ A 1 2 0 0 D 1 2 0 0

【ボロット】

吸血虫 ↓ 魔蠅

闇 昆虫族／通常モンスター

A700 D500 ↓A1200 D1100

【リスキー・モスキート】

見習い天使エリー ↓ 献身の天使エリー

光 天使族／効果

A700 D900 ↓A1200 D1400

【修行中の見習い天使】

黒トカゲ ↓ 影武者トカゲ

闇 爬虫類族／効果

A700 D700 ↓A1100 D1100

【影トカゲ】

ダブルホーンザウルス ↓ トリプルホーンザウルス

地 恐竜族／通常モンスター

A900 D400 ↓A1400 D800

【恐竜ベイビー】

茂る草壁 ↓ 守護の大樹

地 植物族／効果

【雑草魂】

A 4 0 0 D 8 0 0 ↓ A 8 0 0 D 1 3 0 0

ゲコガエル ↓ 黄泉ガエル

水 水族／通常モンスター

A 8 0 0 D 7 0 0 ↓ A 1 2 0 0 D 1 3 0 0

【オタマジャクシン】

ビックアイフィッシュ ↓ ビックアイシャーク

水 魚族／効果

A 8 0 0 D 6 0 0 ↓ A 1 4 0 0 D 9 0 0

【出目金】

協調の戦士 ↓ 団結の戦士

地 戦士族／効果

A 1 1 0 0 D 6 0 0 ↓ A 1 5 0 0 D 1 0 0 0

【戦士の卵】

ワーウルフ ↓ アブソープワーウルフ

風 獣戦士族／効果

A 9 0 0 D 5 0 0 ↓ A 1 3 0 0 D 1 0 0 0

【レッサーワーウルフ】

海蛇 ↓ 海龍

水 海竜族／通常モンスター

A900 D800 ↓A1500 D1200

【水蛇】

他にもモンスターから手に入ったカード（ドロップカード）はほぼ全てレベルアップしている。

レベルアップしたカードが別のカードの素材になることも多かったのですが、手元に残っていないカードもあるが、一応ほぼ全てのカードのレベルアップは確認できた。

あと、残念ながらあれからランクアップは出来ていないけど、これで十分な強さになったと思う。

これなら30階のボスとも余裕を持って戦えるだろう。

20階のボスの時には拍子抜けした感が強かったけど、今回も同じ感じかな？

ま、それでも油断だけはしないようにしましょう。

29階へ転移機能を使用しワープ。

そういえば元々はこの29階にモンスターが出てこないから28階の調査をしてたんだっけ。

で、そこで出てきた2竜のつがいが素材カードを落とすことが分かったから、調査そつちのりでカード集めることになったんだよな。

ま、結果的に初期デツキのカードは全部レベルアップできたし、結果オーライだろう。そう考えつつ、マップを見ながら階段に向かって進む。

しかし少し進むと、前回探索した時には無かったはずの赤い光点がマップに現れた。

「あれ？魔物の反応…？」

マップは一度通ったことを示す表示になっている為、もし前回いたのなら見てるはずなんだが…？

階段への最短ルートとは離れた場所になるが、気になったので確認してみることにした。

場所的には山の中腹。マップ上の光点は2つ。

遠目には、翼の生えた生き物と、地を這う生き物が見える。

(飛竜と潜竜…？いや、違う！あれは…!!)

近づくとつれその姿が明らかになって来た。

翼を持ち飛竜によく似た姿の生き物、それは飛竜のつがひ。

地を這い潜竜によく似た姿の生き物、それは潜竜のつがい。

(つがいが2体で出てくるのか? つてことは、上の階でつがいと戦闘をしたことがトリガーになってたのか?)

実際その通りであった。

この29階はそれまでの階で『飛竜のつがい』と1度でも戦闘を行ったことがあれば『飛竜のつがい』が、『潜竜のつがい』と戦ったことがあれば『潜竜のつがい』が現れる仕組みになっている。

さらに2体とも倒したことがある場合、その2体は同時に現れ、そして

【怒れる飛竜のつがい A1400 D1100 攻撃表示 効果】

【怒れる潜竜のつがい A1100 D1400 守備表示 効果】

※効果・ドロップカード:『飛竜のつがい』・『潜竜のつがい』に同じ

(こ、これは…)

名前の頭に『怒れる』と付いている。

設定としては、怒りで能力が上昇した姿で、空の雲(何かゴロゴロ言い出した)は竜たちの怒りを表しているのか…?

「これはちよつと…パスだな。」

倒したところで手に入るカードは上の階で手に入ったものと同じ。

ならばわざわざ戦う必要もないだろう。

俺はそーつとその場を離れ、その後も現れる赤い光点に近づかないようにしながら階段へと向かった。

49話

時折見かける2体のつがいを避けつつ歩を進め、30階へと続く階段へやって来た。ふう、これで一息つける。

何か雲がゴロゴロいう音が大きくなってきたような気がして落ち着かなかったんだよ。

では、29階の謎も解けて、デツキの強化も出来たことだし、ボスに挑んでみますか！

目の前の大きな扉に手をかけて開く。

いつものように部屋の中に入ると扉は自動で閉まり開かなくなる。

部屋の中央に向かって進むと、黒い影が現れ人の形へと姿を変える。

よしっ！と気合を入れてディスクを構える。

ボス戦では手札を引き直しになるので、今はまだすべてのカードがデツキ内にある状態だ。

手札次第では速攻勝利も可能だろう。

普段ならここでボスも俺に対しディスクを構えるのだが、奴はまだこちらを向いてす

らない。

おや？つと思っていると、いきなりメッセージが流れだした。

【挑戦者のデツキ強化度数が一定値を超えることを確認。守護者のデツキレベルが上昇します。】

……………え？

メッセージが終わりこちらを向いて構えるボス。

え？いや、ちよつと？まつ、な、ど、どういふこと!???

こちらを急かすように構えた腕を軽く揺らしながら対峙するボス。

「え、あ、デユ、デユエル！」

先攻はボス。

奴は場にモンスターを召喚した。

黒戦士Lv3 A1500 D1000 通常

ま、まっつてまっつて！まだ頭が追い付いてないんですけど！

えっと、つまり俺のデツキが一定以上の強さがあると判断されて、それに伴いボスのデツキもパワーアップしたって事か？

いやいやいやいや、管理人さん、そんなのいいですから、そんな「楽勝じゃつまんないでしょ？」みたいな気を使ってもらわなくていいですからー！！

テンパる俺をよそにデュエルは進む。

「くっそ、後で文句言つてやる…、俺のターン、ドロー!!!」

半分ややくそでカードを引く。

まだ負けたわけでも、勝てないと決まったわけでもないんだ。

やっつてやるよ!!

「俺はモンスターをセット。さらにカードを1枚セットしてターンエンドだ。」

ボス 手札3枚 LP3000 場にモンスター1体

俺 手札3枚 LP3000 場にモンスター1体、伏せカード1枚

相手のターン。

奴はさらにモンスターを召喚する。

黒火Lv3 A1400 D1100 通常

そして黒戦士で攻撃してくる。

「俺のモンスターは岩石の守護兵！」

岩石の守護兵 地 岩石族／効果

A 900 D 1500

このカードは守備表示のまままで攻撃できる

攻守の数値が同じため破壊されない。

ボスはそのままターンを終了した。

「俺のターン、ドロー！」

ふむ…、今はまだ動けないか…。

「俺はモンスターをセット。ターンエンドだ。」

ボスのターン。ここで戦況は動き出す。

奴は自分の場の黒火を墓地に送り、手札からカードを召喚。これは…アドバンス召喚

!!

黒鳥獣Lv5 A 1800 D 1500 通常

くっ！もしかしたらと思っていたが、やっぱり出てきたか！上級モンスター！しかもレオと同じ攻撃力。…これはちよつと…まずいか？

黒鳥獣の攻撃。攻撃対象は岩石の守護兵。

現デツキ内で最高峰の守備力をもつても防ぐことはできない。

「くっ！」

続いて黒戦士が伏せモンスターを攻撃。

伏せカードは『ゲコガエル』からレベルアップした黄泉ガエル。

黄泉ガエル 水 水族／通常モンスター

A1200 D1300

破壊され墓地へ。そしてボスはターンを終了。

「俺のターン！ドロー。」

手札を見て考える。奴の場にはレオと同格のモンスター。ここは、動くしかない！

「俺は畏カードを発動させる。唐突な訪問！」

唐突な訪問 罨カード

自分の場にモンスターがおらず、相手の場のみモンスターが存在する場合、自分のメインフェイズに発動できる。

相手の場にいるモンスターカードの内、一番レベルが低いカードのレベル以下のカードを手札から特殊召喚できる。

「この効果で、俺は手札からモンスターを特殊召喚する。ナイトメア！」

ナイトメア 星3 獣族／通常

A 900 D 1300

スリープシープがレベルアップしたカードだ。

「そしてそのナイトメアをリリース。アドバンス召喚！魔界の商人!!」

魔界の商人 星5 闇 悪魔族／効果モンスター

A 1500 D 1600

このカードが召喚された時、カードを1枚ドローできる。

「魔界の商人の効果でカードを1枚ドロ。」

デツキからカードを引く。そこに描かれていたのは某特撮番組に出てきそうなロボットの姿。

「よし！手札から、支援ロボB—RT03の効果を発動！」

ロボットの時は200、レベルが2に上がって300、そしてレベルが3に上がったこととさらに効果は上がり、上昇値は400に。

「魔界の商人に装備。これにより攻撃力1900、守備力2000となる!!」

相手の攻撃力は1800。

「魔界の商人で黒鳥獣Lv5に攻撃だ！」

商人らしく物がいっぱい詰め込まれた袋から、1本の剣を取り出し黒鳥獣に切りかかる魔界の商人。

キュエエエ!!

商人に切り裂かれ光となって消えていく黒鳥獣。

よし、これならもう勝った様なもんじやないか？流石に攻撃力1900以上は出てこないと思うし。

相手のライフは100削れて2900。場にはお互いモンスターが1体ずつ。

俺はターンを終了し相手のターンとなる。

カードをドロールしたボスは、モンスターを召喚。

黒悪魔Lv3 A1400 D1300 通常

さらにカードを1枚伏せターン終了。

∴攻撃表示…か。

「俺のターン、ドロール。」

奴が黒悪魔を攻撃表示で召喚した理由、おそらくあの伏せカードだろう。

こちらの攻撃に対する罠カードか？

だがそうだとわかって俺にできる事は攻める事だけだ。

「魔界の商人で黒戦士を攻撃！」

先ほどと同じく袋から剣を取り出し、相手に向かって切りかかる商人。

しかしその時、相手の伏せカードが表を向き、効果が発動される。

借りパク 罠

装備魔法を装備した相手のモンスターの攻撃宣言時に発動可能。攻撃モンスターの装備しているカードの装備対象を、ターン終了時まで攻撃対象となった自分のモンスターに移し替える。

な!!? ってことは…

魔界の商人の身を守るように装着されていた機械は外れ、そのまま相手の場の黒戦士へ吸い寄せられていく。

そして強固な鎧を身に着けた戦士に向かって商人は攻撃してしまう。

「くうう!!」【黒戦士A1900 商人A1500 俺LP3000↓2600】

攻撃を仕掛けた商人は逆に破壊され、俺の場はがら空きに。

「…メインフェイズ2。俺はモンスターをセットしてターンエンドだ。」

ターンが終了したことにより、支援ロボB—RT03の効果は俺の方に帰ってくるが、効果対象だった魔界の商人が破壊されているため、対象無しとしてロボも墓地へと送られる。

…こ、これはちとヤバいんでないか…?

ボス 手札2枚 LP2900 場：黒戦士(A1500) D1000)・黒悪魔(A

1400 D1300)

俺 手札2枚 LP2600 場：セットモンスター1体

50話

ボス 手札2枚 LP2900 場：黒戦士（A1500 D1000）・黒悪魔（A1400 D1300）

俺 手札2枚 LP2600 場：セットモンスター1体

相手のターン。

ボスはさらに場にモンスターを増やしていく。

黒恐竜Lv3 A1400 D800 通常

そしてまずは黒戦士が俺のセットモンスターに攻撃。

「伏せカードは守護の大樹！このモンスターは1ターンに1度戦闘では破壊されない！」

フィールドに青々とした葉を茂らす大樹が現れ、相手の攻撃を防ぐ。

だが続く黒悪魔の攻撃で大樹は破壊されてしまう。

さらに黒恐竜が俺に向かって突進してきて…

「グアアアアアアア!!!」 LP2600↓1200

その勢いで後ろへと吹き飛ばされてしまう。

「くっ……そ……」

俺が立ち上がるのを確認して奴はターンを終了した。

やばい。かなりヤバい。

このままじゃ次のターンで負けが決定する。だが現在の手札ではこの状況をどうにかすることはできない。

…ならばこのドローに賭けるしか！。

「俺のターン、ドロー!!!」

引いたのは…

「俺はモンスターをセット。ターンエンドだ。」

ボスのターン。

奴は攻撃の手を休めるつもりはないらしい。

さらにモンスターを召喚する。

黒雷Lv3 A1400 D1100 通常

これで相手の場のモンスターは4体。

黒戦士が俺のセットモンスターに攻撃を仕掛ける。

「俺の伏せカードは…、フェニックス!!このカードが戦闘で破壊された時、墓地からこのカードのレベル以下のモンスターを1体選び特殊召喚できる。俺が選ぶのは、岩石の守護兵!守備表示だ!!」

ベビーバードの時から本当に頼りになる奴だ。必要な時には必ず手札に来てくれる。

「岩石の守護兵は守備力1500。お前の場のモンスターじゃあ倒せないぜ。」

俺の言葉を聞きボスはターンを終了する。

…ふう、なんとか切り抜けたか。

後は何とかレオを引くことができれば攻撃力で負けることは無くなるはず。

ここで…引く!

「俺のターン、ドロー!!」

引いたカードは…

「(くっ、レオじゃないか…)俺はモンスターをセットしターンエンドだ。」

残念ながらレオをまだ手札に来てくれない。

そしてボスのターン。

ここでボスは再び戦況を大きく動かす。

カードをドローしたボスはさらにモンスターを召喚。

そして手札から魔法カードを発動させた。

生贄の儀式 魔法カード

自分の場のモンスターを任意の数リリースすることで、その枚数のレベルのモンスターをデッキから特殊召喚する。

奴は自分の場のモンスターを全て墓地へ送り、デッキからモンスターを召喚する。

黒ドラゴンLv5 A2000 D1500 通常

こ、攻撃力…に、二千……。

圧倒的な力を持つ魔物がフィールドに降臨する。

く、くそ！攻撃力1800以上がいるのかよ!?

これじゃあ、いくらレオを召喚できたところで…

黒ドラゴンは岩石の守護兵に向かって口を開き、膨大な熱量を含むブレスを放った。

「く、守護兵が…。」

そしてボスはターンを終了。

俺にターンが回ってくる。

(だ、だめだ。ここを切り抜ける方法が思いつかない…。たとえばワーウルフや天使・竜の効果を使っても、その効果は1ターン限り。黒ドラゴンを倒したところで次のターンにA1500なんかが出てきたら対処しきれない。どうすれば…)

デッキのカードたちの効果を考え、何か手立てがないか考えるも奴に対抗できる方法が思いつかない。

今までピンチの場面で常に俺を助けてくれたカードの『成長』も今は期待できない。なぜならば、カードが成長するにはある一定の期間使用する必要がある、その時間はレベルが上がるとリセットされてしまうのだ。※デュエリストアイLv4でその数値が確認できる

(無理…なのか…? 本当に…今回はダメなのか…?)

少しづつ心が諦めに傾いていく。

予想もしていなかったボスのデッキ強化。

いきなり下級モンスターへの攻撃力が俺のデッキの戦士と同数値。

アドバンス召喚で上級モンスターの召喚。

ピンポイントで突き刺さる罠カード。

そして、俺のカードじゃ太刀打ちできない攻撃力の上級モンスター。

そりゃ無理だよ。相手強すぎだわ。

また仕切りなおして、次挑戦すればいいじゃん。

今回は残念だったよ。

考えはどんどん悪い方へと進んでいく。

別に1回負けたぐらいどうってことない。

また次回頑張ればいいよ

さっさと終わらせて帰ろう。

カードに手を伸ばす。

これを引いて、ターンを終了すれば終わりだ。

今回はデッキの回りが悪かったただけだ

次はきつと勝てるさ。

…でも……

本当は、負けたくない！

例えば物理的に無理だろうと、絶対に、そうだ！気持ちだけは負けない！！

仮にこの先に負けが待っていたとしても、最後まで勝つ気持ちだけは無くさない！

10階のボスも、レオの時も、そうやって勝ってきたんだ！

そうだよ、何弱気になってたんだ。

俺が、カードを、デツキを信じてやらなくてどうする！！

「俺は、俺は絶対に諦めない！いくぞ！ドロー……！！！！」

デツキから勢いよく引き抜いたカード。

それはいい意味で俺の期待を裏切ってくれた。

そう、俺は1つだけ勘違いをしていた。

確かに『成長』が起ころるのは一定の使用期間（経験値）が必要で、レベルアップする事でその値はリセットされる。

今回のデツキ強化で、俺はすべてのカードをレベルアップさせたと思い込んでいた

が、実はレベルアップしていないカードが2枚だけあったのだ。

1枚はすでに墓地へ行っているカードだが、もう1枚はまだデッキに眠っていた。

そして今この時、俺の声に応えてくれたそのカードは、俺の手の中でキラキラと輝いていた。

「っ！俺は、場のモンスターをリリースし、草原の王レオを召喚する!!」

レベル2からレベル3に上げるためには、21階から29階で手に入るカードが必要。

ではレベル5からレベル6に上げるためには？

答えは、『まだ分からない』だ。

なぜなら、レベルアップに必要なカードが1枚も発見できていないのだから。

「俺は、草原の王レオの効果を発動！」

そして今、ここで使用するのは、かつて俺を苦しめてくれたあの能力。

いや、あの時よりもパワーアップした能力だ！

草原の王 レオ 星5 地 獣族／効果

A1800 D1000

①1ターンに1度、獅子トークン（レベル1 地 獣族 A500 D500）を場

に特殊召喚できる。この効果を使用したターンこのカードは攻撃できない。この効果で特殊召喚されたトークンは、召喚されたターンは攻撃できない。

②1ターンに1度手札を1枚墓地へ送ることで発動可能

相手の場のモンスターカード1枚を選択し、そのカードの表示形式を変更する。

この効果は相手ターンでも使用できる。

「手札からカードを1枚墓地に送ることで、いつでもお前の場のモンスターの形式を変更することができる！」

元々敵だったときは、

『1ターンに1度このカードが表側守備表示の時に発動可能

このカード以外の場のモンスターカード1枚を選択し、そのカードの表示形式を変更する。』

この効果は相手ターンでも使用できる。』

という効果だったと思うが、手札を捨てることで自身の表示形式に関係なく発動できるようになっている。

プレイヤーが強く願うことで望む能力を身に着けることができる『成長』。

今の状況に合わせた成長をしてくれた。

「黒ドラゴンを守備表示に変更！そして、レオで攻撃だー!!」

ギョオオオオオオ!!!

レオの爪がドラゴンを引き裂く。

これで、形勢逆転だ!!!

51話

レオが相手のドラゴンを破壊し、俺はターンを終了する。

よし、これならいけそうだ。流石にあれ以上のモンスターが出てくることは無いはず！……無いよね？

相手のターン。

ボスはモンスターを守備表示でセットしターンエンド。

よしっ！後はこつちが押すだけだ！

「俺のターン、ドロー!! 俺は今引いたアブソーブワーウルフを召喚！」

場に逞しい狼男が現れる。

「バトルフェイズ。まずはレオでその伏せモンスターを攻撃だ！」

レオの鋭い爪が相手のモンスター（黒植物Lv3 A1200D1400）を切り裂く。

「ここで、アブソーブワーウルフの効果発動！レオを墓地へ送ることで、その攻撃力分こいつの攻撃力は上がる！」

「アブソーブワーウルフ A1300 ↓ A3100」

「そして、アブソーブワーウルフで攻撃！ダイレクトアタックだ!!!」

レオの力を吸収し圧倒的なパワーを得たワーウルフは、その力を拳に集め、ボスに向かって振りぬいた。

オオオオオオオオ…… 【ボスLP 2900 ↓ 0】

勝てた……、良かった……。

ボスが消え静かになった部屋の中、転移クリスタルが現れ俺に勝利を伝える。

【30階の攻略を確認しました。これにより30階への転移が可能となりました。】

【…デツキレベルが上昇した守護者に初見での勝利を確認しました。30階突破ボーナスに追加が御座います。】

【おめでとうございませす。全プレイヤー中初めて、デツキレベルが上昇した守護者に勝利されたことを確認しました。拠点のパソコンより報酬をお受け取りください。】

おっと？何か色々来たぞ？

とりあえず1つずつ見ていこうか。

先ずは30階の転移機能。これは説明不要だな。

次に『デツキレベルが上昇した守護者に初見での勝利』で『30階突破ボーナスに追加』か。

とりあえず宙に浮いている報酬であろうカードを見てみるか。

融合 魔法カード

自分の手札・フィールドから、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体をEXデツキから融合召喚する。

命の剣士 星5 火 戦士族／融合／効果

A1900 D1500

「フェニックス」＋「団結の戦士」

このカードが召喚された時、自分の墓地からレベル4以下のモンスターを1体特殊召喚できる。

但しこのカードの融合素材に使用したカードは対象にできない。

ブランクカード

1枚目は事前情報にも会った融合の魔法カード。

2枚目は、その融合カードで召喚できる融合モンスター。

やはり予想していた2体での融合になったみたいだ。

攻撃力もレオを越えてデッキ内最強だ！

さらに効果はフェニックスの能力を受け継いだって感じかな？これはかなり戦術が広がりそうな予感。

ちなみに絵柄は、背中に炎の羽（翼？）っぽいものを生やし剣を構えたカッコいい戦士の姿。

…鳥に跨った『乗っただけ融合』じゃなくてよかったです。

そして3枚目のカード、真っ白で何も書かれていないカードだけど…？

おそらく追加報酬がこのカードなんだろう。

特に説明も無いみたいだし、後で管理人に問い合わせてみるか。

で、最後に『全プレイヤー中初めてデッキレベルが上昇した守護者に勝利』だが、…
まあ何となくの予想はつく。

ボスのデッキレベルが上昇する正確な基準は分からないけど、掲示板に載っている情報からすると、俺のデッキは他のプレイヤーのデッキと比べて強化レベルはかなり高いみたいだし。

大体みんな魔物が落としたカードをそのまま使って、初期デッキのカードはそこまで使っていないようで、俺みたいに、全ての初期カードをずっと使い続けている人は他に聞いたこと無い。

体感として、魔物が落とすカードよりも初期デッキのカードをレベルアップさせた方が強くなるっぽいんだけど…、ま、現状で俺より先に進んでいる人もかなり多いんだし、自分のアドバンテージとして掲示板に情報は出さなくていいや。

そういや20階のボスでもかなりデッキを強化して挑んだはずだけど…、あの時はまだランクアップが出来てなかったんだっけ？

その辺も条件に入ってるのかも。

ま、その辺の考察はまたにしようか。

気になることは管理人に聞けばいいし、どのみちボーナスポも拠点に帰らないとどれだけ貰えたか分からないし。

じゃ、転移装置で拠点に帰るとしますか。

バビユンつと飛んで拠点。

早速パソコンで確認すると

【全プレイヤー中初 デツキ強化された守護者に勝利 20000DP を入手】

お、それなりに貰えたね。

じゃあ次に管理人に問い合わせ「ピロリン♪」……せ…。

…だから返事早すぎだつての。

やつほー☆

今回はブランクカードについてだよね？

見てたから知ってるよー♪

そのカードは可能性のカード。

君やカードたちの思いにこたえて姿を変えるカードだよん♪

きつと役に立ってくれると思うから、常にEXデツキに入れておいてねー。

うー…ん。

何かよくわからんが、とりあえずEXデッキに入れておけばいいんだな？

多分感覚としては、カードの成長と同じ感じで、いずれ必要な時に必要なカードに変化するって事か？

…ま、今はおいておくか。

さて、それよりもボーナスで貰ったDPの使い道と、30階突破で追加されたリストの確認だな。

一応事前に情報はあるけど、結構乗せ漏らしとかもあるし、前みたいに成長を発現させていないと取れないスキルなんかもあるかもしれないもんね。

できれば、隠れた良いスキルとかがあればいいな。

???

「まさか、初見でクリアするとはね。」

「あいつが前にお前が言っていたやつか？確かに期待はできそうだな。」

「うん、まあそうなんだけど……」

「……？どうした？」

「なーんか気になるんだよねー……。」

「ん？何が気になるってんだ？」

「なーんか妙な気配を感じる気がしてさあ。」

「………。そうか？特に何にも感じないぜ？」

「うーん、ただの気のせいならいいんだけど。」

「……お前の勘はよく当たるからな。だが今のところ問題はねえんだろ？じゃあとりあえず観察しとくぐらいいしかできねえんじゃないやね？」

「……うん、そうだね。何にしても彼には頑張ってもらいたいし。」

「おう！そうだな！」

「……まさか……ね。」

……。

5 2 話

D P 交換リストを開き、目ぼしいスキルが無いか探す。

釣り、採取、採掘、調薬…、剣術、柔術、槍術、斧術…

一体何をさせたいんだろう…？魔物に直接攻撃は禁止されてるつてのに。

…は!?まさか自分を鍛えてあのお仕置き部屋のゴーレムを倒せ!とか!?

なんて、そんなまさかね。

ま、とりあえずよさげなスキルはこれくらいかな？

リセット

カードを全てデッキに戻し初期手札を引き直す

強敵と連戦で、強いカードを全て使い切ってしまった、つて場合には使えそうだが、正直帰還石等の移動手段がある現状で、そんなに使う機会は少ないかもしれない。

余程拠点に帰らず強行したいときくらいかな？

ちなみに掲示板情報によると、レベル1ではクールタイムが24時間あるらしく、1

日に1回しか使用できない。スキルレベルを上げることでもクールタイムが減少していきにくい。

後、アイテム欄に埋もれる様に存在していたものがこちら。

特殊ボス再戦状 1000000DP

一度倒したことがある特殊ボスと再度戦う事が出来る。

必要DPはなんと100万。

そんな高いDPを払って倒したことのあるボスと再戦するメリットは何か？

おそらくだが、特殊ボスもドロップカードが3枚あるんじゃないだろうか？

でなければ再戦する意味ないし。

とはいえ、もしそうだとしてもそのカードをドロップする条件が分からなければ再戦も意味が無い。

特に条件なしで全て手に入るならいいんだけど、そうとも思えないし。

取るなら、ドロップ条件が分かるようになってからかな？今後のデュエリストアイに期待。

今回は他に気になるスキルは無かったし、とりあえず現状スキルのレベルアップが優先かな？

ではでは、ボスを倒して今は昼なので、ご飯を食べて休憩したら、早速31階を覗いてみましょう。

転移機能で30階に飛び、『31』と大きく書かれた扉を開いて、その先にある階段を下る。

降りた先は……ろう……か？

なんだか古い洋館？の廊下のように見える。

それはかなり先まで続いており、ところどころに扉も見える。

「……なんだろう、予想の斜め上を行かれた気分だな。」

洞窟、草原、山と来たので、次は海や森とかが来るかと予想していたが、まさかの屋内。

しかも若干ホラーっぽい雰囲気……？

あんまりホラー系得意じゃないんだけど……

しかし、なつてしまったものは仕方がない。

何とか突破して階段を探さないと。

とりあえず廊下を真つすぐ進んでみる事にする。

もちろんマップも確認しながら進むのだが、所々にある扉の先のはマップに映らない。
い。

知りたければ扉を開けて自分の目で確かめろということだろう。

今日は初めてでお試しのつもりなので、とりあえず廊下がどこまで続いているのかを調べることにした。

扉は開けるとしても帰る直前に1か所開けるぐらいかな？

長い廊下をひた進む。

左右には扉がほぼ等間隔で並び、その間には花瓶や絵画などが飾られている。

(…これ、ループしてるってことは無いよな?)

ゲームなどでよくあるが、似たような風景の場所を進んでいると思つたら、ある場所を境にワープさせられて、結果同じ場所をぐるぐると歩きまわされる『ループ現象』。

もしそうだとしたら、先に進むにはどこかの扉に入る必要が出てくるが…

しかしマップを見る限りでは、一応一直線に進んだ後が記録されており、ループした痕跡はない。

ならば本当にただめちやくちや長いだけなのか？

段々不安になってきて、そろそろ帰還石で帰ろうかと思つた時それは現れた。

「あ、突き当り。…よかった、ループじゃなかったか…つと、壁に何かあるな？」
 ようやくたどり着いた突き当り。

その壁には一枚の紙が貼られていた。

「次の階に進むには謎を解かなければならない」

①カギをみつけ、隠された扉を探し出せ。

『カギ』と『隠された扉』…か。

どうやら3-1階以降は洋館の謎解きがコンセプトのようだ。

しかしカギを見つけれと言われても、もう少しヒントが欲しいよな………ん？

さてどうしたもんかと思っていると、目の前の紙がペラペラ揺れていることに気が付いた。

「ベツタリ張り付けられていない…。ってことは…。」

俺はその紙を持ち、ペロンとめくってみる。すると

「お、ビンゴー！」

その紙の裏側には、表に書かれていた文字とは別の文字が書かれていた。

・カギは扉の中に

・扉はカギによって開かれる

…ヒントになつてゐるようになつてない…？

よし、落ち着いてよく考えてみよう。

まず問題は『カギをみつけ、隠された扉を探し出せ。』だから、どこかにあるカギと隠されている扉を探さないといけないわけだ。

そして、そのカギは扉の中にある、と。

つまりここにたどり着くまでにあつた無数の扉の内、どれかにカギが入っているんだろう。

…あの扉の数を思い出すとかなりゲンナリしてくる。

で、カギを見つけた後は扉を開くんだが、『隠された扉』が『カギによって開かれる』か。

…なんのこつちや？

扉なんだからカギで開けるのは当然だと思ふんだが…。

ま、なにせよ先ずはカギを見つけないと始まらないだろう。

始める前から気が重いが仕方がない。しらみつぶしに扉を調べていくしかないだろう。

今後の方向性を決めた俺はその場で振り返り、とりあえず一番近い扉から開けてみた。

…ガチャ

カギがかかっていることも無く、ギーッと音を立てながら扉は向こう側へと開いた。

そーつと中を覗くと、そこは10畳程の小さな部屋だった。

ぱつと見、何も物が置かれていない空き部屋のようにだ。

一応中に入ってみる。

何となく足音を立てないようにそーつと部屋の中に入る。

ふむ、特に変わったものもないnボタンツ！ ビクウウ!!!

いきなり入り口の扉が音を立てて閉まった。

慌てて扉を開けようとドアノブに手をかけるも

ガチャガチャガチャ

「つくつそ、開かない!!」

どうやら閉じ込められてしまったようだ。

(おいおいおい、完全にホラーじゃねえか…、勘弁してほしいんだが…)
扉を背に、何が起きてもいいように構えていると、部屋の中央に黒い霧が集まり始めた。

(これは…ボスの演出?!いや、あれよりかは色が薄い!)

集まった霧はまるで粘土をこねるようにモゴモゴと動き、そして一匹の獣のような姿となった。

【獣の残影 星4 A1500 D1000 通常モンスター 攻撃表示】

「…なるほど、こういう事か。」

魔物の上に表示されたステータスを見て少し心が落ち着いた。

魔物を見て心が落ち着くつても変な話だけだな。

フィールドの雰囲気や、勝手に閉まる扉でかなりビビったが、出てくるのがモンスターなら問題はない。

いつも通りデュエルで倒せばいいだけだ。

「多分こいつを倒せば扉が開くんだろうな…。よし、デュエル!」

俺は現れた獣の影に向かってディスクを構えた。

53話

「俺のターン、ドロー！」

相手が魔物なら容赦はしない。：幽霊的な何かだったらどうしようかと思っただけ。

「俺は海龍（A1500D1200）を召喚。さらに装備カード『水を得た魚』を海龍に装備。これで海龍の攻撃力は1600！獣の残影に攻撃だ！」

海龍の牙でガブリンチョされた獣は、再び黒い靄となって消えていく。

獣の残影 星4 闇 獣族／通常モンスター

A1500 D1000

そして魔物が落としたカードを拾った瞬間、扉から「ガチャン」と音が聞こえる。振り返り扉のドアノブに手をかけると、先ほど開かなかつたのが嘘みたいにするなりと扉は開いた。

ふう、出られたか…。

念のため、一度部屋の外に出てもう一度入ってみるが、特に何も起こらなかった。

(後は魔物がリポップする1時間経ってからどうなるかだな。)
とりあえずこの部屋はもういいだろう。

一応部屋の中、隅の方も確認したが特にカギらしきものは見つからなかったし。
じゃあ次の扉だ。

突き当りから見て、先ほどの扉の次にある扉の前へとやってくる。

ふうつと一度深呼吸をして、ドアノブに手をかける。

先ほどと同じように、ギイッと木の軋む音を立てながら扉が開く。

中也さっきの部屋と同じで空き部屋になっている。

バタン！

再び閉じ込められる俺。

部屋の中央には黒い霧。

そしてその霧は1体の恐竜のようなものへと姿を変える。

【恐竜の残影 星4 A1500 D1000 通常モンスター 攻撃表示】

(さっきと同じ…か。)

魔物が恐竜ではなく獣だったならば、先程の巻き戻しといっても良いほどに、全く同

じ現象が起こる。

(だがこっちは海龍が実体化済みだ！)

DPをつぎ込んだおかげで、今では1度召喚したモンスターは約30分間実体化し続けることができる。

恐竜も獣と同じ運命をたどり、1枚のカードを落とす。

恐竜の残影 星4 闇 恐竜族／通常モンスター

A1500 D1000

カードを手にすると同時に、閉まっていた扉の鍵が開く。

ふむ。2部屋とも同じ現象が起きたということは、この階の扉は全部こんな感じかな？

であれば、最初に高い攻撃力のカードを召喚できれば、後は実体化が解けるまで一気に確認していける。

まあ、たまたまこの2部屋が同じだっただけで、他の扉の中は違う可能性もあるし、一応海龍の実体化が切れるまで慎重に扉を確かめていこうか。

そして30分後。

海龍の実体化が解かれる。

最初の扉を開いてからここまでの戦闘回数、約10回。

扉を開けて部屋の中へ↓閉じ込められて魔物登場↓デュエルで倒す↓カードを拾って部屋から出る

ここまで確認した10か所の部屋全てが同じ流れだった。

ある程度慎重に確認したが、戦闘自体は海龍の攻撃で一瞬の為そこまで時間はかからず、1つの扉で大体3分のペースで回った。

出現する魔物も、最初に現れたの『獣の残影』と、次に現れた『恐竜の残影』。それと新たに出現した『昆虫の残影』の3体だけだった。

昆虫の残影 星4 闇 昆虫族／通常モンスター

A1500 D1000

まだまだ確認しないといけない扉はたくさんあるが、一旦ここで区切ることにする。

転移石を使用して拠点へ。

さて、拠点に帰り一息ついたところで、今回の31階について考える。

今まで攻略してきた経験からすると、おそらく31階から34階は洋館内での謎解きがメインになるんだろう。そしてその謎に絡めてモンスターが出現するような仕掛けになっているんだと思う。

今日の感じからすると、ダンジョンに入った時点で攻撃力1600以上のモンスターを出せればかなりサクサク進めそうな気がする。

ボーナスで貰ったDPを、実体化時間の延長に使用すればさらに攻略が楽になるだろう。

それにうまくいけばDP稼ぎも……つと、これはまた必要が出てきてからだな。

やり始めたらキリがなくなっちゃうし、できれば俺だつて早いところ40階はクリアしたい。

とりあえず、攻略の流れとしては、今日みたいな感じで各部屋の中を調べていってカギを見つけ出すって事でいいな。

かなりの数扉はあったが、多分明日1日かければ全部確認することはできるだろう。

最後にパソコンで、今日手に入ったカードがレベルアップやランクアップに使用でき

るかの確認だけして休むことにした。

結果は、最終的に初期デッキカードのレベルアップのために必要なカードだが、これらだけではどれもレベルアップは不可能、だった。

DPは念のため取っておくことにした。

次の日

朝の支度を済ませて31階へ。

昨日は突き当り側からだったが、今日は階段側から確認していく。

扉を開けて魔物と戦い外に出る。そして次の扉…と繰り返す。

今日は初手にロボが来てくれたから、一緒に手札に来ていた『風使いフウカ（A1300D1300）』に装備して無双。

しかしレベル2までは、ローブを着て男か女か分からない感じだった風の魔躁士が、レベルアップしたことでその素顔を見ることができるようになり、初めて女性だということが分かった。

割と可愛い。

実体化が解けるまで約10回の戦闘。その間戦闘のたびにカードをドロウするが、新たにモンスターは召喚していないので手札は貯まっていくな一方。

そういえば、普通なら手札が増え過ぎた場合エンドフェイズにカードを規定枚数墓地に送るはずだが、雑魚専ではいくら手札がいっぱいになってもカードを墓地へ送ったことは無い。

多分1ターンで速攻勝利してるから、エンドフェイズになってないって扱いなのかも
しれない。

10回もドロウする機会があれば、今実体化しているモンスターが消えても次の強
カードを引いている可能性が高い。

実質初期手札さえよければずっと無双できそうだ。

…いかん、DP稼ぎの血が疼いてくる…。

デッキのカードをほぼ全て引き終えた時点で大体ダンジョンに入ってから2時間。

一旦拠点に帰りデッキをリセットしてから再び続きから探索開始。

さらにもう一度デッキが空になるまで探索を続け、昼食のために拠点へ。

この時点で戦闘回数約80回。

魔物が落とすのはレベル4のカードなので、DPに変換して80DP。

80×80で6400DP。

同じことを午後からも行うとすると、640×2で12800DP。

これまでの階では、戦闘の後は次の魔物の場所までダッシュしてたけど、この階はほぼその必要がない。

その分1階の戦闘で1体としか戦わないにもかかわらず、かなりの効率でDPを稼ぐ事ができる。

今はカギを探すことを優先しているので、DP稼ぎに集中している訳でもないのにこの稼ぎ。

ヤバいな。

午後からも同じように扉の中の魔物を殲滅して回る。

午前と同じく2時間刻みで拠点に帰り探索を続け、午前より少々長い時間探索を続ける事で、すべての部屋を調べることができた。

計算上、おそらく部屋は全部で200部屋程あったようだ。

…だが、その200もの数の部屋を注意深く探したにもかかわらず、結局最後までカギを見つけることはできなかった。

5 4 話

探索後、拠点に帰って考える。

かなりの数があつたが、部屋は全て調べたはず。

抜けが無いように拠点に帰つたときも、きちんと確認してから続きを行つたし…。

他に可能性があるとすれば………あるとすれば？なんだろう？

こんな時は掲示板。

似たような人がいないか探してみる。

すると、謎解きエリアのプレイヤーは何人か見つけることができたが、みんな階の様子や謎解きの内容がバラバラで、特に参考にはならなかった。

むむむ…、どうしたものか…。

とりあえず一晩考えてみて、何か思いつくにしろつかないにしろ、明日また1からチエツクのし直しかな…。

次の日

特に良い案が思い浮かぶことも無く、昨日と同じように31階の探索を始める。

扉を開けて、魔物を倒して、外に出て次の扉。

うーん、何か見落としてるか？

とりあえず最初に手札に来ていたレオ（大樹リリース）で、実体化が終わるまでガン扉を開けていく。

レオの実体化が解けて、ちよつと廊下で一休み。

ここまでやはりカギは見当たらず。

やっぱり闇雲に突っ走るだけでは見つからないか…。

…そういうば問題って何って書いてあったっけ？

たしか『扉の中にカギはある』だっけ？

扉の中ねえ…。扉の中、扉の中………!!!

あつ!?!もしかして!?!

扉を見ながらぼーっと考えているとふと一つの考えが閃いた。

問題は『扉の中にカギはある』だ。部屋の中とは言っていない。

であれば！

俺は先ほど出てきた部屋の扉を開き側面（細い部分）を見る。すると1か所だけ溝が

あり、何かがすっぽり入るようになっていた。

「こ、これだ…!!」

俺はダツシユで階段の場所まで戻り、再び1から扉を開けていく。

だが部屋の中には入らない。確認するのは扉の側面のみ。

扉を開けては側面の溝を確認。何もなければ次の扉へ。

そして大体廊下の真ん中あたりに差し掛かった時

「あ、あつたー!!!」

溝の中に小さなカギを見つけた。

まさか本当に扉の中に隠してあるとは…。

普通これだけ扉が並ぶ廊下で、『扉の中』って言われるとどれかの部屋の中って思いこんでしまう。

まさかのひっかけ問題、言葉遊びだった。

だがこれでカギは手に入った。残るは扉を見つけるのみ。

たしか『扉はカギで開かれる』だったはず。

だがここまでカギのついた扉は見なかったはず。

問題に『隠された扉を探し』とあつたと思うので、おそらく一目では分からないようになっている可能性が高い。

…ちよつと、難しくない…？

今の鍵にしても、頭の固い人は多分一生クリアできないよ？

まあ人によってフィールドは違うから、クリアできるであろう人にしか謎解きエリアは出てこないのかもしれないけど。

何はともあれ今度は扉探し。

さっきのように問題をよく読むことがポイントな気がするし、流石に一言一句間違ずに問題を覚えてるかと言われればちよつと自信がないので、一旦突き当りまで行つて問題を見直すことにしよう。

長い廊下をダッシュ。スキルの効果もあるし、そんなに時間をかけずに端までたどり着いた。

何も出てこないことが分かっていれば遠慮することもないからね。

さて、問題をよく見なおしてみよう。

【 次の階に進むには謎を解かなければならない 】

①カギをみつけ、隠された扉を探し出せ。

ふむ。カギは見つけた。

この文章の書き方からして、もしかしたらカギを先に見つけないと扉を見つけないこと
ができない仕組みになっている可能性もあるな。

そうだとしたらもう一度全部屋調べなおし：か。

おっと、そういえば裏側にヒントもあるんだっけな。

裏側にもヒントが書かれていたことを思い出し、壁に貼られている紙に手を伸ばす。
すると

「うおっ!!?」

なんと紙を取ろうとした手が壁にめり込んでしまった。

いや、めり込んだというよりは…壁が透けてる？

伸ばしかけた手を一度引つ込め、改めてそーっと壁に触れてみる。

するとアニメやゲームなんかでもよくある仕掛けのごとく、手は壁をすり抜けてし
まった。

「はは…、なるほどね…。」

最初に来たときは確かに普通の壁だった。

ということは、カギを見つけた為仕掛けが作動したということだろう。

俺はそのまま1歩、2歩と進み、壁の向こう側へと出る。

壁を通り抜けた先には下へと続く階段が。

つまりは隠された扉とはこのすり抜ける壁のことだったのだろう。

問題の裏面に書いてあったヒントは

- ・カギは扉の中に
- ・扉はカギによつて開かれるの二つ。

確かに見方によれば、カギを手に入れたことで（カギによつて）隠された扉が開かれ（通れるようになり）、このすり抜ける壁と合致する。

別にカギをカギ穴に刺すわけではなかったのね。

またしてもしてやられた感を感じながら、俺は32階へ続く階段を下りて行つた。

階段を下り、着いた先は31階とは様子が異なっていた。

先ほどは長い廊下に左右のたくさんの扉だったが、この階は階段を下りた先には小さな小部屋が一つあるだけだった。

正面の壁には大きな扉。

中央には小さな机。そしてその上に紙切れが1枚。

「全然雰囲気が違うな……。さてと、今回の問題は……と。」

机の上の紙切れには次のように書かれていた。

【 次の階に進むには謎を解かなければならない 】

②メダルは全部で何枚？

問題を読み終わった瞬間ゴゴゴ……と音が響き、周りの壁のいたるところに小さな穴が開き、その全ての穴からメダルが現れた。

えーつと？このメダルの数を数えろと？

周りの壁には無数のメダル。

はあ……と一つため息をつき、地道に数を数えることにした。

あ、その前に簡易転移石を下り階段と地面の境目から見つけて登録しておいたよ。

何度か途中で分からなくなり、1から数えなおすこと数度。

ようやく全部数え終わる。

「はあ、ようやく終わったよ……。で、これをどうするんだ？」

メダルの枚数は数え終わったが、これをどうすればいいのかわく見ると、正面の扉に何か小さなボタンが付いている。

「はーん、ここに数字を入れればいいんだな。……えつと……」

ポチポチとボタンを押して答えを入力する。

「よし……これでどうだ！」

自信満々に最後のボタンを押すと、どこからともなくドラムロールのようなものが聞こえてくる。

ドルドルドルドルドルドル……ドン!!

ブツブツ!!!

思わずガクツとなる。

あれー?なんでー?

そう思っていると、周囲のメダルから黒い霧が流れ出てきて、部屋の中央で一つの型に姿を変える。

む?間違えると戦闘になるのか?

【岩石の残影 A1500 D1000 攻撃表示 通常モンスター】

現れたモンスターを見て俺はため息をつく。

モンスターと戦闘になっただのが嫌なんじゃない。

この後もう一度メダルの数えなおしになるのが憂鬱なんだ…。

55話

現れた魔物はサクツと倒す。

岩石の残影 星4 闇 岩石族／通常モンスター

A1500 D1000

31階で手に入れたカードと合わせて考えると、おそらくこの洋館エリアで出てくる魔物は『残影』種なんだろう。

さて、気は進まないけど、もう一度数えなおしますか…。

戦闘後、メダルの枚数を数えなおすこと数度。

…おかしい。何回数えてもさっき入力した数字と同じ枚数にしかならないんだけど…。

先ほど自信満々に入力した数字。それと同じ枚数にしかならない。

時には数え始める場所を変えて何度も数えなおしているのに、間違っているというところはないはず。

であれば、まだ見ぬメダルがどこかに隠されているのか、それとも何かしらのギミッ

クがあるのか…。

とりあえず入力するのは一旦待って、何か仕掛けが無いか探してみる。

うーん、机にも扉にも変わった様子は無いし…、問題の紙も（ペラツ）…裏にも何も書いてないし。

壁にも床にも特に違和感はない。となるとメダルか？

壁から生えているメダルの一つに触れてみる。特に変わった感じはしない。

手に取ろうとしたが、壁にしっかりと嵌っているようで、いくら引つ張つても抜けそうな気配はない。

と、ここで小さな違和感を感じた。

「…ん？このメダル、絵柄が違うのか？」

今引つ張っていたメダルと、その隣にあるメダルを見比べると微妙に模様が違う。

全て模様に違いがあるのか？と思って見まわすと、大半は今引つ張っていたメダルと同じ柄で、何枚かはそれと違う柄の物があった。

「これは…何かのヒントになるのか？」

そう言いながら隣の柄が微妙に違うメダルに手を伸ばすと、俺の指が触れた瞬間そのメダルは真つ黒な靄に姿を変える。

「っ!!？」

靄は先ほど問題の答えを間違えたときと同じように、部屋の中央へと移動し、その姿を魔物へと変えた。

【鳥獣の残影 A1500 D1000 攻撃表示 通常モンスター】

おおっ？メダルが魔物に……ってことは、魔物が化けている（？）メダルを除いた本当のメダルの数を入力しないといけない訳か。

よし、それが分かればこっちのもんだ！

先ほどから実体化したままのモンスターでサククリと勝利。

鳥獣の残影 闇 鳥獣族／通常モンスター

A1500 D1000

ではでは、模様が微妙に違うメダルを除いて、もう一度数えなおしてみましょ。

先ほどの戦闘からしばし。

ようやくメダルを数え終わった俺は、早速にその数字を入力する。

「えっと、ポチ…、ポチ…、ポチっと。」

すると先ほどと同じようにドラムロールの音が。

ドルドルドルドルドルドル…ドン!!

ピンポーン!!!ガチャ

どうやら正解だったようだ。

扉が開いた音がした瞬間、壁からゴゴゴ…と音が鳴り、メダルは再び壁の中へとしまわれていく。

とりあえず、これで32階クリアだな。

あの魔物が化けたメダル、もしかしたらほかの種類の魔物も出てきたのかも。

また今度来てみるか…てか、1度クリアした階ってそれ以降どうなるんだろ？

今のももし1発で正解してしまつたら、さつき戦つた鳥獣の残影とは戦えなかつたわけだし、流星に2度と戦えないってことは無い…よね？

時間を空けて今度確認に来てみようかと心に決め、大きな扉を開き、33階へと続く階

段を下りていく。

33階は少し大きめの部屋。

部屋の真ん中には大きな長机があり、机にはテーブルクロス。真ん中には花が生けられた花瓶がある。

そして椅子が全部で8つ。

正面の壁には前の階と同じように、次の階に続くであろう大きな扉。

左右の壁にはそれぞれ小さな台があり、その上には大きさまざまな人形が8体。そして人形の横に1枚の紙切れが。

【 次の階に進むには謎を解かなければならない 】

③のつぼとちびすけ、正しい席を選べ。

つまりこの人形たちを正しい席へと座らせることができれば良いって事かな？
流石にノーヒントだと厳しいが、他に何かあるか…？

とりあえず簡易転移石だけ登録して、他にヒントになりそうなものが無いか部屋の中を一通り探してみる。

「…椅子に番号が振ってあるな…。」

8つの椅子にはそれぞれ座る部分に番号が書いてあった。

「多分何かしらの順番で並べるんだろうけど…っと、みつけた。」

花瓶の花に紛れて1枚の紙切れ

1 アルバン 2 サムソン 3 マデュー 4 ゴリアン 5 カット 6 リーベルト 7
マシユー 8 ダンバン

「……………人形の名前なんて知らねえよ…。」

思わず声に出る。

一応念の為人形を一つずつ確認したが、やはりどこにも名前は書かれていなかった。

「こりやあもう適当に置いてみるしかないか?」

他にどうすることも思いつかないので、とりあえず置いてみる事にした。

「とりあえず近いところのをっと。」

一番近くにあった人形を一つ取り、一番近くの席に座らせる。

するといきなり人形の目が光り、口から黒い霧が噴き出してきた。
……怖いよ……。

【魚の残影 A1500 D1000 攻撃表示 通常モンスター】

やっぱりミスったら戦闘になるパターンね。

とりあえずさっさと魔物は倒す。

すると、普段なら魔物は消えてドロップカードのみがその場に残るのだが、今回はカードの横に黒い霧が残り、椅子に座らせた人形へと吸い込まれていった。

「……ん？これは名札……か？」

人形に吸い込まれた霧はその後小さな名札に姿を変え、人形の胸元にその名前を記すこととなった。

「なるほど、これで正しい場所が分かるのか。」

名札に書かれた名前を見て、ヒントに書かれていた番号の椅子に座らせる。

今度は特に魔物が出てくることもない。

「じゃ、これを続けなければいいんだな。」

攻略方法が分かれば後は早い。

別の人形を手に取り適当な椅子に座らせる。

すると先ほどと同じように黒い霧が現れて戦闘に。

(これ、戦闘を避けようと思ったたらマグレで全当てするしかないのか?)

出てくる魔物はサクサク倒し、ようやく8体目。

7体目は2分の1にもかかわらず外れを引いたよ…。

その間に出てきたモンスターから手に入ったカードは、これまでと同じ『残影』シリーズの炎族と雷族。能力は同じだった。

最後の1体を席に座らせると、扉の方からガチャンつと音が聞こえた。

無事クリアできたようだ。

さっそく次の階へ進むため扉を開ける。

最後に、階段を下りる前にチラツと後ろを振り向くと、席に座っている8体の人形の目が全てこちらを向いている気がした。

思わずブンつと顔を戻し、急ぎ足で階段を下った。

(見てない見てない、俺は何も見えていないー!)

俺が部屋を出た後に残った8体の人形。

その人形の口元が8体同時に「ニヤッ…」と動いた…

56話

無事33階をクリアし、34階へ到達。

今回も忘れず簡易転移石は先に登録しておく。

ただこの洋館エリア、解き方さえわかればそんなに時間かからず攻略ができるので、そんなに使用する機会はないかもしれない。

さて、この34階だが、階段を下りた先は小さな小部屋。

真ん中に4本足の小さな机が一つあり、上に紙切れが乗っている。

左右の壁にはそれぞれ扉が2つずつ。

正面の、次の階へつながるであろう大扉をあわせると、この部屋に扉は全部で5つある。

そして紙切れに書かれていたのは…

「次の階に進むには謎を解かなければならない」

④くせあぎけしばのぎんばしけんばけた

……ふむ。

何も事前情報なしでいきなりこの字だけ見たら理解できないだろうけど、謎解きと分かっていたら、ある程度は答え方の予想はできる。

大体文字を置き換える（あいうえお表で上下にずらすとか）とか、特定の文字を消す（たぬきとか）とかがメジャーじゃないのかな？

で、おそらくこの部屋の4つの扉の中に、解く為のヒントがあるって事だろう。多分。じゃ、とりあえず適当に入ってみますか。

先ずは大扉に向かって右側、上り階段に近い方の扉を開けてみる。

中は短い廊下と、その先に小部屋が見える。

中に入ると扉はひとりでに締まり鍵がかかる。

（このダンジョン、これが流行ってるのか？）

ボスの部屋も、この洋館エリアも、大体扉を開けて中に入るとその扉はひとりでに締まって鍵がかかってしまう。

正直後ろでボタンッ！とかガチャン！とか音が鳴るとビックリするからやめてほしいんだけど…。

廊下の先の小部屋には天使を模した像が1体。

近づくとも像から黒い霧が噴出してきて、像はあつという間に黒い魔物の姿となった。

【天使の残影 A1500 D1000 攻撃表示 通常モンスター】

戦闘自体は今のデッキなら問題ないのでサクッと終わらせる。

そう言えばまだ一度も融合を試していないな…。

31階では大体デッキの最後の方に融合が入ってたり、融合素材となる2枚のカードの内どちらかが先に使用済み（墓地行き）になってたりで使う事無かったし。

魔物が消えた後にはいつも通り1枚のカードと、それとは別に小さな紙切れが落ちていた。

カードは他の『残影』種と同じ能力の『天使の残影』のカードで、紙切れには小さく文字が書かれていた。

【ばばぬき】

トランプ…？なわけないよな。

おそらく先ほどのヒントだろう。

ばばぬきって事は、この手の謎解きの場合、問題の文から『ばば』の文字を抜けば良いはず。

早速戻って問題を確かめてみようか。

先程の部屋に戻り問題の文章を確認する。

【くせあぎけしばのぎんばしけんばけた】

ここから「ば」の文字を抜くと…

【くせあぎけしのぎんしけんけた】

まだ分からんな。

とりあえず解き方はこれで良いんだろうし、残りの3部屋も確かめてみよう！

で、3部屋見てきました。

全部屋最初の部屋と同じ作りで、出てきた魔物は『天使の残影』1体、『ドラゴンの残影』2体。

それぞれ現れた紙切れに書かれていたメモは

・せんぬき

・くぎぬき

・けぬき

これを問題に当てはめると

「くせあぎけしぼのぎんばしけんばけた」↓「あしのした」

「あ、し、の、し、た…、足の下だ！」

バツと足を上げて地面を見るも特に変わった所は無い。

勿論足の裏にも何もくつついてない。

…ま、見る場所によつて足の下の場所なんて変わるし、な…。

では「あしのした」とはどこか。答えは目の前にあつた。

「あしのした、あしのした…、ん？机？の、足の下？」

ふと閃いて、問題が書かれた紙切れが乗っている机を持ち上げてみると、丁度机の4本の足があつた場所には小さな穴が開いており、何かが嵌めれるようになっていた。

むむ？何か嵌めれるような物あつたつけ？

顔を上げて辺りを見回すも特に何も見当たらぬ。

穴は4つ。ということは、怪しいのはやはり4つの扉。

「普通に考えれば、それぞれ1部屋に1つずつ…だよなあ。」

先程はそれっぽいものは見当たらなかつたはずだが…。

念のためもう一度各部屋を確認することにした。

再び最初に入った部屋の扉を開けると、

「あれ？天使の像が復活してる…？」

普段なら一度倒した魔物は1時間しないとりポップしない。ならばこの像も1時間は復活しないと思っていたのだが…。

とりあえず近づいてみる。

…今度は戦闘にはならないようだ。ん？

遠目にはわからなかったが、近くまで来ると像の足元でキラツと光るものが目に入った。

手に取ってみると、それはキラキラ輝く小さな玉だった。

「確かさっきの机の下の穴もこれくらいの大きさだったような…」

一度部屋から出て、先程の机の脚の下の穴にその玉を当ててみる。

「うん、ピツタリだ。」

穴の中に玉を落とすと、地面に吸い込まれるように玉は消え、そこにあつた穴は消えてしまった。

なるほどね。

おそらく他の3か所も同じだろう。

そう当たりを付け、同じように玉を回収し、穴に埋めていく。

そして最後の玉を穴に入れた瞬間

ガチャン

大扉から鍵が開くような音が聞こえた。

これでクリアか……。思ったより簡単だったな。

31階は結構時間かかったけど、それ以降の階は割とあっという間だった。

というか、32階から34階までは今日1日だけで攻略してる。

いや、むしろ1日もかかってない。半日だよ半日。

何かバランス悪くない？管理人さん？

ま、俺とすれば時間かからなくて助かってるんだけど。

さてと、じゃあ35階で転移石起動させて拠点に帰ろかな？

34階の階段を降りた先にはいつも通り転移石があり、機能を使用して拠点へバビュン。

昼食を食べて、カードのレベルアップができないか確認して、ちよつと休憩したら続きを再開。

ちなみにレベルアップは、これまで出てきた『残影』系の魔物が落とす2枚目のカードが必要になるっぽい。

しかしそれを落とすには条件があるみたいで、ここまで1枚も手に入っていない。

おんなじ能力の魔物だけに、1体条件が分かれば他の魔物も似た方法で手に入りそうなんだけどな…。

では続き。

転移石で35階へ飛び、階段を降りて36階へ。

階段を下りた先は、31階と同じような長い廊下が続いていた。

「…またこのパターンか…。」

何となく、また時間がかかりそうな予感にため息をつきつつ、とりあえず31階と同じように突き当たりまで進んで見ることに決めた。

57話

進めども進めどもゴールが見えない道をひたすら進む。

31階では左右にたくさんの扉があったが、この36階では一つも扉は見当たらない。

等間隔で花瓶や絵画が飾られているだけだ。

うーん、しかし長い。

31階ならばもう突き当たりについても良い頃だと思っただけ…。

妙に長い廊下を進む事しばし。

体感として31階の倍はあろうかと思える距離を移動して、ようやく突き当たりまでたどり着いた。

「はあ、つかれた…って言う程疲れては無いけど。」

体力増強スキルのおかげで体力的には疲れてないのだが、精神的には疲れが来ている。

「さて、と、今回の問題は…??あれ?無い??」

前と同じく突き当たりの壁にあるだろうと思っていた、問題の書かれた紙切れが無

い。

「あつれー?無い…事はないでしょ。」

が、いくら探しても問題は見つからず。

ペタペタとあちこちさわって確かめてみるも、それらしき紙も、何かの仕掛けも見つけない。確かめることはできなかった。

しかたがないので元来た道を引き返す。

一応来るときも怪しいものが無いか確認しながら来たつもりだが、もう少し注意深く確認しながら歩いた。

それから

結局、ほぼ最初の場所（階段付近）までやってきたが、怪しいものや気になるものが見当たらなかった。

一瞬、花瓶の中や絵画の裏なども調べた方が良いかと思ったが、今までの階を考える。と問題文がそんなに分かりにくい所に隠してあるとも思えなかった。為調べてはいない。

そして、35階へ続く階段が見えてきた頃

「……………?あれ?階段の横…。」

35階から36階へ続く階段の幅は、この廊下の幅よりも狭い。

つまり、階段を降り切った左右にも狭いながら壁はある。

その壁に、小さな白いヒラヒラした物が見える。

まさか…。という思いでその紙を見てみると

【 次の階に進むには謎を解かなければならない 】

⑤ ちりも積もれば山となる。

………Orz

俺は崩れ落ちた…。

しばらくしてようやく復帰。

流石に無意味に長時間歩かされたらしんどいつス…。

さて、問題は『ちりも積もれば山となる』か。

他にヒントが無いかと紙の裏側を見てみたが、今回は書いていないようだ。

ふと顔を上げると、ヒントの紙が貼つてある壁と階段をはさんだ側の壁に、何やら模様のようなものが見えた。

「これは……、花の、絵？」

そこには一輪の花のような模様が描かれていた。

「花……、ちりも積もれば……。」

もしかして花を集めろつて事か？

確か道中の花瓶にはそれぞれ一本ずつしか花は刺さつてなかつたような気がするけど……。

「……とりあえず試してみるか。」

他に思いつかないので、試しに廊下に並んでいる花瓶に生けてある花を集めていくことにした。

先ほどの一往復で見てきたが、飾つてある花は小さなものしかなかつたはず。

あれなら全部まとめてもギリギリ持てると思う。

早速端から順番に花を引っこ抜いていく。

でも花を集めて、それからどうすればいいんだろ？

……ま、何とかなるか。

気晴らしに鼻歌を歌いながら、花瓶に刺さっている花を回収していく。

そして、ある1本の花に手を伸ばした時

「ふふふーん、ふんふんふーん、ふんh「キシヤーー!」ウオアアアアア
!!???」

何と花がひとりでに動き出し、こちらを威嚇してきた。

茎はクネクネ、葉はまるで人の手のように動き、そして花の部分には鋭い牙が並んだ大きな口が。

その花は次第に花瓶からあふれ出てきた黒い靄に包まれて魔物の姿となる。

【植物の残影 A1500 D1000 攻撃表示 通常モンスター】

「……びびったー……」

心臓に悪い。でも何でいきなり?

よく見ると、魔物になった花は元々バラの花だった。

しかしここまで集めてきた花は全て、壁に書いてあった花とそっくりな形のものばかりで、違う種類の花は一つもなかった。

つまり、壁に描かれていた花以外はダメーって事か。

種が分かれば後は簡単だ。怪しい花には手を出さない。

じゃあサクッと倒しましょうか。…てか、手に花持ってたらかード引きにくいな!

植物の残影を倒し、花集めを再開。しばらく進むと何本か違う種類の花があったので全て放置。

そしてどんどん進んでいき、花が両手いっぱいになった頃、突き当りまでたどり着いた。

「さて、これをどうするか……つと。そういえば最後の花瓶には花が刺さってなかったな。」

「ここまで必ず一つの花瓶に一本ずつ花があったが、突き当りに一番近い花瓶にだけ何も入っていない。」

「つてことは、ここにこの花束をさせば……。」

量が多すぎて花瓶に刺しにくい。

一旦地面に花を置いて、一本ずつ刺していく作戦に。

そして数分後。

「よし、これで最後……「ガシャン！」お？」

花を全て刺し終わった瞬間、突き当りの壁の方から鍵が開いたような音が鳴った。

しかし目に映るのは突き当りの壁のみ。

扉のようなものが見えない。

と、視線をずらすと、その壁の端の方に、ドアノブのような出っ張りがあるのを見つ

問題を見たら解きたくなりそうな気はするが、もし難しい問題なら一晩考えることもできる。

とりあえず見てから考えるか。

問題の紙切れがあるのは色々物が置かれている大きめの机の上。

えーつと、なにになに…？

「次の階に進むには謎を解かなければならない」

⑥のろいの人形、いつもあなたを見ている。

読んだ瞬間、33階の人形たちが頭に浮かぶ。

こちらを見つめる無機質な16個の瞳。

その口元が一齐にニヤリつと動いて……。

…うん、きょうはもうかえろう。それがいい、そうしようそうしよう。

俺は普段より素早い動きで転移石取り出し、拠点へと帰還した。

.....
○

58話

拠点に帰ってきてきていつもの（カードの確認とか夕飯とかお風呂とか掲示板チェックとか）を済ませて寝る。

問題のことは考えないようにした。

考えてたら夢に出てきそうだし。

次の日

朝の準備をして37階へ。

内容的にあんまり気乗りはしないけど、行かなければ先には進めないししようがない。

さて、再びやってきた37階。

昨日は問題だけ確認して、部屋の中はざっとしか見てないので、改めてよく確認してみようと思う。

部屋の大きさは32階や、34階の中央の部屋と同じくらいの広さ。

部屋の真ん中には机があり、その上に昨日見た問題の書かれた紙切れがある。

そして他には、時計：いや、タイマーか？デジタル表示の数字が1秒に1ずつ減っている。

後はプラモデルの部品のようなものが沢山。

この中に答えがある…のか？

問題をもう一度見てみる。

⑥のろいの人形、いつもああなたを見ている。

部品を組み立てたら呪いの人形が出来る…？まさかな。

紙切れの裏側には特に何も書かれていないし、机や壁にヒントになりそうな模様なども無い。

ということは、ノーヒントもしくはこの部品とタイマーがヒントになるって事かな？タイマーの数字は刻一刻と減っており、もう残り30秒ほど。

0になった時何が起こるかは分からないけど、一回様子を見る？

他にできそうなことと言えば、この部品を組み立ててみるくらいしか思いつかないし。

とりあえずタイマーが0になるまで待つてみることにした。

多分感覚として最初の数字は2分ぐらいだったと思うので、たった2分すぎたぐらいで致命傷になるような罠が出てくることは無いだろうと考え、しかし油断はせずに0になるのを待つ。

5、4、3、2、1、0！

タイマーの表示が0になった瞬間、そのタイマーから黒い靄が噴出し、空中で一塊になりその姿を魔物へと変えた。

【機械の残影 A1500 D1000 攻撃表示 通常モンスター】

タイマーは魔物が現れるまでのカウントダウンって事か？

相変わらずの能力の為、戦闘シーンはカット。

魔物を倒し、カードが現れた瞬間、タイマーから「カチツ」と音がして、再びその表示は2分となり、先程と同じように1秒ずつその数字を減らし始めた。

これは、また0になったら魔物が出てくるのだろうか。

ならば、このタイマーは攻略のヒントではない。

とすれば、やはりこの部品たち。

組み立ててみるしかないか…。

数分後

「よしーできた!!」

出来上がったのはミニチュアの部屋。

見た目は今俺がいる部屋にそっくり。

作っている最中、数度タイマーが0になり戦闘があつた。

出てきたのは全て機械の残影だったが。

しかし作った方がいいが、これをどうすればいいのだろうか？

何かヒントになりそうな場所と言つても………ん？

完成したミニチュア版のこの部屋をくるくる回しながら確認していると、丁度機の裏側に赤い丸が書かれているのが目に入った。

そう言えば作ってる最中「これ何だろ？」って思つてたんだつた。

これが攻略のヒントとすれば、おそらく実物の機の裏側に何かがあるはず。

そう思い体がかがめて機の裏を除いてみると…

………キシャー!!!

「うおおあああ!!!」

なんとそこには、33階で見た人形にそっくりで、手には包丁を持ち目はギラギラと血走っている全体的に赤黒い色をした人形が、机にへばり付いていた。

思わず後ろに尻餅をつくとき、人形は机の下から俊敏な動きで飛び出してきて、机の上に飛び乗り、手に持った包丁を俺へと向けてきた。

さらにその人形から黒い靄が噴き出し、その姿は一回り大きくなる。

【悪魔の残影 A1500 D1000 攻撃表示 通常モンスター】

ビ、ビビ、ビビったー!!

ほんといきなりこれはヤメテクダサイおねがいます!

登場にはかなりビビったが、能力だけ見ればこれまでの残影系と一緒。落ち着いたところで腹いせに一撃で倒す。

「ビビらせやがって…、くらえ! 攻撃だ!!!」

インパクトのある登場だった割には退場はあっさり。

そしてこいつを倒した瞬間、大扉から鍵の開く音が聞こえた。

はああ…朝から嫌な汗かいた…。

扉を開けて階段を降り、やって来た38階。

いつも通り簡易転移石の登録は忘れずに。

さて、この38階、前の階よりは大きい部屋になっている。

正面には39階へ続く大扉。

その左右に、6体の像が並ぶ。

右から、獣人、海竜、魔法使い、戦士、デユラハン（つぽいやつ）、亀。

そして部屋の中央には例の如く机があり、その上には問題の書かれた紙切れと、たく

さんの小さな…オモチャ？

シ〇〇ニアファミリーの小物みたいな、精巧な作りの物が沢山ある。

問題文を読んでみると

【 次の階に進むには謎を解かなければならない 】

⑦ なくしものはなんですか？

なくしもの…か。

それぞれの像の前には何かを置けるようなスペースがある。

多分だが、この小さな玩具の内、正しいものを像の前に置けばいいのではなからうか。他にヒントらしきものもないし、間違いない気がする。

問題は、どれを置けばいいかなのだが…。

一応何かないか部屋の中をぐるっと探してみる。

若干ビビリながら机の下を除いたり、壁に模様があつたりしないか確かめる。

「ん？この杖…」

すると、並んだ像の内、魔法使いの持っている杖に違和感を感じた。

俺のイメージする魔法使いの杖って、先っぽに玉とか魔石とかがついてたりするんだけど、この杖にはそれが無い。

「ん…玉…、置いてみるか？」

机の上に散らばる小さな玩具から、丁度良さそうな球場の物を見つけ、魔法使いの像の前に置いてみる。

すると、像と置いた玩具の玉がピカーッと光り、光が収まった後には、先端に玉が嵌った杖を持つ、魔法使いの像の姿があつた。

うむ、正解だったようだ。

問題が「なくしものは何ですか？」だから、像をよく見て足りないものを置けばいい

んだな。

よし、それなら話は簡単だ。

何か足りないのなら必ず違和感はあるはずだしな。

そう思っていた時期が私にもありました。

魔法使いの持ち物が当たった後、続いて海竜の鱗、デュラハンの大剣までは良かった。しかしあとの3体が分からない。

獣人と戦士と竜…。

考え方を変えて、玩具の中からそれらしきものが無いか探してみるも、ピンとくるようなものは無い。

うーん、適当に置いてみるか…？

獣人は服を着てないし、意外と洋服とかだったりして。

試しに白いシャツらしきものを獣人の前に置いてみる。

すると、獣人の像から黒い靄が噴き出して、最近よく見る感じの魔物に姿を変える。

【獣戦士の残影 A1500 D1000 攻撃表示 通常モンスター】

……
ですよー。

59話

【獣戦士の残影 A1500 D1000 攻撃表示 通常モンスター】

置くものを間違えたら魔物が出てくるって事か。

戦闘自体はサクツと終わらせたが、結局何を置けばいいのかは分からない。

こうなったら、それっぽいものを順番に乗せて言つて、虱潰しに調べるしかないか…。

数十分後

間違えては戦闘、間違つては戦闘を繰り返し、ようやく3体とも正解にたどり着いた。先ず獣人は何かヒラヒラした物を置いたら、どうやらそれが尻尾だったらしく、正解の光が消えた後にはお尻に可愛らしいフサフサがついていた。

戦士はまさかの白シャツ。先に獣人に置いて間違えたやつだ。

正解した後も像の見た目に変わりはない。分かるかこんなもん!!

最後に亀は、魔法使いの像に置いた丸い玉に似たものを置いてみたら、それが卵だったようで正解となった。

他の階と比べてちよーつと難しかったかもしれない。
てか、戦士が中にシャツ着てないとか分かるわけないじゃんホントに。

ま、何はともあれ38階クリア。

途中戦った魔物は、戦士の残影と水の残影。

魔法使いやデユラハンとかも間違えたら戦闘になったんだろうが、今度また改めて来てみようか。

ではでは扉を開けて39階へ。

階段を下りた先は、少し大きめの部屋だった。

ぐるりと見まわすと、壁には色々な形をした像が埋められている。

数えてみると全部で20体あったが、その内のいくつかはつい最近見たことがある物だ。

(あれは戦士、こっちは天使。亀にドラゴン…。各種族を模した像…か?)

31階から38階までで見た物と全く同じ形をしたそれぞれの像。見たこと無いのはそれ以外の種族だろう。

そして気になるのは、各像にカギらしきものが複数くっ付いている。

（この中から正解のカギを探せるところか？）

とりあえず問題を読むべく、部屋の中央にある机の上に置いてある紙きれの元へ向かった。

「次の階に進むには謎を解かなければならない」

⑧カギは一つだけ。

ふむ。やはりこの書き方からして、正解のカギを探せつて事なんだろう。

で、大扉にある鍵穴（ここ）までで鍵穴見たの初めてじゃないか？）に刺せば扉が開く、と。

とりあえずいつもの如くヒントが無いか探してみようか。

ヒントを求めて部屋の中をウロウロ。

像：…にはなさそう。机の裏：無い。問題の裏側：無いか。

…おっと、簡易転移石の登録忘れてた。今のうちに登録つと。

うーん、他に在りそうな場所：…お？

ふと上を見上げると、天井に何やら模様のようなものが。

少し読みづらいがどうやら文字になっているようだ。

【かずをたばねよ】

数を束ねよ…か。他にも、①から⑧までの数字がバラバラに書いてあった。

数を束ねるって事は、数字を足す？合わせる？なんだろう？

1から8の数字を足すって事か？全部足したら…36だけど、何か違うよなあ…。

1から8か…：…んー、1から8…、一から八…、①から⑧…：…：…んん？①から⑧??

そういえば、この数字全部丸で囲まれている。

丸で囲まれた1から8の数字、最近見たぞ！ってかたつた今見たばかりだ！

【⑧カギは一つだけ。】

そう！これだ!!

確かここまで出てきた問題全て、頭に数字がついていたはず。

ってことは『かずをたばねよ』の『かず』は各階の問題の事。

『たばねよ』は合わせる。…頭文字をつなげて読むとかか？

そこまで閃いた俺は、31階からここまでで解いてきた問題を思い出す。

えーつと、確か①は『カギを見つけて扉を探せ』的な感じだったつけ？

②は…メダルか。『メダルを数えろ』とかだったはず。

③は…33階だから人形の所か…。うーん、『のつぽとちびすけ』？『ちびすけとのつ

ぽ』？何かそんなだったはず。

④は……、なんだっけ？…あ、そうそう『あしのした』だ。机の脚の下に穴があったんだっけ。

で、⑤は『ちりも積もればやまとなる』！花を集めたんだよな。

⑥は…『のろいの人形』だったな。あれはかなりビビったよ…。

⑦は『なくしたものはなんですか』。さっき解いたばかりだから流石に覚えている。

そして⑧が『カギはひとつだけ』。

この頭文字を繋げてみると…

『カメのあちのなか』もしくは『カメちあちのなか』

……あれ？何か違う。

何となく33階はのっぽが先だった気がしてきたから、『カメのあちのなか』が正解だ
と思うんだけど…、『あちのなか』って何だ？

むむむ…。答えが足の下だったのは確かなんだけどな………？ん？答えが…？

そうだ！答えが足の下だったただけで、書かれていた問題は違ったんだ！

確かババ抜きとか栓抜きとかで文字を抜いたから、問題の頭文字は『あ』じゃなくて

別の文字だった？

となると、それが何だったかだけ…。

ヒントになってたのはババ抜き・栓抜き・釘抜き・毛抜きだったはず。なので、ば・せ・ん・く・ぎ・けのどれかが当てはまるはずだ。

ばちのなか、せちのなか、んちのなか、くちのなか、ぎちのなか、けちのなか……あつてるとすれば、くちのなか。つまり『亀の口の中』だ！

俺は早速カメの像へと向かい、口の中を調べてみる。

「……………ん、見つけた！」

回答が正しいならこれで扉が開くはず。

若干緊張しながら大扉の鍵穴に今手に入れたカギを刺す。

…ガチャリ

鍵の開く音が鳴り、扉はギイイと音を立てながら開く。

よし！39階クリアだ！！

魔物との戦闘は無かったけど、多分間違えたカギを使用したら戦闘になったとかなんじやないかな？

ま、その辺は今度来た時に確かめてみよう。

階段を下りるとその先にはボス部屋の扉。

流石にすぐに挑むつもりはないので1度拠点へ帰る。

しかし今回のエリアはかなり早く攻略できたな。

戦闘自体が少なかったし、そもそも一発で問題に正解すれば戦闘になることすらなかったし。

ただその代わりカードは手に入らないから、今から取り漏らしたカードは回収に行かないといけない。

とりあえずは、まだ戦っていない残影系と戦ってカードをゲット。そして2枚目のカードを手に入れるための条件探しかな。

それが手に入らないとデッキのカードたちのレベルを上げることができないし。

後は、各部屋のシステムの確認もしておきたい。

例えばさっきの39階で、答えを間違え続けたら永遠に同じ魔物と戦い続けることができるのか?とか。

もしそうならかなり効率よくDP稼ぎできるけど、何かしらのルールがある可能性もあるし。

ま、何にしてもまずはお昼だな。

さつきからグーグー言ってるお腹をさすりながら、昼食の準備を始めた。

60話

昼食後、とりあえず先ずは39階へ飛んでみる事にした。

確認したいのは、一度解いた問題がどういう扱いになるのか。それと連続で答えを間違え続けて大丈夫か、だ。

転移機能で39階へ移動すると、そこは先ほど39階へ初めて降りてきた時と全く同じ状態に見えた。

40階への扉は……ガチャガチャ……カギがかかっている。
机の上にある問題も内容は全く一緒だ。

「次の階に進むには謎を解かなければならない」

⑧カギは一つだけ。

つてことは答えも一緒か？

カメの口から鍵を取り出しカギ穴に刺す。

ガチャリと音がして扉は開かれた。

ふむ、答えも同じ…と。

とりあえず40階へ降りた後、すぐに39階へ上ってみる。

部屋はクリアした状態のまま。

今度は38階へ上ってみる。

こちらですでにクリアした状態のまま。各像には「なくしもの」がキチンと収まっている。

試しに38階の簡易転移石に登録しなおして、一度拠点へ。そしてすぐに38階へ転移。

すると今度はクリア前の状態になっていた。

念のため37階へ上がる。

こちらはクリア済みの状態。

再び38階へ降りて問題を解く。

内容は前に解いたのと全く同じだった。

39階への扉が開いたので階段を下る。

こちらもクリア前の状態。

今度は一度37階まで登り、すぐに38階へ降りる。

部屋はクリアした状態のまま。

…ふむ。大体分かった。簡単にまとめると

・拠点からダンジョン内へ転移してきた時、転移した部屋の謎解きは解いていない扱いになる。

・転移してきた部屋以前の部屋は、すでに謎解き済みの状態となる。

・謎解きの問題並びに答えは変わらない。

・拠点に帰らない限り、一度攻略した部屋は謎解き済みの状態のまま。

つまり、例えば今の状態で35階に転移した場合、36回以降は謎解きがまだの状態となり、もう一度全て攻略し直さないといけない事になる訳だ。

ま、問題と答えが変わらないからそこまで大変ではないけど。

じゃ、後は問題を間違え続けたらどうなるか確かめようか。

まずは39階の簡易転移石に登録し直し。

そしてカメの口の中にあるカギ以外の鍵を鍵穴に刺してみる。

…とりあえず、一番近くにある戦士の剣に引っ付いてるやつでいいか。

鍵穴にカギを刺し、回そうとすると

…ガチャガチャガチャガチャ…、ブツブツ!!

不正解の音が部屋に響き、カギは一瞬で黒い靄へと変化した。

そしてその霧が宙に浮かび、さらに姿を変える。

【戦士の残影 A1500 D1000 攻撃表示 通常モンスター】

やっぱり間違えたら戦闘だな。

今回は戦士についてたカギを使ったけど、別の像の鍵を使ったら、その属性の魔物が出てきたりするのかな？

とりあえず戦闘シーンはカット。

続いて天使の像が持っているカギを取りカギ穴に差し込む。

…ブッブー!!

現れたのは天使の残影。

やっぱり。その種族の魔物が出てくるっぽいな。

じゃ、とりあえず全種類試してみようか。

戦士、天使、獣…と続けて、10体目の雷族の魔物を倒した時、部屋の中に無機質な声が響いた。

【連続10階不正解です。この階は1時間封鎖されます。…強制転移開始。】

おおっ!?!っと思つた時には、俺は拠点のパソコンの前に立っていた。

…やっぱりペナルティあったのか…。1時間封鎖ねえ…。

試しに転移機能を使用してみるも、

【現在39階へは転移できません。転移可能まで残り時間59分38秒】
ダメか。

この調子なら、おそらく徒歩で向かったとしても前の階の扉が開かないとかありそうだな。

ま、どうなるかが分かったしよしとしよう。とりあえず1時間は休憩かな？

先程のことから考えるに、39階だけですべての残影カードが手に入りそうだし、他の階へ行く必要はなさそうだ。

下手に上の階に入って、問題の解き直しになるのも面倒だし、ここは1時間待つのが最善手だろう。

水分補給したり、掲示板を見たりして時間をつぶす。

そして1時間後、特にメッセージなどは無かったが、転移機能が問題なく使えるようになっていたので39階へ飛ぶ。

さっきの続きから戦闘を行い、戦っていない残影系のカードは全て手に入れることができた。

ついでに、9回まで間違えて10回目で正解し拠点へ帰り、すぐに39階に来た時にどうなるか確認すると、間違い数はリセットされるみたいで、また9回目までは間違え

てもOKの状態となっていた。

部屋の仕組みも分かったし、カードも手に入った。

後は2枚目のカードの条件探しだな。

とりあえず今日は時間も中途半端だし、思いついた事を色々試してみる事にした。

現在の手札を見て関係ありそうな種族の魔物と戦い、わざとターン数を稼いだり、増援を呼ばせてみたりと試したが、どれも成果は無し。

ちなみに増援は同じモンスターが攻撃力+100で現れた。

うーむ、これはDPを稼いでデュエリストアイのレベルを上げる方が早いかな？

夕方になったため検証は切り上げて拠点へ帰る。

あれこれ試したけど一切成果が出なかった為若干諦めモードになっている。

しかしDPを稼ぐとしたら、一番効率が良いのは…やはり31階か？

他の階では39階と同じように答えを間違える事でのペナルティがありそうだし。

だとすればまた1から謎解きし直さないといけなくなるわけだが…

むむむ、どうしよう？

とりあえず今夜一晩考えてみる？で、何か思いついたら試してみて、思いつかなかつたり試したことがうまくいかなかつたら、しようがないけど31階でDP稼ぎかな？

大雑把な今後の予定を決めて、今日は休むことにした。

次の日

一応それっぽい条件を1つ思いついたから試してみようと思う。

ま、正直自信ないし、9割方失敗すると思うけど…、思いついたから念の為って事で。さて、それじゃ朝の準備を澄まして39階へ飛びますか。

転移機能を使用して拠点から39階へワープ。

とりあえず思いついた内容を試すため、対象の種族の像の鍵を取ろうと足を1歩踏み出した瞬間、俺は動きを止めた。

いや、止めざるを得なかった。というべきか。

部屋の中央、本来は小さな机が1つとその上に問題の書かれた紙切れが1枚載っているだけのはずのその場所には、今まで見てきたものの数倍の量の黒い靄。すさまじいほどのプレッシャーを放つその靄が模るのは人の姿。顔と思しき所には2つの赤い目が光る。

【無の残影 星7 A2400 D2000 攻撃表示 効果】

2度目の特殊ボスとの邂逅…。

61話

思わずバックステップで距離を取る。

といつても後ろはすぐ壁なので、まるで距離は取れていないが。

階段を上って逃げる？いや、それすら許されない雰囲気だ。

赤く鈍く光る奴の眼がこちらをじつと捉えている。

…やるしか…無いのか…!!

覚悟を決めてディスクを構える。

(落ち着け…。今のデッキなら、奴の攻撃力2400を突破する方法はいくつもあるんだ。)

頭の中で勝てるパターンを考える。

後はデッキが、カードが答えてくれるのを信じるのみ。

「デュエル！俺のターン、ドロー!!」

俺：LP3000

手札4枚+ドロー1枚

カードを引いて、ここで改めてボスの効果を確認する。

突然の出現に驚き、まだきちんと効果を読めていなかったのだ。

【無の残影 星7 A2400 D2000 攻撃表示 効果】

【効果 ①このカードの攻撃力は、自分の墓地の『残影』カードの枚数×100アップする。②1ターンに1度、このカードを対象とする魔法・罠・モンスター効果を無効化する。③???.】

………え?か、かなり強くないか…?

てか③の???.って何!?

ま、まあいい。とりあえず③はおいておくにしても、②の「魔法・罠・モンスター効果無効」がやばい。

1ターンに1度とはいえ、この効果のせいでかなりこちらの動きが制限されることになる。

俺のデッキ内にも相手モンスターを対象に取るカードが何枚かあるし、何より、こういったボス戦で活躍してくれる『生を求めし亡霊』の効果、「自身を破壊したカードの装備カードとなりその能力を下げる」が使えないのが痛い。

効果が発動できれば攻撃力が1900まで下がり、かなり戦いやすくなったのだが

…。

だがしかし奴を倒す方法はまだある！

そう、今引いたこのウルフの効果を使えば！！

「俺はモンスターをセット、さらにカードを1枚伏せてターンエンドだ！」

想像以上のスペックの高さに一瞬動揺するも、勝利の鍵はすでに手の中にある。

相手のターン、奴は俺のセットモンスターに攻撃。

「俺のモンスターは守護の大樹（A800D1300）！このカードは1ターンに1度戦闘で破壊されない！！」

安心安定の大樹さん。いつもお世話になります。

相手はターンエンド、俺のターンとなる。

「ドロー…：俺はモンスターをセットしてターンエンドだ。」

今引いたカードをモンスターゾーンにセットし、ターン終了。

相手のターン、奴は今俺がセットしたばかりのモンスターに攻撃。

セットモンスターは『鬼火』。破壊され墓地へと送られるが、このカードは墓地にあつてこそ真価を発揮する。

「俺のターン、ドロー！」

さて、ここで攻撃力1200以上モンスターカードを引ければ、通常召喚＋鬼火の効

果で場にウルフを含む2体のモンスターを召喚でき、奴を倒すことができたが、残念ながら引いたのは『ナイトメア』（A900 D1300）。むむむ…。

とりあえず守備モンスターを増やすか…、いや、ここでモンスターを追加しても、ただ意味なく墓地に送られるだけの結果になってしまう。ここは召喚せずにターンエンドだ。

「俺はこのままターンエンドだ。」

次のドロローで攻撃力1200以上のモンスターカードを引くことを願うターンを回す。

と、ここで俺が3ターン連続守備表示でターンを終わらせたことにより、増援ゲージがMAXになり、相手のエンドフェイズには増援が現れてしまう。

しかし盤面上は奴も特に動けずターンエンド。

そして相手のターンの終了時、奴の赤い目が鈍く光ると、どこからともなく黒い霧が現れ人の形を作り出した。

【戦士の残影 A1500 D1000 攻撃表示 通常モンスター】

まじか!?!増援は残影モンスター…ってことは、こいつを倒したら奴の①の効果が発動される…。

これは早く決めないとちよつと不味いかもしれない。

「俺のターン、ドロロー！」

ここで引いたのは『風使いフウカ』。

「つし！俺は風使いフウカを召喚！さらに墓地の鬼火の効果を発動。手札からアブソーブワーウルフを召喚し、その攻撃力分のダメージを受ける。」

俺LP3000↓1700

ライフは減ったがこれで決まるなら関係ない！

「バトルフェイズ！アブソーブワーウルフの効果発動。場の風使いフウカをリリースし、その攻撃力分、ウルフの攻撃力をアツプさせる！」

フウカが光となり、ウルフへと吸収される。

そしてその攻撃力は1300+1300で2600まで上昇。

「アブソーブワーウルフで、無の残影に攻撃!!」

奴の攻撃力は2400。これで決まりだ！

攻撃を宣言し、自分の勝利を確信したその時、無の残影の赤い瞳がキラリと光った。

その瞬間、奴の隣にいた戦士の残影がものすごいスピードで、奴とウルフの間に割って入り、ウルフの攻撃を受け消えていった。

「……………え？」

突然の出来事に、ポカンとした表情をすることしかできなかつた。

相手の場に無の残影は健在。さらに

【無の残影 星7 A24000↓2500 D2000 攻撃表示 効果】

【効果 ①このカードの攻撃力は、自分の墓地の『残影』カードの枚数×100アップする。②1ターンに1度、このカードを対象とする魔法・罠・モンスター効果を無効化する。③このカードが破壊される時、自分の場の『残影』モンスターを代わりに破壊できる。】

お、お、おいしい!!!!!!

ちよ、そんな強い効果を『?』で隠すなよう!!

何考えてんだよう!!!

うがーっ!!ふざけんなー
!!!!!!!

勝ったと思ったのもつかの間、『???』と隠されていた第3の効果により、奴を倒すことができなかった。

それどころか、①の効果も発動してしまい、ただでさえ高かった攻撃力がさらに上がる……!

くっ！どうすればいい!? 考える、考える…!

何にしてもこのターンはもうどうすることもできない。

仕方なくターンを終了し、相手のターンとなる。

奴のターン、当然のごとくアブソブワーウルフに攻撃。

パワーアップの効果はバトルフェイズ中のみなので、現在の攻撃力は1300。

「つつううー!」 LP1700↓500

ウルフは破壊され、さらに俺自身も大ダメージを受ける。

奴はターンを終了し、こちらにターンが回ってくる。

(くそっ、ここから逆転する方法は…)

奴の攻撃力、2500に並ぶだけならばまだ方法は残っている。

例えば戦士の効果。

このカードは自身がモンスター効果の対象となる度に攻撃が200アップする。

トカゲやフェニックスの効果で場に特殊召喚できれば+200。

さらにこの効果はロボの装備時にも適用されるため、ロボ装備で+700(ロボ50

0+戦士効果200)。

元の攻撃力の1500と足して2400。

これに攻撃力を1000アップさせる『二者択一』を使用すれば攻撃力2500になる。

また、前にも使ったドラゴンと天使のコンボを使えば、墓地にカードが多ければ多いだけドラゴンの攻撃力を一気に上げることができる。

だがしかし、それらの方法で攻撃力が上がったとしても、それは1ターン限りの物。こちらの準備が整った時に、もし相手の場に別の残影モンスターがいれば、先程のウルフの二の舞になるだけ。

奴の増援を防ぎつつ、又は現れた増援を倒しつつこれらの準備を進める…。

…可能なのか？

ど、どうすればいい…!!

62話

「俺のターン、ドロー!!」

どんなに劣勢でも決して最後まで諦めるつもりはない。

祈るようにカードを引く。

魔界の商人 星5 闇 悪魔族／効果モンスター

A1500 D1600

このカードの②の効果は1ターンに1度しか使用できない。

①このカードが召喚された時、カードを1枚ドローできる。

②あなたはデッキから任意の数カードを引く(最大2枚)。この効果を発動したターンのエンドフェイズに、あなたはこの効果で引いたカードの枚数×1000ダメージを受ける。

引いたカードは『魔界の商人』…!

効果が…追加されている。ここで『成長』か。…しかしこの効果…。

必要なものを得るために何か別の物を賭ける。

可能性という名のカードを得るために賭けるのは自らの命^{LP}。

まるで、悪魔の取引……!

だが俺の残りライフは400。ここでこの効果を発動すれば、このターン中に勝利しなればターン終了した瞬間に俺の負けとなってしまう。

どうする……?

ここでこの効果を使わずとも、耐えていればチャンスが来るかもしれない。

……だが本当にそんなチャンスは来るのか?

耐えるということは、イコール奴の増援ゲージが増えるという事。

増援が現れれば奴の残機が増えるという事。

現状1ターンしか強化できないこのデッキで、耐えていれば本当に奴を倒せるのか?

俺は……、俺はここで勝負に出る!!

例え耐え続けても勝てる可能性はほぼ無い。

なら、このターンに全てを、今このタイミングで『成長』したこのカードに俺は賭ける!!

「俺は場の守護の大樹をリリースし、魔界の商人を召喚!」

フィールドに現れた商人はちらりとこちらを見て、その口元をニヤリと動かした。

それはまるで、俺を試していたかの様な、そんな表情にも見えた。

「このカードが召喚された時、俺はデッキから1枚ドロウできる。ドロウ！」
引いたカードは…魔法カード『融合』。

ここで融合…？…つつ！！

カードを確認した瞬間、その融合のカードから強い意思が流れ込んできたような気がした。

(い、今は…?)

それはあるカードたちが融合し、1体のモンスターになるビジョン。

(…だが、確かにあのカードたちなら可能性が…、しかしそうだとしても、まだ足りない。引けるのか?ここで…)

その光景は強く脳裏に焼き付き、カードたちがそれを求めているようにも感じた。

しかし今の手札ではそれを成す為のカードが足りない。

(いや、引けるかじゃない、引くんぞ!ここで俺が応えなくてどうする!!)

「俺は、魔界の商人の2つ目の効果を発動!『魔界商の取引』!」

俺の宣言により、場の魔界の商人はその手に持つ袋からゴソゴソと契約書のようなものを取り出し宙に浮かべる。

そして独りでに動き出した羽ペンがサラサラと契約内容を記していく。

「俺はデッキから2枚ドロウする。その代わり、このターンのエンドフェイズ時、俺は2

000ポイントのダメージを受ける。」

さあ、運命のドロロー……!

軽く息をつき、心を落ち着けてデッキに指をかける。

「……………ドロロー!!!」

デッキから2枚同時にカードを引く。

引いたカードは…

邪毒蛇

草原の王レオ

「…(来たっ!!)」

11階で手に入れた邪蛇のレベルアップしたカード『邪毒蛇』。

そしてここまで頼れる上級モンスターとして、数々のピンチを救ってくれたカード『草原の王レオ』。

先程見えたビジョンに映っていた3枚の内の2枚。

そして共に映っていた最後のもう1枚はすでに俺の手の中にある!

「俺は魔法カード融合を発動！手札の『草原の王レオ』、『邪毒蛇』、そして『ナイトメア』を融合させる!!」

手札から3体のモンスターが場に出現し、融合のカードの効果によって一つになっていく。

それと同時に、EXデッキにある1枚のカードが強く光を放つ。

そのカードは可能性のカード。

君やカードたちの思いにこたえて姿を変えるカードだよん♪

きつと役に立ってくれると思うから、常にEXデッキに入れておいてねー。

管理人の言葉を思い出す。

思えばこの3枚のカードは、事あるごとによく一緒に手札に来ていた。

もちろん別々に来ることもあったが、それでもかなりの確率でこのうち2枚は必ずセットになっていた。

もしかしたら最初からカードたちはこうなることが分かっていたのかもしれない。

このカードが可能性のカードというのなら、俺はその可能性を、カードたちを信じ
て先へ進む！

「現れる！『合成魔獣 キメラ』!!!」

合成魔獣 キメラ 星8 闇 獣族／効果

A2800 D2400

このカードが攻撃を行う際、相手は魔法・罠・モンスター効果を発動できない。

現れたのは、獅子の顔と羊の顔の二頭を持ち、尻尾が蛇となっている大型の4足歩行の獣。

圧倒的な威圧感を放ちながら相手を睨み、低く唸っている。

これが、可能性のカード……!

「これが、俺たちの可能性の力だ！合成魔獣キメラで、無の残影に攻撃！『ソニッククロー!!!』」

その2つの頭は天に向かって雄たけびを上げ、そして目にもとまらぬ速さで相手に近づき、すれ違いざまにその鋭い爪で相手を引き裂いた。

グオオオオオオ………。

魔獣の爪で切り裂かれた無の残影はそのまま黒い靄へと姿を変え、スウつと空気に解

けるようにして消えていった。

後に残されたのは1枚のカード。

勝った……。勝ったー！！！！！！

思わず力が抜け、その場に座り込んでしまう。

予想だにしない特殊ボスの出現、さらには想像以上のスペックにかなり神経をすり減らした。

しかし結果は勝利。

誰が何といおうが、勝ちも勝ちなのだ！

後から考えれば、普通に3ターン耐えれば同じ結果だったとか聞かない。

ふと顔を上げ、その勝利の貢献してくれた新たな仲間の姿をよく見る。

戦闘中はかなりの圧を発していたその体は、戦闘中でないせいか若干雰囲気丸く、まるで大きな猫のようにも感じる。

視線を感じた為か向こうもこちらに顔を向ける。

獅子の顔は、合成前のレオの顔そのまま。まるでこちらに甘えたりする素振りは見せ

ない。

しかしもう一方、ナイトメアの顔は、まるで褒めてほしそうにこちらに顔を近づけてくる。

それに引つ張られて強制的に顔を動かされるレオの頭。

撫でてやると嬉しそうな顔をするナイトメアをジト目で見つつも、近づいてしまったから仕方ないという風な顔で撫でられるレオ。まんざらではない様子に見える。

2頭を撫で練り回していると、後ろから肩をトントンされる。

振り向くと自分も構ってほしそうな顔をした蛇が。

同じように撫でてやり、しばらくはその触れ合いを楽しんだ。

63話

無の残影を倒し、落としたカードはこちら。

無の残影 星7 闇 悪魔族／効果

A2400 D2000

このカードの攻撃力は、自分の墓地の『残影』カードの枚数×100アップする。

むむ、かなり弱体化されている。

ま、これはレオの時もそうだったし、成長やランクアップで効果が追加される可能性はある。

さて、とりあえず一旦拠点に帰ろう。

突然の出来事で疲れたし。

てか最初何しにここに来たんだっけ……？ま、いいや。

帰還石で拠点へ帰る。

とりあえず手に入ったカードや成長したカードを眺めていると、ふと一枚のカードが目に入った。

【命の剣士】

そういうえば手に入れてから全然使えてないな…。

本当はもつと活躍させてやりたいんだが…。

「ゴメンな…。」と思いながらカードを見ていると「気にすんな。」って言うてくれている気がした。

そういうえば、今はレベル3の『フェニックス』と『団結の戦士』で融合できるけど、その2枚がレベルアップして別の名前のカードになったらこのカードはどうなるんだろ？

もう使えない…ってことはこのシステム上多分ないと思うから、このカード自体もレベルアップするのか？

ま、それは試してみればわかることか。

改めてカードの確認をして、デッキをいじったら再び39階へ。

デッキいじってたらなんで39階に行つたのか思い出したよ。確か2枚目のカードを手に入れる為の条件で、1つ思いついたことがあったから試しに行くんだったね。

当初の目的を思い出し、魔物相手に思いついた方法を試してみたが、結局不発に終

わった。

というわけで再び拠点へ。

もうこうなったらデュエリストアイに賭けるしかない。

特殊ボスに勝てたんだし、このまま40階のボスに挑んでも勝てるんじゃないやね？なんて慢心はしない。

最後まで何が起こるか分からないのがデュエルだし、やっぱりボスに挑むならある程度は準備を整えてからにしたい。

スキルの効果で、デュエリストアイのレベル8並びに9では、ドロップカードについての情報が分かる効果が追加されるのが分かっているから、まずはそこまでレベルを上げて、その内どちらかがドロップ条件が分かるようになる効果であることを祈るしかない。

もしそこまでレベルを上げてもその効果が追加されなかった場合は素直に諦めてボスに挑戦する。

もしそうなつたとしても別の強力効果が得られるなら無駄にはならないし。

…流石にここまでレベルを上げて弱い効果なんてことは無いよね…？

スキルレベルを8にするには20万DP、9にするには50万DPが必要。できるだけ効率よく稼げるようにしたい。

俺は頭の中で各階の特徴を思い出しながら、どの階が一番効率よくDPを稼げるか考
える。

結果、やはり31階が一番効率が良いと判断。

さらに、ボーナスなどで貯まっていたDPをモンスターの実体化時間増のスキルに費
やし、さらなる効率化を図る。

本当は体力増強等を上げたいが、身体能力系のスキルは1レベルが上がるごとに要求
DPが一気に上がる為、現在レベル3の体力増強をレベル4にするためには50万DP
必要となる。

流石にそれは無理なので(てかデュエリストアイレベル9と必要DP一緒)、次点で一
番影響の高そうな実体化時間の増加を選択した。

では、今日は練習のつもりで軽く回ってみる。

転移機能で30階へ飛び31階へ。

これで39階までの謎解きは1から解き直しになるが仕方ない。

階段を下り、一番近くの扉を開けて中に入る。

すると扉が独りでに閉まり、部屋の中央では黒い靄が集まり魔物に姿を変える。

戦闘自体は初期手札にロボが来ていたので問題なし。

魔物を倒してカードを拾い、扉を開けて廊下へ。

最初に扉を開けてからここまでで大体1分半ちよつと。

初めてこの階に来たときは、部屋の中にカギが無いか探しながら進んでたから、今の倍は時間かかっていたけど、今回は魔物と戦うことが目的なのでそこまで時間はかからない。

最初の1戦はこちらのモンスターを召喚する時間がかかるが2戦目以降は省略できる。

となると、単純計算1時間で40戦できる事になる。

1枚のカードで80DP手に入るので、結果1時間で3200DP。

普段、午前・午後どちらも大体4時間ほど探索しているので1日で8時間。

3200×8で25600。

もちろんずっとぶつ通しで行うわけではなく、途中休憩を入れたり、逆に気が向けば夜からも潜ることもあるから、大体1日で2万5千DP。

このペースなら8日で20万、さらに20日で50万。

大体1か月あればデュエリストアイをレベル9まで上げられる。

……結構時間かかるな…。

ま、もしレベル8で望む効果が付くなら1週間ちよいで済むし。
じゃあ今日は軽く流して、明日から本格的に稼ぎを始めようかな？

8日後

きつちり20万DP貯めて、スキルレベルをアップさせる。

デュエリストアイ レベル7↓8

⑧モンスターの落とすカードの能力・効果が分かるようになる

(9) モンスターが落とすカードに関する効果を得る

スキル確認に関する効果を得る(500000DP)

(10) 全てを見通す力を得る(???DP)

ふむ。レベル8の効果は、戦闘中にドロップリストでそのカードの詳細が分かるようになる訳か。

うーん、思ってたんと違う…。

ま、仕方ない。レベル9まで頑張るか。

さらに20日後

ようやく50万DPが貯まり、念願のスキルレベルアップの時がやってきた。
メニューを開いて、ポチつとな。

デュエリストアイ レベル8↓9

⑨モンスターの落とすカードの内、特殊な条件が必要なカードの条件が分かるようになる。

DP交換リストの詳細がほぼ全て分かるようになる。

(10) 全てを見通す力を得る(※現在は習得できません)

おお！遂に来た!!

頑張つてDP稼ぎを行った甲斐があった。

レベル9で得た効果は、予想通りドロップカードの条件が分かるようになるのと、もう一つ、DP交換リストの説明がさらに詳しくなるものだった。

次のレベル10は現在習得できないとなっているが：何か条件が必要なのか、もしくは

は一定の階層を超えないといけないとかあるんだろうか？

何はともあれ、待ちに待った効果を手に入れることができた。

これで30階以降に出てくる魔物たちの2枚目・3枚目のカードのドロップ条件が分かるようになり、デッキのカードたちをレベルアップさせることができる。

さらに、30階以降だけではなく、これまで出会ったモンスターのドロップカードも手に入れることができるようになり、これによりすべてのカードのランクアップを行うことも可能となった。

1階から10階はすでに全てのカードを手に入れているので、11階以降の魔物と戦い直す必要があるが、ここまで得た情報から、おそらく現時点ですべてのカードを「レベル4 & レア度SR」にすることができはるはず！

これは熱くなってきたぞ!!

64話

数日後

デュエリストアイのレベルを9まで上げ、魔物が落とすカードのドロップ条件が分かるようになった俺は、まだ手に入れてないカードを求めてダンジョン内を走り回った。

その結果、ほぼすべてのカードを「レベル4・レア度SR」にすることができた。

何枚かのカードは「レベルアップ上限です」の文字が現れ、4まで上げることができないものもあつたが、その代わりランクが上がることで強力な効果がついてたりするの
で特に問題はない。

さて、そろそろ40階のボスに挑むことにしよう。

あ、ボス戦に必要なスペック（LP4000・初期手札5枚）はこの間にDPも貯めてきちんとクリアしているよ。

そういえば、普段ならもうとつくに掲示板で『50回のボス突破』って話が出ていてもおかしくないんだけど、どうも41回以降は情報規制がされるらしく、40階を突破していないプレイヤーには情報が入らないようになってきているっぽい。さらに、噂で流れてきた話だが、50階のボスはそれまでとレベルが違うらしく、未だに突破できた人は

いないとかなんとか。

もしそれが本当なら、まだ俺にも追いつくチャンスはあるって事だ。

ま、別にトップを狙ってるってわけじゃないけど、先頭集団に近づけば近づくほど初突破とかのボーナスDPが貰える可能性も高くなるし。

…ん？成長とか特殊ボスとか、割ともらえてる方か？俺。

ま、いいや。

ではでは、転移機能で39階へワープ。…ちゃんと簡易転移石は登録し直してるよ。

このエリアのシステム上、40階を突破しない限り39階は来るたびに未突破状態になるので、カメの口の中から鍵を出して扉の鍵穴に刺す。

問題と答えが毎回同じで良かったね。もし毎回違うようなら時間がかかって仕方なかったよ。

階段を下りて40階へ。

大きな扉の前で1度深呼吸。

(大丈夫だ。今のデツキなら負けることは無いはず。)

扉に手を掛けて開く。

いつもの通り自然に閉まる扉と、部屋中央にて姿を現すボス。

そして

「挑戦者のデッキ強化度数が一定値を超えることを確認。守護者のデッキレベルが上昇します。」

まあ当然だろうな。これについては予想していた。さてと、じゃあ新カードのお披露目と行きますか！（誰に？）

「デュエル！俺のターン、ドローー！」

初期手札は5枚なので、カードをドローして6枚。

ライフお互いには4000。

「俺はモンスターをセット、さらにカードをセットしターンエンド。」

ボスのターン。

ボスはモンスターを召喚。

黒天使Lv4 A1700 D1500 通常モンスター

ここまでくれば流石に相手もそれなりのカードを使用してくるようだ。

ボスは黒天使でこちらのモンスターに攻撃を仕掛けてくる。

俺の場に裏向きでセットされたカードが、奴の攻撃宣言によって表向きになる。

そこから現れたのは、体に炎を纏い長い尻尾を持つ、神々しさをも感じさせる鳥獣属

モンスター。

「俺の伏せモンスターは、スザク！」

スザク 星4 炎 鳥獣属／効果

A1700 D1800

ベビーバード、セイントハートバード、フェニックスと姿を変え、最初期から俺を支えてくれる、相棒とも呼べるカード。

そのレベルアップした姿こいつだ！

「こちらの守備力は1800。ダメージを受けるのはお前の方だ！」

ボスLP4000↓3900

相手は場にカードを1枚伏せてターンエンド。

俺のターン。

「ドロー！俺は歴戦の聖戦士を召喚。」

歴戦の聖戦士 地 星4 戦士族／効果

A1900 D1400

こちらでも最初期から共に激戦を潜り抜けてきたカード。

戦士の卵から協調の戦士、さらに団結の戦士とレベルアップし、ついにレベル4。

「歴戦の聖戦士で黒天使を攻撃！」

戦士の攻撃で相手のモンスターは破壊される。

「さらにスザクでダイレクトアタックだ！」

ボスLP3900↓2000

「ターンエンド。」

一気に奴のライフを削れた。

しかし気になるのはあの伏せカード。いったい何が…

と思っていると、相手のターン、早速その伏せカードを使用してきた。

緊急招集 魔法

相手の場のみモンスターがいる時に発動可能。

デッキからレベル4以下の通常モンスターを1体選択し特殊召喚する。

デッキからモンスターが召喚される。

黒植物Lv4 A1500 D1800 通常モンスター

そしてすぐさまそのモンスターをリリース。

上級モンスターか!?

黒恐竜 Lv5 A2100 D2000 通常モンスター

手札から召喚されたモンスターの攻撃力は2100。

今までならかなりピンチだったであろうが、今のデツキならばこの程度の相手に不安は感じない。

さて、どちらを攻撃してくる？

ボスは少し考えるそぶりを見せた後、スザクに対して攻撃を仕掛けてきた。少しでもライフを削れる方を選んだか。

相手の攻撃でスザクは破壊されて墓地へ送られる。

そして俺のライフは4000から3600へ。

奴はカードを1枚伏せターンを終了させようとしたが、その瞬間俺はスザクの効果を

発動させる。

「お前のエンドフェイズ時、俺はスザクの効果を発動させる。」

今までは、このカードが戦闘で破壊されて墓地に送られた時、墓地のカードを特殊召喚できる効果を持っていたが、レベルアップ・ランクアップすることでその効果もかなりパワーアップした。

スザク 星4 炎 鳥獣属／効果

A1700 D1800

①このカードが墓地に送られた時、自分の墓地のレベル4以下のモンスターカードを1枚、自分の場に特殊召喚できる。

②このカードが墓地に送られた時、①の効果を使用しなかったターンのエンドフェイズ時のみ発動可能。このカードを自分の場に特殊召喚する。

「このカードが墓地に送られたターンのエンドフェイズ時、こいつは墓地から特殊召喚される。甦れ、スザク！」

まるで不死鳥の如く、炎を辺りに撒き散らせながら空へと飛びあがり、再びフィールド

ドに現れるスザク。

そしてこちらのターン。

「お前には悪いが、一気に決めさせてもらおう！ドロー!!」

引いたカードは…、魔法カード融合!

「俺は手札から魔法カード【融合】を発動。場のスザクと歴戦の聖戦士を融合させる!」

2体のモンスターが魔法の効果で1つになる。

「現れろ!炎の聖騎士!!」

炎の聖騎士 星7 炎 戦士族／融合／効果

A 2500 D 2000

フェニックスと団結の戦士のカードがどちらもレベルアップ・ランクアップしたことにより、それに合わせ、その2体の融合モンスターだった『命の剣士』もレベルアップ。その姿は、命の剣士よりも1回り大きく、背から生える炎の翼もその勢いを増している。

「さらに手札より、海王龍を召喚!」

海王龍 星4 水 海竜族／効果

A1900 D1600

水蛇、海蛇、海龍とレベルアップして、レベル4で1900もの攻撃力を得た。

「まず炎の聖騎士で黒恐竜を攻撃！」

炎を纏った剣で切り裂かれた黒恐竜は破壊され墓地へと送られる。

ボスLP2000↓1600

「そして海王龍でダイレクトアタックだ!!」

これで決まりだ！そう思った瞬間、ボスは伏せていた罠カードを発動させた。

緊急召喚 罠

相手の攻撃宣言時、その攻撃で自身が受けるダメージを0にする。さらにその時自分の場にモンスターがない場合、自分は手札よりレベル4以下のモンスターを1体特殊召喚できる。

これにより海王龍の攻撃は防がれ、さらに相手の場には新たなモンスターが出現する。

黒水Lv4 A1800 D1500 通常モンスター

：流石にそう簡単にはいかないか。

だが相手が何を仕掛けてこようとも、勝つのは俺たちだ！

65話

相手のターン。

さあ、何をしてくる？

ボスは手札から魔法カードを発動。

消えゆく残影 魔法

自分の墓地からモンスターカードを1体守備表示で特殊召喚する。特殊召喚されたカードの効果は無効化され、このターンのエンドフェイズ時に破壊される。

墓地から先ほどの黒天使を特殊召喚し、場の黒水と天使をリリース!?
場に圧倒的な威圧感を放つ魔物が現れる。

黒悪魔Lv7 A2300↓2700 D1200 効果

このカードの攻撃力は、相手の場のモンスターの数×200アップする。

くつ、攻撃力2700……!

ボスは黒悪魔で炎の聖騎士を攻撃。

悪魔の手から高威力の魔法が放たれる。

「ぐう!!」俺LP3600↓3500

これにより、炎の聖騎士は墓地へと送られるが、こいつはこの程度では終わらない!
「炎の聖騎士の効果発動!このカードが戦闘で破壊され墓地へ送られた時、このカードの融合素材となった『スザク』、『歴戦の聖戦士』の内どちらかを墓地から特殊召喚できる!」

俺が選ぶのはスザク。さらに

「リバースカードオープン!魂の糸!」

魂の糸 罨

自分の墓地からモンスターが特殊召喚された時、特殊召喚されたモンスターと同レベルのモンスターを1体墓地から特殊召喚する。

「これにより、スザクと共に歴戦の戦士も蘇る!」

俺の場にモンスターが3体になったことで、相手の黒悪魔の攻撃力は2900まで上

がるが、ちゃんと対策は考えてある。

相手はターンエンド。

「俺のターン、ドロー!!」

引いたカードは…ロボ!よしっ、ナイスタイミング!

「俺は先ず、魔法カード『リ・フュージョン』を発動させる。」

リ・フュージョン 魔法

自分の手札・フィールドから、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体を墓地から特殊召喚する。

これは融合モンスターをEXデッキからではなく、墓地から召喚するカード。

俺は場のスザクと歴戦の聖戦士を再び融合!

「甦れ!炎の聖騎士!」

炎の翼を持つ聖騎士が場に舞い戻る。

これにより黒悪魔の攻撃力は2700に。

「さらに、手札から汎用ロボB—RT04の効果を発動。」

汎用ロボB—RT04 地 機械族／効果

A1600 D1600

ボロットから、自立型支援ロボB—RT02、支援ロボB—RT03と、呼びにくい長い名前を経てきたが、効果は折り紙付きだ。

「炎の聖騎士の装備カードとなり、攻撃力、防御力を500アップさせる。」

炎の聖騎士 A2500↓3000 D2000↓2500

上昇効果は同じだが、追加された効果が強い。

ま、今は使うタイミングではないからまたの機会に。

「炎の聖騎士で黒悪魔に攻撃ー！」

黒悪魔は破壊され、攻撃力の余剰分相手のライフを削る。

ボスLP1600↓1300

そして

「海王龍でダイレクトアタック！これで終わりだ!!」

ボスLP1300↓0

オオオオオオオオ……

よし、勝った!!

終わってみれば思ったより余裕だった。

黒悪魔が出てきた時はちよつとヒヤツとしたけど。

最後のドローでロボが来てくれたから普通に勝てたが、もし来なかったとしても、海王龍が攻撃してわざと倒されることで相手の攻撃力を2500まで下げることができ、さらに炎の聖騎士で相打ちにすることで、その効果によりスザク又は歴戦の聖戦士を場に特殊召喚できたから、どのみち勝ちは勝ちだったんだけどね。

何はともあれ、これでついに40階クリアだ。

さてさて、じゃあメイド∴、いやいや、報酬のカードを確認しましょうか!

ボスがいた場所に浮いている3枚のカードを手に取り確認する。

鉄壁の城壁 星7 A1000 D3000 通常モンスター

メイド ※拠点パソコンにて詳細をお読みください

竜の目覚め 魔法カード

ドラゴン族モンスターのレベルを2上げる

えーと、多分『鉄壁の城壁』が掲示板にも載ってたレベル7モンスターだよな。

守備力は高いけど…：どうだろ？ちよつと使いにくい？

で、次の『メイド』カード。何かマネキンみたいな絵が描かれてるけど…。ま、パソコンで確認って書いてあるし、後回しだな。

最後に『竜の目覚め』。これ今のところ使い道ある…？

何か今回は全体的に思ってたよりも微妙な結果？だった。

ただこれまでのことを考えると、何も意味がないとは思えないんだけど…。まあそのうち分かるでしょ。

俺は使用可能となった40階の転移機能を使い拠点へと戻った。

では早速、メイドさんについて調べていきたいと思えます!!

一応掲示板である程度の情報は見てるんだけど、一部規制されているところもあったから、全部は分からなかったんだよね。えーつと、なにになに…。

・『メイド』カードをパソコン接続の機械にセットすることで、メイドさんが実体化。

・DPでオプションの購入が可能

・オプションには様々な種類有り。(体型・髪型・顔立ち等、かなり項目が多い)

・メイドの実体化は1度きり。実体化後のオプションの追加は不可能。

・オプションを付けずに実体化した場合、ランダムに平均的な見た目になる。

(平均的な見た目ってどんなだ：？)

- ・心配しなくても実体化時にはきちんとメイド服を着ています。
- ・メイドはあなたの生活(主に家事)のサポートをします。
- ・最初は感情表現に関するデータがある程度リセットされている為、表情の変化に乏しいです。

- ・あなたの関わり方次第で性格は変わっていきます。
- ・女性向けに、執事への変更も可能です。オプションリストで確認ください。

ふむふむ、大体分かった。

じゃあ早速そのオプションリストを見てみようか。

パソコンに追加されていた『メイド・オプション』のボタンを選択。

おおー、大分多いな。

項目ごとにかなり細かく分かれてる。

にしても、身長を1ミリ刻みで分けなくてもいいんじゃない？

ん？大雑把に『長身』とか『細身』とかでも選択できるのか。

えーつとこつちは？…お、イメージ画が出てくる。これは良いな。

調整もダイヤル式で調整できるみたいだし。

多分、平均的な女性の体形（だと思われる）の数値を基準として、そこから離れていけばいくほど必要D Pが高くなるみたい。

例えば、超細身で巨乳でアイドル並みの顔にしたら必要D Pが恐ろしいことになる。

これは…本当ならすぐに実体化したいところだけど、少しD Pを貯めてからの方がいいかもしれない。

い、いや、そんなにこだわるつもりはないよ。ただ、やっぱり男としては…ねえ？あ
る程度…分かるよね??

…………ゴホン。

つてな訳で、D P稼ぎ再開じゃー!!

66話

あれから、ほんのすこしだけDP稼ぎをして（ほ、本当だよ！）、ついにメイドさんを召喚（？）する時がやって来た。

…やべえ、何か緊張する…。

先ずはオプションの購入。そしてミスが無いか念入りに確認して、『メイド』カードを機械にセットする。

【使用するオプションを選択してください】

俺が購入したオプションの一覧が現れたので全て選択。

【これより実体化を行います。以降オプションの追加・削減はできませんのでご注意ください。実体化を実行してよろしいですか？】

俺は少し震える手でYESを選択する。

すると、機械はカードがレベルアップする時以上の強い光を発し、俺は思わず目を瞑る。

しばらくして光が収まった後、翳していた手を降ろしそーっと目を開ける。

「……………つつつ!!?!」

そこには、俺が思い描いていた通りの美少女がこちらを見つめていた。

「…………お…………お…………」

驚きと感動のあまり声にならない声ができる。

するとその美少女は、体の前に手を揃えてぺこりとお辞儀をして、その後俺の目を見つめながら言った。

「これよりマスターのお手伝いをさせて頂きます。宜しくお願い致します。」

そして再び深々とお辞儀をする。

「……あ、ああ……、よ、よろしく。」

俺はそう言うのがやつとだった。

ある程度目鼻立ちの整った、アイドル級とまでは行かずともクラスのマドンナレベルの顔。

肌は白く、髪は少し茶色がかったセミロング。

体つきは痩せすぎもせず太りすぎもせず程よい肉付きで、胸は服の上からでもそれなりに大きいことが分かる程の膨らみがある。

ロングスカートタイプのメイド服を着こなし、こちらを見つめるのは透き通った青い瞳。

完全にドストライクの女の子が今俺の目の前に……!!

感動のあまりフリーズしていた俺を不思議に思ったのか、彼女は俺に訪ねてきた。

「マスター、いかがなされましたか？」

「…!!はっ!?な、何でもない!うん、何でもないよ!!」

慌てて取り繕う。

しかし彼女は特に気にした様子も無く淡々と言葉を紡ぐ。

「そうですか。それでは先ず、大変恐縮ですが私に名前を付けて頂きたく存じます。」

な、名前?そ、そうだよな、名前が無いと呼ぶ時にも困るし。

しかし名前かあ…。ど、どうしよう?!

「なまえ…なまえ、うーん、何かこんな名前が良いとかはあるの?」

とりあえず聞いてみる。

「私はマスターのサポートの為に生み出された存在です。ですのでマスターの呼びやすい名前を付けて頂くのがベストであると考えます。」

やはり淡々と答える彼女の声と表情に若干の違和感を感じるが、今は事前に聞いていた通り『感情表現に乏しい』状態なのだろう。

そ、そうか…。じゃあ、えーつと…

「…じゃあソラっていう名前はどうか?」

青空のような綺麗な色の瞳を見て思いついたが、あまり自信がないので最後の方はだんだん声小さくなっていく。

「かしこまりました。ではこれより私の事はソラと御呼び下さい。」

すんなり決まってしまった。

「じゃあ、ソラさん」「ソラと御呼び下さい」…。

「……………」

無言の圧力を感じる。

あれー？最初は感情の起伏に乏しいって話じゃなかったっけ？

「じゃ、じゃあ…そ、ソラ…。」

「はい、マスター。」

なんだか気恥ずかしい。

「と、とりあえず君が何ができるのか聞かせてもらってもいいかな？」

彼女の視線は俺の顔を捉えて離さない為、思わず目を泳がせながら喋る。

「はい、主にマスターの身の回りのお世話をさせて頂きます。具体的に言いますと、食事の準備や部屋の清掃等の家事がメインとなります。」

この辺は事前情報通りだな。

「分かった。じゃあ、一回拠点の中を案内しようか。家事をしてもらうにも色々場所と

か見てもらわないといけないうし。」

そうやって彼女を拠点の生活スペース内へと案内する。

彼女に背を向け先に扉の中に入るが、正直さつきから心臓がバクバクいつて止まらない。

きき、緊張が…と、止まらない…!!

そんな俺の心情を知ってか知らずか、彼女は素直に俺の後ろをついてくる。

「ま、まずはここがリビングで…。」

煩いくらいに鳴り響く心臓の音が彼女にも聞こえてるんじゃないかと心配しつつ、俺は説明を始めた。

現在俺の拠点は、これまでのDP稼ぎによってかなり良い生活ができるようになってきた。

さらに、メイドさんと共同生活をするに当たり、できるだけ良好な関係を築きたいと思いい(内半分は下心)、彼女が不自由しない様にと、掲示板でメイドの話題が出たところから少しづつ内装を綺麗に模様替えしてきた。

DPを使用すれば部屋位置を変更したり、廊下や扉を付けたりもできるので、ハウジング系?のゲームが好きなのはかなり嵌るんじゃないかと思う。

ここに来た当初はDPの稼ぎも少なく、パソコンがある部屋が普段の生活スペースになつていたが、現在では、パソコンがある部屋と生活スペースを完全に分けてある。

一応このパソコンがある部屋をこれまで通り『拠点』と呼んで、生活スペースを分かりやすく『家』と呼ぶことにしようと思う。

まず、拠点内のダンジョンに続く扉がある壁と対面の壁に、家へと続く扉があり、その扉を開くとそこそこ大きな部屋がある。

部屋の奥側はシンクとキッチン用品が並び、食料の無限箱等も置いてある。

部屋の中央にはフカフカのソファと机があり、ここでくつろいだり食事をとったりする。

…こういう部屋って何て呼ぶんだっけ？LDK？

日本の様に靴を脱ぐスタイルではなく、靴のまま生活するスタイルだが、一応扉の中ではスリッパに履き替えて過ごしている。

設置してあるソファや机、キッチン用品を含め、家の中の物は全て交換リストの中で、上から2番目のレベルの物なので、どれもかなり質は良い。

これより上のランクになったら豪邸にあるような質になるし、必要DPも桁が1つ違うから替えるにしてもまだまだ先の話になりそうだ。

で、玄関(扉)から向かって右側の壁に扉が1つあり、その先の廊下を挟んでさらに

扉が3つ。お風呂が1つとトイレが2つだ。

廊下を間に挟んだのは、音や視覚的な面で気になるかなと思ったから。

お風呂には大きな脱衣所もついており、そこから小部屋（洗濯物干し部屋）に続いている。

トイレが2つなのは、何となく男女で分けた方が良くかなと思って1つ追加した。

玄関から向かって左の壁には扉が2つ。

1つは俺のプライベートルーム、所謂寝室で、もう一部屋は彼女の部屋にするために用意した。

流石に同じ部屋でとか、ましてや同じベッドで寝るとかは、いくらメイドさんでも困るんじゃないかと思って、彼女用に1部屋追加することにしたんだ。

べ、別に期待したりなんかしてないんだからね！

とりあえず一通りぐるっと回って部屋の場所、物の場所、俺の生活スタイルなどを説明していく。

そして最後に、ベッドやクローゼットなど一通り家具の揃えてある彼女の部屋（予定）を見てもらっていると、不意に彼女が俺を呼んだ。

「…マスター。」

「ん？何？」

「このような環境をご用意頂き、誠に有難う御座います。」

「え、いやいや、そんな大したことじゃないから。一緒に住むことになるならお互いに過ごしやすい環境を作りたいなって思ってたことだし…。」

「いえ、こんなに素晴らしい環境でお仕えさせていただける事、本当に嬉しく思います。」
「そこまで喜んでもらえるなんて思っていなかったので、なんとなくこちらの方が慌ててしまう。」

「マスター。」

そして彼女は改めて俺の方に向き直り、真つすぐに目を見つめながら言った。

「私『ソラ』は、今後マスターの為に尽くす事を誓います。これから…どうぞ宜しくお願い致します。」

深々とお辞儀をするソラ。

そして顔を上げ再び俺と目が合うと、フワツと微笑んだ。
「!!？」

思わず顔をそむける俺。

おそらく顔は茹蛸の様に真っ赤になっていることだろう。

こ、この笑顔は反則過ぎる!!!

見事にその笑顔にノックアウトされた俺は、半分意識を飛ばした状態で思った。
…あれ？感情表現に乏しい設定って、…どこ行った??

67話

ある日の掲示板

420

うちのメイドが不愛想な件について

421

俺のメイドが構ってくれない件について

422

うちのメイドがゴミを見るような目で俺を見てくる件について

423

うがー！なんだよあの不愛想な顔!!!

424

ホントに。もう少し笑いでもすれば可愛いものを…

425

ホンそれな。

何であんな設定にしたのか…

4 2 6

∨ 4 2 5

『感情の起伏に乏しい』

これな。

関わり方で性格が変わるってあったからかなり期待してたのに、今じゃもう関わろうとすらしてくれないし。

4 2 7

まじ管理人どうなってんだよ!!

4 2 8

えっと、皆さんそんな感じなんですか…？

4 2 9

∨ 4 2 8

そりやそうだろ。最初の説明にも書いてあったし、みんな一緒だろ？

4 3 0

もうピクリとも表情筋動かねえよ

4 3 1

わかる。俺のところもだわ

432

しかしそんなことを聞くって事は、428はまだあれを経験してないのか？
まだメイドさんゲットしてないなら過度な期待をしない方がいいぞ。

433

期待しすぎて爆死

434

超気合い入れて完璧な体にしたのに、DP返せ！

435

ま、ここ見りや分かるだろうが、期待しすぎたら後がつらいぞ。

436

いやまておまいら、ここつて確かメイドをゲットした奴しか見れない接待じゃなかつたか？

437

ミス 設定

438

!?

4 3 9

だとしたら4 2 8はメイドをゲットしているにもかかわらずそんな質問をしてきたのか？

4 4 0

そんな設定あつたの初めて知つたんだが…

4 4 1

つてことは？4 2 8のメイドは不愛想じゃない…？

4 4 2

お、兄ちゃんちよつとこつちで一緒に話でもしようや

4 4 3

お、兄ちゃん、いいもの（情報）持つてんな？俺たちにも見せてくれよ

4 4 4

逃げてー！超逃げてー！！

4 4 5

誰が逃がすか！おら吐け！とつと吐けよ！！

4 4 6

皆さん怖いんですが…。

情報なら別に出しますので。

うちのメイドさんは基本不愛想ではありませんが、たまに笑ってくれますよ。
まだ1日に1回微笑む程度ですが。

447

ガタ!!

448

ガタツ!!

449

ガタンツ!!!

450

ガトドンガラガツシャーーン!!!!

451

どういう事だつてばよ!!?

451

428と俺たちの違いは何だ!!?

452

447—450おまいらこの流れ好きだよな

4 5 1の言う通り。何かあるのか？

4 5 3

と言われても、特に変わったことはしてないですけど…

4 5 4

いや、絶対に何かあるはずだ！ほら思い出せ！思い出すんだ!!!

4 5 5

必死過ぎワロタww

てか4 5 8に覚えがないなら、どんな生活してるか教えてもらえばヒントがあるん

じゃね？

4 5 6

それだ！頼む、教えてくれ!!

4 5 7

と言われましても…。普通に生活してるだけですよ？

ご飯は一緒に食べますが、後はそれぞれの部屋で自由にしますし。

4 5 8

それだ!!!!

4 5 9

それぞれの部屋：？メイドにも専用の部屋があるって事か！？

460

その発想は無かった

461

まさかそんなことだったとは：

462

え？え？別に普通ですよね？

463

俺は初日と一緒にベッドに寝ようとした

462

俺と一緒に風呂に入ろうとした

463

俺はお尻触ろうとした！！

464

はいアウトー！おまいら全員アウトー！！！！

465

ってかここには変態しかいないのか：

4 6 6

▽ 4 6 5

そういうお前も変態仲間

4 6 7

▽ 4 6 6

お前もな

4 6 8

やべえ、特大ブーメランが飛び回る予感…

一通り家の案内が終わったところで夕飯の時間が近づいてきたので、早速ソラが食事を作ってくれることとなった。

ソファーに座ってカードのチェックをしているふりをしつつ、チラチラと彼女の事を横目で見ると、

………はあ…、かわええ…。

自分好みにオプションを設定しているので、見た目はもちろん俺の好みど真ん中。

さらに、しばらくは不愛想という事前情報を持っていた中で、不意打ちの笑顔。もう俺の頭の中は彼女の事しか考えれなくなっていた。

チラッ チラッ

「…マスター。」

ビクウ!! 「は、はい! ななな、なんででしょう!!??」

「……いえ、先程からチラチラとこちらを見らているようでしたので、何か不手際があったかと思ひまして。」

「え? あ、いや、べ、別にそんなことはな、無いよ?」

「そうですか。ではもう少しで出来上がりますのでもう少々お待ちください。」

は、恥ずかしー!!!

チラチラ見てたのも気づかれてるし…はあ。

俯いてため息をつきながらカードをペラペラと眺めていると、目の前からとても美味しそうな匂いが漂ってきた。

顔を上げると、そこには机に乗った匂いの元たる夕飯と、それを運んできたソラの姿。「お待たせいたしました、マスター。」

見た目は普通のご飯と野菜炒めなのに、何だろう、自分で作った物よりも美味しそうに見える。

「(ゴクリ…) じゃ、じゃあ食べようか。いただきます。」

手を合わせて箸を持ち、いざ食べようとしたところで気が付いた。

机の上にある食事は俺の物だけで、彼女の食べるものは無い。

「あゝ、えつと、ソ、ソラの食事は？」

と聞くと。

「私はマスターのメイドです。マスターが食事を終えられました後に頂きます。」

そう言いつつ俺の席の後ろで待機するソラ。

…うーん、とは言えこうやって見られながら食べるのも落ち着かないんだよな…。

「じゃあ、さ、食べてる側に立って見られながら落ち着かないから、せめて座ったら？」

「いえ、私はメイドですからそのようなわけにはいきません。」

ムムム…、こうなったら…

「…わかった。じゃあこうしよう。『マスター命令』だ。」

マスター命令なんてものが有るのか知らないが、聞いた瞬間ピクツと反応した彼女の様子から、もしかしたらマスターの命令には従うべし、というような決まりがあるのかもしれない。

「食事は二人で一緒に食べる事。勿論夫々の都合で難しいときもあるだろうから、そういう時を除いてだけ。」

俺が『命令』すると、彼女は眉を寄せ困ったような表情をする。

「ソラは俺のメイドとして仕えてくれると言った。俺もそれはとても嬉しい。でも我儘を言うなら、メイドであると共に、友達みたいに接してほしいとも思ってるんだ。」

美少女メイドに甲斐甲斐しくお世話してもらうのも、男の夢の1つだろうけど、俺はそれよりも一緒に楽しい時間を過ごしたい。

「勿論ソラの言う事も分かるし、メイドとしての考え方も理解してるつもりだ。でも、も
しできるならそうしてほしい。…ダメ…かな？」

俺の言葉を聞き、考え込むような表情の彼女。

暫し静寂が場を包む。

1分? 10分? 俺としては永遠に近いほどの時間を待ったような気がするが、実際は
そこまでの時間は経っていないのだろう。

彼女は諦めたかのように大きく息を吐き、そして俺の顔をじっと見つめて言った。

「……分かりました。では、私の食事を用意してまいりますので、申し訳ございませんが
もう少々お待ちくださいませ。」

そして踵を返すとキッチンの方へ自身の食事を取りに行った。

(よしっ! 美少女と一緒に食事!)

食事中背後から観察され続けることを回避でき「ヨシヨシ」と思っていると、自分の食事を持ったソラがこちらに向かいながら話しかけてきた。

「マスター。先ほど『マスター命令』とおっしゃられました。申し訳ございませんがマスターの命令に絶対服従というルールはありませんので、私には命令と言われても拒否する権利が御座います。」

……あ、そ、そうなんです。ね…。

色々と勘違いしていた俺は再び顔を赤くして、微妙な雰囲気の中食事をとることになってしまう。

68話

微妙な雰囲気での食事も終わり、今はそれぞれ自分の部屋でくつろいでいる。

雰囲気は微妙だったけど味は非常に美味しゅうございました。

食後はソラが洗い物をしている間に俺が風呂に入り、その後ソラが入った。

「お背中流します」イベントや、「ラッキースケベ」イベントなんてなかったんや…。

そして今、それぞれの部屋で就寝体勢。

勿論「一緒に寝ても良いですか…？」なんてことは無い。

はあ…。

別に期待してたわけじゃない…ゴホン、やっぱりちよーつとだけ期待していたけど、まあそうだよな。

一度落ち着いて冷静に考えてみると、彼女はマスターの命令に絶対服従の従者ってわけでは無く、どちらかと言えば異性の同居人って感じがする。

んー、住み込みの家政婦さん？そんな感じなのか？

であれば、彼女からすれば雇う側と雇われる側の関係以上のもは無く、他のプレイ

ヤー諸君が抱くメイドさんとの甘い生活は、端から予定にないのだろう。

そんな関係になりたかつたらきちんと信頼関係を築けど。

ふむ。ま、俺もここまで大分テンパってた部分もあるけど、落ち着いて考えてみたら何となく腑に落ちた気がする。

これから彼女の事は、メイドでもあり、1人の女性として扱う。

そうして徐々に信頼関係を築き上げていければ良い。

よし、考えが纏まったおかげで少し頭がすつとした気がする。

あくまでメイドさんは生活のサポートだけだし、俺にとってのメインはダンジョン攻略だ。

メイドさんにばかりかまけてられない。平常通り平常通り…。

じゃあ、今日はもう寝て、明日からも頑張ろう！

次の日

起きた瞬間、何となくいい匂いが漂うのを感じた。

扉を開けてリビングに出ると、そこにはすでに朝食の準備を終えたソラがいた。

「おはようございます、マスター。朝食の準備が出来ましたので、今お呼びに行こうとしたところでした。」

「あ、ああ、おはよう。」

今までは前の日の晩に作っておいたものや、無限箱から取り出したパンなどを食べていた為、しつかりとした朝食が机に並べられているの見て思わず涙が出そうになる。

「ソラ…、ありがとう。」

素直にお礼を言うとうと

「いえ、それが私の仕事ですから。では冷めないうちにどうぞ、お召し上がりください。」
そう言いながら椅子を引いてくれる。

はあくいいいな…。

朝からホワホワした気分になりながら朝食をとる。

向かいでは、昨日言った通りソラが自分の食事をとっている。

そういえば、最初の説明では彼女は『ヒューマノイド』とのことだったが、あくまで作られた存在でただで、食事もできるしトイレにも行く(食事中にゴメンね)。さらに生殖機能もきちんとあるらしい。

ここまで聞けば、それともう普通に人間じゃん？って思う。

であれば、やはり昨夜考えた通り、彼女はメイドでもあるけども、同居している一人の女性として扱うのがベストだと思った。

さて、朝食も終え、身だしなみも整えたらダンジョンに出発だ。

出発の際、扉の前でソラが

「行つてらっしゃいませ、マスター。」

と見送つてくれたのが嬉しかった。

では、転移機能を使つて40階に。

この先は情報も規制されており、俺にとつては未知の世界だ。

さらに噂ではいまだに50階突破者がいないという。

どれほどのレベルなのか、不安半分楽しみ半分で41階へと続く扉を開けた。

階段を降り、着いた先は小さな部屋の中。

拠点に似た雰囲気の一部屋だが、特に何かあるわけでは無く、目の前の壁に1枚の扉が

あるだけだ。

1度深呼吸をして扉に手をかける。

思つたよりスムーズに開いた扉のその先にあつた物は…

「あ、ご新規さんですね。ようこそ、デュエルエリアへ!!」

俺の目の前に現れたのは、バスガイドさんのような恰好をした女性と、これまでのダ

ンジョン内の様子とはかけ離れた、近代的な機械が立ち並ぶ学校の教室くらいの広さの部屋だった。

「えーつと、……ここは？」

おもわずガイドっぽい女性に尋ねる。

「はい！ここはデュエルエリアと呼ばれる場所になります。お客様は初めてのご利用です。では先ずあちらの受付で詳しい説明をさせて頂きます！どうぞこちらへ！」

元氣いっぱいに答えてくれ、受付の方へと促される。

「さて、改めまして、ようこそデュエルエリアへ！私はここの担当をさせて頂きます『ガイド』です。気軽に『ガイドさん』って呼んでくださいね。では、このエリアの説明をしていきまっしょー！」

やけにテンションが高いけど、大体の説明を聞いて分かったのは次の通り

・41階〜49階はデュエルエリアと呼ばれる場所。

・ここでは対人戦が出来る。

・対戦相手は、これまでのダンジョン挑戦者のデータや、色んな世界から集めたデータによって作り出された、限りなく本物の人間に近いCPU。

・各階ごとに指定の条件を満たすことで次の階へ進める。（基本的には、この階で〇〇回勝つ。とか）

・他のプレイヤーも、この51〜59階は必ずデュエルエリアになるらしい。

・一応40階突破したプレイヤーは、管理者同士の戦いへの出場権を得るらしいけど、勿論先に進めば進むだけカードも強化されるので、ここで止まらず攻略を続ける方がメリットが多い。

・ガイドさんはある程度管理者から権限を委ねられている存在らしく、色々知ってることも多い。(教えてくれるとは言っていない)

・このデュエルエリアでは、デュエルに勝つことでBP (バトルポイント) が貰える。

※DP (デュエルポイント) にするとDP (ダンジョンポイント) との区別がつかない為

・BPはエリア内にあるショップでカードと交換することができる。

・BPは拠点でDPに変換することが可能。但しDPをBPに変換することはできない。

・エリア内のショップで交換できるカードは階を進むにつれ種類が増える。

・階によってルールが違う。41〜45階はLP4000、初期手札4枚、先行ドロウ無し。

簡単に言うと、参加資格は得たから後はここで対人戦の練習をしろ。って事だろう。

で、勝てば先に進めると。うん、シンプルでいいね。

最初に入ってきた扉の向かいの壁に大きな扉があり、その先がデュエル場に続いているらしい。

中にはリングがあり、そこに上がると対戦相手が現れる。

デュエルとデュエルの間にはリングから降りて休憩もできる。連戦の必要は無いって事ね。

さらにデュエル中以外ならいつでもこの部屋との行き来が可能。

BPをカードと交換できるショップはこの受付の向かい側、と。

その横には飲み物の自動販売機や、休憩できるベンチもある。

よし大体わかったし、早速対人戦、行ってみますか！

69話

扉を開き中に入る。

部屋の大きさは体育館の半分くらいか？中央にはデュエル用のリングがある。

そして部屋に入った瞬間、手元から「ピンポン♪」と音が鳴った。

「次の階へ進むには この階で 10 勝 すること (0/10)」

今俺が手に持っているのは受付で渡された1枚の真っ白なカード。

そこに文字が浮かび出てきた。

「部屋に入ると、このカードに先に進むための条件とかが出てきますから、きちんと確認してくださいね。」とはガイドさんの言葉。

ふむ、分かりやすくもいいね。じゃあ早速試してみますか。

俺はそのままリングへと上がる。するとおなじみの黒い靄が現れて人の形へと変化していく。そして

「お、今度の相手はお前か。宜しくなー」

「(しゃ、喋った!?) あ、ああ、よろしく…。」

現れたのは1人の男性。歳は俺と同じくらい…か？

突然の出来事に驚きつつ、差し出された手を握る。

(そうか、対人戦の練習で、以前の参加者のデータを使用していったらこうなるか……。)
限りなく本人に近いが決して本人ではない、データで作られた存在。

意表を突かれた形で驚きはしたが、分かってしまえば逆に、久々の対人戦に心が躍る。
「いいデュエルにしような。」

「ああ!!」

お互いにディスクを構え、手札を4枚引く。

41〜45階は手札4枚だったな。さらにバトル場もモンスターゾーンが3か所と、魔法・罨ゾーンが3か所。そしてメインフェイズ2は無し。

昔遊んでいた『デュエルリンクス』ってゲームのルールと一緒だな。

あれもかなり嵌ってたな……。っとそんなことより本物のデュエルだ。

ディスクのディスプレイには：先行表示！

「いぐぜ、俺のターン!!ド……。」

一瞬癖でドローしそうになるがギリギリで留まる。

「(危ね…)俺は、モンスターをセット。さらにカードを1枚伏せターンエンドだ!」

しかし以前の参加者のデータと入ったが、どれほどのものなのだろう。

もし優勝者が当時の使用デッキを使って来たら：勝てるのか？

「よっし！俺のターン、ドロー!!」

良い勢いでカードを引く相手。

「じゃあ俺は、突撃ワイバーンを召喚して攻撃だ!」

突撃ワイバーン 星4 風 ドラゴン族／効果

A1700 D1200

このカードが守備表示モンスターを攻撃する時、その守備力をこのカードの攻撃力が越えていれば、その数値だけ相手にダメージを与える。

場に現れたドラゴンが俺のモンスターに攻撃を仕掛ける。

「甘い！俺のモンスターは世界樹！お前の攻撃力より守備力の方が高い上に、このカードは1ターンに1度戦闘では破壊されない!」

世界樹 星4 地 植物族／効果

A1000 D2000

守護の大樹のレベルアップしたカードだ。その守備力は2000まで上がり、効果と

も相まって鉄壁を誇る。

俺が先行の時には大概手札に来てくれているし、本当に頼りになるやつだ。

相手は300ポイントのダメージを受ける。

「くっ、ターンエンドだ。」

「俺のターン、ドロロー!!」

よし!俺の勝ちだ!

「俺は先ず海王龍を召喚!」

海王龍 星4 水 海竜族/効果

A1900 D1600

「そして手札より、汎用ロボB—RT04の効果を発動。このカードは俺のモンスター
の装備カードとなり、その攻撃力・防御力を500アップさせる!」

「なに!?!」

海王龍 A1900↓2400 D1600↓2100

いいねいいね!相手の反応があるって素晴らしい。

「これで終わりじゃないぜ!さらに俺は汎用ロボB—RT04のもう一つの効果を発動

！」

「もう一つの効果…?」

「そう、このカードは1ターンの1度、魔法・罨ゾーンから自分の場に特殊召喚できる。」
「なんだと!?!」

汎用ロボB—RT04 地 機械族／効果

A1600 D1600

①手札またはフィールドのこのカードを装備カード扱いとして自分の場の表側表示モンスターに装備することができる。このカードが装備されたモンスターの攻撃力・防御力は500アップする。

②1ターンの1度、メインフェイズ時に発動可能。魔法・罨ゾーンのこのカードを場に特殊召喚する。

③このカードを装備したモンスターが破壊された時、代わりにこのカードを破壊できる。

レベルが上がり、ランクも上がったことで強化された能力。

今使うのは②番目の能力!

「さらに、リバースカードオープン！二者択一！」

二者択一 速攻魔法カード

次の内一つを選んで発動できる

①ターン終了時まで自分の場の全てのモンスターの攻撃力を自分の場のモンスターの数×100アップさせる

②ターン終了時まで相手の場の全てのモンスターの攻撃力を相手の場のモンスターの数×100ダウンさせる

初手で伏せておいたカードだ。

このカードもランクアップにより効果はかなりアップしている。

「今俺の場にはモンスターが3体。つまり、俺のモンスターの攻撃力は300アップする！」

「くっ!!」

世界樹 A1000↓1300

汎用ロボB—RT04 A1600↓1900

海王龍 A1900↓2200

「いくぞ！世界樹を攻撃表示にして、バトルフェイズ！先ずは海王龍で突撃ワイバーンに攻撃！」

「ぐああ!!」

相手LP 3700↓3200

「そして世界樹と、ロボでダイレクトアタックだ!!」

「うわああああ!!!」

相手LP 3200↓0

相手は攻撃の余波でその場に倒れる。

「おめでとうございます。デュエルに勝利しました。勝利報酬として100BP支払われます。」

受付で貰った白いカードを見ると、新たに『所持BP 100』の文字が浮かんでいる。
る。

コツコツと音が聞こえたので顔を上げると、相手が立ち上がった近づいてくる所
だった。

「いやー、まいったな。まさか瞬殺されるとは思ってた。あんた強いんだな。」

ニコニコしながら話しかけてくる。

こうやって見るとデータで再現されているだけとは思えないな。

「いやいや、たまたまだよ。手札も良かったし。」

「いや、強いやつつてのは常に手札が良いやつなんだ。あんたは強いよ。できたらまたデュエルしような！」

そう言つて手を差し出して来る。

「…ああ！」

手を握り返しそう答える。

そして、手を離すと同時に、彼は元の黒い靄に姿を変え消えていった。

また…か…。

「続けてデュエルを行いますか？ 行う場合はそのままお待ちください。そうでない場合は1度リングをお降りください。」

頭上からアナウンスが流れる。

俺は一旦リングを降りる。

手に持つ白いカードに書かれた数字は(1/10)になっている。

1戦行つた事で大体の流れは分かった。

後はこれを繰り返していけばいいだけだ。

流石に最初の階だからか、相手もそんなに強くは無かった。

もしかしたら偶々手札が悪かつただけの可能性もあるけど。

にしても、データとは言え久々の対人戦。あつという間ではあつたが楽しかった。

『できたらまたデュエルしような！』

彼とまたデュエルする機会はあるのだろうか？

そしてもし再戦できたならば、彼の記憶はどうなっているんだろう？

俺のことで覚えているのか…？

ぼんやりと、そんなことを考えるのであった。

70話

俺は一旦受付のある部屋へ戻った。

BPをカードと交換できるシヨップの確認をするためだ。

最初来たときは、どうせBP持っていないから覗いても意味ないと思いついていたが、先程のデュエルでBPを貰えたし、どんなカードがあるのかをチェックしておくことにした。

「へいらっしやい。」

おもちゃ屋の店長って感じのエプロンをかけた、ごついおじさんが出迎えてくれた。

「あんた初めての客だな？俺の事は『おじさん』って呼んでくれ。別に『おっちゃん』でも『おやじ』でも何でもいいがな！」

やけに声がかい…。

「さて、初めてのあんたに説明をしよう。ここはあんたの持っているBPとカードを交換する場所だ！強いカードになる程必要なBPは多くなるからな！」

こちらが何もしゃべっていないのに1人でどんな話を進めていくおやじ。

ま、いいか。なんか勝手にカード広げ始めたし。遠慮なく見せてもらおう。

出されたカードを手に取り一枚づつ確認していく。

ん？んんん？これは…

「なあ、おやじさん。カードはここにあるので全部なのか？」

「あ？おお、そうだけ。先の階に進めばさらに追加されるがな！」

そうか…。ならばこのショップ、俺が使用することはほぼ無いかもしれない…

なぜならば、目の前に広げられたカード。それらは全て、すでに俺が持っているカードばかりだったからだ。

（スリープシープにレイクフィッシュ…ん？水を得た魚は条件付きドロップだったか？）

中にはドロップ条件があるカードもあったが、デュエリストアイのレベルを9まで上げて俺からしたら関係ない。

もしかしたらスキルを持っていない人たちへの救済措置なのか？

いや、だとしたらデュエリストアイのレベルを上げた意味が無くなってしまう。

先に進めば知らないカードも手に入るのならばいいんだが…。

急に黙り込んだ俺を見ておやじさんは心配して声を掛けてくれた。

「ん？どうした？大丈夫か？」

「え？あ、ああ、大丈夫。あ、今回はいいや。また今度来るわ。」

「お？…そうか？…じゃあまたな！」

ありつしたー!!と、どデカイ声を背中に受けながら俺は再びリングのある部屋へと戻る。

さて、後はひたすら戦うだけだな。

1度大きく深呼吸をし、気合を入れ直してからリングに上る。

(先に進むには戦って勝つしかない。勝利数が条件のこの階は負けても問題ないらしいが、できれば最短でクリアしたい！)

先程と同じように人の形へと姿を変える黒い靄を見つめながらそう思った。

約1時間後

「スザクでダイレクトアタック！これで終わりだー!!」

「うわあー!!!」

たつた今、10人目の相手を倒したところだ。

やはりこの階は最初という事もあり、そこまで強くない又は相手の手札が悪い事が多かった。

割とサクツと10人抜きして次の階への扉のカギが開いた。

【おめでとうございませす。次の階へお進みください。】

アナウンスの声に促されて、先へ進む扉を開き、中の階段を下っていく。

着いた先は、41階の受付がある部屋と全く同じ作りの部屋だった。

「あ、いらつしやいませー!」

あれ?ガイドさん…?

「むっふっふー。不思議そうな顔していますね?実はこのデュエルエリアでは私たちは階を跨いで移動が自由にできるんですよー!!」

「な、なんだってー!!!?」

一応大げさに驚いてあげる。

「ふん♪なので、あなたがいる階に私たちも移動しますから、何かありましたら遠慮なくおっしゃってくださいねー!」

何故か嬉しそうな顔でぺちやくちや喋るガイドさん。

俺の驚いた顔（のふり）がそんなに嬉しかったんだろうか?

後ろを向くと、シヨップの親父さんが腕を組んだままニカツつと笑っていた。

ま、システムのその方が都合が良いって事か。

俺には関係ないし何でもいいや。

「あ、そうそう、簡易転移石はここにありますから、忘れずに登録しておいてください
ねー！」

そりゃご親切にどうも。

とりあえずシヨップのカードを確認させてもらって、リングのある部屋へ移動。
シヨップのカードは予想通りすでに自分が持っている物ばかりだった。

ピンポン♪

「次の階へ進むには この階で 5連勝 すること (0/5)」

ふむ、次は5連勝か。

最短で5戦。途中で負ければ1からやり直しだから、下手したらいつまでたっても抜けられないって訳か。

ま、狙うのは勿論1発突破だが。

リングに上がり、現れた相手を観察しながらデュエルディスクを構えた。

さらに数時間後。

【おめでとうございます。次の階へお進みください。】

俺は44階をクリアした。

階を進むごとに相手の強さは少しづつ上がってきているけど、まだ問題は無い。

突破条件も、「ノーダメージで5回勝利」と「規定ターン内に5回勝利」だったので、多少苦労はしたが、問題なく突破。

そして扉の先の階段を降り45階へ。

「あ、お疲れ様でーっす！もう45階ですかー、早いですねー！」

さほど時間が経っていないのにもうお馴染みになりつつあるガイドさんと挨拶をする。

「あ、そうそう、この45階は特別になってまして、所謂中ボス部屋になりまーす！」

…中ボス部屋？

「戦う相手は1人だけですが、ひっじょーに強いですよ。見事倒せば次は46階でーす！」

切りのいい数字の階だし、今までも5のつく階は転移装置があったから、ここで何かあるんじゃないかと思っていたがまさかの中ボスカ。

ま、時間も丁度良いし、サクッと倒して今日は終わりにしようかな。

簡易転移石に登録して、シヨップの確認をして、準備が整たら扉を開けてリングへ上がる。

ピンポン♪

【中ボスを倒せ（0／1）】

いつも通り黒い靄が人の姿となる。

ゾワツ…

「!!?」

その姿を見た瞬間、一瞬背筋がゾワゾワツつてなった。

な、なんだ？今の…

何とも言いようのない空気を感じる。

どういえばいいのかわからないが、何となく嫌な予感。

そして相手はおもむろに口を開いた。

「…ふんっ、雑魚か…。」

な!!?

思わず言い返してやろうと思ったが、相手はすでにディスクを構えている。

くっ、やるならこつちでつて訳か。いいだろう！戦っているところを見た事も無い

せに雑魚扱いしやがって！後悔させてやるよ!!

デュエルが始まる。

先行は…、相手か！

「ふん…、俺のターン。…モンスターをセット、カードを2枚セット。ターンエンドだ。」
伏せカードが2枚か…。

だが何が伏せてあろうとも俺は突き進むだけだ！

「俺のターン！ドロー!!!」

71話

「俺のターン！ドロー!!!」

絶対に勝つ！

「俺は歴戦の聖戦士を召喚！さらに手札より汎用ロボB―RT04の効果を発動。歴戦の聖戦士の装備カードとなり、攻撃力・防御力を500ポイントアップする！」

歴戦の聖戦士 A1900↓2400 D1400↓1900

（奴の伏せモンスターの守備力が2000を超えている可能性も否定できない…。ならばここは装備したまま攻撃だ。）

「バトルフェイズ、歴戦の聖戦士で伏せモンスターを攻撃だ！」

流星に攻撃力2400なら破壊できないことは無いだろう。

そう思っていると、奴は不敵に笑った。

「今…、攻撃と言ったな？」

「…？」

「相手の攻撃をトリガーに発動するカード！トラップカード、聖なるバリアミラーフォース!!」

な!!?ミラフオだと!!???

聖なるバリア ミラーフォース 罨

相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。相手フィールドの攻撃表示モンスターを全て破壊する。

「くうう!!」

奴の罨カードで、攻撃を仕掛けた歴戦の聖戦士と、装備カードとなっていた汎用ロボ B—RT04 が破壊され墓地に送られる。

「くそっ!…ターンエンドだ。」

俺の場はがら空き。これは不味いぞ…。

「俺のターン、ドロロー。…ふん、俺は手札から強欲な壺を発動。」

何!?!強欲な壺!?!

「さらに手札より、天使の施しを発動。」

な!?!禁止カードのオンパレードじゃねえか!?!

てか、そんなオリジナルカードも存在するんだ!?!

強欲な壺 魔法

デッキからカードを2枚ドロウする。

天使の施し 魔法

デッキからカードを3枚ドロウし、その後手札からカードを2枚捨てる。

「じゃあ行くぜ。古のルール発動。手札から上級モンスターを召喚する！」

古のルール 魔法

手札からレベル5以上の通常モンスター1体を特殊召喚する。

な、なんだ、次は何が出てくるんだ!?

「見せてやるよ、俺の切り札! 来い! シヤイニングドラゴン!!」

シャイニングドラゴン 星8 光 ドラゴン族/通常モンスター

A3000 D2500

うお！攻撃力3000!?

「さらにドラゴナイトを召喚。」

ドラゴナイト 星4 地 ドラゴン族／効果

A1800 1400

こ、これは…。

「バトルフェイズ、ドラゴナイトで攻撃。」

「ぐうう！」

俺LP4000↓2200

「そして、シャイニングドラゴンで攻撃！くらえ！シャイニングブラスター!!!」

「ぐわあああー!!!」

俺LP2200↓0

リングに倒れ伏す俺に対して奴は言った。

「…フン、やっぱり雑魚か。」

そう言い残して再び黒い靄へと姿を変え消えていく。

くそ…

くそつ…!!

くそつ
!!!!!!

「がああああ!!!くそがあああ
!!!!!!」

ダン!ダン!ダン!

!!!!!!

叫びながら床を叩く。

「うああああああ!!!」

分かっていて。いつかは負ける時が来ると。

1度も負けないなんてありえないと。

頭ではわかっていて。でも心はそれを拒絶する。

「ああああああああああああああああああ!!!!!!」

今の俺にはもう、ただ叫ぶことしかできなかつた。

ぎいい…

音をたて扉が開く。

「おかえりなさいませ、マスター。」

俺に気付いたソラが近づいてくる。

「…マスター……。」

彼女の声色が気遣うようなもの変わる。

よほど俺はひどい顔をしているのか…

「わるい…、一人にしてくれ…。」

そう言うのがやっとだった。

重い足取りで自分の部屋へと向かう。

「マスター……。」

後ろからソラの悲しそうな声が聞こえた気がしたが、今の俺には周りを見る余裕なん

てなかった。

負けた。

『フン、雑魚が。』

完膚なきまでに負けた。

『やっぱり雑魚か。』

奴の言葉と負けた瞬間の光景が頭から離れない。

くそつ、何だよミラフオって…。禁止カードじゃねえのかよ…。

予想だにしなかったカードの登場に俺は動揺した。

ミラフオに強欲な壺に天使の施し…。あれならサンダーボルトや死者蘇生なんかも入ってそうだな…。

…勝てるのか？あんなデツキに…？

心が折れそうになる。

いや、むしろもう折れているのかもしれない。

あれだけ完膚なきまでにやられて、どうしても自分が勝てるビジョンが浮かばない。

「はあ〜…。」

もうため息しか出てこない。

あれだけ強い中ボスがいるなら、他のプレイヤーが未だ50階を突破できていないのにも納得だよ…。

41階から44階まで半日で突破して、これなら中ボスも楽勝だなんて思って…、

慢心してたのか…？

…わからない。分からないけど…、今はもう何も考えたくない。

ベッドに寝ころび目を瞑る。

しかし目を瞑ると、暗闇の中であいつの声が聞こえてくる。

『フン、雑魚が！』

『貴様に俺は倒せんよ。』

『とつとと諦めたらどうだ？』

「……………くそっ…。」

眠れない時間が続いた…。

次の日

「おはようございます、マスター…、マスター、夕べ寝られましたか？」
部屋からのつそりと出てきた俺を見てソラは言った。

「…ん…。」

適当な返事をする。

結局朝方まで寝付けず、少し眠れたかと思ったら夢であいつが出て来て飛び起きてしまった。

おかげで10分も寝てない。

「マスター…、…お願いします。今日は休んでください。」

ソラがそんなことを言ってくる。余程見た目酷いのか…？

「あ、いや、休みたいのはやまやまなだけど…。」

どうしても負けた事を思い出してゆっくり休めないんだ…。
「…………、分かりました。では強制的に休んでいただきます。」

?きゆうに物騒な言葉が出てきたぞ?

するとソラは、椅子を引いた後俺を軽くトンつと押した。

「うわっ!」

寝てないせいでフラフラしていた俺は思わず後ろにコケて尻餅をつく…前に、ソラが引いてくれた椅子に腰を下ろすことになった。

「あ、あれ?」

スツと椅子を動かされ、目の前には朝食が乗ったテーブル。

そして何故か自分用の食事と椅子を俺のすぐ隣へ持つてくるソラ。

「では、いただきますよ。」

手を合わせ、箸を持ちおかずをつまむソラ。そして、

「はいマスター、あーん。」

それを俺の口元に持つてきた。

いいいいいい!!?

な?なににな!?!突然何!?!

動揺する俺を見つめる彼女はそこからピクリとも動かず、俺が口を開けるのを待つて

いるようだった。

「マスター、あーん。」

さらに催促の言葉。絶対に俺にあーんをさせようという強い意志を感じる。

「……………（ゴクリ）あ、あーん…。」

俺が口を開けると、そのまま彼女は箸を動かし俺の口の中におかずを入れてきた。

モグモグモグ…ゴクン。

「はい、あーん。」

すっかり噛んで飲み込んだ後、バツチリのタイミングで次のあーんがやってくる。

え、えーつと…？も、もしかして、ずっとこんな感じ…？

お、俺、どうしたらいいんだ…???

72話

結局あれから、俺は朝食を全てソラの「あーん」で食べることになった。

あ、いや、嬉しいのは嬉しいんだけど…何で急に？って思いの方が強い。

その後も、ソラは俺に付っきりで甲斐甲斐しくお世話をしてくれた。

そして、

「いいって！流石にそこまではいいってば!!」

「いえ、いけません。今日はマスターに休んでいただく決めましたので。」

「だからってここまでしなくても!」

「いえ、私はマスターのメイドです。マスターのお世話が私の仕事ですので。」

「だ、だから!!」

俺たちが何を言っているのかというと…

「だからって風呂ぐらい1人で入れるから!!」

「いけません。今日はマスターのお背中をお流しする事に決まっています。」

そんなことは決まっています!!

あーだこーだと押し問答を繰り返して、結局俺が折れることになった。

心なしか上機嫌のソラだったが、俺はもう心臓がバクバクしてゆっくり風呂に入るところじゃなかったよ。

あ、ちなみにソラはメイド服のままだったよ。自分が濡れない様にマスターの体を洗うのはメイドの必須技術だそうなの。

そして今、俺はさらなる難関を目の前にしている。

「さ、マスター。どうぞで遠慮なさらず。」

今彼女がいるのは俺の部屋の俺のベッドの上。

所謂女の子座りの状態で、普段枕がある位置に座っている。

そして自分の足をポンポンと叩き、早くここへ来いと催促している。

「い、いや、流石に膝枕までは……。」

そう、彼女は俺に膝枕をしようとしているのだ。

「何をおっしゃいますか。これが殿方が最もゆつくり安心してお休みいただく為の最高の枕だというのに。」

その情報源はどこだ。

「で、でも……」

「でもではありません。さ、どうぞ。」

い、いや…、お風呂も結構きわどかったけど、流石にこれは…

「どうぞ。」

「……………」

「……………」

「……………はい。」

結局彼女の眼力に負けて膝枕されることに。

ううう…、嬉しいのには違いないけど、何か思ってたシチュエーションと違う…。

もつとこう…何ていうんだろ、甘酸っぱい感じですかあ…。

にしても、彼女は何でいきなりこんなことを？

いきなり昨日との差がすごいんだけど…。

「…なあ、ソラ。」

「はい、なんでしよう、マスター。」

膝枕された状態で話しかける。

…上を向いても、彼女の胸部装甲のせいで顔が半分見えない。

「あのさ、なんで今日はここまでしてくれるんだ？」

分からないので本人に直接聞いてみることにした。

すると彼女は少し困ったような表情になる。

困っているというよりは、言うべきか言わないべきか悩んでる感じか？

「そう…ですね。まず最初に、本当は私はここまでの事はするつもりありませんでした。」

え？ そうなの？ なら何で…

「昨日帰ってこられたマスターを見て、私たちは一晩考えました。私たちはマスターの事をずっと見てきました。だからあの時マスターがどんな思いだったのかも分かるつもりです。」

そこで一度言葉を切り、そつと俺の頭を撫で始めた。

「私たちはマスターと共にある存在。ならば、今私たちはマスターに何ができるのか。そう考えてたどり着いた答えが、マスターの心を癒すことでした。」

頭をなでる手つきがとても優しくして気持ちいい。

「マスターの悲しそうな顔は見たくない。そう思い、今日は一日マスターの為に尽くすことに決めました。…本当はまだ駄目だったんですけどね…。母性を刺激されたといえますか、みんなの思いが溢れてきたからと言いますか…。」

みんな？ 私たち？ 誰の事だろう…？

「ですから、もうやってしまったからには隠す必要もありませんし。これからはしつか

りとマスターの側でお仕えさせていただきますからね。」

…気持ちよくて段々眠くなってきた…。

段々声が遠くになっていく。

「私たちはいつでもマスターの味方です。常にお側でマスターを支えます。だから、今は安心して…、ゆっくり休んでください…。」

まどろみの中でソラの優しい声が聞こえた。

……おやすみなさい、マスター…。

真つ白な世界の中

俺はふわふわとした意識の中、当てもなく進んでいた。

ふいに、その白い世界に赤い光が見えた気がした。

視線を向けると、小さな赤い光がふよふよと飛び回っていた。

それは不規則な動きであつちこつちに飛ぶ。

まるで飛ぶことを覚えたばかりの小鳥が、必死で思う方へと飛ばうとしても見える。

…とり…？

そう思った瞬間、赤い光は小さな鳥に姿を変える。

そしてその鳥は俺を見つけると、嬉しそうに近づいてきて、俺の肩に留まり頬ずりをしてきた。

さらに、ふと気が付けば、少し離れたところに1本の剣が刺さっているのを見つけた。
？さつきまでなかったような…？

そう思っていると、どこからともなく人の形をした白い影のようなものが現れて、その剣をつかんだ。

するとその瞬間、人型の白い影は急速に色を持ち始め、1人の戦士が現れた。

戦士は剣を持ったまま俺に近づき、そして俺の前で膝をつき頭を垂れる。

…そうか、こいつらは…。

そう思った時、白い世界は急に動き出し、俺の回りからたくさん生き物が飛び出してきた。

「おまえら…。」

それらは皆、同じように俺のそばへとやってきて、あるものは体に寄り添い、あるも

のは俺の回りを飛び回り、またある者は戦士の様に忠誠を誓うようなポーズをとる。

ベビー・バード、戦士の卵、ミニマジシャン、ボロット……

俺の初期デッキのカード、20体がここにいる。

そして

「……ん？」

モンスターたちが一斉に一方を向く。

そこには人型のシルエットがあった。

そしてそれは段々形を変え、色を持ち、俺の知っている姿へと変わった。

「……………ソラ……」

彼女は俺の前までやってくると、俺の目を見てニツコリとほほ笑んだ。

…あ…そういう、ことだったのか…。

彼女の顔を見て、すべてが分かった気がする。

彼女の存在、あり方、思い。

色んな感情が俺の中に流れ込んでくる。

…そうか、だから…。

俺は彼女の方を向いて微笑み返す。

そして、俺の最高に頼れる仲間たちに、最高の笑顔を見せた。

つられてみんなも騒ぎ出す。

ふと視線を感じて後ろを振り向く。

そこには人型の白い霧。

表情は一切分からないけど、何となく笑顔で頷いているような、そんな気がした。

俺は…こんなにも恵まれてたんだな…

周りで騒ぐ仲間たちを見て心からそう思った。

その瞬間、俺の意識は徐々に薄くなり、白い世界の中へと消えていった…。

73話

なんだか不思議な夢を見た気がする。

どんな夢だったかは思い出せないけど、なんだかかつても幸せな夢だった気がする。

ぼんやりした頭でその余韻に浸っていると、何故だかいつもと枕の感触が違うことに気づく。

(あれ?何かいつもと違う?う?それになんだかい匂いが…。)

覚醒しきつていない頭をもぞもぞと動かしていると、不意に頭上から声がかかる。

「お目覚めですか、マスター。」

あれ?なんでソラの声が?

もしかして朝になつたから起こしに来てくれたとか?

いや、にしてはえらい近くから聞こえたような…

「マスター、朝ですよ。おはようございます。」

再びソラの声が聞こえる。

「んく…、おはよう…。」

声の主を探しゴソゴソと顔の向きを変える。すると

(…あれ?これってソラの来ていたメイド服の色?それにボタン……!!!)
!!!

一気に脳が覚醒し、ガバッと跳ね起きる。

そこには昨夜と変わらぬ姿で座っているソラの姿が。

「あ……え……お……?」

もしかしてこの子は一晩中膝枕してくれてたのか!?

「おはようございます、マスター。」

姿勢を正して挨拶をしてくるソラ。

「あ、ああ、おはよう……って!もしかして一晩中膝枕してくれてたのか!?ゴメン!!重かっただろ?」

慌てて謝る。しかし

「いえいえ、全く。むしろ寝顔をずっと堪能……ゴホン!それよりマスター、今日はよく眠れましたか?」

「え?あ、う、うん。ありがとう……。」

何か聞こえた気がしたが……

「良かったです。では私は朝食の準備をいたしますので失礼しますね。」

そう言つて部屋を出て行くソラ。

残された俺はしばらく呆然としていたが、ハッと我に返るととりあえず服を着替えて

ソラの後を追うのであった。

「いただきます。」

二人そろって朝食をとる。

今日は昨日みたいに「あーん」は無いようだ。

食事が終わって、俺は今後の事について考える。

色々あったが、負けたシヨックはかなり落ち着いたと思う。

これも全部ソラのおかげかな。

さて、気持ちは落ち着いたとはいえ、これからどうしよう。

今のままでリベンジしたところで、結果はおそらく散々なものになりそうな気がする。

だつて勝てるビジョンが見えないんだもん。

いつもならここでDPを貯めてデッキやスキルの強化をしたりするんだが、現状それはほほできない。

何故なら、デュエルエリアのシステム上、どうやら俺にとって新しいカードは手に入らないらしいからだ。

としているものを発見した。

「そうだ、そうだよ！40階のボスだよ！あのカードの確認してなかったんだ!!」

俺が40階のボスを倒した時、階層突破ボーナスとしてもらったカードは3枚。

1枚はレベル7のカード。もう1枚は『メイド』カード。さらにもう1枚、魔法カードを手に入れていた。

この時俺の頭の中はメイドさんのことで一杯で、カードの詳細は確認したが、それがレベルアップやランクアップに使えるかの確認はするのを忘れていた。

何という落とし穴！

俺はソラに礼を言おうと、早速拠点に移動しパソコンでカードの確認を始めた。

ふむ……。!!こ、これは!!?

確認すると驚きの事が判明した。

『40階突破により制限解除 特殊レベルアップ・特殊ランクアップ解放』

説明によると、普通のレベルアップやランクアップとは違う成長ができるとの事。

それ以上の事は書かれていなかったもので、自分で試してみるほかはないのだが、その機会はすぐに訪れた。

「海王龍と、40階で手に入れた竜の目覚めのカード、さらに海竜の残影で…レベル4からレベル6にアップ!!」

他にも40階で手に入れたレベル7のカードと水の残影、岩石の守護兵がレベルアップしたメタルロックガーディアンで、新たなレベル7のカードができる。

これは…試してみるか??

とりあえず、デッキに影響の少ない『竜の目覚め』・『海竜の残影』、それと『海龍王』のカードでレベルアップしてみる事にした。

機械にカードを入れて、ポチっとな。

【警告 このレベルアップは特殊レベルアップです。よろしいですか?】

ん?警告?いきなり物騒な言葉が出てきたが…、何かデメリットでもあるのだろうか?

うーん…、まあ考えても仕方ない。海王龍以外は現デッキではそう使わないカードだし。オッケーっと。

【特殊レベルアップを行います。】

その瞬間、機械は今までにないくらいの光を放つ。

おいしい、何か煙も出てるけど大丈夫か?!

そして光と煙が収まった頃、機械からカシヨンつと、1枚のカードが飛び出してきた。

セイリユウ 星6 水 海竜族／効果

A2500 D2100

1ターンに1度相手の魔法・罠カードの発動を無効化し破壊する。

つ…つよ!!

てかセイリユウ…か。スザクと一緒にの四聖獣の一体だ。

つてことは…?!

次いで『鉄壁の城壁(星7)』・『水の残影』・『メタルロックガーディアン』でレベルアップさせる。

先程と同じように強い光と煙と共に現れたカードは

ゲンブ 星7 地 岩石族／効果

A2000 D3000

このカードは表側守備表示のまままで攻撃を行うことができる。その際、守備力を攻撃力として扱いダメージ計算する。

来た！ゲンブ！

ってか守備力3000！実質攻撃力3000と同じじゃん！！

強い！強すぎるぜ！！

と、ここまですれば残るはビヤッコか。

レベルアップできるカード…あるのか？

74話

セイリユウとゲンブを手に入れた後、俺は今、DP稼ぎに来ている。

何故かって？それは、デツキ強化のもう一つの方法を見つけ出したからだ。

正確には『方法を見つけ出した』ではなく、『可能性を見つけ出した』だけ。

先程、40階突破ボーナスのカードの確認を忘れていた事に気づいたわけだが、実はもう一つ忘れていたことがあった。

それがこれ。

特殊ボス再戦状 1000000DP

一度倒したことのある特殊ボスと再度戦う事が出来る。

いつか見つけたこのアイテム。

もし特殊ボスもドロップカードが他のモンスターと同じように3枚あるのなら、それらが強い効果のものである可能性は高いし、さらにはレベルアップ・ランクアップ素材に使用できるカードとなる可能性もある。

ってなわけでもたまたま31階でDP稼ぎをしようと思ったんだが、その前に色々見落としがないか41〜44階のシヨップに行ってみたんだ。

すると、ガイドさんから思いもよらない話を聞くことができた。

実は、1度クリアした階層（今の俺の場合41〜44階）ではいつでもNPCとデュエルができて、その勝利回数等によっていろいろボーナスがあるとの事。

一応1度クリアした階にもう一度入るとガイドさんからの説明があるそうなんだけど、俺の場合どんどん先に進んじやったから説明できなかつたんだって。

もしNPC相手に無双…まではいなくても、ある程度の勝率で勝ち越せるなら、多分31階よりも効率よくDPを貯めることができるよ、って教えてくれた。

試しに計算してみると、先ず31階でDP稼ぎをした場合、約1分半で80DP。3回戦闘を行って、4分半で240DPだ。

このデュエルエリアで手に入るBPは、41階では1回勝つごとに100ポイント、42階では150BP、43階では200BP、44階では250BPとなっているから、44階で4分半以内に1勝できれば、そちらの方が効率よく稼げるということになる。

さらに、累計勝利数が一定回数になればボーナスにより入手BPが1.5倍、2倍…と上がっていく、最終的には3倍ぐらいまでになるそうなので、勝ちを重ねれば1回で

入手できるポイントがどんどん多くなっていくって訳だ。

というわけで、今回の稼ぎは44階を使用することに決定した。

といつても、今までのように決まった行動しかないモンスターが相手ではなく、本物ではないとはいえ対人戦になる。

思いもよらない戦法でこちらが負ける可能性だってあるし、時間だつて掛かるかもしれない。

それでも、これからのことを考えると対人戦の経験は無駄にならないだろうし、まあぶつちやけ魔物相手のDP稼ぎだと、完全に作業となつてしまつてそのうち飽きてくるから。

ま、一度完膚なきまでにやられたわけだし、もう2度と負けない！ぐらいの意気込みで頑張りましょう。

そして45階のあいつにぎゃふんと言わせるんだ！

対人戦の鬼に俺はなる！

デュエルエリアでBP稼ぎを始めて数日。

最初の内は5分以内に勝てないこともあり、効率としては31階に劣る感じだったが、しばらく続けていると、累計勝利ボーナスで入手BPの倍率が上がったたり、連勝ボーナスでそこそこの額のBPが一括でもらえたりして、1日の稼ぎが31階での稼ぎを上回るようになった。

そしてさらに約半月

かなり時間はかかったが、ようやく100000DP貯めることができた。

ここまで相当な時間を費やしてきたが、45階で中ボスにやられてから元通りの精神状態に戻り、再びこうやってDP稼ぎに精を出すことができたのはやはりソラの力が大きい。

ま、あれから色々あったんだけど…、それはまた追々話そうか。
何にせよ、これでようやく特殊ボスと再戦することができる。

早速アイテムを交換して、以前やつと戦った場所へと向かった。

青く澄み渡る空の下、風が草木を揺らす。

そこに待つのは1体のモンスター。

その瞳に映るのは、こちらへ向かい近づいてくる1人の人間。

彼の者を見て、その獣は何を思うのか。

今ここに、草原の王者が再臨した。

転移機能を使用して、前にレオと戦った16階へ。

降りた瞬間分かったよ。

あいつが、いるってことが。

前に戦ったやつと同じ個体…ではなさそうだが、記憶を引き継いだ別個体って感じか？

こちらを見る目が異様に険しい気がするが。

ま、なんにせよ、まずはドロップカードの確認だ。

これでもし他のドロップカードがなかったとしたら、時間をかけてDPを貯めた意味がないからな。

ある程度近づくと奴の頭上にドロップリストが現れた。

数は…2枚!!

1枚は当然レオのカードだが、もう1枚は…黒塗り？

ドロップ条件を見てみると

【圧倒的な力の差を見せ勝利】

なんと言うか、抽象的な表現だ。

圧倒的な勝利というのがどれほどのものなのか…。

確かに今のデッキなら、攻撃力1900のレベル4カード1枚だけで勝ててしまう

が、それではダメなんだろう。

力の差…、高い攻撃力とかか？

例えば奴の倍以上の攻撃力で倒すとか。

うーん、やっぱり特殊ボスはすべての面で特殊なのか…。

とりあえずやるだけやってみよう。

お互いに射程距離に入り、俺はディスクを構える。

「久しぶりなところ悪いが、あれから俺はかなりパワーアップしたんだ。お望み通り圧倒的な力の差ってやつを見せてやるよ！行くぞ、デュエル!!!」

俺の先行。カードを引きモンスターを場に出す。

「モンスターをセット、ターンエンド。」

相手のターン、奴は疑うこともなく俺のセットモンスターに攻撃を仕掛ける。

「ふっ、俺のモンスターは世界樹！守備力は2000だ！」

奴の攻撃力は1800。これが対人戦ならばあいてが200ダメージを受けるところだが、対魔物戦では特にダメージは入らない。ただ忌々し気に奴がこちらを睨むだけだ。

「こいつはあの時の雑草魂がレベルアップしたカードだ。懐かしいなあ、あの時はお前

の攻撃力に耐えられなかったが、今ではその攻撃は通らないぜ！」

もうかなり前の事のように思えるが、あの時のことを思い出しながら喋る。

「さあ。俺のターンだ！ドロー!!」

さらに俺はモンスターを召喚。

「来い！風の支配者フウカ!!」

ウインドマスター
風の支配者フウカ 星4 風 魔法使い族／効果

A1800 D1800

フウカがレベルアップしたカード。

こいつもあの時の戦闘で使用したカードだ。

俺がターンを終了したことで相手のターンになるが、奴は何もできることがなく再び俺のターンに。

さあ、終わりにしようか！

「俺は手札から汎用ロボの効果を発動。フウカに装備！そして、魔喰人狼を召喚!!」

フウカ A1800↓2300

魔喰人狼 星4 風 獣戦士族／効果

A1800 D1500

アブソープワーウルフがレベルアップしたカード。

元は、場のカードの『元々の攻撃力分』のみパワーアップする効果だったが、今では『現在の攻撃力分』アップする効果になった。

「魔喰人狼の効果発動！ロボを装備したフウカをリリース。これにより、人狼の攻撃力は2300アップする！」

魔喰人狼 A1800↓4100

「さて、獣と獣人の差はあれども、これだけのパワー差を前に何を思う、獣王。」

相手は人狼の威圧をもろに受け、少しづつ後ずさりをしている。

「これが、俺たちの歩んできた、俺とカードたちとの絆と、努力の成果だ！魔喰人狼で攻撃！」

グオオオオオオオオ……

自身の攻撃力の倍以上もある攻撃を受け、成すすべもなく倒されるレオ。……昔あれだけ苦戦した相手にここまで圧倒できるようになったとは……。感慨深いものを感じる。

さて、では結果がどうだったのか確かめよう。

レオが消えた場所に浮かぶ1枚のカードを手に取り確認する。

本能覚醒 魔法

獣族・獣戦士族のレベルを1上げる

ほぼ間違いないだろうと予想はしていたが、実際に手にしてホッとす。無事、俺は特殊ボスの条件付きドロップカードを入手することができた。

75話

拠点に帰り、早速パソコンで確認。

特殊レベルアップや特殊ランクアップの場合、それが可能な時にしか組み合わせが出てこないらしく、1枚でも素材カードが足りないと確認することもできないようだ。

祈るようにパソコンを操作し、そして

「……………あ、あつた!!!」

先程手に入れた『本能覚醒』のカードを使用する、特殊レベルアップの画面が表われた。

『本能覚醒』 + 『魔喰人狼』 + 『獣の残影』 || ???

必要カードを確認し、迷わずレベルアップのボタンを押す。

ガシャン、ピカー
!!!!

大量の光と煙が部屋を満たし、それが晴れた時1枚のカードが現れた。

ビヤッコ 星5 風 獣族／効果

A2100 D1900

このカードは1度のバトルフェイズで2度攻撃することができる。

キターーーーーー!!!!

これで四聖獣が揃った!

4枚のカードを取り出して並べてみる。

ふ、ふつくしい…!!

聖獣だけあってどれもなんだか神々しきを感じる。

これでかなりデッキの強化はできたはず。

DP稼ぎで結構な時間を費やしたから、そろそろ奴にリベンジと行きたいところだが

…

『ふん、雑魚が!』

奴の言葉が頭をよぎる。

いや、俺はあれから強くなったんだ!

ぶんぶんと頭を振って奴の言葉を消そうとするも、1度思い出してしまうと頭の隅にへばりついて離れない。

そこへ家の扉がギイッと開き、ソラがやってきた。

「おかえりなさい、マスター。…どうされたんですか?」

俺の様子を見て不思議そうな顔で聞いてくる。

「いや、実は…」

特殊ボスの条件付きドロップカードを手に入れたこと、それでビヤツコが手に入り四聖獣が揃ったこと、それでも奴の事を思い出すと本当に勝てるのかどうか不安なこと、全てソラに話した。

するとソラは真剣な表情で俺の顔を見つめながら言った。

「まずはカード入手おめでとうございます。マスターのおっしゃる通り、その4枚のカードがそろったことでマスターのデッキはかなりパワーアップしたかと思えます。ですが…」

そこで1度言葉を切る。

言っているのか迷っている様子だったが、意を決して彼女は続けた。

「おそらく、今のままでは勝てないと思います。もちろん勝率が0というわけではないですが、良くて3割…でしょうか…」

そう…か。

正直俺も、彼女の意見と同じだった。

確かに四聖獣の能力や効果は非常に強い。うまく立ち回れば勝てる見込みはある。

しかし前回奴が使用したカードや、まだ使っていないであろう他の強カードを考えると、どうしても不安は拭えない。

…こりや思った以上にトラウマになってるな…。

どうしたもんかと悩む俺に、道を示してくれたのはやはりソラだった。

「…マスター、もう一つだけ、マスターのデッキを強化する方法があります。」

「だけど、可能な限りカードのレベルやランクは上げたし、特殊ボスのドロップカードも入手した。後は30階代の特殊ボスがまだいるけど、流石にまた100万DP貯めるのは結構きついんだが…。」

できる限りのことはしてきたはずだ。これ以上カードの強化と言っても…。

「…これは、マスターの目で直接見ていただいて、そして決めていただく必要がありますま

す。カードのランクアップのページを見てください。」

言われるがままにランクアップのページを開く。

しかし今持っているカードでは、上げられてもSRまでしか上げれないと思うんだが………ん？

さして期待はしていなかったが、ソラが言うのなら何かしら理由があるのだろうと思
いページを開くと、そこに表示されたカードの内、スザク、セイリユウ、ゲンブ、ピヤツ
コ、そして歴戦の聖戦士の5枚のカードが光っていた。

つまり、ランクアップ可能な状態だ。

「え……確か前見たときは出てなかったはずなのに……。」

俺が呟くと、横からソラが答えてくれる。

「おそらく、その4枚のカードをすべて揃えることが条件だったのでしょう。」
なるほど。

だとすれば今まで気が付かなかったことにも納得がいく。

しかし、そういうことならば、これは特殊ランクアップということになる。

特殊ランクアップの場合、素材カードが全て揃っていないと表示されないはずだが……
何が必要素材になるんだ？

そう思いながら試しにスザクのカードを選択する。

そして現れた表示を見て、俺はその場で固まってしまった。

『スザク』 + 『命の灯火』鬼火 + 『聖天使エリー』献身の天使エリー + 『黄泉国の大王カエル』黄泉ガエル 〓 ???

『セイリユウ』 + 『大海を統べるもの』ビックアイシヤーク + 『ハイグロウドラゴン』ハイパワードラゴン + 『蠅の王』魔蠅 〓 ???

『ゲンブ』 + 『世界樹』 + 『巨大角竜』トリプルホーンザウルス + 『スカルレギオン』スケルトンズ 〓 ???

『ビヤッコ』 + 『風の支配者フウカ』 + 『ダンジョン雷ネズミ』雷ネズミ + 『猫怪盗ニヤパン』泥棒猫キャットアイ 〓 ???

『歴戦の戦士』 + 『汎用ロボBーRT04』 + 『闇影』影武者トカゲ + 『質量を持った亡霊』生を求めし亡霊 〓 ???

※『』の後ろの名前はレベル3時のもの（レベル4未登場のカードのみ）

必要なカードは全て、これまでの苦楽を共にし激戦を潜り抜けてきた、初期デツキのカードたちだった。

う、うそ…だろ？

ランクアップの素材になるということは、そのカードは消えてしまうわけだ。

いくらカードが強くなるからと言って、今まで共に苦難を乗り越えて共に戦ってきたカードたちを素材にするなんて…

どうしていいかわからず、頭が真っ白になってしまった俺の後ろから、普段より優しい声色のソラの声が聞こえた。

「マスター。私たちはマスターがどれだけカードを大事に扱ってきたかを見してきました。弱いカードだからと捨ててしまうことなく、共に成長をここまでするまでやってきました。だからこそ、カードたちはあなたの役に立ちたいと思ってるのです。」

俺は振り向いて彼女の顔を見る。

「それに、たとえ素材になったとしてもその思いはなくなりません。新しいカードに引き継がれ、そしてどんどん大きくなっていきます。マスターはただ素材として使用していただけかもしれませんが、どんなカードもみんな、少なからずマスターの役に立ちたいという気持ちを持っていました。そして素材となり1つのカードとなる事で、素材と

なったカードすべての思いは一つにまとまるのです。」

彼女は手を伸ばし、俺の頬に優しくそえながら続ける。

「ですからマスター、カードたちは、ただ消えるわけではないんです。一つになって、いつでもマスターの力になる為見守っています。だから、カードたちの思いを、私たちの思いを受け取ってください…。」

そう言つて、彼女はそのまま俺の顔を自身の胸へと誘い、ぎゅつと抱きしめてくれた。

そうか…そうだったのか…。

少し前に彼女から聞いた話。

プレイヤーに与えられた『メイド』カード。

これはプレイヤーたちの生活のサポートをする事が主目的ではあるが、実はもう一つ、プレイヤーにとつて重要な意味合いを持つていた。

このダンジョン、最初の頃からカードとの絆が大事という雰囲気を出していた。

実際後半になればなるほどその大事さは身に染みてわかるようになるのだが、カードとの信頼関係によって、例えば初期手札や、ピンチの時のドローカードに差が出るのだ。

俺の場合、カードたちを信じて戦い抜いてきたから、ピンチの時などには必ずと言つ

ていいほどその時に必要なカードが来てくれる。

：カードを大切にしていたって言われても、自分じゃあんまり分かんないんだけどね。ただ逆に、カードを雑に扱ったり、初期デッキのカードをすぐにDPに換えてしまったようなプレイヤーは、基本手札も悪く、ピンチで逆転もほぼ不可能らしい。

初期デッキのカードたちは基本的にそのプレイヤーと相性がいいカードが選ばれており、それをすぐに捨てるようなプレイヤーは、カードたちから見たらかなり印象が悪いって事だ。

で、何が言いたいかというと、今でこそ実体化し、超絶可愛いメイドさんとなっている彼女だが、その元は『カード』である。

つまり、カードの扱いが悪いプレイヤーに対してはメイドさんも冷たく対応するし、扱いが良いプレイヤーにはメイドさんの態度も軟化するということだ。

これは逆も同じ事。

いくらそれまでカードたちを大事に扱ってきたとしても、メイドさんに対して彼女が嫌がることをしてしまえば、デッキのカードたちはプレイヤーに答えてくれなくなる。

さらに言えば、この『メイド』カード、デッキのカードたちからしたら、お姉さんのな。ポジションらしく、彼女に何かあった時には、すべてのカードからとても嫌われると

いうことになる。

逆に、カードたちからの所謂好感度が非常に高い場合、メイドさんの好感度もそれにつられて高くなる。

メイドさんとカードたちの思いは繋がっているのだ。

俺が45階の中ボスで負けた日、彼女が優しくしてくれたのは、その時すでに好感度がかかなり高かったから。

でもカードから実体化した時はそうでもなかったけどなんで？と聞くと、一応メイドたちのルールがあるらしく、いきなりデレるのは禁止になっているとの事。

あの時はカードたちが俺を思う気持ちが溢れて、彼女もそれにかなり引つ張られて、ルールを破つてもあのような行動をとったんだそう。

それからは開き直ったかのように距離が近くなつたけど……ま、今はいいや。

そんな彼女が語ってくれたカードの気持ち。

それは嘘偽りなく、デツキのカードたちの本心だろう。

俺は彼女の胸の中で目を瞑り、そして決意を固める。

それだけ俺のことを慕ってくれるカードたち。

その気持ちに俺は答えないといけない。

それが、カードたちへの恩返しになると信じて。

俺は…歴戦の聖戦士と四聖獣たちを、ランクアップさせることを決めた。

………ただ、もうちょっとだけ、この柔らかさを堪能してからね。

7 6 話

その後、名残惜しくもソラから離れた（ソラも若干顔が赤くなっていた）俺は、パソコンに向き直り、そつとランクアップさせるためのボタンに手を伸ばした。

目を瞑れば、カード1枚1枚との思い出が浮かんでくる。

その効果で常に俺を守る盾となってくれた『世界樹』

その名の通り汎用性の高い能力となり、いくつもの可能性を作ってくれた『汎用ロボ
B—R T O 4』

地味ながら痒い所に手が届く活躍をしてくれた『風の支配者フウカ』

見た目ピ〇チユウから、最終的にア〇ーラ〇イチユウみたいになった『ダンジョン雷
ネズミ』

その見た目から癒し要因でもあった『聖天使エリー』

数少ないドロ―要員として活躍してくれた『猫怪盗ニヤパン』

トークンの可能性を教えてくださいました『スカルレギオン』

勝利の為の影の立役者『闇影』

俺のデツキ唯一のデバフ効果モンスター『質量を持った亡霊』

最終的には墓地の主と化していた『命の灯火』

初めて召喚した時にはその大きさに驚いた『大海を統べるもの』

あの赤ちゃん竜がよくここまで成長した『ハイグロウドラゴン』

能力は強かったけど、見た目はちよつとアレだった『黄泉国の大王カエル』

雑魚戦ではしつかり活躍してくれてたよ『蠅の王』

角が4つにならなかったね『巨大角竜』

そういえば獣戦士族から獣族に変わった『ビヤッコ』

まるで動く要塞となった『ゲンブ』

使いようによつては切り札ともなる効果を得た『セイリユウ』

そして：

寡黙だが頼れるみんなのお兄さん『歴戦の聖戦士』

他にどれだけ強いカードが出てきたとしても、おそろしくこいつが一番の相棒『スザク』

過去の思い出は胸に、俺はこいつらと共に未来へ行く!!

目を開け、俺はボタンを押す。

【指定のカードをセットしてください】

…そうか、まだ手順が必要だったな。

自分一人で盛り上がって、まるでボタンを押したらランクアップ開始するような雰囲気を出してしまい少し恥ずかしい。

カードをセットしてボタンポチポチ。

えーと、はいはい、イエスイエス。…なんかしまらないなあ…

眩しいほどの光と、部屋中を満たすほどの煙が晴れ、カードたちは新たな姿となり現れた。

聖獣・朱雀 星4 炎 鳥獣族／効果

A1800 D1900

聖獣・白虎 星5 風 獣族／効果

A2200 D2000

聖獣・青龍 星6 水 海竜族／効果

A 2 6 0 0 D 2 2 0 0

聖獣・玄武 星7 地 岩石族／効果

A 2 1 0 0 D 3 1 0 0

フュージョンナイト
融合の騎士 星4 光 戦士族／効果

A 1 9 0 0 D 1 4 0 0

5枚の新たなカードを手にした瞬間、突然パソコンの画面に文字が映し出された。

【特殊条件クリア 過去のログを検索…終了 プレイヤーに適したカードの作成…完了
排出】

【おめでとうございませす。特殊な条件をクリアしたことで、新たなカードを入手できませす。】

ガシャコンつと音を立て、機械から4枚のカードが出てくる。

…こ、これは…!!

「ん？お前は…。」

俺の目の前には憎たらしいほど自信満々で、人を見下したような目をした一人の青年。

忘れたくても忘れられない。

こいつに負けてから俺は、その声を、顔を忘れることはなかった。

「ふん…またお前か。お前のような雑魚が何度来ようとも、俺に勝つことはできん。」

どうやら前回の事は覚えていたようだ。

DP稼ぎをしているときに戦った奴等は記憶が残っていたり消えたりしていたが…、これは都合が良い。

これなら思う存分奴にリベンジができる！

「それはどうかな？デュエルに絶対はないんだぜ。」

「ふん。弱い犬ほどよく吠える…。そこまで言うなら、俺にそのお前の力を見せてみろ！」

言われずともそのつもりだ！

「デュエル!!」

先行は……こちら!

「俺はモンスターをセット。ターンエンド。」

「ふん。担架を切った割りには前と同じではないか。所詮お前はそこまで言うことだ
!俺のターン、ドロー!!」

何とでも言えればいい。俺は絶対に勝つ。

「行くぞ!カードを2枚セット、そしてモンスターを攻撃表示で召喚!」

ランプの精　マ・ジーン

A1800　D1000

「さらに、手札より古のルール発動!」

古のルール!来るか……!

「さあ、お前に再び絶望を見せてやろう。出でよ!シャイニングドラゴン!!!」

シャイニングドラゴン

A3000　D2500

奴のエースカード……!

「先ずはその守備モンスターを破壊する! シャイニングドラゴンで攻撃! シャイニング
ブラスター!!!」

ゴウツと音をたて、極大のプレスが俺のモンスターに迫り、そして破壊する。

「さらに、ランプの精マ・ジーンでダイレクトアタック!」

「くううう!!」

俺LP4000↓2200

「さあ、ここからどうする! このシャイニングドラゴン、倒せるものなら倒してみるがい
い! ターンエンドだ!」

確かに今の盤面、相手の場にはエースカードと高攻撃力のレベル4モンスターが1
体。さらに伏せカードも2枚。

半面俺の場は空っぽ。

普通に考えれば大ピンチどころの話ではないが、勝利のカギはすでに俺の手の中だ。

「お前がターンを終了した時、つまりエンドフェイズ時、俺は先ほど破壊された『聖獣・
朱雀』の効果を発動させる。」

そう、俺が最初にセットしたモンスターは朱雀。

「このカードが墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時、このカードを自分の場に特

殊召喚する。甦れ、朱雀！」

墓地から高々と空へ飛び上がり、再び俺の場に現れる朱雀。

「…ふん、雑魚を並べたところで所詮結果は同じだ。さあ、お前のターンだ！」

言われなくても…！

「俺のターン、ドロロー！」

さて、リベンジの開始だ!!

「俺は手札より融合フュージョンナイトの騎士を召喚。そして、融合フュージョンナイトの騎士の効果を発動！」

「…む？」

「場のこのカードと、聖獣カードを素材とする融合召喚を行う時、俺は融合の魔法カードを使用しなくても融合召喚を行うことができる！」

「なに!？」

「俺は融合の騎士と、手札の聖獣・青龍を融合！」

俺が宣言した瞬間、フィールドに暗雲が広がった。

雨が降り、雷が鳴り響くフィールドに（フィールドの演出だけでなく、自分たちは濡れてない）1人の戦士が現れる。

「水を支配し力をその身に宿し、東より来たりしは青き騎士。出でよ！聖騎士セイリユウ!!」

聖騎士セイリュウ 星7 水 戦士族／効果

A 3 0 0 0 D 2 5 0 0

カードのランクアップを行ったとき、特殊条件クリアとか何とかで新たに手に入れた4枚のカード。

その内3枚は、融合の騎士と、それぞれ青龍・白虎・玄武を素材とする融合モンスターカードだった。

又それと同時に、すでに手に入れていた朱雀を素材とする融合モンスターカードも変化し、他の3枚と同等の能力を得た。

「む…シャイニングドラゴンと同等のモンスターか…!」

能力だけ見ればそうだがな、こいつの真の強さはその効果にある!

「バトル! 聖騎士セイリュウでシャイニングドラゴンに攻撃!!」

手に持つ竜を模した大剣を担ぎ上げ、シャイニングドラゴンめがけて走り出すセイリュウ。

「甘い! リバースカードオープン、聖なるバリアミラーフォー스!! これでお前のモンス

ターは全滅だ！」

奴の罨カードが表を向き、聖なる輝きが奴を守る。

しかし、1度やられたカードを俺が注意してないと思ったか？

「聖騎士セイリユウの効果発動！このカードは融合素材となつた聖獣・青龍と同じ効果を持つている！1ターンに1度、相手の魔法・罨カードの発動を無効化し破壊する！！」

「な、なに!!？」

セイリユウの効果によつて、奴を守るバリアは破壊される。

いつまでもお前の思うように事が進むと思つたら大間違いだぜ!!

77話

「くつ、ならば…俺はさらにはバースカードをオープン！速攻魔法『エネミーコントローラーEX』！」

エネミーコントローラーEX 速攻魔法カード

自分の場のモンスターを1体リリースして発動可能。

相手の場の表側表示モンスター1体の装備カードとなり、そのモンスターのコントロールを得る。

このカードが破壊された時、このカードを装備したモンスターは元の持ち主の場に戻る。

くつ、また強力なカードを…

「俺は、お前のその融合モンスターをいただく！」

相手の場の『ランプの精マ・ジーン』がリリースされ、奴の頭上に大きなコントロールが現れる。

「左！右！上！下！A！B！A！さあ、俺のもとへ来るがいい!!」

その巨大コントロールから謎の電波が発せられ、セイリユウに向かって飛んでいく。

しかし…

「な!!なぜだ!!なぜコントロールできん!!」

その電波はセイリユウに当たる寸前で、膜のようなものに遮られ効果を発動することはできなかった。

「ふっ、教えてやろう。そのカードは俺を慕ってくれるたくさんのカードの思いで出来ている、俺と魂で繋がったカードだ。だから俺の聖獣カードたちは全て、相手にコントロールを奪われることはない!!」

「な、なにいい!!?!!」

融合の騎士と青龍、白虎、玄武、朱雀、そしてそれらを素材とする融合カード。これらは全て同じ効果を持っている。相手にコントロールを奪われぬという効果を!!

「これでお前は魔法も罫も使い切った。さあ受けてもらおう!ドラゴニックスラッシュ!!」

邪魔なものは何もなくなり、セイリユウの攻撃がシャイニングドラゴンに届く。

ドゴオオオオオン!!!

大きな音を立て双方のパワーがぶつかる。

「くっ、シャイニングドラゴン……。だが攻撃力は双方とも3000、相打ちとなる。なら次のターンに勝機はある……！」

「いや、お前に次のターンは来ないよ。」

攻撃の余波でフィールドは煙に覆われていたが、それが晴れたとき、場に残ったのは2体のモンスター。

「な!?!なぜそいつがここに……!!」

聖獣・青龍 A2600

そう、俺の場には朱雀と青龍2体のモンスター。

「……聖騎士セイリュウの効果を発動させた。このカードが戦闘で破壊され墓地へ送られた時、このカードの融合素材に使用した2枚のカードの内どちらか1体を場に特殊召喚できる。」

「なんだとっ?!」

ちなみに他の聖獣融合モンスターも同じ効果を持っている。

じゃあ、そろそろ終わりにしようか。

エネミーコントローラーのコストでマ・ジーンをリリースしたので、奴の場はがら空き状態。さらに手札も0。

対して俺は場に朱雀と青龍。

「これが、お前が雑魚だと侮った人間の力だ！朱雀、青龍、ダイレクトアタック!!!」

2体の聖獣が奴を襲う。

「ぐわああああああああ!!!」

中ボスLP4000↓0!!!」

片膝をついた体勢でこちらを睨む中ボス。

「ふん…、少しはやるようだな…。」

立ち上がり、背を向けながら喋る。

「だが勘違いするな。俺はまだ実力の半分も出してない。」

…負け惜しみかな？

「次に会った時、お前を地獄のどん底に叩き落してくれ。それまでせいぜい足掻くが
いい。」

はーはっはっはっは………。

笑い声を残して、奴は元の黒い霧へと少しづつその姿を変え、そして消えていった。

【おめでとうございます。45階クリアです。次の階へお進みください。】

アナウンスが流れる。

…そうか…、勝てた…か。

なんとなく実感がわかない。

だがそれが事実だということを、目の前の大扉が開くことで教えてくれる。

しばらくそのまましていると、デッキがぼんやりと光った気がした。

………うん、ありがとう、みんな…。

今回の勝利は俺だけの力じゃない。

もちろん今までもそうだが、今までの中で一番カードたちとの絆の力を感じたデュエ

ルだった。

目を瞑り、しばしカードと心を通わせる。

…うん、ここが終わりじゃないんだ。

目を開け、デッキのカードたちを見る。

これからもよろしく頼むぜ、みんな！

俺は勢いよくリングから飛び降り、そして、46階へと続く階段を下りて行った。

???

「そうか、彼が…。」

「……………」

「うんうん、まさかとは思ったけど、念のため調べておいて正解だったね。」

「……………」

「ん？特に何もしないよ？だってあれは彼の力だもん。」

「……………」

「ああ、そうだね。最初の頃ならまだしも、今の彼には干渉してないよ。」

「……………」

「うん、わかったわかった。じゃあまた連絡お願いね。一応こっちからも確認するけど
や。」

「……………」

「はいはい、じゃーねー。……………ふう。にしても、本当に面白いよね…。この調子ならも
しかするともしかするかもしれないね。……………ま、どういう結果になったとしても僕は僕
のやり方で行くんだけどね。」

……………。

「おつつめでとーごつぎいまーんーす!!!!!!」

「うおつ!!」

46階に降りた俺を出迎えてくれたのは、いつも以上にハイテンションなガイドさんだった。

「もー！みましたよ!!!すごいじゃないですかあ!!」

見た？何を…って、さっきのデュエルに決まつてるか。ってかここから見えるのかよ。

「あれだけボロクソに負けた相手を今度は逆にポツコボコにできて、ねえねえ、今どんな気持ち？ねえねえ？」

女性がクソとか言っつてはいけません。つてか絡み方がうつとおしいな…。

「ああ、はいはい、まあ、ちよつとスツとしましたけどね。」

「おおー、やつぱり！ですよね!!!私もあいつ嫌いなんですよ！なーんかいつつも人の事見下しちゃって、『俺は最強!』みたいな雰囲気出しちゃってさー。」

おお…、勢いがすごい。よほど嫌いなのか…。てかそんなこと喋っていいの？

「それがあんなに見下してた相手に見事にぼろ負けしちゃって、プププツ、あの悔しそう

な顔見ました?？」

今度は一人でニヤニヤと笑い出した。

正直あんまり関わりたくない。

「もうほんつとすつきりしたー。しばらくはあの顔ネタにできるわー……………ん?え?あ、いや、えーと、そのですね…」

ん?ガイドさんがなんだか慌て始めた。

「い、いえ、決してそのようなことは……………はあ!?!おしおき!?!なんでするか!私何もしてないじゃない…はいゴメンナサイ!嘘です!嘘ですからあ!!あれだけは、あれだけは勘弁してください!!!」

何か一人で騒ぎ出した。

そこへシヨップの親父さんがやってくる。

「ありや俺たちのボスと念話してるのさ。で、あまりにも喋りすぎたからお置き部屋行きてとこだろうな。」

おお怖…と言いながら自分の持ち場に戻っていくおやじさん。

振り返るとガイドさんはいまだにボス?とワーワーやり取りをしている。

……………1回帰るか…。

俺は虚空に向かって必死に土下座しているガイドさんを横目に、転移機能を使って拠点へと帰るのであった。

78話

拠点に帰った俺を出迎えてくれたのは、嬉しそうな顔をしたソラだった。

「おかえりなさい、マスター。そしておめでとうございます。」

にっこりと微笑むその顔は凄まじく可愛い。

思わず天を仰ぎ幸せを噛み締めていると、不思議そうな顔でソラが尋ねてくる。

「…？マスター、どうかしましたか？」

「え？あ、いや、その…、そ、ソラが可愛くて…幸せを噛み締めてたと言うかなんと言うか…。」

その瞬間彼女の頬に朱色がさす。

「…コホン。で、では今日はお祝いですね。腕によりをかけて作りますので、出来上がるまで待つてくださいいね。」

そう言つてソラはそそくさと家に入っていく。

…可愛い。

つと、俺もいつまでもぼーっとしてないで入ろうか。

今日はもうダンジョンに行かずにゆつくりすることに決めた俺は、ソラの料理に舌鼓を打ち、ゆつくりとお風呂に浸かり、日々の疲れを癒した。

そして次の日

俺は転移機能で45階へ。すると

「おはようございます。本日はどのような用件でしょうか？」

「お、おおう？」

何かキャラが変わったガイドさんがいた。

「どうか致しましたか？何かご要望が御座いましたら遠慮なく仰ってくださいね。」

物腰柔らかなお姉さん風な喋り方をしているけど…正直違和感…。

そこにシヨップの親父さんが手招きしてくる。

(おやじさん、あれ、どうしたんですか？)

(いや、昨日お前が帰った後にな、大分うちのボスに絞られたみたいでさ。今朝からあれだよ…。)

マジか。かなり怒られたんだろうな…。

ニコニコとこちらを見つめるガイドさんの表情を見るのが何となく辛くなり、誤魔化すように大声で親父さんに話しかける。

「あー！そういうえばこの階ではどんなカードと交換できるんですか!」

「お？お、おう！実はな、ボスから指令があつてカードのラインナップがガラツと変わったんだぜ！」

『ボスの指令』つて聞こえた瞬間ガイドさんが『ビクッ!』つてなつたのを見てしまったけど……いや、俺はなにも見ていない。

見ていないつたら見ていない。

俺は自分から蛇のいる藪には突つ込むつもりはない。

それよりも、ラインナップが変わつたか。

さて、どんなカードになつたかな？

「おう、種類は少なくなつたか、絶対にお前の役に立つものばかりのはずだぜ!!」
シヨップ内を覗いてみると、そこにあつたのは3枚のカード。

かなり種類は減つてるけど……!!?こ、これは!!?

「必要ポイントはちよつとばかり高くなるけど、多分あんたには必要なものだろ？」

ニカツと笑いながら聞いてくるおやじさん。

確かに、これは俺にとって必須……というよりは、俺の為だけにあるようなカードじゃ

ないか。

「そういやここからは今までよりもつとBPを稼げるようになるらしいぜ！詳しくは…あいつに聞いてくれ。」

顎をしゃくつてガイドさんの方を示すおやしさん。

するとそこへシユバツ！つと高速移動でやつてくるガイドさん。

「はい、ここからは私が説明させて頂きますわね。」

昨日クソとか言つてた人と同一人物とは思えない。

「簡単に言いますと、44階まではデュエルで入手できるBPの倍率は最大3倍でしたが、46階以降はその倍率の上限が上がり、最大5倍まであがります。さらに、一戦ごとの入手BP量も上がりますので、今まで以上に稼ぐことができます。なお、累計勝利数は全階層共通となりますが、各階にはそれぞれ倍率の上限が定められています。」

その後も説明は続いたが、まとめるとこんなかんじ。

①BP倍率について

41階では最大1.5倍

42階では最大2倍

43階では最大2.5倍

4 4 階では最大3倍

4 6 階以降は、それぞれ3・5倍、4倍、4・5倍、5倍となる。

ちなみに、4 1 階で勝ちまくって累計勝利数を増やしても、きちんと先の階である程度の勝利数を稼がなければ倍率は上がらない。

② 1 回のデュエル勝利による入手B P 量について

4 1 階〜4 4 階は、1 0 0 ・ 1 5 0 ・ 2 0 0 ・ 2 5 0

4 6 階〜4 9 階は、3 0 0 ・ 3 5 0 ・ 4 0 0 ・ 4 5 0

もちろん先の階に行くほど相手は強くなる。

つまりは、4 9 階で勝ち続けられる自信があるなら、そこで連戦するのが一番効率が良いわけだ。

これなら確かにうまくいけば今まで以上の効率で稼げるな。

そうすればあのカードをゲットする日も遠くない。

先ずは4 9 階に到達、そして4 4 階みたいに連戦だな。

大体の方向性を決めて、早速4 6 階に進むことにした。

さあ、次はどんな奴が出てくるかな？

扉を潜る俺の後ろ姿を見送るシヨップのおやじさんのさらに後ろで、3枚のカードが淡く輝いていた。

まるで、早く己の主の手に取られることを願うように…。

扉の先はここまでの階と同じく中央にリングがある。

おそらく仕様も同じだろうな。

リングに上ると黒い靄が現れて青年の姿になる。

「よし、俺と勝負だ！」

お互いに構えてデュエル開始。

先攻は相手。

「俺のターン！俺はモンスターをセット。ターンエンドだ。」

ふむ、初手から動きは無いか。

「俺のターン、ドロロー。俺は聖獣・スザクを召喚、アタックだ！」

奴の伏せたモンスターに攻撃を仕掛ける。

現れたのは…

「ふふふ…俺のモンスターは代打バッター！」

代打バッター 星4 地 昆虫族／効果

A1000 D1200

自分フィールド上に存在するこのカードが墓地に送られた時、自分の手札から昆虫族モンスター1体を特殊召喚することができる。

何!?!代打バッター!!?

「代打バッターが墓地へ送られたことで、俺はこのモンスターを召喚する!来い、インセクト女王!!」

インセクト女王^{クイーン} 星7 地 昆虫族/効果

A2200 D2400

自分のフィールド上モンスター1体を生贄に捧げないと攻撃宣言できない。全フィールド上の昆虫族モンスター1体につき、このカードの攻撃力は200アップする。このカードが相手モンスターを破壊したターンの終了時、自分のフィールド上に「インセクトモンスタートークン」(昆虫族・地・星1・攻/守100)を攻撃表示で特殊召喚する。

な、なんだとー!!!?

「くつくつくつ…、どうだ、この恐ろしいコンボに驚いて声も出ないか！」
嬉しそうな顔で煽ってくる対戦相手。

いや、確かにいいコンボだと思うが、そんなことより…、

「なんで昆虫デツキ…？」

思わず口に出してしまった。

というのも、ここまで戦ってきた相手は基本今までの大会参加者のデータを元にされているんだが、割と原作のカードを使う人が多かったんだ。

その方がイメージもしやすいしね。

だからマジシャンデツキとか、ドラゴンデツキとか結構見たんだけど、なんでここで昆虫デツキを選んだんだろう？と、とても気になりつついっポロリと言ってしまった。

すると耳ざとくそれを聞いていた相手が顔を真っ赤にして喚きだした。

「は？なんだよ！昆虫デツキ馬鹿にすんなよ！！別に俺だって好き好んで使ってるわけじゃないっての！たまたま最初の相性がいいカードが昆虫族だっただけで…、気が付いたらこんな風になってたんだよ！！」

お、おおう…。どうやら相手にとつても触れられたくない部分だったようだ。

若干同情しないでもないけど、勝負は勝負。

盤面はこちらが不利だが、負けるつもりはない。

別に昆虫テッキを馬鹿にしてるわけでも、弱いと思ってるわけでもないしな。
油断せずに全力で行くぜ！

79話

「ターンエンド。」

朱雀で攻撃を行ったので、俺は他にできることもなくターンを終了する。

そして相手のターン。

「ふん！昆虫アツキを馬鹿にしたことを後悔させてやる！俺のターン!!」

いや、別に馬鹿にはしてないんだけど…。ただ純粋な疑問としてついつい口から言葉が漏れただけなんだが…。

「俺は巨大蟻を召喚。そして、インセクト女王で聖獣・朱雀に攻撃!!」

巨大蟻 星3 地 昆虫族／効果

A1200 D1500

自分のメインフェイズ時、墓地のこのカードを自分の場に特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚されたこのカードが破壊された時、ゲームから除外する。

「その際、インセクト女王のコストを支払う。巨大蟻をリリース。」

巨大蜘蛛のような見た目をした昆虫の王女がこちらへ迫る。

ぐっ、見た目がグロ：

俺LP4000↓3400

俺の場の朱雀（A1800）が破壊される。相手の攻撃力は自身の効果により2400に上がっていたので俺が受けるダメージは600。

「俺はターンエンド。その際インセクト女王の効果でインセクトモンスタートークンが場に出現する。」

インセクトモンスタートークン 星1 地 昆虫族

A1000 D1000

攻撃表示

「なら俺もモンスターの効果を発動させてもらう。聖獣・朱雀は破壊されたターンのエンドフェイズ時に自分の場に特殊召喚できる。」

「なに!？」

不死鳥のごとく舞い戻る朱雀。

「さあ、俺のターンだ。ドロー！」

さて、一気に行くぜ！

「俺は融合の騎士を召喚、そして効果発動。このカードと聖獣モンスターを素材とする融合を行う場合、融合のカードが無くても融合召喚を行うことができる！」

「なんだと!?!」

「俺は場の融合の騎士と、手札の聖獣・白虎を融合!!」

俺が宣言した瞬間、場は一瞬静寂に包まれ、そして唐突に風が吹き荒れ始めた。

「風を支配し力をその身に宿し、西より来たりしは白き騎士。出でよ! 聖騎士ビヤッコ!!」

聖騎士ビヤッコ 星6 風 戦士族/効果

A 2500 D 2000

その荒れた風の中から1人の男が現れる。

その両の手には、獣の牙を模したような1対の白い短刀を持っている。

「お前の力を見せてやれ! 聖騎士ビヤッコでインセクトモンスタークンに攻撃!」

「ぐわあああ!」

相手LP 4000 ↓ 1600

これで相手の場はインセクト女王1体。こちらには聖騎士ビヤッコと聖獣・朱雀の2

体。

「……くつくつく……、ミスったなあ！朱雀でトークンを攻撃してりやそのビヤッコで女王を倒せたのによお!!はーっはっはっ！これでこちらに女王は残った。次のターン、お前は負けるぜ？」

どうやら俺がビヤッコでトークンを倒したことがプレミだと思っっているようだ。

勝ち誇った笑い方をしているが、残念ながらお前に次のターンは来ない。

「……聖騎士ビヤッコの効果。このカードは1度のバトルフェイズで2度攻撃ができる。」

「……………」

先程とは一転して間抜け面をさらす相手。

「……残念だったな。あれだけ高笑いしたところ悪いが、俺の勝ちだ。」

状況を理解したのか、徐々に青い顔になっていく相手

「あ、あわ、あわわ……」

「聖騎士ビヤッコでインセクト女王を攻撃。ツインファンク!!」

獣を思わせる動きで高速移動しながら、両手の短剣で昆虫女王を滅多切りにする

ビヤッコ。

相手LP1600↓1500

「あわ、あわわわ……」

『あわわ』とか現実で言うやつ初めて見たわ。

「とどめだ。聖獣・朱雀でダイレクトアタック!!」

「のわああー!!!」

相手LP1500↓0

戦闘終了後、「やっぱり昆虫デッキじゃあ無理なのか…」などと呟きながら消えていく相手を見ながら思う。

だから別に昆虫デッキが弱いわけじゃないんだってば。

それから俺は戦闘を重ね、46階、47階、48階と攻略していった。

少しずつ対戦相手も、原作で出た来たような強カード（強欲の壺とか）を使用するこ
とが増えてきて、簡単には勝てなくなってきたが、カードたちに助けられながらなんと
か進むことができた。

そして、49階。

いつも通りリングに上がった瞬間、なんだかピリツとした感触があった気がした。

一瞬「ん？」と思ったが、すぐに黒い靄が出てきて対戦相手の姿となったので、一瞬感じた違和感はずぐに思考の隅へと追いやられた。

「……。」

無言で構える相手。

だが相手から感じるプレッシャーは中々の物。

…こいつ…、強いな…。

何となく感じる相手の強さ。

これは簡単に勝たせてもらえそうにないな。

デイスクを構え宣言。

「デュエル。」

先攻は…相手か。

さあ、どんなカードを使ってくる？

「…俺は『干支・子』を召喚。」

干支・子^{ネズミ} 星1 地 獣族／効果

A100 D100

レベル1モンスター…？

「このカードが召喚された時、俺はデツキから干支モンスターカードを1枚手札に加えることができる。」

干支モンスター…、オリジナルカードか。

オリカ使いは強い。なぜなら原作でも出てくるカードは効果や能力もある程度分かるけど、オリカはこちらの予想の斜め上に行く効果を持っていることが多い。…俺のカードも含めて、だが。

「俺はデツキから『干支・巳^ひ』を手札に加える。そしてそのまま効果を発動。このカードは俺の場に他の干支モンスターがいるとき手札から特殊召喚できる。」

干支・巳^ひ 星2 地 爬虫類族／効果

A500 D600

守備表示

「そして手札より魔法カード『ネズミの策略』発動。自分の場に干支・子がいるとき使用可能。自分の手札、デツキから干支・丑を特殊召喚し、そのカードに場の干支・子を装

備カード扱いとして装備する。」

干支・丑^{うし} 星4 地 獣族／効果

A800 D1800

守備表示

「干支・子が装備カードとなることで、干支・丑の攻撃力、防御力は100ずつアップし、干支・丑が破壊された時、干支・子を場に特殊召喚できる。」

干支・丑 A800↓900 D1800↓1900

「カードを1枚伏せ、ターンエンド。」

1ターン目で場に2体のモンスターと伏せカードが1枚。

さらに相手の手札はまだ1枚。

モンスターの能力値はそこまで高すぎるわけではないが、この迷いのないプレイング。

今まで戦ってきた奴らとは違う。

デッキのカードを全て熟知し、数々のデュエルをこなしてきたからこそその余裕だろう

か。

ゴクリ…

俺の頬に一筋の汗が流れる。

だが…、だからと言ってこちらでも負けるわけにはいかない。
今度は俺の相棒たちの力を見せつけてやる！

80話

「俺のターン！ドロー!!」

引いたカードは…融合！

つてことはこいつの出番だ。

「俺は手札から融合カードを発動。手札の3体のモンスターを融合させ、出でよ！合成魔獣キメラ!!」

合成魔獣 キメラ 星8 闇 獣族／効果

A2800 D2400

このカードが攻撃を行う際、相手は魔法・罠・モンスター効果を発動できない。

このカードが破壊された時、このカードの融合素材となったカードを場に全て特殊召喚できる。

素材となった3枚のカードは、何故かこれ以上レベルアップできなかつたが、リンクを上げることによってそれぞれ追加の効果をj得て、さらに融合カードであるこのキメラも新た

な効果を得る事となった。

「合成獣キメラで干支・丑を攻撃！」

モオオオオ：

「干支・丑が墓地へ送られたとき、干支・子を特殊召喚。」

「甘い！合成魔獣キマイラの効果！このカードが攻撃する際、相手は魔法・罨・モンスター効果を発動できない！」

テキストの『攻撃する際』がどこまでの範囲を示しているか分かりにくいですが、どうやら攻撃によって起こる結果まで（相手カードが破壊され墓地へ送られるまで）のようだ。

これにより、相手のネズミの効果は打ち消され、場には巳^{へび}1体となる。

「ターンエンドだ。」

相手のターン。

カードをドローし、すぐに動き出す。

「手札から魔法カード『お先にどうぞ』を発動。」

お先にどうぞ 魔法カード

自分の場の干支モンスターカード1体を対象に発動可能。対象のカードを墓地へ送り、そのカードより干支の並び順が遅い干支モンスターカードを1体手札から特殊召喚

できる。

「俺は『干支・巳』を墓地へ送り、手札から『干支・亥』を特殊召喚。」

干支・亥いのしし 星7 地 獣族／効果

A2500 D1900

このカードが守備表示モンスターを攻撃する時、その守備力を攻撃力が超えた分だけ相手にダメージを与える。

「さらにリバースカードオープン、干支の誇り。干支モンスターの装備カードとなり、攻撃力・防御力を5000アップさせる。」

干支の誇り 魔法カード

干支モンスターにのみ装備可能。このカードを装備したモンスターの攻撃力・防御力は5000アップする。

このカードを装備したモンスターが破壊されることでこのカードが墓地へ送られたとき、デッキからカードを2枚ドローできる。

「干支・亥に装備。」

干支・亥 A 2500 ↓ 3000 D 1900 ↓ 2400

くつ、キメラの攻撃力を上回ったか…。

「干支・亥で合成魔獣キメラに攻撃！」

「ぐううう！」

俺LP 4000 ↓ 3800

「だが合成魔獣キメラの効果発動！融合素材となった3体のモンスターを場に特殊召喚する！」

邪毒蛇 星3

A 800 D 800

ナイトメア 星3

A 900 D 1300

草原の王レオ 星5

A 1800 D 1000

キメラはやられたが俺の場には3体のモンスター。

相手は攻撃力3000のいのしが1体。だが手札は0。

俺のターン。

「ドロー！つし！俺は場の邪毒蛇、ナイトメアをリリースし、アドバンス召喚！来い、聖獣・玄武!!」

聖獣・玄武 星7 地 岩石族／効果

A2100 D3100

フィールドに巨大な岩石を身に纏った亀が現れる。

「聖獣玄武の効果、このカードを召喚した時、表側守備表示にすることができる。さらにこのカードは守備表示のまま攻撃が可能だ！もちろんダメージ計算は守備力の数値を使うぜ！」

巨体を揺らしながら、相手の場のイノシシに向かいゆっくりと進む玄武。

「聖獣・玄武で干支・亥に攻撃！グラビトンプレス!!」

そしてその巨体を一気に持ち上げ、イノシシめがけて振り下ろした。
ズウウウン…

その攻撃は大地を揺らし、砂埃を巻き上げた。

そしてその煙が晴れた時には、相手のイノシシの姿は跡形もなくなっていた。

相手LP4000↓3900

「…装備カード、干支の誇りの効果発動。俺はカードを2枚ドロウする。」

無事相手モンスターは倒せたが、カードの効果で2枚ドロウ。次の通常ドロウと合わせれば一気に3枚ドロウとなる。

先程まで手札0枚だったのだが、これで次に何をしてくるかわからなくなった。

「だがレオのダイレクトアタックは受けてもらうぜ！草原の王レオで攻撃!!」

相手LP3900↓2100

「ターンエンドだ。」

盤面だけ見れば俺の方が優勢に見えるが…、なんだろうか？そう思えない空気を感じる。

「カードをドロウ。…モンスターをセット、カードを1枚セット。ターンエンド。」

相手の挙動1つ1つに何か重みを感じる。

「くっ、俺のターン！ドロウ!!」

考えを振り払うように勢いよくカードを引く。

「草原の王レオで、そのセットモンスターに攻撃！」

疾風ののごとく相手に詰め寄り、その爪で切り裂くレオ。

「…俺のモンスターは干支・卯」

干支・卯 星3 地 獣族／効果

A1000 D1000

このカードが戦闘で破壊された時、デッキからカードを1枚ドロウできる。

「このカードが戦闘で破壊された時、俺はカードを1枚ドロウ。」

「何!?!」

くそつ、良い感じでカードが回ってるな…。だが!

「聖獣・玄武でダイレクトアタック!グラビトンプレス!!」

これが決まれば俺の勝ち。だがやはりそんなに相手は甘くなかった。

「リバースカードオープン、『干支の守り』。」

「何!?!」

干支の守り 罨カード

相手モンスターのダイレクトアタック時発動可能。

その攻撃を無効にし、あなたはカードを1枚ドロウ。引いたカードが干支モンスターカードなら特殊召喚する。引いたカードが干支とつく魔法・罨カードだった場合、相手に見せて魔法・罨ゾーンにセットできる。

「これでその攻撃は無効化され、俺はカードを1枚ドロウ。…引いたカードは『干支・戌』。こいつを特殊召喚。さらに『干支・戌』の効果発動。このカードが召喚・特殊召喚された時、手札、デッキから『干支・申』を特殊召喚できる。」

干支・戌^{いぬ}星4 地 獣族／効果（守備表示）

A1700 D1600

このカードが召喚・特殊召喚された時、手札・デッキから干支・申を特殊召喚できる。

干支・申^{さる}星4 地 獣族／効果（守備表示）

A1600 D1700

このカードが召喚・特殊召喚された時、手札・デッキから干支・戌を特殊召喚できる。

ぬお!?まさかのカウンタ―罫。

「くそっ!ターンエンドだ!」

これで相手の場には干支・戌と干支・申の2体。そして手札は2枚。対して俺は場にレオと玄武の2体。手札は2枚。

ここまでのプレイ、何とか渡り合っているように思えるが、実際は何かを狙っており、積極的に攻めてきていないようにも見える。

さらに実際に相対していると奴の圧が尋常じゃないのだ。

おそらく飲まれたら一気に持って行かれそうだ。

俺は気合を入れ直し、だが熱くなり過ぎないように冷静に心を落ち着かせる。

さあ、次は何をしてくる…!?

81話

相手のターン。

「カードをドロロー。…ふっ。」

ゾワリ…。

奴がカードを確認した時、口元がニヤリと動き、それを見た瞬間背中がゾワツとした。まるで初めて45階の中ボスと戦った時のような感覚が…。

「俺は手札より、魔法カード『猫の来襲』を発動。」

猫の来襲 魔法カード

自分の場・墓地に干支モンスターカードが6枚以上あるときに発動可能。
デッキ・手札から『干支になれなかつた者・猫』を特殊召喚する。

干支になれなかつた者・猫 星10 地 獣族／効果

A4000 D3000

このカードは『猫の来襲』の効果でのみ召喚可能。

自分の場に干支カードがあるとき、このカードは攻撃宣言できない。

1ターンに1度、自分の場の干支モンスター1体をリリースすることで、そのモンスターによって下記の効果を発動する。この効果を使用したターン、このカードは攻撃できない。

- ・子 このカードを除く場の全てのカードを破壊する。
- ・丑 場の相手モンスターは全ての効果を失う。
- ・寅 相手の場の守備表示モンスターを全て破壊する。
- ・卯 デッキからカードを3枚ドロウする。
- ・辰 相手の場の攻撃表示モンスターをすべて破壊する。
- ・巳 自分の場に蛇トークン（星1 地 爬虫類族 攻/守100）を可能な限り特殊召喚する。
- ・午 相手は次のターンのドローフエイズを飛ばす。
- ・未 相手の手札の数×1000ポイント自分はライフを回復する。
- ・申 相手の場のモンスター全ての防御力を2000ダウンさせる。
- ・酉 相手は次のターン攻撃を行うことができない。
- ・戌 相手の場のモンスター全ての攻撃力を2000ダウンさせる。

・亥 相手の場の魔法・罨カードを全て破壊する。

こお!!? 攻撃力4000

!!?!

つてか効果!!効果ヤバすぎ!!!!

ちよ、こ、これは想像をはるかに超えてきたんだが…。

やばいやばいやばい、ヤバすぎる…!!!

「場に千支モンスターがいるとき、猫は攻撃できないが効果は発動できる。千支・申をリリースしお前の場のモンスターの守備力を2000ダウンさせる。」

レオの倍くらいある大きさの猫が、味方であるはずの申を捕まえる。

するとその手の中で申は光の玉へと姿を変え、猫に吸収される。

そして猫が空に向かって咆哮を上げると…

玄武 D3100↓1100

レオ D1000↓0

うおっ! 守備力が下がった!

「千支・戌で聖獣・玄武にアタック。」

くっ、だが玄武の効果発動!

「聖獣・玄武の効果! このカードは1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない! パー

フエクトガード!!」

数ある強敵とのデュエルで何度も俺を支えてくれたカード、『世界樹』と同じ効果だ。そう、このカードには世界樹を含めた俺のカードたちの思いが詰まってるんだ!

相手の攻撃に対しその巨大な盾を構える玄武。

そして相手の爪が盾にぶつかる瞬間、薄い膜のようなものが現れ攻撃をはじき返した。

「…ふん、ターンエンドだ。」

何とかしのげたか。だがあの猫の効果はやばい。一瞬でこちらの場を吹き飛ばしてくる可能性がある。

「俺のターン、ドロー!!」

俺のデッキであの攻撃力を上回るカードは無いが、1枚だけ、あのカードを使えば何とかなるかもしれない。

問題はその準備ができるまで耐えきれるかどうかだが…。

「俺はカードを1枚伏せる。そしてレオを守備表示にし、ターンエンドだ。」

相手のターン

「カードをドロー。…俺は魔法カード『寄り道』を使用。」

寄り道 魔法カード

自分の場の干支モンスター1体を墓地へ送り、自分はデッキからカードを2枚ドロースする。

「干支・戌を墓地へ送り、カードを2枚ドロロー。」

くっ、またドロローカードか。

それに場の戌が墓地へ送られたことで、奴が攻撃可能になる。

「カードを1枚伏せて、バトルフェイズ。猫で草原の王・レオを攻撃。」

「この瞬間、俺は草原の王レオの効果を発動！手札を1枚捨てることで、相手の表示形式を変更できる！」

俺は手札を1枚墓地へと送る事で、相手のネコは守備表示へと変更された。

「…ちっ、ターンエンド。」

ふう、レオの効果は手札を1枚捨てないといけないから何度かは使用できないが、とりあえず攻撃は凌げた。

さて、そろそろ来てくれよ。

「俺のターン、ドロロー!!」

引いたカードは…

「俺は融合の騎士を召喚！このカードは聖獣モンスターと融合する際、融合の魔法カードを必要としない。効果を発動し、聖獣・玄武と融合！」

俺のデッキのキーカード、融合の騎士。

融合を宣言した瞬間、辺りは急に砂嵐が吹き荒れ始める。

「地を支配し力をその身に宿し、北より来たりしは鉄壁の騎士。出でよ！聖騎士ゲンブ！！」

聖騎士ゲンブ 星9 地 戦士族／効果（守備表示）

A2500 D3500

手には自身がすっぽりと隠れてしまう程の、亀の甲羅を模した大きな盾を持っている。

このカードもゲンブと同じく守備表示のまままで攻撃ができ、守備力の数値を攻撃力として使用する為、実質攻撃力が3500だ。

今相手の猫はレオの効果で守備表示になっている。

ここがチャンスだ……！

「聖騎士ゲンブで、その猫に攻撃だ！グラビティシールド!!」

ゲンブがその場で高く飛び上がり、盾を猫に向け急降下を始める。そしてその巨大な盾を思いつき叩きつけた。

ブニャアアアア!!!

巨大な叫び声をあげながらその場に倒れる猫。

よし！突破できたか!!

そう思っていたのもつかの間。いつまでたつても倒したはずの猫が消えないことを不思議に思っていると

「…リバースカードオープン。罨カード、猫の恨み。」

倒れた猫の巨体の後ろから相手の声が聞こえてきた。

すると倒れたはずの猫が再び起き上がり、こちらを睨んできた。

「このカードは『干支に選ばれなかった者・猫』が破壊された時に発動可能。破壊を逃れる代わりに効果を失う。」

…は？嘘だろ!?

効果を失うってことは…。

「これにより、他の干支モンスターをリリースすることで発動する効果は使えなくなる

が、代わりに自分の場に干支モンスターがいても攻撃を行うことができるようになった。」

お、おいおい……。倒して有利になるどころか、余計ヤバくなったのでは…？

俺はこれ以上できる事がないためターンエンド。

そして相手のターン。

「ドロロー。俺は手札より『干支・未』^{ひつじ}を召喚。さらに魔法カード『同着？』を発動。」

干支・未^{ひつじ} 星4 地 獣族／効果

A1500 D1800

このカードは効果では破壊されない

同着？ 魔法カード

あなたが干支モンスターを召喚したターン、もう一度干支モンスターを召喚する権利を得る。

「『干支・未』をリリースし、『干支・午』^{うま}を召喚。」

干支・午^{うま} 星6 地 獣族／効果

A2000 D1900

このカードが相手にダメージを与えた時、相手は手札からカードを1枚捨てる。

こ、これはきつい…。

「まずは干支・午で草原の王レオに攻撃。」

グオオオオ……

例えレオの効果を使ったとしてもどのみちレオはやられる。

ならば効果を使ったところで無駄に手札を1枚捨てるだけになってしまう為、効果は使えない。

奴の攻撃をくらい消えていくレオ。

「ターンエンド。」

これで相手の場には午と猫の2体。

俺の場には玄武のみ。

とりあえずゲンブの防御力で何とか場は持っているが、油断すればまた何をしてくるか分からない。

こいつ…、強い…！

82話

「俺のターン、ドロー！」

引いたカードは…朱雀。

考えろ、なにか…、何かあるはずだ。

手札のカード、場のカード、そしてデッキに眠るカードたち。

これらを使って取れる最善の方法を考えるんだ…！

「…俺はモンスターをセットしてターンエンドだ。」

手立ては…ある。あの猫をも上回る攻撃力を一瞬だが得る方法が1つだけある。

しかしそれを行うには時間が、準備が必要だ。

今は耐える…！

「カードをドロー。」

相手のターン、

カードを引いた奴はその口元を大きく歪めた。

「…どうやら、俺の勝ちのようだな。」

何？この状況で勝利宣言…。どんなカードを引いたって言うんだ？

「俺は装備カード『騙された猫の怒り』を使用。場の『干支になれなかった者・猫』に装備！」

騙された猫の怒り 装備魔法カード

干支になれなかった者・猫にのみ装備可能。装備したモンスターは以下の効果を得る。

・場に他の干支モンスターがいる際攻撃できない効果を消す。

・罨カード『猫の恨み』の効果で自身の効果を失っている場合、1ターンに1度場の干支モンスターをリリースして発動できる効果が復活する。その効果を使用したターンこのカードは攻撃できない。

・1ターンに1度、自分の墓地にある干支カードを除外することで、上記リリースして発動できる効果と同じ効果を発動できる。

カードを装備した猫は、装備前と比べ一回り大きくなり、その顔もより獰猛なものへと変わった。

「さあ…、覚悟は良いか…？」

ただでさえ強いプレッシャーを放っていた相手が、より圧倒的な威圧を放ち始める。

こ、これは…無理なのか…？

絶体絶命。

そんな言葉が頭をよぎった瞬間、思わぬところから救いの手は現れた。

「……を発…。データ…信。正……ータをイ……ツール。不具合デ……クセス…始…
解析…了。原因不…。次のプロセス……進みます。現…を正常に戻……とを優先
……………」

な？何だ何だ？

突然デュエルフィールドに1台の小型浮遊機械が現れた。

何かブツブツ言ってるけど…良く聞こえないな。

いきなり現れた乱入者をポカンとした表情で見ていると、先ほどまで戦っていた彼は
苦虫をつぶしたような顔をしていた。

「つち……ここまでか…。」

そして俺に向かって話しかけてきた。

「おい、受け取れ！」

彼が投げ渡してきたのは一枚の真っ白なカード。

これは…前ももらったことのあるブランクカード？

「絶対に無くすなよ！」

???:…えつと？

いきなりの事で頭が付いていかない。

「もう時間がない。後言えるのは…、カードを信じろ！デツキを信じろ！戦って分かった！お前ならだいたいしよう…だ!!あ…のこ…はたのん…!!!」

一瞬の出来事。

瞬きをした瞬間には、すでに彼はいなくなっていた。そして

パ
リ
イ
イ
イ
イ
ン
!!!!!!

ガラスが割れたような音がして、気が付けば俺は一人でデュエルリングの上に立っていた。

【エラー発生。確認のために少々お時間を頂きます。プレイヤー強制転送】

状況を理解する間もなく俺は強制的に転送され、次の瞬間には拠点のパソコンの前に立っていた。

……えーつと……？……だれか、状況を、説明、してください…。

その後、俺が帰ってきたことに気付いたソラに事の顛末を話し、二人して首を傾げたが結局あれが何だったのかは分からなかった。

そして次の日、パソコンに「メンテナンス完了」の文字が出ていたので49階へ向かった。

ガイドさんやショップのおやじさんは何も変わらず。

デュエルリングが上がってみると、昨日のデュエルは無かったことになっており、普通に別の対戦相手が現れた。

勿論強さはそれなり（38階までと比べ、こんなもんだなって言うレベル）で、間違っても昨日のあいつのレベルの相手は出てこなかった。

それからごく普通にデュエルを繰り返し、ごくごく普通に49階の突破条件をクリアしたので、とりあえずここでしばらくBP稼ぎをすることにした。

元々ここでポイントを稼いで、ショップのカードと交換するのが目的だった訳だし。

何となく心の中に釈然としないものを残しつつも時間は流れ、数日後、俺はショップのカードを3枚とも入手することができた。

そして…

「行つてらっしゃいませ、マスター。」

「ああ、行つてくる。」

ソラに見送られ、俺は転移機能で49階へ向かう。

今日は50階に挑戦する予定だ。

ショップで新たなカードを手に入れた後は、使用感を試すために何度か49階でデユエルをして、問題なさそうだったので今日50階へ挑むことにした。

結局あの時の事はいくら考えても分からない。

夢…ではないことは、あれからずっとEXデッキに入れているこのブランクカードが証拠だ。

まあ気にはなるが、いつまでもそればかりにかまけてもいられないし、何より今日は

50階。

俺の予想が正しければ、出てくるのはおそらく…

ガイドさんとショップのおやじさんに挨拶をして先へ進む。

50階への階段を降り、やって来た扉の前。

一度大きく深呼吸をして、そして扉に手を掛ける。

開いた先には…：リング…？

いつもと違うことに少し戸惑いつつも、中央にあるリングへと上がる。

するといきなり四方にスポットライトが現れ、リング全体が照らされる。

そして

「…来たか。」

気が付くと目の前には1人の青年。

見間違えるはずもない。こいつは…

「さあ、決着をつけるでしょう。今度は前回の様に手を抜いたりしません。本気で行くぞ。」

45階で戦ったあの中ボスが、再び俺の眼前に現れた。

「…やっぱり、出てくるとしたらお前だと思ったよ。」

「ふん。1度まぐれで勝ったぐらいでいい気にならないことだ。」

お互いの視線が交錯し、同じタイミングでデュエルディスクを構える。

「デュエル!!!」

今ここに、戦いの火蓋は切って落とされた。

83話

先行は…俺！

「俺のターン！俺はモンスターをセット、カードを1枚セット。ターンエンドだ。」
いつも以上に気合が入る。

「ふん、俺のターン、ドロー！」

奴も心なしか力が入っているように見える。

「俺はドラゴナイトを召喚。」

ドラゴナイト 星4 地 ドラゴン族／効果

A1800 1400

「さらに装備魔法『竜の牙』を発動。」

竜の牙 装備魔法

ドラゴン族モンスターにのみ装備可能。

このカードを装備したモンスターの攻撃力は500アップする。

このカードを装備したモンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が超えた分だけ相手に戦闘ダメージを与える。

「これでドラゴナイトの攻撃力は2300。さらにカードを1枚伏せて、ドラゴナイトでその守備モンスターに攻撃だ！」

相手の攻撃でこちらのモンスターが破壊される。

伏せモンスターは朱雀。

聖獣・朱雀

A1800 D1900

「お前のモンスターの守備力は1900。つまり差分、400ポイントのダメージ！」

俺LP4000↓3600

「ターンエンドだ。」

奴のターンエンド宣言時、俺は朱雀の効果を発動。

「このカードは墓地へ送られたターンのエンドフェイズ時に復活する！甦れ、朱雀!!」

「ちっ!」

「そして俺のターン、ドロー!!」

ダメージは受けたが、場にモンスターが残ることはかなり大きな意味を持つ。

「俺は場の朱雀をリリースし、アドバンス召喚!出でよ、聖獣・青龍!」

フィールドに青い龍が現れる。しかし

「それはさせせん!リバースカードオープン、落とし穴!」

落とし穴 罠カード

相手が攻撃力10000以上のモンスターの召喚・特殊召喚に成功した時に発動する事ができる。

その攻撃力10000以上のモンスター1体を破壊する。

「なっ!?!」

相手の罠カードの効果で青龍は現れた瞬間破壊され、墓地へと送られてしまった。

「ふん、そのカードの効果は少々厄介だからな。先に潰させてもらうぞで。」

前のデュエルでは青龍ではなく、青龍と融合の騎士が融合した『聖騎士・セイリュウ』の効果を使用したけど、元は青龍の能力だと説明したことを覚えていたようだ。

「…ターンエンド。」

「ふん、簡単に負けてくれるなよ？お前には……何？」

俺の場にモンスターがいなくなったことで、奴は余裕ぶった表情をしていたが、言葉の途中で眉を顰めた。

「俺の朱雀は『墓地へ送られた』ターンの終わりに復活する。それが例え破壊されてであろうとも、アドバンス召喚の為のリリースであろうと…な。」

俺の場には聖獣・朱雀が守備表示で蘇っていた。

「くっ、だがその程度では俺の攻撃を防ぎきることはできん！行くぞ、俺のターン!!」
勢いよくカードを引く相手。

「何度蘇ろうとも、何度でも叩き潰してやる！ドラゴナイトで攻撃!!」

「くうっ！」

俺LP3600↓3200

「ターンエンドだ。」

地味に削られているが、この程度ならまだ全然平気だ。

俺のターンが始まる前に墓地から復活する朱雀。

そして俺のターン。

「ドロー!!」

引いたのは…よし！これなら！！

「俺はフィールド魔法『四獣の聖域』を発動！」

四獣の聖域 フィールド魔法

フィールド上の聖獣モンスターの攻撃力・守備力は300アップする。

自分の場の聖獣モンスター1体が破壊されるとき、代わりにこのカードを破壊できる。

新たにシヨップで手に入れた新カードだ！

実は、あそこで手に入れた3枚のカードは全て聖獣に関係するカードだった。

俺としては是が非でも手に入れたカードだった（てか俺以外に使える人いないと思う）ので、時間をかけてでもBPを貯めたのだ。

さらにこれら3枚のカードのレア度は全て『R』。

つまりまだ『SR』・『UR』に上げることでは効果を強化することができる。

現状では必要な素材カードが足りなかった為ランクは上げれていないが、今のままでも十分な効果を持つ。

「そして、俺は朱雀をリリースしアドバンス召喚。来い、聖獣・白虎！！」

聖獣・白虎

A 2200 D 2000

「四獣の聖域の効果で白虎の攻撃力・守備力は300ポイントアップ！」

白虎 A 2200 ↓ 2500 D 2000 ↓ 2300

「くっ…。」

今ならば相手の場に魔法・罠カードは伏せられていない。チャンスだ！

「バトル！聖獣・白虎でドラゴナイトに攻撃!! ホワイトファング！」

白虎の鋭い牙が相手のドラゴナイトを襲う。

「ぐう…。」

相手LP 4000 ↓ 3800

「さらに聖獣・白虎の効果! このカードは1度のバトルフェイズで2回攻撃できる!!」

「何!？」

「もう一度攻撃だ! ホワイトファング!!」

「ぐわああ!!!」

相手LP 3800 ↓ 1300

よし！いい感じでダメージを与えられた。
さらに相手の場は空だ。

エンドフェイズに朱雀が場に戻りターンエンド。

さて、ここからどう動いてくる…？

「…よくも俺をここまでコケにしてくれたな…。お前は…、お前だけは許さん…!!」
段々目が血走ってきている。

…コワイよ。

「俺のターン…ドルオオー…!!」

こちらが引くくらいの勢いでカードを引く相手。

「…つちい。俺は手札から強欲な壺を発動。」

強欲な壺 魔法

デッキからカードを2枚ドローする。

さらに2枚ドロー。そして

「!!……ふっ、ふははははっ!!残念だが、これでお前も終わりだ。」

一転して勝ち誇った顔。いったい何のカードを引いたのだろうか。

「冥途の土産に、俺の最強のカードを見せてやろう…。喜ぶ、このカードを使ったのはお前で2人目だ。」

…最強のカード…、いったい何が…。

「俺は手札から魔法カード『融合』を発動！」

ゆ、融合!? ってことは、これまでの奴の使用カードから考えたらしかして…。

「俺は手札のシャイニングドラゴン3枚を融合させる！」

や、やっぱりかー!!!

「見るがいい、最強のモンスターを!!出でよ、シャイニングアルティメットドラゴン光り輝く究極竜!!!!」

奴の手札から現れた3体のドラゴンが、融合のカードの効果によ!!って一つに合わさっていき、そして現れたのは3つの首を持つ巨大な光輝く竜だった。

シャイニングアルティメットドラゴン
光り輝く究極竜 星12 光 ドラゴン族／融合

シャイニングドラゴン+シャイニングドラゴン+シャイニングドラゴン

A4500 D3800

「さあ、恐れおのけ!これが最強のモンスターだ!!うわはははー!!!」

くつ、初めてシャイニングドラゴンを見たときから何となく予想はしていたけど…

目の前の竜から発せられる威圧感は凄まじい。

「さあ、覚悟は良いか…?」

先程までの優勢が一転。一気にピンチとなっていました。

84話

「行け！シャインングアルティメットドラゴン輝く究極竜！アルティメットブラスター!!!」

3つの首から夫々極大な光線が放出され、それが途中で1つに合わさり、凄まじいエネルギーを放ちながらこちらへ迫ってくる。

だが…

「リバーズカードオープン！聖獣の守り！」

俺にはここまで使わずにとっておいたこの罨カードがある！

聖獣の守り 罨カード

自分の場に聖獣モンスターカードがある時、相手の攻撃宣言時に発動可能。

その攻撃を無効化する。

その後墓地の聖獣モンスターカードを1枚手札に加えることができる。

これでどんなに高い攻撃力だろうとも無効化できる！

俺たちの目の前に4枚のお札のようなものが現れ上下左右に分かれた。

そしてお札の間には薄い膜のようなものが現れ、迫りくる高エネルギーを全て防ぎきってしまった。

「つちい!!」

さらに俺は墓地から聖獣・青龍を手札に加える。

「…ふん、だがそんなことをしても寿命が少し伸びただけにすぎん。俺はターンエンドだ。」

そう、奴の言う通り、このままではいつかあの究極竜の攻撃を食らって負けてしまう。しかし決して諦めるつもりはない。なぜならば、このデッキにはこの状況をひっくり返すことができるカードが眠っているから。

「俺のターン、ドロー!」

引いたカードは…玄武。

ここは…強気で行く!

「俺は手札より魔法カード『聖獣の施し』を発動。」

聖獣の施し 魔法

自分の場の聖獣モンスターの数だけ、自分はデッキからカードをドローする。

「今俺の場には『聖獣・朱雀』と『聖獣・白虎』がいる。よって俺は2枚カードをドロ―。」
 これがショップで手に入れた3枚目のカード。

これであのカードが引ければ…

「…!!…俺は、朱雀と白虎の2体をリリースしアドバンス召喚。聖獣・玄武を召喚！」

聖獣・玄武 A2100↓2400 D3100↓3400

「さらに効果で玄武を守備表示に変更。ターンエンドだ。」

「ふん、俺のターン、ドロ―！俺はコドモドラゴンを召喚。」

コドモドラゴン 星1 光 ドラゴン族／効果

A100 D100

このカードをリリースし、手札からドラゴン族通常モンスターを特殊召喚できる。

この効果で特殊召喚されたモンスターは、召喚されたターン攻撃できない。

「そしてコドモドラゴンの効果発動。このカードをリリースし、手札よりダークドラゴンを特殊召喚！」

ダークドラゴン 星6 闇 ドラゴン族／通常

A2400 D2100

くっ、高レベルモンスターか…。

「シャイニングアルティメットドラゴン、聖獣玄武を攻撃だ！アルティメットプラスター!!!」

グオオオオお……

先程と同じ高エネルギー波が玄武を直撃。

如何に玄武といえどもこの攻撃には耐え切れず破壊されてしまう。

「ターンエンドだ。」

くっ、これはかなりきつい…。耐えられるか…？

「俺のターン、ドロロー…俺は朱雀をリリースし、聖獣・青龍を召喚。さらにカードを1枚伏せる。そして青龍でダークドラゴンに攻撃！」

グルウウウウ…

相手LP1300↓800

「ちいっ…だがその程度の攻撃、もはや何も意味を持たない。この究極竜を倒せなければな！」

現在相手のライフは800で手札は0。場には究極竜が1体。

俺はライフが3200で手札は2枚。場には青龍と朱雀がいる。

そしてその手札は…。

「俺のターン、ドロー！」

相手が勢いよくカードを引く。

「…俺は今引いたカード、魔法カード『アルティメットブラスター』を発動！」

アルティメットブラスター 魔法カード

自分の場に光り輝く究極竜がいるときのみ発動可能。

相手の場の全てのモンスターを破壊する。

「このカードで、お前のモンスターを全て破壊する！」

奴が引いたのは魔法カード。

しかしこちらには青龍がいる。

魔法が打ち消されるのは分かっているはずだが…罠か？

…だがしかし罠だとしてもここでこの効果を食らうわけにはいかない。

「俺は青龍の効果を発動！その魔法を無効化する!!」

一瞬現れた不穏な空気は一瞬にして霧散する。

これで相手の手札は再び0。

そして俺の伏せカードは『古典的な挑発』。

相手の攻撃時、自分の場の別のモンスターに攻撃を移し替える効果を持った罠カードだ。

これでもし青龍を攻撃してきても、その攻撃を朱雀へ移し替えれば2体とも場に残ることがができる。

それで少し余裕ができると思っていた俺に対し、奴は予想外の行動をとった。

「この瞬間を待っていた！俺は墓地の魔法カード、『アルティメットブラスター』の効果を発動する！」

「何!!?」

墓地でも発動する効果だ!?

「ふん、俺がそのモンスターの効果を忘れるとも思ったか? 『アルティメットブラスター』は、俺のライフが初期ライフの半分以下で、なおかつ相手より低い時、墓地から除外することでもう一度効果を使用することができるのだ!」

ま…、マジか…。これはやられた…!

「さあ、受けてもらおうか、究極竜の力を!!」

突然、空に雷雲が鳴り響き、目の前の巨竜から発せられるプレッシャーがどんどん大きくなっていく。

そして、その3つの首から空に向かって高エネルギー波が打ち出された後、それは空中でぶつかって弾け、まるで流星群の様に地上へと降り注いだ。

グオオオオオ…

キュイイイ…

まずい!これはやばい!!

「俺はフィールド魔法『四獣の聖域』の効果を発動!聖獣モンスターが破壊される代わりに、このカードを破壊する!」

俺が宣言した瞬間、相手の魔法の効果で倒れたと思われた朱雀が再び起き上がり、フィールド上に飛び立った。

「ふん、だがアルティメットの攻撃はまだ終わっていないぞ!バトルフェイズ!あの邪魔な鳥を打ち落とせ!!」

キュイイイイイ…

せつかく破壊を免れた朱雀だったが、さらなる攻撃によって墓地へと送られてしま

「ふん、まあどうせまた復活してくるんだろがな。さあ、俺はターンエンドだ！」
これで俺の聖獣モンスター『青龍』・『白虎』・『玄武』・『朱雀』は全て墓地へ送られてしまった。

場に伏せているカードもこの状況では使用できない。

依然相手の場には恐ろしいまでの威圧感を放つドラゴンが1体。

いくら朱雀が毎ターン場に戻ってくるとは言え、その内朱雀の守備力を超える攻撃力のモンスターが召喚されてしまえばおしまいだ。

客観的に見て絶望的にも見えるこの状況。

だが俺の心には一欠けらの絶望も存在していなかった。

奴がターンを終了した瞬間、口元をわずかに上げて確信する。

このデュエル、俺の勝ちだ…！

85話

「…俺のターン、ドロ―！」

「…何？」

普通なら相手のターンエンド時、聖獣・朱雀は墓地からフィールドに特殊召喚される。しかし俺はあえてその効果を使用しなかった。

訝しげな顔をする相手に対し俺は宣言する。

「悪いな。このデュエル、俺の勝ちだ。」

「……………ふん…、何を言うかと思えば、この状況でそんなセリフが言えるとは、余程の自信があるようだな？この究極竜を超えられるとでもいうのか？」

俺は余裕を崩さずに答える。

「ああそうだ。今からそれを見せてやるよ！」

そして俺は先ほどの『聖獣の施し』の効果で引いた2枚のカードに目をやる。

「まずは融合の騎士を召喚！」

融合の騎士

A1900 D1400

「…？今更そんなモンスターを出してどうなる？そいつと融合できる聖獣たちは全て墓地へ送ったはずだ。朱雀を場に戻しておけば融合することもできたであろうに…、何を考えている…？」

奴の疑問により一層口元を歪め応える。

「ああ、そうだな。確かに聖獣たちは全て墓地へ送られた。本来ならこの融合の騎士一体ではどうすることもできないだろう。…だがな、こんな状況だからこそできる事もあるんだぜ？」

そう言いながら、俺は手札に残っている最後の1枚を発動させた。

「魔法カード『聖獣の結束』を発動。」

聖獣の結束 魔法カード

自分の場の融合の騎士1体を対象として発動可能

ターン終了時まで対象のモンスターの攻撃力・防御力は、自分の墓地にある聖獣モンスターの数×1000ポイントアップする。

「このカードは、俺の墓地に眠る聖獣カードの数×1000ポイント、融合の騎士の攻撃力・防御力をアップさせるカードだ。現在俺の墓地には4体全ての聖獣がいる。つまり融合の騎士の能力は4000ポイント上がる!!」

融合の騎士 A1900↓5900 D1400↓5400

「な、なんだとお?!?!?」

このカードは、聖獣たちをURまでランクアップさせたときに同時に手に入れた融合カード、『聖騎士セイリユウ』・『聖騎士ビヤッコ』・『聖騎士ゲンブ』の3枚と一緒に出てきた4枚目のカードだ。

『聖騎士スザク』は元々の融合カード『命の剣士』が変化したからね。

まさに聖獣たちの最後の力を、融合の騎士が束ねる。

真正正銘、これが今の俺たちに出せる最高の力だ!

「さあ、終わりにしよう……融合の騎士、シャイニングアルティメットドラゴン光り輝く究極竜に攻撃だあ!!!!」

騎士の剣に4色の光が宿る。

その剣を大上段に振りかぶり、巨竜に向かって走り出す騎士。

そして竜に近づくにつれ、剣はどんどんその大きさを増していく。

「そ、そんな…、俺のアルティメットが負けるはずがない!! やれ、シャイニングアルティメットドラゴン! そんな攻撃吹き飛ばせ!!」

主の指示に従い、自身に近づいてくる敵に対して最高の攻撃を放つ竜。

しかし騎士は手に持つ大剣を一振りするだけでその高エネルギー波を打ち消してしまふ。

「ば、馬鹿な!!?」

次の瞬間、騎士は大きく飛び上がり、三つ首の巨竜にその巨大な剣を振り下ろした。

グギヤアアアアアアア
!!!!

その剣はいとも簡単にその光り輝く竜の鱗を引き裂き地へと沈める。

そして凄まじいまでのその余波はドラゴンの主へも襲い掛かる。

「グ…グアアアアアアアアアアア
!!!!」

相手LP800↓0

「……………」

「……………」

デュエルが終わった後、しばらくは二人とも無言だった。

勝者には勝者の、敗者には敗者の思いがあるにも関わらず、お互いに中々言葉を発することができなかった。

しばらくして、ようやく相手が口を開いた。

「……お前…、強いんだな…。」

「……ああ。……お前も、強かった…。」

「……………」

言いたいことはある。聞きたいこともある。

だがお互いに、すべてを口に出さなくても何となく思いはわかる気がした。なぜならば、デュエルを通じて彼らは語り合ったからだ。

不意に、彼の体が薄くなっていく。

「…時間切れだ。」

「……そうか。」

「……………」

「……………」

手の先や足の先が黒い靄へと変わっていく。

「……………いつの日か……」

「……え？」

「いつかまた、リベンジしてやるよ……。それまで……首洗って待つてろ！」

「……ああ！絶対だぞ！」

最後にその言葉を残し、彼はその体を全て黒い靄へと変え、消えていった……。後に残されたのは、彼がいた場所に落ちていた1枚のカード。

シャイニングドラゴン 星8 光 ドラゴン族／通常モンスター

A 3 0 0 0
D 2 5 0 0

俺はそのカードをそつと拾い上げた。

「おめでとうございます。50階突破です。これ以降の事については管理人より説明がありますので、一度拠点までお戻りください。」

室内にメッセージが響く。

リングを下りた俺は、最後にもう一度だけ振り返り、そして帰還石を使用して拠点へと帰った。

???

「…うん、うん、そうだね。ようやくここまで来たって感じだね。」

「……。」

「やっぱり彼ならやると思ったけどね。」

「………?」

「ん?もう一方は…まあ、たまたまだろうね。」

「……。」

「ああ、たまーにあるんだよ、そういうことが。いつだったけかなあ…、あの時の彼女だってそうだったじゃない。」

「…。」

「ああ、ごめんごめん、あの話は君にとってタブーだったね。…にしても、あの力、ますます興味深いね。」

「………。」

「大丈夫大丈夫。僕だってそこまで酷くはないよ?むしろ心配するならあいつの方だろうけど…。」

「………、……。」

「ま、大丈夫でしょ。なんかあっても何とかするだろうし。」

「……………」

「はいはい、じゃあまた、しばらくは無いと思うけど気を付けてね。」

「……………」

「……………ふう。さてさて、これからどうなることやら。彼についても気になるけど、やっぱりあのノイズは……………ま、いつか。何とかなるなる♪」

物語は進む。

それぞれの思いと思惑を乗せて。

その先にどんな結末が待っているのか。

それはだれにも分からない……………。

……………。

閑話

ある朝のこと

「…あれ？もしかして…？」

俺の独り言にソラが反応する。

「マスター、どうされましたか？」

返事があると思つてなかつたので一瞬ビクツつとなりつつも応える。

「あー、いや、えーとな、実はここにきてどれくらい時間がたつたのかを考えてただけど…、計算してみたら丁度今日俺の誕生日に当たる日だと思つて…。」

ガタンツッ！

勢いよく椅子から立ち上がったソラが、わなわなと体を震わせながら聞いてきた。

「た…、たん、じょう、び…？ま、マスター、の…？」

何故そんな表情をしているのか分からないが質問には答える。

「あ、ああ、確かそのはずだけd「こうしてはおれません!!」…。」

言葉をかぶせられて戸惑う。

そしてソラはズイツと顔を寄せ言った。

「マスター。今日の探索はお休みください。これよりお祝いの準備を行いますのでマスターは一度お部屋でご休憩くださいませ。」

そしてさらに俺の横に接近したかと思うと

「うわっ!」

気が付くと俺はソラにお姫様抱っこされており、さらに俺の寝室の前まで移動していた。

「え? あ、あれ?」

その後まるで音を立てずに扉が開いたかと思うと、俺は自分のベッドの上で横になっていた。

「それでは準備をしまいきますのでお待ちくださいませ。」

声が出た方を向くと、こちらに1礼して扉から出て行くソラの姿が。

……………あ、れ…?今、何が起こったの…???

しばらく呆然としていた。

ソラってあんなに力持ちだったんだ……いや、それよりもあの動き、気が付いたら衝撃が一切なくベッドに移動させられてた……。

どれだけの技量があればあんなことができるのだろうか……。

確かにソラは元々カードだったという話は聞いたが……もしソラが他のカードと同じだとしたら、能力はどれほどだったのだろうか？

そう考えた瞬間背筋がブルツツと震えたので考えるのをやめた。

にしても、部屋で休憩しているように言われたが、いつまでいればいいんだろう？

……ちよつと覗いてみる……？

あ、いや、これは別にやましいことじゃないぞ。そ、そうだ。トイレに行くときなんかは絶対に部屋から出ないといけないわけだし。うん、そうだ。トイレに行くという体で外に出て、どれくらい待っていれればいいのか聞くことにしよう。

頭の中で言い訳を考えて、少し緊張しながら部屋の扉を開ける。

自分の部屋なのに緊張するって……等と考えながら扉を開けるとそこには……

「あーマスター!!まだ出てきちゃだめですよ!」

可愛らしい女の子がいた。

……え?この子、誰?

こちらを見つめてプンスカといった感じで頬を膨らませている少女。

「ソラさんから部屋で待つててツて言われてたんじゃないんですかあ?」

腰に手を当ていかにも怒ってますよってポーズをとっているが、美少女がすると逆に可愛い。

っていうか本当にこの子は一体…。

透き通るような白い肌にエメラルドグリーンの瞳。

魔法使いのローブのようなものを身に纏い、バランスの取れた程よいサイズの胸の谷間がチラチラ見える。

緑を基調としたふんわりとしたスカートを穿き、幼さと大人っぽさを併せ持っている。

…ごめん、嘘ついたわ。俺、この子良く知ってる。

さつきからチラチラと視界に入っていたが、彼女の後ろでは『人ならざる者たち』が、部屋のあちこちをせっせと動き回っていた。

そう、この目の前の美少女。間違いない『フウカ』だ。

「えつと…、フウカ…だよな…?」

念のため確認すると、少し首をかしげながら不思議そうに答えてくれた。…可愛い。「はい、そうですけど…?」

何故そんなことを聞かれるのかといった表情で頭の上には?マークを乗せるフウカ。

…いやいや、?マーク浮かべたいのはこっちだから。

「あのさ、なんで拠点で実体化できてるの?」

とりあえず単刀直入に聞いてみる。すると

「なんでって…、今日はマスターの誕生日だからに決まってるじゃないですかあ?」

….:….:….:そうか、プレイヤーの誕生日にはカードは実体化できるのか….

とりあえず思考を放棄して、「もうなんでもいいや」と思いながら辺りを見回す。

部屋のあちこちでは俺のカードたち（実体）が飾りつけをしたり料理を運んだりして

いた。

比較的人型に近いメンバーは、主に細かい作業となる部屋の装飾や配膳を行い、動物型のメンバーは、机を押して移動させたりレイアウト担当のようだ。

「マスター。まだ準備は整っておりませんが……どうされました？」

ソラが俺に気付きやってきた。

「あ、ああ、どれくらい待たばいいかなと思って……」

「申し訳ございません、お伝え忘れてましたね。……もう間もなくですので、よろしければこちらでソファアールに掛けてお待ちになってください。」

ソラに促され部屋の端にあるソファアールへ座る。

うわ！めっちゃフカフカ……。こんなソファアールあったっけ？

高級感のある白い毛でできたフカフカソファアール。

触り心地も座り心地も最高のそれに驚いていると、不意にソファアールの端の方が動いたような気がした。

ん？と思い覗いてみると

「……………」

「……………ガウ。」

ビヤツコと目が合った。

…このソファア、お前だったのか…。

表情一つ変えることなくビヤッコをソファアと言い切ったソラを「なんて恐ろしい子！」と思いつつ、それでも最高の肌触りのビヤッコソファアの感触に心奪われる俺。

しばらくその感触を楽しんでいると、俺の前に一人の美女が現れた。

「お待たせいたしました、ご主人様。準備が整いましたのでこちらへお越しくださいます。」

ブロンドの髪に天使を思わせるような服。

背中には白い羽を生やし…って、まんま天使だった。

俺を呼びに来た『聖天使エリー』に席まで案内される。

席に着くと正面にはソラが、左右にはエリーやフウカを始めとした人型メンバーが、机の回りには席に着くのが難しい他のメンバーがずらりと並んでいた。

「…コホン。それではこれより、マスターの誕生日会を開始いたします。」

わーわーわー

パチパチパチパチパチ

ガオオオオオ!

グオツオオ!!

お、おお…なんとか迫力がすごい。

「では…。」

ソラが目配せをすると、部屋が急に暗くなった。

そしてロウソクにぼんやりとした明かりが灯されて

ハッピーバースデー トゥーユー

ハッピーバースデー トゥーユー

ハッピーバースデー デイア マスター（ご主人様ー）（ガウガー）

ハッピーバースデー トゥーユー

パチパチパチパチパチパチパチパチ…

ロウソクの刺さったケーキを前に、みんなで歌を歌ってくれた。

「さあマスター、火を…。」

みんなの思いにジーンと感動していた俺は、ソラの声に促され、ロウソクにフウッと息を吹きかけて火を消す。

パチパチパチパチパチパチパチパチ…

部屋が明るくなり、周りには満面の笑みのみんなの顔。

「さあ、今日はお祝いです。遠慮なく食事の方を召し上がってください。」

ソラの言葉にがやがやと食事をとり始めるみんな。

「マスターもどうぞ。」

「あ、ありがとう。」

俺もソラが取り分けてくれた食事を食べる。

…美味い。

「ねえねえマスター、こっち向いてえ？」

隣に座っていたフウカが話しかけてきたのでそちらを向く。

「はいマスター、あーん♪」

「え、え？あ、あーん…。」

言われるがまま口を開くとフウカがその手に持ったスプーンで食事を食べさせてくれた。

「フ、フウカさん、ずるいですよ。ご主人様、こちらにもお願いしてよろしいですか…？」
そう言って控えめに主張するのは反対側に座っているエリー。

「ご主人様、あーん…。」

慈愛に満ちた顔で俺に食事を食べさせてくれようとするエリー。

うむ。両手に花というやつだな、これは。

左右からの接待に浮かれた顔をしていると、急に正面から何かを感じた。

ちらりと視線をやると、無表情なんだけど何か後ろに背負ってそうなソラさんの目がこちらをじつと見ている。

うつ…。こ、怖いのですが…

「ねえますたあ…こつちむいてよお。」

ふと腕に柔らかいものが当たり、なんだろう？と思いつちらを見ていると、そこには俺にしなだれかかるフウカの姿が。

「え、お？ど、どうした!？」

思わず声が裏返ってしまった。

「ん…、ますたあ…。」

さらに俺の肩へ顔をグリグリと擦りつけてくるフウカ。

な、なんかおかしいぞ…：…つつ！酒の匂い!？」

突然の行動に動揺していると、フウカの口元から微かにアルコールの香りがした。

「まさか!？」

机の上には様々な種類のおかずと飲み物。その中には一目でアルコールと分かる瓶も何本か混ざっていた。

「そ、ソラ、もしかしてアルコールもあるのか?」

思わず確認すると無表情のまま応えるソラ。

「ええ、せつかくのお祝いですので奮発しました。それにしてもマスター、とても楽しそうですね。」

何となく言葉に棘がある。ふとフウカと反対側の腕にも重みを感じたのでそちらに視線をやると

「……主人様あ……。」

赤い顔をして俺にくつついてくるエリーの姿。

おいおい、二人してお酒弱すぎだろう…。

ちらりと視線をソラに向けると、その整った眉が若干吊り上がっていた。

ひい…

「あ、お、俺ちよつとトイレに行ってくるわ!」

これ以上視線に耐えられない。そう思い離脱を試みる。

「ああ、マスターあ、どこ行くんですかあ?」

「……しゅじんさまあ……」

くつつく二人を無理やりはがし席を離れトイレへ。

…ふう。

部屋に戻るとなんだかよく分からないことになっていた。

獣系のモンスターたちがあちこち走り回り、人型のモンスターたちは笑ったり泣いたり、もくもくと食事を続けていたり。

せつかくの部屋の飾りつけも獣型モンスターがぶつかつたのだろう。所々千切れたり破れたりしていた。

…なんでこの一瞬でこんなカオスな状態に…？

あつけに取られていると、ソラが机からユラリと立ち上がるのが見えた。

そして俺の方を向き、

「…マスター…、少々お部屋でお待ちいただいても宜しいですか…？」

その有無を言わせぬ迫力に思わずブンブンと首を縦に振り、急いで自室へと向かった。

そして俺が部屋の扉を閉めて一拍後、急に外がシーンと静かになった。

それから数秒後

「マスター、もう出てきていただいて結構ですよ。」

ソラの声が聞こえたので、そーつと扉を開けて外に出てみる。

するとそこには軍隊か!?というほどピシツとした格好のモンスターたちが。

「マスター、大変失礼いたしました。この子たちには私の方からしつかりと言っておきましたので、もう粗相することは無いと思います。さあ、続きを行いましよう。こちらへ…。」

先程と比べ、かなり緊張感が漂う空気の中、俺の誕生日会は粛々と進められていった…。

そしてその晩

片付けも終わり、気が付けばカードたちは皆実体化を解き元のカードへと戻っていた。

俺も風呂から出て今は自室でゆっくりしている。

…にしても、なんか色々あったけど、…忘れられない思い出にはなるかな…。
今日の出来事を思い出しつつ考える。

すると

コンコンコン…

「マスター、失礼してよろしいでしょうか？」

ソラの声が聞こえた。

「ああ、いいよ。」

俺が答えると彼女は音も立てずに扉を開けてススツツとへ部屋の中へ入ってきた。

「マスター、今日は色々と有難う御座いました。」

いきなりお礼を言ってくるソラ。

あれ？礼を言うのはこっちの方じゃ…？

「今日はカードたちもマスターの為に祝いができるかと少々張り切り過ぎてしまったようです…。」

ああ…、あの騒ぎね…。

「別に気にしてないよ。むしろあれだけ楽しそうにしてくれて俺も嬉しかった。ありがとう。」

素直に気持ち伝えるとソラはフワツとした笑顔を見せてくれた。

そしてベッドに腰掛ける俺の隣に座り

「マスター、最後に私からマスターへ誕生日プレゼントがあります。」

「ん？わざわざ用意してくれたのか？別にそこまでいいのに…。」

「いえ…、これは私の気持ちですの…。」

そう言いながら徐々に距離が近づいてくる。

「あ、ありがとう。なら有難くいただくよ。で、でもそんなに近づいたら渡しにくいんじゃないか…？」

二人の距離はすでに0となり、足や肩はびったりとくっついてしまっている。

「いえ…この方が渡しやすいんです…。」

そう言いながらもさらに俺の方へ体重をかけるソラ。

「え、えーつと…、そ、ソラ…:さん？」

「…マスター…、本当は…分かって…ますよね…？私の…プレゼント…。」

すでに手と手どころではなく、お互いに体の半分以上がくっつき、ソラに關していえばその豊満な胸部が潰れて形を変えるほど密着している。

「マスター…。」

「ソラ…。」

段々近づいていく二人の顔。そして……。

チュンチュン
チュンチュン……

「……ター…、……マスター…。」

俺を呼ぶ声に意識がゆっくりと浮上していく。

「おはようございますマスター。朝ですよ。」

寝ぼけた頭のままで声ができる方を向くと、そこにはいつも通りの格好のソラがいた。

「食事の準備はできていますので、着替えたらお越しくださいね。」

ぼーっとした頭でキョロキョロと部屋を見回すと、何の変哲もない自分の部屋が目に入る。

「…マスター、どうかなさいましたか？」

「ん…、誕生日会…？」

「？誕生日会…？マスターお誕生日なんですか？」

頭にはてなマークを乗せたソラが訪ねる。

「え…？あ、い、いや、…寝ぼけてたみたいだ。う、うん着替えたら行くから向こうで待ってて。」

「？わかりました。」

部屋を出て行くソラ。

もしかして……夢…？

にしてはかなりリアルな：

頭に大量のはてなマークを浮かべつつも結局何もわからず、全て夢だということにしてなんだかモヤモヤした気持ちで朝の準備を始める俺。

その様子を影で見つめる少女の口元は、ニヤツと歪んでいた…。

86話

拠点に帰った俺を待っていたのは、ソラではなく別の存在だった。

「お、帰ってきたね。おかえりー。」

見た目は人間だが、中身は全く違う。

初め見たときにそう感じた。

「あんたは…。」

「僕は君たちが管理人と呼ぶ存在だよ。今回は50階をクリアした君に今後の話をしに来たんだ。」

帽子をかぶり、サングラスをかけ、マスクをしたうえで、全身を包むような服を着て肌がほぼ見えないような恰好をしている。

「さて、あんまり時間も無いし、さっそく話をさせてもらおうよ。…おっと、その前に…。」
管理人が軽く右手を振ると、なんといきなり俺の横にソラが現れた。

「…え？あ、ま、マスター？これは一体…？」

どうやら管理人の力でソラをここに呼び寄せたようだ。

「彼女にも聞いてもらっておいた方がいいからね。呼ばせてもらったよ。」

俺以外の声にバツと反応したが、管理人の姿と今の話で大方の事は理解したようだ。「えーつと、じゃあ何から話そうかな…。」

こちらの返事も待たずに管理人は喋り始めた。

管理人から聞いた話をまとめると次の通り。

・ダンジョンは基本この50階で終わり。先は続いているけど今までとは全然内容が違う、所謂エンドコンテンツのようなもの。

・51階以降は挑戦するのもしないのも自由。どんなところかは自分で確かめて。最深处は100階。

・そろそろ管理人達の大会（俺たちが元の世界に帰るために参加する最終目的）が始まる時期になる。

・それに先立って、俺たちは代表を決める予選をすることになる。ある程度他のプレイヤーたちが40階を突破したら開催予定。

・予選、本番のルールは「LP8000 初期手札5枚 先攻ドロワー無し デッキ枚数40枚以上60枚以下 EXデッキ枚数15枚まで 同名のカードは3枚まで」

・ダンジョン攻略や50階までのデュエルエリアとルールが異なる部分があるから注意してね。

わざわざ直接会って説明する必要のあることだろうか？というレベルの話ではあったが、どうもこの説明をするのはついでで、本当の要件は俺に直接会うことだったらしい。

「君には最初から期待してたからねー。多分予選も君の優勝になるんじゃないかな？」嬉しそうに話す管理人だったが、そんなことより俺は聞いておかなければならないことがあった。

「なあ…、なんで俺たちだったんだ？」

真剣な顔でしっかりと目を見据えながら聞くと、相手も茶化す雰囲気ではないと悟ったのだろう。

「…確かに、君たちの立場からすれば突然連れてこられたわけだろうし、申し訳ないと思ってるよ？少しはね。でも、こっちにだって色々都合があるんだ。…どうしても君たちじゃないと駄目な理由が…。」

最後の方は声小さくなっていき聞き取りにくかったが…、俺たちじゃないと駄目な理由…か。

「それは聞いても教えてはもらえないんだろ？」

おそらく本当に申し訳ないという気持ちは少なからずあるのだろう。

小さくうなずいた管理人は言った。

「それを話せるのは、この大会で優勝した人間のみ。もし知りたいなら…頑張つて優勝して。」

…そうか。まあ、今はこれでいいだろう。

理由があつて、それを知れる機会があるとわかっただけでも。

俺が黙つたことでもう質問は終わりだと思つたのか、パツと表情と雰囲気を変えてきた。

「そうそう、話は変わるけど、実は君が50階をクリアする直前に別の人がクリアしちゃつたんだよねー、たまたま。」

「…おいおい、そんなこと言つていいのか?」

「いいのいいの、だつて本当に偶然なんだもん。」

聞けば40階までは誰でも繰り返し挑戦すれば突破できるようになっていてらしいが、45階の中ボスや50階のボスは、カードたちとの強い絆をもつ人にしか勝てないようになっているとのこと。

だが今までの大会でもあつたそうだが、極々稀に本当にたまたま運良く勝つてしまう人もいるみたい。それこそ何千万人に1人の確率で。

だから50階をクリアした時に『初めてクリアしたボーナス』が貰えなかつたんだつ

て。

すっかり忘れてたよ。

ま、何はともあれ、結局管理人が来た理由は「俺に期待してるから頑張つて」って話を直接したかっただけって事らしい。

話した内容の半分以上ははずれ予選が始まるときに全プレイヤーにお知らせされるって言ってたし。

「じゃ、僕はそろそろ帰るねー。…っとそうだ。」

俺たちに背を向け、帰る体勢になっていた管理人がふと思い出したかのように言った。

「わざわざ君に言う必要は無いだろうけど、カードたちをしっかりと信じてあげてね。それから…ソラ、だっけ？しっかりとご主人を支えてあげてね。」

俺とソラ、それぞれに言葉をかける。

「そして…」

そこで俺たちから少し視線を外し

「……………、ま、いつか。頼んだよー。」

そう言うのと、まるで最初からそこにいなかったかのように一瞬で消えてしまった。

その後、俺たちは家に帰り、ソラは50階をクリアしたことを喜んで、ささやかながらお祝いをしてくれた。

その晩パソコンの掲示板を見ると、管理人が言っていたもう一人の50階突破者がすでに情報を流していたようで相当な大盛り上がりとなっていた。

『ついに50階突破!!』

『某氏敗れる!?!』

『50階の攻略方法!!』

色んなスレが立っており、その全てが流れるのが早い早い。

確かに40階までと比べて、ここで攻略がピタツと止まってたわけだし、騒ぎになるのも無理はないか。

中には嘘だのチートだの書いてる人もいたが、そのうち本当だということとは分かるだろう。

てかこの『嘘だ!』って書いてるの、某氏じゃないか…?

ざっと内容を流し読みし、大した情報がないことを確認してから掲示板を閉じる。

あ、そうだ。

50階をクリアしたことだし、スキルとか増えたりしてないかな?

そう思い、スキルのページを開こうとしたところで画面の端でチカチカしているポタ
ンを見つけた。

『お知らせ』と書いてあるそれを選択すると、先程管理人が話した内容が纏められてい
た。

さらにその下に追加でもう1文。

※51階以降は10階ごとに報酬があつて、100階までたどり着ければものすごい
お宝が手に入るよん♪

なるほど…。ま、とりあえず明日から挑戦してみるところでしょう。

まずは実際に見て見ないと何とも言えないし。

多分大会までそんなに時間がないみたいだし、行けるところまで頑張ってみようか。

87話

その後、DP交換リストを眺め、めぼしいものが無いかチェックしたら、今日は家で休むことにした。

面白そうなものはいくつかあったので取っても良かったのだが、一度先のエリアの確認しないことには、取ったスキルが無駄になる可能性もある為、今は確認だけにとどめた。

家に入り、リビングのソファアに座ると、見計らったかのようにソラが飲み物を出してくれる。

「どうぞ、マスター。」

「ああ、ありがとう。」

出されたコーヒを一口飲み考える。

既に家事を終えたのだろう、ソラも俺の横へと座る。

「……………」

「……………」

この無言の空間がなんとも心地いい。

ふと、ソラが口を開いた。

「マスター。」

「……ん？」

「……私は、いつでも、どこでも、いつまでも…、マスターの味方ですから…。」

「………ん、ありがとう。」

何故今そんなことを言ったのか。

その理由を知るのはまだ先の事になるが、今はそのソラの気持ちをととても嬉しく思った。

次の日

今日は51階に挑戦する。

一応掲示板を見てみたが、先に50階をクリアした例の人はまだ情報を上げていない。

まだ入ってないのか、それとも出し惜しみしてるのか…。

ま、俺も行ってみればわかる事だ。

そういえば、事前情報が無い探索なんて、ここに連れてこられた時以来じゃないか？
これまでは常に『某氏』が先頭を走っていたし、俺もかなりマイペースで進んできたから、基本事前情報が無いって事は無かった。

しかし今回は俺（ともう一人）が先駆けとなる。

…というか、昨日の管理人の話が本当なら、俺ともう一人のプレイヤー以外は51回以降に進むことは無いんじゃない？

ま、まあいいか。その辺は考えないつと。

転移機能で49階へ飛び、ガイドさんとおやしさんから祝福の言葉を受ける。

そして降りてきた50階。

部屋の中央にあったリングは跡形も無く消え去っていた。

昨日のデュエルを思い出し、少ししんみりした気持ちになったが、すぐに気を取り直し正面の扉へ進む。

『51』とでかだかと書かれた大扉を開け、中にある階段を降りていく。

さあ、どんなフィールドがまっているのだろう。

階段を下りた先にあつたのは、予想していた広大なフィールドではなく、小さな小部屋だった。

中央には転移石があり、正面の壁には小さな扉。他にも机やいすなどの簡単な家具も置いてある。

一先ず転移石に触れて機能が使えるようにしておく。

するとそれを待っていたかのように、室内にメッセージが流れた。

「5階へようこそ。ここから先はこれまでのエリアとルールが変わります。よくよくご確認して頂き、ご理解の上お進みいただけますようお願い申し上げます。ルールに關しましては、向かって右手の机の上に書類にて纏めておりますので、必ずお目通し下さい。それでは、良いデュエルを。」

ルールの変更か。管理人も言ってたな。

早速机の上の書類に目を通す。

ふむふむ……

大体纏めるとこんな感じ

・51回以降は、モンスターにプレイヤーが直接攻撃してもペナルティは無い。
 ・モンスターを発見した時、デュエルを宣言しなければ、モンスターがプレイヤーに直接攻撃可能。

・デュエル以外でモンスターを攻撃、又は自身が攻撃を食らう際、ダメージの計算などはデュエルとは別の計算式にて行われる。※詳しくは別紙参照

・デュエルを宣言した場合、通常通りのデュエルが行われるが、これまでの増援システムは無くなり、代わりに近くにいる別のモンスターが乱入してくる場合がある。

・デュエル以外でプレイヤーのライフが0になった場合も、強制的に拠点へ転移される。

・デュエルを行う場合、これまでと違い毎回デツキをシャッフルし、手札を引く事から始める。ダンジョンに入った際のドロウも無し。

・デュエル勝利後、場のモンスターが残るシステムも無くなる。

・デュエル勝利後入手できるカードは、各階それぞれ決まったものの中からランダムで選ばれる。

・デュエル以外で勝利した時には、カードは入手できず、代わりにそのモンスターにちなんだドロップアイテムが現れる。拠点のパソコンにてDPに変換可能。

・10階ごとに報酬が手に入る。(ボスは必ずいるとは限らない)

・最下層（100階）まで到達できれば、良いものが入手できる。

●デュエル以外での戦闘について

・デュエル以外で戦闘を行う場合、プレイヤー・モンスターにはそれぞれHP（ヒットポイント）が設定される。

・それぞれの攻撃によりお互いのHPを削り、HPが無くなった時に敗北扱いとなる。

・HPへのダメージ数は、モンスターはそれぞれの個体に設定されており、プレイヤーはその時の持ち物（ダンジョン内で入手した物、もしくはDPにて交換した物等）によって数値が変わる。

・お互いの攻撃によって体が傷つくことは無く、あくまで設定されたHPが減る。但し攻撃の衝撃などでこけたりぶついたり原因で出来る怪我はこれに含まれない。

うーんと、これは…。

ここに来て、剣を持って戦う普通のダンジョン攻略をさせたいのだろうか？

…まあ、一度試してみないと分からないし、とりあえず入ってみるか。

先に続いているであろう扉を開くと、そこは石造りの洞窟。

まるでこのダンジョンの1階から10階の造りにそっくりだった。

内装や出てくるモンスターが一緒ってことは無いよな…？

とりあえず慎重に前へと進んでみる。

少し進むと早速分かれ道が。どうやら上階と同じマップということはないさそうだ。

とりあえず勘で左の方へ進む。するとスキルで表示されているマップ上にモンスターを示す赤い光点が現れた。

初めての接敵の為慎重に少しづつ進んでいくが、どうやら向こうも俺に気付いているようで、徐々にこちらへと近づいてくる。

そして目視できる範囲までその距離が縮まったとき、

「なっ!!?」

現れたのは巨大なゴーレムだった。

【ダンジョンゴーレム 星6 A1800 D2200 通常モンスター 守備表示】

「クツ、高レベルモンスターが普通に出てくるって訳か…」デュエル!!」

流石にあんな奴とガチンコで殴り合うとか御免蒙る。即デュエルを宣言。

つと、これ以降の階は毎回手札を引き直すんだっけ。

5枚の手札を引き、改めて…

「俺のターン、ドロ―！」

カードを引く。

とりあえず、奴を倒すにはこちらも上級モンスターを呼ぶ必要が有るな。

そういえば、戦闘後に場にモンスターが残るシステムも無くなるって書いてあったから、次のデュエルで1ターン目からアドバンス召喚をすることも出来ない…か。

…割とルール厳しくない？

不利な状況から始まる戦闘に心の中で文句を言いつつ、俺は場にカードを出す。

「行くぜ！俺のカードは……！」

88話

ダンジョン51階。

これまでの階とは異なるルールとなり、さらに出現するモンスターも高レベルモンスターや、特殊な効果を持つモンスターばかりとなり、俺はかなり苦戦を強いられる事となる。

最初に戦った『ダンジョンゴーレム』は辛くも勝利。

さらに進んで遭遇した『ダンジョンコウモリ』は「1ターンに1度相手モンスターを1体破壊できる」効果を持っていたが、能力値はそう高く無かった為効果を発動される前に倒せた。

他にもレベル7の『ダンジョンマッチョ』や凶悪効果を持つ『ダンジョンバイパー』、『ダンジョンネズミ』

等、数種類の魔物と戦った。

そして今俺は家にいる。

「あく……、つかれた……。」

これだけ集中してダンジョン探索したのはいつぶりだろうか？

何もかもが初めてなので、短時間の探索にも関わらず非常に神経をすり減らした。

「お疲れ様です、マスター。」

そういつて飲み物を持ってきてくれるソラ。

…うん、美味しい。

「疲労回復の効果があるお茶をご用意しましたが…お口に合いますか？」

ああ、心も癒されるわ…。

「うん、めっちゃ美味しい。ありがとうね。」

「いえいえ、どういたしまして。」

ニコツと微笑むソラ。

ああ…幸せじゃ…。

「ところでマスター、探索の方はいかがでした？」

ソラに聞かれて今日の探索について思い出す。

「うーん…何というか、1戦1戦が結構大変なんだよな…。これならできるだけ戦闘は避けた方が良いのかもしれない。」

「であれば、魔物から身を隠せるようなスキルがあれば良いですね。」

確か交換リストの中にあつた気がする。

「じゃあ基本的には戦闘を避けて先のルートを探して、必要になつた時にDP稼ぎかな？」

なんだ、結局今までと変わらないや。

「そうですね。それがよろしいかと。」

ちなみに手に入れたカードは説明に書いてあつた通り完全ランダムで、1枚当たりの変換できるDPは、これまでの階と比べかなり多くなつていた。

また、入手したカードは51階に出現するであろうモンスターカードと、割と使いやすい汎用カード（魔法・罠）等だったので、デッキの強化もできそうだ。

ちなみにパソコンに新しいボタンが追加されており、確認すると51階で手に入るカードリストが表示された。

と言つても今の時点で確認できるのは入手済みのカードだけで、残り何種類あるかが分かるだけだ。

ソラとの会話を終え、パソコンで魔物から見つかりにくくなるようなスキルを探して交換する。

…にしても、前に気になつていたこの剣術などのスキルはここで役に立つという事な

のか…。

50階をクリアしたことにより種類を増やした戦闘系のスキルを眺めながら考える。
(ま、俺はできるところまでデュエルのみで頑張りますか。)

それから数日後

現れるモンスターと時には戦い、時には避け、何とか60階までたどり着いた。

どうもこれまでのフィールドと比べると、思った以上に狭いような気がする。

マップを埋めるのにはいいことなのだが、フィールドが狭いということは逆に、戦闘中に別の魔物が近づいてくる可能性も高いという事だ。

ここにたどり着くまでに何度かモンスターの乱入を経験した。

基本戦闘の途中での乱入なので、こちらの場が整っていることの方が多いが、場合によつてはモンスター同士の効果の相性が良い場合、とんでもない効果を発揮する事もあ

るので注意が必要なのだ。

そんなこんなで辿り着いた60階だが…、どうやらボスのような存在はいないようだ。

部屋の真ん中に宝箱？が1つ。

罨を想定してそーっと近づき確認する。

結局罨は無かったが、箱の中には1枚のカード。

こ、これは……!!

聖獣・黄龍 星12 光 ドラゴン族／効果

A4000 D4000

このカードは通常召喚できない。

このカードは自分の場に『聖獣・朱雀』『聖獣・玄武』『聖獣・青龍』『聖獣・白虎』がいる時のみ手札から特殊召喚できる。

また、このカードは、自分の墓地に上記4体の聖獣カードがある時、それらを全て除外することでも手札から特殊召喚できる。その際、このカードは『聖獣・黄龍（怒）』となる。

このカードは相手の発動する効果の対象にならない。

こ、黄龍…。

朱雀たち四聖獣は、東西南北の四方を守護すると言われていたが、その中央を守るのが黄龍と言われている。

まあ諸説あるだろうが、俺としてはデッキ内容に合う強カードを手に入れたという意味合いの方が強い。

まあ召喚するのは中々難しいかもしれないが、聖獣モンスターである以上、融合の騎士と融合できる可能性だってある。

もしかしたら70階以降で手に入る可能性も…

だとしたら是が非でも手に入れなければならない。

何が『51階以降は挑戦するのもしないのも自由』だよ。こんなの見せられたら、挑戦しないはずがないじゃないか。

つてことは…とりあえず予選がいつ始まるか分からないから、できるだけ急ぐ必要が有るな…。

扉のそばにあった小型の転移機能に登録し、俺はすぐさま61階へと向かった。

そして…

「みんなー久しぶりー。みんなのアイドル、管理人だよー♪ そろそろ準備も整ってきたことだし、僕の所から大会に出場する代表者を決める、予選を開催するよー!! いええーい! ドンドンパフパフ!!」

61階に到達してから約一ヶ月後、急に管理人からメッセージが来た。

おそらくこのプレイヤー全員に聞こえるようになってるんだろうけど…効果音を自分の口で言っていると何だか物悲しさを感じる。

「といっても、今からすぐには皆も準備できてないよね? だから、予選は三日後に開始することにしたよん♪参加資格は40階の突破。現時点で40階をクリアしてる人には

みんな強制的に参加してもらおうからねー。それと、まだの人でも3日後までに40階クリアできれば参加資格はあるからー。もうちよとの人は頑張ってみてね！」

三日後…か。

【詳しい内容や予選のルールなんかはパソコンで見れるようにしておくから、必ず確認するんだぞ！じゃあ、また三日後にねー。バイバーイ♪】

プツツ

電話を切った時のような音がして、管理人からのメッセージは終わった。

さて、じゃあ早速パソコンを見てみようかね？

画面を見ると『予選について』のボタンが追加されており、開くとルールなどの詳細が書かれていた。

大体は前に管理人から直接聞いた話と変わらないのでスルーでいいだろう。

一応直前に見直しておくぐらいでいいか。

掲示板を覗くと、まあみんな色んな事書いてるわ。

「自分が優勝する！」って人もいれば、「ようやく終わりだー！」と喜んでいる人もいる。

中には「この生活が気に入ったから帰りたくない」って人もいるみたい。

正直俺も、ここでの生活を捨てて元の世界に帰るのは惜しい。

確か大会に優勝すれば何か特典があったはずだし、それで良いように願い事を叶えてもらえないかなーっと思ってるんだが…。

ま、何にせよそのためには優勝しないとイケない。

皮算用もいいけど、まずは目の前の一戦。油断しない様に確実に勝って行こう。

89 話

管理人のメッセージがきてから3日後。

遂に予選の日がやって来た。

「やつほー、管理人だよー。今日は待ちに待った予選の日だよー♪みんな準備はいいかな???じゃあ参加資格がある人は、特別フィールドに飛ばすからねー。はい1、2の3つと。」

一瞬で景色が切り替わり、小さな部屋：ここは控室?か?

「参加する人はその控室で呼ばれるまで待つてねー。参加しない人は詳細にも書いていたけど、パソコンからライブ配信で対戦を見れるから、是非是非推しの人の応援してあげてねー。」

ちなみに参加者も控室にあるモニターで対戦の様子は見れるが、テレビの様に1デュエルにつき1チャンネルになっており、ボタンで切り替えてみたい対戦を探すことになる。

また、参加者は参加中掲示板が見れなくなっているようだ。

「そうそう、思ったより人数が多くなったから、この予選も予選と決勝の2回に分けて行

うよー。ちょっとややこしいから、今まで予選って呼んでた代表者を決めるこの戦いを、代表者決定戦って呼ぶことにしようか。じゃ、『代表者決定戦 予選第一回戦』開始だよ!!」

管理人が宣言し、代表者決定戦は始まった…ようだ。

俺は控室から移動していないので、2回戦以降になるのだろう

どうせ暇なので、モニターの電源を入れて他のプレイヤー達の戦いを見ることにする。

……ふむふむ。

お?このプレイヤーはうまいな…。

……ああ、こりや逆転は無理だな…。

おお?何だ今のカード??

まじか?あそこから逆転した!?

ボタンをポチポチ切り替えながら他のプレイヤーたちデュエルを観戦する。
俺の知らないカードもたくさん出てきて、見てるだけでも面白い。

そして予選は第2回戦、第3回戦と続き、段々と人数も絞られてきた。

…つてか、俺まだ呼ばれてないんだけど…？いつになったら呼ばれるのか…。

それからしばらく観戦していると、ようやくアナウンスが入った。

「お待たせいたしました。今行われているデュエルの次があなたの出番となりますので、準備の程お願いいたします。」

お、ようやくきたか。

ホント待ちくたびれたよ。

他のプレイヤーたちの観戦してたら、すでに何度か戦ってる人もいるのに自分が未だ呼ばれてなかったからちよつと不安になってたんだよね。

「対戦の準備が整いました。これよりデュエルフィールドに転移します。」

アナウンスがあつてからモニターを消し、目を閉じて集中していると再びアナウンスが入る。

そして普段転移機能を使う時と同じくフワツとした感覚を味わい、目を開けるとそこはデュエルリングの上だった。

41〜50階で散々使用したデュエルリングと同じ形だが、若干こつちの方が大きい

か？

正面には対戦相手であろうプレイヤーがいる。

たしか…この人はさつきモニターで見た気がする。

「……………」

「……………」

お互いに認識しているが、特に言葉を発することは無い。

【それではデュエルを開始します。】

デュエル開始のアナウンスが流れる。

互いにカードを5枚引き、

「デュエル!!」

デュエルを宣言。先行は…

「…僕のターン。」

向こうか。

確かモニターで見たときは水属性を多用していたように思ったが…さて、何をしてくる…？

「僕はモンスターをセット、カードを1枚セット、ターンエンド。」

ふむ、無難な動きだな。よし……!

「俺のターン、ドロー!!」

引いたカードは…ナイトメア。

そうだな、このデュエルは俺たちにとって初陣だし、先ずはお前たちの力を見せつけてやるとしようか。

「俺はナイトメアを通常召喚。」

ナイトメア 星3 獣族/効果

A 900 D 1300

「……。」

思ったより能力の低いモンスターが出てきたせいか、逆に警戒を強める相手。

「俺はナイトメアの効果を発動。」

ランクが上がったことにより、こいつはかなり良い効果を得た。

「このカードが召喚された時、デッキから『邪毒蛇』を手札に加えることができる。」

「……。」

相手は…動いてこないな。あの伏せカード何だろう？

まあいい、これで必要なカードは揃った。一気に行くぜ！

「手札より、魔法カード『融合』を発動！場の『ナイトメア』と、手札の『邪毒蛇』、『草原の王レオ』を融合!!現れる、合成魔獣キメラ!!」

合成魔獣 キメラ 星8 闇 獣族/効果

A2800 D2400

このカードが攻撃を行う際、相手は魔法・罫・モンスター効果を発動できない。

このカードが破壊された時、このカードの融合素材となったカードを場に全て特殊召喚できる。

「なっ?!」

場に現れるのは2頭と蛇の尾を持つ魔獣。

流石にこれには相手も驚いたようだ。

「くっ…、オリジナルカード。これがエースカードって事か…。」

ん？何か勘違いしているようだけど…、まあ確かにキメラもエースカード級の能力を持つてるし、そう思わせといった方が都合がいいか？

「…ふっ。合成魔獣キメラで、その伏せモンスターを攻撃!!」

何となく「よく分かったな」なポーズを入れつつキメラで攻撃する。

相手のモンスターは…

「僕のモンスターは『爆裂ウニ』!このカードが戦闘で破壊された時、破壊した相手カードも一緒に破壊される!」

ニヤリっという表現がピッタリな表情をして、相手はカードの説明をする。

しかし

「…?!?!?!」

キメラの攻撃によって爆発したウニ。

巻きあがる煙が晴れた時、その場には無傷のキメラの姿が。

「甘いな、合成魔獣キメラの効果。このカードが攻撃を行う際、相手は魔法・罠・モンスター効果を発動できない。」

「なんだって?!」

上手いこと相手のエースモンスターを破壊できたと思っていた相手は、おそらく予想していなかったであろう結果に動揺する。

「残念だったな。じゃあ俺は「まだだ!」…?」

バトルフェイズが終了し、メインフェイズ2に移ろうとしていた俺の言葉に被せるよ

うストップをかける相手。

「僕は罠カードを発動！『船幽霊の手』!!」

このタイミングで罠カード…。

まだ破壊を諦めてないのか？

「このカードは、自分の場の水属性モンスターが破壊されたターンのバトルフェイズ時に発動できる。相手の場のモンスター1体を破壊する！そのキメラの効果が発動するは自身の攻撃時のみ。なら攻撃が終了しているこのタイミングなら罠が通るはずだ!!」

自信満々にカードの説明をする相手。

確かにこのタイミングならキメラに罠は効く。

だけどな…

表になった罠カードから、何やらおぞましい腕が現れてキメラを絡めとり、そしてそのままカードに描かれた海の中へと連れ去ってしまった。

「よし、これで君のエースカードは倒した！次のターン、今度は僕のエースカードを見せあげるよ。」

キメラを倒せたのが余ほど嬉しいのかずいぶんニコニコとしているが、これから自分が行うことを考えると若干可愛そうに思えてくる。

いや、勝負の世界は非常なのだ。

「…喜んでいるところ悪いが、俺はキメラのもう一つの効果を発動させる。」
 「…?もう一つの効果…?」

俺の言葉にきよとんとした表情を見せる相手。

「このカードが破壊された時、自分の場に融合素材となったカードを全て特殊召喚することが出来る。」

「……………え?…えええー…?…?…?」

俺の宣言により、墓地から『草原の王レオ』『邪毒蛇』『ナイトメア』の3体が復活する。

草原の王レオ A1800

ナイトメア A900

邪毒蛇 A800

そしてまだバトルフェイズは終了していないので、この3体は攻撃を行うことが出来る。

「3体のモンスターでダイレクトアタック。合計3500のダメージだ!!」

「うわああ!!!」

一気に3000以上のダメージを食らい、後方へ吹き飛ばされる相手。

「く、くっそー……」

膝立ちになりながらこちらを睨むが、彼にはもう一つ残酷な現実を突きつけねばならない。

「メインフェイズ2、俺は魔法カード『リ・フュージョン』を発動。」

リ・フュージョン 魔法

自分の手札・フィールドから、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、その融合モンスター1体を墓地から特殊召喚する。

これにより、再び場の3体のモンスターは墓地へと送られ、奴がエースカードと評したモンスターが俺のフィールドに復活する。

「……………へ……？」

その様子を見た相手の、ポカンとした表情がとても印象的だった。

90話

その後、特に見せ場があるわけでもなく、デュエルは俺の勝利となった。

デュエルが終わった後、目に涙を浮かべている相手を見て、又デュエル中の言動と合わせ考え、おそらく自分より年下なのかもと思った。

…一人でこんなところに連れてこられて大変だったろうに…。

何はともあれ勝負は俺の勝ち。

決着がついた後は再び元の控室に戻される。

ちなみに俺が今使っているデッキの内容を簡単に説明すると、メインが聖獣&融合の騎士で、サブが合成魔獣キメラ。で、それらに關係する魔法・罫カードがそれなり入っており、残った枠には汎用カードが入っている。

汎用カードは先ほど使った『二者択一』や5-1階以降で手に入れたモンスターカード等があり、主にドロウ系や特殊召喚系が多い。

それらのカードで聖獣やレオ達をドロウするチャンスを増やしたり、場にモンスターを並べることで玄武などの上級モンスターを召喚しやすい場を整えるのが目的だ。

今のデュエルも、最終的には先述のモンスターカード(レベル4 A1800 他)を召喚し、カメラの攻撃で締めた。

控室に帰ってきてしてしばし、次の対戦はまだかな?と待っていると、不意にアナウンスが流れてきた。

【今日の全日程を終了いたしました。これにて予選は終了いたします。勝ち上がった皆さまおめでとうございます。負けてしまった皆様もお疲れさまでした。では決勝は明日行われますので、皆様を拠点へと転移します。今後については勝ち上がった皆さまにはパソコンに詳細が御座いますので、必ず確認の程お願いいたします。それでは明日も良いデュエルを。】

……………え?もう終わり???

気が付くと俺は拠点のパソコンの前へと帰ってきていた。

「あ、れー…??」

おかしい。何かがおかしい。

俺はまだ1回しか戦ってないはずなのだが…。

え？もう予選終わりなの？

つてことは俺予選突破???

えー…まさかあ…

混乱する頭のまま、とりあえずパソコンを見てみようと思いい画面を見ると、【決勝参加の皆様へ】と書かれたメッセーじと、【お疲れさま♪】と書かれた管理人からのメッセーじの2通が届いていた。

これまでの勘から、とりあえず管理人の手紙を先に開いてみる。

予選突破お疲れ様ー!!

ま、君なら楽勝だったと思うけどねー。

で、多分君は今「1勝しかしてないのに良いのだろうか…」なんて考えてるんじゃない？

だからちよつとだけ説明してあげるねー。

実は今日の予選、トーナメントで行ったんだけど、その表を作ったのはもちろん僕なんだ♪

だ・か・ら、僕が勝ってほしいと思う人には所謂シードになってもらってるよん。

君みたいに1戦だけで決勝進出！って人は流石にいないけど、2く3戦免除した人は数人いるんだ。

勿論平等にトーナメントを行ったとしても、そういうた人たちは普通に勝ち上がったきただろうけどね。

ま、時間の短縮って事で宜しく☆

そうそう、君はそんなことを気にするより、もっと優先することがあるからね？

ダンジョンの攻略、まだ100階にたどり着いてないでしょ？

絶対に君の役に立つものが手に入るんだから、頑張つてよねー。

とりあえずこの代表者決定戦が終わってから本戦が始まるまで多少時間があるから、その間に絶対ゲットするように！

なにはともあれ、君が予選突破したことに変わりはないから、明日の決勝で油断して負けたとか無いようにしてね。

じゃ、またねー♪

相変わらず先回りて人の心を読んでくれる。

まあ予選に関しての疑問は一応解けたし、良しとするか？

…それよりも、ダンジョン、ね…。

今のところ92階までは進んだんだけど、この代表者決定戦には100階到達は間に合わなかったんだよな。

なんか管理人からも強く押されてるし、決勝が終わったらまた頑張ってみるかな。

今日はとりあえずおしまい。

家に帰ってソラに癒してもらい（精神的に）、次の日を迎える。

そして

「頑張ってくださいね、マスター。」

「ああ、ありがとう。」

準備ができた俺は、いつ転移されてもいいように拠点で待機中だ。

俺を見送る為に、側にはソラもいる。

「マスター。」

不意に呼ばれ振り向くと

ふわっ……

ソラがそつと俺に抱き着いてきた。

「マスター、私たちの思いはいつだって、マスターと共にありますからね……」

「……ありがとう……」

しばし抱き合ったままで時間が流れる。

そしてどちらともなく離れた時、お互いの顔は真っ赤に染めあがっていた。

【おまたせいたしました。それではこれより代表者決定戦・決勝戦を行います。参加者を転移いたします。】

まるで見ていたかのようなタイミングでアナウンスが流れる。

「……………行ってくる……！」

「……はい、行ってらっしゃいませ。……武運を。」

そしていつものフワツとした感覚を経て、俺は昨日と同じ控室へと転移した。

「おっはよーみんな!!きようはついに決勝戦だよー!!昨日の予選を勝ち抜いたのは8人!!今日はこの8人でトーナメントをして貰って、優勝者は大会の代表になつてもらうよ!!あ、そうそう、今日は昨日みたいに何組かが同時にデュエルをするんじゃないやなくて、1組づつ行うから、参加者もそうでない人も安心して見てねー。じゃあ早速だけど、代表者決定戦・決勝、開始だよ!!!」

管理人の宣言と共に、ブウンッと景色が変わる。

デュエルリングの上に俺ともう一人。どうやら今日は第1回戦から出番のようだ。

「うむ、1回戦の相手は君だな?よろしく頼む!」

フレンドリーに話しかけてくる対戦相手。

「ああ、こつちこそよろしく。」

お互いに手を差し出し握手。

…む?中々の握力…って、よく見るとこいつ筋肉すごいな。

腕なんか超ムキムキだし、わざと小さい服を着ることで見える腹筋なんかはしっかり

割れている。

「うん、君は少し筋肉が足りないようだね。どうかな？この後手取り足取り筋肉の付け方を教えてあげるよ？」

俺の手をしっかりと握ったままそんなことをのたまう。

その瞳はまるで獲物を狙う獣のようで……

何となく背中がぞわつとして、思わず勢いよく手を振りほどく。

「……ふむ、つれないなあ。」

やれやれといったポーズをとりながらも、俺を見つめる目は決して逸らすことがない。

……………奴に背中は見せないようにしよう……。

【準備は良いかな？かな？良ければ一回戦開始するよー。】

管理人の声に、お互い距離を取りディスクを構える。

筋肉云々は今は置いておいて、目の前のデュエルに集中！

お互いにカードを5枚引き

「ふふふ……、いいねえ……、私が勝てば……、ふふ、ふふふふ……。」

ぞわぞわぞわっつ

だ、駄目だ！しゆ、集中だ集中!!

「デュエル!!」

もし負ければ何をされるかわかったもんじやない。

そんな気持ちにさせる相手の不気味さを正面から受けながら、負けられないデュエルが始まった。

9 1 話

「ふむ、私のターン。」

先攻は相手のようだ。

「私はまず、『突撃のゴブリン』を召喚。」

突撃のゴブリン 地 戦士族／効果

A 2 3 0 0 D 0

おお!?まるでゴブリン突撃部隊!

相手が出したカードを見た時、俺は先日拠点にやってきた管理人との会話を思い出していた。

「そういえばさ、デュエルエリアに出てくるのって、前にこの大会に参加した人たちって言ってたよな?」

「正確にはその記憶を利用してただけだね。それがどうしたの?」

「いやなんかさ、みんなが使ってるカードが原作のカード…ああ、原作って元の世界の遊戯王のことね。そのカードと同じ能力だけど別名のカード使ってるやつが多い気がする。なんか意味あんのかなって。」

「ん? まあ意味があるっていうか、みんな原作のイメージが強いんだよねー。カードが成長したりレベルアップする時って、プレイヤーの思いにかなり左右されるからさ。原作に詳しい人ほどどうしても、カードがそういう成長になっちゃうんだよ。」

「つまり、あんまり原作に詳しくない人ほどオリジナルのカードに成長しやすいって事?」

「一概にそうとは言い切れないんだけどね。ただ一つ言えるのは、そういう原作を元にしたカードよりも、オリジナルのカードの方が…」

「私は場にカードを2枚伏せ、ターンエンド。」

相手の言葉に意識が戻される。

いけないいけない、今はデュエルに集中!

「俺のターン、ドロー!!」

引いたカードはレオ。そして手札にはナイトメアと融合がある。
よし、今回もお前に任せた！

「俺は『ナイトメア』を攻撃表示で召喚。」

ナイトメア A900 D1300

「ふむ、そのカードは予選で見たよ。これは早速君のエースモンスターのお出ましかな？」

むむむ、予選の様子を見られていたのか？

俺はこいつの戦うところを見た記憶はないんだが…。

まあ言っても仕方ない。俺はこいつらを信じるだけだ！

「ナイトメアの効果発動。デツキより『邪毒蛇』を手札に加える。そしてさらに、手札より魔法カード『融合』を発動！」

カードの効果で3体の魔物は融合され、1体の獣が場に現れる。

「現れる！合成魔獣キメラ!!」

合成魔獣キメラ A2800 D2400

「ほう…中々の圧だね。」

キメラが咆哮を上げる中、動じることなくその様子を観察する相手。

「合成魔獣キメラで突撃のゴブリンに攻撃!!」

グルアアアアア!!!

キメラの攻撃で破壊されるゴブリン。

相手LP8000↓7500

「…ふむ、いいよ。とてもいいよ…。」

ダメージを食らったのに嬉しそうな顔をしている相手。

正直こうやって戦う必要がなければ一生関わり合いになりたくない。

「…カードを1枚伏せてターンエンド。」

有利なのはこちらのはずだが、ガリガリと精神にダメージを受けている気がする。

「私のターン、ドロ―!」

無駄にその筋肉を見せつけるようにカードを引く。

「では私は、マツチヨゴブリンを召喚。」

マツチヨゴブリン

A 1 8 0 0 D 1 6 0 0

また濃いのが出てきた…。

「マツチョコブリンの効果発動。このカードが召喚された時、手札からマツチョコと名の付くカードを特殊召喚できる。私はマツチョコボルトを特殊召喚。」

マツチョコボルト

A 1 7 0 0 D 1 5 0 0

またマツチョコ…

「さらにマツチョコボルトの効果発動。自分の場にこのカード以外のマツチョコモンスターがいる時、そのカードの攻撃力以下のマツチョコモンスターをデッキから手札に加えることができる。私はマツチョコマンを手札に加える。」

ブツ!!

マツチョコマンのネーミングセンスに思わず吹き出してしまう。

「んんん? どうかしたかな? 続けていくぞ? 私手札のマツチョコマンの効果発動。この

カードは場にマッチョモンスターが2体以上いる場合、手札より特殊召喚できる。」

マッチョマン

A100 D100

場に3体のマッチョが並ぶ。

思い思いにポージングを決めるモンスターたちを見て思わず遠い目になる。

「じゃあ行くよー私は場の3体のマッチョモンスターを墓地へ送り、手札からギガンテス・マッチョを召喚！」

ギガンテス・マッチョ 星10

A2800 D2600

このカードは通常召喚できない。

このカードは場のマッチョモンスター3体をリリースし特殊召喚できる。

このカードの攻撃力・防御力は自分の墓地のマッチョモンスター1体につき2000ポイントアップする。

このカードが破壊されるとき、代わりに自分の場のマッチョモンスターを破壊できる。

こ、これは……!

「どうだね?この素晴らしい筋肉。最高だと思わないかい?」

まるでボディビルダーのようにポーリングを決めるギガンテス・マッチョ。

だがその見た目に反して能力値は非常に高い。

「さて、このカードは墓地のマッチョモンスター1体につき、攻撃力と防御力が2000ポイントアップする。現在は3体のマッチョモンスターが墓地にいるから:攻撃力は3400、防御力は3200となる。」

攻撃力が3000を超えてきたか……!

「さらにリバースカードオープン。『鉄アレイ』。」

鉄アレイ 装備カード

マッチョモンスターにのみ装備可能。

このカードを装備したモンスターの攻撃力・防御力は500アップする。

自分のスタンバイフェイズに、このカードを装備したモンスター1体に筋肉カウンターを1つ乗せる。

筋肉カウンターが乗っているモンスターは、カウンターの数×100攻撃力・防御力

がアップする。

見るからに重たそうな巨大鉄アレイが現れるが、ギガンテスマッチョはそれを軽々と持ち上げ筋トレを始めた。

「このカードを装備したはマッチョモンスターは、ターンを重ねるごとにパワーアップしていく。この素晴らしい筋肉がさらに進化するのだよ!!」

ギガンテス・マッチョ A 2800 ↓ 3400 ↓ 3900 D 2600 ↓ 3200 ↓
3700

…やばい。マッチョな見た目に気を取られていたら一気にやられる。

「では、ギガンテス・マッチョで、合成魔獣キメラに攻撃。マッスルアタック!!」

相手の宣言に従い、ギガンテスマッチョはその自慢の肉体をぶつける為キメラに向かって走り出した。

「リバースカードオープン! 『獣の咆哮』!」

獣の咆哮 畏カード

自分の場に『合成魔獣キメラ』又は『草原の王レオ』がいるときに発動可能。表側表示の相手モンスター1体の表示形式を変更する。

「このカードの効果により、ギガンテス・マツチヨは守備表示となり攻撃できない！」
今まさにキメラにぶつかろうとしていたギガンテス・マツチヨは見えない壁でもあるかのようにその場で急停止し、そして元の位置へと帰っていった。

「ほう、流石だね。じゃあ私はこれでターンエンドだ。…ふふふ、次に何をしてくるのか
楽しみだよ。」

こちらを見つめながら、自分の唇をべろりと舐める仕草に危機感を感じ、思わずお尻に手を当てる。

「ふふふ、うぶだねえ…。」

……やだよー、この人の相手するのもうやだよー!!!

92話

このピンチ（？）を切り抜けるにはとにかく早く勝利するしかない。

頼む、俺のこの思いに応えてくれ!!

「俺のターン、ドロー!!!」

現在、相手の場にはギガンテス・マッチョと伏せカードが1枚。手札は0。

俺は場に合成魔獣キメラがいるだけで、手札は3枚。

この手札でギガンテスを倒すには…

「俺は手札から『ここほれワンワン』を発動!」

ここほれワンワン 魔法カード

デッキからカードを1枚ドローする。

その後コインを1枚投げ、表ならばもう1枚デッキからカードをドローする。裏ならば手札からカードを1枚選んで捨てる。

「まず1枚カードをドロー!そしてコイントス…!」

腕を前に出すと、デュエルディスクの端の方がカシヨンと開き、そこからコインが1枚飛び出して来た。

カランカランカラン…

高めの音を響かせながら地面に落ちたコイン。

結果は……

「……………表！俺はさらに1枚カードをドロー！」

役目を果たしたコインは自然に消えていく。

始めてこのカードを使った時には、いきなり飛び出したり消えたりするコインに驚いたが、もうこの不思議現象にも慣れた。

これで俺の手札は4枚。さらに引いたカードは現状を打破することができるカード。「俺は手札より『三身一体』を発動！」

三身一体 魔法カード

モンスター3体を素材とする融合モンスターカードを対象に発動可能。

対象のモンスターの攻撃力・防御力は、ターン終了まで素材となったモンスターの攻撃力・防御力の合計となる。

正しくは三位一体だと思うんだけど…、まあいいか。

カメラの素材となる、レオ・ナイトメア・邪毒蛇の攻撃力はそれぞれ1800・900・800で、合計3500となる。

だがこれでもギガンテス・マツチヨの攻撃力には届かない。なのでもう一手。

「さらに俺は、装備カード『獣王の牙』を発動。」

獣王の牙 装備カード

獣族モンスターにのみ装備可能。

装備モンスターの攻撃力を500アップさせる。

このカードが相手の効果によって破壊された時、あなたはデッキからカードを1枚ドローできる。

これでカメラの攻撃力は4000。3900のギガンテス・マツチヨを破壊できる！
「バトルフェイズ！おれh」この瞬間！リバースカードオープン！マッスルバリアー！！」

…。
おれがバトルフェイズに入った瞬間、奴は罨カードを発動してきた。

「その魔獣の攻撃に対しては罨カードが発動できないからね。このタイミングで発動さ

せてもらったよ。」

くつ、やはり俺の前の試合を見て研究されてるな…。

「このカードは私の場にマツチヨモンスターがいないと発動できないが、発動したターンは私がダメージを受けることも、モンスターが破壊されることも無い！」

マツスルバリアー 罠カード

このカードは自分の場にマツチヨモンスターがいる時のみ発動可能。

このターンあなたが受ける戦闘ダメージは0となり、あなたの場のモンスターは戦闘では破壊されない。

くそつ、ふざけた名前なのに強効果だ。

「…モンスターを伏せ、ターンエンドだ。」

「ふふふ…、私のターン、ドロ。そしてこの瞬間、鉄アレイでの筋トレ効果発動。ギガントスの攻撃力・防御力が上がる！」

ギガントス・マツチヨ A 3 9 0 0 ↓ 4 0 0 0 D 3 7 0 0 ↓ 3 8 0 0

くそっ…、三身一体の効果も消えて攻撃力の差は700。

「…ふむ、では手札より魔法カードを発動、『筋肉結界』」

本当に筋肉だらけだな、こいつのデッキ…。

最初の突撃ゴブリンは何だったんだらうか？

…突撃、…突、…：…い、いやいや、今はそんなこと考えてる場合じゃない！集中し

ろ集中!!

「…？このカードは自分の場にマッチョモンスターがいる時のみ発動可能。このター

ン、相手はモンスター効果を発動できない！」

いきなりブンブンと頭を振りだした俺を見て、少し不思議そうな顔をしながらもカー

ドの説明をする相手。

ってかそんなことより、効果発動無効!!??

「これでそのカメラを破壊しても、素材となつた3体のモンスターが場に戻ることは無

い。じゃあいくぞ、ギガンテス・マッチョで合成獣カメラに攻撃！マッスルアタック!!」

グルアアア……

俺LP8000↓7300

やばいやばいやばい!!

これは思った以上にヤバいぞ!!

キメラは破壊され、効果は発動されずに墓地へと送られる。

「私はこれでターンエンドだ。さあ…、どうするかね?」

相手の場には攻撃力4000のギガンテス1体。手札は0だが…

俺の場は伏せモンスターが1体と手札が1枚だけ。

どうする…どうする…!!

焦る俺の頭に、ふと優しい声が響く。

『…私たちは、いつだってマスターの味方です…。』

……そうだ。ここで俺が焦っても仕方ない。俺にできるのは、ただデッキを信じてカードを引くことだけ!!

覚悟を決めて前を見据え、デッキに右手を添える。

1度目を瞑り深呼吸して……目を開く。

よし、勝ちに行くぞ!!

「俺のターン、ドロー!!!」

「……………ふむ……………」

俺の雰囲気が変わったのを察したのか、警戒するような表情の相手。

「俺は手札から『王者の意地』を発動。」

王者の意地 魔法カード

自分の墓地に『合成魔獣キメラ』・『草原の王レオ』・『ナイトメア』・『邪毒蛇』があり、相手の場に1体以上モンスターが存在する時発動可能。

墓地から『草原の王レオ』を自分の場に特殊召喚し、相手の場のモンスター1体を選択する。

この効果で特殊召喚された『草原の王レオ』の攻撃力・防御力は、ターン終了時まで選択した相手モンスターの攻撃力と防御力と同じ数値となる。

「このカードの効果により、墓地の『草原の王レオ』を復活させる。そしてさらに、お前の場の『ギガンテス・マッチョ』を選択することで、レオの攻撃力・防御力はギガンテスと同じ数値となる!」

「むむむ?」

草原の王レオ A1800 ↓ 4000 D1000 ↓ 3800

「さらにレオの効果を発動！手札を1枚捨てることで、モンスター1体の表示形式を変更する！ギガンテス・マツチヨを守備表示に!!」

「なんと!!?」

「伏せモンスターを攻撃表示に。そしてバトルフェイズ！草原の王レオでギガンテス・マツチヨを攻撃!!」

他のカードなら相手と攻撃力が同数になったところで相打ちがやっとだろうけど、レオならその効果で自身を生き残らせることができる！

アアアアアアアアアアア

!!!!!!

野太い声を響かせながら消えていくギガンテス・マツチヨ。

よし！何とか突破!!

「まだ行くぞー！『疾風の戦士』でダイレクトアタック！」

疾風の戦士 風 戦士族／効果

A500 D500

このカードが相手に戦闘ダメージを与えた時、あなたはデッキからカードを1枚ドロワーできる。

「ぐわああ!!」

相手LP7500↓7000

「疾風の戦士の効果で1枚ドロワー。ターンエンドだ。」

これで相手の場は空っぽ、手札も0。

対する俺は場にレオと疾風の戦士の2体で、手札は今引いた1枚。
相手のドロワー次第ではこのまま押し勝てる!

9 3 話

「ふふふ…、ふふふふ…。」

圧倒的不利なこの状況の中、奴は嬉しそうに笑みを浮かべる。

「すごい、すごいよ君は…。私相手にここまでできるとは…。」

盛り上がった胸筋をピクピクさせながら続ける。

「実に面白い。…私はこの人生の中で未だかつて負けたことが無いんだよ。周りが言うには人生勝組ってやつだ。…だからこそ、私は私を負かせてくれる相手を探していたのかも知れない。…君は、私に負けを与えてくれるかい…?」

ぞくぞくっ!

相手の雰囲気が変わる。背中がゾワゾワツツとなり、一筋の冷や汗が頬を流れ落ちる。

「私のターン、ドロ。」

先程までの少し冗談交じりの態度はナリを潜め、鋭い目つきでをこちらを見つめる。

「私は、墓地のマツチョモンスター3体を除外し、『マッスル・キング』を召喚。」

マッスル・キング 星10 効果

A 3000 D 3000

このカードは通常召喚できない。

自分の墓地のマッチョモンスター3体をゲームから除外して特殊召喚できる。

1ターンに1度、デッキからマッチョモンスター1体を手札に加えることができる。

このカードが破壊される時、代わりに自分の場のマッチョモンスター1体を破壊できる。

くっ！これが奴の本当のエースカードか…！

「私はマッスルキングの効果発動。デッキより『オーク・マッチョ』を手札に加え、そしてそのまま召喚だ。」

オーク・マッチョ 星4 効果

A 1800 D 1000

このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を攻撃力が越えていた場合、その数値分相手に戦闘ダメージを与える。

「バトルフェイズ、マッスルキングで草原の王レオを攻撃。」

これは受けるわけにはいかない…!

「レオの効果発動！カードを1枚捨て、マッスル・キングを守備表示に変更する！」
しかしこれは予定通りだったのだろう。相手は続けて宣言。

「ではオーク・マツチヨで疾風の戦士を攻撃だ。」

俺LP7300↓6000

「ぐううう!!」

先程まで有利だと思っていた盤面がたった1枚のドロイーでひっくり返された。

「…ターンエンドだ。」

こいつ、ふざけた態度を取ってたけど…強い。

おそらく自分で言った通り、本当に人生で負けを経験したことが無いんだろう。

どことなく人の上に立つ者のオーラを感じる…気がする。

でも…、だからと言って俺がここで負けてやる必要は無い。

「俺のターン…」

俺にだって、こいつらの思いに応える為に、負けるわけにはいかないんだから…なっ

!!

「ドロイー!!」

気合一閃、カードを引き抜く。

!!こいつは…。

魔界の商人 星5 闇 悪魔族／効果

A1500 D1600

このカードの②の効果は1ターンに1度しか使用できない。

①このカードが召喚された時、カードを1枚ドロウできる。

②あなたはデッキから任意の数カードを引く(最大4枚※ランクアップにより最大数増)。この効果を発動したターンのエンドフェイズに、あなたはこの効果で引いたカードの枚数×1000ダメージを受ける。

このタイミングでこのカード…。

…面白い、ここで俺を試すつて訳か。

入手してからずっとデッキに入れているこのカード。しかし手札に引くことはかなり稀であり、こういったタイミングにまるで俺を試すかのように表れる。

少しニヤついた表情でこちらを見つめるカードの中の商人。

良いだろう、…さあ、取引だ。

「俺は草原の王レオをリリース。」

「…ほう？」

ここまで活躍したキメラ、その素材ともなるレオを簡単にリリースする俺を見て、次手を警戒する相手。

「魔界の商人をアドバンス召喚!!」

大きな袋を持ち、ニヤニヤした表情の男が現れる。…顔じゃなくて仮面か…?

「このカードが召喚された時、俺はデッキよりカードを1枚ドロロー。さらに、魔界の商人の効果発動。魔界商の取引!!」

俺の宣言により、袋から契約書のようなものが現れ、独りでに動き出した羽ペンがサラサラと契約内容を記していく。

「俺はカードを4枚ドロロー。その代わりにこのターンのエンドフェイズに俺は引いたカードの枚数×1000ポイント、つまり4000ポイントのダメージを受ける。」

さあ、運命のドロロー…!

「(このカード…、そうか、なら俺は最後までこいつらを信じる!)俺は、手札より魔法カード『融合蘇生』を発動!」

融合蘇生 魔法カード

自分の墓地の融合モンスター1体を自分の場に特殊召喚する。

ありつたけの思いを込め発動した魔法カード。

それに応えるように、光を放ちながら再びフィールドに甦るキメラ。

「ふむ。だが例え何度甦ろうとも私のキングの攻撃力には届かないぞ?」

そう、だからもう一手だ。

「さらに手札より『融合強化』発動。」

融合強化 装備カード

融合モンスターにのみ装備可能。

装備モンスターの攻撃力・防御力は自身のレベル×100アップする。

「このカードは装備モンスターのレベル×100ポイント、攻撃力と防御力をアップさせる!」

「何っ!?!」

「キメラのレベルは8。つまり800ポイントのアップにより、攻撃力は3600とな

る!!」

合成魔獣キメラ A2800↓3600

「バトルフェイズ！合成魔獣キマイラで、マッスル・キングに攻撃!!」

オアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

相手LP7000↓6400

!!!!!!!

想像以上に野太く大きな声を上げながら倒れていくマッスル・キング。

ギガンテスに続き上級モンスターを撃破。だが…

「……………」

奴は焦ることも動揺することもなく、変わらぬ表情でこちらを見つめている。

あの目は…、決して諦めていない目。

むしろ次のターンに再び逆転し、自分が勝利することを疑っていない目だ。

だからこそ…、俺はこのターンであいつを倒す…！

「手札より、速攻魔法発動！『破壊の先へ』!!」

破壊の先へ 速攻魔法

自分の場と相手の場にそれぞれ1体以上つつモンスターがいるときに発動可能。

お互いのプレイヤーは自分の場のモンスターを1体選択する。

そのモンスターを破壊する。

「このカードはお互いに自分のモンスターを1体選び、それを破壊するカード。俺は場の合成魔獣キメラを選択するぜ！」

「……ふむ、私は場のオーク・マッチョを選択する。」

カードの効果により、選択されたそれぞれのモンスターが破壊され墓地へと送られる。

「この瞬間、俺は合成魔獣キメラの効果を発動！墓地の草原の王レオ、ナイトメア、邪毒蛇の3体のカードを場に特殊召喚する!!」

「何?」

破壊があるからこそ生まれるものもある。

その先の未来を思うからこそ成長できる。

そしてその成長の先に、つかみ取れるものがある。

俺はカードたちと共に、勝利をつかみ取って見せる!!

合成魔獣 キメラ 星8 闇 獣族／効果

A2800 D2400

このカードが攻撃を行う際、相手は魔法・罠・モンスター効果を発動できない。

このカードが破壊された時、墓地の『草原の王レオ』・『ナイトメア』・『邪毒蛇』の3体を場に特殊召喚できる。

94話

（モンスターが復活…？確かあのカードは融合素材となったモンスターを復活させる効果だったはずでは…??）

3体のモンスターが場に復活する様子を見ながら、マツチヨモンスターを使う彼は考えていた。

彼が思うように、「融合素材となったモンスター」を復活させる効果であったならば、今回の様に融合ではない方法で特殊召喚されれば「素材となったモンスターは存在しない」扱いになり、場にモンスターは復活しないはずであった。

しかし土壇場でのカードの成長により、その効果は変更され、墓地に指定のカードがあるだけで効果を発動できるようになった。

（私の記憶違いか…？いや、だが確かに…。）

彼が混乱するのも無理は無い。

本来デュエル中にカードの効果がいきなり変わることなんてありえないのだから。

しかしここは彼らとは違う存在が管理する世界。

彼らがルールであり、カードとの絆が重要視されるが故に、そういったことも起こってしまおうのである。

だが、ダンジョン内での魔物との戦闘と比べ、このような対人戦では成長が起こる可能性は相当低く設定されている。

それでもその奇跡のような出来事を起こしてしまう相手。

今回彼にとつて一番の不幸は、そんな奇跡を平気で起こしてしまう理不尽な相手に当たってしまったことであろう。

まあ、それを不幸ととらえるかどうかは彼次第ではあるが…。

「さらに俺は、手札から魔法カード『二者択一』を発動する。このカードは2つの効果の内どちらかを選んで発動するカードだが、今回俺が選ぶ効果はこっちだ!」

カードより不思議なエネルギー波が発せられ、モンスターたちに降り注ぐ。

これによって場のモンスターたちの攻撃力がアップした。

「俺の場のモンスターの数×100ポイント、つまり400ポイント俺のモンスター全員の攻撃力はアップする。」

草原の王レオ A1800↓2200

ナイトメア A900↓1300

邪毒蛇 A800↓1200

魔界の商人 A1500↓1900

合計で6600ポイント。対するライフは6400。

「さあ、これで終わりだ。モンスター全員で、ダイレクトアタック!!!」

う、うおおおおおおおおお

相手LP6400↓0

!!!!!!!

初めての感覚だった。

小さなころから私は、何をしてもうまくいき、誰とどんな勝負をしても負けることは無かった。

最初の内は楽しかった。誰よりも自分が一番。それは子供が何よりあこがれるものだから。

だがしばらくして、私と遊ぶ友達はいなくなつた。

絶対に自分が負けることが分かっているからつまらない。そう言つていた。

それでも学生の間は私の回りには常に誰かがいた。

ある日、彼らが話しているのを聞いた。私のそばに居るのは、優秀な私のそばに居るだけで自分も優秀にみられるようにしたいから。

それから私は、できるだけ他人との距離を置くようになった。

このころから、少しずつ私の心には亀裂が入り始めていたのだろう。

大人になり、仕事を始め、私はどんどん業績を伸ばしていった。

入社した頃仲の良かった同期は、すぐに私のそばから離れていった。

周りからは、何も努力しなくてもすべてが手に入るうらやましい奴、と妬まれ、時には嫌がらせも受けた。

だが私は真正面から彼らと対峙し、結果彼らは謹慎、又はクビになった。

私の心にはほつきかりと穴が開き、何をしても満たされなくなった。

会社を辞め独立し、新しい企業を始めてもその悉くが成功し、やりがいというものを感じなくなった。

そんな時、私はこの世界へと召喚される。

最初は理解不能な状況に戸惑ったが、しばらく過ごすことで生活にも慣れ、考える余裕も出てきた。

そして管理人とやらの言葉をよくよく見なおすことで

「ここなら、私の心を満たすことができるかもしれない。」

そう思うようになった。

遊戯王とやらは1度前の会社の同僚から話を聞き知っていた。

彼は重度のカードオタクだったからな。

何度かダンジョンに潜ることで何となくコツをつかみ、私はどんどんと攻略を進めていった。

しかし、私の前には常に一人の人間がいた。

掲示板では『某氏』と呼ばれていたが、彼が常に1番先頭を走ること、私は忘れていた『追いかける』という心を思い出した。

それからは毎日が楽しかった。

元の世界では私は常に勝者であったが、ここでは私は1番ではない。チャレンジャーだ。

そう思うだけで私の心はどんどん満たされていった。

そして今日、私は目の前の男に、生まれて初めての『負け』というものを与えられた。

これが敗北…、これが負けるといふ事…！

私は今、敗者となった!!!

私の胸にはかつてないほどの喜びがあふれている。

まるで、欲しかった玩具を買い与えられた子供の様に。

この世界に感謝を。

ここに連れてきてくれた管理人に感謝を。

私にチャレンジャーの心を思い出させてくれた某氏に感謝を。

そして、私に初めてをくれた彼に、最大の感謝を…。

モンスターたちの攻撃により、相手のライフは0となった。

(か……つた……)

喜びたい気持ちとは裏腹に精神的な疲れが大きく、その場で伸びをすることどめる。

…しかし強敵だったな…。管理人は楽勝とか言ってたけど、全然そんなことなかったし。

伸びの為に上に上げていた手を下ろし、何とか倒すことのできた相手を見ると、彼は何やら熱っぽい顔でこちらを見ている。

……なんだか嫌な予感……。

「……………やあ、とてもいい勝負だった。…ありがとう。」

「え？あ、いえ、こちらこそ……。」

思ったより普通のセリフに思わずどもる。

しかしその直後、

「私の初めてを奪ってくれた君と、もつと親しくなりたいと思っている……。どうだろう？この後一緒に食事でも……。」

デュエル前のおちやらけた感じは一切なく、むしろ潤んだ瞳で見つめながら話す相手を見て思う。

ヤバい、これガチの奴だ……!!

思わず後ずさりながら答える。

「え、えっと、ありがたいですけど、この後もまだ決勝続کشし…、さ、さよなら!!」

決して背中は見せず、手はお尻を抑えながら彼と距離を取る。

【勝敗が決しました。勝者は控室へ、敗者は拠点へと移動されます。】

いいタイミングでアナウンスが流れる。

フワツとした感触の後、俺は最初の控室にいた。

……ふう、助かった…。

控室に置いてあった椅子に腰かけ背もたれに体重をかける。

(後はもうプレイヤー同士で接触する機会が二度とありませんように…。)

そう祈りながら、俺はモニターの電源を入れ、次の対戦相手になるであろうプレイヤーたちのデュエルを見るのであった。

……
つれないねえ……。

95話

その後、デュエルは恙無く進行し、ベスト4が出そろろう。

【それでは、代表者決定戦・決勝、次のデュエルを行います。】

アナウンスが流れ、俺はデュエルリングの上へと転移した。

目の前には俺と同じく転移してきた対戦相手。

「……よろしく……。」

「ああ、よろしく。」

今度の相手はちよつと線が細い、多分年上の男性。

互いに距離を取って向かい合い、カードを5枚ドロ―。

「デュエル」！

先攻は…相手か。

モニターで見る限り、この人は魔法使い族を多用していた。

「私のターン…ドロ―。」

若干青白い顔で気が無いように見えるけど、モニターで見る限り、この人かなりカードの使い方が上手かった。

「私は魔法カード『魔導のルール』を発動。」

魔導のルール 魔法カード

手札より魔法使い族・通常モンスター1体を特殊召喚する。

「手札より『闇魔導士』を召喚…。」

闇魔導士 星7 闇 魔法使い族／通常モンスター

A2500 D2100

くっ、いきなりエースモンスターか…。

こいつは、魔法使い族としては攻撃力・守備力共に最高クラスだ！

「私は場の闇魔導士をリリースし、『闇魔導少女』をアドバンス召喚…。」

闇魔導少女 星6 闇 魔法使い族／効果

A 2000 D 1700

このカードの攻撃力は、墓地にある『闇魔導士』と『混沌の闇魔導士』の枚数×30
0アツプする。

なに？ エースをリリース…？

「そして手札より『闇魔術士召喚陣』を発動…。」

闇魔術師召喚陣 魔法カード

1000LPを支払い、手札・墓地より闇属性・魔法使い族モンスター1体を特殊召喚する。

相手LP8000↓7000

「甦れ、闇魔導士。」

先程リリースされた闇魔導士がすぐさまフィールドに復活する。

「そして手札よりフィールド魔法発動、『魔導結界』。」

魔導結界 フィールド魔法カード

自分の場に2体以上魔法使い族モンスターが存在する時、相手は魔法カードを使用で

きない。

相手が魔法カードを発動した瞬間、俺の回りに透明なドームが現れ、床には幾何学模様を描かれる。

「これは、私の場に2体以上魔法使い族モンスターがいる限り、あなたは魔法カードを発動できないカード…。」

なっ!??! つ、強くね!?! てか今までこんなカード使ってたっけ!?!

「今までの君の戦いは見せてもらった。…一目見たときから、気つと勝ち上がってくるだろうと思っていたから…いままで温存しておいたんだ…。これで融合は使えない。君のエースカードは召喚できないよ…。」

まじか…。

まあ確かに、俺が事前にモニターで相手の戦いを見てデッキ内容を知っているのと同じく、相手も俺のデッキ内容は把握しているわな。

「これで私はターンを終了する…。」

1ターン目から相手の場にはエースモンスターとその関連モンスター。

さらにフィールド魔法の効果で俺は魔法カードを発動できないと来た。おそらく相手は、俺がかなり厳しいと思っていると考えているだろう。

なにしろここを突破するためには、まず攻撃力が2000以上のモンスターで相手の場のどちらかのモンスターを倒し、フィールド魔法の効果を消さないといけないからだ。

今までの俺の戦いを見ていたということは、俺のデッキの中に魔法やアドバンス召喚抜きで召喚できる攻撃力2000以上のモンスターがないということは知っているはず。

だからこそ1ターン目から手札を0枚にしてもこの盤面を作り上げたのだろう。

……だけどな……

「俺のターン、ドロー!!」

今までの予選・決勝で切り札を見せていないのはこちらも同じ!

「俺は手札から『融合の騎士』を召喚!!」

融合の騎士 A1900 D1400

「……………ん?」

始めてみるモンスターに首をかしげる相手。

「あんたがカードを温存していたように、こつちも切り札は温存していたんだよ！ いくぜ！ 融合の騎士の効果発動!!」

そう宣言し、俺は手札から1枚のカードを選ぶ。

いくぜ…相棒!

「融合の騎士が場にいるとき、場のこのカードと聖獣モンスターとで融合を行う際、融合の魔法カード無しで融合を行うことができる!」

「…む…。」

「俺は場の融合の騎士と、手札の聖獣・朱雀を融合!!」

俺の宣言により、フィールドには突如火山が現れる。いまにも噴火しそうな様子その山から現れたのは、背中に炎の翼を生やす1人の戦士。

「炎を支配し力をその身に宿し、南より来たりしは朱き騎士。出でよ! 聖騎士スザク!!」

聖騎士スザク 炎 戦士族／融合／効果

A 2 3 0 0 D 2 0 0 0

見た目は融合の騎士に炎の羽が生えただけのようなだが、その内に秘める効果は強い。

「…聖獣、朱雀…。ということは、おそらくほかの聖獣のカードもあるのだろう…。それが、君の切り札か…。」

まあそのくらいはすぐに思いつくよな。

だがその効果までは予想できまい。

「バトルフェイズ！ 聖騎士スザクで、闇魔導少女を攻撃！！フレイムソード!!!」

炎を纏った剣が魔法少女を切り裂く。

相手LP7000↓6700

「……………」

「この瞬間、魔法使い族が2体以上ではなくなり、フィールド魔法の効果は消える！」

俺を囲うように展開していたドームが消え去る。

「そしてメインフェイズ2！ 俺は聖騎士スザクの効果発動。このカードは1ターンに1度、場の好きなカードを破壊することができる。そして破壊されたカードの持ち主はデッキよりカードを1枚ドロウする。いくぞ！ 転生の炎!!」

スザクの背中の炎がぶわつと勢いを増し大きくなっていく。

そしてそこから巨大な熱線が放たれた。

「俺が破壊するのは『闇魔導士』!!」

ゴウウウ!!!

大きな音を立て、その熱線は闇を司る魔導士を貫いた。

「……………」

これで相手の場にモンスターは0。

フィールド魔法はまだ残っているが、魔法使い族モンスターが2体以上いなければ効果を発揮しない。

相手の手札は先ほどの朱雀の効果で引いた1枚。

「俺はカードを2枚伏せ、ターンエンドだ。」

さあ、ここから何をしてくる?

「私のターン、ドロー……」

引いたカードをちらつと見ただけで、すぐに動き始める。

「私は手札より魔法カード『闇魔導の幕』を発動。」

闇魔導の幕 魔法カード

ライフを半分支払い、手札・デッキ・墓地から『闇魔導士』を場に特殊召喚する。

「私はライフを半分支払い、墓地から闇魔導士を特殊召喚。」

相手LP6700↓3350

再び場に甦る闇魔導士。

「そして手札より『漆黒のナイフ』発動。」

漆黒のナイフ 魔法カード

自分の場に『闇魔導士』がいるときのみ発動可能。

相手の場のモンスター1体を破壊する。

相手の闇魔導士の背後に、闇に染まった巨大なナイフが現れる。

「この効果により、場の聖騎士スザクを破壊する。」

ナイフがスザク目掛けて高速で飛び、その体を貫く。だが

「聖騎士スザクの効果発動！このカードが破壊された時、墓地から『融合の騎士』と『聖獣・朱雀』を特殊召喚する！」

他の融合カードは破壊された時に、聖獣か融合の騎士かどちらか1体のみ復活できるが、聖騎士スザクだけはその両方を復活させることができる。

「甦れ、融合の騎士！聖獣・朱雀!!」

「……………」

思うような盤面を作れずイラついた表情を見せる相手。

最初と比べて冷静さがなくなってきたか…？

なら、このまま押し通らせてもらうぜ!!

96話

「…バトルフェイズ、闇魔導士で融合の騎士に攻撃…。闇魔導。」

闇魔導士より魔力で作られた黒い球体が打ち出され、融合の騎士を破壊する。

「ぐうう！」

俺LP8000↓7400

「ターンを終了…。」

これで相手の場には闇魔導士が1体とフィールドカード。手札は0。

俺は場に朱雀が1体と伏せカードが2枚。手札は2枚。

ここまでの攻防と会話から、融合の騎士を残してしまうと他の聖獣と融合する可能性を考え、朱雀より先に倒したのだろう。

だがそれは、正解でもあり…間違いでもある。

「俺のターン、ドロロー！」

勢いよくデッキからカードを引く。

「俺は場の聖獣・朱雀をリリースし、聖獣・白虎をアドバンス召喚！」

聖獣・白虎 A2200 D2000

「ここで聖獣・朱雀の効果発動。このカードが墓地へ送られた時、墓地のレベル4以下のモンスターを場に特殊召喚できる！ 甦れ、融合の騎士!!」

朱雀の効果で場に復活する融合の騎士。

普段はエンドフェイズ時に朱雀自身が場に戻る効果を使うことが多いが、今回はこちらの効果だ。

「さらに聖獣・白虎の効果発動。このカードが通常召喚（アドバンス召喚）された時、手札から聖獣・青龍を特殊召喚できる！」

「……………」

聖獣・青龍 A2600 D2200

白虎と青龍は互いに自身が召喚された時、もう一体を手札から特殊召喚できる効果をもつ。

「……………終わり……………」

相手は場に現れた2体の聖獣を見て、ぽつりと呟いた。

現在奴の残りライフは3350。

場の闇魔導士も攻撃力2500と、青龍の攻撃力より低い。

「残念だが、そのようだな。」

「……敗因は、あのキメラが君のエースモンスターだと思い込んでしまったことだな」。

まあ俺としても、見てる人がそう思ってくれたらいいなと思いながらここまで戦ってきたわけだけでも。

「じゃあそろそろ終わらせるぜ。バトルフェイズ、まずは聖獣・青龍で闇魔導士を攻撃

！」

ギヤオオオオオオ!!!

相手LP3350↓3250

青龍の攻撃で破壊され消えていく闇魔導士。

「そして聖獣・白虎、融合の騎士でダイレクトアタック!!」

相手LP3250↓0

「……………」

【お疲れさまでした。次は決勝戦となります。控室でお待ちください。】

デュエルに勝利した俺は再び控室まで戻された。

しかし今のデュエル、結果だけ見れば楽勝っぽく見えるけど、実際のところははそうでもない。

彼がほかのプレイヤーと戦うところを見ると、俺のデッキに刺さるカードも数枚確認できたし、俺のデッキのエースが『キメラ』だと思いついてくれたからこそ、ここまで俺が優位に戦えたんだと思う。

もし彼が聖獣カードの事を知っていたなら、結果は違ったかもしれない。

ま、なににせよ勝ち負けは勝ちだ。

次の決勝の為に、対戦相手となるプレイヤーのデュエルの確認をしときましょ。

【お待たせいたしました。これより決勝戦を行います。】

準決勝第2試合が終了し、少し経った後でアナウンスが流れた。

よし、決勝戦。油断せずに行こう。

バトルリングに転移し、対戦相手を見る。

「…よろしくお願ひします。」

「(ちら)こそ、よろしく。」

高めの声で挨拶され、俺もそれに応える。

お互いにペこりとお辞儀をし、距離を取って向かい合う。

【それでは皆様、大変お待たせいたしました。只今より、代表者決定戦・決勝リーグ、決勝戦を行います。】

お互いにデュッキからカードを5枚ドロウ。

【デュエル開始。】

「デュエル！」

先行は…俺！

「俺のターン！俺はモンスターを1枚伏せ、カードを1枚伏せる。ターンエンドだ。」

手札は上々。さて、相手は何を仕掛けてくる？

「私のターン、ドロロー！」

相変わらず高めの声。

今まで戦ってきた相手からは聞くことができない音声だ。

「私は『魔法少女ベリー』召喚！」

魔法少女ベリー 星1 地 魔法使い族／効果

A400 D400

？このカードが召喚に成功した場合に発動できる。デッキから「魔法少女」モンスター1体を手札に加える。

？1ターンに1度、このカードが相手の効果の対象になった時、または相手モンスターの攻撃対象に選択された時に発動できる。このカードの表示形式を変更し、デッキから「魔法少女ベリー」以外の「魔法少女」モンスター1体を特殊召喚する。

場に現れたのは、少女というより幼女…いや、もっと小さい赤ちゃん（おしゃぶり啜える）の姿をした魔法使い。

「魔法少女ベリーの効果発動！このカードが召喚に成功した時、デッキから魔法少女モ

ンスターを1体手札に加えることができる。私は『魔法少女チョコ』を手札に加えるわ。」

デツキよりカードを手札に加える。その動きに従い、相手の来ている服がひらひらと揺れる。

「そして私はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

揺れるのは服だけではない。どことは言わないが上半身の2つのご立派なものが揺れる揺れる…

下半身も「それ大丈夫？」と思えるほど短いスカートがヒラリヒラリ…。

くっ！気になって仕方がねえ!!

そう、俺の決勝の相手は、なんと女性だったのだ。

モニターで見えていたから、対戦相手が女性であることは知っていたとはいえ、実際にその姿を目の前にするとうとうしても目線が…

若干挙動不審な様子となってしまう俺を見て、何を勘違いしたか、彼女はその立派なものを前に押し出すように胸を張り語りだす。

「あなたも私にオーラにあてられたのね。なんてったって、私はこの中で唯一50階を突破したプレイヤーだもの！」

おお？まさか、目の前の彼女が例の50階突破プレイヤーだったとは。

しかし、だとしたら納得がいった。

女性ながらここまで頑張ったんだなー、すごいなーと思っていたが、50階を突破したのだというのならば話は変わる。

なんてつたつて、51階以降で手に入るカードは、それまでの階で手に入るカードと比べ格段に強力なものが多かったからな。

しかも俺の場合はデッキにあったカードをたくさん手に入れることができた。

彼女もそういったカードを手に入れているのであれば、他なプレイヤーより頭一つ抜きんでているのは間違いない。

「……………うな、なに笑ってるのよ？」

思わずニヤリと笑ってしまう。

相手も50階を超えているのならば、おそらく今までの中で一番の強敵。

なぜだろう。自分でもわからないが、この決勝の舞台でそんな強敵と戦えることに喜びを感じている自分がいる。

「…いや、別に。」

「そ、そう。ほら、あなたのターンよ。」

「ああ、じゃあ…行くぜ？」

俺はデツキに手をかける。
さあ、楽しもうぜ……！

9 7 話

「俺のターン、ドロー！」

50階突破者がお前だけじゃないってことを見せてやるぜ。

「俺は手札より『歴戦の戦士長』を召喚。」

歴戦の戦士長 星4 地 戦士族／効果

A1600 D1400

このカードが召喚・特殊召喚された時、デッキから攻撃力1000以下の戦士族モンスターを手札に加えることができる。

「歴戦の戦士長の効果発動！デッキから攻撃力1000以下の戦士族モンスターを手札に加える。俺が持つてくるのは『身軽な戦士』！」

身軽な戦士 星2 地 戦士族／効果

A500 D300

自分の場に戦士族モンスターがいるとき、このカードを特殊召喚できる。

このカードが召喚・特殊召喚された時、自分の手札が相手の手札より少なければ、あなたはデッキからカードを1枚ドローできる。

「このカードは場に戦士族モンスターがいるときに特殊召喚できる。」

軽装でいかにもスピードに自信がありそうな戦士が、守備表示で召喚される。

「さらに効果発動。相手の手札より自分の手札の枚数が少ないとき、俺はカードを1枚ドローできる。今お前の手札は5枚。俺の手札は3枚。よって1枚ドロー！」

「むむむ……」

俺のデッキがしっかりと回っていることに少し悔しそうな顔をする相手。

だが、悔しがるのはまだ早いぜ。

「手札より魔法カード『サモン・アゲイン』を発動！」

サモン・アゲイン 魔法カード

このターンあなたは通常召喚を2回まで行うことができる。

「これで俺はもう一度通常召喚を行うことができる。場の『身軽な戦士』と、裏側守備表

示の『聖獣・朱雀』をリリース！出でよ、聖獣・玄武!!」

聖獣・玄武 A2100 D3100

「くっ、出たわね、聖獣モンスター……!」

準決勝の様子を見たのだろう。

現れた聖獣にかなり警戒している様子の相手。

「聖獣・玄武は召喚された時、表示形式を守備表示に変更できる。さらにこいつは守備表示のまま攻撃でき、その際守備力の数値を攻撃力として計算する。」

「なんですって!?!」

相手にとっては実質攻撃力3100のモンスターと同じだ。

「バトルフェイズ、『歴戦の戦士長』で『魔法少女ベリー』を攻撃!」

「ならこの瞬間、魔法少女ベリーの効果発動!ベリーを守備表示に変更し、デツキから魔法少女モンスターを特殊召喚するわ!私は、魔法少女アップルを特殊召喚!」

魔法少女アップル 星3 炎 魔法使い族／効果

A1200 D800

①1ターンに1度、このカードが攻撃対象に選択された場合に発動できる。手札からレベル5以下の魔法使い族モンスター1体を特殊召喚する。その後、攻撃対象をそのモンスターに移し替え、攻撃モンスターへの攻撃力を半分にする。②このカードが戦闘・効果で破壊された場合、このカード以外の自分の墓地の「魔法少女」モンスターを3体まで対象として発動できる（同名カードは1枚まで）。そのカードを手札に加える。

「しかし攻撃は受けてもらおう！」

キヤアアア!!

幼女に対して情け容赦なく攻撃をする戦士長。

何か絵面が…。

「さ、さらに聖獣・玄武で魔法少女アップルに攻撃！グラビトンプレス！」

なんとなく悪いことをしている気になってしまいが、悲しいけどこれ戦闘なのよね…。

しかし玄武の攻撃が届く前に相手は効果を発動させる。

「魔法少女アップルの効果発動！私は手札より魔法少女レモンを特殊召喚！さらに魔法少女レモンの効果発動！」

魔法少女レモン 星2 光 魔法使い族／効果

A800 D600

①1ターンに1度、「魔法少女レモン」以外の自分フィールドの「魔法少女」モンスター1体をリリースして発動できる。デッキから魔法使い族モンスター1体を手札に加える。

②1ターンに1度、このカードが攻撃対象に選択された場合に発動できる。手札から魔法使い族モンスター1体を効果を無効にして特殊召喚する。その後、攻撃対象をそのモンスターに移し替え、攻撃モンスターの攻撃力を半分にする。

「手札から『魔法少女ブラック』を召喚！」

魔法少女ブラック 星6 闇 魔法使い族／効果

A2000 D1700

自分の場の魔法少女モンスター1体につき、このカードの攻撃力は100アップする。

お？ブラックマジシャン。

さっきの対戦相手も使ってたけど…若干効果が違うな。

やっぱりプレイヤーによってカードの成長の仕方は違うのか…。

「これで普通ならあなたのモンスターは攻撃力は四分の一になるのだけれど…。」

残念ながら、玄武の攻撃力は下がっているが、実際に戦闘で使用する数値は守備力だ。

つまりどれだけ魔法少女たちの効果で攻撃力を下げられようとも問題ない。

「…でもそれは予想していたわ！手札より『魔法少女キウイ』の効果発動！」

魔法少女キウイ 星5 風 魔法使い族／効果

A1800 D1200

①このカードを手札から捨てて発動できる。自分フィールドの「魔法少女」モンスターの攻撃力・守備力はターン終了時まで、お互いのフィールド・墓地の「魔法少女」モンスターの種類×300アップする。この効果は相手ターンでも発動できる。

②このカードがモンスターゾーンに存在する限り、自分フィールドの魔法使い族モンスターは効果では破壊されず、相手の効果の対象にならない。

やっぱり持っていたか！キウイマジシャン！

「手札よりこのカードを墓地へ送ることで、私の魔法少女たちはパワーアップする！」

彼女の場には、ブラック・アップル・レモンの3体、墓地にベリーと今使用したキウイの2体、計5体の魔法少女がいる。

つまり5×300の1500ポイント攻撃力がアップする。

「これで私の魔法少女ブラックの攻撃力は3500！反撃の黒魔法!!」

レモンの効果でブラックの効果は無効になっているため、上昇値は1500のみ。

魔法少女ブラックの持つ杖から黒い魔弾が生まれ、玄武に向かって放たれる。

ドゴオオオン!!!

俺LP8000↓7600

大きな音を立てて砂煙が巻き上がる。

そして

「…なっ!?なんで?!?!」

そこには無傷の玄武の姿が。

「聖獣玄武の効果。このカードは1ターンに1度戦闘では破壊されない。」

「そ、そんな…。」

惜しかったな。これが玄武でなければ倒すことができていたのだろうか。

そしてもう一つ、彼女にとっては悪い知らせだ

「墓地の『聖獣・朱雀』の効果発動。このカードは自身が破壊されたターンのエンドフェ

イズ時に場に特殊召喚することができる。甦れ、朱雀！」

「えええ!!嘘でしょ!?!だってそのカードの効果は…。」

そう、前のデュエルで使用した効果は、このカードが破壊された時墓地のレベル4以下のカードを復活させる効果。

彼女含め、このデュエルを見ているプレイヤーたちからすれば初見となる。

「ターンエンドだ。」

これで相手の場合は、魔法少女の『ブラック』、『アップル』、『レモン』の3体。伏せカードが1枚に手札が2枚。

対する俺は、場に『玄武』・『朱雀』・『歴戦の戦士長』の3体と伏せカードが1枚。手札は2枚だ。

さて、このデッキが元の世界で知られるあのデッキと同じ構築ならば、おそらくあのカードが入っているはず。

もしそれを出されたらちよつと厳しいが…、ま、何とかするしかないだろう。

「くっ…、それだけ守備力が高くくせに破壊されないとか…、墓地から復活するとか…:どんだけチートなのよ…。」

何かぶつぶつ言ってる。

まあ確かに俺ももし逆の立場なら同じこと考えるだろうけど。

「ふ、ふん。見てなさいよ！あんたなんか、あのカードさえ引ければ一瞬でボコボコにできちやうんだから!!」

聞いてもないのに向こうから情報を出してくれる。この態度からして、あのカードが入ってるのはほぼ間違いない…か。

「私のターン行くわよ！ドロー!!」

彼女は勢いよくデッキからカードを引き抜いた。

98話

「!!」

カードを引いた彼女の顔が喜色に変わる。

「ふふ、ふふふ……。このデュエル、やっぱり私の勝ちのようね!」

自信満々に言い放つ彼女の様子から、必要なカードを引き当てたことが分かる。

「じゃあいくわよ、私は魔法カード『マジカル・フュージョン』を発動!」

マジカル・フュージョン 魔法カード

このカード名のカードは1ターンに1枚しか発動できない。

自分のフィールド・墓地から、魔法使い族の融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを除外し、その融合モンスター1体をEXデッキから融合召喚する。

「私は墓地の『魔法少女ベリー』、『魔法少女キウイ』と、場の『魔法少女アップル』、『魔法少女レモン』、そして『魔法少女ブラック』の5体の魔法使い族を除外することで、こ

の子を融合召喚させるわ!!」

場に巨大な魔法陣が現れ、5体のモンスターがそこへ吸い込まれていく。

そして、そこから1体の魔法使いが現れる。

「さあ、おいで!五芒星の魔術師!!」

五芒星の魔術師 星12 闇 魔法使い族／融合／効果

A4500 D4500

魔法使い族モンスター×5

このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。

①魔法使い族モンスター5種類を素材としてこのカードが融合召喚に成功した場合に発動できる。相手フィールドのカードを全て破壊する。

②このカードはモンスターゾーンに存在する限り、リリースできず、融合素材にできず、効果では破壊されない。

やはりあったか、クインテット…!

「五芒星の魔術師の効果発動!このカードを融合召喚する際、その素材となるモンスター5体がすべて違うカードの時、相手の場のカードをすべて破壊できる!やつちやつ

て！五芒星の魔術師!!!」

彼女の宣言で、場の強大な力を持つ魔術師はその手に持つ杖を掲げ、魔力を集めていく。

そしてその魔力を解き放ち、俺の場のカードを全て破壊していった。

「ぐうう!!」

直接攻撃ではないのに、その余波だけでかなりの衝撃がある。

「さあ、これであなたの場はがら空き…、私の勝ちは確実ね。」

きれいさっぱり空っぽになってしまった俺の場を見て、うっとりした表情でしゃべる彼女。

勝利を疑わず、自分に酔っているように見える。

「じゃあ私は手札から『魔法少女チョコ』を召喚して、バトルフェイズ！五芒星の魔術師、ダイレクトアタックよ!!」

魔法少女チョコ 星4 水 魔法使い族／効果

A1600 D1000

①1ターンに1度、手札から魔法使い族モンスター1体を捨てて発動できる。自分はデッキから1枚ドローする。

②1ターンの1度、このカードが攻撃対象に選択された場合、「魔法少女チョコ」以外の自分の墓地の魔法使い族モンスター1体を対象として発動できる。そのモンスターを特殊召喚する。その後、攻撃対象をそのモンスターに移し替え、攻撃モンスターの攻撃力を半分にする。

再び彼女が従える魔術師の杖には魔力が集まっていき、今度はそれが俺自身に向けられる。

「ぐ、ぐあああああ!!!」

とてつもない強さの衝撃を受け、リングの端へと吹き飛ばされる。

「ぐ、ぐううう…。」

俺LP7600↓3100

か、かなり効いた…。

「さらに『魔法少女チョコ』でダイレクトアタック!」

俺LP3100↓1500

一気に6100ものダメージだ。

「私はこれでターンエンドよ。」

先ほどまでの悔しそうな顔は一片もない、とてもいい表情でエンド宣言をする彼

女。

まあ普通に見て個の盤面、彼女の勝ちに揺るぎはないと思われるだろう。

だが俺だつてこのまま負けるつもりはない！

「エンドフェイズ時、このターンに破壊された朱雀はフィールドへ甦る。」

「…厄介な能力ね、その子…。まあいいわ。この状態から何ができるか見せて頂戴。」

言われなくても…！

「俺のターン、ドロー!!」

この状態から何ができるか、なんて決まってるだろ？

逆転勝利以外ありえねえ!!

「俺は場の朱雀をリリースし、青龍をアドバンス召喚！」

聖獣・青龍 A 2 6 0 0 D 2 2 0 0

「青龍の効果。このカードが通常召喚された時、手札より白虎を特殊召喚！」

聖獣・白虎 A 2 2 0 0 D 2 0 0 0

「今さらそんなモンスターを並べて所で意味はないわ!」

意味があるかどうかは、この先を見ればわかる事…!

「俺は手札より魔法カード『聖獣の施し』を使用!場の聖獣の数だけカードをドローできる!」

聖獣の施し 魔法

自分の場の聖獣モンスターの数だけ、自分はデッキからカードをドローする。

1枚…2枚…。

『聖獣・青龍』で、『魔法少女チョコ』に攻撃!」

相手LP8000↓7000

「くうう…!」

「メインフェイズ2、俺はカードを1枚セット。エンドフェイズに移り朱雀は場に戻る。ターンエンド。」

これで俺の場には、朱雀・青龍・白虎の3体の聖獣が並んだ。伏せカード1枚に手札1枚。

相手の場には五芒星の魔術師と伏せカードが1枚。手札も1枚だ。

普通に考えれば、残り1500のライフの俺に対し相手の魔術師が攻撃をすれば決着がつく盤面。

だがこの伏せカードが発動できればまだ何とかなる。

いまだに発動していない相手の伏せカードも気になるが…。

「いったー…、よくもやったわね！私のターン、ドロー!!」

プリプリしながらカードを引く彼女。

「まあいいわ、どうせこれで終わりなもの。バトルフェイズ、五芒星の魔術師で、聖獣・

青龍を攻撃よ!!」

三度魔術師の杖に魔力が集まり始めるが…

「リバースカードオープン！罨カード、『聖獣の守り』!」

聖獣の守り 罨カード

自分の場に聖獣モンスターカードがある時、相手の攻撃宣言時に発動可能。

その攻撃を無効化する。

その後墓地の聖獣モンスターカードを1枚手札に加えることができる。

「このカードは場に聖獣モンスターがいるとき、相手の攻撃を無効化できる!」

これでこのターンをしのげば…

「ふふっ…。かかったわね！リバースカードオープン 『マジカルキャンセラー』！」

マジカルキャンセラー 罠カード

自分の場に魔法使い族モンスターがいるときのみ発動可能。

相手が魔法カード・罠カードを発動した時、あなたは手札を1枚捨てることで、その効果を無効にし破壊する。

「手札を1枚捨てて、その罠カードの効果を無効にするわ！」

おそらく彼女は最初から狙っていたのだろう。最後の最後に相手の希望をへし折るために。

だが…

「ならばそれにチェーンし、聖獣・青龍の効果発動！1ターンに1度相手の魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する！」

青龍の効果によって、その効果を発動させることなく消えていく相手の罠カード。

「……………え？…え？…え？う、？でしよ!？」

面白いように動揺してくれる。

「これで俺の聖獣の守りの効果は普通に発動される。五芒星の魔術師の攻撃は無効化され、それに俺は墓地より聖獣カードを1枚手札に加えることができる。」

墓地に眠る玄武を手札に回収。

「ぐぬぬ…、た、ターンエンド…。」

ぐぬぬとか、女子にあるまじき低さの声を出された。

「俺のターンだな、ドロ―！」

さあ、逆転といこうか！

99話

引いたカードは：

「(この状況、絶対来てくれると思ってたぜ!) 俺は『地精ノーム』を特殊召喚!」

地精ノーム 星1 地 魔法使い族/効果

A O D O

手札にこのカード以外の地属性モンスターがいるとき、そのカードを相手に見せることで、このカードを特殊召喚できる。

このカードは地属性モンスターのアドバンス召喚の為にリリースされる時、2体分として扱うことができる。

「こいつは俺の手札にある地属性モンスターを1枚見せることで特殊召喚できる効果を持つ。俺の手札にはさつき墓地から回収した玄武のカードがある。」

手札から玄武のカードを見せながら続ける。

「さらに地精ノームは地属性モンスターのアドバンス召喚の為にリリースされる時、

2体分として扱うことができる。地精ノームをリリースし、聖獣・玄武をアドバンス召喚！」

聖獣・玄武 A 2 1 0 0 D 3 1 0 0

これで俺の場には、玄武・朱雀・青龍・白虎の4体の聖獣がそろった。

「ふ、ふん。全部出てきたからなんだって言うのよー」

あくまで強気な態度を崩さない彼女だったが、内心は動揺しているようにも見える。

「…今から俺のデツキの最強カードを見せてやろう。」

先ほど引いたカード、手札に残る最後の1枚を高々と掲げ宣言。

「四聖獣の力により、このモンスターを特殊召喚する！」

瞬間、周りの音はピタツと止まり、いつの間にか現れていた雲を押し分けてフィールドに光が差す。

そしてその光の中から現れたのは1体の光輝く龍。

「今ここに降臨せよ！最強の聖獣、黄龍!!!」

聖獣・黄龍 星12 光 ドラゴン族／効果

A4000 D4000

このカードは通常召喚できない。

このカードは自分の場に『聖獣・朱雀』『聖獣・玄武』『聖獣・青龍』『聖獣・白虎』がいる時のみ手札から特殊召喚できる。

また、このカードは、自分の墓地に上記4体の聖獣カードがある時、それらを全て除外することでも手札から特殊召喚できる。その際、このカードは『聖獣・黄龍(怒)』となる。

このカードは相手の発動する効果の対象にならない。

このカードが召喚に成功した時、デッキから黄龍の名前が記されたカードを1枚手札に加えることができる。

「……………きれい…。」

対戦相手である彼女も思わず見惚れてしまうほどの美しさ。

そしてこいつは美しいだけではなく強さも兼ね揃えている

「…はっ！で、でもそのモンスターは攻撃力は4000。私の魔術師の攻撃力には届かないわ！」

そう、だからもう一手。

「俺は聖獣・黄龍の効果を発動。このカードが召喚に成功した時、デッキから黄龍の名前が記されたカードを1枚手札に加えることができる。」

最初、黄龍カードを手に入れた時にはこの効果はなかった。

しかしダンジョンの90階あたりを探索している時に見つけた、テキストに黄龍の名が記された別のカードを入手した瞬間、黄龍のテキストに効果が追加されたんだ。

「俺は魔法カード『ドラゴニック・サンダー』を手札に加える。」

ドラゴニック・サンダー 魔法カード

自分の場に『聖獣・黄龍』がいる時のみ発動可能。

相手の場のカードを全て、効果を無効にして破壊する。

この効果に対して相手は魔法・罠カードを発動できない。

このカードを使用したターン、あなたは攻撃できない。

さあ、黄龍の力を見るがいい！

「そしてその『ドラゴニック・サンダー』を発動！相手の場のカードは全て破壊される!!」

黄龍が天に向かって咆哮を上げる。

すると先ほどまで光がさしていた空に雲が満ち、ゴロゴロと音を立て始めた。

その音はどんどんと大きくなり、そして一筋の光となって相手のフィールドを貫いた。

「きやあああああああ!!!」

余りの威力に吹き飛ばされる相手。

その様子はつい先程の俺と同じ。

「ううう…はっ！そ、そんな…。」

立ち上がった彼女の目に移ったのは、空っぽになった自身のフィールドと、俺のフィールドに並ぶ5体の聖獣だった。

「う、うそ…。五芒星の魔術師は効果で破壊されないはずなのに…。」

本来なら破壊されず場に残るはずだった魔術師も、ドラゴニック・サンダーの効果で、その効果を無効にされているため漏れなく破壊の対象となったわけだ。

「ドラゴニック・サンダーを使用したターン、俺は攻撃できない。ターンエンドだ。」

呆然とした顔でフィールドを眺めていた彼女。

そのままゆるゆるとした動きでカードを引いた。

「私の、ターン、ドロ…。」

そして

「……………」

どさっ

ドロ―したカードをちらりと確認し、彼女は膝から崩れ落ちた。

「そんな…どうして…どうしてなの…？…わたしは…選ばれた人間じゃなかったの…？」

選ばれた人間…？

気になって聞こうとしたが、その前に自分から喋り始めてくれた。

「だって、だって彼が言ってたじゃない…、50階を超えるのは選ばれた人間だけだって…、私だけだって…!!」

彼女の目からポロポロと涙がこぼれる。

「なの…、それなの…!!50階をクリアしてない人に、負けるなんて…。」

彼というのが誰のことが分からないが…もしかして執事さんか？

女性デュエリストにはメイドさんじゃなくて執事さんにできるってあったし。

ただまあ、ちよつと誤解だけは解いておこうか。

「なあ、ちよつといいか？」

彼女は膝立ちの体制のまま視線だけこちらに向ける。

「今まで黙っていたことなんだが…つと、これはほかのプレイヤーも見てるんだっとな…。まあいいか。実は俺、あんたと一緒に50階突破してるんだ。」

「……………えっ…?」

彼女の目が見開く。

「えと、他のプレイヤーもごめん!黙ってたわ!」

このデュエルを見ているであろう他のプレイヤーたちにも一言断りを入れる。

「あんまり騒ぎを大きくしたくなくって、つい…な。ちなみに俺は今97階まで進んでる。あんたは?」

俺の言葉に大きくなっていった目がさらに開く。

「きゅ、97階!!」

「ああ、今使っているカードも大半は50階以降で手に入れたカードだし。やっぱり進めば進むほど強いカードが手に入るからな。」

俺の言葉にぼかんとした表情でこちらを見つめる彼女。

「え?え?97階って嘘でしょ!?私だつてまだ60階過ぎたぐらいなのに…。なんであんな凶悪な階層をそこまで進めるのよ!!つてか嘘を言ってる……………ようには見えないのよね…。はあ…。」

「…こりや勝てなくて当然ね…。」

「?…なんだつて?」

ぼそつと呟いた彼女の言葉が聞こえず聞き返す。

「…んーん、何でもない！ほら、私はターンを終了するわ。あなたのターンよ！」
なんだかわからないが吹っ切れた様子の彼女に促され、俺はカードを引く。

「そ、そうか。じゃあ俺のターン、ドロー。聖獣たちでダイレクトアタック！」

相手LP7000↓0

攻撃を受けた彼女の顔は、なんとなく重圧から解放された人の表情のようにも見えた。

「あ、あー、あー。んん…。おめでとー!!!これでついに代表者が決まったよー!!本大会まではまだ少し時間があるけど、優勝した彼にはみんなの代表として戦ってもらうから、みんなもしっかり応援してあげてねー!!とりあえず今回の代表者決定戦はこれでしゅうりよー!!!みんなお疲れー！」

管理人の声でようやく優勝したことを実感する。

「あ、そうそう、今回出場したみんなにはある程度のボーナスが付くからねー。それから本大会までの間に50階に到達した人へもちゃんとボーナスあるから、まだの人は挑戦

してねー。もちろん50階を突破できればもつと良いものあげちゃうから♪まあ後は実際に戦うのは彼だけだからね。残りの時間を探索に使うのも、メイドさんや執事さんとゆっくり過ごすのも、それはみんなの自由だよん♪じゃ、次にみんなと会うのは本大会が終わってからになるかな？それまでバイバーイ☆」

管理人の声が消え、気が付くと俺は拠点のパソコンの前に戻ってきていた。

チカチカと自己主張するメッセージを開くと、『詳しい話は明日直接しに行くからー。

b y管理人♡』と。

とりあえず明日なら今日はゆっくりしようかと思ひ後ろを振り向くと

「……………ソラ……」

「マスター……」

そこにはソラの姿が。

そして俺に最高の笑顔を向けて

「おかえりなさい、マスター。」

「…うん、ただいま。」

つられて笑顔になった俺は、ソラと連れ添って家の中へと入っていった。

100話

代表決定戦を制した次の日。

「お、来た来た。おっはよー!!」

家を出るとそこにはすでに管理人が来ていた。

「…ずいぶん早いな。」

「ん？そんなことないよ？君がそのドアを開ける瞬間を見計らって転移してきたし。」

こいつ、ナチュラルに盗撮…いや、ストーカー行為を…。

「さてと、じゃあ、早速だけど説明を始めてもいいかな？」

ま、こいつの覗き見については今更だな。

「とりあえず、本大会が始まるまではまだ時間あるし、正式な日時は決まってるから、これについては決まり次第知らせるね。それから…」

これからについて詳細を話す管理人。

他の管理人の所の代表者について情報が欲しかったけど、その辺については当然の如く無し。

ぶつちやけそこまで大事な話は無く、ただこいつが駄弁りたくて来ただけの様にも見えるが…。

「お？もうこんな時間？じゃあ、ひとまず僕は帰るねー。又何かあればメッセージ頂戴。」

喋りたいただけ喋って満足したのか、そう言い残して管理人は姿を消した。

うーん、あんまり有益な情報は無かったな…。

時計を見ると10時過ぎ。

…思ったより長時間居座ったな、あいつ。

ま、とりあえず俺に出来る事は変わらないし、準備したらダンジョンだな。

一先ずの目標は、本戦が始まるまでに、最奥の100階到達！

時間もそんなにないだろうし、サクサクと進んでいこう！

それから数日後

俺はついに、ダンジョンの100階へと到達した。
そしてそれと同時に、管理人から本大会の日程についての連絡が入った。

拜啓 時下益々ご清祥の事とお慶び申し上げます

日頃よりダンジョン攻略に力を尽していただき誠に有難うございます

さて 下記の通り本大会を開催する運びとなりましたのでご案内申し上げます

当日は担当管理人が迎えに参りますので時間までに準備の程宜しくお願い申し上げます
敬具

記

日時 ○月○日(明後日) 午前9時開会

参加人数10名

※トーナメントにて行います。対戦順は当日くじ引きにて決定いたします。

又、前回優勝者・準優勝者はシードとなります。

補足

当日は大会終了後、一度拠点へと戻っていただいてから、皆様を元の世界へとお送り

致します。

他何かご質問など御座いましたら、担当の管理人までお願い致します。

：何か思ったよりすごくしつかりとした文章なんだけど…。

100階に到達したことで、超ルルン気分で帰還したところ、パソコンにメッセー
ジが来ていたから開いてみると、とてもお堅い手紙が届いておりちよつと面食らった。

こりや管理人じゃなくてもつと上の方から来た案内かな？

だつてあの管理人がこんなしつかりとした文面を作れるとは思えないし。

頭の中にあのへらへらした表情の管理人の顔が浮かぶ。

へへーん、僕だつてやろうと思えばできるんだよー!!

その表情がドヤ顔へと変わる。

：え？ いやいや、まさかそんなはずは…ない…よね？

ま、まあ、何はともあれ日時は決まった。

俺の方も丁度100階に到達して新しいカードも入手できたし、後は明日1日かけて
しつかりとデッキの見直しをして、大会に挑めばいいな。

てなわけで今日はおやすみなさい。

次の日

ソラにも手伝ってもらい、あーでもないこーでもないといいながら、1日かけて大会用のデツキを作った。

これまではどつちかというのと、ダンジョン探索向けのデツキ内容になっていたから、それを対人戦用に組み替える。思ったよりは時間かかったけど、満足のいく仕上がりにはなった。

デツキの準備はバツチリ。

ダンジョンも最下層まで到達して、やり残したことは無い。

後は、明日寝坊しない様に早めに休むくらいかな。

夕飯を済ませ、お風呂に入り、ソラに一声かけて自室へと入る。

ベットに腰掛けて、明日の事、そしてこれまでの事を考える。

(…色々あったけど、ついにここまで来たか…。)

長い道のりだった。

最初にここに連れてこられた時から考えると、もうかなり長い時間ここで暮らしている。

(でも…、それも明日で終わり。)

そう考えると、なんだか感慨深いものが有る。

始めは、デッキのカードもレベル1の弱いモンスターカードのみだった。

それでも1日1日を必死で過ごし、経験を重ね、カードたちも少しづつ強くなっていっていった。

始めての成長。

始めてのレベルアップ。

始めて特殊ボスと戦った時…。

ここに来て経験した色々な思い出が頭をめぐる。

そして、やっぱり俺にとって一番の出来事は…。

コンコンコン…

部屋にノックの音が響く。

「…マスター、入ってもよろしいでしょうか？」

たった今頭の中に思い描いていた人物の声がする。

「ああ、いいよ。入ってきて。」

キィ…パタン

「失礼します。」

扉を開き部屋に入ってくるソラ。

その表情には少しの緊張が見られる。

「立ったままも何だし、こっちに座って。」

「あ、はい。ありがとうございます。」

そう言つてソラを俺の隣に座らせる。

暫しの沈黙。

ソラは何か用事があつてきたはずなのだが、一向にその用を話そうとはしない。

…いや、誤魔化すのは止そう。

彼女がここに来た理由。俺には分かるから。

だって、俺も彼女と同じ気持ちなのだから…。

「なあ、ソラ…。」

「…はい、マスター。」

「今、俺がここに来てからの事をずっと思い出してたんだ。」

「はい…。」

「色んなことがあつたよ。本当に…。」

「……………」

俺は壁を、ソラは床を見つめながら、お互いに視線を合わせることなく喋る。

「楽しい事やつらい事、本当に色んな経験が出来た。」

「…ええ、マスターは本当に頑張られました。」

「ありがとう…。でもさ、その思い出の中には常に…ソラがいるんだ…。」

「……………」

「楽しいときには一緒に笑ってくれて、つらいときには励ましてくれて…さ。本当に、救われたんだ…。」

「……………それが…、私たちの仕事…ですから…。」

嘘だ。

「仕事…か。じゃあソラはどうだった？俺と一緒に生活して、楽しく、なかった…？」

「そんなことはありません!!!」

ビクツツ!!?

彼女の大きな声に思わずビクツツとなる。

「あ…、す、すいません…。」

「いいいや、大丈夫だ。」

「すみません……。でも、私がマスターと一緒にいて、楽しくないと思ったことはありません！」

真つ直ぐに瞳を向けて自分の思いを伝える彼女。

でもそれは最初からわかっていた。

彼女が来てすぐのころは、色々とルールに縛られていた為そうでもなかったけど、最近はその彼女から俺に向けられる好意に気付かない筈が無かった。

ただ、俺が前の世界で女の子と関わる機会がほとんどなくて、どう接していいかわからなかったから。所謂ヘタレだったから、彼女との関係を進めることが出来なかった。

彼女の気持ちに気付いていながら、結局は変化のない今の状況へ逃げていた。

……でも、今日この時を逃せば、彼女と話をすることも出来なくなる可能性だってある。彼女を失う。

それは今の俺にとっても恐ろしいことに思えた。

すでに彼女は、俺の生活の一部になっていったから……。

「……俺さ、今度の大会が終わったら、ソラに言いたいことがあるんだ「ダメです。」……。」

「……………」

「…………え、えーつと……？」

俺の言葉を遮ってダメ出しをされ、言葉に詰まる。

「大会が終つたらではなくて、…今、言つてください。」

俺を見つめるその吸い込まれそうな程深い蒼の瞳が揺れる。

「そのセリフは……フラグです…。」

…確かに。

101話

コホン

咳払い一つして彼女に向き直る。

「俺さ、ソラに言いたいことがあるんだ。」

「はい、なんでしよう?」

さっきのは無かったことにする。

「俺、ソラと一緒に生活して、本当に楽しかった。できるなら、ずっと、ずっと一緒にいたいと思ってる。」

「マスター……。でもそれは……」

「だから!俺はこの大会で優勝する。優勝者には色々ボーナスが貰えるって管理人が言ってたし、その内容も割と融通が効くみたいなんだ。だから、ソラと一緒に過ごしたいって願えば、きっと……。」

「マスター……。」

「だから、さ、もしよかったら……これからも、俺と一緒にいてくれないか……?」

俺の言葉を受け、その蒼い瞳に涙を浮かべながら彼女は頷いた。

「……………はい…、マスター…。」

そしてそのまま、彼女は俺に抱きついてきた。

お互いの鼓動、ぬくもりを感じ、とても幸せな時間が流れる。

しばらくして、どちらからともなく体を離れた。

そのぬくもりを、名残惜しむようにゆつくりと。

恥ずかしいのか、頬を赤く染め、俯いた顔のソラに、俺は言った。

「じゃ、じゃあ、明日も早いし…そろそろ寝ようか？」

ピシツ…

何かが凍り付く音がした…気がした。

先程まで周りを漂っていた甘酸っぱい空気は霧散し、代わりにこの場を支配するのはまるで南極にいるかのような凍える空気。

その発生源たる彼女の表情を恐る恐る覗くと

「……………はああああ…。」

それはそれは大きなため息をつかれた。

「……えーつと…う？そ、そら……さん？」

その表情は髪に隠れて分からない。

ただ、彼女がとても呆れていることだけは伝わってきた。

「…まあ、マスターですもんね…。」

ボソツと嘆く彼女。そして

「う、うわっ!!」

彼女は俺をベットのの上に押し倒し、その上に跨って来た。

「マスター。」

「は、はいっ!!」

思わず敬語で返す。

「普通ですね、こんな状況で終わりって…どれだけヘタレなんですか。」

「うぐっ!!」

俺の精神ライフに500ポイントのダメージ

「いくらマスターがヘタレでも、流石にここまですればと思っていました…、予想以上でした。」

「ぐふっ!!」

俺の精神ライフに1000ポイントのダメージ

「今時マスターよりもっと年下の子でさえ、マスターよりは積極的ですよ？」
「うぐお！」

俺の精神ライフに2000ポイントのダメージ

「女の子にここまで言われて恥ずかしくないんでしょうか？」

「ぬぐあ!!!」

俺の精神ライフに4500ポイントのダメージ

やめて！もう俺のライフポイントは0よ!!

「…まあ、そこがマスターらしいんですけどね…。」

先程までの呆れた表情から、少し優しい表情になったソラが呟く。

「さて、マスター。」

「は、はい…。」

「本当は私だってもうちよつとロマンチックなのを期待していました。しかし今のマスターの様子を見る限りではそれは難しいと分かりました。」

「うつ…。」

「なので、ここからは私も我慢はしません。いいですか？マスターが悪いんですからね？すべての原因はマスターのヘタレですからね？」

そういいながら徐々に顔を近づけてくるソラ。

そして、口と口が触れそうな距離まで近づいた時

「…覚悟してくださいね…マスター？」

そう言った彼女の表情はとても妖艶で…

それからの出来事は、とても口で言い表すことはできない。
ただ言えるのは、とても幸せでした…。

チュンチュン チュンチュン…

「……ター…、……マスター…。」

俺を呼ぶ声に意識がゆっくりと浮上していく。

「おはようございませすマスター。朝ですよ。」

寝ぼけた頭のままで声がかかる方を向くと、そこにはいつも通りの格好のソラがいた。

「食事の準備はできていますので、着替えたらお越しく下さいね。」

ぼーっとした頭でキョロキョロと部屋を見回すと、何の変哲もない自分の部屋が目に入る。

「…マスター、どうかなさいましたか？」

「ん…、誕生日会…？」

「？誕生日会…？マスターお誕生日なんですか？」

頭にはてなマークを乗せたソラが訪ねる。

「え…？あ、い、いや、…寝ぼけてたみたいだ。う、うん着替えたら行くから向こうで待ってて。」

「？わかりました。」

部屋を出て行くソラ。

あ、あれえ??何か前にもこんなことがあったような…?

…デジャヴ??

頭にはてなマークを浮かべつつ朝の準備を進める。

しかし、ベットから出た際に乱れた布団を直そうとして、はたと手が止まる。

そこには昨晚の出来事が現実だったという確かな証拠が残っていた。

思わず顔が熱くなり、口元がモニョモニョする。

「…何一人でニヤニヤしてるんですか…。」

ビクツウウ!!!

いつの間にか扉から覗いていたソラの声に思わず飛び上がる。

「……そんなにまじまじと見られたら恥ずかしいので、早く着替えて出てきてください。」

しかし、昨晚の行為の後を見て妄想する俺を、恥ずかしそうに見つめるそのソラの表情に、顔のニヤニヤが加速する。

「もう…、マスターのバカ…。」

顔を朱く染めながら彼女は行ってしまった。

その姿を見て一層表情筋を緩ませる俺も、おそらく同じくらい朱い顔をしていただろう。

いつもより言葉数少ない朝食を終え（お互いに恥ずかしさで気まずい）、出発の準備をする。

時間は8時過ぎ。

いつ管理人が迎えに来るかは分からないけど、いつでも出れるように準備はできてる。

「じゃあ、行ってくるよ。」

「はい、行ってらっしゃいませ。……武運を。」

いつかと同じやり取りを行い、俺は家の扉を開く。

「あ、マスター。」

「ん？」

ソラに呼ばれ、振り向いた先にはソラの顔が。

そして不意に唇に感じたフニツとした柔らかな感触。

「……………え、つと、が、がんばってください、マスター。」

「う、うん…。あ、ありがとう…。」

お互いに顔は真っ赤。

こ、これは絶対に負けられねえぜ!!!

気合MAXのまま、改めて扉を開くと、そこにはすでに管理人が待っていた。

「あ、もうイチャイチャするのは済んだ？まだ時間あるし、もうちよつとイチャついてきても大丈夫だよ？」

……でたよ、覗き魔。

「…いや、大丈夫だ。」

極めて冷静に言い返す。ここで取り乱そうものなら奴の思うつぼだろう。

「なーんだ、つまんないの。ま、いいや。じゃあ準備ができてたら会場に移動するけど？」

「ああ、問題ない。」

デュエルディスクは装着済み。デツキも持った。

「じゃあいくよー。ほいっと。」

管理人の気の抜けた声と共に、俺たちは本大会の会場へと転移した。

102話

管理人と共に転移で辿り着いた場所、そこは一言で言うなら体育館だった。

それも小学校とかでよく見る、奥に舞台があるタイプ。

ぐるりと辺りを見回すと、すでに何人か腕にデュエルディスクをはめた人間がいた。

（おそらく他の管理人の所の代表者……か。）

彼らは一瞬こちらに視線を向けたが、すぐに目を逸らす。

（ま、お互い今から戦う敵同士だもんな。仲良くするつもりは毛頭ないんだろう。）

彼らの雰囲気からそう察したところで管理人が口を開く。

「じゃ、僕は他に準備とかあるからこれでー。始まるまでその辺でゆっくりしててねー。」

そう言うのと再び管理人は転移を行い消えていった。

（とりあえず突っ立っててもしょうがないか。）

転移してきた先は部屋の中央付近。

とりあえず壁際に向かい、座って待つことにした。

そのまましばらく待つていると、俺と同じように管理人と代表者であろうペアが続々とやってくる。

俺を含めて今ここにいるのは8人：と、今9人目がやって来た。つて事はあと1人か。

確か管理人から送られてきた詳細には参加者は10人つて書いてあつたはずだし。

ちよつと今のうちに他のプレイヤーの観察でもしておこうか。

現在この場にいるプレイヤーと思しき人、俺を含めて9人。

その内7人は男性で1人が女性。そして性別不明なのが1人いる。

男性の内6人と、唯一の女性は、パツと見俺と同じか、その前後くらいの方に見える。

残つた男性はダンディなおじさま。

俺も年取つたらこんな大人になりたい、と思わせるような風貌で、腕を組み壁にもた

れかかつてる。

：かっこいい。

もう1人は：、分からん。

なんか遊園地とかにいるマスコットキャラクター的な？そんな着ぐるみを着ていて、中が男性なのか女性なのか、大人なのか子供なのかすらも分からん。

まあ、目立つのがいるからそつちに目が行くけど、他の人間も結構癖がありそうなの

がそろつてる。

なんかカード見ながらずっとニヤニヤしてブツブツ言ってるやつとか、どこから出したのかずつとお菓子をポリポリ食べてる人とか。

…こうやって見ると、俺ってあんまり特徴無い??

そんなこんなで人間観察を続けていると、ようやく最後の代表者がやって来た。

「お? あんだここ? …ああん? 何だてめえら? おら! 見てんじやねえよ!!」

…何かヤンキーみたいなのがやって来た。

「まあまあ、落ち着きたまえ。彼らは今から君が戦う相手だ。」

「ああん? ……はっ! くそ雑魚ばっかじゃねえか。わざわざ戦う必要すらねえだろうがよ。」

さらに態度もデカいときた。

「そうカリカリするな。一応ルールに則る必要が有るからな。」

「ちっ! そうかい。ならとつと始めてくれや。俺だつて暇じゃねえんだよ。」

「まあ待て…む? もうすぐか…。」

奴と共に来た管理人は部屋の奥の舞台に目をやり眩く。

その数秒後、突如室内に鐘の音が鳴り響いた。

ゴーン……ゴーン……ゴーン……

気が付くとその舞台には10人の人影があった。

いったいいつの間に？と思ったが、その中の1人、見覚えのあるヘラヘラした顔を見て理解した。

「時間だ。これより第666回『管理者序列決定代理者大会』を執り行う。」

その10人の中から1人が進み出て、この場にいる全員に対して宣言する。

……この大会、そんな名前だったんだね。

「詳細についてはすでに各管理者より通達済みであるはずなので、早速対戦の組み合わせを決める。」

舞台に並ぶ10人は管理人、いや、正式には『管理者』なのか。

その中で代表のように喋るこの人は、おそらく前回の優勝者なのだろう。

事前に管理人からこの大会について聞いていたが、この大会はその名の通り管理者たちの序列を決める戦いなのだ。

良い人材を育成できるイコール能力が高いという考えらしく、優勝者は次の大会までの間様々な点で優遇されるらしい。

これは昔に管理者同士でなされた契約らしく、簡単に覆すことはできないとのこと。
なので、あのいかにも喧嘩っ早そうな見た目の管理者さんも、最後に態度の悪い参加者を連れてきたいかにも悪いこと考えてますって顔の管理者さんも、おとなしくルールを守っているのだろう。(偏見)

「では…。」

今まで喋ってた管理者がパチンツと指を鳴らすと、まるで最初からそこにあつたかのような自然さで、台と箱が現れた。

そして再度指を鳴らすと

「…うおっ!!?」

参加者の1人が一瞬で舞台上に転移させられていた。

「さあ、くじを引け。」

「え? あ、えつと???」

突然の事に戸惑う彼だったが、自分が舞台上に転移させられたことに気付くと落ち着きを取り戻し、先ほど現れた箱に手をつ込み1枚の紙を引いた。

「ふむ、3番だな。」

その瞬間、くじを引いた彼の服の上に、大きく『3』と書かれたゼツケンが現れる。

そしてさらに、管理者たちの頭上に、トーナメント表が書かれた大きな板が現れた。パチンツ

指を鳴らす音が聞こえ視線を下げると、そこには先ほどとは別の人がいた。

どうやら先にくじを引いた人は元の場所に戻されたようだ。

今舞台上に上がった彼は少し驚いた様子だったが、先に3番の人を見ていた為そこまです慌てることなくくじを引いていた。

参加者がくじを引くたびに、トーナメント表にその数字が表れる。

そして

パチンツ

突然視界が変わり、目の前には10人の管理者とくじの箱。

落ち着いて箱の中に手を入れてくじを引く。

ふと、いつもの管理人と目が合うが、その表情は普段と変わらずヘラヘラしていた為、特に気にすることなく紙に書かれた数字を見た。

「7番。」

管理者の言葉と同時に、俺にゼッケンが付けられ、頭上の表にも7の数字が表れる。

…うーむ、こうやってみると、管理者たちは俺たちを名前で呼んだりする気は無く、あ

くまで駒として番号呼びするつもりのようなうだ。

パチンツ

音と同時に元の場所に戻される。

その後もくじ引きは続き、8人の参加者がくじを引き終えた。

「うむ、ではこれで対戦順は決定だな。」

管理者がそう言うのと、まだくじを引いていなかった残りの2人に、『1』と『10』のゼッケンが付けられた。

おそらく彼らの担当の管理者が前回の優勝者と準優勝者なのだろう。

…よりによってあの最後に来た態度のでかいやつが10番か…。

ちなみにトーナメント表だが、左から順番に1〜10の数字が書かれており、第1回戦は2と3、4と5、6と7、8と9がそれぞれ対戦する。

次に2・3の勝者と、4・5の勝者が戦い、その勝者と1が戦う。

同じく6・7の勝者、8・9の勝者で戦い、勝った方と10が戦う。

最後に夫々の勝者同士で決勝戦という形だ。

つまり俺を含めた8人は4回勝たなければ優勝できないが、シードの二人は2回勝てば優勝となる。

…かなりシードが有利な気がするが、管理者同士の取り決めて決まった事なんだろう

し、こちらが口を出しても意味が無いんだろう。

「では、早速だが第1回戦を開始する。」

管理者がそう言うと、室内の中央にデュエルリングが現れる。

「まずは2番と3番、前に。」

パチンツ

もう何度聞いたか分からない指の音が鳴ったかと思うと、リング上に2番と3番のゼッケンをつけた参加者が転移させられていた。

「では、デュエル開始!!」

ついに、本大会、『管理者序列決定代理者大会』が幕を開けた。

103話

遂に始まった本大会。

現在2番と3番が戦っている。

他の参加者は自分の番以外ではこの場で観戦が出来ようだ。

…これってやっぱリードがかなり有利だよな？

さて、戦況は一進一退の攻防が続いているって感じか。

お互いに探り探り攻めてる感じがする。

さらに、トーナメントで他の参加者が観戦しているこの状況から考えて、できるだけ切り札は温存しておきたい。そんな心情も透けて見える。

序盤はお互いに様子見。中盤に入って先に動いたのは3番。

相手の攻撃を上手くトラップでかわし、盤面上優位に立った。

その後、じわりじわりとライフを削っていき、次のターンで決着がつくという時に、2番が動く。

「…本当はこんなところで使いたくは無かったけど、それで負けたら意味ないもんなら…」

ボソツと呟いた言葉がやけにはつきり聞こえた気がした。余裕の表情だった3番に対し、2番が切り札を切る。

形成は一気に逆転し、焦って対応しようとする3番だったが、2番の切り札の効果で一気にライフを削られ、なすすべなく敗退。

結果は2番の勝利となったが、結果切り札を他の参加者に見られる事となり、今後を考えるとかなり不利な状況となった。

2番と3番がリング外に移動し、次は4番と5番がリングに上がる。

どうやら負けた参加者も最後まで観戦ができるようだ。

負けた彼は呆然とした表情でリングを見ている。

さて、次のデュエル、4番はあのダンディなおじさま。そして5番は唯一の女性だった。

序盤からハイペースで攻める女性。コンセプトは速攻か？

しかしどれだけライフを削られても余裕の表情のおじさま。

致命傷になりそうなものだけは上手にかわし、受けても良いと思われる攻撃だけ受けていく。

その間おじさまは手札を充実させ、一気に逆転を狙う。

結果、女性の手札が切れて息切れしてきたところに、おじさまが一気に畳みかけて勝利。

何だか、ノリと勢いで攻める若者VS熟練の指導者って感じがしたね。

対戦後はお互いに握手を交わし、リング外でも仲良さげに話をしていた。

デュエルしたことで何かが芽生えたか？

：若い女性と仲良くお話しとか、別にうらやましくなんかないんだからね！

俺だつて拠点に帰れば待つてくれる子がいるんだからね！

脳裏にソラの笑顔が浮かび、さらに昨晩の情事を思い出し1人ニヤニヤする。

ハッと我に振り返りを見回すと、他の参加者のほとんどは、おじさまと女性のやり取

りを恨みがましい目で見ている。

そんな様子に1人苦笑していると

「次のデュエルを始める。」

管理人の声と共に、俺はリング上に転移させられた。

対戦相手は：最初におやつをポリポリ食べてたやつか。

「では6番と7番、デュエル開始。」

この司会進行をしている管理者、とことん無駄を省く感じで、細かい説明なんか一切無しに物事を進めていく。

もうちょっと心の準備の時間とかがほしい。

ディスクを構えカードを引く。

先行は…相手か。

さあ、どんなカードを使ってくる？

「僕のターン、カードを5枚セット。ターンエンド。」

手札全てセットだど!?

まさか全て罫・魔法カードのデッキとかか？

「俺のターン、ドロロー!」

まあ相手のデッキが何にせよ、俺はカードたちを信じて戦うだけだ。

「俺はナイトメアを通常召喚。」

ナイトメア 星3 獣族／効果

A900 D1300

まだ仕掛けてこないか…？

「俺はナイトメアの効果を発動。このカードが召喚された時、デッキから『邪毒蛇』を手札に加えることができる。」

…動かないか。

くそつ、あれだけ伏せカードがあると気になってしょうがない。

「俺は手札より、魔法カード『融合』を発動！場の『ナイトメア』と、手札の『邪毒蛇』、『草原の王レオ』を融合!!現れる、合成魔獣キメラ!!」

合成魔獣 キメラ 星8 闇 獣族/効果

A2800 D2400

このカードが攻撃を行う際、相手は魔法・罠・モンスター効果を発動できない。

このカードが破壊された時、このカードの融合素材となったカードを場に全て特殊召喚できる。

いきなりの高レベル融合モンスターの召喚に、リング外が騒めく。

…よし。

キメラを召喚しても相手は伏せカードを使わない。

キメラの攻撃時には相手は魔法・罠カードを使用できないから、召喚出来ればかなり

有利だ。

「バトルフェイズ、合成魔獣キメラでダイレクトアタック！」

相手はまだキメラの効果知らない。ならば間違いないここで罠カードを使用するはず。

そうすれば相手の罠カードを一枚無駄にすることが出来て、さらに使用カードによっては相手のデッキの傾向が読めるかもしれない。

さあ、何を使ってくる？

しかし、そんな考えは裏切られることになる。

予想の、斜め上方向に。

「……くらおう。」

「……………え？」

一瞬相手が何を言ってるのか分からなかった。

あれだけ伏せカードが並んでいて、こちらの攻撃時に何もしない…？

まさかキメラの効果を知っている？いや、そんなはずはない。

この本大会参加者の情報はお互いにゼロのはずだ。

なら何故…？

キメラの攻撃を食らい一気にライフが減る相手。

相手LP8000↓5200

「…カードを1枚伏せて、ターンエンド。」

なんだ？なんなんだ？あの伏せカード!?

この状況で1枚も使用しないことに、困惑を通り越して少し恐怖を覚える。

「…僕のターン、ドロロー。」

カードを引く相手。その引いたカードを見て、口元がニヤリと動く。

「僕は、ガトリングボーイを召喚。」

ガトリングボーイ 星4 A500 D500 効果

(な、なんだ？このモンスター…?)

俺が最大限の警戒をしていると、相手は三日月形に大きく歪んだ口で宣言。

「ガトリングボーイの効果発動。このカードは、自分の場の罠カードを1枚墓地へ送ることで、相手に800ポイントのダメージを与えることができる。さらにこの効果は、1ターンに何度でも使用できる!!」

「なにいい!?!」

相手の場にある伏せカードは5枚。

あれが全て罠カードだった場合、一気に4000のダメージ…？

「僕は場の4枚の罠カードを墓地へと送る。つまりお前に3200ポイントのダメージだ！」

その言葉に従い、相手の場の罠カード4枚は墓地へと送られ、その代わりガトリングボーイの持つ重火器から無数の弾が発射される。

「ぐわあ!!!」

俺LP8000↓4800

くっ…、これは効いた…。

だが俺に大ダメージを与えた代償に、現在相手の場に残っているのはガトリングボーイと伏せカードが1枚のみで手札も0だ。

次のターンに再びあれだけのダメージを出すことはできないはず。ならば俺は、次弾が飛んでくる前に速攻で相手のライフを削り切る。

つまりこれは、奴の準備が整うのが先か、俺が削り切るのが先かの勝負だ。

しかし、そんな俺の思いは再び裏切られる事となる。

…もちろん、悪い方向に。

「メインフェイズ2、永続罨カード発動、精霊化。」

相手は1枚だけ残していた罨カードを発動させる。

「このカードの効果は、自分のモンスターを精霊化させるもの。精霊化したモンスターは、自分のエンドフェイズに手札へと戻る。」

なっ!??

つて事は、次のターンも確実に奴が現れる…。

本来なら俺のターンにキメラで破壊する事ができ、相手が同じ効果のカードを引くまでは安心だと思っていたが…

「さらにエンドフェイズ、墓地の罨カードの効果発動。」

廃棄物A 罨カード

このカードが墓地へと送られたターンのエンドフェイズ時、このカードを自分の場にセットすることができる。その際、あなたはLPを500回復する。この効果で場にセットされたこのカードが墓地へ送られた時、このカードを除外する。

「さつきガトリングボーイの効果で墓地に送った廃棄物Aを2枚、自分の場にセットし、僕はライフを回復する。」

相手LP5200↓6200

な、なん…だと？

弾の補充速度が早い…！

驚愕する俺に、相手はさらなる絶望を突き付ける。

「…ついでに良い事を教えてあげるよ。さつきガトリングボーイの効果で墓地に送ったカードの内、2枚は廃棄物A、後の2枚は廃棄物B。Aはエンドフェイズに場にセットできる効果だけど、Bは僕のスタンバイフェイズにセットできる効果を持つ。つまり、次の僕のターンには再び場に5枚の罠カードがそろって訳さー！」

そ…そんな…。

104話

奴の言葉を信じるなら、次の相手のターン、再び場にガトリングボーイが現れ、場には罨カードが5枚となる。

もし奴がドロウしたカードが罨カードだったとしたら…、次のターンで俺の負けが決定する。

奴が罨カード以外を引くことを期待する…いや、それは現実的ではない。

おそらくこの様子からして、デッキ内のほとんどは罨カードだろう。後はガトリングボーイと同様の効果を持つモンスターカード。

もしかしたらライフに直接ダメージを与える効果の罨カードや魔法カードもあるかもしれない。

そう考えるなら、俺が相手に勝つにはこのターンで相手のライフを削り切るしかない。

…できるのか…？

…いや、できないじゃないや、やるしかないんだ!!

「俺のターン、ドロー!!」

カードを、デツキを信じてドロー。

!?!、これは…。

引いたカードを見て動きが止まった俺を見て、相手は俺に成す術無しと思ったんだろ
う。

「…何もできないならさっさとターンエンドしてくれない? 時間の無駄だからさ。」

奴はの頭の中では、ここから残りのライフ6200を削るのは難しいとでも思ってる
のだろう。

だが、この本大会に出場できる人間を甘く見てもらっちゃあ困る。

俺は相手を睨み返しながら宣言。

「俺は、古の魔呪師を召喚。」

古の魔呪師 星4 闇 魔法使い族/効果

A1700 D1400

「バトルフェイズ、キメラと魔呪師でダイレクトアタック!」

相手LP6200↓1700

合計4500ものダメージを受けたにもかかわらず、奴の表情は崩れない。

「…ターンエンドだ。」

俺 場 キメラ・魔呪師 伏せカード1枚 手札2枚

相手 場 精霊化（永続呪）・廃棄物A×2 手札1枚（ガトリングボーイ）

俺のエンド宣言に、奴はニヤついた表情から真顔に戻る。

「…やつぱりその程度か…、つまんないの。じゃ、僕のターン、ドロー…つと、はいおしまい。」

そして引いたカードを確認すると、ひどくつまらなそうな顔になり、そこからは淡々とデュエルを進めていく。

まるで自分の勝ちが確定されたゲームに飽きた子どものように。

「スタンバイフェイズ時、墓地の廃棄物B2枚は場にセットされ、1枚につき500ポイントライフを回復する。」

相手LP 1700↓2700

「じゃ、メインフェイズ。ガトリングボーイの効果発動、場のトラップカードを全て墓地へ送って、合計4000の効果ダメージ。」

まるで先程のターンの焼き直し。

ガトリングボーイの銃火器から無数の弾丸が飛び出す。

「ぐううう!!」

俺LP4800↓800

「それじゃあ、さつき引いたカードを場に伏せて、もう一度ガトリングボーイの効果を発動させr「ちよつと待った!!」…??」

奴が俺にとどめを刺そうとするその瞬間、その行動に待ったをかける。

「…何? 遅延行動は止してほしいんだけど?」

行動を途中で遮られた事で若干不機嫌そうな声だ。

「…お前がその効果を発動させる前に、俺はリバースカードを発動させる!」

「…ん?」

俺の場に伏せカードがあることに今気づいた。そんな表情の相手。

「強制終了。このカードを使用した瞬間、相手はエンドフェイズとなる。その代わりに、次の俺のドローフェイズとバトルフェイズはスキップされる。」

強制終了 罨カード

相手のメインフェイズに発動可能。相手はエンドフェイズになる。

そして次のあなたのドローフェイズとバトルフェイズはスキップされる。

「……………なんだよ、ただの遅延行動じゃん。勘弁してよホントに。」

カードの効果を聞いてより一層不機嫌そうな顔になる。

だが、このカードは遅延行動が目的ではない。

勝利の為のカードだ。

「さらにお前のエンドフェイズ時、場の古の魔呪師の効果を発動。このカードが場におり、相手から効果ダメージをくらったターンのエンドフェイズ時、そのくらった効果ダメージを相手ライフに与える!!」

古の魔呪師 星4 闇 魔法使い族／効果

A1700 D1400

あなたが効果ダメージを受けたターンのエンドフェイズ時、その受けたダメージを相手ライフに与える。

この効果は、効果ダメージ発生時と、そのターンのエンドフェイズ時に、このカードが場に存在していた時のみ発動可能。

「……………えっ…?」

ポカンとした表情で理解できていない様子の相手に、改めて伝えてやる。

「つまり俺がこのターンに受けた4000の効果ダメージを、お前にも与えるって事だ。お前の残りライフは2700。つまり：お前の負けだよ。」

俺の言葉と同時に、場の魔呪師は自身の目の前に大きな魔方陣を描き始める。

そしてそこから怨念のようなものが飛び出し、相手に向かっていく。

「う、うわあああああああああ!!!」

相手LP 2700 ↓ 0

!!!

「勝者、7番。」

実にあつさりど、勝利の余韻に浸る間もなくリングから降ろされる。

リング上にはすでに8番と9番の姿がある。

リング外に視線を移すと、呆然とした表情の対戦相手、6番の人がリングを見ている。

いや、顔がその方向を向いているだけで、実際彼はリングなんか見てないのかもしれない。
ない。

ともかく勝負は俺の勝ち。

次は今リング上で戦っている2人の勝者と戦うことになる。

どんなデッキを使っているのかしっかりと見ておこう。

再びリングに視線を移す。

「どうやら8番はあの着ぐるみで、9番は最初にカードを見ながらブツブツ言ってた人のようだ。」

序盤だがお互いにカードの展開が早い。

既にお互いの場には2体ぶつつのモンスターの姿がある。

「ぐふ、ぐふふつ、ぼくは手札から、『爆裂の魔女フレイ』たんを特殊召喚するんだな。」

爆裂の魔女フレイ A2400 D2100

「お？強そうなカード。」

「ってかあいつの使ってるカードって、女の子のカードばかり…？」

「……………」

それに対して着ぐるみの方は罠カードを発動。

「…ん？あの着ぐるみ、首からホワイトボードをぶら下げてる…？」

ぬいぐるみがカード効果を発動した瞬間、そのホワイトボードにひとりでに字がうかんできた。

【巧妙な落とし穴 罠カード 相手がモンスターを召喚・特殊召喚・反転召喚した時、そのモンスターを破壊する。】

…こいつ、喋らないキャラか？

罨の効果により破壊される魔女。

「あああー！！！！ぼ、僕のフレイたんがーっ！！！！」
9番の叫びが部屋中に響き渡る。

この調子なら、次の相手は着ぐるみの方…かな？

105話

「よ、よくも僕のフレイたんをー！ー！！！！」

カードを破壊され怒りに燃える9番。

その怒涛の攻めをのらりくらりと躲していく8番。

このまま決着かと思われた時、9番は意外な行動に出る。

「…ゆるさない、許さないよー！！！！僕は場の『アクア』たん『ガル』たんをリリースして、『漆黒の魔女王ムド』様を召喚！！」

お？これまでのプレイングで、女の子カードを犠牲にするような行動を避けていた9番が、ここでアドバンス召喚。

「魔女王ムド様の効果発動！相手の場のモンスターを1体破壊する！」

それに対し着ぐるみさんは罠カードで対応。

「ふひひっ、魔女王様にカードの効果は効かないのだっ！」

しかしその罠カードは効果を発動することなく墓地へと送られる。そして魔女王の効果により、着ぐるみさんの場のモンスターが1体破壊される。

「さらに、この効果で破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！！！」

「っ!!?」

今破壊されたカードの攻撃力は2200。

現在の着ぐるみさんの残りライフは2100。

よって…

「ぼ、僕の勝ちなんだなあ!!お、女の子たちをいじめるからそんなことになるんだなあ、僕は絶対に許さないよ君の事、だって僕の大事なフレイたんやジオたん、他にもいっぱい傷つけて、僕がどれだけ悲しかったか分かる? ねえ? 分かるの? だから僕は君に天誅を下したんだよ。で、でも僕だって本当はこんなことし、したくないんだなあ、でも君が僕の大事な子を傷つけてそれから君がs…「勝者9番。」

リング上から2人の姿が消える。

グツジョブ! 管理者さん!

リング外ではいまだに一人でしゃべり続けている9番の姿。

正直近づきたくない。…ってか次の対戦相手あいつかよ…。

「では次のデュエルを始める。2番と4番、リングへ。」

マルつと9番を無視して大会を進行する管理者。

次の2番はあんまり特徴のない人。先の試合で切り札をみんなに見られた人だね。

で、4番はダンディなおじさま。

向こうの方から「おじさまがんばってー」と女性の応援の声が聞こえる。

おじさまのヘイトが上がった

「では、デュエル開始。」

周りからの怨嗟の視線も何のその。先のデュエルで切り札を使用した2番は、おじさまにいいように遊ばれて、結果おじさまの余裕の勝利となる。

リングを降りると笑顔で「おめでとうございます！」と近寄る女性の姿。

それに向けられるのは人を射殺せそうなほどの視線。

だがそれらにかまう事無く楽し気に女性とおしゃべりをするおじさま。

…これが大人の余裕ってやつか…！

「では次、7番と9番。」

おっと、次は俺の番だな。

管理者の力でリング上へ転移。

正面には9番の彼。

すでにブツブツ喋ることはしていないが、何がきっかけで爆発するか分からない。

正直回れ右して関わりたくないんだが…そういう訳にもいかないか。

「デュエル開始。」

覚悟を決めてディスクを構える。

カードを引いて

「デュエル！」なんだなあ！」

先行は…俺！

「俺のターン！モンスターをセット、カードを1枚伏せてターンエンドだ。」

先ずは無難な行動から。

「ぼ、僕のターン！ドローツ!!」

唾をまき散らしながら喋る9番。

…ぼっちい。

「僕は、『魔法少女ガル』たんを召喚するんだなあ。」

魔法少女ガル 星3 A1400 D1100 効果

「ガルたん、あの伏せモンスターに攻撃だよお！」

相手の場に現れた魔法使いの女の子が、その手に持つ杖から風の刃を繰り出す。

「俺の伏せカードは謎の卵！」

謎の卵 星1 光 天使族／効果

A O D O

このカードが戦闘で破壊され墓地に送られた時、あなたはこのカードを破壊したモンスターと同レベルのモンスターカードをデッキから特殊召喚できる。

「このカードは戦闘で破壊された時、相手モンスターと同レベルのモンスターを、デッキから場に特殊召喚できる。俺はナイトメアを守備表示で召喚。」

ナイトメア 星3 闇 獣族／効果

A900 D1300

蛇を手札に加える効果は召喚時だから、特殊召喚時には発動しない。

だが問題は無い。

「さらにリバースカードオープン、召喚誘発。」

召喚誘発 罨カード

場にモンスターが特殊召喚された時、そのモンスターのレベル以下のレベルのモンスターをデッキから特殊召喚する。

「このカードはフィールドにモンスターが特殊召喚された時に発動できる。そのモンスターのレベル以下のモンスターをデッキから特殊召喚する。俺は邪毒蛇を守備表示で召喚！」

邪毒蛇 星3 地 爬虫類族／効果

A800 D800

「むふおーこ、これは先程のっ!？」

先のデュエルでキメラの融合は見せたからな。こちらの狙いが融合召喚だと分かって、どう動いてくる?」

「むむむ…、ならばカードを1枚伏せてターンエンドなんだなあ。」

あの伏せカード、この状況からして、こちらの召喚を妨害するカードの可能性があるな。

「俺のターン、ドロロー。」

ふむ、ならば…。

「俺は手札から魔法カード融合を発動！」

俺は敢て融合のカードを使用する。

「ふひひっ！リバースカードオープン、魔法妨害！」

俺が掲げた融合のカードは相手の罠カードの効果により破壊され、墓地へと送られる。

「ひひっ、かかった、かかったよ！ふひ、ふひひっ!!」

笑い方がキモイ。

だが妨害される可能性は考えていた為、俺に焦りは無い。

「なら俺は場の邪毒蛇をリリースし、草原の王レオをアドバンス召喚。」

草原の王 レオ 星5 地 獣族／効果

A1800 D1000

1ターンに1度、獅子トークン（レベル1 地 獣族 A500 D500）を場に

特殊召喚できる。

この効果を使用したターンこのカードは攻撃できない。

この効果で特殊召喚されたトークンは、召喚されたターンは攻撃できない。

②1ターンに1度手札を1枚墓地へ送ることによって発動可能

相手の場のモンスターカード1枚を選択し、そのカードの表示形式を変更する。

この効果は相手ターンでも使用できる。

「ふひっ?」

普段はキメラの融合素材で使われ、レベル5にしては攻撃力が心もとないレオ。しかしその効果は他の強カードに引けを取らない。

「ナイトメアを攻撃表示にして、バトルフェイズ。まずはレオで魔法少女ガルに攻撃。」
レオの爪がガルを捉える。

「ガルたーーーーんっ!!!」

相手LP 8000 ↓ 7600

「そしてナイトメアでダイレクトアタック!」

「ぐいぶふうっ!」

相手LP 7600 ↓ 6700

「カードを1枚伏せ、ターンエンド。」

これで俺の場にはレオとナイトメアの2体と伏せカードが1枚。
対する相手の場はすっからかん。

しかし手札は俺が1枚で、相手は4枚。さらにドローで5枚になる。
自分の手札がわずかで、相手の手札が多い状況って結構怖いよね?

さて、ここからどう動いてくる？

106話

相手のターン。

しかし奴は下を向き、動こうとしない。

よく見ると肩をプルプルと震わせ、「むおおおおおおおつた……びっくりした……」

「よくもよくもよくもっ!!僕のガルたんをーっ!!」

…ああ、さっきのデュエルでもこんな感じだったな、こいつ。

「ゆるさない…、許さないよお!!!僕のターンドロー!!」

確かさっきのデュエルは、この後上級モンスターを召喚して勝ったんだっけ?

「僕は儀式魔法カード、天使降臨を発動!」

む?儀式召喚か。…そういやここにきて儀式召喚は初めて見たな。

「手札から2人の女の子を墓地へと送り!光天使マハンマ様を特殊召喚だお!!」

光天使マハンマ 星8 光 A2600 D2800 効果

攻撃力は2600。問題はその効果がどんな物かだが…。

「マハンマ様の効果を発動う！相手の場のモンスター1体を破壊するお！先ずはそのライオンを破壊するんだなあ!!」

空から聖なる光降り注ぎ、レオの体を貫く。

「さ、さらに追加効果として、手札を1枚捨てることでもう1体も破壊できるう！お願いします、マハンマ様あ!!」

「げげっ!?!」

先程レオを貫いた光の筋が、再び俺の場に向かい降りてくる。

キユエエエエエエ…

ぐっ、これで俺の場はがら空き…。ダイレクトアタックは結構痛い。しかし

「この効果を使用したターン、マハンマ様は攻撃できない。ターンエンドだお。」

お？攻撃は無しか。これは助かる。

全モンスターを破壊してからのダイレクトアタックは結構えぐいからな。じゃあ今度はこっちの番だ。

今の効果発動で相手の手札は0枚。

ここで一気に攻める！

「俺のターン、ドロー!!」

引いたカードをちらりと見て、それが自分の思っていたものだったことにニヤリとする。

「俺は手札より魔法カード『ネクロフュージョン』を発動する。」

ネクロフュージョン 魔法

自分の墓地から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを除外し、その融合モンスター1体をE・X・デツキから特殊召喚する。この効果で特殊召喚されたモンスターは、このターン攻撃できない。

「これは、墓地のモンスターを融合素材として除外することで、融合モンスターを特殊召喚できるカードだ。」

「ふひよ?」

俺の言葉に顔を傾げる相手。

「つまり、墓地のレオ、ナイトメア、邪毒蛇を除外することで、キメラを融合召喚できると訳だ。」

「な、なんですとお!!?」

「さあ、現れる、合成魔獣キメラ!!」

合成魔獣 キメラ 星8 闇 獣族/効果

A2800 D2400

このカードが攻撃を行う際、相手は魔法・罠・モンスター効果を発動できない。

このカードが破壊された時、このカードの融合素材となったカードを場に全て特殊召喚できる。

「ぶひいっ!!?!」

予想だにしない所から現れたキメラに驚愕の表情を見せる相手。

だが

「しかしネクロフュージョンで召喚したモンスターは、召喚されたターン攻撃できない。」

俺の言葉を聞きホツとした表情が変わる。そして何かに気付き、ニヤニヤと余裕の表情を浮かべた。

「じゃ、じゃあそんな奴召喚したところで、こ、怖くなんてないんだなあ。次のターンでマハンマ様にやっつけてもらうんだなあ。」

そう、このままターンを終了すれば、次のターンにマハンマの効果でキメラは破壊される。

だからこそ、ここでもう一手だ。

「悪いがまだ俺のターン中だ。続けて俺は手札より羽天使を召喚する。」

羽天使 星2 光 天使族／効果

A500 D400

なんか懐かしいな、レベル2でこの強さのカード。

最初の頃はこのレベルのカードたちで頑張ってたもんな…。

っと、今は感傷にふけってる暇はないか。

「俺は場の羽天使と、合成魔獣キメラを融合！」

「ゆ、融合?!で、でも融合の魔法カードは…。」

そう、この融合召喚には融合の魔法カードは必要としない。

「さあ、今こそ降臨せよ! 『翼獣王 キマイラ』!!」

翼獣王キマイラ 星10 光 獣族／効果

A3500 D3000

「合成魔獣キメラ」＋「羽天使」

このカードは上記2体を場から墓地へ送ることで融合召喚できる。（その際融合のカードは必要としない。）

このカードは上記の方法以外での特殊召喚はできない。

次の自分のスタンバイフェイズ時、このカードは墓地へと送られ、このカードの融合素材となったカードを場に特殊召喚する。

このカードは、相手のカードの効果を受けない。

グルオオオオオオオオオオオオ!!!!

背中に1対の翼を生やし、聖なる光を携えて俺の場に現れた、キメラによく似たその獣が雄たけびを上げる。

「な、なっ……。」

流星に予想はしていなかったのだろう。

驚いて声も出ない様子の相手。

「キマイラ、光天使マハンマに攻撃だ！セイント・クロー!!」

キマイラの爪と翼が光りだし、そして一気に上空へと飛び上がる。

その後一気に下降し、その輝く爪でマハンマを切り裂いた。

「つー!!マハンマ様ー!!!」

相手LP6700↓5800

これで相手の場は再び空っぽ。今度は手札も0だ。

対する俺も手札は0だが、場にはキマイラと伏せカードが1枚。

効果により次のターンにはキメラと羽天使に戻るが、盤面は俺が有利。

「ターンエンドだ。」

さて、この状況、相手からすればかなりのピンチだろう。

しかし仮にもこの場にやって来た代表者だ。

何かしら逆転の手を持っていると考えておいた方が良くかもしれない。

そう思い相手の様子を見ると、その顔にギョツとなった。

表情が、抜け落ちていたのだ。

「……、許さないよ本当に。ねえ本当に君何したか分かってるの僕の可愛い子たちをこんな目に合わせてあろうとかマハンマ様にまで攻撃してねえ本当に分かってる君はしちゃいけないことをしたんだよ絶対に許さない許されないんだよねえどうしたらいいのこの思いどうしたらいいのねえ君悪いことしたんだから罰を受けなくちゃだよ

ねえ可愛い女の子たちにあんな酷いことしたんだ当然だよね罰を受けるのはそうだしよねえ皆もそう思うよねだよねだよねこいつは裁かないといけないんだ裁かれないといけないんだよだからさあ…ハア…ハア…、僕が、僕が裁きを下してやるうううつ!!!」

!!!突然別人みたいにブツブツと喋り始めたかと思つたらいきなり叫び出して、こちらもどうしたら良いのか分からない。

「僕のターンドローツ!!!さあ!裁きの時間だつ!!!」

奴がそう言った瞬間、場の空気が重くなつた気がした。

「僕は墓地の女の子たちを除外することで、この御方を特殊召喚つ!!お願いします!破壊の神、メギドラ様つ!!!」

破壊女神メギドラ 星10 A1000 D1000

む…こいつはかなりの威圧感を感じる。

「メギドラ様の効果発動!全てを破壊尽してくださいっ!!!」

そう言うと、メギドラが掲げた手の中に魔力のようなものが集まっっていく。

「悪しきものに、裁きの鉄槌をっ!!!『全てを無に帰す破壊の光』!!!」

それが放たれた瞬間、目の前は真っ白になった。

107話

その暴力的な魔力が収まり、目を開けていられない程の眩しい光も徐々に和らいできたところで、俺はうつすらと目を開ける。

そこには、先ほどと変わらぬ圧倒的な威圧感を放つ破壊女神メギドラの姿。他には何もいない。キマイラも、俺が伏せていたカードすらも。

「め、メギドラ様の効果は、自身以外の場のカードを全て破壊するんだお。し、しかもこの効果は無効化されないんだなあ。ほ、僕の怒りを、お、思い知ったかっ!」

メギドラの効果により、俺の場が空っぽになったことで使い少し落ち着いたのか、最初の喋り方に戻っている。

さっきの喋り方はちよつと聞いてて怖かったから、今の方が良いのはいいんだけど。…にしても、どうするかなあ…。

まさか自身以外全破壊効果、しかも無効化を無効とは。

「じゃ、じゃあバトルフェイズで、メギドラ様でダイレクトアタックなんだなあ。」

さらに攻撃も可能、と。

俺LP8000↓7000

「た、ターンエンドだよ。」

…さて、と。

現状お互いに手札は0枚。

場にはメギドラのみ。

ここからは双方ともにドロー力が、つまりはデッキとの絆が試されるわけだ。

…カードたちとの絆なら、負けるわけにはいかねえ!!

「俺のターン…ドロー!!!」

気合を込めてカードを引く。

「…俺は、魔法カード『ここほれワンワン』を発動!」

ここほれワンワン 魔法カード

デッキからカードを1枚ドローする。

その後コインを1枚投げ、表ならばもう1枚デッキからカードをドローする。裏ならば手札からカードを1枚選んで捨てる。

「先ず俺はデッキからカードを1枚ドローし、コインを1枚投げる。表なら追加で1枚ドローできるが、裏ならば手札を1枚捨てる。」

頼むぜ……!

キイイン……

デイスクから放出されたコインが放物線を描き、丁度俺と相手の真ん中あたりに落ちる。

結果は……

「……っ!表!!よつてもう一枚ドロ……!」

「ぐぬぬ……」

よし、これで一気に立て直せる!

「俺は墓地の羽天使の効果発動。」

「ひっ?」

先程キマイラの融合に使用したこのカード。

ただの融合素材だけではなく、しっかりと有用な効果も持ち合わせている。

「墓地のこのカードを除外することで、除外されたカード一枚を墓地へ戻すことができる。さらにその時、墓地から他のカードを任意の枚数除外することで、その枚数分除外されたカードを墓地へと戻すことができる。まあ勿論、この効果で除外されたカードを墓地に戻すことはできないけどな。」

これにより、俺は墓地から『羽天使』・『ここほれワンワン』そして先程メギドラの効

果で破壊された伏せカードの計3枚を除外し、『レオ』・『ナイトメア』・『邪毒蛇』を墓地へと戻す。

「ひっ……ひっ……」

俺の行動に少しひきつった表情を見せる相手。

「次に、手札より魔法カード『思念の残骸』を発動。」

思念の残骸 魔法カード

自分の墓地のモンスター1体を場に特殊召喚する。この効果で特殊召喚されたカードの攻撃力・防御力は0となり、エンドフェイズ時に墓地へと送られる。

「このカードは、墓地のモンスターを1体場に特殊召喚するが、その攻撃力・防御力は0となり、さらにエンドフェイズには破壊される。」

「ひっ……ふひっ……」

墓地からの特殊召喚の効果に一瞬怯えたような表情をするも、その後によく言葉に首を傾げる。

普通に考えれば、いくら墓地から復活すると言っても、攻防共に0でエンド時には再び墓地へ行くのなら意味のない行動にも見えるだろう。

「俺は墓地から合成魔獣キメラを特殊召喚。そしてもう1枚魔法カードを使用する！
『融合逆行』！」

融合逆行 魔法カード

自分の場の融合モンスターカードをE×デッキに戻し、そのカードに記されている融合素材モンスターを全て墓地から場に特殊召喚する。

「このカードの効果により、場のキメラはE×デッキに戻され、代わりに墓地から融合素材のモンスター全てを場に特殊召喚する!!」

「な、なんですとおっ!?!」

邪毒蛇 A800 D800

ナイトメア A900 D1300

草原の王レオ A1800 D1000

これで俺の場はレオ・ナイトメア・邪毒蛇の3体。

「いくぞ！先ずはレオでメギドラに攻撃！」

「ぎやああああ!!!メギドラさまあー!!!」

相手LP5800↓5000

「さらにナイトメアと邪毒蛇でダイレクトアタック!!」

「ぶふうううう!!!」

相手LP5000↓3300

「ターンエンドだ。」

ふう、何とか持ち直した。

レオ達の合計攻撃力が3500だから、もし仮に次に奴が引いたカードがモンスターではなく、この状況に対応できるものでもなかった場合、イコール俺の勝利となる。

ま、流石にそれは無いか。

さて、何を引いてくるのか…。

見ると奴は必至な顔で自分のデッキに何か懇願している。

「お願いしますお願いします天使様女神様僕を救ってください助けてくださいお願いしますお願いします……。」

……え…つと、素直に引いたわ。

確かに俺もデッキに祈ることはあるけど、流石にあんなに涙や鼻水を垂らしながら懇

願することは無い…はず。

ちよつと見苦しくも思えるが…お、ようやくカードを引いたか。

さて、あれだけ祈ってたが望みのカードは引けたのだろうか？

…あつ、非常に微妙そうな顔してる。正直良いカードでは無かったのか？

おつと、こつちを向いたぞ。

「……………僕は、堕天使ライザマイザ様を召喚。」

堕天使ライザマイザ 星4 A777 D666 効果

その姿を見てまず思い浮かんだのは『異様』。

人の形をしているが、丁度半分辺りで特徴が分かれ、半分はまるで天使のような神聖さを、そしてもう半分には悪魔のごとき禍々しさを持っている。

背中には白い翼と黒い翼。

頭上には半分だけの輪っかにねじ曲がったツノ。

まるで天使と悪魔を半分づつくっつけたような姿のそいつは、その両手にそれぞれ1つつつサイコロのようなものを持っていた。

「ううう……よりもよつてどうしてこんな時にこの御方が…うううう…。」

「どうやら相手にとつてもあまりよろしくない効果のカードなのか？
そう考えていると、場の墮天使は手に持つサイコロを2つ同時に放り投げた。」

「あああ……。」

「何やら嘆いているが、いったいどんな効果なのか説明してほしい。」

コロコロコロ……

ゴロンゴロン……

「1つは聞くものに安らぎを与えるような優しい音。」

「1つは聞くものに不安を与えるような重低音。」

「そしてそのサイコロが出した目は……。」

「天使が投げた方は3。」

「悪魔が投げた方は4。」

「あ……あ、あつ、あつ………あああああああああつ
!!!!!!!」

相手LP3300↓0

「……………勝者、7番。」

あ、あれ？え、えつと？いったい…何が起こったの…???

108話

く9番視点く

なんで……どうしてなんだお……

このタイミングで引いたカードは『墮天使ライザマイザ』様。

この御方の効果は、召喚された時に天使のサイコロと悪魔のサイコロを同時に振り、目の大きかった方のサイコロの夫々決められた効果が発動するというものだよ。

例えば天使のサイコロが5で、悪魔のサイコロが2の場合、天使のサイコロの5の目の効果が出るんだけど……

基本的に天使のサイコロは良い効果、悪魔のサイコロは悪い効果なんだなあ。

でも僕がピンチの時は大抵良い効果はでないんだなあ……

今回も何だか嫌な予感しかないんだお……

だからといって、何もしないままだと負けちゃうお……

……はあ、しかたないんだなあ……。

「……………僕は、墮天使ライザマイザ様を召喚。」

墮天使ライザマイザ 星4 闇 天使族／効果

A777 D666

このカードは裏側守備表示でセットすることはできない。

このカードは特殊召喚できない。

このカードが召喚された時、白いサイコロ1つと黒いサイコロ1つを同時に振る。

出た目が大きい方のサイコロの目の数により、下記の効果が発動する。

同数の場合、さらにコインを1枚投げ、表ならば両方の効果が発動し、裏ならばどちらの効果も発動されない。

尚、出目が1と6の時のみ、1の方の効果が発動する。

白1 …… 黒1 ……

白2 …… 黒2 ……

白3 …… 黒3 ……

白4 …… 黒4 ……

白5 …… 黒5 ……

白6 …… 黒6 ……

対戦相手が驚いた顔をしているけど、僕にそんなことを気にする余裕なんてないお。

お願いですお願いです女神さま天使様どうかどうか良い効果をお!!
2つのサイコロが同時投げられる。

「あああ…。」

お願いですお願いですお願いですお願いですお願いです…

コロコロン…

ゴロンゴロン…

天使の歌声のような清らかな音と、地獄から聞こえる怨念の声のような音。

そしてその出目は…。

白いサイコロが3。

黒いサイコロが4。

「あ…あ、あつ、あつ…。」

よ、4つ!!!??

よ、よりによよつて4つ!!!!?

「黒4 あなたは4000のダメージを受ける」

「あああああああああつ
」

LP3300↓0

!!!!!!!!!!!!!!

俺の勝利が宣言された後、すぐさまリング外へと移動させられる。

えーつと、うん。勝ったのはいいんだけど、何となく釈然としないよね…。

視線の先には先ほどの対戦相手が顔をぐちゃぐちゃにしながらデツキに向かって謝ってる。

…さっきのカードの効果とか詳しく聞きたいところではあるんだけど…、うん、正直近づきたくない。

ま、何か悪い効果があつたんだろうと勝手に結論付けて、次のデュエルの観戦に集中することにした。

次の対戦は1番、つまりシードの人対ダンディなおじさま。序盤はどちらも様子見かな？

ただこれまでのデュエルを見る限り、どちらかと言えばおじさまは防御寄りのカウンタータイプだと思う。

上手に相手を誘導して、自分の掌の上で転がすタイプ。

対する1番の人は、これまた非常に王道なタイプだな。

強いレベル4モンスターで場を制圧して、そこから上級モンスターにつなげる。

魔法や罫も強力な効果が多い。

ん？あれはもしかして…。

「……、この効果により、俺は手札からモンスターを特殊召喚する。出でよ！我が切り札にして最強の僕、マジシャンブラック!!!」

マジシャンブラック 星7 闇 魔法使い族／通常

A2500 D2100

魔法使いとしては、攻撃力・防御力ともに最高クラス

場に黒き魔術師が現れる。

おいおい…、まんまブラックマジシャンじゃん。

「魔法カード『ナイフサウザンド』発動！」

「ぐうっ!!」

まじか…、よく見たら他のカードも原作主人公の闇○戯さんのカードがいっぱい。

他にも、例のブルーアイズ大好き社長の使用カードや、なんちゃらの内君のカードも入ってる。

中には俺の知らないカードも何枚かあったけど、大体原作で有名どころの強カードはほぼ入ってる感じがする。

強欲な壺とか強欲な壺とか、あと強欲な壺とか。

…オリジナルカードは……ない……のか？

しかし強カードを集めたデッキだけに、その強さは本物。

1番のプレイング技術も高くおじさまは防戦一方となっている。

「むっ…このままではっ…!」

自慢のカウンターも1番の強力な魔法カードに封じられ、思うように動けないおじさま。

そしてついに…

「これで終わりだ。マジシャンブラックの攻撃！黒魔導!!!」

「ぐ、ぐうううう!!!」

おじさまLP ↓0

「勝者、1番。」

結局巻き返す事が出来ずに1番の勝利となった。

…伎名を黒魔導くろまどうつて言つてたつけど、日本語読みにすると何かダサイ気が…
「では次のデュエル、7番と10番。」

おっと、次は俺の番。

呼ばれてすぐさまリング上へ。

目の前にはニヤニヤと好戦的な表情をしたヤンキーの姿が。

「おうおう、お前も運が無いよなあ、この俺様と当たつちまうんだからよう。しかもお前のカードはバツチリ見てるからよう、お前に勝ち目なんざねえんだよなあ!!!」

早速煽ってくる。

はい無視無視。こういう手合いは無視するに限る。

「…あんだてめえ、おいこら！無視してんじゃねえぞコラッ!!!」

はい無視ー。管理者さん早く始めてくださいな。

「…では、デュエル開始。」

1人でギヤーギヤー言ってる相手を完全無視して開始宣言をする管理者さん。まぢ有能。

「…俺の先行。」

ディスプレイに表示されたのは先行の文字。

5枚引いた手札を見てこの先の動きを考える。

「つんだコラっ！やんぞ？やってやんぞ?!おいコラ聞いてんのかコラッ!!」

……うるさいので静かにしてほしい。

「…俺はモンスターをセット、カードを2枚伏せてターンエンド。」

前の予選の時と同じく、トーナメントの最初の方ではキメラが頑張ってくれて、聖獣たちを温存できた。

今回も他の参加者は皆、俺の切り札はキメラだと思ってることだろう。

まあこの本大会に出場するほどの実力者たちだから、虚を突いた位で勝てるとは思わないが、心情的優位にはたてる。

少なくともこの、ギヤースカ喚いている今回の対戦相手の顔を驚愕に染めることはで

きるだろう。

「つち！俺様のターン、ドロー!!」

奴がカードを引く。

そして怒鳴り散らしていた顔から一転、勝ち誇った顔で俺に宣言する。

「ふんっ！このデッキはお前みたいな雑魚に使うのはもつたないが…特別に使ってやるよ！ありがたく思うんだな!!」

そしてモンスターを召喚。

「俺は、千支・戌を召喚!!」

千支・戌 星4 地 獣族／効果

A1700 D1600

このカードが召喚・特殊召喚された時、手札・デッキから千支・申を特殊召喚できる。

なっ?!こ、こいつは…!!

「へっ！こいつはなあ！この大会の初代優勝者が使ってたデッキと同じデッキなんだよお！てめえみたいいなクソ雑魚に勝ち目なんかねえんだよお！分かったかおらああ!!!」

…初代、優勝者の…デツキ…？

109話

「…おい貴様、一体どういうつもりだ？」

リングを見つめる管理者の一人が、攻めるような口調で問いかけた。

「おや？何の事でしょうか？私には皆目見当が付きませんなあ…。」

その視線に余裕の表情…いや、こうなることは分かっていたのだろう。ニヤニヤした表情を張り付けて答える。

「…質問を変えよう。なぜあのカードがここにある？」

「そう言われましてもねえ、たまたま、あのカードに成長しただけですからねえ。」

その口元をさらに歪め、さも楽しそうに答える。

「ぐっ…貴様…！」

何を言っても無駄と悟ったのだろう。その管理者は苦虫をつぶしたような表情で相手を睨む。

「ま、あのカードに成長したことに関しては、私も驚きましたよ。」

本心では全くそんなことを思っていないであろうその物言いに、先に口を開いた管理者の額に青筋がうかぶ。

「ですが、私は運が良い。彼がたまたまあのカードを手に入れてくれたことで、私の優勝がほぼ決定したのですから。…ねえ、お前もそう思わないかい？」

そう言つて彼は振り向くと、そこにいたへらへらした表情の管理者に話しかける。

「お前も運が悪かつたねえ。せつかくここまで勝ち上がったのに、残念残念。」

しかし、ニヤついた顔で煽つてくる管理者に対し

「……んー？あ、ごめん、目開けたまま寝てたー。どしたのー？」

まるで氣にした様子を見せず、その場で伸びをしてみせる管理人。

「……つち！（少しは動揺でも見せればいいものを……）」

その姿を見て苛立ち氣に舌打ちをするが、その後の一言で思わず固まってしまふ。

「……ちよつとは動揺ぐらいしてほしかったのー？するわけないじゃん。だつてこつちが勝つてて分かり切つてるのにー。」

「なっ?!?!」

考えを読まれた事にも驚いたが、この状況で自分が勝つて当たり前のような態度に信じられない物を見るような目で見つめる。

「あんな偽物じゃ勝てないよ、絶対に。…まあ、例え借りものじゃなくても、あの子には勝てないだろうけどねー。」

その眼は今まさにリング上で戦っている青年を見つめている。

しかしそれは、管理人が彼の青年を信頼しているというよりも、極々当たり前の事として捉えているように見える。

「…運が悪かったね？せつかくシードだったのにさ。」

「俺は召喚した『干支・戌』の効果発動っ！こいつが召喚された時にはなあ、デッキから別のモンスターをもう一体召喚できるんだよお!!来やがれっ!!!」

干支・戌 星4 地 獣族／効果

A1700 D1600

このカードが召喚・特殊召喚された時、手札・デッキから干支・申を特殊召喚できる。

干支・申 星4 地 獣族／効果

A1600 D1700

このカードが召喚・特殊召喚された時、手札・デッキから干支・戌を特殊召喚できる。
場に現れた2体の干支モンスター。

以前戦ったあいつも使っていたカードだが…、何て言うんだろう？以前の事があるから当然警戒は大なんだけど、あいつと比べて何となく威圧感が無いというか…。

以前このカードたちと対峙した時にはもつと何ていうか、力強さを感じたような気がしたんだけど、今日の前のこいつらからは、そう言ったものを感じない。

「へっ…ビビッて声も出ねえのかあ!?!おら、行くぜっ…バトルフェイズで攻撃だ!!」
こちらの様子を見て『初代優勝者のデッキ』という肩書にビビってるでも思ったの
だろう。

意気揚々と攻めてくる。

「まずは戌でそのモンスターを破壊だぜっ!!」

俺の伏せモンスターに向かって、その鋭い牙で攻撃を仕掛ける戌。

しかし

「俺の伏せカードは…『聖獣・朱雀』!」

聖獣・朱雀 星4 炎 鳥獣族／効果

A1800 D1900

①このカードが墓地に送られた時、自分の墓地のレベル4以下のモンスターカードを1枚、自分の場に特殊召喚できる。

②このカードが墓地に送られた時、①の効果を使用しなかったターンのエンドフェイズ時のみ発動可能。このカードを自分の場に特殊召喚する。

「朱雀の防御力は1900。よってお前にダメージを受けてもらおうぜ！」

「ちいっ！」

相手LP8000 ↓ 7800

「くそがつーんだよそいつ!?!さっきまで使ってたじゃねーかよ!!?!」

奴が何か喚いているがそんなことは知らん。カードゲームってそういうもんだろ？

狙い通り動揺してくれた10番はいいんだが、それより…

…じーっ…

うわあ…、めっちゃ見てるよ…。

チラリとリング外に目をやると、すでに決勝進出が決まっている1番がじつとこちらのモンスターを見つめている。

(そりやそうだよな。次に当たる可能性が有るわけだし、少しでも情報を得ようとするのは当然か……)

『聖獣・朱雀』という名称から、おそらく他の3体がいるであろうことは容易に予想がつくだろうし、今頭の中で様々な可能性を考えているであろうことはその表情から見て取れる。

「ちっ！じゃあ俺はターンエンドだよ！」

しばらく1番の様子を窺っていたが、10番の声で我に返る。

そうだ、今はこいつとデュエル中。次の事ばかり考えてて足をすくわれでもしたらさすがに笑えない。

「…俺のターン、ドローツ!!」

気合を入れ直しカードを引く。

引いたカードは『融合の騎士』。

…そうだな、先の事を考えてビビる必要なんてないよな。

むしろ逆に、お前たちの力を見せつけてやる方が…俺たちらしいっ！

「俺は、融合の騎士を召喚！」

融合の騎士 星4 光 戦士族／効果

A1900 D1400

場のこのカードと、聖獣モンスターカードとで融合を行う際、融合の魔法カードがなくとも融合召喚を行うことができる。

さあ、行くぜ相棒！

「俺は場の朱雀と融合の騎士を融合ー！」

「はっ？融合？お前馬鹿かつ！融合の魔法カードがねえのにできる訳ねえだろっ！もいっぺんお勉強し直して来いよクソ雑魚助がっ!!」

…酷い言われようだ。

だが、クソ雑魚助…とは言わないまでも周りが見えてないこの対戦相手に、現実を見せつけてやるのでしょうか。

「…融合の騎士の効果だ。場のこのカードと、聖獣モンスターが融合を行う場合、融合の魔法カードが無くとも融合を行う事が出来る。」

「…あああん？」

「この効果により、俺は場の2体のモンスターの融合が可能となる。」

一瞬ポカンとした表情を見せる相手だったが、その後苛立ち気な表情で言葉を続ける。

「ちっ！融合できるからなんだってんだよっ！おらっ早くしやがれやつ!!」

進行を遮ったのはそっちなんだが…。

ま、この様子じゃ何言っても無駄か。

「じゃあ、お望み通り見せてやるよ。…炎を支配し力をその身に宿し、南より来たりしは朱き騎士…。出でよ！聖騎士スザク!!」

聖騎士スザク 炎 戦士族／融合／効果

A 2300 D 2000

1ターンに1度、場の好きなカードを破壊することができ、破壊されたカードの持ち主はデッキよりカードを1枚ドロウする。

神々しくもあるその炎の翼を存分に広げ、俺の場に1人の騎士が顕現した。

110話

「バトルフェイズ！聖騎士スザクで、干支・申を攻撃！フレイムソードツ！！」

ズバンツ！！

炎を纏った剣が申を真つ二つに切り裂く。

「ちいっ！！」

相手LP 7800↓7100

「ターンエンドだ。」

聖騎士スザクが場にいる時は、墓地の朱雀の効果は使用できない。その為このターンにフィールドに戻ることはできないが、代わりに聖騎士スザクが破壊された時には融合の騎士と聖獣朱雀の両方が場に戻ることができる。

「くそがつ！！俺のターンツ！！」

額に青筋を浮かべながら勢いよくカードを引く相手。

こりやかなりの短気だな。

「見やがれっ！俺は干支・巳を特殊召喚！」

干支・巳 星2 地 爬虫類族／効果

A500 D600

このカードは場に他の干支モンスターがいるとき手札から特殊召喚できる。

「そして場の戌と巳をリリースしてアドバンス召喚だぜごらああ!!」

干支・辰^{たう} 星8 風 ドラゴン族／効果

A2800 D2400

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃することが可能。但しその場合は攻撃力が半分となる。

む?こいつはまだ見たことが無いカードだ。

「さらにいつ!手札から魔法カード『同着?』を発動っ!!おらっ来やがれっ!!!」

同着? 魔法カード

あなたが干支モンスターを召喚したターン、もう一度干支モンスターを召喚する権利を得る。

干支・未ひつじ 星4 地 獣族／効果

A1500 D1800

このカードは効果では破壊されない

一気に場を整えてきたな…。

「バトルフェイズだっ！干支・辰で、てめえのモンスターに攻撃!!おらっ死にさせえ!!!」

上空からこちらを睨みつけていた龍が動き出し、スザク目掛けて飛びかかって来た。

「リバースカードオープン！無力化の盾!!」

無力化の盾 罨カード

相手の攻撃時に発動可能。その攻撃を無力化する。

「その攻撃を無力化する!!」

その瞬間、干支・辰と聖騎士スザクの間で透明で巨大な盾が現れ、スザク目掛けて突進してきた辰の勢いを完全に殺してしまう。

「……つちい！ターンエンド……。」

……うん。さつきから思っていたが、やはり前に戦ったあいつと比べれば、こいつからは全然プレッシャーを感じない。

いや、この対戦相手が弱いつて言ってるわけじゃあないんだけど、何というか……言葉にするのは難しいけど、何か違うんだよなあ。

相手には悪いけどさ、はつきり言つて負ける気がしない。

「俺のターン、ドロー。」

カードを引く。

「俺は手札からフィールド魔法『四獣の聖域』を発動。」

四獣の聖域 フィールド魔法

フィールド上の聖獣モンスターは攻撃力・守備力は300アップする。

自分の場の聖獣モンスター1体が破壊されるとき、代わりにこのカードを破壊できる。

「さらに『疾風の戦士』を召喚。」

疾風の戦士 風 戦士族／効果

A 500 D 500

このカードが相手に戦闘ダメージを与えた時、あなたはデッキからカードを1枚ドロウできる。

これでスザクの攻撃力は2600。

「聖騎士スザクの効果発動。1ターンに1度、好きなカードを1枚破壊することができる。俺が選ぶのは干支・辰！」

「なにいつ!!？」

スザクの効果によって破壊され墓地へと送られる辰。

「その代わり破壊されたカードの持ち主は、デッキから1枚ドロウできる。」

「……てめえ……覚えてろよ……！」

超睨まれてるし。

「…バトルフェイズ。聖騎士スザクで干支・未に攻撃！フレイムソード!!」

「ぐううっ!!」

相手LP 7100↓6000

「さらに疾風の戦士でダイレクトアタック！」

「ぐわああっ!!!」

相手LP 6000↓5500

「疾風の戦士の効果発動。このカードが相手にダメージを与えた際、デッキからカードを1枚ドロワーできる。」

これで手札は2枚。

「…カードを1枚伏せてターンエンドだ。」

よし。これで相手の場は空っぽ。手札は3枚。

対する俺は、場に聖騎士スザクと疾風の戦士。さらに伏せカードが1枚と、手札が1枚だ。

さて、盤面上か俺が優勢だが…。

その借り物のデッキで、どこまでやれる…？

「くそーくそっ!!くそがーっ!!!てめえ絶対にぶっ殺す!俺のターン、ドローツ!!!」
かなり

殺気立った表情でこちらを睨む相手。

しかし引いたカードを確認したとたん、その顔はニヤニヤとこちらを見下した物へと

変わった。

「…はっはっはーっ！やっぱり俺様が負けるなんてありえねえよ。ありえねえよなあ!!!」

そして

「おらっ先ずはこいつを召喚だ！干支・兎！」

干支・卯 星3 地 獣族／効果

A1000 D1000

このカードが戦闘で破壊された時、デッキからカードを1枚ドロウできる。

「くつくつくつ…俺をここまで怒らせたんだ…。てめえには特別に地獄を見せてやるよっ！魔法カード『猫の来襲』を発動!!!!」

猫の来襲 魔法カード

自分の場・墓地に干支モンスターカードが6枚以上あるときに発動可能。

デッキ・手札から『干支になれなかつた者・猫』を特殊召喚する。

奴の墓地には、戌・申・巳・辰・未の5体の干支モンスターが。そして今召喚した卵を併せて全部で6体。

「これが最強のモンスターだ!!!ひやははははっ!!!」

奴が発動したカードの効果により、場に巨大な猫が現れる…。

……この時を待っていた…!!

「この瞬間!リバースカードオープン!『特殊妨害』!!」

特殊妨害 罨カード

相手が特殊召喚を行った時発動可能。その特殊召喚を無効にする。

「このカードは、相手の特殊召喚を無効にするっ!!」

「ははは………はっ?」

圧倒的強者として場に君臨するはずであった魔物は、場に出現することができず、そのまま墓地へと送られていく。

「……な、なな……なあっ?!?」

A 2200 D 2000

このカードは1度のバトルフェイズで2度攻撃を行うことができる。

このカードが通常召喚された時、手札より『聖獣・青龍』を特殊召喚できる。

四獣の聖域の効果により攻撃力は2500。

「先ずは聖騎士スザクで干支・卯を攻撃！」

唯一相手の場に残っていたウサギが炎を纏った剣に切り裂かれる。

相手LP 5500↓3900

干支・卯の効果で、相手はカードを1枚ドロウできるが、先程と同じく動こうとしな
い様子を見て管理者より先を促される。

「…じゃあ、これで終わりだ。聖獣・白虎は1度のバトルフェイズで2回攻撃ができる。

いけっ！ホワイトファング!!!」

相手LP 3900↓1400↓0

「…勝者、7番！」

111話

「これより決勝戦に入る前に少し休憩時間を取る。各自10分後には再びここへ集まるように。」

準決勝が終った後、俺たちはリング外へと転移する。

どうやらすぐに決勝戦を始めるわけではなさそうだ。

リングから視線をずらすと、未だに呆然とした表情でリングを見つめている先程の対戦相手。

ああまでなるとは、よほどショックだったのか…。

まるで人生で初めて負けを経験した人みたいな表情……、えっと、流石にそれは無い…よね？

まあ他人の事ばかり気にはしてられない。

なんてったって、次は決勝戦。

ようやくここまで来たかという感じだ。

ふと視線を感じたのでそちらへ顔を向けると、決勝の対戦相手がじつとこちらを見つめていた。

が、目が合うとフイツと視線を逸らした。

ま、お互いに意識はするわな。

何にせよ、俺は自分のデッキとカードを信じて戦うだけだ。

デュエルディスクにハマったデッキを一撫でして、気合を入れる為ストレッチをする。

そして、準決勝終了後から10分が経ち：

「時間だ。ではこれより決勝戦を行う。」

パチンツ

ここに来てもう何度聞いたか分からない指の音が聞こえると、俺と対戦相手はリング上へと転移していた。

「第666回『管理者序列決定代理者大会』決勝戦、…デュエル開始！」

俺と相手は同時にディスクを構える。

さあ、泣いても笑ってもこれが最後だ!!

先行は…相手!

「いくぜっ!俺のター!どがーんっ」

!!??

「っ???!」

相手がターン開始の宣言をしようとしたその瞬間、俺たちの立っている場所の真下から巨大な破壊音が聞こえてきた。

「な!?なんだっ!?」

加えて地面が揺れ出し、支え無しには立っていられなくなる。

「ぐっーん、これはまさかつ!?」

リング上にいた管理者も慌てたような表情をしている。

そして

ドゴーーーーーッ

!!!!!!!

巨大な音をたてて、今俺たちがいる部屋の壁が全て崩れ落ちて言った。

「なっ!?」

それは端から見れば、巨大な塔に見えただろう。

その頂上に俺たちはいる。

壁がなくなっただけで見晴らしがよくなった（よくなりすぎ）この場所からは、遙か眼下に1つの大きな街のようなものが見える。

「こ、これは一体……？」

誰かが呟いた次の瞬間

ぐおおおおおおおお

「きゃあつ!!」

!!!!!!!!!!!!!!

地の底から響いてくるようなおぞましい声が聞こえてくる

…ようやく……

…ようやくだ……

…私の邪魔は……

…誰にもさせない……
!!!

一言で言うならば『闇』。

全てを塗りつぶすように黒く、そこにあるだけで不安を掻きたてられる。

決して大きくは無いのに、その存在感はここにいる誰よりも大きい。手のひらほどの大きさの黒く丸い物体が、下から浮き上がって来た。

「……なんなんだよ……こいつ……。」

誰かが呟く。

「ち、ちがうつ！わたしじゃない！私はわるくない!!!」

突如、あの10番を連れてきた管理者が騒ぎ出す。

「貴様っ！この期に及んで……!!」

管理者たちはこれが何か知っているのか……?

そう思っていると、突如目の前にいつもの管理人が転移してきた。

「うおっ?!……つとビックリした……。」

「おつとごめんねー。でも緊急事態だから許してねー。」

口調は軽いが、いつものおちやらけた感じとはちよつと違う。

まるで緊張してるのを隠そうとしているみたい……?

それに管理人はこちらに背を向けたままで……俺を守ろうとしている……?

「時間が無いからこのまま聞いて。あいつは『厄災』。本当は色んな名前があるけど僕たちは分かりやすくそう呼んでる。」

いきなり説明を始める管理人。だが普段のチャラチャラ感を微塵も感じさせないそ

の雰囲気、俺は黙って耳を傾ける。

「あいつは色んな場所、時代、時空で悪意を振りまいてきた。でも最終的にはこの地に封印された。」

この地に…封印…？

「もうずっと前の話だよ。その時は、一人のデュエリストがそのカードと自身の魂を犠牲にして封印することに成功したんだ。」

つてことは、その封印が何らかの原因で解けてしまったつてことか。

「彼が使っていたデッキこそが、さつき君が対戦したデッキ。つまり初代優勝者だ。」

まじか…。ん？つてことは、前に戦ったあいつは……？

それにそんな昔から遊戯王カードつてあったのか？

「まあ君たちの世界とは時間の流れというか、世界の仕組み自体が違うから、もしかしたら初代優勝者が、元の世界で君のよく知っている人間つて可能性も0じゃないけどね。」

そうなのか…。でも前戦ったあいつに見覚えは無い……無い？

「おそらく今回あいつが…ああ、あの騒いでる管理者ね。あいつが何かやらかしたんだろうけど。」

うーん、確かに何か企んでそうな顔はしてたけど…。

多分あの管理者にとつてもこの件は予想外なんじゃないか？

「…ま、何にしても、ひつつじょーろーろーっに、ヤバい状態なわけだね！」
若干やけくそ気味に言い放った管理人の頬を冷や汗が流れる。

この管理人がこれだけ警戒をしている。さらに視線を動かすと、他の管理者達も他の参加者を守るように構え、奴を警戒している。

あの管理人たちがここまで警戒するって…どんだけヤバいんだよ…。

そしてついに、プカプカと上空に浮いていた黒い玉は俺たちがいるリング上へと降りてきた。

…感じる……感じるぞ……

…忌々しいやつのを……

ブシュツツ！

「ぐううっ!!」

「…?…?…?!!お、おいつ?!!」

全く見えなかった。

気がつければ黒い玉はその一部を鋭い槍のような形に変え、俺の前にいた管理人の腹を突き刺していた。

「おいっ！大丈夫か!!？」

背中から黒い槍が付きだしているというのに、気丈な顔で答える管理人。

「だ、大丈夫…。それよりも気を付けて…。奴は君を狙ってる…。つぐつ!!」
貫通していた槍が引き抜かれ、その場に倒れこむ管理人。

…貴様……

…匂う…、匂うぞ……

…奴の、忌々しい匂いが……!!!

再びその体を槍に変え、俺を貫かんと迫ってくる。

その瞬間

パリイン!!!

ガラスの割れたような音がして、その直後、俺たちがいるリングを囲うように円状の

透明なドームが現れる。

「きつ、貴様————っ!!!!!!」

「ひいつ!!!で、でもこうするじかないだろうっ!他に何か方法でもあるのかっ?!」

「だからと言って貴様これはっ…!!」

何やら管理者同士が揉めている。

「…け、結界…だよ。デュエルの為の…。」

「!?お、おい、大丈夫なのか…?」

声が出した方を向くと、管理人が立ち上がるうとしていた。

「大丈夫…。僕たちは体を消滅されたぐらいじゃ死なない…。ただあいつの攻撃は特殊だからね…。ちよつと、治るのに時間が掛かるかな…。」

見ると貫通していたはずの腹の傷はすでに塞がっている。

改めて俺たちとは違う存在だという事を感じた。

「…結界ってのは?」

「さつき話した、初代優勝者がした事と同じだよ。デュエルで全てが決まる、特殊な結界。」

デュエルで…?

「この結界の中ではデュエルがすべてのルールであり、デュエル以外のあらゆる力が無効化される。これでさつきみたいな攻撃を食らっても一切ダメージは喰らわない。ただ1点、デュエルが終るまでここから出ることはできないんだけどね。」

「は？つてことは、こいつをデュエルで倒さないと出られないって事？」

「も、もし負けたら…？」

「そ。ここから出るには、デュエルであいつを倒すしか方法が無い。…ま、もし負けた場合は僕たちだけじゃなく、結界の外の人も皆殺しになるだろうけどね。一回この結界使っちゃうと、次に使えるようになるまでかなり時間かかるし。」

「お、おいおい…まじかよ…。」

「さーらに言うとは、あいつは決して倒せない。…ああ、勿論デュエルでは倒せるよ。でも物理的に消滅させることはできない。だから初代の優勝者も、この結界内でデュエルに勝つことで、奴を弱らせて封印することに成功したんだ。」

「今結界の中に居るのは、俺とこの管理人だけ…。」

「決勝戦の相手は先の地震でリング外に落ちてしまっていた。」

「…つてことは…？」

「そ、世界の命運は君に委ねられたって事。」

ま、まじか…

1 1 2 話

…忌々しい…

…実に忌々しい…

目の前に浮かぶ黒玉は怨嗟の言葉を放ち続けている。

そして真ん丸だったその体(?)は徐々に形を変える。

「これは…。」

その姿を俺は見たことがある。

今までダンジョンの中で戦ってきた10階や20階のボス。

それらと同じく人形に姿を変えた黒玉。

「…再びこの姿を取るようになるうとは…実に忌々しい…。」

だがそのプレッシャーは階層ボスの比ではない。

「…だがそれも貴様等を殺してしまえば済む事…。ふんつ…実に腹立たしいが、我が再びこの世に君臨する前のお遊びと思えば我慢もできる…。」

向けられる殺気に足がすくむ。

だがこの状況、何とかできるのは俺しかない。

「…ふふふつ…では始めるとしようか…死のゲームを…!!」

途端奴の体から黒い靄が噴き出し、結界内を覆う。

「っ!!?」

「ふふふつ…光栄に思うがよい…。貴様は我が復活する為の生贄第一号となれるのだからな…!!」

怖い。逃げ出したい。もういつそのこと死んでしまった方が楽なのでは。

そう思わせるような負の空気を発する黒靄。だが

「…大丈夫だ。君なら…、きつと勝てる。」

ポンツと肩に置かれた手から暖かな力を感じる。

「大した力にはなれないけど、これで少しはあの靄を緩和できるはずだ。」

「…ありがとう。」

肩に触れる手は僅かに震えていた。

俺は管理人に礼を言うのと、デュエルディスクにセットされたデッキを見る。

…うん、そうだな。

目を瞑り、これまでの事を思い出す。

沢山の魔物や強敵と戦い、時には敗れ、時には逃げてここまでやって来た。でもどんなピンチの時も、常に俺のそばにはこいつらがいた。

そうだ。俺にできるのは、最初から最後までデッキを信じ、カードを信じる事のみ。なら難しい事を考えるのはやめだ。

世界の命運とか、そんなプレッシャー掛けられて全力が出せるわけないじゃん。考えるな。ただこのデュエルに集中する、それだけでいいんだ。

……武運を……

脳裏にソラの顔が浮かぶ。

「……みんな……頼むぞ……！」

このデュエル、絶対に勝つ!!!

「ふふっ……では闇のデュエルの始まりだ。私のターン。」

気が付けばいつの間にか奴の手にはデュエルディスクとデッキが。

そしてさも当然の如く向こうの先行でデュエルが始まる。

「…フム。我はモンスターをセット。さらにカードを2枚伏せターンエンド。」

精神に異常をきたす程の黒い靄の中で不気味に浮かぶ3枚のカード。

…どんなカードかは分からないが、あの干支デッキの初代優勝者に1度負けているということは、決して勝てない相手ではないはずだ。

「…俺のターン、ドローツ!!」

引いたカードは、これまで数々のデュエルとともに戦い抜いてきた相棒。

「俺は『聖獣・朱雀』を召喚！そして朱雀でそのモンスターに攻撃だー!」

場に現れるのは炎を司る神々しき鳥。

「ふふふつ…われの伏せモンスターは闇を呼ぶもの。」

闇を呼ぶもの 星1 効果

A O D O

攻防0のモンスター…効果は何だ？

「闇を呼ぶものの効果発動。このカードが破壊された時、我はデッキより『闇の神殿 アビスゲート』を手札に加える。」

闇の神殿アビスゲート…。又物騒な名前のカードだが…。

「俺はカードを2枚伏せターンエンドだ！」

「くつくつくつ…私のターン、ドロウ。我は手札よりフィールド魔法『闇の神殿 アビスゲート』を発動。」

奴がカードを発動した瞬間、奴の背後に巨大な神殿が現れる。

しかしそこに神々しさは欠片もなく、逆に心を不安にさせるようなどす黒さで塗りつぶされている。

「ふふふつ、このカードがフィールドにある限り、名前に闇のつくカードの攻撃力、防御力はそれぞれ500ポイントアップする。」

攻防500アップ…！！

この効果から、おそらく奴のモンスターカードはほぼ『闇』と名についたものばかりだろう。

中々にキツイ。

「では我は手札より『闇の住人・ふ』を召喚。」

闇の住人・ふ 星2 効果

A 800 ↓ 1300 D 800 ↓ 1300

「さらに我は『闇の住人・ふ』の効果を発動。私の場にモンスターカードがこやつのみの場合、手札よりレベル4以下の闇の住人を召喚できる。さあ出でよ、『闇の住人・よ』。」

闇の住人・よ 星4 効果

A1600↓2100 D1600↓2100

くつ、アビスゲートの効果で朱雀の攻撃力を上回れたか…。

「ではバトルフェイズだ。闇の住人・よで、聖獣・朱雀を破壊。」

「ならその瞬間、リバースカード発動！『強引な人質』ー！」

強引な人質 罫カード

相手の攻撃時に発動可能。このカードを攻撃モンスターの装備カードとする。

その攻撃を無効にし、このカードを装備したモンスターのコントロールを得る。

このカードを装備したモンスターの効果は無効化され、攻撃を行えず、表示形式を変更する事もできない。

このカードが破壊された時、このカードを装備していたモンスターは元の持ち主の場に戻る。

「ここは罨カードで防ぐ！」

これで奴のモンスターを奪えれば、攻撃には使用できないがリリースには使用可能だから、他の聖獣召喚が容易になる。

しかし、

「くくくつ…：我は闇の神殿・アビスゲートのもう一つの効果を発動。」

なっ!? もう一つの効果…?!

「我の場に『闇』と名につくモンスターがいる時、1ターンの1度相手の魔法・罨を無効にし破壊することができる。」

「くっっ！」

アビスゲートの効果により、強引な人質はその効果を発揮することなく墓地へと送られる。

そして、

「では改めて、闇の住人・よの攻撃だ。」

俺LP8000↓7800

「ぐうっ…。」

あの神殿はやばい。

だが、やられたのが朱雀ならばエンドフェイズに場に戻ることができる。
まだいくらでも挽回は可能だ。

しかし奴はさらなる絶望を告げる。

「くくつ……ここですらに、闇の神殿・アビスゲートのもう一つの効果を発動する。」

なにつ!? まだ効果があるだど!!?

「闇の神殿・アビスゲートがフィールドにある限り、戦闘で破壊されたモンスターは墓地へ送らず除外する。」

「なにつ!!?」

ま、まずい。これはかなり不味い。

流石の朱雀も除外されてしまったては場に戻って来れない。

「くつくつ……さあ、次元の彼方へと消え去るが良い!」

キュウウウウウウ……

攻撃を受け、墓場に送られようとしていた朱雀は、途中でその方向をかえ、そのまま闇の神殿の中へと吸い込まれて行ってしまった。

クツ、朱雀……

「まだ私のターンは終わっていないぞ。闇の住人・ふでダイレクトアタックだ。」

「ぐわああ!!」

俺LP7800↓6500

俺の場が空になった事で、闇の住人のダイレクトアタックが襲う。

「我はターンエンドだ。」

つ…、強い…。

113話

強い。

これまでに戦ってきた相手の中でも段違いに強い。

…だが、だからと言って負ける理由にはならない！

「俺のターン…ドローツ!!」

気合を込めてカードを引く。

先ずはあのアビスゲートをどうにかしなくては…。

「…俺はモンスターを1体セットし、ターンエンドだ。」

「くつくつく…ずいぶんと消極的ではないか。我のターン、ドロー。」

この状況を打破するには、今の手札だけでは足りない。

「ふむ…。では我は闇の住人・ふと、闇の住人・よをリリースし、『闇の住人・な』を召喚。」

闇の住人・な 星7 効果

A 2800 ↓ 3300 D 2800 ↓ 3300

くっ！上級モンスターか…。

「では、闇の住人・なの効果を発動。1ターンの1度、場のモンスター1体を破壊できる。我が選ぶのはその伏せカードだ。」

「…伏せカードは疾風の戦士。」

疾風の戦士 風 戦士族／効果

A500 D500

このカードが相手に戦闘ダメージを与えた時、あなたはデッキからカードを1枚ドロウできる。

奴の操る、黒くてウネウネしたモンスターが俺のモンスターを破壊する。

「戦闘での破壊では無い為、そのカードは通常通り墓地へと送られる。そしてバトルフェイズ。闇の住人・なでダイレクトアタック！」

「ぐあああああ!!!」

俺LP 6500↓3200

一気にライフを持って行かれる。

「くつくつく…ターンエンドだ。」

現在相手の場には、レベル7の『闇の住人・な』と、フィールドカードの『闇の神殿・アビスゲート』。さらに伏せカードが2枚で、手札は1枚。

対する俺は、場には伏せカードが1枚だけで、手札が3枚。

このターンで何とかできなければ…負ける…!

「俺のターン、ドロローツ!!」

手にしたカードは

「!!俺は手札を2枚伏せ、魔法カード『リセットボム』を使用!!」

リセットボム 魔法

ライフを半分支払い発動できる。

お互いのプレイヤーは手札を全て捨て、新たにデッキから5枚引く。

このカードを発動した時(※ライフを半分支払う前の時点で)、自身のライフと相手のライフに倍以上差があれば、このカードの効果は無効化されない。

俺LP3200↓1600

ライフはさらに半分になってしまいが、元々ライフには倍以上の差がついていた為、

このカードの効果はアビスゲートで無効化されない。

「…ふむ。」

俺はこのドローに掛ける!!

「手札を墓地へと送り、5枚ドロー。…1、2、3、4、…5!!」

引いた5枚のカード。これで現状を打開する為の方法を考える。

「俺は『アドバンス・サポーター』召喚。」

アドバンスサポーター 星1 光 魔法使い族／効果

A100 D100

場のこのカードをリリースすることで、通常の召喚とは別にアドバンス召喚を行う事が出来る。

リリースされたこのカードは墓地に送られずに除外される。

「さらにアドバンス・サポーターの効果。このカードをリリースする事で、俺は通常召喚権とは別にアドバンス召喚権を得る! アドバンス・サポーターをリリースし、来い! 聖獣・青龍!!」

聖獣・青龍 星6 水 海竜族／効果

A 2 6 0 0 D 2 2 0 0

1ターンに1度相手の魔法・罠カードの発動を無効化し破壊する。

このカードが通常召喚された時、手札より『聖獣・白虎』を特殊召喚できる。

「聖獣・青龍の効果発動！このカードが召喚された時、手札より聖獣・白虎を特殊召喚する！来いっ、白虎!!」

聖獣・白虎 星5 風 獣族／効果

A 2 2 0 0 D 2 0 0 0

このカードは1度のバトルフェイズで2度攻撃を行うことができる。

このカードが通常召喚された時、手札より『聖獣・青龍』を特殊召喚できる。

「ふむ…、だがそんなモンスターを並べたところで、我が闇の住人は倒せぬぞ?」

そんなことは分かっている。だからもう一手だ。

「俺は手札から、魔法カード『聖獣の施しを』発動。俺の場の聖獣の数分カードをドロ―する。」

聖獣の施し 魔法

自分の場の聖獣モンスターの数だけ、自分はデッキからカードをドロウする。

「…ふむ…。」

アビスゲートの効果で無効化されるかと思ったが、ここは通されるようだ。

ならば…！

「俺はカードを2枚ドロウ！そしてさらに、魔法カード『青龍の激昂』を発動する！」

青龍の激昂 魔法

自分の場に『聖獣・青龍』又は『聖騎士セイリユウ』がいる時のみ発動可能。
場の魔法・罠カードを1枚選び破壊する。

「このカードの効果で、『闇の神殿アビスゲート』を破壊する!!」

俺が使用したのは、非常に厄介なアビスゲートを破壊するカード。

しかし

「ならば我はアビスゲートの効果を発動。その魔法カードの発動を無効化する。」

効力を失い墓地へと送られる俺のカード。

しかしこれは予定通り。流石にアビスゲートが破壊されるのは妨害するよな。でもこれでもう一枚のカードが無効化される事無く発動できる。

「なら俺は、永続魔法カード『封邪の結界』を発動！」

封邪の結界 永続魔法

自分の場の聖獣モンスター並びにその融合モンスター1体につき、相手の場のモンスターの攻撃力・防御力は500下がる。

「む……？」

俺がカードを発動した瞬間、場は明るい光に包まれる。

そしてその光がまるで拘束具の様に相手の場のモンスターを絡めとる。

闇の住人・な 星7 効果

A 3 3 0 0 ↓ 2 3 0 0 D 3 3 0 0 ↓ 2 3 0 0

「これでお前のモンスターの攻撃力を上回った！バトル！『聖獣・青龍』で『闇の住人・な』に攻撃！！」

グルオオオオオ
!!!!!!

咆哮を上げながら相手モンスターに突撃する青龍。

相手LP 8000 ↓ 7700

「よしっ！次に白虎でダイレクトアタック！聖獣・白虎は2回攻撃が可能だ！食らえっ
！ホワイトファング!!!」

相手LP 7700 ↓ 3300

通った!!

これでライフポイントはかなり削ることができた上に相手の場にモンスターはいない。
い。

出てきたところで封邪の結界の効果で攻防共に1000ポイントダウンする。

かなり優位に立てたんじゃないだろうか。

だが相手が相手だけに油断するつもりはない。

「ターンエンドだ。」

問題はリセットボムの効果で相手の手札が増えてしまったことだが…、ここからどう

動く…？

「…フム、私のターン、ドロウ。」

相手はあれだけのダメージを食らったにも拘らず、まるで気にしていないような素振りでデュエルを進める。

そして手札を見ていたその眼が俺へと向いた時、言いようのない不安感に襲われた。

「では私は手札より魔法カード『アビスホール』を発動する。」

アビスホール 魔法

相手の場のモンスターを全て除外する。

このカードを使用したターン、あなたは攻撃を行えない。

自分の場に『闇の神殿アビスゲート』が存在する時、この効果は無効化されない。

奴がカードを発動した瞬間、場のアビスゲートが一際真っ黒に染まり、そして

「!!青龍!!白虎!!」

俺の場の2体の聖獣が吸い込まれていった。

「このカードは相手の場のモンスターを全て除外するカードだ。しかしその強力な効果と引き換えに、我はこのターン攻撃を行えないがな。」

くっ…、何とか聖獣を召喚しても、たった1枚のカードでひっくり返されてしまう。
「ふむ…、ここまでしても諦めんか…。…その眼、気に入らん…。」

何とか逆転の一手を探す俺を見て、奴はそう言い放つ。

「ならばさらなる絶望を与えてやろう。我は『闇の住人・ひ』を召喚。」

闇の住人・ひ 星1 効果

A 4 0 0 ↓ 9 0 0 D 4 0 0 ↓ 9 0 0

「そして『闇の住人・ひ』の効果を発動。このカードを墓地に送ることで、我は手札からレベル5又は6の闇の住人を召喚することができる。我は『闇の住人・む』を召喚。」

闇の住人・む 星6 効果

A 2 4 0 0 ↓ 2 9 0 0 D 2 4 0 0 ↓ 2 9 0 0

現れた異形の存在。そして

「くっくっく…、『闇の住人・む』の効果。このカードが場にいる限り、お互いのプレイヤーは効果モンスターを召喚する事が出来ない！」

「な、なんだとっ?!」

「くつくつ…、ここまでの様子を見る限り、貴様のデッキには効果モンスターばかりであ
ろっ?」

「ぐっ…。」

奴の言う通り、俺のデッキのモンスターはほぼ効果モンスターだ。

「おっと、言うのを忘れていたが、勿論特殊召喚・反転召喚、さらにはセットも不可能だ
ぞ?」

こ、これは過去最大のピンチなのでは…?」

1 1 4 話

闇の住人・む 星6 効果

A 2 4 0 0 ↓ 2 9 0 0 D 2 4 0 0 ↓ 2 9 0 0

このカードが場に存在する限り、お互いのプレイヤーは効果モンスターを召喚・特殊召喚・反転召喚・セットする事が出来ない。(このカードを除く)

ヤバい。控えめに言ってヤバい。

何がやばいって、このカード1枚だけで完封される可能性が有る程にはヤバい効果を持つている。

ダンジョンやカードの仕様上、成長やレベルアップ、ランクアップによりほとんどのカードは強力な効果を持つカードへとその姿を変える。

中には、効果を得ない代わりに素の能力が高かったり、他のカードとのシナジーがあるカードなんかもあるけど、俺の場合は元々のカードは全て聖獣たちと一つになり、50階以降で手に入れたカードも強力な効果を持つカードばかりだ。

もしここに立っていたのが俺じゃなかったとしても、おそらく今の俺と同じだけの絶

望感を味わうことになっただろう。

「我はこのターン攻撃が出来ない。よってターンを終了する。」

現在場には『闇の住人・む』が1体。

そして相手にはアビスゲートと伏せカードが2枚に手札が3枚。

対する俺は、手札が1枚に伏せカード4枚。内1枚は封邪の結界だ。

青龍と白虎が除外された今、封邪の結界は只の置物と化してしまっている。

ライフは俺が1600、相手が3300で、俺の方は一撃圏内。

『闇の住人・む』の効果で、効果モンスターを召喚を封じられ、さらには魔法や罫を使うにも、『アビスゲート』の効果で1度は無効化されてしまう。

「さあ、どうした…、カードを引くが良い。くつくつく…貴様の、最後のドローだ。」

無意識に手が震える。

今まで感じた事のない程の恐怖と絶望感に、まるで漆黒の闇に取り込まれてしまったような感覚に陥る。

「くつくつく…、さあ、早く引け。そして絶望しろ。その闇こそが私の糧となる…！」
奴から常時発している黒い靄の影響もあるのか、悪い考えばかりが頭をよぎる。

…ま、もし負けた場合は僕たちだけじゃなく、結界の外の人も皆殺しになるだろうけどねー

「ぐっ……！」

先程の管理人の言葉を思い出し、自分が負けた後の事を想像したことで、そのプレッシャーに吐きそうになってくる。

「くっはっはっは!!良い顔だぞ、貴様! そうだ、その顔を見たかったのだっ!!!」
奴が何か言っているがこちらはそれどころじゃない。

顔にはびっしりと汗をかき、手は震えてまともにカードを引くことも出来ない。

真つ暗な闇の中、俺と奴だけが存在する、世界から切り離された空間

(…もう…、ダメなのか……。)

全てを塗りつぶす闇の中で…、1条の光が走った。

「む……っ」

「これは……っ」

その光はこの黒き世界の中では非常に頼りないほどの小さな光。

だが、俺にとっては何よりも眩しく、暖かい光に感じた。

「……………俺のターン……。」

その光に勇気付けられ…、気が付くと、もう震えは止まっていた。

「…貴様……！」

先程の様子とは打って変わって、堂々とした佇まいの俺を見て奴は齒噛みをする。

「…俺は今まで、どんな時も、カードと、デッキを信じてここまで戦ってきた…。そして、今の俺があるのは、ともに戦い抜いてきたカードたちと、今まで戦ってきた強敵たちがいたからこそだ……。」

ゆつくりとデッキトップに、淡い光を放つそのカードに手を掛ける。

「だから俺は…、これまでの経験と、カードを信じて…、未来をつかみ取る!!!」

目を見開き、一気にカードを引く。

「ドロオオオツ——!!!」

「…マスター、そのカードを入れられるんですか？」

決勝の前に、ソラと一緒にデッキを組んだ時の彼女の言葉だ。

「ん？ああ、入れるつもりだけど？」

何となく渋い表情で彼女は言った。

「確かに、カードの能力自体は強いかもしれませんが、マスターのデッキには合っていない気がしますけど…。」

彼女の言葉に、苦笑しながら答える。

「ははっ、確かにな。…でも、何となくだけど、このカードは入れといた方が良い気がするんだ。」

俺の言葉に若干納得のいかない表情を見せながらも

「…そうですか。マスターがそうおっしゃるなら。」

そう言ってくれた。

確かに俺のデッキのカードとは特にシナジの無いカードなだけに、本来なら候補にも挙がらないカードだ。

しかし、この時俺は、このカードをデッキに入れておかないと後悔する、何故かは分からないがそんな思いに駆られていた。

そして今この時、その判断が正解だったことが証明される。

「っ!!リバースカードオープン!罠カード『九死に一生』!!」

九死に一生 罠カード

自身のライフが相手より倍以上少ない時にのみ発動可能。

手札よりモンスターカードを1体選び特殊召喚する。

引いたカードを一瞬だけ確認し、それを召喚する為に罠カードを発動させる。

「俺のライフがお前より半分以下の場合、手札よりモンスターを1体特殊召喚できる!」
しかし、この状態で召喚できるモンスターに対して警戒し、奴はアビスゲートの効果

を使用する。

「む？ならば我はアビスゲートの効果を発動。その罨カードの発動を無効化する。」

罨の効果は無効化されるが、そのかわり奴はこのターンもうアビスゲートの効果を使えない。

「さらにリバースカードオープンッ！『古のルール』!!」

「ぬ!？」

古のルール 魔法カード

手札からレベル5以上の通常モンスター1体を特殊召喚する。

リセットボム発動の直前に伏せておいたカードだ。

「俺は手札から、レベル5以上の通常モンスターを特殊召喚する！」

俺のデッキの中で、今から召喚するカード以外に通常モンスターはいない。

つまりこいつの為だけにデッキに追加したカード。

数あるデッキのカードの中で、たった1枚のカードの為だけに入れた、2枚の内の1枚。

そのカードが、今噛み合った。

「俺はこのモンスターを特殊召喚する……その光を以て漆黒の闇を切り裂け!! 出でよ、
『シャイニングドラゴン』
!!!!」

シャイニングドラゴン 星8 光 ドラゴン族／通常モンスター

A3000 D2500

かつてダンジョンの50階で死闘を繰り広げた相手、一度は敗れた相手から譲り受けたこのカード。

まるであいつが「何を諦めている」と叱咤してくれたようにも感じた。

「ぐっ……まさか通常モンスターがいようとは……」

予想だにしていなかった上級通常モンスターの出現に動揺が見える。

「これは強敵ライバルから譲り受けた、奴の魂のカードだ。この光で、お前の闇を切り裂く!」

ギャオオオオオオ!!!

俺の思いに反応してか、力強い咆哮を上げるシャイニングドラゴン。

「行くぞ、バトル！シャイニングドラゴンで『闇の住人・む』に攻撃!! シャイニング・ブラスター!!!」

「むおおお!!」

相手LP 3300 ↓ 3200

…よくやった…

シャイニングドラゴンの攻撃が放たれた瞬間、あいつの声が聞こえた…のような気がした。

115話

「ぐっ……、忌々しい……、実に忌々しいっ!!」

俺の攻撃を食らい、その表情を変貌させる相手。

既に詰みだと思っていた盤面からまさかの反撃。

奴からしてみれば到底許せるものではないのだろう。

「…ターンエンドだ。」

怒りに満ちた様子でこちらを睨んでくる。

「我のターン！ドロー！」

力まかせにカードを引き

「我は魔法カード『闇より出ずるもの』を発動！手札より『闇の住人・み』を除外するこ
とで、墓地の闇の住人を3体、効果を無効にして守備表示で特殊召喚する！さあ甦るが
よい、闇の住人達よ!!」

闇の住人・ひ A400↓900 D400↓900

闇の住人・ふ A800↓1300 D800↓1300

闇の住人・よ A 1 6 0 0 ↓ 2 1 0 0 D 1 6 0 0 ↓ 2 1 0 0

奴の手札から1枚のカードがアビスゲートへと吸い込まれ、代わりにフィールドには3体の闇の住人が甦った。

「…さあ、見せてやろう。本物の、闇というものをなあっ!!!」

そう言いつつ手札の1枚を頭上に掲げる。

「我は場の3体の闇の住人共を生贄に、このモンスターを召喚する!!!」

生贄…? リリースではなく…?

そう思った瞬間、世界は黒に染まった。

「ふははははっ!!! 出でよっ! 『闇の住人・と』!!!」

闇の住人・と 星10 闇 効果

A 4 0 0 0 ↓ 4 5 0 0 D 4 0 0 0 ↓ 4 5 0 0

それは一言で言うと、完全な闇。

全ての光を遮る完璧な黒。

一度捕まれば二度と逃げることはできない。そう思わせるような巨大な玉。そしてその黒玉は徐々に形を変え、今対峙している邪神の様に人形へとその姿を変えた。

まるでこの邪神の分身であるかのように。

「くつくつく…、バトルだ。『闇の住人』で、その忌々しいモンスターに攻撃だ！ トユルー・ダークネス!!」

グオオオオオオ…

光り輝く龍が闇に包まれて消えていく。

だが…

「…この瞬間、墓地の『神聖なる墓守』のモンスター効果発動。」

「…何?」

神聖なる墓守 星4 光 魔法使い族／効果

A1000 D1200

墓地のこのカードを除外することで発動可能。

あなたの場のモンスター1体を選択する。そのカードはこのターン戦闘で破壊されない。

「この効果により、俺の場のシャイニングドラゴンはこのターン戦闘では破壊されなくなる。」

「ぬううつ…!!」

「アビスゲートの効果は『魔法・罫を無効にする』だったはずだ。ならこのモンスター効果は無効化されない!!」

「……………つちい！先程のリセットボムの時か…。だが、ダメージは喰らってもらおうぞ…!!」

俺LP1600↓100

そう、俺はリセットボムを発動した際、手札に残っていた最後の1枚がこのカードだった。

疾風の戦士をセットした時どちらを出すか迷ったが、結果として神聖なる墓守を気取

られずに墓地へ送ることができたので、あの判断は間違つてなかつたのだろう。

「…ターンエンドだ。」

実に悔しそうな声色でそう宣言する相手。

召喚した瞬間からずつとこのシャイニングドラゴンを睨んでいるが…、もしかして昔何かあつたのか？

つと、今はそんな事気にしている場合じゃない。

折角ここまで繋いでこれた道を、一瞬の油断で無にするわけにはいかない！

「俺のターン…」

何度も何度もピンチを乗り越えて辿り着いたこの場所。

後ろを振り返れば、そこにはカードたちと共に歩んできた道が続いている。

それは真つ直ぐな道だけではなく、あちこち曲がりくねったり、時にはUターンしたところもある。

でも、その要所要所であつた出来事、強敵との闘い、カードたちとの絆は、まるで昨日の事のように思い出せる。

不甲斐ない、情けない主だつたかもしれないけど、それでもこんな俺についてきてくれたカードたち。

共に戦い、俺を助けてくれたカードたち。

だから、今ここで引くカードが…、勝利の為の1手でない筈がない!!

「ドローツ!!!」

そして手にしたカードは、やはり俺の思い描いていたカードで…

「俺は、今引いた魔法カード『光龍の威光』を発動!!」

シャイニングドラゴンの為だけに入れた2枚のカードの内のもう1枚。

「シャイニングドラゴンが場にいる時、お前の場の魔法・罠カードを全て破壊する!!」

そして

「っ?!?我はアビスゲートの効果発動!その魔法を無効化し破壊する!!」

当然の如く無効化される。

だが…、これでいい。

「なら俺は、リバースカードオープン!『光の救済』!」

本命は、こつちななのだから。

光の救済 魔法カード

自分の場の光属性モンスター1体を選択して発動可能。

あなたの除外されたカード全てを墓地へと送り、あなたはカードを2枚引く。

その後、選択した光属性モンスターを除外する。

「俺は除外されているカード全てを墓地へと送り、2枚ドロロー。そしてシャイニングドラゴンも除外される。」

「……なにを……する気だ……？」

先のターンでダメージを受けてでも場に残したシャイニングドラゴン。それを除外してまで使用したこのカード。

俺の意図が分からず困惑した様子を見せる相手。

「さらに手札より『チェンジ！』を発動。」

チェンジ！ 魔法カード

自分の場のカード1枚と、自分の手札を1枚を墓地へ送る。

その後、デッキからモンスターカード1枚を選び手札に加える。

「俺は場の『封邪の結界』と、手札1枚を墓地へと送り、デッキからモンスターカード1枚を手札に加えるぜ。」

光龍の威光ならば確実にアビスゲートの効果を使用するだろうと予想し、それを囷にすることで、ようやく……、準備が整った。

「…お前が真なる闇だというのなら、俺はそれを光で切り裂いてみせる。絆という名の光でっ!!」

真っ直ぐに奴を見据え、そう宣言する。

「俺は、光の救済の効果で墓地に送られた『聖獣・朱雀』『聖獣・白虎』『聖獣・青龍』と、チェンジ!の効果で墓地へと送った『聖獣・玄武』を除外し…」

1枚のカードを頭上に掲げる。

「『聖獣・黄龍』を特殊召喚するっ!!」

聖獣たちは、朱・蒼・白・黄の4色の玉となつて黄龍へと力を与える。

「来いっ!黄龍!!!」

聖獣・黄龍(怒) 星12 光 ドラゴン族/効果

A4500 D4500 ※(怒)になることで、攻防共に500アップ

このカードは通常召喚できない。

このカードは自分の場に『聖獣・朱雀』『聖獣・玄武』『聖獣・青龍』『聖獣・白虎』がいる時のみ手札から特殊召喚できる。

また、このカードは、自分の墓地に上記4体の聖獣カードがある時、それらを全て除

外することでも手札から特殊召喚できる。その際、このカードは『聖獣・黄龍（怒）』となる。

このカードは相手の発動する効果の対象にならない。

このカードが召喚に成功した時、デッキから黄龍の名前が記されたカードを1枚手札に加えることができる。

その姿は神々しくも荒々しく、目の前の敵へと激しい怒りをぶつけている。

「ぬ、ぬう…、そのモンスターは…。」

黄龍の姿を見たやつは、そのプレッシャーにたじろぐ。

「黄龍が召喚された時、デッキから黄龍の名が記されたカードを1枚手札に加えることができる。…まだまだいくぜ？さらに俺は手札から『融合の騎士』を召喚！」

融合の騎士フュージョンナイト 星4 光 戦士族／効果

A1900 D1400

場のこのカードと、聖獣モンスターカードとで融合を行う際、融合の魔法カードがなくても融合召喚を行うことができる。

最後の最後に来てくれた、俺のもう一枚の相棒。

「そして、『融合の騎士』と『聖獣・黄龍』を融合！」

俺のデュエルの最初期から共に戦い支えてきてくれた相棒と、最強の聖獣が今ここに融合する。

「森羅万象を支配し力をその身に宿し、天より来たりしは黄金の騎士。出でよ、聖騎士…、いや！超戦士コウリユウ!!!」

超戦士コウリユウ 星12 光 ドラゴン族／融合／効果

「聖獣・黄龍（怒）」＋「融合の騎士」

A5000 D5000

このカードは相手の発動する効果の対象にならない。

このカードが場にいる時、黄龍の名が記されたカードは無効化されない。

最強の戦士が、ここに降臨した。

116話

鍛え抜かれた肉体に、黄金に輝くオーラを放ち場に君臨するは絶対的強者。

「手札より、『終焉の雷』を発動！」

黄龍の効果で手札に加えたカードを使用する。

終焉の雷 魔法カード

自分の場に「聖騎士コウリユウ」又は「超騎士コウリユウ」がいる時のみ発動可能。
相手の場のすべてのカードを破壊する。

この効果は無効化されず、またこのカードに対して罠・魔法カードを使用することはできない。

「このカードは、お前の場のカードを全て破壊する効果を持つ。そしてこのカードを無効化することはできない！」

「な、なんだとおお!!?」

フィールドに轟音が響き、目を開けていられない程の光が辺りを白く染める。

そしてその光が収まった後には

「…ば、ばかな…。」

空っぽになった相手の場と、悠然と佇む1人の戦士。

ふと気になって相手の墓地を見ると

リフレクション 罠カード

相手モンスターの攻撃で自身のライフが0となる時に発動可能。

そのモンスターの攻撃力の数値分相手ライフにダメージを与え、自分へのダメージは0となる。

マジックリフレクション 罠カード

相手の発動した効果で自身のライフが0となる時に発動可能。

その数値の2倍のダメージを相手に与え、自分へのダメージは0となる。

デュエリストアイの効果か、そこにあるカードの詳細が見て取れた。

「…プツ……ツクツクツクツ、なんだかんだ言って超ビビってるじゃん。」

奴が最初から伏せていた2枚のカードは、自身が負けるギリギリに発動するカウン

ターカードだった。

余程初代優勝者に負けて封印されたのがトラウマだったと見える。

「きつーきさまああああ!!!」

カードの詳細がばれ激昂する相手。

だがこの状況で吠えられても、もう怖くない。

「さあ、これで終わりだ！バトルツ！超戦士コウリユウでダイレクトアタック!!」

龍の鱗のような模様を持ち、黄金色に輝くその大剣を大きく振り上げるコウリユウ。

「…や、やめろ…、やめろおおおおお!!!」

「やれつ、コウリユウ!!エレメンタルスラッシュユウウ!!!」

ぎやああああああああ

相手LP 3200 ↓ d!!!!!!!!!!!!

バリーイイイイン

直後、ガラスが割れるような音が鳴り、俺たちを囲っていた結界が消え去った。と同時に、他の管理者達もこちらへ駆け寄ってくる。

「は、ははっ、やった、やったぞ!! おいお前、よくやったっ!! やはり任せて正解だったじゃないk 「馬鹿もんがーっ!!!」ぶふううっ!!!」

い、一番に駆け寄って来た管理者、確かこの結界を張って他の管理者達から怒られた人だったはず。

その人が言葉の途中で別の管理者に殴られて飛んでいく。

「貴様はっ!! 自分が何をやったか、何を言ったか分かってるのかあっ!!!」
「ぶひいひいっ!!?」

決勝で挨拶をしていた人、おそらく前回の優勝者で、今回の優勝者が決まるまでは実質一番トップであろう人が、殴り飛ばされた管理人の元へと走っていく。

「…お? 教育的指導（物理）が始まった。…ま、俺には関係ないし、いいや。
「…お疲れ様。そして本当にありがとう。」

気が付くといつもの管理人が目の前へとやってきていた。

「…いや、別に…。」

いつものおちやらかな感じでも、先程の緊張した感じでもなく、どちらかと言えば慈愛に満ちた、皆を見守る超越者のような顔の管理人に、何となくそっぽを向く。

「ふふつ、君は『別に大したこと…』って思ってるかもしれないけど、君がしたことは僕たちの歴史に残る大偉業だからね。もつと胸を張っていいんだよ？」

普段の様子から考えられない程の優しい言葉に何となく照れてしまう。

「い、いや、その…、な、なんか調子狂うなあ…。」

「そうかい？君がそう言うなら普段の感じに戻ろうか。ま、何はともあれ、これで一先ずの脅威は消えさし『どぞおおおおおおん!!!』っ!!!」

突然鳴り響いた轟音に、皆がその音の出処へと視線をやると

「なっ…、なぜ…?」

そう言葉を漏らしたのは誰だったのか。

その視線の先には、先程と比べればプレッシャーは大分落ちているものの、しっかりと両の足で立つ黒き厄災がいた。

「ば、ばかな…、封印から出たばかりで本調子ではない上に、デュエルで負けた事でかなりのダメージを食らっているはずなのに…。すぐに起き上がる程の力が残ってるわけがないのっ!!」

しかし奴はどっしりと地に足を付けこちらを睨んでいる。

「…なにがデュエルだ…、何が境界だっ!! 我にそんなものが通用すると、本気で思っているのかああああっ!!!」

奴の怒声に合わせ、体から黒い靄があふれ出す。

「ひいひいひいっ!!」

その様子に腰を抜かす管理者の一人。

だが…

(…いや、確かにプレッシャーはかなりの物だが、さっきまでの抗えない程の恐怖は感じない。やはりデュエルでのダメージはしっかりと入っているんだ…)

そう考えた俺がチラツと横を向くと

…コクン

おそらく同じ考えであろう管理人が頷く。

そして

ひゅっ…がしっ!!

「む…?なんだこれは…!」

別の管理者が奴の背後から、不思議な模様の書かれた紐を投げつけて拘束する。

「よしっ！これは神々ですら縛ることのできる紐だ！これで捕縛してしまえば後は我々だけでも…「ばちいいいん!!!」……………え？」

自信満々に説明していた『神をも縛る紐』を、奴は力づくで弾き飛ばし

「ぐはっ!!」

「「っ!?!」」

そのままの勢いに紐を持っていた管理者を吹き飛ばした。

「な…、な、ぜ……………」

「言ったであろう、我にそのような物等通用しないとっ!!!」

おいおいマジか…。

デュエルで勝てばそれで終わりじゃないのかよ…。

「…流石にこれは僕も予想外だった、かな…。」

側で管理者が呟く。

「…本来の予定は？」

奴を自由にさせない様に、連携をとりながら牽制をする他の管理者達を確認しながら

短く聞き返す。

「…本当ならさつき彼が言った通り、立ってられない程弱まるはずだったんだけど、ね。そしたら僕たち管理者の力だけでも封印はできたはずなんだけど…。あの紐が破られるって事は、ちよつと無理かなあ…。」

予想以上に奴の力が強かったって事か？

「そ、そうだ、それだ！封印だ！！頼む！奴を封印してくれえ！！」

「つく…！貴様は…、どこまで恥知らずなんだあつ！！」

「ピイイ！！」

あつちで例の管理者が何か言ってる。

「封印…ってのは？」

その言葉に、一瞬何とも言えない表情をした管理人。

「…この戦いの前に話したね。『一人のデュエリストがそのカードと自身の魂を犠牲にして封印することに成功した』…って。」

そうだ、確かそれが初代優勝者…？ん？自身の魂…？

「彼の魂は彼のデッキと共に永遠にここに封じ込められることになる…はずだった。あの厄災と一緒にね。只どこかの誰かさんが何か弄ったんだろうね。おそらく初代優勝者のデッキを自分の所のプレイヤーに使わせるために。その結果、封印が緩んで奴が復

活することになったみたいだけど。」

永遠に封印…。

かのプレイヤーは何を思いながらその決断をしたんだろうか。

「彼が言う封印っていうのは、その初代優勝者と同じことを君にさせようって言ってるんだ。」

…つまり、俺に人柱になれ、と？

「本当に情けない話なんだけど、今の奴は僕たち管理者が束になってもどうにもできない。限りなく良い条件が整ってようやく、僕たちの力だけで封印できる可能性が0・01%あるかどうか…ってところかな。」

それはもう可能性0と言ってもほぼ間違いないような話だ。

「今の力が弱った奴でさえそれだけの力を持つているんだ。おそらくこの世界の誰も奴を止める事はできないよ。それに、時間が経てばたつ程奴はどんどん回復してより手が付けられなくなる。」

…他所からの増援は期待できない、か。

「でも、そんな奴を封印できる人間が、1度デュエルで奴を負かした、君…。」

「そ、そうだ！だから早く封印を…!!」

「貴様は黙っておれえい!!!」

「ひやあああ!!」

口を挟んですぐさま閉じさせられる。

な、何か大事になってきたけど…

申し訳なさそうな顔の管理者達の顔を見て、今の話が冗談でも何でもないことを理解させられる。

……ま、まじか…。

117話

奴をどうにかできるのは現状俺しかない。

そしてその方法は、俺自身を人柱にして奴と共に封印されること。

急展開に頭がうまくついて行かず固まる俺を見て、覚悟を決めたような顔で管理人が言った。

「…………いや、でも君にばかり負担を掛けるつもりはない。こうなったのも僕たちの管理の甘さが原因だ。だから、僕は、この命を使う。」

「っ!!!」

え…!!?ど、どういうこと、だ…?

「だ、ダメだ!それだけは駄目だ!!」

「そ、そうだ、そこまですることは…。」

管理者たちが口をそろえて諫めようとしているが、俺からしたらチンプンカンプン。

命をつかう?使ったらどうなる?

「いや、それくらい覚悟は必要だよ。前の時だってそうだ。僕たちは他人によって作られた平和の上に、胡坐をかいて座っていただけなんだから。」

分かるように説明してほしい。

「つと、ゴメンね、君には理解できない話だった。さつきは奴をどうにかする方法は君に頼むしかないって言ったけど、実は他の方法もあったんだ。それが僕たち管理者の命を使うという事。僕たちは自分で言うのもなんだけど、非常に強い力を持っている。その力を持つて色んな世界の管理をしてたりするんだけど、今回は僕の命を使う、つまり死ぬことによつてその力を純粋なエネルギーに変えるんだ。そのエネルギーを他の管理者に託すことで奴に対抗しうる力を手に入れることができるはずなんだ。」

そ、そうなのか。だが管理人が死ぬということは…

「だ、だがお前が消えれば、お前が管理していた世界はどうなる？いくら力を託してもそれが発揮できるのはこの戦いだけだぞ!」

俺が聞きたいことを管理者が問うてくれる。

「残った人に任せるかなあ…。もしくは、そういう運命だったと思つて消えてもらうかなあ…。」

「もし世界が1つでも消滅すればそこに又厄災のような奴がやってくる!その時はどうするつもりだ!」

まじか。さらつと言つてるけど管理人が消えることで世界への影響が莫大じゃないか。

「…………でも…、僕たちが知る限りこの厄災以上の奴はいない。たとえ他の厄災がやってきたとしても、今の管理者の力なら何とかなるはずでしょ？なら僕は、今ここでこいつを封じる事を優先する。」

「くっ…！だが、我々として自分の管理する世界がある。すぐに向かうことは不可能だぞ！？」

話が平行線…と言うよりは、管理人が全く折れるつもりがなさそうだ。

このまま放っておけば勝手に自分の命を絶ってしまいそうだ。

俺は…

顔を上げれば向こうでは、他の管理者達が必死に厄災を押しとどめている。

視線をずらせば展開について行けず、又はどうしたらよいか分からず動けない他のプレイヤー達。

そして、覚悟を決めた顔の管理人と、それを止めようとする管理者。さらに視線を下に落とせば、俺の腕のディスクに収まるカードたち。

俺は…、俺は……

目を閉じ天を仰ぐ。

そしてそのまま数秒。

脳裏に浮かぶのはここに連れてこられてからの日々…

……うん…、そう、だよな…。

心の中である決意を固める。そして

「なあ、ちよつといいか？」

「……………なに？」

俺の声色に、これから何を言うつもりなのかを感じ取ったのだろう。

困ったような表情で聞き返す管理人。

「俺…やるよ。封印…。」

「ダメだ。君がそこまで責任を負う必要は無い。」

予想通りすぐさま止められる。

だけ…:

「…とりあえず、聞いてくれないかな？俺だってやけになって言ってるわけじゃなくて、一応考えて決めた事だし。」

その言葉に渋々ながら聞く体制をとる。

「あのさ、俺、ここに来てから色んなことがあったけど…、正直、楽しかったんだ。そりゃ最初は大変だったけど、それでも自分が頑張れば頑張っただけ生活はよくなってる、努力が報われてるって感じがして…。それになんだかんだ言ってる、俺も元々ゲーマーだし、カードゲームだって好きだったしさ。だからこいつらが初めて実体化した時なんか本当に感動したし、ここまで一緒に戦って、共に過ごしてきた時間っていうのは俺にとって本当に大事な、最高の時間だった。」

ディスクに収まるデッキを撫でながら続ける。

「…元の世界ではさ、楽しい事なんてほとんどなかった。もうあんまり覚えてないけど、両親を事故で亡くして、唯一の家族の兄さんも今は遠くで一人暮らしして、会う事なんかめつたにないし。だから正直元の世界よりもこっちでの生活の方が楽しかった。…勿論元の世界の方が便利な部分もあるけど、でも俺の人生の中で何が一番だったかって

聞かれたら、『ここでの生活』って自信もって答えれる。それほどまでここでの体験は俺の中の大部分を占めてるんだ。」

管理人の顔をしっかりと見ながら俺は続ける。

「…実はこの管理人にもかなり感謝している。ま、口にも態度にも出すつもりはないけどさ。」

「元の世界に未練はほとんどない…。それに、もし永遠に封印って事になっても、…こいつらと一緒にいいかな…って、思ってたさ…。」

共にここまで戦ってきたカードたちを思い浮かべる。

「たとえ俺の代わりにあんたが犠牲になってもこの場を納めたとしても、その後のしわ寄せが俺の世界に来ないとも限らないわけだし。」

そこが一番の問題でもある。

この管理人を犠牲にして元の世界に帰れたとしても、その後すぐに厄災に似た別の奴の影響を受けるようなことでもあれば、何も意味が無いから。

「俺一人が犠牲になるだけで収まるのなら…、俺は人柱になっても良い。…ソラには謝らないといけないけどね…。」

ソラならきつとわかってくれるはず。

それとも、何故自分も連れて行かなかつたかと怒るかな？

俺の心を聞いて管理人は

「……うん。君の気持ちはわかった…。」

そう理解を示すも、

「…でも、これは譲れない。君が犠牲になる必要なんてこれっぽっちも無いんだから。」

頑なに自分の意見を曲げない。

そこに

「危ないっ!!!」

「「「っ?!?!?!」」」

どごお!!!

厄災を抑えている管理者から警告が飛ぶ。

その一拍後、厄災の攻撃がこちらへと飛んできた。

「くっ!今はここで揉めてる場合じゃない!どちらにせよ早く何とかしなければ!」

「だから僕が!」

「いや、俺がやります!」

「あー!!もうどちらでもいいから早くしてくr「どおーん」ひいひい!!!」

段々苛烈になる厄災の攻撃。

一向に決まらない話し合い。

厄災に対応している管理者達にも疲労の色が見え始める。

「……こうなったら仕方ない。」

「えっ……？」

管理人が咄くと同時に、急に体の自由が利かなくなる。

まるで全方向から体を押さえつけられているような感覚。

「結構力消費しちゃうからあんまり使いたくは無かったんだけどね……」

おそらく管理人が何らかの力を使ったのだろう。

「ま、まてっ!!」

かろうじて動く視線を横にずらせば、管理人に向かって手を伸ばす前回優勝の管理者の姿。

だがその動きが緩慢になっていることから、彼も俺と同じように動きを制限されているのだろう。

「……めんね……。でも、僕はもう二度と君たちを犠牲にはしたくない。だから……!」

そう言って、ゆっくりと厄災の方へ向かい歩を進め始める管理人。

(くっ……!だ、ダメだ……)

何とか止めようとするも、体が自分の物ではないかのように一切動かすことができない。

(くっそ！動け！動けて!!)

どれだけ力を込めても体は一向に動かず、喋る事さえできない。

流石に管理者の動きを完全に封じ込めはできないようだが、それでも緩慢になった動きでは管理人を止める事はできない。

このまま管理人がその命を散らすのを指をくわえてみているしかないのか…。

そう思ったとき、俺の左腕にはめられたデュエルディスクが一瞬光り

「…ちよつと待てよ。それじゃあ困るんだよ。」

俺のすぐ隣から、聞こえるはずのない声が聞こえた。

1 1 8 話

「……………え…?」

驚いた表情でこちらを振り替える管理人。

管理人を止めようとしていた2人の管理者も同じような顔でこちらを見ている。

聞こえてきたのはどこかで聞いたことのある声。

「悪いけど、ここは俺に譲ってもらおうよ。」

記憶を掘り起こし、どこで聞いたかを思い出す。

彼は俺の若干斜め後ろにいるようで、今の俺からはその姿を見ることができない。

だが

「……………誰だ、君は?」

「ん? 変な事聞くなよ。俺は…、俺だ。」

「そんなことを聞いてるんじゃない! 彼にそっくりな姿をしたお前は何者かと聞いているんだ!!」

彼にそっくりな姿?

彼って…俺?

するとその男はゆっくりと管理人の前まで移動する。

(!!お、俺……?)

その姿は完全に俺と同じ。

体つきや着ている服装、歩き方すら一緒。

違うのは、デュエルディスクをはめていないぐらいだろうか。

(……そうか、どこかで聞いたことのある声だと思ったら、ビデオなんかで録画した俺の声か。)

人は自分が思っている声と実際に発している声に若干の違いがある。

実際に周りに聞こえる声の方が、自分が思う声より高く聞こえるらしいけど……、っと、今はそんな事どうでもいいか。

「……俺は、俺だ。悪いけどあんたを犠牲にするわけにはいかない。この役目は俺に譲ってもらおうぞ。」

突然現れたもう一人の俺?に場が混乱する。

(なんなんだあいつ……。いきなり現れたのか、それとも何かきつかけがあつて現れたのか……。ん?そういうえばさつきディスクが一瞬光つてたような……)

未だに顔を動かすことも出来ないの、何とか視線だけをずらし腕にセットされたディスクを見る。

(え……う……、これは……)

そこにはいつの間にか1枚の真っ白なカードがセットされていた。

「おい、受け取れ!」「絶対に無くすなよ!」

49階で戦った干支デッキ使い、初代優勝者の言葉を思い出す。

そうだ、あの時からずっとエクストラデッキに入りっぱなしになっていたブランクカード……。

その白いカードは次第に色味を帯び、通常のカードと同じようにイラストと説明文が現れた。

ドッペルゲンガー 星? ?
???族/???

A? D?

人形であることは分かるが、その顔や体は全て黒く塗りつぶされているイラスト。さらにはすべての能力が?になっている。

これは一体……

「…む？そのカードは？」

不意に管理者から声がかかる。

どうやらディスクにカードがセットされていることに気が付いたようだ。

「おっと、悪いけど時間がないようだ。じゃ、こいつの事は俺に任せて、あんたらは後始末頼んだぜ。」

その瞬間、もう一人の俺は焦ったように早口で言葉を紡ぎ、そして

ピカッ!!

「うわああ！」

一瞬、目を開けていられない程の眩しい光が走り、気が付くともう一人の俺の腕にデュエルディスクが装着されていた。

そして、先程まで左腕にあつた重みを感じなくなる。

視線をやると、そこにデュエルディスクは無かった。

「っ?!」

困惑する俺に、何とも言えない表情でもう一人の俺は言う。

「…あんたに消えてもらう訳にはいかない。これは、俺たちカードの総意だ。」

そして俺に背を向け

「…ソラを…、頼んだぞ。」

そう言い残し、厄災へ向かって走り出した。

「さあ、デュエル開始だ!!行くぞ、みんな!!」

もう一人の俺がデッキからカードを引くたび、それらはその手を離れ、1体つつ実体化していく。

空には朱雀と青龍、そして黄龍が、陸には白虎と玄武、それから融合の騎士にキメラ。他にも俺のデッキのモンスターたちが次から次へと実体化し、厄災に向かっていく。

それらは先ほどまで厄災と戦っていた管理者達を遠くへと引き離し、炎、水、風、地、闇、光と夫々の攻撃を厄災に放つ。

「ぐぬううう!!き、貴様ああ!!」

管理者達の攻撃に余裕で対応していたのが嘘みたい、カードたちの攻撃は厄災に刺

さる。

朱雀の炎が、白虎の牙が、青龍のブレスが、玄武の放つ岩塊が、融合の騎士の剣が、キメラの爪が、奴の体力を徐々に徐々に削っていく。

「ぐぐツ…、ガアアアアアッアアア!!!」

厄災が苦し紛れに放った、もう一人の俺への攻撃も

「無駄なあがきを!!」

その体から光を放ち吹き飛ばす。

そして

「そろそろ終わりにしよう…。…野郎の添い寝じゃ不服かもしれないが、我慢してもらおうぜ。」

その光は光量を増しながら厄災を包み込み。

「い、いやだ!!我は…我はあつ!!!」

「心配しなくても付いて行ってやるから有り難く思えつての。」

そして彼はこちらを振り向き

「……………じゃあな!」

最後にニカツと笑顔を見せて、厄災へ飛びついた。

「う、うおおおおおおお……!!!」

光の中で1つになりながら、それは俺たちが立っている舞台の外、厄災が最初に現れた場所へと落ちて行った。

それを追いかけるように、厄災と戦っていた俺のカードたちも1体、また1体と飛び降りていく。

キメラ…、青龍…、白虎…、玄武…

最後に残った融合の騎士と朱雀が、俺に優しい瞳を向ける。

そして一つ頷くと、他のカードたちの後を追って飛び降りていった。

「……な…、何が…。」

誰かがそうつぶやいた瞬間、辺りは眩い光に包まれた。

東方に青龍

南方に朱雀

西方に白虎

北方に玄武

そして中央に黄龍

さらにそれらを守るかのように、

大剣を携えた騎士

獅子と羊2つの頭に蛇の尾を持つ獣

他にも魔法使いの風貌の者や武器を持った者もいる

それらは全て、石像となって何かを守っている

全ての中心には、人の形をした何か

まるでマネキンの様に顔の部品が損失しているそれが、大事そうに手に抱えている小さな黒い玉

全てを飲み込む常闇色であったその玉は、この石像たちが作り出す光の結界の中でその影を薄れさせる

気が付けば、体の自由が戻っていた俺は、ふらふらとこの舞台の端へと移動する。そして眼下に広がるこの光景を見て、体の力が抜けてしまう。

「おっと…。」

倒れそうになる俺を、近くにいた管理者が支えてくれる。

突然の出来事に皆が反応に困っている中

「……………これを経て、『第666回管理者序列決定代理者大会』を、終了する…。」

前回優勝の管理者の声が、静かに響いた。

119 話

気が付いた時には、俺は拠点の自分のベットにいた。

あの後、

管理者達が何やら話をして、とりあえず夫々の拠点に戻ることになったんだと思う。帰ってきてからソラとも話をしたんだと思うけど…、何を話したか思い出せない。

頭の中がぐちゃぐちゃで、心にもポツカリ穴が開いたみたいで、…今は何も考えられない。

とにかく体は休養を求めている、でも頭の中はぐるぐるで、とてもじゃないけど休まらない。

一瞬寝れたとしても、あの時の光景を夢に見て飛び起きる。

そんな日が続いた…。

その間、ソラは何も言わずに甲斐甲斐しく俺の世話をしてくれた。

食事を部屋まで運び食べさせてくれて、風呂も一緒に入り体を流してくれる。

流石にトイレまでは一人で行ったけど…。

何もしない、何も変わらない、そんな日々が続く…。

ある日の事、俺が自分のベットで横になっていると

コンコンコン…

「マスター、失礼します。」

少し緊張した表情でソラがやってきた。

「…う…どうしたの？」

何となく普段と違う様子に思わず問いかけると

「…マスターに、お客さんです。あの…、管理人が…。」

管理人…、その名前を聞くだけであの時の情景を思い出す。

「…分かった、行くよ。」

ゆっくりと起き上がり、家の玄関へと向かう。

その後ろには心配そうな表情でソラがついてきてくれる。

「やあ、久しぶり。体の調子は……、うん、まだ駄目そうだね。」

開口一番そんなことを宣ってくる。

「……そつちこそな。で、何のようだ？」

だが、やつれた顔をしているのはお互い様なので、こちらも軽く言い返し本題を要求する。

「まあね。えつと、今日はね、現状報告とこれからの事について話をしに来たんだ。」

現状報告……か。

結局あの時、何が起こったのか分かってない。

当事者なだけに、あんなった理由は知っておきたい。

「ちよつと長くなるけど……いいかな？これから話すことは全部君に関係する事だから……、理解できない事もあるかもしれないけど聞いておいてほしいんだ。」

管理人の言葉に、ソラがすつと家の方へ向かう。

「どうやらお茶の準備をしてくれるらしい。」

「……OK。じゃあ立ち話もなんだから中へ入ってくれ。」

長くなるならリビングの方が良いだろう。

「お？遂に君たちの愛の巣へ招待してもらえるんだね？いやー楽しみだったんだよ

ねえ、いつかこの家の中に入るの。」

いつもの調子で茶化してくる管理人の様子に、何だか少しホツとした。

結局、話は長時間にわたり、お茶だけでなくお昼まで一緒に食べることになった。だが俺にとって、久々にとても有意義な時間となったことは間違いなかった。

管理人の話の纏めると

・厄災は俺のカードたちの力で封印された。

・本来は俺の魂も一緒に封印されるはずだったが、そこはあのカード、『ドツペルゲンガー』が代わりとなり、封印は行われた。

・あの時、俺とドツペルゲンガーの魂は一瞬リンクしたらしい。その為、俺の魂を使用せずとも封印が行えたわけだが、その代わり俺自身の魂がかなり消耗したらしい。今現在俺が感じている虚無感や絶望感なんかは、この魂の消耗から来ている物との事。そ

こに加えて、共に戦ってきたカードたちを失ったショックも追加され、今の状態に至るという訳。

・あのドツペルゲンガーになったブランクカードは本来存在しない物らしい。確か49階で初代優勝者からもらった物だが、それすらもイレギュラーだったそう。

・例の管理者が自分のプレイヤーに干支デッキを使用させるために行った小細工のせいで、厄災の封印が緩み、それと同時に、共に封印されていた初代優勝者の魂も、その一部が封印から抜け出したとの事。俺が戦ったのはその抜け出た魂の1部。

・彼は全てを悟り、厄災を封印できるであろう力を持つプレイヤーに、自分の力を込めたブランクカードを託した。

・このブランクカードがどんな変化をするかは分からなかったが、おそらく初代優勝者の「自分以外に犠牲者は出したくない」という気持ちもあり、今回のようになったのではないかと思われる。

・最終的には封印は無事完了し、今回の様に管理者級の力を持ったものが何かしら弄らない限りは、ほぼ永遠に封印できるとの事。

あの場で起こった事、厄災についてはこんなところ。

次は、その後の話。

・結局あの戦いの優勝は俺になつたらしい。決勝戦で戦う予定だった相手が辞退したんだって。流星にあれだけのことを成し遂げた俺を差し置いて自分が優勝したい！っとは思えないって言つてたらしい。

・決勝に参加したプレイヤーを含め、ほとんどのプレイヤーはすでに元の世界に帰つたらしい。まだ残っているのは、元の世界に帰りたくないって駄々こねてる人たちだけだそう。どのみち最終的には強制的に元の世界へ帰らされるらしいけど。

・俺たちがこの世界から元の世界に帰る為には莫大なエネルギーが必要となるらしい。元の世界からこちらに来るときはそこまでのエネルギーを必要としないらしいけど。

・理由としては、こちらに来るときは到着先が管理人のおひぎ元なので、とにかく吸い寄せるだけで良いから楽との事。逆に帰る場合は、場所だけでなく時間にも干渉しなくてはいけない上に、記憶を消したり諸々必要エネルギーが多くなる。

・そのエネルギーをどこから調達してくるかという、プレイヤーとカードの絆からだそう。

・自分で言うのもなんだが、俺みたいにカードたちと固い絆で結ばれたプレイヤーは、莫大なエネルギーを生み出せるため、帰還時にその余剰エネルギーを使って、所謂『こ

褒美』が貰えるということになっている。

・ここに来たときにあった最初の説明での『追加の報酬』とは、そう言う事である。
・中にはダンジョン攻略を拒否して拠点に引きこもる人もいるのではないかと思われるが、基本的にはこういう状況で進んでダンジョン攻略を進めるような人間を集めた。例え引きこもっていたとしても、カードたちと同じ空間で生活はするので、少しづつエネルギーは貯まり、帰還分ぐらいいは何とかなるらしい。

・逆にカードたちにひどい扱いをしていたプレイヤーは、絆のエネルギーではなく負のエネルギーとなり、帰還後はカードゲームで望むカードが絶対に引けなくなったり、カードゲーム自体に興味が無くなったりするらしい。

・そして現状俺は、全てのカードを厄災の封印に使用され（デツキに入っておらず拠点で保管していた他のカードも全て。あの瞬間、他のカードたちも自身をエネルギーに変えてあの場所に飛んでいったらしく、見ていたプレイヤーが言うには、キラキラしていても綺麗だったとの事。）、また貯まっていた絆エネルギーもそちらに持って行かれた。つまり元の世界に帰る為のエネルギーが無いという事。

え？じゃあ一生このままここで生活？

と思ったが、管理者達の都合上、次の大会を開くには俺がここには駄目らしい。

しかし、各管理者達は今管理している世界の維持運営諸々で一杯らしく、俺をもとの世界に戻すためのエネルギーを捻出することは難しいらしい。

まあ世界の維持運営の手を抜けば、無理やり捻り出すことはできるかもしれないけど、そうなったときに他の場所への影響が出る可能性が大との事で、せつかく管理人を犠牲にせずに終わったことが無駄になってしまう。

それに、そうして捻りだしたエネルギーだけでは、俺を元の世界に返すのが精々で、追加の報酬が一切出せないことになるらしい。

流石に厄災の封印に多大な協力をした人間に対して何も報酬無しは管理人のプライドが許さない、との事で、この案は却下。

俺としても、その追加報酬でソラを元の世界と一緒に連れていきたいって考えがあった訳だし、それが無しっていうのはいただけない。

なので今は、俺にできる限りの追加報酬（勿論ソラの事を含む）を出しつつ、元の世界に戻す方法を探してくれてる最中らしい。

特にあのやらかした管理者が必死になって動いてるんだって。

何せ今回のやらかし大賞だから、償いの為にみんなにこき使われているらしい。

あんなのでも流石にいなくなれば大変だから、容易に処分とはいかないのがつらいと

ころだよなー。だつて。

とりあえず現状は理解した。

で、次は今後について。

ここからは管理人的に非常に言いづらそうにしてたけど、大体こんな感じ。

・さつき言つてた『俺にできる限りの追加報酬を出しつつ、元の世界に戻す方法』つていうのは、現在探し中と言いつつも、ある程度はその手段が限られるらしい。

・その方法の大半に絡んでくるのが、デュエルだそうな。

・管理者は先の理由により、俺が元の世界へ帰る為のエネルギー（長いから帰還エネルギーって呼ぶか）を捻出することは難しい。

・じゃあ誰がそのエネルギーを集めるのか？…俺しかない。

つまり、カードを失つてショックを受けている俺にもう一度別のグッズを使ってデュエルをしろと。

で、エネルギーを自分で貯めて元の世界へ帰れと。

但し追加報酬出したいから、通常以上に頑張つてエネルギー貯めろと。

「……………うわっ……」

…余りの内容の酷さに思わず声が出た。

体調がこんなじゃなかったら、「ふぎけんなー!」って怒鳴ってると思う。

だがそれに関しては管理人も理解しているようで、本当に申し訳なさそうな顔をしてた。

以下、その他の質問&それに対する答え。

Q 俺がこのままここで暮らすのは?

A 次の大会が開けないからダメ

Q 次の大会開く必要あるの?

A 昔に交わされた管理者たちの契約で決められてるから、覆すのはほぼ不可能

Q 大会開かなかつたらどうなるの?

A 各世界に歪みができる

Q そんなに大ごと? 管理者の優劣競うだけじゃないの?

A 大会を開くことで、管理者たちも力が溜まるシステムが組み込まれているので、長時間大会が開かれなかつたら管理者たちの力が徐々に衰えていく

Q 衰えたらどうなる…?

A 世界の管理が難しくなって、最悪厄災のようなやつが現れる

Q なんでそんなシステムにしたの？

A なんでだろうねー？

いちいち俺が、そんな規模の事に巻き込まれるのはなんでだろうねー？

そうだねー、なんでだろうねー。

……はあ……。

120話

とりあえず現状の把握はできた。

…納得したかは別として。

「ごめんね、色々頼りっぱなしで…。」

「…いいよ、もう。ここまで来たら何があっても同じだ。」

もう何とでもなれ。

「…にしても、君には本当に最初から最後まで驚かされっぱなしだね。」

管理人が話題を変えてくる。

露骨な話題転換ではあるが、もうどう足掻いても変わらないなら暗い話ばかりするのは精神衛生上よろしくない。

あえてその話に乗る。

「最初からって…どこからだよ?」

「ん?最初は最初だよ。」

って事は、ここに来てすぐのころからか?

…俺なんかしたっけ?

「と言つても僕も、確信したのは途中からだけどね。」

えーつと？何の事だ？

「その様子だと君は気付いてないだろうけど、実は最初から君はある人物によつて守られてたんだよ。」

ある人物…？

全く思い当たらない俺の表情を見て、管理人は薄く微笑みながら続ける。

「…少し昔話をしようか。今から何回か前の大会の時の話。あの時は今回みたいに厄災がくなんて事は無かったから、ごく普通に始まって、ごく普通に終わったんだ。」

昔を懐かしむように喋る管理人。

「その時のプレイヤーの1人にね、ちよつと変わったお願いをした人がいたんだ。彼は優勝はおろか、決勝大会に出場する事も出来なかつたけど、でもそれなりに攻略は進めて絆エネルギーも沢山持ってたんだ。だから、元の世界に帰る時に何か追加で願いがかなえられるよ、つて言つたら、…彼、何て言つたと思う？」

…なんだろう？

お金？特殊な力？それとも共に過ごしたメイドさん？

「ふふつ、その時彼はこういつたんだ。『もし今後、俺の弟がここに連れてこられるようなことがあつた時には、俺を弟の守護霊にしてくれ。』つてね。」

弟の、守護霊……？

「他にも彼が言つてたのは、自分の両親はすでに他界していて、家族は遠く離れて暮らす弟が一人だけだから、弟に何かあつた時には守つてやりたいんだ。つて。」

それつて……もしかして……

「ま、とは言え、中々難しい注文だつたからね。形としては、彼がここで過ぎた記憶を全て忘れる代わりに、その記憶をもとにした霊体を作り、彼の弟が現れた時に自動で憑りつくようにしたんだ。ただ、いくら頑張つたからと言つても彼の貯めていたエネルギーだけでは、弟くんや他の人、物に干渉できるような力は付与できなかったから、本当に後ろについて見守るだけの存在になつた訳だけだね。」

思わず後ろを向いて確かめる。

……俺の目には何も見えないけど、……そこにいるのか？……兄さん。

思わずそう呟いた瞬間、まるで頭の中にあつた霧が一気に晴れたような、そんな感覚を感じた。

……そうか……。何度か見た夢の中で出てきたあの人は……。

兄さんが見守つてくれてたんだね……。

「もうわかつたと思うから言つちやうけど、彼、君のお兄さんなんだよね？最後まで君の事心配してたよ。まあ、今君に憑いているのは、今言つた通り彼の記憶をもとに作られ

た霊体だから、君のお兄さんであつてお兄さんでは無い存在んだけど、君が大切だという思いは一緒なんだと思うよ。」

嬉しい気持ちと照れ臭い気持ち両方が心にこみあげてくる。

「ただ、それが原因……っていうか、僕にとつても予想外の事が発生してね。それが君の異様なまでのカードとの親和性。本来ならあんなに早くカードの成長が発現する事なんてないはずないんだけど……、君にお兄さんが憑いていることによつて、カードたちの……簡単に言えば好感度が最初から高く、上がりやすくもあつたみたい。」

そうなのか。確かに最初の頃は俺以外に成長が発現したプレイヤーがいなくて、掲示板でもガセ扱いされてたもんな。

「君のお兄さんも、カードの事はとても大切にしてたからね。当然と言えば当然なのかもね。でも君がここまでやつてくれたのは、そのお兄さんの力だけじゃなくて、勿論君自身の力の方が大きいからね。お兄さんはきつかけを与えただけに過ぎないから。」

そう言つてもらえるなら、ここまで頑張つてきたことも報われる。

「とはいえ、僕にも彼が見えてるわけじゃないからさ。ふとした瞬間に彼の事を思い出して、そう言えば君が彼に何となく似てるな……と思つてたら、色々と共通する部分が出て来てさ。これは間違いないと思つたよ。……あ、君の私生活はちよこちよこ覗かせてもらつてたから……。ねー。」

そう言いながら、ある方向に視線をやる管理人。

その視線の先には……、ソラ……？

……いや、その視線は困惑した表情のソラの向こう、家の扉に向かっている。
すると

…ギイイ…

「ひっ!!?」

と、扉が勝手に開いた!?!?

「ぶぶっ…ゴホン、ごめんね、彼女は僕の配下なんだ。彼女が見聞きしたことを僕に報告してもらってさ。あ、勿論見られたくない所は見るつもりなかったよ。例えば二人の初めての夜の事とk「ゴホンゴホン!!」…若いねえ。」

丁度同じタイミングで咳払いをして誤魔化した俺とソラを見て、ニヤニヤした表情を見せる管理人。

「ま、黙ってたのは謝るけどさ、こっちの立場上必要な事だっと思って許してね。」
ぱちこんっ☆とウインクを決める管理人。

とりあえず無言で叩こうとしたら避けられた。

「つと、危ないなあ。ま、お互い今さらでしょ。今後は彼女にも帰ってもらおうから、思う

存分二人でいちゃいちゃ「(ギロリ…)」…はいはい。」

要らんことは言うな。このあと気ままずくなるだろうが。

「じゃ、とりあえず話はこんなところかな？他に聞きたいことある？」

正直まだ頭の中で整理が出来ていない部分もある為、少しゆっくり考える時間が欲しい。

「…今のところは大丈夫、だ。」

「OK。まあ何かあればすぐに言ってくれたらいいから。あ、そうそう、もう一つ忘れてたけど、君にあげるものがあるんだった。」

くれるもの？

「君は気付いてないかもしれないけど、大会が終ってダンジョンには入れなくなってるんだ。だからここで君が生活する為にDPを上げる。今回のお詫びも兼ねてると思ってる。」

そうだったのか。確かにダンジョンに入れなければDPが稼げないし、DPが無ければ生活が難しくなってくる。

…ダンジョンに入れたとしても、カードが無いけどな…。

「二応君たちが不自由しない為に、かなり多めのDPを入れておくから自由に使って。じゃ、今日はこの辺で帰るね。お茶とお昼ごちそうさま。」

そういつて管理人は帰つて行つた。

管理人の話で、理解できたこと、できなかったこと、納得できたこととできなかったこと。色々あつたけど、一つ言えるのは、今朝まで感じていた体のしんどさが少しだけ軽くなつたような、そんな気がした。

121話

管理人が帰った後、自室にこもるのもなんか違うと思つて、そのままリビングで過ごしている。

体調が少しだけ良くなったことも理由の一つだろう。

ソラと二人ソファーに体を委ね、無音の時間が続く。

ふと、彼女の顔を覗くと、その表情はいつもの穏やかで柔らかな物とは異なり、少し緊張しているようにも見えた。

「…マスター、どうされました？」

俺の視線に気づき、そう聞いてくるソラ。

「…いや。」

「…そうですか…。」

その表情は俺を気遣うで、そんな顔をさせていることに罪悪感が生まれてくる。

…そうか、俺はずっと彼女にこんな表情をさせていたのか…。

あの日から何も聞かずに甲斐甲斐しく俺の世話をしてくれたソラ。言いたいことも、聞きたい事もあつただらうに…。

「……………ごめん…。ずっと、…そんな顔させてたんだな…。」

そんなことに気付かなかつた自分に腹が立つてくる。

「…申し訳ありません。マスターにそのようなお気遣いをさせてしまい…。」

違う、違うんだ。

ソラの顔を見つめ、乾く唇を何とか動かそうとするも、脳がどの言葉を発するのか決めきれずにその口を閉じる。

(だめだ…、頭がぐるぐるで、考えもまとまらなくて、何言ったらいいか分からない…。)

それでも、ソラの為に何か言わなければ。

そう思った俺の手は自然にソラの方へと向かい、

「あつ…。」

ソラを抱きしめた。

「……………マスター……………」

そのまましばらく静かな時間が流れる。

何か言わなければいけない。

でも何も言わなくても伝わるような、そんな感覚。

おもむろに口を開いたのはソラの方で

「マスター…、あの子たちを、褒めてやってください。そして、あの子たちの思いを…無駄にしないで下さい…。」

その言葉に、俺の気持ちがあることが分かった。そして、ソラの思いが俺の心へと流れ込んできた。

少し前にソラから聞いたことがある。ソラは、俺の他のカードたちにとって『お姉さん』みたいな存在なんだと。

そして、彼女もまた、他のカードたちを大切に思っていた事を俺は知っている。

そんな彼女が、自身も思うところがあるはずなのにそれをグツと押し込み、俺のために尽くしてくれる。

朱雀や融合の騎士の最後に見た顔…

ドツペルゲンガーの最後の言葉…

…ああ、俺って本当に仲間に恵まれたんだなあ…

それから、一分とも一時間とも分からぬ時間が過ぎ、俺はようやくその口を開いた。

「……………ありがとう…ソラ…。俺…がんばるよ…。」

何に対しての『ありがとう』で、何を『がんばる』のか。

それは詳しく言わずとも、きちんとソラに伝わったよう

「っ…はいっ!!」

目じりに涙を浮かべた彼女は、俺を強く強く抱きしめてくれた。

それから数日。

俺の体調は徐々に徐々に回復していった。

気持ちを前向きに切り替えることができたからなのか、はたまたあの管理人が何かしたのか、それは分からないけど、少なくとも日々の生活が楽になってきているのは確かだ。

だが、少し困った事？もあって…

あれからソラが俺の世話をすることにハマってしまつて…、あ、いや、元々家事とか色んなことをしてくれてたんだけど、俺が引きこもつてる間、食事を食べさせてくれたり、お風呂で体を洗ってくれたりしてたのを、そのまま続けたがつて…

流石に食事は何とか自分で食べると説得したけど、お風呂だけは「これだけは絶対に譲れません！」と、何言つても聞いてくれない。

この前までは俺も気持ちが悪く沈み、体調も良くなかつたから、その、そんな元気も無かつたわけだけど、少しずつ回復してきた今となつては…。

お風呂なので当然俺は裸。そしてソラも同様もしくはタオルが1枚だけ。

そうなったら、もう…ねえ？

我慢できずにその場で…って日もあれば、なんとかその場は我慢したけど夜寝る前に…とか、管理人の言葉を使うなら、イチャイチャ、イチャイチャして過ごした。

ただそれは、もう触れ合う事の出来なくなつたカードたちの分も、俺と触れ合つていたいと思つているようにも感じられた。

…まあ、今まで我慢していた反動で甘えられているだけかもしれないけど。

そして、そんな日が続き、体調もほぼ回復。気持ちの整理も大分できてきた頃、管理人から連絡が入った。

『前に話をした、君を元の世界に戻すための方法が見つかったよん。詳しくは午後こそつちに行つて話すからー』

珍しい。普段なら何も言わずに来ていたのに。

そう考えていると追加メッセージが届く。

PS

午前中は他の管理者達との会議があるから、それが終わってから行くねー。

…なるほど。

とりあえずソラに話をして、昼からいつ来ても良いように準備をしておく。

そしてお昼ご飯を食べ終え、二人でコーヒーを飲みながらまつたりとしていた時

コンコンコン「やつほー、来たよー。」

管理人がやってきた。

「や、久しぶり。…んんー、やつぱりこの家いいよねー。何か心地良い空間っていうの？」

軽くそんな話をしながら席につき、ソラが入れてくれたお茶を飲みながら本題に入る。

「さて、メッセージでも送ったけど、君が元の世界に戻る方法、つまりその為のエネルギーを集める方法が確定したから教えるねー。えーつと、まずは…」

管理人の話の話を聞き、これからについて思いを馳せる。

今から俺は再びデュエルの世界へ飛び込むことになるだろう。

その中でできつと、今まで使ってきたカードたちの事を思い出す事もあると思う。でも俺は、前へ進むことに決めた。

みんなが望んでくれた、皆が繋いでくれた俺の未来。

「…ソラを…、頼んだぞ。」

ドツペルゲンガーの最後の言葉。

その思いを裏切らない為に。

カードたちとの思い出は胸に、そしてその願いと共に、俺は未来への道を進む。

さあ、皆が守ってくれた輝く未来の為、もう一度デュエルを始めよう。

第1章 完

2章

再始動

とある世界のとある場所

そこに1人の男が現れた

彼はこの世界の在り方に疑問を持ち

そして革命を巻き起こした

彼は後にこう呼ばれる

伝説のデュエリストと

「お？またまたご新規さんかなあ？いらつしやいませー！ようこそデュエルワールドへ！！」

出迎えてくれたガイドさんっぽい格好の女性の元気な声に思わずたじろぐ。

「…おやあ？大丈夫ですかあ？」

俺の反応が薄い為か、心配そうに顔を覗き込んでくる。

「あ、はい、だいじょうぶ…です。」

近い、顔が近い！

「あはっ、ならよかったです。改めまして…、ようこそデュエルワールドへ！」

俺の返事に満足げに頷き、少し離れてから満面の笑みでそう言った。

「えっと、はい、あ、どうも…。」

現状把握が追いついていない為、微妙な返事をしてしまう。

しかし相手も慣れっこなのか、そのまま話を続ける。

「このデュエルワールドは、色んな世界からたくさんの方が来られています。皆さんの目的は、年に1回行われる『ワールドデュエルトーナメント』！そこで優勝する事で、なななんと！願い事を何でも叶えてもらえるんですう！！」

「……なんでも…？」

「ババーン！と効果音でも付きそうな大げさなポーズで自慢げに話す彼女。」

その中で気になったワードを聞き返す。

「はいっ！何でもですう！！今まで優勝された方の中には、大金持ちになった人もいますし、すごい力を身に着けた人もいます。あ、亡くなった方を生き返らせてもらった人もいましたねえ。」

死者蘇生まで…。まじか…。

しかし、それがもし本当ならば…。

「さ、では詳しい話は向こうでしますから、分からないことはそちらで聞いて下さいね！」

ここでの説明はおしまいっ！といった感じで、『総合受付』と、でかでかと書かれた看板が掛かったカウンターを指差しながら彼女は言った。

「…はい、ありがとうございます。」

「いいええ、では、良いデュエルライフを!!」

そして素敵な営業スマイルで見送ってくれた。

さて、いきなりの事で少し驚いたが、ここでいったん落ち着いて周りを観察してみる。

ここは大きな1つの部屋の中のように、俺の背後には巨大な門が鎮座している。

扉はついていないが、そこには青白い渦（ドラ○エの旅の扉みたいなやつ）がある。多分そこから俺は出てきたんだろう。

門の正面側には扉があり、そこから外へ出られるようだ。

左右にはそれぞれ長いカウンター。その奥では職員らしき人達が仕事をしている。とりあえず把握完了。

言われた通り、総合受付へ歩を進める。

「いらつしやいませ。本日はどのような用件でしょうか？」

美人で美声な受付のお姉さんが対応してくれる。

「えーつと、今ここに来たばかりで…。」

「そうでしたか。デュエルワールドへようこそいらつしやいました。お客様はこちらに來られるのが初めてという事ですので、先ずはこの世界の事について説明をさせて頂きますね。」

そういうと、カウンターの下から色々と資料を出し、机の上に並べた。

「どうぞ、お掛けになってください。では先ずこちらをご覧くださいませ。これは

……。」

おそらくマニュアルでもあるのだろう。詰まることなくスラスラと説明を進める受付のお姉さん。

その綺麗な声を聴きながら、俺は管理人との会話を思い出していた。

「さて、君が元の世界に戻る方法、つまりその為のエネルギーを集める方法についてなんだけど、簡単に言えば、ここからさらに異世界へと行ってもらうよ。」

「…異世界？」

「そう、こことは別の世界。詳しく言えばそうだね…、あのやらかした管理者って言えばわかるかな？彼の管理する世界の一つなんだけど、その一つに今回の条件に丁度合う世界が1つだけあってね。そこに行ってもらったことになったんだ。」

「

って事は、しばらくここには帰れないとか？」

「いやいや、そんなことはないから安心して。…んー、そうだね…。あれこれ口で説明するよりも、とりあえず実際に行ってみた方が早いかも。いつも使ってたダンジョンへの扉を、その世界につなげておいたから、試しに一回行つてきなよ。」

そうして管理人に促され、扉をくぐり辿り着いたのがこの場所。

うん、確かに管理人の言う通り。実際に此処に来て、この世界の人に説明してもらった方がよく分かった。

美声を披露してくれた受付のお姉さんの話をまとめるとこんな感じ。

・俺が出てきた門はどうやら色んな世界と繋がっており、時折ここから異世界人がやってくるらしい。

・さっきのガイドさんや、この受付のお姉さんは、そういう人たちにこの世界の説明をするのが仕事。

・この世界は『デュエルワールド』と呼ばれ、生活に深くデュエルが関わっており、町中のいたるところで熱いデュエルが繰り広げられている。との事。

・彼らの目標は、年に1度開かれる『ワールドデュエルトーナメント』と呼ばれる大会で優勝し、その景品として願いをかなえてもらう事。

・異世界から来た人間も、そのほとんどがそれを目指しここで戦って行く事になる。

・ガイドさんの話にもあったが、願ひ事は何でも、それこそ死者蘇生でも叶えられる。

・また、異世界から来た人間は、このゲートを通ることので元の世界に帰ることができららしく、基本的に朝やつてきて夜には帰って行く人が多いらしい。

・一応宿泊施設や娯楽施設、歓楽街なんかもあるから、ここで泊まっていく人もそれなりにいるみたいだけど。

・ちなみにこの世界に悪影響を与えそうなものなどの持ち込みは、ゲートの通過時に弾かれるらしい。例えば銃火器とか怪しい薬とか。

ここまでがこの世界のたまかな様子。

で、次にデュエルについて

・街中どこでも、お互いの合意さえあればデュエルは行える（デュエリストに限る）。

・決着後は、勝者・敗者どちらにもDP（デュエルポイント）が付与される。

・勿論勝者の方が多く貰えるし、敗者もポイントがもらえると云ってもそれは本当に

微々たるもの。

・このデュエルで手に入れたDPを使用して、街中のカードショップでカードを購入することが可能。

・デュエルのルールは「LP4000 初期手札5枚 デッキ枚数40〜60枚 先行ドロー有り」で、先攻後攻はデュエルディスクに表示される。アニメのルールに近いけど、ここは言ったもん勝ちじゃないのね。

次は『ワールドデュエルトーナメント』について

・この大会は、予選出場者を決めるチャレンジ期間と、予選トーナメント、決勝トーナメントの3段階に分かれる。

・チャレンジ期間には、町の各所にある『ジム』と呼ばれる場所を攻略する必要がある。

・各ジムにはジムリーダーがおり、彼らに勝つことで、勝利の証『ジムバッジ』が貰える。

・このジムバッジを定められた期間の間に、定められた個数以上集めることができた人だけが、次の予選トーナメントに進める。

- ・この期間や個数等はその年によって違うので、始まってみないと分からない。
- ・大体毎年、予選トーナメントは50人前後、決勝は4人又は8人になるらしい。

彼女の説明と管理人の言葉を合わせて考える。

つまり、この『ワールドデュエルトーナメント』なる大会での優勝賞品、『なんでも願いを叶えてくれる』権利を利用して、俺を元の世界に還すのが目的って事なんだろうな。

：もし叶う願いが一つだけなら、俺を元の世界に還すだけで追加の報酬は出そうにな
いんだけど：：どうなんだろ？

ま、その辺は管理人が考えてくれるか。

じゃあ、ここでの行動方針としては、

【デュエル↓ポイント貯める↓新しいカード購入↓デッキ強化↓デュエル↓…】
と繰り返し強くなっていき、各ジムに挑戦。ジムバッジを集めて予選トーナメント
に出場。そこで勝ち進み、決勝トーナメントで優勝するって流れだな。

ちなみに、ダンジョン攻略の時みたいに、カードの成長・レベルアップなんてものは
無いっぽい。

一応聞いてみたけど、カードの事はカードショップの人が詳しいのでそちらで聞いてほしいと。ただ、そう言った事例は聞いたこと無いとの事。
少しアンニュイな気分になるけど、気持ちを切り替える。
あいつらの為にも、前を向いて未来に進むと決めたから。

丁寧なお辞儀で見送ってくれる受付のお姉さんを背に、建物の出口であろう扉へ向かう。

さあ、新しい戦いデュエルの始まりだ!!

常識

扉を出て、先ず俺を出迎えてくれたのは眩しい太陽の光だった。

手を顔にかざしつつつ辺りを見渡すと、そこはビルが立ち並ぶオフィス街のような場所だった。

俺が今出てきた建物も、振り返ってみれば中々に大きなビルで、さらに非常によく目立つ巨大な看板が掛かっていた。

「異世界ゲートはこちら!!」

うん、確かにこれだけ同じようなビルが並んでたら迷いそうだもんね。

ご丁寧に、そのビルの前に立っている大きな看板には周辺の地図が載っていた。

「ふむ…、ここが大体中心地で、こつちが住宅街、で、こつちに店が並んでる感じか。」
頭の中に地図を叩きこむ。

こんなところで迷子になんてなりたくないしな。

さて、とりあえず周辺をウロウロしてみる。

といっても、先ずは最重要のカードショップを目的地としようと思うので、その道中

の探索ということになる。

大通りに出ると、俺の元いた世界の様に、舗装された道路にたくさんさんの車が走っている。

またよく見てみると、あちこちに少し開けた場所が何か所も有る。

どうやらあそこがデュエルスペースとなっているようだ。今現在もその場所でデュエルを行っている人が何組かいる。

その様子を横目に、大通りから脇道を抜けてカードショップへと向かう。

本当ならデュエルの様子を見学しておきたいんだけど、いかんせん今はカードがないからな…。

左手に嵌っているデュエルディスクを見ながら思う。

これはこの世界に来る前に管理人が新しくくれたものだ。前のはドツペルゲンガーが持つて行ったからね…。

なので今の俺は、見た目はディスクを嵌めたデュエリストだけど、実際はカードを持つていない為デュエルが出来ない状態である。この状態で他のデュエリストに絡まれるのも嫌だからね。

まあ、それを何とかする為に今こうやってカードショップへと向かっている訳だが。

ウロウロキョロキョロしながら道を歩き、カードショップへとやって来た。建物にかかっている看板を見ると

「デュエル総合管理センター」

うん、間違いないな。

受付のお姉さん曰く、ここは俺の世界で言う役所、ファンタジーで言うなら冒険者ギルドみたいなところらしく、この世界の色々な事務手続きはここで行うらしい。

で、カードショップもこの中に併設されているらしく、俺がデツキを持っていない事を告げると、ここで相談してほしいと言われた。

扉を開けて中に入ると、確かに雰囲気は役所に似ている。

しかし、そこに張られたポスターや幕には

「ワールドデュエルトーナメント開催まで あと〇〇日!!!」

「今月の人気カード！」

みたいなことが書かれており、何となく違和感というか、なんだか不思議な感じがした。

とりあえず入り口にあった館内マップでカードショップの位置を探し、そこへ向かう。

「カードショップ こちら↓」といった表記があちこちにあつたので迷うことなく到着。

「お？いらつしやい。：見ない顔だな、ご新規さんかい？」

店に入ると、40〜50台ぐらいの良い声をしたおじさんが声をかけてくる。

「あ、はい。今日この世界へ来たばかりで…。」

「そうかいそうかい、ならじつくりしつかりと見ていってくれ。おっと、俺はこの店長をしているもんだ。欲しいもんがあつたら俺に言ってくれよな。」

店長さんだったようだ。まあ、今のところ他に店員さんは見当たらないけど。

店長に促され、ガラスケースに入った商品を見て回る。

【ブースターパック 10枚入り 500DP】

【ランダム1枚パック 50DP】

【魔法パック 5枚入り 5000DP】

【ブースターパック⑩ 20パック入り 9500DP】

ケースの中にはカードのパックと思しきものがズラッと並んでいる。

「皆が良く買うのはこのブースターの10枚入りだな。魔法パックは5枚中3枚は確定で魔法カードが入ってるんだ。ランダム1枚パックは何が出るか分からないけど、たまに超レアカードが出ることもあるぜ。それから…。」

ほかに客がいなくて暇なのか、聞いてもいないのに色々と説明をしてくれる店長。そのイケボを聞きながら今度はシングルカードのコーナーを覗く。

【ブラッドタイガー 星4 A1700 D1400 5000DP】

【古の魔剣士 星4 A1800 D1200 8200DP】

【装備カード 伝説の剣 10000DP】

…ん？置いてあるのはレベル4の通常モンスターと装備魔法カードばかり…？

しかも結構高額だぞ、これ。

頭に？マークを浮かべた俺に、嬉しそうな声で話しかけてくる店長。

「お？いいだろそのカード。攻撃力が1800だぜ。すげえだろ？他の店じゃあ中々な

いぞお。」

自慢げに話す店長に俺の中の違和感が膨らむ。

レベル4のバナラと装備魔法しかないシングルカード

攻撃力1800を自慢するカードショップ店長

そして街中でチラツとだけ見えたデュエルの様子

…俺は意を決して店長に聞いてみた。

「あの…、他のカードは無いんですか？」

「あん？他のカードって…悪いがこれ以上攻撃力の高いカードなんて、シングルで出る事なんかまず無いぞ？」

勘違いしている店長に訂正を入れる。

「あ、いや、そうじゃなくて…。例えば効果モンスターとか、罨カードとか…。」

すると店長は「何言ってるんだこいつ？」みたいな顔で俺を見る。

「罨カードって…そんなもん置いてあっても売れる訳ねえだろ？」

罨カードが…売れない…？

その後お互いに噛み合わない話を続けることで、俺にとって驚愕の事実が判明した。

先ず第一に、この世界の人間、又他世界から来た人たちですら、カードのテキストが読めないらしい。それはモンスターだけに限らず、罨や魔法カードも全て。

カードに書かれている言葉がどの世界でも使われていない物だそうで、一部の研究者が日夜解析をがんばっているらしいが、未だに成果は出ていないらしい。

幸い、攻撃力・防御力の数値は読めるので、デュエルとして形にはなっているみたいだが……。この世界の人間はそれが当たり前なので、何の違和感も持っていないらしい。

なのでこの世界では、高攻撃力のモンスターで殴っていくという脳筋デツキが主流となっている。

だが、たった一人だけ、その世界の常識が通用しない人物がいる。

それが『デュエルキング』と呼ばれる人。

実は、ワールドデュエルトーナメントの決勝トーナメントで優勝しても、それで優勝賞品が貰えるわけではない。

優勝者はその後、このデュエルキングと戦い、勝った方が真の優勝者となる。

つまり、トーナメントの優勝者はそのデュエルキングとの対戦権を得る。というのが正しい表現である。

そして、ここ数年、挑戦者が優勝したという記録は残っていない。

なぜならば、このデュエルキングが強すぎるからである。

他のデュエリストが知り得ない筈のカードの効果をどんどん発動させ、相手を一方的に叩きのめす。

まるで彼だけがカードテキストを読んでいるかのようなカード捌きに、対戦者は絶望し、観客は熱狂する。

そして彼が使用したカードが、彼のデュエルを見て初めて効果を理解した一般デュエリストたちによってデュエル界に浸透していくのである。

「キングの使用したカードが店に並ぶことなんてまず無い。」とは店長の言葉。

確かに一般デュエリストからしたら、キングの使用カードは強いカードだもんな。

また、装備カードが人気なのは、テキスト内で唯一数字だけは読めるので効果を想像しやすく、又、実際にデュエルで使用してみることで効果を確かめやすいから、割とその効果が知られている物が多い為。との事。

さらには、大会中キングが放った一言。

「これ（装備カード）を装備した俺のモンスターには、貴様らの低レベルモンスターがいくら束になろうと勝てん！」

それにより、装備カードは爆発的な人気を誇ることになったんだって。

…これは思ったより重症かもしれないぞ、デュエルワールド…。

決意

気になることは多々あるが、その中でも特になのがデュエルキングの存在。

彼は一体何者なのか。

それは今ここでは分かるはずもないが、この世界でのキーパーソンになりそうな気がする。

そしてもう一つ。

誰もが読めないこのカードテキスト。

…なぜか俺には普通に読める事だ。

えつと？何で？どうして？俺なんかしたっけ？

別にテキストの文字が俺の元の世界で使用されていた文字だからというわけでは無い。

全然見たことのない記号みたいなのが並んでいるが、何故かその意味を理解することが出来る。

というか、見える？

見える、見える…見える…：…？ん？見える…？

『読める』でも、『理解できる』でもない。『見える』なのだ。

(もしかして…デュエリストアイの効果か…？)

ダンジョン攻略の際にレベルを上げ続けていたデュエリストアイ。

もしかしたらその効果なのかもしれない。

ただ、今ここで、カードのテキストが読める。と言ったところで変な人扱いされるか、最悪どこかの施設に連れていかれて、カードの効果を調べる機械として監禁されてしまう可能性もある。

…うん、この事は誰にも言わない様にしよう。

まあ、この世界はデュエルが根底にあるから、ある程度強くなれば手出しされなくなる…：…といいな。

色々と思うところ、考えることはあるけど、とりあえずは目の前の事から片付けていかねば。

先ずはデツキの確保が最優先。

そう気持ちを切り替え、店長にデツキが無い為どうすればいいか相談すると

「うーん…、何とかしてやりたいのはやまやまなんだが…。丁度今朝ゴミ出しに出しち

まったんだよなあ。」

聞けば、先の話であった通りこの世界ではレベル4高攻撃力モンスターが主流な為、レベル1や2等の低レベルモンスターはそれだけでゴミ扱いされる。

そう言ったカードは大体カードショップに売られるわけだが、逆にそんなカードを買いたいという人もまずおらず、大半は週に一回のゴミに出しているそう。

「そのカードならタダでやつても良かったんだが……。」

ま、まじかあ……。宝の山の可能性がが……。

「まあ……。後はあんまりお勧めはしないが、道端に捨ててあるカードを拾うつてのも手ではあるな。」

（彼らの言う）ゴミカードは、ショップに売らずその辺に捨てられることもよくあるらしい。

最近は道路美化の為取り締まりが厳しくなったらしいけど、それでも公園なんかに行けば結構落ちてみるみたいだ。

「……分かりました。色々と教えて頂いて有難うございました。」

「いいつて事よ。……ま、頑張りな。一応応援はするぜ。」

店長の励ましを背に店を出る。

「DP溜まったら買い物に来いよー！」

ちやつかり店の宣伝も忘れない店長の声をバックに、俺はとりあえず公園に向かうことにした。

ベンチに腰掛け空を見上げる。

…ああ、いい天気だ…。

とりあえず頭の中を整理する為1度現実逃避。

しかしカードテキストが読めない、か…。

それなら確かに低レベルカードがゴミ扱いされる訳だ。基本的に低レベルカードは攻・防の数値が低いもんな。

ダンジョンに挑戦したばかりの頃のカードたちを思い出す。

そして、俺が一人思い出にふけていると、不意に声を掛けられた。

「おいお前、見ない顔だがディスク嵌めてるって事はデュエリストだろ？俺とデュエル

しろよ。」

声のする方へ視線を向けると、そこには真つ金々な髪をしたいかにもチャラそうな男と、取り巻きつぽい小物臭のする男が2人。

「聞いて驚け！この方は攻撃力1800のカードを持つてるんだぞ!!」

「そうだそうだ！驚いたか!!」

取り巻きが自慢してくるが、別にそんなの驚きもしないし、羨ましくも無い。

「…悪いが他を当たってくれ。」

何にしてもデッキが無い為デュエルはできない。俺が断ると

「…何だと?」

「おい！この方に失礼だぞ!!」

「そうだそうだ！お前何様のつもりだ!!」

いや、そつちこそ何様のつもりだよ…。

「悪いが、この世界に来たばかりでカードを持ってないんだ。ほら。」

デュエルのデッキが収まるところが空っぽになっているのを見せる。

実際はこのデュエルと一緒に管理人から2枚のカードを受け取っているけど、別に2枚でも0枚でもデュエルが出来ないのは一緒である。

「…ツチ。カードも持ってないゴミか。」

「へっーゴミめ!!」

「二度と近づいてくんな!!」

そつちから声かけてきたんじゃん…。

3人はゴミだの屑だの散々言い散らかして去っていった。

「……………はあ…。」

思わず大きなため息が出る。

あんな奴が我が物顔で歩いているこの世界に少し憂鬱になってきた。

そのまま頭を下げた俺の視界に

「……………ん？これは…。」

頭を下げたことによりベンチの下に視線がいく。

そこに見つけたのは1枚のカード。

リバイブマウス 星2 地 獣族／効果

A700 D700

自分メインフェイズに発動できる。このカードを墓地から特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したこのカードは、フィールドから離れた場合に除外される。

…普通に強い。

こんな使えそうなカードまで捨てられるって事か…。

拾ったカードを眺めていると、何となくカードから悲しみの感情が伝わって来た。

そしてその瞬間、公園のあちこちから似たような気配を感じた。

「……そうか…、お前らも悲しいんだよな…。」

気配がする場所を巡り、カードを拾っていく。

その数10枚。

どれもこれも、俺からしたら非常に使いやすくて良いカードばかりだ。

「きつと辛かったよな…、悔しかったよな…。」

カードたちを眺めながら思う。

この世界は間違っている。

いくらカードの効果が分からなくても、ここまで低レベルモンスターをゴミ扱いする必要も無いはずだ。

そしてなにより、あのデュエルキングの存在。

彼ならばカードの効果を世に広める事が出来そうなものだが、その気が無いのだろうか？

その方が自分がいつまでもキングとして君臨できるから？

だとしたら、俺はキングを許せない。

こんな、カードがゴミとして捨てられる世界。

それを一個人の欲の為にわざと推奨しているというのなら。

…俺は、キングを潰す。

あくまで仮定だが、キングに対して言いようのないほどの怒りを感じる。

その俺の気持ち伝わったのか、手に持つカードたちからもやる気に満ちた思いを感じる。

この世界の常識、俺がぶち壊してやるよ…！

決闘

それから俺は街中を巡り、落ちていているカード、捨てられているカードを拾って回った。「…38、39、40。うんピッタリ40枚だな。…にしても、意外とセットになってるカードが多かったから、思ったよりは行けそうだな。」

カードの枚数を数え、ピッタリ40枚あることを確認してからデュエルディスクにセットする。

これでいつデュエルを申し込まれても大丈夫だ。

とりあえず大通りで相手を捕まえるか、それともまずは他のデュエルを見てみるか？ そう考えながら足を大通りに向ける。

するとその時

「い、いやだつて！やめてよ!!」

「あ？なんだ？俺に逆らうのか？てめえみたいな雑魚が!!」

何だかも揉めているっぽい声が聞こえてくる。

介入すべきか考えつつそちらを見ると、そこにいたのは見覚えのある3人組。

「こつちが勝ったんだから、お前のカードを貰うのは当然だろ!!」

「そうだそうだ！はやくよこせ!!」

「だ、だってそんな事聞いてない…。」

先程公園で合ったやつらだ。

「いいから早くデツキよこせよ。」

「あ、や、やめてえ!!」

相手は見た目12〜3才ぐらいの女の子。

いや、流石にそりゃ酷いだろ。

パツと見…もなにも、完全に弱い者いじめの凶である。

まあ、このデュエルが基本の世界、勝った方が偉いのもかもしれないけど、互いの了承無くカードを賭けることはできない筈。

流石に見過ごせないいで、女の子のデツキを奪おうと躍起になっている金髪の手を掴む。

「ああん?!なんだてめえ?…って、お前さっきのゴミやろうじゃん。何俺の邪魔しちゃってんの?」

至近距離で睨みつけてくる金髪。

「この女の子は嫌がっていた。カードを賭けるならデュエルの前に互いの了承が必要な筈だが、その辺の話はしていたのか?」

視線を女の子にやると、一瞬ビクツとした後、一生懸命首を左右に振る。

「はああ？俺が勝つたの！デュエルで！わかる？だから俺が何しようが勝手じゃん！お前ゴミの分際でしやしやり出てくんないよ!!」

「そうだそうだ!!」

「このゴミ野郎!!」

はあ…、全く持つて会話が成り立たない。

至近距離で喚く金髪の手を放すと、俺の手から逃れようとしていた勢いのまま、後ろへ2、3歩下がる。

「チツ！てめえ…!!」

苛立ち気にこちらを睨む金髪に俺は言った。

「…おい、デュエルしろよ。」

俺の言葉に一瞬固まる金髪。

「…は？お前何言っちゃてんの？頭大丈夫？さつきお前デツキが無いって言ってたじゃん。笑わせるなよ。」

「『そうだそうだー!!』」

そして半分呆れ、半分蔑んだような表情になる。

「…カードは拾った。」

デッキがセットされたディスクを見せる。

「拾った…？そんなゴミカードで俺と」「この勝負に俺が勝てば、お前のカードを貰う。」…
なんだと…！」

奴の言葉を遮りこちらの意見を押し付ける。

こんな奴ら相手に言葉のキャッチボールなんて必要ない。

「さあ、ディスクを構えろ。…それとも、こんな拾ったカードで作ったデッキに負けるのが怖いのか？」

「はあああああ!!?!何言っちゃってんのおまえ!!?!いいぜ!!?!その代わりに俺が勝ったらお前ボコボコな!!」

「いぞ兄貴い!!」

「こんな奴やっちゃまってください!!」

簡単に挑発に乗ってくれる。

さて、後は勝つだけだ。

「……あ、あの……。」

後ろから女の子の声がする。

この金髪に絡まれてた娘だ。

「…大丈夫、そこで見てな。」

出来るだけ安心させるよう優しい顔をしてそう言うと、金髪の方へ向き直る。

デュエルモード スタンプイ

ディスクから声が聞こえ、俺たちを中心に半円形のドームが出来上がる。

「お前みたいなのゴミ屑、一瞬でぶっ潰してやるよう！」

唾をまき散らしながら叫ぶ金髪と対峙し、意識をデッキに向ける。

さあ、お前たちの力、存分に見せてやろうぜ。

「デュエル!!」

先行は…金髪。

「俺のターン! ドロー!!」

勢いよくカードを引く。

「へへっ! 教えててやるよ、そんなゴミ屑で俺に勝てるわけないって事をなあ!!」

良いカードを引いたのか、上機嫌でモンスターを召喚する。

「俺は、エレキビーストを召喚！」

エレキビースト 星4 光 雷族 通常モンスター

A1700 D1100

「でたー！兄貴の雷モンスター！！」

「いいぞー兄貴ー！！」

通常モンスターが出ただけで盛り上がる外野。

それに気を良くしたのか、金髪はさらにカードを出す。

「まだまだ行くぜえ？俺は手札から『サンダーストーン』を『エレキビースト』に装備！」

サンダーストーン 装備魔法

雷族にのみ装備可能。このカードを装備したモンスターの攻撃力は500アップする。

「これで俺のエレキビーストの攻撃力は2200になる！！」

「出た！！兄貴のマジックコンボだ！！」

「すげえぜ兄貴!!」

…えつと?ただ単に装備カード一枚付けただけでこの騒ぎ??
これがコンボ??え?マジで言ってる???

「ふつ、これで俺はターンエンド。」

決まった!みたいなポーズでドヤ顔を見せる金髪。

…そうか、これは俺の頭を混乱させるための高等テクニクなんだな?そうなんだろ?
?そうと言ってくれえ!!

でないあのドヤ顔がいたたまれない…。

とまあ、冗談はこれくらいにして。

この1ターンだけでこいつの実力、ひいてはこの世界のデュエリストのレベルがなんとなく分かった。

…こりゃあ早急になんとかしないとな…。

「おいおい、怖気づいたのかあ?」

「びびってるよー!!」

「帰れ帰れー!!」

うっとおしいヤジが飛んでくる。

「早くカード引けよ!!」

「そうだそうだ!!」

「ま、どうせゴミカードだろうけどなあ!」

「ははははははっ!!」

はあ、近くにいるだけで嫌になってくるな。

じゃあ、そんなにみたいなら見せてやるよ。お前らが馬鹿にしたカードたちの力を。そして、俺の戦い方をな。

「俺のターン、ドロロー!」

カードを引く。

「俺はモンスターをセット。さらにカードを2枚伏せてターンエンドだ。」

「ぶっ!!おい見たかお前ら!結局あいつ壁モンスター出したただけだぞ!!あんだだけ偉そう
な事言っつてよお!マジ受けるわー!!」

「ぶわっはっはっは!!」

俺の伏せたカードを見て大笑いする3人。

まあ、そんな態度とれるのも今の内なんだが。

「ひいー腹痛てえ…。じゃあ俺のターン行くぜえ、ドロー!!」

引いたカードを確認し、すぐさま召喚する金髪。

「来た来た来たあ！俺は2体目のエレキビーストを召喚!!」

「すげえ！兄貴のエレキビーストが2体も！」

「最高だぜ兄貴!!」

…うーん、本来ならこちらの方が腹がよじれるほど笑う立場のはずなのだが…。

「さて、それじゃあゴミ掃除でも始めようか！1体目のエレキビーストで、その壁モンスターを破壊!!」

「いいぞ兄貴——!!」

「やっちまえー!!」

気分が良いところ悪いが、残念ながらこのモンスターは破壊されな

「俺の伏せモンスターは傀儡子！」

傀儡子 星2 闇 魔法使い族／効果

A600 D1200

このモンスターは1ターンに1度戦闘で破壊されない。

このカードが行う戦闘で与えられる自身へのダメージは0となる。

裏向きだったカードがひっくり返り、そこに黒いフードを被った人形術師が現れる。

「何だろうが関係ないぜ！エレキビースト、エレキアタック!!」

うわっ、伎名がダサイ。

雷獣の攻撃を食らい、場は砂埃に覆われる。

「へっ、ゴミ掃除完了、つてな。」

「すげえ兄貴!!」

「カッコいい!!!」

しかし、その砂埃が晴れた先には

「「!?!」」

悠然と佇む傀儡子の姿。

「な？なんだよ？お前何したんだよ!?!」

倒したと思ったモンスターが残っていた。

その光景に頭がついてきていない金髪の目には、僅かな怯えが見えた。

これが、お前がゴミと馬鹿にしたカードの力だ…!

輝く星

「傀儡子のモンスター効果だ。このモンスターは1ターンの1度戦闘で破壊されない。そしてこのカードが行う戦闘で与えられる自身へのダメージは0となる。」

未だに状況を理解できていない金髪に効果の説明をしてやる。

「な…そ、そんな、ゴミカードが…。」

低レベルには低レベルの戦い方があるんだよ。

予想だにしない出来事に金髪だけでなく取り巻きもおとなしくなっていたが、不意に金髪がその口を歪ませる。

「…いまお前、1ターンに1度って言ったな…？」

「ああ、そうだが？」

俺の言葉を聞き、表情に余裕が戻る。

「つて事は、もう1体のエレキビーストで攻撃すれば倒せるつて事だよなあ!!」

「そ、そうか!」

「すっげえぜ!!」

次の攻撃で倒せる。その事実一気に沸き立つ敵陣営。

…何だろう、この子供のお遊戯を見ている感覚。もしくは初めて自転車に乗れるようになった我が子の成長を思う親の心境？

そんな俺の考えを他所に、金髪は声高らかに宣言してくる。

「俺は、もう一匹のエレキビーストで、その雑魚モンスターを破壊！ いけえ、エレキアタックウ!!!」

奴の指示を受け攻撃を仕掛ける雷獣。

これで邪魔な雑魚を片づけることができる。そう顔に書いてある金髪君に、俺は現実を教えてやる。

「この瞬間、罨カードオープン。傀儡子の人形!」

傀儡子の人形 トランプ

「傀儡子」が攻撃対象となった時発動可能。その攻撃を無効にする。その後カードを一枚ドロウする。

「な!?!罨カードだとう!?!」

傀儡子に向かっていた雷獣は、その途中に突如現れた人形にぶつかり動きを止めると、そのまま金髪の元へと戻っていった。

「このカードは、俺の場の『傀儡子』が攻撃対象になった時に発動可能なカードだ。相手の攻撃を無効にする効果を持つ。さらにその後、俺はデッキよりカードを1枚ドロウ。」
引いたカードを手札に加える。

「くっ、雑魚の分際でえ…!!」

相当悔しいのか、怒りで顔が歪んでいる。

「……ターンエンドだっ!」

「俺のターン、ドロウ!」

カードを引く。

引いたカードは、管理人がデュエルディスクと共にくれた、2枚のカードの内の1枚。

(さあ、行くぜ!)

俺は、このデッキのキーカードとなるそいつの名を高々と宣言する。

「俺は、チューナーモンスター『シンクロマジシャン』を召喚!!」

シンクロマジシャン 星3 光 魔法使い族／チューナー／効果

AT000 D1000

このカードが召喚・特殊召喚された時、自分の手札からこのカードのレベル以下のモ

ンンスターを1体選択し、特殊召喚できる。

「なっ!? チューナーモンスター!!?」

「な、ななななっ?!?」

「ままま、まさかっ?!?」

奴らの顔色が青くなつていく。ここから何が起きるか想像できたらしい。

「シンクロマジシャンの効果発動。このカードが召喚された時、手札からシンクロマジシャンのレベル以下のモンスター、つまりレベル3以下のモンスターを特殊召喚できる。俺は『シンクロサポーター』を特殊召喚する。」

シンクロサポーター 星1 光 魔法使い族/効果

A3000 D3000

①：フィールドのこのカードをS素材とする場合、このカードはレベル2モンスターとして扱う事ができる。②：このカードがS素材として墓地へ送られた場合に発動する。自分はデッキから1枚ドローする。

これで準備は整った。

「シンクロサポーターは自身がシンクロ素材となる時、レベル2として扱う事が出来る。」

俺の言葉に、場のモンスターたちの体が輝き、少しづつ透けていく。

「俺は、レベル2の傀儡子と、レベル2のシンクロサポーターに、レベル3のシンクロマジシャンをチューニング！」

そしてそれらは光り輝く小さな星となり、上空に集まっていく。

「輝く星が集いし時、穢れ無き白き魔導の力となる。未来を照らす光となれ！」

その7つの星が1直線に並び、繋がった力の奔流の中から1人の魔導士が現れる。

「シンクロ召喚！現れる、ホワイトマジシャン!!」

ホワイトマジシャン 星7 光 魔法使い族／シンクロ／効果

A2400 D2000

「シンクロマジシャン」+チューナー以外の魔法使い族モンスター1枚以上

このカードの攻撃力は、このカードの召喚時にシンクロ素材となったカード1枚につき2000アップする

1ターンの1度、手札を1枚墓地に送ることにより、相手の発動した罫・魔法・モンスター効果を無効にし、破壊する。

「あ、そうだ。その扉をくぐる前に、君に渡すものがあるんだった。」

この世界に来る前の管理人の言葉だ。

「渡すもの?」

「そうそう、えつと…、はいこれ。」

渡されたのは、デュエルディスク。

確かに、あの時ドツペルゲンガーが俺のディスクを持って行ったから無かったんだよな。

装着することで、久々に左腕に重みを感じる。

「あとこれも、はい。」

出して来たのは2枚の白いカード。

「これは…、ブランクカード…?」

「うん。実はね、あれから色々その後処理をしてた時に、例の場所に落ちてたんだ。」

例の場所、っていうと…。

「そう、厄災が封印された場所。あそこに落ちてたんだ。おそらくはカードたちの最後の思いの結晶つてところじゃないのかな? でないとあんなどころに突然生まれるはずがないし。」

…そうか…、あいつら…。

「つてことで、はい。これは君が持つべきカードだから。」

思わず涙が出そうになるのを堪え、管理人からその2枚のカードを受け取る。

その瞬間

ピカッ!!!

「うわっ!?!」

突然カードが光り、そして

「……あつ……。」

光が収まった時、そのカードは真っ白なブランクカードではなくなっていた。

これは…

「そうか、それが君の新しい『力』なんだね。…ふふつ、本当に君はいつだって僕を驚かせてくれるよねえ。」

カードに描かれるのは2人の魔法使いの姿。

1枚は少し幼さを感じさせ、もう1枚はまるで…

「さ、これで準備はオツケーだね。向こうの世界までは僕の力は届かないけど、君なら何とかなるって信じてるから。」

「マスター、ご武運を…。」

管理人とソラ、2人の言葉に背を押され、俺は新たな世界へ飛び込むため、その扉を潜った。

それを一言で表すなら『白』。それ以外ない。

それほどまでに、全てが真っ白。

肌の色は勿論、髪の毛や瞳、身に着けている服までも、全てが白い。

だがその体から発するオーラは、彼女が相当な力を持っていることを雄弁に物語っている。

「な、何なんだよお前…。お前何なんだよ!!?」

この世界ではほぼ見ることのないシンクロモンスターに、おそらく頭は混乱しているのだろう。

「罨カードにモンスター効果…。それにシンクロ召喚って…。」

「それって…まるでデュエルキング…。」

取り巻きの2人もこの現状に只々固まるばかり。

そんな3人を休ませる事無く、俺はデュエルを進める。

「シンクロサポーターの効果。このカードがシンクロ素材となった時、俺は1枚ドロー。次にホワイトマジシャンの効果。このカードの攻撃力は、このカードの召喚時にシンクロ素材となったカード1枚につき200アップする。シンクロ素材となったのは『傀儡子』、『シンクロサポーター』、そして『シンクロマジシャン』の3体。つまり攻撃力は6

00ポイントアップし、3000となる！」

ホワイトマジシャン A2400↓3000

「こ、攻撃力さ、3000…。」

青くなつた顔を恐怖に歪めながら、少しづつ後ずさる金髪。
悪いが、こちらに容赦するつもりは微塵も無いぞ？

カード効果

「バトルフェイズ。ホワイトマジシャンで、サンダーストーンを装備したエレキビーストに攻撃！ ホワイトマジック!!」

ホワイトマジシャンが手に持つ白い杖をエレキビーストに向けると、そこからエネルギーが打ち出される。

ギャウウウウン…。

「ぐああああ!!」

相手LP4000↓3200

その余波で吹き飛ばされる金髪。

「あ、あにきい!!」

その様子に取り巻き2人は駆け寄ろうとするも、今展開されているフィールド内には戦っている人間以外入ることはできない。

「ターンエンドだ。」

吹き飛ばされてうつぶせのまま動かない金髪に、俺はターンエンドを宣言する。

「あにき…。」

しかし一向に動く気配のない金髪。

いくらこのデュエルをリアルに感じるシステムとはいえ、人体に直接ダメージが入るわけでは無い。闇のゲームじゃあるまいし。

であるならば、奴が立ち上がらない理由は、立ち上がる気力を失ったからに他ならぬだろう。

あれだけ散々見下して、馬鹿にしていた相手に此処までの反撃を食らう。それは彼にとつてありえない事で、到底理解できるものでは無かったのかもしれない。

「…そのまま動かないのなら『戦う意思無し』と判断して、お前の負けになるぞ。」

だがそれでも、俺は手を緩めるつもりはない。

何故なら、俺はこれから先、いくらでもこのレベルのデュエリストと戦って行く機会があるからだ。

そのたびに相手の心がへし折れたのを気遣っているようでは、この世界の常識を変える事なんて到底不可能だから。

だから、たとえそれで相手の心を粉々に砕こうとも、それを辞めるつもりはない。

それにもし、その敗北から這い上がってくる奴がいたとしたら…。

それはこの世界を変える大きな一歩と成り得る。

俺の言葉にピクツと反応し、よろよると立ち上がる金髪。

しかしその眼には闘志のかけらも宿っていない。ただ僅かに残っていた、負けたくないというプライドによって立ちあがっただけに過ぎない。

「…俺のターン…、ドロー…。」

力なくカードを引く金髪。

「あ、あにぎい〜…。」

その姿に涙を流す取り巻き。

…意外と信頼関係はあるみたい？なのか？

カードを引いた金髪は、ゆっくりとした動きでそれを手札に加える。

そしてしばらく手札を眺め……………？少しずつ顔色が戻ってる？

「くくつ…、くつくつく…。」

「あ、あに…き…？」

突然笑い出した金髪に取り巻きが不安そうな表情をする。

だがそんなものには目もくれず、金髪は一枚のカードを手取る。

「俺はカードを一枚セット。クッククック…、ターンエンドだ。」

この世の終わりのような表情をしていた金髪が、今度は急にニヤニヤ笑いだした。

その様子に、ついに頭がおかしくなったのかと心配し出す取り巻き。

(…普通に考えて、なんか良いカード引いたんだらうな。あの感じだと罠カードか?)

まあ、その考えはほぼ筒抜けなんだが。

「なら俺のターンだな。ドロー。」

カードを引いて相手の様子を見る。

相変わらずニヤニヤした顔でこちらを見る金髪。

このタイミングで何もしてこないって事は、攻撃に対するカウンターだろうか。

まあいい、何にしても結果は変わらないし。

「バトルフェイズ、ホワイトマジシャンでエレキビーストに攻撃。ホワイトマジック!!」

俺が攻撃を宣言した瞬間、奴はその口を大きく三日月形に歪め

「はっはっはー!!ばーかっ!罠カード発動だぜ!!」

俺の想像通り、罠カードを発動させて来る。

「あ、兄貴の罠カード!？」

「すげえ!すげえぜ兄貴い!!」

先程までのお通夜モードはどこへやら。一気に盛り上がる相手陣営。

「っへっ!聞いて驚け!!このカードの名前は『聖なるバリアミラーフォース』!あのデューエルキングが使う、超強力最強レアカードだぜえええ!!」

「やべえ！まじやつべえ!!」

「兄貴最強すぎるぜええ!!」

既に勝ちが確定したかのような大盛り上がりである。

「こいつはなあ！俺が全財産はたいて手に入れた自慢の超絶レアカードなんだよう!!これでお前の攻撃モンスターは全て破壊だ!!!」

奴の目の前に光り輝くバリアが現れる。!

「はーっはっはっはー!!残念だったなああ!!!」

…いや、残念なのはお前の方だよ。

「この瞬間、ホワイトマジシャンの効果発動。1ターンに1度、手札を1枚捨てることで相手の発動した魔法・罠・モンスター効果を無効にして破壊する。」

俺の宣言に、今まさに攻撃をしようとしていたホワイトマジシャンはその動きを止めて、手に持つ杖を掲げた。

「ホワイトアウト。」

そして杖に嵌められた無色透明の玉から白い霧が広がる。

「な、何だ!!?」

一瞬の出来事。

このデュエルエリア内が一瞬白で包まれる。

そしてその場に色味が戻った時、奴の発動した聖なるバリアはその姿を消していた。「…は？…え？…え？…？」

状況を理解できない金髪に、現実を突きつける。

「ホワイトマジシャンの効果で聖なるバリアミラーフォースは無効化した。改めて、エレキビーストに攻撃だ。」

ポカンとした表情の金髪を他所に、ホワイトマジシャンの攻撃は放たれる。

ギャウウウウン…。

相手LP3200↓1900

エレキビーストが破壊されたことでその余波が金髪を襲うが、彼の表情は変わらず、まるで自分のモンスターがやられたことにすら気付いていないようにも見える。

「さらに、俺はリバースカードオープン。速攻魔法『シンクロ解除』。」

シンクロ解除 速攻魔法カード

フィールドのSモンスター1体を対象として発動できる。そのSモンスターを持ち主のEXデッキに戻す。その後、EXデッキに戻したそのモンスターのS召喚に使用したS素材モンスター一組が自分の墓地に揃っていれば、その一組を自分フィールドに特殊召喚できる。

よくこんなカードが都合よく落ちていたと思うよ。

「これにより、場のホワイトマジシャンはE x デッキに戻り、シンクロ素材となった3体のモンスターを墓地から特殊召喚する。」

傀儡子 A 600

シンクロマジシャン A 1000

シンクロサポーター A 300

これで攻撃力はピッタリ1900。

「3体のモンスターでダイレクトアタック!!」

傀儡子の操る人形が、シンクロマジシャンの魔法が、シンクロサポーターの体当たりが、それぞれ金髪を襲い、

金髪LP1900↓0

ビーーーーー

デュエル終了が告げられる。

「あにきい!!」

何が起こったのか分からない。そんな表情の金髪。

そしてそんな彼に駆け寄る取り巻き2人。

「……………お、れが…、まけ…た…?」

「あにきつ!!」

膝から崩れ落ちる金髪を2人が支える。

…うーん…、どうしようか、これ…。

取り巻きの1人は必至で金髪に呼び掛けており、もう一人はものすごい顔でこちらを睨んでいる。

麗しきかな、舎弟との絆。

ただこの1場面だけ切り取ってみると、完全に俺の方が悪役に見えるんだけど。

…ま、いつか。

俺は悲劇のヒーロー、又は悪役にやられた主人公みたいな雰囲気を作り出している3

人へ近づく。

「！な、何だよお前!!」

「そうだそうだ！これ以上兄貴に近づくな!!」

金髪を庇うように行く手を阻む二人。

「お、お前ら…。」

別にもうその金髪君に何かしようとは思ってないっての。ただ…

「……ん。」

「…？な、何だよ？」

無言で手を出す。

「そいつのデッキ、貸して。最初に言ったよな？俺が勝ったらカード貰うって？あ、心配しなくても全部は取らんっての。可哀想だし一枚だけにしとくから。」

彼らの目には、俺の姿が鬼か悪魔の様にでも見えた事だろう。